2018

多摩大学 経営情報学部

Tama University
School of Management and Information Sciences

シラバス
Course Syllabi

2018シラバス
多摩大学 経営情報学部

現代の志塾

多摩大学は「今を生きる時代についての認識を深め、課題解決能力を高める」ため、教育理念を「現代の志塾」と定め、教育・研究・社会貢献の全分野の共通理念としています。「現代の志塾」とは「アジアユーラシアダイナミズム」の「現代」、社会の不条理の解決のために自らの職業や仕事を通じて貢献をする「志」、人間的な触れ合いによる少人数制ゼミを中心とした「手作り教育」の「塾」を意味しています。実社会の問題解決の最前線に立つ「志」人材の育成に尽力するため、個性と特色にあふれた「ゼミ力の多摩大」を形成しています。

学年暦

・補講は原則土曜日に実施します。

	日	月	火	水	木	金	土
4月	1	2	3	4	5	6	7
		オリエンテーションⅠ	オリエンテーションⅡ	オリエンテーションⅢ	入学式	① 履修登録期間開始	①
	8	9	10	11	12	13	14
		①	①	①	①	②	②
	15	16	17	18	19	20	21
		②	②	②	② 履修登録期間終了	③履修登録 確認期間開始	③
	22	23	24	25	26	27	28
		③	③	③	③履修登録 確認期間終了	多摩大 スポーツフェスティバル	④
	29	30					
	昭和の日	振替休日					

	日	月	火	水	木	金	土
5月			1	2	3	4	5
			特別研修日	特別研修日	憲法記念日	みどりの日	こどもの日
	6	7	8	9	10	11	12
		④	④	④	④	④履修登録 削除期間開始	⑤
	13	14	15	16	17	18	19
		⑤	⑤	⑤	⑤	⑤	⑥
	20	21	22	23	24	25	26
		⑥	⑥	⑥	⑥履修登録 削除期間終了	⑥	⑦
	27	28	29	30	31		
		⑦	⑦	⑦	⑦		

	日	月	火	水	木	金	土
6月						1	2
						⑦	⑧
	3	4	5	6	7	8	9
		⑧	⑧	⑧	⑧	⑧	⑨
	10	11	12	13	14	15	16
		⑨	⑨	⑨	⑨	⑨	⑩
	17	18	19	20	21	22	23
		⑩	⑩	⑩	⑩	⑩	⑪
	24	25	26	27	28	29	30
		⑪	⑪	⑪	⑪	⑪	⑫

	日	月	火	水	木	金	土
7月	1	2	3	4	5	6	7
		⑫	⑫	⑫	⑫	⑫	⑬
	8	9	10	11	12	13	14
		⑬	⑬	⑬	⑬	⑬	⑭
	15	16	17	18	19	20	21
		海の日 ⑭	⑭	⑭	⑭	⑭	⑮
	22	23	24	25	26	27	28
		⑮	⑮	⑮	⑮	⑮	定期試験日Ⅰ
	29	30	31				
		定期試験日Ⅱ	定期試験日Ⅲ				

	日	月	火	水	木	金	土
8月				1	2	3	4
	5	6	7	8	9	10	11
			追試験日	追試験予備日			山の日
	12	13	14	15	16	17	18
	19	20	21	22	23	24	25
			8月集中講義①	8月集中講義②	8月集中講義③	8月集中講義④	8月集中講義⑤
	26	27	28	29	30	31	

	日	月	火	水	木	金	土
9月							1
	2	3	4	5	6	7	8
	9	10	11	12	13	14	15
							卒業のつどい
	16	17	18	19	20	21	22
		敬老の日			① 履修登録期間開始	①	①
	23	24	25	26	27	28	29
	秋分の日	振替休日①	①	①	②	②	②

	日	月	火	水	木	金	土
10月	9月30日	1	2	3	4	5	6
		②	②	② 履修登録期間終了	③履修登録 確認期間開始	③	③
	7	8	9	10	11	12	13
		体育の日 ③	③	③履修登録 確認期間終了	④	④	④
	14	15	16	17	18	19	20
		④	④	④	⑤履修登録 削除期間開始	⑤	⑤
	21	22	23	24	25	26	27
		⑤	⑤	⑤	⑥	⑥	⑥
	28	29	30	31			
		⑥	⑥	⑥履修登録 削除期間終了			

	日	月	火	水	木	金	土
11月					1	2	3
					⑦	多摩祭事前準備	文化の日 多摩祭Ⅰ
	4	5	6	7	8	9	10
	多摩祭Ⅱ	多摩祭後片付け	⑦	⑦	⑧	⑦	プレテスト⑦
	11	12	13	14	15	16	17
		⑦	⑧	⑧	⑨	⑧	⑧
	18	19	20	21	22	23	24
		⑧	⑨	⑨	⑩	勤労感謝の日⑨	⑨
	25	26	27	28	29	30	
		⑨	⑩	⑩	⑪	⑩	

	日	月	火	水	木	金	土
12月							1
							⑩
	2	3	4	5	6	7	8
		⑩	⑪	⑪	⑫	⑪	A・L発表祭⑪
	9	10	11	12	13	14	15
		⑪	⑫	⑫	⑬	⑫	⑫
	16	17	18	19	20	21	22
		⑫	⑬	⑬	⑭	⑬	⑬
	23	24	25	26	27	28	29
	天皇誕生日	振替休日⑬					

	日	月	火	水	木	金	土
1月	12 月 30 日	12 月 31 日	1	2	3	4	5
			元日				
	6	7	8	9	10	11	12
		⑭	⑭	⑭	⑮	⑭	⑭
	13	14	15	16	17	18	19
		成人の日	⑮	⑮	⑮金曜授業	センター試験準備	センター試験
	20	21	22	23	24	25	26
	センター試験	⑮	定期試験日Ⅰ	定期試験日Ⅱ	定期試験日Ⅲ		⑮
	27	28	29	30	31		
					追試験日		

	日	月	火	水	木	金	土
2月						1	2
						追試験予備日	
	3	4	5	6	7	8	9	
	10	11	12	13	14	15	16
		建国記念の日 2月集中講義①	2月集中講義②	2月集中講義③	2月集中講義④	2月集中講義⑤	2月集中講義⑥
	17	18	19	20	21	22	23
		2月集中講義⑦	2月集中講義⑧	2月集中講義⑨			
	24	25	26	27	28		

	日	月	火	水	木	金	土
3月						1	2
	3	4	5	6	7	8	9
	10	11	12	13	14	15	16
	17	18	19	20	21	22	23
					春分の日 卒業のつどい		
	24 ・ 31	25	26	27	28	29	30

Contents

1. 基本理念 …… 1
2. 経営情報学部ディプロマポリシー …… 2
3. 経営情報学部カリキュラムポリシー …… 3
4. 学生生活 …… 4
5. 授業 …… 5
6. 履修登録・確認・削除 …… 7
7. 学期末試験 …… 10
8. 成績 …… 13
9. 学科選択 …… 16
10.進級・卒業要件 …… 17
11.教職課程 …… 23
12.オフィスアワー制度について …… 27
13.授業評価アンケート(VOICE)について …… 28
14.単位互換科目について …… 28
15.アセスメント …… 30
16.TOEIC 試験補助について …… 30
17.多摩大学学則(抜粋) …… 31
18.多摩大学学生懲戒規程 …… 38
19.多摩大学履修規程(抜粋) …… 40
20.多摩大学早期卒業規程(抜粋) …… 41
21.多摩大学経営情報学部早期卒業細則(抜粋) …… 42
22.多摩大学成績評価規程 …… 43
23.前提科目一覧 …… 44
24.カリキュラム表(科目一覧)・カリキュラムマップ …… 46
25.シラバス …… 53

1.基本理念

多摩大学の設立母体である学校法人田村学園建学の精神である「質実清楚・明朗進取・感謝奉仕」を礎とした本学の基本理念は「国際性・学際性・実際性」の3つのキーワードで表現されます。

＜国際性＞

グローバル社会の一員として、積極的な役割を果たす人材を育成する。

＜学際性＞

行き過ぎた専門化の弊害を是正するため、学際的な研究・教育への取組みを重視する。

＜実際性＞

大学に対する「象牙の塔」批判を克服すべく、「社会に通用する大学」を標榜する。

2.経営情報学部ディプロマポリシー

1　育成する人材

本学は「現代の志塾」を教育理念とし、グローバル化、情報化社会の進展に即応して、世界の中で大きな役割を担うことで日本の将来を背負うという自覚に基づいた強い実行力と、それぞれの地域社会の可能性に対しての広い視野を持ち、自らを厳しく律することができる高い倫理観を備えた「志」の高い「多摩グローカル人材(多摩のローカリティを究めることにより、グローバルに目を開く“グローカリティ”という思想を持つ、多摩地域の活性化をリードするグローバル人材)」を育成する。

経営情報学部では、「多摩グローカル人材」の具体像として、企業経営、情報科学に関する学術と応用を教育研究し、高度の経営情報知識と、これを支える豊かな教養とを合わせ備えた創造的、実践的な問題解決能力を有する人材を育成する。

2　学位授与方針

経営情報学部の教育課程においては、以下の学修成果目標を達成し「志」を実現できる力すなわち「学士力」を備え、学則に定める単位数などの卒業要件を満たした者に卒業を認定し、学位を授与する。

(学修成果目標)

(1)知識と理解【グローカル社会に対する理解】

基礎的な学力を養い、グローバルとローカルの関係性を意識しながら産業社会で発生する様々な問題に対処していける専門的能力を体系的に修得する。

(2)思考と判断【考え抜く力】

現状を分析して課題を明らかにできる課題発見力、課題解決に向けたプロセスを明らかにして準備できる計画力、課題に対して新たな価値や解決方法を生み出せる創造力を修得する。

(3)関心と意欲【社会の発展に貢献する力】

物事に積極的に取り組む主体性や目的に向かって周囲の人を動かしていける巻き込み力、失敗を恐れずに粘り強く行動していける実行力を身につけ、国際的ビジネスの場で活躍するとともに、わが国の産業社会の健全たる発展に貢献できるようになる。

(4)表現と技能【役割分担により組織目標の達成に貢献する力】

自分の意思をわかりやすく伝えることができる発信力や、聞き上手になって積極的に相手の意見を受け止められるようになる傾聴力、組織の中で自分がどのような役割を果たすべきなのかが理解できる状況把握力や協調性を身につけることで、コミュニケーション能力を高め、所属する組織や社会の活動に貢献できるようになる。

(5)高い志【環境対応能力と先進性】

社会における多様な価値観や文化的な背景に対する理解や配慮ができる多様性や、社会のルールや約束を守ることができる規律性を身につけ、社会の発展に積極的に関与していくという高い志を確立する。

3.経営情報学部カリキュラムポリシー

経営情報学部では、「志」の高い「多摩グローカル人材」を育成するため、ディプロマポリシーで掲げた５つの学修成果目標を以下の２つの柱で構成されたカリキュラムに反映させて、学生自身が各自の「志」を実現できる「学士力」を身につけ、人間的成長を促すための教育を体系化された教育課程で実現する。

講義の成績は、一般講義科目に関してはシラバスに記載された到達目標への達成度により絶対評価で評価する。ゼミなどの演習科目に関しては、ディプロマポリシーで掲げた５つの学修成果目標を評価の視点として、ゼミ活動によりどれだけ成長できたのかを総合的に判断し評価する。

(1)ゼミ中心教育カリキュラム

双方向型少人数教育をゼミの形で行い、産業社会や地域社会の中で直面する問題を採り上げ、それらを分析し解決策を提案・実施する活動を通じて、問題解決の実践力を養う実学教育プログラムを展開する。

まず入学直後の１年次には、「プレゼミ」を履修する。「プレゼミ」は、今後のキャリア形成を見据えて自らの「志」を確立することと、ゼミ活動を通じて主体的学びの態度を習得することで、自らが学修計画を立てる大学での学びへのソフトランディングを図ることを目的としている。

２年次から４年次までの３年間は、担当教員の指導の下、特定の専門分野を深掘りするための演習を行う「ホームゼミ」を履修し、問題解決能力に磨きをかけると共に、社会に対する関心を広げ、グループワークを通じてコミュニケーション能力を高める。

「プレゼミ」と「ホームゼミ」により、卒業まで連続した４年間ゼミを実施する。

(2)実践的知識獲得のための講義カリキュラム

問題の分析・解決策提案・実践に必要な考え方や知識を幅広く学ぶため、学際性、国際性、実際性を考慮した科目群を配置する。講義内容は、知識断片の記憶を排し、どのような手法や知識がどういう問題解決に役立つかを中心に教える実学教育プログラムを展開する。

経営情報学部のカリキュラムは、豊かな人格形成の基礎となる教養と産業社会に関する基礎的な理解を得ることを目的とする「産業社会科目群」と、特定の専門領域に関する問題を探求する「問題解決学科目群」によって構成している。

１年次の段階では、基礎的な知識の習得と自らの可能性と向き合って将来の方向性を発見し「志」を固めていくことを目標に「産業社会科目群」を中心に履修し、２年次以降に所属する学科とホームゼミの選択を通じて、集中的に学んでいく専門領域を確定させる。

２年次からは、「経営情報学科」と「事業構想学科」に分かれ、それぞれの学科の「問題解決学科目群」の科目を中心に、ホームゼミ担当教員の指導の下、体系的に専門教育を実施する。

また、「多摩グローカル人材」となるためには、実体験に基づく実社会に対する深い理解が重要なことから、一般講義科目のほか、インターンシップなどのキャリア教育科目、および課外活動や留学などの特別教育プログラムを幅広く実施する。特別教育プログラムでの学修成果については、国内のものは「アクティブ・ラーニング実践」で、海外のものは「Study Abroad」で単位の認定を行う。

4.学生生活

(1) 学生証

学生証は本学学生の身分を証明する重要なものです。請求のあったときにはいつでも提示できるよう、常に携帯してください。

《提示が必要なとき》

・授業で出席登録を行うとき
・通学定期を購入するとき
・多摩大学所定の学期末試験を受けるとき
・各種証明書の発行を受けるとき
・学割証の発行を受けるとき
・その他、本学教職員から請求があったとき

《学生証に関する注意》

・他人に貸与又は譲渡してはいけません。
・紛失や盗難にあった場合は、直ちに学生課に届け出て、再発行（有料）の申請をするとともに、必ず最寄りの警察に届け出てください。（再発行の手続は学生課にて行ってください。）
・破損,汚損した場合や記載事項に変更のある場合は、学生課に届け出てください。
・卒業、退学等により学籍を離れるときは、直ちに学生課に返却してください。

(2)事務局窓口受付時間

平日　　8:50～17:00
土曜日　8:50～12:30
（日曜日、祝祭日、その他大学所定の休日は休業）

(3) T-NEXT(多摩大学学生ポータル)

T-NEXTは多摩大学の学生と教職員だけが閲覧できる学内システムです。ウェブシラバス、履修登録／確認、学科選択、掲示板、講義サポート(講義資料掲示等)といった大学での重要な申請や通知を行います。T-NEXTへのログインの方法や個人のパスワード等については、入学時の説明会にて説明を実施しています。不明な場合はメディア・サービス(ALC)に問い合わせてください。

(4) 大学からの伝達・連絡事項の確認方法について

学生の皆さんに対する伝達･連絡等は、原則としてT-NEXTのみでお知らせします。掲示した事項については、周知されたものとして取扱います。大変重要な掲示をT-NEXTで行いますので**必ず毎日確認**してください。

(5) 伝言・照会

電話による伝言依頼、住所、電話番号の照会等は受け付けておりません。教員と連絡が取りたい場合は、T-NEXTで掲示する教員のメールアドレス宛に連絡してください。

(6) 学生手帳

学生手帳を配布します。常に携帯してください。

5.授　業

(1) セメスター制

1年を春学期と秋学期の2学期に分けて授業を行います。そして、本学では1学期毎に授業が完結するセメスター制を導入し、半期に集中して授業を行うことにより学習効果を高めています。
学期毎に15回の授業を実施します。週2回授業を行う科目もあります。授業は学年暦に従って行われ、祝日に授業を行うこともあります。

春学期　4月1日（日）から9月19日（水）まで
秋学期　9月20日（木）から翌年3月31日（日）まで

(2) 単位制

科目の履修には単位制が採用されています。単位制とは、科目毎に一定の基準により単位数が決められ、その科目を履修し、試験等に合格して単位を修得する制度です。その修得した単位数が卒業の要件として定められた基準を満たした場合に、卒業が認められます。

(3) 授業時間

授業時間は1時限90分で行います。

時　限	授業時間
1時限	9時00分　～　10時30分
2時限	10時40分　～　12時10分
昼休み	12時10分　～　13時00分
3時限	13時00分　～　14時30分
4時限	14時40分　～　16時10分
5時限	16時20分　～　17時50分
6時限	18時00分　～　19時30分

(4) 休講

①教員の届出による休講
担当教員が病気や学会出張等止むを得ない理由により出講できない場合には、補講・代講等の講義又は課題等への振替を行います。
②交通機関の運休による休講
交通機関の事故・ストライキ、台風・地震等自然災害による交通機関の運休が発生した場合、休講の措置を取ります。この場合は、T-NEXT又は本学ホームページにてその旨を掲示します。
③台風および大雪にともなう休講
台風や大雪等により警報が発せられた場合、休講措置をとります。この場合は、T-NEXT又は本学ホームページにてその旨を掲示します。

(5) 補講

補講は休講等に対する措置として、平常授業を補うために行うものです。補講日は原則土曜日に設定されていますので、土曜日に授業を行うことがあります。補講が行われる科目や日時についてはT-NEXTの掲示にて連絡します。

(6) 欠席届の手続き

履修科目の単位修得には授業への出席が重視されます。科目によっては欠席が多いと単位の修得ができなくなります。止むを得ない理由で欠席をする(した)場合は、担当教員に欠席届(書式は自由)を提出してください。但し、欠席届を考慮するかしないかは、担当教員の判断に任されています。

6.履修登録・確認・削除

(1)履修登録とは

履修登録とは、授業を受けて単位を修得するために、毎学期の始めに、各自の履修計画に基づき、シラバス、カリキュラム表やその学期の時間割表等から履修科目を決定して、履修科目の登録をする手続きのことです。履修登録を怠ったり、登録漏れや間違いがあったりした場合は、たとえ授業に出席し試験を受けたとしても単位は修得できません。従って、この手続きは、最も重要な手続きであることを認識してください。また履修系統図をホームページに記載しており、卒業までに身につけることができる知識・能力が、どのように授業に対応しているのかを図に示してあります。履修科目を選択する際の参考にしてください。

(2)登録・確認方法

T-NEXT上から科目を登録・確認する方法により行います。なお、システムの利用にあたっては、多摩大学共通アカウント及び共通パスワードが必要です。

(3)履修登録・確認上の注意

・履修登録及び確認は、配布パソコン、パソコン教室のパソコン、自宅のパソコン及びスマートフォン等から行ってください。

・履修登録・確認期間中(特に最終日)は学内のパソコン及び学内ネットワークの利用が混雑したり、パソコンの動作が遅くなったりすることが予想されます。登録にあたってはあらかじめ科目を決定した上で、十分に時間的な余裕を持って行ってください。

・履修登録・確認に当たっての詳細な注意事項は別途指示します。

(4)履修登録・確認・削除の流れ

履修計画を立てる

前学期の成績結果、カリキュラム表、シラバス、時間割等から、履修する科目を決定してください。

授業開始
履修登録期間

授業開始

春学期：4月6日（金）
秋学期：9月20日（木）

履修登録期間

春学期：4月6日（金）から4月19日（木）
秋学期：9月20日（木）から10月3日（水）

・クラス分けされている科目があるので注意してください。
・履修について、卒業要件や進級要件で不明なことや確認したいことがある場合、提供されている資料を確認した後、教務課窓口まで相談に来てください。
・登録は、T-NEXT上から行います。システム利用にあたっては、多摩大学共通アカウント及び共通パスワードが必要です。 不明な場合は、メディア・サービス（ALC）で再発行手続をしてください。
・ネットワークの混雑を考え、登録は余裕を持って行ってください。

履修登録確認期間

履修登録確認期間

春学期：4月20日（金）から4月26日（木）
秋学期：10月4日（木）から10月10日（水）

履修登録削除期間

履修登録削除期間

春学期：5月11日（金）から5月24日（木）
秋学期：10月18日（木）から10月31日（水）

(5)履修登録に関するルールについて

・履修登録確認期間中での科目追加、削除は、それぞれ8科目を上限とします。

・履修登録確認期間後の科目追加、削除は、それぞれ4科目を上限とします。ただし、履修登録確認期間最終日を含め、14日以内とします。その最終日が休業日の場合であっても手続き可能な日程は延長しません。

・履修登録確認期間中と履修登録確認期間後14日以内に履修登録科目の追加や削除を希望する学生は、教務課で所定の申請用紙にて変更及び登録申請を行います。本申請は当該学期中1度のみとします。

・履修登録削除期間中に、単位修得が困難だと判断した科目等の削除申請を教務課で所定の申請用紙にて受け付けます。

○履修登録確認期間から履修登録削除期間における追加、削除可能科目数

	履修登録確認期間中	履修登録確認期間後 14日以内	履修登録削除期間中
追加	8科目まで	4科目まで	不可
削除	8科目まで	4科目まで	上限なし ※但し、登録した全科目を削除することは不可

(6)履修制限

1　講義の履修登録者数の制限について

履修制限の方法は、初回の講義に参加した者の中から、教室の規模に見合った受講者数等になるように選抜を行い、履修登録を認める履修許可者を決定します。

履修許可者において、履修を希望しない者は、履修登録期間中はT-NEXTにて、履修登録確認期間以降は、教務課で申請用紙にて、削除の申請をしてください。

2　履修許可者の選抜方法

履修許可者は、各科目の初回の講義に出席した者の中から選抜します。初回の講義に出席しなかった者には履修許可は与えません。

ただし、初回講義の出席に関して正当な理由(病気や事故、交通機関の障害など)があって参加できなかった者で、履修登録期間中に担当教員にその旨を申し出、その理由が証明できる場合に限り、追加で履修許可の選抜を受けることができることとします。

7.学期末試験

(1) 学期末試験の種類

①定期試験

各学期末の試験期間中に実施する試験であり、春学期定期試験と秋学期定期試験の年2回実施します。

○試験期間

春学期定期試験：7月28日（土）から7月31日（火）
秋学期定期試験：1月22日（火）から1月24日（木）

○試験時間

試験時間は1時限60分間です。

時　　限	試験時間	遅刻限度時間	途中退席可能時間
1　限	9:20～10:20	9:40	10:00
2　限	10:50～11:50	11:10	11:30
昼休み	11:50～12:30		
3　限	12:30～13:30	12:50	13:10
4　限	14:00～15:00	14:20	14:40
5　限	15:30～16:30	15:50	16:10
6　限	17:00～18:00	17:20	17:40

※平常講義の時間割と時間帯・教室・曜日が異なりますので発表された時間割に注意してください。
※試験開始後、20分以上遅刻した場合、受験を認めません。
※試験開始から40分経過以降、途中退席を認めます。

◎受験には学生証を必要としますが、試験当日持参しなかった場合、教務課にて仮学生証の交付を行います。その際には、手数料として、100円を徴収します。
・仮学生証の有効期限は当該試験期間内に限ります。
・一旦納入された手数料は、如何なる理由があっても返金しません。

②授業内試験

◎各担当教員の判断により、講義時間中等に必要に応じて随時実施する試験をいいます。

◎仮学生証の発行は行いません。試験当日に学生証を持参しなかった場合には、各担当教員によって取扱いが異なります。

③定期試験の追試験

定期試験中に病気又は止むを得ない理由により、試験を受験できなかった者には、審査の上で追試験を許可することがあります。

○手続き期間

教務課窓口への事前届出を原則としますが、事後となった場合は、当該科目の試験当日を含む3日以内とします。なお、3日目が休日の場合は、その翌業務日までとします。（期間の過ぎた申請は、一 切受け付けません。）

○手続きの際に必要な書類

1. 追試験受験願（教務課に備付）
2. 理由を証明する添付書類
   病気・ケガ・・・・・医師の診断書
   交通機関の遅延等・・遅延証明書等
   忌引・・・・・・・・会葬礼状等
   その他・・・・・・・理由を詳細に記載した書類等

○追試験受験料（1科目につき1,000円。但し、1親等以内の忌引の場合は免除します。）

○試験日

春学期試験の追試験・・・・8月上旬頃
秋学期試験の追試験・・・・2月上旬頃

④再試験

卒業年次の学生は、その年度の春学期又は秋学期に履修登録して不合格になっている場合に限り、多摩大学履修規程第5条に基づき、再試験を受験できる可能性があります。
再試験を実施する科目は制限がありますので十分注意してください。

○ 多摩大学経営情報学部再試験実施要領

この要領は、多摩大学履修規程第5条に基づき、再試験の実施に関する事項を定める。

① 再試験を実施する科目は、卒業年次に履修登録を実施している演習科目以外の科目を原則とする。
② 再試験は次の要件をすべて満たした者に受験を許可する。
- 再試験対象の科目が不合格となり卒業に必要な単位が不足してしまった場合
- 再試験対象の科目において、指定された課題を提出、又定められた試験を受験している場合
- 不足単位が3科目以内の場合
- 再試験を受験し合格（単位修得）することにより不足単位が満たされ「卒業」が可能となる場合
- 授業科目担当者が再試験受験を許可した場合

③ 再試験を受験できる科目数は、不足単位の科目数とする。
④ 再試験の受験が許可された者は、指定の期間内（発表日を含め3日以内、なお、3日目が休日の場合は、その翌業務日まで）に再試験料を納入し、受験手続を完了しなければならない。
⑤ 再試験の合格評価は、履修規程第9条に定める合格最低評価をもって行う。

※詳細に関しては、別途T-NEXTの掲示等にて告知します。

○手続きの際に必要な書類

再試験受験申請書（教務課に備付）

○再試験受験料（1科目につき3,000円。但し、1親等以内の忌引の場合は免除します。）

○試験日

学年暦に従って行います。

(2) 試験実施上の注意事項

受験できる科目は、「履修登録」をして許可を受けた科目に限ります。受験に際して次のことに留意してください。

1　試験会場は講義が行われる講義室とは異なるので注意すること。
2　講義が行われる曜日・時限とは異なるので注意すること。
3　科目によっては講義室を2教室以上使用して試験を行うので、指示された講義室を間違えないように注意すること。
4　受験の際は、学生証を必ず持参し、試験中は机上の右上に置くこと。
5　学生証を持参しない場合は受験することはできない。但し仮学生証の交付を受けた場合は 受験を認める。
6　答案には学部、学科、学籍番号、氏名を明瞭に記入すること。記入してない答案は無効となる。
7　受験中、机上におくことのできる物品は、学生証のほかには次のとおり。
　(1) 筆記用具(ボールペン、万年筆、鉛筆、鉛筆削り、消しゴム)
　(2) 時計(ただし計算機、辞書機能付きは除く)
　(3) 目薬・ティッシュペーパー
　(4) 当該科目の持込許可条件で許可されたもの
8　試験会場には、携帯電話を持ち込まないこと。もし持参している場合は電源を必ず切りカバンの中にしまうこと。
9　荷物は床もしくは隣のイスの上に置くこと(机の中には入れないこと)。本やノート等は必ずカバンの中にしまうこと。
10　遅刻は試験開始後20分までであれば、認める。この際、遅刻した学生の席は各教室毎に指定されているので監督者の指示に従うこと。
11　その他、監督者の指示に従うこと。
12　試験時間中に不正行為をした者は、事実を確認の上多摩大学学則、多摩大学履修規程第8条及び多摩大学学生懲戒規程により処罰される。

不正行為とは

① 替え玉受験すること(依頼すること、引き受けること)。
② 答案や他人が所持する持込可能指定物を交換すること(双方)。
③ カンニングペーパー(器具)を使用すること
　(机上・机の中・衣服の中にあって、たとえ使用していなくても不正行為とする)。
④ 机、その他(壁、床、手など)に記入し、これを利用しようとすること。
⑤ 他人の答案や他人が所持する持込可能指定物を見て写すこと及び故意に他人に見せること。
⑥ 試験中に携帯で話すこと。試験時間中に電話が鳴動した場合、理由にかかわらず、不正行為とみなす。
⑦ 「解答はじめ。」の指示の前に問題冊子を開き解答を始めること。
⑧ 「解答やめ。鉛筆を置いてください。」の指示に従わず、鉛筆を持ち解答を続けること。
⑨ その他上記①～⑧に類似する行為。
⑩ 監督者の指示に理由なく従わないこと。

8.成　績

(1)成績評価

成績評価は、学期末試験(定期試験・授業内試験)、レポート及び出席状況等を総合的に考慮して絶対評価で判定します。

	一般講義科目		演習科目	
	成績通知書	成績証明書	成績通知書	成績証明書
合　格	A＋	A＋	P	P
	A	A		
	B	B		
	C	C		
不合格	F	表示しない	F	表示しない
認　定※	N	N	N	N

※認定科目の単位認定、又編入学における単位認定等の場合のみ付与します。

認定科目	
単位互換科目	キャリア・デザインⅡ～Ⅳ
インターンシップⅠ・Ⅱ	Study Abroad Ⅰ～Ⅷ
ＡＰ数学	アクティブ・ラーニング実践Ⅰ～Ⅷ

(2)成績発表

成績は、「成績通知書」を保証人宛に発送します。学生にはT-NEXTで発表します。

春学期「成績通知書」発送予定･･･9月中旬頃

秋学期「成績通知書」発送予定･･･3月中旬頃

(3)成績評価に関する問合せ

当該学期の成績評価について確認をしたい場合は、次学期授業開始日より14日間以内の窓口受付時間に、教務課に申し出てください。

（4）評定平均（GPA）

成績評価方法の一種として授業科目毎の成績評価を5段階（A+又はP、A、B、C、F）で評価し、それぞれに対して4.0、3.0、2.0、1.0、0のグレードポイントを付与し、この単位当たり平均（GPA、グレード・ポイント・アベレージ）を出します。認定（N）はGPA計算に算入しません。
GPAは成績優秀者奨学金や、早期卒業、退学勧告、学科選択の学生選考、教職課程の履修許可など幅広く活用されます。

GPA除外科目	
単位互換科目	キャリア・デザインⅡ～Ⅳ
インターンシップⅠ・Ⅱ	Study Abroad Ⅰ～Ⅷ
ＡＰ数学	アクティブ・ラーニング実践Ⅰ～Ⅷ
教職に関する科目	

（5）褒賞制度

本学では学業や社会活動において優れた業績を挙げた学生を褒賞する制度を設けています。

褒賞名	褒賞内容
最優秀学生賞 （Best Academic Achievement Award）	大学在学中4年間を通じて総合的に最も優秀な成績を収めた卒業予定者5名及び本学学生として模範的行為のあった者若干名
成績優秀学生賞 （Academic Achievement Award of the semester）	成績優秀者奨学金受給学生に該当する者
優秀学生賞 （Academic Achievement Award）	各講義科目において顕著に優れた成績を収めた学生（各科目1名） 教育補助（SA）として著しい功績があった者 成績向上が顕著な者（GPAの向上等を基準） 学業に対する取組みが真摯で他の模範となる者
社会・研究活動賞 （Outstanding Achievement Award in Research and Social Activities）	コンテスト等において優秀な成果を収めた者又は団体 課外活動で全国大会に出場する等顕著な成績をおさめた者又は団体 在籍期間を通じて学生会等の活動にて特に貢献のあった者 優れた研究成果又は論文を発表した者又は団体
学長賞及び学部長賞 （President’s Award、Dean’s Award）	本学学生として模範的行為のあった者又は団体

（6）成績優秀者奨学金制度

学費減免を目的として各学期の評定平均（GPA）上位者20名に対して奨学金を付与します。
・区分１･･･各学期分の授業料
・区分２･･･5万円

(1)評定平均算出方法

$$\frac{4.0\times(\text{「A+」と「P」の修得単位数})+3.0\times(\text{「A」の修得単位数})+2.0\times(\text{「B」の修得単位数})+1.0\times(\text{「C」の修得単位数})}{\text{総履修登録単位数（「F」の単位数を含む）}}$$

(2)選定要領

・入試合格時に選定され奨学金を支給されている者（1年次生）及び、支給日当日に在籍していない者は対象外とする。
・区分１の奨学生候補者数の選定
ア、教職に関する授業科目を除く5科目以上を履修していて評定平均が3.2以上の者とする。
イ、複数名が対象となった場合は、評定平均最上位の者とする。
ウ、評定平均最上位の者が複数名の場合は、修得単位の多い者、修得単位数が同一の場合は、その者全員を区分１とし、奨学金は、区分１の定員（1名）を超える人数分については区分２の支給額を加え、均等に分配することとする。なお、均等に分配できない場合は、小数点を切り捨てる。
・区分２の奨学生候補者数は、教職に関する授業科目を除く5科目以上を履修している者とし、区分１と併せて各学期20名以内とする。

（7）成績不振者

「各学期の修得単位数が4単位未満の学生」を成績不振者として定義しています。
成績不振者は教員と今後の就学に関して面談を実施する場合があります。
（例）
・１つの学期で３単位修得→成績不振者として面談実施の可能性があります。
・１つの学期で４単位修得→成績不振者として面談は実施しません。

（8）退学勧告について

多摩大学成績評価規程により、在籍期間やGPA、修得単位数、修学の意思に応じて退学勧告を行っています。

9.学科選択

(1)学科選択とは

経営情報学部において入学後の1年間は、学生は学科には所属せず経営情報学部の学生として広く経営情報の素養を身につけることが期待されます。学生の皆さんは、2年進級時に経営情報学科もしくは事業構想学科に所属する事になり、これを学科選択と言います。学科選択においては学生の志望が優先されますが、志望者数が定員を超えた場合は、GPAによる選抜が行われます。

(2)選抜方法

基本的に1年次の成績(1年間の※評定平均(GPA))をもとに選抜を行います。不本意な結果を招かないために、1年次に努力を払うようにしてください。

※評定平均(GPA)算出方法

$$\frac{4.0\times(\text{「A+」と「P」の修得単位数})+3.0\times(\text{「A」の修得単位数})+2.0\times(\text{「B」の修得単位数})+1.0\times(\text{「C」の修得単位数})}{\text{総履修登録単位数(「F」の単位数を含む)}}$$

(3)申請手続きの流れ

仮選択

プレゼミⅠで詳細を連絡します。

学科説明会

プレゼミⅡで詳細を連絡します。

申請期間

プレゼミⅡで詳細を連絡します。

所属学科発表

2019年3月にT-NEXTにて通知

10.進級・卒業要件

（1）平成30（2018）年度入学生

1.『進級要件』

＜3年次から4年次への進級＞

3年次終了時点で88単位以上修得していなければ、4年次に進級できません。

2.『卒業要件』

卒業要件単位数については、以下の表のとおり単位を修得する必要があります。

<table>
<tr><th colspan="2">科目群</th><th>必修</th><th>特別選択必修※1</th><th colspan="2">選択必修※1</th><th>選択</th><th>合計</th></tr>
<tr><td rowspan="2">産業社会</td><td>教養</td><td>6</td><td>2</td><td>10</td><td>（語学）
4</td><td rowspan="3">72</td><td rowspan="3">124</td></tr>
<tr><td>ビジネス</td><td></td><td></td><td colspan="2"></td></tr>
<tr><td rowspan="2">問題解決学</td><td>学科専門</td><td>4</td><td></td><td colspan="2">16※2</td></tr>
<tr><td>演習科目※3</td><td>6</td><td></td><td colspan="2">4</td><td></td></tr>
<tr><td colspan="2">合　計</td><td>16</td><td>2</td><td colspan="2">34</td><td>72</td><td>124</td></tr>
</table>

※1　「特別選択必修」「選択必修」区分の科目のうち、卒業要件単位を超えて履修した科目は、「選択」区分に算入されます。

※2　所属している学科以外の「選択必修」区分の科目を履修した場合は、「選択」区分に算入されます。

※3　演習科目群の卒業要件として算入される単位数の上限は36単位までとします。

3.『履修上限』

各学期24単位まで履修登録することができます。

履修上限除外科目
インターンシップⅠ・Ⅱ
Study Abroad Ⅰ～Ⅷ
ＡＰ数学
キャリア・デザインⅡ～Ⅳ
アクティブ・ラーニング実践Ⅰ～Ⅷ
教職に関する科目
単位互換科目
立志特講Ⅰ～Ⅲ
問題解決学特講Ⅰ～Ⅲ

(2)平成29(2017)年度・平成28(2016)年度入学生

1.『進級要件』

＜3年次から4年次への進級＞

3年次終了時点で88単位以上修得していなければ、4年次に進級できません。

2.『卒業要件』

卒業要件単位数については、以下の表のとおり単位を修得する必要があります。

<table>
<tr><th colspan="2">科目群</th><th>必修</th><th>特別選択必修※1</th><th colspan="2">選択必修※1</th><th>選択</th><th>合計</th></tr>
<tr><td rowspan="2">産業社会</td><td>教養</td><td>4</td><td>2</td><td>10</td><td>(語学)
4</td><td rowspan="3">74</td><td rowspan="3">124</td></tr>
<tr><td>ビジネス</td><td></td><td></td><td colspan="2"></td></tr>
<tr><td rowspan="2">問題解決学</td><td>学科専門</td><td>4</td><td></td><td colspan="2">16※2</td></tr>
<tr><td>演習科目※3</td><td>6</td><td></td><td colspan="2">4</td><td></td></tr>
<tr><td colspan="2">合　計</td><td>14</td><td>2</td><td colspan="2">34</td><td>74</td><td>124</td></tr>
</table>

※1　「特別選択必修」「選択必修」区分の科目のうち、卒業要件単位を超えて履修した科目は、「選択」区分に算入されます。

※2　所属している学科以外の「選択必修」区分の科目を履修した場合は、「選択」区分に算入されます。

※3　演習科目群の卒業要件として算入される単位数の上限は36単位までとします。

3.『履修上限』

各学期24単位まで履修登録することができます。

履修上限除外科目
インターンシップⅠ・Ⅱ
Study Abroad Ⅰ～Ⅷ
ＡＰ数学
キャリア・デザインⅡ～Ⅳ
アクティブ・ラーニング実践Ⅰ～Ⅷ
教職に関する科目
単位互換科目
立志特講Ⅰ～Ⅲ
問題解決学特講Ⅰ～Ⅲ

(3)平成27(2015)年度入学生

1.『進級要件』

＜3年次から4年次への進級＞

3年次終了時点で88単位以上修得していなければ、4年次に進級できません。

2.『卒業要件』

卒業要件単位数については、以下の表のとおり単位を修得する必要があります。

<table>
<tr><th colspan="2">科目群</th><th>必修</th><th>特別選択必修※1</th><th colspan="2">選択必修※1</th><th>選択</th><th>合計</th></tr>
<tr><td rowspan="2">産業社会</td><td>教養</td><td>4</td><td>2</td><td>10</td><td>（語学）
4</td><td rowspan="3">74</td><td rowspan="3">124</td></tr>
<tr><td>ビジネス</td><td></td><td></td><td colspan="2"></td></tr>
<tr><td rowspan="2">問題解決学</td><td>学科専門</td><td>4</td><td></td><td colspan="2">16※2</td></tr>
<tr><td>演習科目※3</td><td>6</td><td></td><td colspan="2">4</td><td></td></tr>
<tr><td colspan="2">合　計</td><td>14</td><td>2</td><td colspan="2">34</td><td>74</td><td>124</td></tr>
</table>

※1　「特別選択必修」「選択必修」区分の科目のうち、卒業要件単位を超えて履修した科目は、「選択」区分に算入されます。

※2　所属している学科以外の「選択必修」区分の科目を履修した場合は、「選択」区分に算入されます。

※3　演習科目群の卒業要件として算入される単位数の上限は36単位までとします。

3.『履修上限』

各学期24単位まで履修登録することができます。

なお、在学期間が36ヶ月以上の者は、24単位以上履修登録することができます。

※在学期間には、多摩大学学則第22条3に基づき休学期間を含まないものとします。

履修上限除外科目
インターンシップⅠ・Ⅱ
Study Abroad Ⅰ～Ⅷ
ＡＰ数学
キャリア・デザインⅡ～Ⅳ
アクティブ・ラーニング実践Ⅰ～Ⅷ
教職に関する科目
単位互換科目
立志特講Ⅰ～Ⅲ
問題解決学特講Ⅰ～Ⅲ

(4)平成26(2014)年度入学生

1.『進級要件』

<3年次から4年次への進級>

3年次終了時点で88単位以上修得していなければ、4年次に進級できません。

2.『卒業要件』

卒業要件単位数については、以下の表のとおり単位を修得する必要があります。

<table>
<tr><th>科目群</th><th>必修</th><th>特別選択
必修科目</th><th colspan="2">選択必修※1</th><th>選択科目</th><th>合計</th></tr>
<tr><td rowspan="6">基本科目</td><td>14</td><td>2</td><td colspan="2"></td><td rowspan="9">68</td><td rowspan="9">124</td></tr>
<tr><td rowspan="5"></td><td rowspan="5"></td><td>A区分</td><td rowspan="4">10</td></tr>
<tr><td>B区分</td></tr>
<tr><td>C区分</td></tr>
<tr><td>E区分</td></tr>
<tr><td>D区分</td><td>4</td></tr>
<tr><td>基礎科目</td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>専門科目</td><td></td><td></td><td></td><td>16</td></tr>
<tr><td>演習科目 ※2</td><td>6</td><td></td><td></td><td>4</td></tr>
<tr><td>合　計</td><td>20</td><td>2</td><td></td><td>34</td><td>68</td><td>124</td></tr>
</table>

※1　基本科目、専門科目、演習科目「選択必修」区分の科目のうち、卒業要件単位を超えて履修した科目は、「選択」区分に算入されます。

※2　演習科目群の卒業要件として算入される単位数の上限は36単位までとします。

3.『履修上限』

各学期24単位まで履修登録することができます。

なお、在学期間が36ヶ月以上の者は、24単位以上履修登録することができます。

※在学期間には、多摩大学学則第22条3に基づき休学期間を含まないものとします。

履修上限除外科目
インターンシップⅠ・Ⅱ
Study Abroad Ⅰ～Ⅷ
ＡＰ数学
キャリア・デザインⅡ～Ⅳ
アクティブ・ラーニング実践Ⅰ～Ⅷ
教職に関する科目
単位互換科目
立志特講Ⅰ～Ⅲ
問題解決学特講Ⅰ～Ⅲ

(5)平成25(2013)年度入学生

1.『進級要件』

＜3年次から4年次への進級＞

3年次終了時点で88単位以上修得していなければ、4年次に進級できません。

2.『卒業要件』

卒業要件単位数については、以下の表のとおり単位を修得する必要があります。

<table>
<tr><th>科目群</th><th>必修</th><th>特別選択
必修科目</th><th colspan="2">選択必修※1</th><th>選択科目</th><th>合計</th></tr>
<tr><td rowspan="6">基本科目</td><td>14</td><td>2</td><td colspan="2"></td><td rowspan="8">68</td><td rowspan="8">124</td></tr>
<tr><td rowspan="5"></td><td rowspan="5"></td><td>A区分</td><td rowspan="4">10</td></tr>
<tr><td>B区分</td></tr>
<tr><td>C区分</td></tr>
<tr><td>E区分</td></tr>
<tr><td>D区分</td><td>4※2</td></tr>
<tr><td>基礎科目</td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>専門科目</td><td></td><td></td><td></td><td>16</td></tr>
<tr><td>演習科目※3</td><td>6</td><td></td><td></td><td>4</td></tr>
<tr><td>合　計</td><td>20</td><td>2</td><td></td><td>34</td><td>68</td><td>124</td></tr>
</table>

※1　基本科目、専門科目、演習科目「選択必修」区分の科目のうち、卒業要件単位を超えて履修した科目は、「選択」区分に算入されます。

※2　基本科目群D区分の4単位は、同一言語で満たすものとします。

※3　演習科目群の卒業要件として算入される単位数の上限は36単位までとします。

3.『履修上限』

各学期24単位まで履修登録することができます。

なお、在学期間が36ヶ月以上の者は、24単位以上履修登録することができます。

※在学期間には、多摩大学学則第22条3に基づき休学期間を含まないものとします。

履修上限除外科目
インターンシップⅠ・Ⅱ
Study Abroad Ⅰ～Ⅷ
ＡＰ数学
キャリア・デザインⅡ～Ⅳ
アクティブ・ラーニング実践Ⅰ～Ⅷ
教職に関する科目
単位互換科目
立志特講Ⅰ～Ⅲ
問題解決学特講Ⅰ～Ⅲ

(6)平成24(2012)年度入学生

1.『進級要件』

<3年次から4年次への進級>

3年次終了時点で88単位以上修得していなければ、4年次に進級できません。

2.『卒業要件』

卒業要件単位数については、以下の表のとおり単位を修得する必要があります。

<table>
<tr><th>科目群</th><th>必修</th><th>特別選択
必修科目</th><th colspan="2">選択必修※1</th><th>選択科目</th><th>合計</th></tr>
<tr><td rowspan="5">基本科目</td><td>12</td><td>2</td><td colspan="2"></td><td rowspan="8">70</td><td rowspan="8">124</td></tr>
<tr><td rowspan="4"></td><td rowspan="4"></td><td>A区分</td><td rowspan="3">10</td></tr>
<tr><td>B区分</td></tr>
<tr><td>C区分</td></tr>
<tr><td>D区分</td><td>4※2</td></tr>
<tr><td>基礎科目</td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>専門科目</td><td></td><td></td><td></td><td>16</td></tr>
<tr><td>演習科目※3</td><td>6</td><td></td><td></td><td>4</td></tr>
<tr><td>合　計</td><td>18</td><td>2</td><td></td><td>34</td><td>70</td><td>124</td></tr>
</table>

※1　基本科目、専門科目、演習科目「選択必修」区分の科目のうち、卒業要件単位を超えて履修した科目は、「選択」区分に算入されます。

※2　基本科目群D区分の4単位は、同一言語で満たすものとします。

※3　演習科目群の卒業要件として算入される単位数の上限は36単位までとします。

3.『履修上限』

各学期24単位まで履修登録することができます。

なお、在学期間が36ヶ月以上の者は、24単位以上履修登録することができます。

※在学期間には、多摩大学学則第22条3に基づき休学期間を含まないものとします。

履修上限除外科目
インターンシップⅠ・Ⅱ
Study AbroadⅠ～Ⅷ
ＡＰ数学
キャリア・デザインⅡ～Ⅳ
アクティブ・ラーニング実践Ⅰ～Ⅷ
教職に関する科目
単位互換科目
立志特講Ⅰ～Ⅲ
問題解決学特講Ⅰ～Ⅲ

11.教職課程

教員の免許状を取得したい学生は、教職課程を履修して必要な単位を修得してください。

(1)多摩大学経営情報学部にて取得可能な免許状

学部	学科	種類	教科
経営情報学部	※1)経営情報学科	高等学校教諭(一種)	情報・※2)数学

※1)事業構想学科を学科選択した学生は、多摩大学では高等学校教諭(一種)情報の教職免許を取得することはできません。

※2)高等学校教諭(一種)数学の教職免許は、明星大学通信教育部の科目等履修生として取得することができますが、多摩大学で高等学校教諭(一種)情報の教職免許を取得することが必須条件になります。

(2)基礎資格及び最低修得単位数(教育職員免許法で定められている最低単位数)

免許状の種類	資格取得	基礎資格	大学において修得することを必要とする科目の最低単位数			
			教育職員免許法施行規則第66条の6に定める科目	教科に関する科目	教職に関する科目	教科又は教職に関する科目
高等学校教諭	一種免許状	学士の学位を有すること	8	20	23	16

(3)教育職員免許法施行規則第66条の6に定める科目

(◎：必修科目、○：選択必修科目)

免許法施行規則に定める科目及び単位数		左記に対応する開設授業科目
科　目	単位数	科　目
日本国憲法	2	◎法学(憲法)
※1)体育	2	○スポーツⅠ
		○スポーツⅡ
※2)外国語コミュニケーション	2	○English ExpressionⅡ
		○韓国語Ⅱ
		○中国語Ⅱ
※3)情報機器の操作	2	◎IT活用法Ⅱ

※1)スポーツⅠまたはスポーツⅡより1科目選択必修

※2)English ExpressionⅡ、韓国語Ⅱ、中国語Ⅱの3科目より1科目選択必修

※3)2014年度入学生及び2015年度入学生は、業界研究Ⅰ
2016年度以降入学生は、IT活用法Ⅱ

(4)教職に関する科目

＜2018年度入学生＞　　(◎:必修科目)

免許法施行規則に定める科目区分	本学で開講している科目名	配当年次・開講学期	単位数
教職の意義等に関する科目	◎教職概論	1-秋	2
教育の基礎理論に関する科目	◎教育原理	1-秋	2
	◎教育心理学	3-春	2
	◎特別支援教育概論	2-秋	1
	◎教育制度論	2-春	2
教育課程及び指導法に関する科目	◎情報科教育法Ⅰ	3-春	2
	◎情報科教育法Ⅱ	3-秋	2
	◎特別活動・総合的な学習の時間の指導法	2-春	2
	◎教育課程総論	2-春	1
	◎教育方法	2-秋	2
生徒指導、教育相談及び進路指導等に関する科目	◎生徒指導・進路指導論	2-秋	2
	◎教育相談	3-秋	2
教職実践演習	◎教職実践演習	4-秋	2
教育実習	◎教育実習	4-集中(春又は秋)	3
合　計			27

※　教職に関する科目は、卒業要件単位には含まれません。(教育心理学、教育相談を除く。)

＜2017年度以前入学生＞　　(◎:必修科目)

免許法施行規則に定める科目区分	本学で開講している科目名	配当年次・開講学期	単位数
教職の意義等に関する科目	◎教職概論	1-秋	2
教育の基礎理論に関する科目	◎教育原理	3-秋	2
	◎教育史	1-秋	2
	◎教育心理学	3-春	2
	◎教育制度論	2-春	2
教育課程及び指導法に関する科目	◎情報科教育法Ⅰ	3-春	2
	◎情報科教育法Ⅱ	3-秋	2
	◎特別活動	2-春	1
	◎教育課程総論	2-春	1
	◎教育方法	2-秋	2
生徒指導、教育相談及び進路指導等に関する科目	◎生徒指導・進路指導論	2-秋	2
	◎教育相談	3-秋	2
教職実践演習	◎教職実践演習	4-秋	2
教育実習	◎教育実習	4-集中(春又は秋)	3
合　計			27

※　教職に関する科目は、卒業要件単位には含まれません。(教育心理学、教育相談を除く。)

(5)教科に関する科目　　[◎印は必修科目、○印は選択必修科目]

免許法施行規則に定める科目区分	2014年度開講科目	単位	2015年度開講科目	単位	2016年度開講科目	単位	2017年度開講科目	単位	2018年度開講科目	単位	配当年次
基礎教育科目	◎法学（憲法）	2	◎法学（憲法）	2	◎法学（憲法）	2	◎法学（憲法）	2	◎法学（憲法）	2	1-秋
							◎スポーツⅠ		◎スポーツⅠ		
	◎スポーツⅠ	2	◎スポーツⅠ	2	◎スポーツⅠ	2	◎スポーツⅡ ※1つ選択すること	2	◎スポーツⅡ ※1つ選択すること	2	1-春秋
			◎English Expression Ⅱ		◎English Expression Ⅱ		◎English Expression Ⅱ		◎English Expression Ⅱ		
	◎English Expression Ⅱ	2	◎韓国語Ⅱ ◎中国語Ⅱ ※1つ選択すること	2	◎韓国語Ⅱ ◎中国語Ⅱ ※1つ選択すること	2	◎韓国語Ⅱ ◎中国語Ⅱ ※1つ選択すること	2	◎韓国語Ⅱ ◎中国語Ⅱ ※1つ選択すること	2	1-秋
	◎ビジネスコミュニケーション入門Ⅰ	2	◎ビジネスコミュニケーション入門Ⅰ	2	◎ビジネスコミュニケーション入門Ⅰ	2	◎ビジネス最前線研究	2	◎業界研究Ⅰ		2-春
					◎IT活用法Ⅱ	2	◎IT活用法Ⅱ	2	◎IT活用法Ⅱ	2	2-春
情報社会及び情報倫理	◎情報通信と社会	2	◎情報通信と社会	2							
					◎情報倫理	2	◎情報倫理	2	◎情報倫理	2	2-春
	○情報概論	2	○データフィケーションⅠ	2							
			○情報とセキュリティ	2	○経営とセキュリティ	2	○経営とセキュリティ	2	○経営とセキュリティ	2	3-秋
	◎情報法	2	◎情報法	2	◎情報法	2	◎情報法	2	◎情報法	2	2-秋
コンピュータ及び情報処理（実習を含む）	◎ビジネス数学基礎	2	◎ビジネス数学基礎	2	◎ビジネス数学基礎	2	◎ビジネス数学基礎	2	◎ビジネス数学基礎	2	1-春
	◎Webサービス開発	2	◎Webサービス開発	2	◎Webサービス開発	2	○Webサービス開発	2	○Webサービス開発	2	3-秋
					○Webプログラミング	2	○Webプログラミング	2	○Webプログラミング	2	3-春
	○プログラミング言語Ⅰ	2	○デザインワークショップⅠ	2	○デザインワークショップⅠ	2	○プログラミング入門Ⅰ	2	○プログラミング入門Ⅰ	2	2-春
	○プログラミング言語Ⅱ	2	○デザインワークショップⅡ	2							
	◎コンピュータ概論	2	◎コンピュータ概論	2	◎コンピュータ概論	2	◎コンピュータ概論	2	◎コンピュータ概論	2	1-秋
	○コンピュータサイエンス	2	○コンピュータサイエンス	2							
	○情報探索法	2	○情報探索法	2							
情報システム（実習を含む）							◎データベースⅡ	2	◎データベースⅡ	2	2-秋
	◎データベース	2	◎データフィケーションⅡ	2	◎データフィケーションⅡ	2	◎データベースⅠ	2	◎データベースⅠ	2	2-春
	◎システムデザイン	2	◎システムデザイン	2							
	○システム分析概論	2	○システム分析概論	2							
					◎データフィケーションⅠ	2					
					○ITデザインⅠ	2	○情報工学概論	2	○情報工学概論	2	3-秋
情報通信ネットワーク（実習を含む）	◎コンピュータネットワーク活用	2	◎コンピュータネットワーク活用	2	◎コンピュータネットワーク活用	2	◎コンピュータネットワーク活用	2	◎コンピュータネットワーク活用	2	3-春
	◎情報ネットワーク概論Ⅰ	2	◎クリエイティブデザインⅡ	2	○クリエイティブデザインⅡ	2	○クリエイティブデザインⅡ	2	○クリエイティブデザインⅡ	2	2-秋
	○情報ネットワーク概論Ⅱ	2	○ITデザインⅠ	2	◎ITデザインⅠ	2	◎情報ネットワーク	2	◎情報ネットワーク	2	3-春
マルチメディア表現及び技術（実習を含む）	◎マルチメディア実践	2	◎クリエイティブデザインⅠ	2	◎クリエイティブデザインⅠ	2	◎クリエイティブデザインⅠ	2	◎クリエイティブデザインⅠ	2	2-春
	○WebデザインⅠ	2	○WebデザインⅠ	2	○WebデザインⅠ	2	○WebデザインⅠ	2	○WebデザインⅠ	2	2-春
	○WebデザインⅡ	2	○WebデザインⅡ	2	○WebデザインⅡ	2	○WebデザインⅡ	2	○WebデザインⅡ	2	2-秋
	○経営科学Ⅰ	2	○問題解決メソッドⅠ	2							
	○経営科学Ⅱ	2	○問題解決メソッドⅢ	2							
情報と職業	◎経営情報論Ⅰ	2	◎経営情報論Ⅰ	2	◎経営情報論Ⅰ	2	◎経営情報論Ⅰ	2	◎経営情報論Ⅰ	2	2-春
	◎情報と職業	2	◎情報と職業	2	◎情報と職業	2	◎情報と職業	2	◎情報と職業	2	3-春

(6)教職課程における科目新旧対照表

	2014年度開講科目		2015年度開講科目		2016年度開講科目		2017年度開講科目		2018年度開講科目	備考
変更科目一覧	スポーツⅠ	→	スポーツⅠ	→	スポーツⅠ	→	スポーツⅠ スポーツⅡ	→	スポーツⅠ スポーツⅡ	
	English Expression Ⅱ	→	English Expression Ⅱ 韓国語Ⅱ 中国語Ⅱ	→	English Expression Ⅱ 韓国語Ⅱ 中国語Ⅱ	→	English Expression Ⅱ 韓国語Ⅱ 中国語Ⅱ	→	English Expression Ⅱ 韓国語Ⅱ 中国語Ⅱ	
	ビジネスコミュニケーション入門Ⅰ	→	ビジネスコミュニケーション入門Ⅰ	→	ビジネスコミュニケーション入門Ⅰ	→	ビジネス最前線研究	→	業界研究Ⅰ	名称変更
	情報通信と社会	→	情報通信と社会	→	廃止	→	廃止	→	廃止	廃止
	情報概論	→	データフィケーションⅠ (区分：情報社会及び情報倫理)	→	廃止	→	廃止	→	廃止	廃止
	プログラミング言語Ⅰ	→	デザインワークショップⅠ	→	デザインワークショップⅠ	→	プログラミング入門Ⅰ	→	プログラミング入門Ⅰ	
	プログラミング言語Ⅱ	→	デザインワークショップⅡ	→	廃止	→	廃止	→	廃止	廃止
	コンピュータサイエンス	→	コンピュータサイエンス	→	廃止	→	廃止	→	廃止	廃止
	情報探索法	→	情報探索法	→	廃止	→	廃止	→	廃止	廃止
							データベースⅡ		データベースⅡ	
	データベース	→	データフィケーションⅡ	→	データフィケーションⅡ	→	データベースⅠ	→	データベースⅠ	
	システムデザイン	→	システムデザイン	→	廃止	→	廃止	→	廃止	廃止
	システム分析概論	→	システム分析概論	→	廃止	→	廃止	→	廃止	廃止
					データフィケーションⅠ(区分：情報システム(実習を含む))	→	廃止	→	廃止	廃止
					ITデザインⅡ	→	情報工学概論	→	情報工学概論	
	情報ネットワーク概論Ⅱ	→	ITデザインⅠ	→	ITデザインⅠ	→	情報ネットワーク	→	情報ネットワーク	
			情報とセキュリティ	→	経営とセキュリティ	→	経営とセキュリティ	→	経営とセキュリティ	
	経営科学Ⅰ	→	問題解決メソッドⅠ	→	廃止	→	廃止	→	廃止	廃止
	経営科学Ⅱ	→	問題解決メソッドⅢ	→	廃止	→	廃止	→	廃止	廃止

(7) 教職課程の履修について

①教職課程の履修要件は1年次に、原則として教員採用試験の受験を希望していること。
②教職課程の履修が認められる者。
・1年次終了時
2年次に進級する際に、原則として、1年次中に修得した単位が40単位以上で、かつその成績の評定平均が2.1以上に達した者。

評定平均の算出方法

$$\frac{4.0\times(\text{「A+」と「P」の修得単位数})+3.0\times(\text{「A」の修得単位数})+2.0\times(\text{「B」の修得単位数})+1.0\times(\text{「C」の修得単位数})}{\text{総履修登録単位数(「F」の単位数を含む)}}$$

・2年次終了時
・ 80単位以上（教職に関する科目は除く）修得していること。

・3年次終了時
・110単位以上（教職に関する科目は除く）修得していること。
・ 原則として、教職に関する科目の必修科目（教育実習と教職実践演習を除く）をすべて修得していること。
・ 原則として、必修科目30単位全てと、選択必修科目の内14単位以上修得していること。
③「教育実習」3単位のうち1単位は「事前・事後指導」とし、これに出席しなければ教育実習の単位は認定されない。

(8) 教育実習について

①教育実習の目的
教育実習は、学校教育の実状や教員の実務を理解し、これまで大学で身につけた知識や理論を背景に、実習校において、教育職員として必要な現場の知識や技術、態度等を身につけるための実地修練の場です。
②教育実習の実施時期
教育実習の実施時期は4年次の6月を原則としますが、実習校の都合により、他の時期に行うこともあります。
③教育実習の説明会
4年次の教育実習履修有資格者を対象に、4月に教育実習説明会を実施し、教育実習申込書、教育実習日誌等を配布します。
④教育実習手数料
教育実習手数料は、教育実習申込みの際に教務課窓口にて納入してください。
→ 教育実習手数料 20,000円
⑤実習校との事前打ち合わせ
教育実習開始前に、教育実習についての打ち合わせが実習校で行われます。実習に際しての指導を受けたり、実習生の準備状況の報告を行ったりするもので、実習に欠かせない重要なものです。必ず出席してください。日時は実習校から直接本人に連絡があります。

(9) 教員免許状の申請について

大学から東京都教育庁へ教員免許の一括申請を行います。
教員免許状申請料は、教員免許状申請についての案内が教務課から届きますので、それに従って所定の料金を教務課窓口に納入してください。
→ 教員免許状申請料 3,700円

12.オフィスアワー制度について

【オフィスアワーとは】

多摩大学経営情報学部では、オフィスアワーを実施しています。オフィスアワーとは、本学の経営情報学部の学生が受講する授業科目に関し、担当の教員に直接質問等をし、教員が返答するために行う面談の時間のことです。1週間の中に必ず90分以上設定し、公表した上で、学生からの相談を受けられるように待機しています。予約は不要です。

※担当授業科目には、ホームゼミを含みます。

※上記「学生」とは、経営情報学部生に加え、経営情報学部の科目を受講している科目等履修生と聴講生を含みます。

※非常勤教員については、随時電子メールで質問を受け付けています。詳細は別途配布する資料で確認してください。

【基本原則】

・面談内容は授業内容に関することとします。
・面談場所は3階教育サポート室奥のラウンジを使用します。
・オフィスアワー情報（曜日、時間）については、教育サポート室とホームページで公表します。
URL：http://www.tama.ac.jp/student/smis/support.html
・ １人の面談時間単位は、15分です。

【予約希望の場合】

面談は、予約なしでも可ですが、事前に予約することもできます。希望する学生は、3階教育サポート室カウンターにて、面談予約希望の旨を申し出てください。また申し込む場合は、申込用紙を受け取り、必要事項を記入して提出してください。

※予約申込時間：月曜日～金曜日午前9:30～午後4:30

※直接教員と約束をした場合でも、該当する時間に予約があった場合には予約した学生を優先します。

※曜日や時間、面談場所が変更になる場合があります。

※予約可能な時間は15分間を限度とします。

予約した場合には、面談当日指定された場所に遅れない様に直接行ってください。もしも予約時間定刻に予約した学生がいない場合、他の学生が優先されます。

13.授業評価アンケート(VOICE)について

全ての講義科目について、学生による授業評価アンケート(VOICE)を実施しています。よりよい講義の実施のために、学生から真面目で率直な意見を聞くマークシートによる無記名式アンケートです。詳細は掲示にてお知らせしますので、積極的に回答してください。
なお、過去の授業評価アンケート(VOICE)結果については、3階図書館にて公開しています。履修する授業を選択する際などに参考にしてください。

14.単位互換科目について

● 申請資格

多摩大学経営情報学部に在学する学生

● 履修期間・履修単位制限

1.ネットワーク多摩単位互換制度によって開講されている他大学の科目(産学連携科目を含む)を履修することが出来ます。開講科目の詳細については、T-NEXTにて確認してください。
2.単位互換制度により他大学の科目を履修し、単位を修得できるのは在学中30単位までとし、各学期の履修単位数上限に含みます。また、修得した単位は「単位互換科目」の単位として卒業要件に含みます。

● 履修申請

1.履修登録は当該科目受講の翌学期に行い、単位認定されます。つまり、他大学の春学期開講科目を受講した場合、多摩大学で秋学期に履修登録し、秋学期の成績となります。
2.履修申請は、春学期は3月下旬～4月中旬、秋学期は8月下旬～9月中旬(決定次第T-NEXTで発表します)までに「履修申請書」を顔写真添付のうえ教務課に提出してください。申請期間内であっても、開設大学の受付期間が終了している場合には受付が出来ません。原則として、受付期間外の受付は出来ませんので、申請は余裕を持って行ってください。
3.「履修申請書」を提出し、開設大学より許可を受けた科目は成績等にかかわらず必ず履修することとします。
4.履修許可者の発表はT-NEXTにて行います。

● 履修上の注意

1.履修科目は、ネットワーク多摩単位互換制度により開講されている、単位互換科目及び産学連携事業科目のうち、半期完結の科目に限ります。
2.在籍年次よりも上級年次に配当されている科目を履修することは出来ません。
3.履修に当たっては移動時間を考慮し、他大学科目を履修する前後の時間に配置された多摩大学科目又は他大学科目を履修することは出来ません。ただし、昼休みを挟む場合はこの限りではありません。

● 授業

1.休講・補講等の授業及び試験日程等に関する通知は、開設大学が通常所属大学の学生に対する通知方法により行われますので、各自の責任において確認してください。
2.出席状況によっては、学期の途中であっても開設大学から履修の許可を取り消されたり、試験の受験資格が取り消されることがあります。
3.学年暦の差異により、多摩大学と開設大学での授業・補講(代講)の日時が重複した場合、どちらの授業に出席するかは自身で判断してください。

● **試験**

1.開設大学の試験と多摩大学の試験の日時が重複した場合は、その事実が判明したら直ちに 本学の教務課に相談してください。相談が無い場合、対応措置を講じることができません。

2.病気等により開設大学の試験を欠席したときは、追試験の受験を認められることがあります。その場合の手続き等は開設大学の定めに従います。

3.開設大学における授業及び試験の詳細については、開設大学が配布する資料などで確認してください。

● **成績**

1.成績評価は開設大学の基準及び表示方法により行い、多摩大学の基準及び表示方法に置き換えて認定します。

2.成績の質問は、開設大学の定めるところによるものとします。

● **特別聴講学生証**

1.特別聴講学生証は、開設大学において交付されます。

2.有効期限は開設大学が必要と定める期間とします。また、有効期限内であってもこれを必要としなくなったとき、又は有効期限が満了したときは特別聴講学生証を多摩大学教務課まで返却してください。

● **その他**

1.ネットワーク多摩単位互換制度を利用して履修する授業科目の聴講料は免除されます。ただし、教材費や実習費が必要な授業科目については、実費を徴収されることがあります。

2.開設大学における図書館等の施設・設備の利用範囲、自転車・バイクの利用、開設大学で特に注意する事項などについては、開設大学が配布する資料等で確認してください。

3.開設大学において急病になった、又は事故にあった場合など、急を要する治療が必要な場合は、開設大学の診療施設を利用することが出来ます。また、直ちに救急措置を講じる必要がある場合、本学の判断により保険情報を含めた個人情報を開設大学の診療施設に提供することがあります。
なお、通学及び授業中に事故にあった場合、「学生教育研究災害傷害保険」の適用を受けることが出来る場合がありますので本学の学生課に問い合わせてください。

15.アセスメント

アセスメントとは、専攻・専門にかかわらず、大卒者として社会で求められる汎用的な能力・態度・志向を測定するためのプログラムです。１年生と３年生の春学期のオリエンテーションでアセスメントテストを実施します。外部の一般化された試験を用いて社会で求められる一般的な能力等を測定し、自身の現状を客観的に把握することが出来ます。１年生と３年生の両方で受験することで、カリキュラムによる学修成果を、大学の成績とは異なる視点で確認できます。
アセスメントでの気づきを通して、大学での学びをより主体的なものにする原動力としてください。

16.TOEIC試験補助について

大学から補助を受けて、無料で学内TOEIC を受けることができます。
就職や留学に行く際の目安、また自分の英語の実力がどの程度伸びたかを見るよいチャンスです。積極的に活用して、自身の成長の指標にしてください。申し込みの詳細については随時更新しますので、教育サポート室で最新情報を確認してください。

17.多摩大学 学則（抜粋）

第１章　総則

（目的）

第１条　多摩大学（以下「本学」という。）は、永年に及ぶ産業教育における経験を基盤とし、国際化・情報化時代に即応して、学生に高度な外国語能力と世界に通用する教養・最新の経営知識及び的確な情報処理能力を修得せしめ、国際的ビジネスの場で活躍できる人材の育成を目指すとともに、わが国の産業社会の健全たる発展に寄与する指導的人材を育成することを目的とする。

（自己点検及び評価）

第２条　本学は、その教育研究水準の向上を図り、大学の目的及び社会的使命を達成するため、大学における教育研究活動等の状況について自ら点検及び評価を行う。

２　自己点検及び評価について必要な事項は、別に規程で定める。

（個人情報保護）

第３条　本学は、教育・研究活動等の適正かつ円滑な運営を図り、個人情報の有用性に配慮するため、個人の権利及び利益を保護する。

２　個人情報保護について必要な事項は、別に規程で定める。

（ハラスメントの防止）

第４条　本学は、ハラスメントの防止及びハラスメントに起因する問題が生じた場合に、適切な対応を行うための措置を講じ、学生、教育職員及び事務職員等の快適な環境を作り、教育、研究及び就業の機会と権利を保障する。

２　ハラスメントの防止について必要な事項は、別に規程で定める。

第３章　修業年限、在学年限、学年、学期及び休業日

（修業年限）

第10条　本学の修業年限は、４年とする。ただし、第３８条の規定により卒業を認められた者については、この限りでない。

（在学年限）

第11条　学生は、８年を超えて在学することができない。

２　編入学、転入学及び再入学の許可を得た者の在学年限は、第２０条第２項に定める。

（学年）

第12条　学年は、４月１日に始まり、翌年３月３１日に終る。ただし、秋学期入学生については、１０月１日に始まり、翌年９月３０日に終る。

（学期）

第13条　学年を次の２学期に分ける。

（１）春学期　４月１日から　９月３０日まで

（２）秋学期１０月１日から翌年３月３１日まで

（休業日）

第14条　授業を行わない日（以下「休業日」という。）は、次のとおりとする。ただし、学長が必要と認めるときは、休業日を変更又は臨時に休業日を定めることができる。

（１）日曜日

（２）国民の祝日に関する法律（昭和２３年法律第１７８号）に規定する休日

（３）本学の開学記念日　１０月２０日

（４）メモリアルデー　　１月１６日

（5）夏季休業　　8月10日から9月20日まで
（6）冬季休業　　12月25日から　翌年1月5日まで
（7）春季休業　　翌年2月10日から3月31日まで
2　休業日の変更又は臨時の休業日については、その都度公示する。

第4章　学籍

（入学の時期）
第15条　入学の時期は、学年の始めとする。ただし、再入学及び転入学については、学期の始めとすることができる。
（入学資格）
第16条　本学に入学することができる者は、次の各号の一に該当する者とする。
（1）高等学校若しくは中等教育学校を卒業した者
（2）通常の課程による12年の学校教育を修了した者又は通常の課程以外の課程により，これに相当する学校教育を修了した者
（3）外国において、学校教育における12年の課程を修了した者又はこれに準ずる者で、文部科学大臣の指定した者
（4）文部科学大臣が高等学校の課程と同等の課程を有するものとして認定した在外教育施設の当該課程を修了した者
（5）専修学校の高等課程（修業年限が3年以上であることその他の文部科学大臣が定める基準を満たすものに限る。）で文部科学大臣が別に指定するものを文部科学大臣が定める日以後に修了した者
（6）文部科学大臣の指定した者
（7）高等学校卒業程度認定試験規則による高等学校卒業程度認定試験に合格した者（旧規程による大学入学資格検定に合格した者を含む。）
（8）学校教育法第90条第2項の規定により大学に入学した者であって、本学において、大学における教育を受けるにふさわしい学力があると認めた者
（9）本学において、個別の入学資格審査により高等学校を卒業した者と同等以上の学力があると認めた者で、18歳に達した者
（入学の出願）
第17条　本学に入学を志願する者は、入学願書に所定の入学検定料及び別に定める書類を添えて願い出なければならない。
（入学者の選考）
第18条　前条の入学志願者に対しては、試験を行いその成績等により選考する。
（入学手続き及び入学許可）
第19条　入学者の選考に合格した者は、所定の期日までに入学誓約書その他所定の書類を提出し、第42条に規定する、所定の学費を納付しなければならない。
2　学長は、正当な事由なくして期日までに前項の手続きを完了しない者の合格を取消すことができる。
3　学長は、第1項の入学手続きを完了した者に入学式において入学を許可し、学生証を交付する。
（編入学、転入学及び再入学）
第20条　次の各号の一に該当し、本学に入学を志願する者は、次のとおりとする。
（1）大学を卒業した者又は退学した者
（2）短期大学又は高等専門学校を卒業した者
（3）専修学校専門課程を卒業した者
（4）他の大学に在学中の者で、現に在学する大学の学長による転学の承認を得た者
また、学長は次の各号の一において、入学を許可することができる
（1）編入学については、編入学定員内において、選考の上、入学を許可することができる。

（2）転入学及び再入学については、定員に欠員のある場合に限り、選考の上、相当年次に入学を許可することができる。
2　前項の規定により入学を許可された者の既に履修した授業科目及び単位数の取扱い並びに在学すべき年数については、教授会の議を経て学長が決定する。
3　前３条の各規定は、第１項の入学に準用する。
（休学）
第21条　疾病その他特別の事由により修学することができない者は、１学期又は１年間（２学期）を区分として、様式第１に規定する休学願を提出し学長の許可を得て休学することができる。
2　学長は、疾病その他特別の事由により修学することが適当でないと認めるときに、教授会の議を経て、休学を命ずることができる。
（休学の期間）
第22条　休学期間は、１年以内とする。ただし、特別の事由があるときは、１年を限度として休学期間の延長を認めることができる。
2　休学期間は、通算して４年を超えることができない。
3　休学期間は、第１０条の修業年限及び第１１条の在学年限に算入することができない。
（復学）
第23条　休学期間中にその事由が消滅したときは、様式第２に規定する復学願を提出し学長の許可を得て復学することができる。
（転学）
第24条　他の大学又は短期大学に入学又は転入学を志願しようとする者は、様式第３に規定する転学願を提出し学長の許可を得なければならない。
（転学部）
第25条　転学部を願い出る者は、選考し各教授会の議を経て、学長がこれを許可する。
2　転学部について必要な事項は、別に規程で定める。
（留学）
第26条　外国の大学又は短期大学で修学することを志願する者は、様式第４に規定する留学願を提出し学長の許可を得なければならない。
2　第３６条の規定は、前項の留学の場合に準用する。
3　第１項の許可を得て留学した期間は、第１１条に定める在学年限に含めることができる。
（願い出による退学）
第27条　病気その他の事由により退学しようとする者は、様式第５に規定する退学願を提出し学長の許可を得なければならない。
（除籍）
第28条　次の各号の一に該当する者は、教授会の議を経て、学長が除籍する。
（1）第１１条に定める在学年限を超えた者
（2）第２２条第２項に定める休学期間を超えてなお修学できない者
（3）長期間にわたり行方不明の者
（4）学費の納付を怠り、催促してもなお納付しない者

第５章　教育課程及び履修方法等

（授業科目）
第29条　授業科目は、基礎教育科目及び専門教育科目とする。
2　授業科目の種類及び単位数等は、別表第１及び第５のとおりとする。
（単位の計算方法）
第30条　各授業科目の単位は、１単位の授業科目を４５時間の学修を必要とする内容をもって構成すること

を標準とし、次の基準により計算する。
（１）講義及び演習については、１５時間の授業をもって１単位とする。
（２）実験、実習及び実技については、３０時間の授業をもって１単位とする。
２　各授業科目の授業は、１５週にわたる期間を単位として行う。ただし、学長が本学で教育上特別の必要があると認められるときは、教授会の議を経て、これらの期間より短い特定の期間において授業を行うことができる。
（履修方法）
第31条　学生は、所属する学部及び学科の所定の授業科目を履修しなければならならない。
２　学生は、当該年度又は当該学期に履修する授業科目を選択し、指定期間内に所定の方法により履修科目を届出なければならない。
３　履修について必要な事項は、別に規程で定める。
（単位修得等の認定）
第32条　単位修得の認定その他授業科目履修の認定は、試験その他の審査により行う。
２　試験及び審査の方法について必要な事項は、別に規程で定める。
（第１年次に入学した者の既修得単位の認定）
第33条　本学の第１年次に入学した者が大学又は短期大学を卒業又は中途退学している場合、本学で教育上有益と認めるときは、教授会の議を経て、学長が既に修得した単位から、一般教育科目、外国語科目、保健体育科目について、合計３０単位を超えない範囲において、本学で修得したものとして認定することができる。
（成績の評価）
第34条　授業科目の成績は、一般講義科目は、Ａ+、Ａ、Ｂ、Ｃ、Ｆの５段階、ゼミナール科目はＰ、Ｆの２段階の評語をもって表示する。
２　表示した成績は、Ｆを不合格としその他を合格とする。
３　第３３条、第３５条及び第３６条により認定された授業科目の成績は、認定（Ｎ）の評語をもって表示する。
４　成績評価について必要な事項は、別に規程で定める。
（他学部科目の履修）
第35条　学生は、他の学部に開設されている授業科目のうち定められた科目を、２４単位を超えない範囲において履修することができる。ただし、履修を希望する者は、あらかじめ学部長の許可を得なければならない。
２　前項の履修により修得した単位は、卒業に必要な修得単位数に算入することができる。
（他の大学の授業科目の履修）
第36条　学生は、他の大学、短期大学又は外国の大学との協議に基づき、授業科目を履修又は外国の大学に留学することができる。
２　前項の規定により履修した授業科目について修得した単位は、教授会の議を経て、学長が６０単位を限度として認定することができる。
３　本学を休学時に他の大学、短期大学又は外国の大学で修得した単位の認定については、別表第２に掲げる単位認定料を徴収する。
（教育職員免許状取得のための課程）
第37条　本学に教育職員免許状取得のための課程を置く。
２　本学において資格の取得できる教育職員免許状の種類及び免許教科は、別表第３のとおりとする。
３　教育職員免許状を得ようとする者は、別表第４に定める「教科に関する基礎及び専門科目」及び別表第５に定める「教職に関する科目」を履修しなければならない。
４　別表第５に定める「教職に関する科目」は、卒業に必要な単位数に算入することができない。

第６章　卒業及び学位

（卒業）

第38条　本学に４年以上在学し、別表第１に定める所定の単位数以上を修得した者は、教授会の議を経て、学長が卒業を認める。

２　当該学部の学生として３年以上在学した者が、別表第１に定める所定の単位数以上を優秀な成績で修得したと認めるとき、前項の規定にかかわらず教授会の議を経て、学長が早期卒業として認めることができる。

３　早期卒業について必要な事項は、別に規程で定める。

（学位）

第39条　学長は、卒業を認めた者に次の学位を授与し、「卒業証書・学位記」を交付する。

（１）経営情報学部　学士（経営学）

（２）グローバルスタディーズ学部　学士（グローバルスタディーズ学）

第７章　賞罰

（表彰）

第40条　人物及び学業の優秀な者又は本学の学生として表彰に価する功績があった場合は、教授会の議を経て、学長が表彰する。

（懲戒）

第41条　本学則若しくは本学で定める諸規則に違反した者又はその他学生としての本分に反する行為があった場合は、教授会の議を経て、学長が懲戒する。

２　前項の懲戒の種類は、退学、停学及び訓告とする。

３　懲戒について必要な事項は、別に規程で定める。ただし、定めた規程は、本学則と同様の取扱で公開する。

第８章　学費

（学費の種類及び額）

第42条　学生は、学年毎に授業料その他所定の学費を納付しなければならない。

２　学費の種類及びその額は、別表第２のとおりとする。

（学費の納付）

第43条　授業料は、年額の二分の一ずつを次の２学期に分けて納付しなければならない。

（１）春学期（４月から９月まで）：納期４月中

（２）秋学期（１０月から翌年３月まで）：納期１０月中

２　施設費（維持費）及び図書教材費は、学年始めの月に一括して納付しなければならない。

（復学等の場合の学費）

第44条　春学期又は秋学期の中途において復学又は入学した者は、復学又は入学した月から当該期末までの授業料並びに当学年度分の施設費（維持費）及び図書教材費が未納の場合は、これ等を含め一括して復学又は入学した月に納付しなければならない。

（退学等の場合の学費）

第45条　春学期又は秋学期の中途で退学又は除籍された者の当該学期分の学費は、徴収する。

２　停学期間中の学費は、徴収する。

（休学の場合の学費）

第46条　休学を許可された者又は命ぜられた者は、休学期間が１学期以上にわたる場合においてその学期分の授業料を免除する。ただし、休学在籍料として別表第２に定める額を納付しなければならない。

（研究生等の学費）

第47条　研究生、聴講生及び特別聴講学生の入学検定料、入学金及び授業料等の学費については、別に定める。

（既納の学費）

第48条　既納の入学検定料、入学金及び授業料等の学費は、返還しない。ただし、入学式までに入学を辞退した場合には、既納した入学手続納付金のうち、入学金を除く金額を返還する。

第９章　奨学

（奨学）

第49条　能力があるにもかかわらず経済的理由によって就学が困難な者及び特に学力が優れている者に対して、奨学の方法を講ずることができる。

２　奨学の方法は、奨学金の給付又は貸与とする。

３　奨学について必要な事項は、別に規程で定める。

第10章　研究生、特別聴講学生、科目等履修生、聴講生及び外国人留学生

（研究生）

第50条　本学の特定の専門事項について、研究することを志願する者がいるときは、教育研究に支障のない場合に限り、選考し学長が研究生として入学を許可することができる。

２　研究生について必要な事項は、別に規程で定める。

（特別聴講学生）

第51条　他の大学又は外国の大学の学生で、協議に基づき本学の特定の授業科目を履修することを志願する者がいるときは、学長が特別聴講学生として入学を許可することができる。

２　特別聴講学生について必要な事項は、別に規程で定める。

（科目等履修生）

第52条　本学の特定の授業科目を履修することを志願する者がいるときは、教育研究に支障のない場合に限り、選考し学長が科目等履修生として入学を許可することができる。

２　科目等履修生について必要な事項は、別に規程で定める。

（聴講生）

第53条　本学の特定の授業科目を聴講することを志願する者がいるときは、教育研究に支障のない場合に限り、選考し学長が聴講生として入学を許可することができる。

２　聴講生について必要な事項は、別に規程で定める。

（外国人留学生）

第54条　外国人であって、外国において通常の過程による１２年の学校教育課程を修了した者又はこれと同等以上の資格ある者が、本学に入学を志願するときは、日本政府、日本政府の承認した外国政府若しくは日本駐在の外国公館の発行した身分証明書又はこれに準ずる証明書のある者に限り、選考し学長が入学を許可することができる。

２　外国人留学生について必要な事項は、別に規程で定める。

第11章　公開講座

（公開講座）

第55条　地域社会の発展に寄与し、社会人の教養を高め、文化の向上に資するため、本学に公開講座を開設することができる。

２　公開講座について必要な事項は、別に規程で定める。

第12章　寄付講座

（寄付講座）

第56条　学外の機関等から授業科目の運営に必要な経費の寄付を受け、本学の教育研究に資するため、本学に寄付講座を開設することができる。

２　寄付講座について必要な事項は、別に規程で定める。

18.多摩大学学生懲戒規程

（目的）
第１条　この規程は、多摩大学学則（以下「学則」という。）第４１条の規定に基づき学生の懲戒について必要な事項を定めることを目的とする。
（懲戒の定義）
第２条　懲戒対象者は、学則に規定する学部学生、研究生、特別聴講生、科目等履修生、聴講生及び外国人留学生（以下「学生」という。）とする。
２　懲戒は、本学で学生の本分を全うさせるために、学校教育法及び学校教育法施行規則に基づき行う。
３　懲戒は、総合的に検討し教育的見地に基づき行う。
４　懲戒により学生に科す不利益は、懲戒目的を達成するため必要最小限とする。
（懲戒の種類）
第３条　学則第４１条第２項で規定した懲戒の種類は、次の各号の一に該当する内容とする。
（１）退学は、学生としての身分を奪う事。
（２）停学は、無期又は有期としその期間の登校を禁止する事。
ア　停学の期間は、在学年限に含め修業年限に含めない。
イ　停学の期間が１ヶ月以下でかつ特別の事情がある場合は、学生委員会で審議し第７条に規定する学長の決定において修業年限に含めることができる。
ウ　有期停学は６ヶ月以下とする。
（３）訓告は、口頭及び文書により厳重な注意を行い、期限を定めて反省文の提出をさせる事。
（懲戒の基準）
第４条　前条に定める懲戒の基準は、次の各号の一に該当する内容とする。
（１）退学
ア　本学及び社会秩序を乱し、本学の教育研究活動を妨げる行為を行った場合で特に悪質と判断した場合
イ　学内又は学外において重大な非違行為を行った場合で特に悪質と判断した場合
ウ　本学の規則等又は命令に違反する行為を行った場合で特に悪質と判断した場合
エ　本学が実施する試験等において，不正行為を行った場合で特に悪質と判断した場合
オ　その他退学を受けた者の行為を教唆若しくは幇助した場合
（２）停学
ア　本学及び社会秩序を乱し、本学の教育研究活動を妨げる行為を行った場合
イ　学内又は学外において悪質な非違行為を行った場合
ウ　本学の規則等又は命令に違反する行為を行った場合で悪質と判断した場合
エ　本学が実施する試験等において、悪質な不正行為を行った場合
オ　その他懲戒処分をしても改善の見込みがない場合
（３）訓告
ア　学内又は学外において非違行為を行った場合
イ　本学の規則等又は命令に違反する行為を行った場合
ウ　本学が実施する試験等において、不正行為を行った場合
（審議）
第５条　学部長は、学生が懲戒の対象となりうる事項があったと認められるとき、学生委員会に調査を命ずる。
２　学生委員会は、事実関係の調査及び懲戒の種類の審議を行い、結果を教授会へ報告する。
（調査）

第６条　学生委員会は、当該学生及び関係者等から資料の提出を求め、事情及び意見を聴くことができる。
２　学生委員会は、当該学生に弁明の機会を与える。
３　当該学生は、弁明の場において必要な証拠を提出し証人の喚問を求めることができる。また、当該学生は、補佐人を指名し補佐を受けることができる。
４　当該学生が、弁明の場を正当な理由なく欠席したとき、弁明の権利を放棄したものとする。
５　学生委員会は、懲戒処分決定前に謹慎を命ずることができる。ただし、謹慎の期間は、３ヶ月以内とする。
６　謹慎は、当該学生の行為が第４条で定める懲戒基準に該当するとき行うことができる。
７　謹慎期間は、停学期間に通算することができる。
８　謹慎期間中は、本学の教育課程の履修登録、履修、試験等の受験及び課外活動へ参加することはできない。ただし、学部長が教育指導上必要と認めた場合は、参加ができる。
９　謹慎期間中に休学又は退学を申し出た場合は、これを認めない。
（懲戒の決定及び解除）
第７条　懲戒は、教授会の議を経て、学長が行う。
２　懲戒は、様式第１に定める懲戒通知書に理由も添えて当該学生に通知する。ただし、有期停学の場合は、停学解除日も通知する。
３　無期停学の解除を行う場合は、教授会の議を経て、学長が行う。学長は、決定により停学解除を当該学生に文書で通知する。
（再審査）
第８条　懲戒を受けた学生は、事実誤認、新事実の発見又はその他正当な理由があるとき、それらを示す資料を添えて文書にし、学長に再審査の申請を行うことができる。
２　再審査の申請は、懲戒通知書の決定日から１ヶ月以内とする。
３　学長は、再審査を行うかどうか判断し教授会の議を経て決定する。
４　学長は、再審査の必要があると決定したとき、学部長に再審査を命じる。
５　学長は、再審査の必要がないと決定したとき、当該学生に文書で通知する。
６　再審査の申請を行い学長が教授会の議を経て、懲戒の決定又は解除行うまでは、すでに決定された懲戒内容の変更はできない。
７　再審査の調査は、第６条の規定を準用する。
（停学期間中の措置）
第９条　停学期間中は、当該学生が本学の教育課程の履修登録、履修、試験等の受験、及び課外活動へ参加することはできない。ただし、学部長が教育指導上必要と認めた場合は、この限りではない。
２　停学期間中は、当該学生に対して定期的な面談及び指導を行う。
３　停学期間中に休学又は退学を申し出た場合は、これを認めない。
（事務）
第10条　学生課は、学生の懲戒についての庶務を担当する。
（規程の公開）
第11条　本規程は、学生の不利益等につながる重要な規程であることから、本学のホームページ、学生ハンドブック等に学則と同様の取扱で公開する。

19.多摩大学履修規程（抜粋）

（目的）
第１条　この規程は、多摩大学学則（以下「学則」という。）第３１条、第３２条及び第３４条の規定に基づき、授業科目（以下「科目」という。）の履修、試験及び成績評価について必要な事項を定めることを目的とする。
（科目の履修）
第２条　学生は、学則第３１条第２項の履修科目届により、履修しようとする科目を登録しなければならない。
２　登録した科目の変更又は追加は認めない。
３　学科・年次・クラスが指定された科目については、その指定に従い履修するものとする。ただし、科目担当者が特に認めた場合はこの限りでない。
４　同一科目を同一年度に重複して履修することはできない。ただし、教育課程表及び授業時間割表において指示する特定の科目についてはこの限りでない。
５　すでに単位を修得した科目を履修することはできない。
６　履修に関するその他の事項については、教育課程表、講義要綱及び時間割表に定める方法によるものとする。
（定期試験）
第３条　定期試験は、学期末に行う。
２　定期試験を受験することができる者は、履修科目届けを提出したものに限る。
３　受験できる科目は、登録した科目とする。
４　授業料その他の納付金の未納者は、受験することができない。
（追試験）
第４条　追試験は、定期試験を実施した科目（レポートにより実施した科目を除く。）を、病気その他やむを得ない理由により受験できなかった者に対し、本学が指定する日にこれを行うことができる。
２　追試験を希望する者は、医師の診断書等理由を証明するに足る書類を添え、原則として当該科目の試験日を含む３日以内（ただし、日曜日、祝日は除く。）にその申請をし、教務委員会の許可を得なければならない。
３　追試験を許可された者は、所定の期日までに追試験料を納付しなければならない。
（再試験）
第５条　卒業年次の学生及び進級年次の学生が、履修登録した科目のうち不合格になった科目に対し、再試験を実施することがある。
２　再試験についての必要な事項は、別に定める。
３　再試験を許可された者は、所定の期日までに再試験料を納付しなければならない。
（試験の実施）
第６条　第３条、第４条及び第５条の試験に関する事項は別に定める。
（臨時試験）
第７条　臨時試験は、各科目担当者が随時これを行うことがある。
（不正行為）
第８条　第３条、第４条及び第５条に定める試験において、不正行為を行なった者は多摩大学学生懲戒規程に基づき処分する。
２　受験中に答案を持ち出した者については、その受験科目を不合格とする。
（成績照会）
第10条　成績評価について疑問がある場合は、成績の照会を申出ることができる。
２　成績照会は、次学期授業開始後２週間以内に事務局担当窓口に申出なければならない。

20.多摩大学早期卒業規程（抜粋）

（対象学生）
第２条　早期卒業の対象学生は、学則第３８条第２項に規定する者とする。ただし、再入学、編入学及び転入学した学生又は教職課程科目の履修者は、対象とならない。
（早期卒業要件）
第５条　早期卒業の要件は、３年又は３年半在学して所定の科目を履修し、多摩大学履修規程に規定する卒業要件単位数以上を修得しなければならない。ただし、休学した期間は在学期間に含まれない。
２　早期卒業要件について必要な事項は、別に細則で定める。
（申請の取下げ）
第６条　早期卒業希望者は、卒業の１ヶ月前までに早期卒業申請を取下げることができる。
（卒業の時期）
第７条　早期卒業の時期は、春季入学生にあっては３年次の３月以降、秋季入学生にあっては３年次の９月以降とする。

21.多摩大学経営情報学部早期卒業細則（抜粋）

（認定要件）

第２条　早期卒業の認定要件は、早期卒業規程第３条第１項に定めるもののほか、２年次終了時において、以下のすべての要件を満たしていなければならない。

（１）以下の単位を修得していること。

卒業に必要な必修・特別選択必修科目の単位の全てと卒業に必要な合計単位数の７５％以上。（小数点以下の端数は切り上げとする）

（２）GPAが３．２以上であること。

（３）ホームゼミナールに所属し、担当教員の推薦を得ていること。ホームゼミナールに所属しない場合は専任教員２名の推薦状を得ていること。

（４）早期卒業の意志及び理由が明確であること。

（学習指導体制）

第３条　学習指導体制として、ホームゼミナール担当教員、教務委員長及びホームゼミナール担当教員が指名した教員１名（合計３名）又はホームゼミナール未所属の場合は教務委員長及び学生を推薦した専任教員２名（計３名）を配置する。

（早期卒業要件）

第４条　早期卒業の要件は、早期卒業規程第５条第１項に定めるもののほか、以下のすべての要件を満たしていなければならない。

（１）GPAが３．２以上であること。

（２）本学大学院の入学許可を得ていること。

（ＧＰＡ）

第５条　成績評価の評定平均値（GPA）は、次の方法で算出する。

｛（４．０×A+とＰの修得単位数）+（３．０×Ａの修得単位数）+（２．０×Ｂの修得単位数）+（１．０×Ｃの修得単位数）｝÷総履修登録単位数（「F」の単位数を含む）

22.多摩大学成績評価規程

（目的）

第１条　この規程は、多摩大学学則第３４条に基づき、成績評価について必要な事項を定めることを目的とする。

（ＧＰＡ）

第２条　成績評価の評定平均値（GPA）は、次の方法で算出する。

｛（４．０×Ａ＋，Ｐの修得単位数）＋（３．０×Ａの修得単位数）＋（２．０×Ｂの修得単位数）＋（１．０×Ｃの修得単位数）｝÷ 総履修登録単位数（「F」の単位数を含む）

（卒業）

第３条　卒業判定にＧＰＡを使用する場合、多摩大学早期卒業規程による。

（面談の実施）

第４条　成績不振者の基準は、各学期の修得単位数が4単位未満の者とし、成績不振者に対する履修指導面談、就学の意思確認面談は、各年度に１回以上行い、３月３１日までに実施する。

（退学勧告）

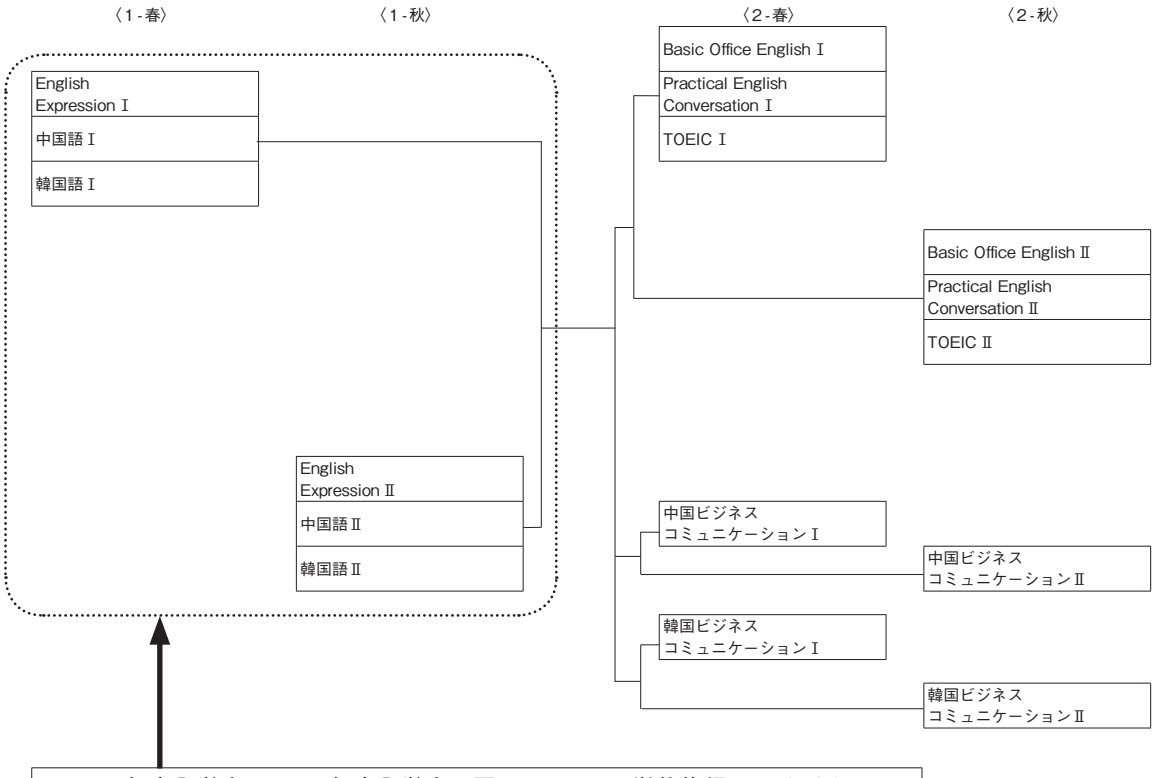
第５条　５年を超えて在籍し、ＧＰＡが１．０以下、かつ修得単位数が６０単位未満の学生については、就学の意思確認面談を実施し、必要に応じて退学勧告を行うものとする。

23.前提科目一覧

◆◇2014年度以降入学生用◇◆

2018年度　前提科目一覧

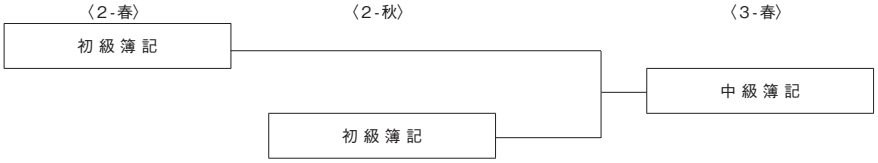
【語学系】<2014年度以降入学生適用>



※2012年度入学生～2013年度入学生は**同一言語にて**4単位修得してください。
2014～2018年度入学生は、同一言語にこだわらず、4単位修得してください。

※既に2013年度までに上記の2年次以降に配当されている科目を履修した学生の皆さん
2014年度より上記ルールに則り履修登録が必要となるものであり2013年度までに履修された科目が取り消されることはありません。
（例：中国語 Ⅰを履修していない学生が2013年度に中国ビジネスコミュニケーション Ⅰの単位を修得した場合、
2014年度以降もその単位が取り消されることはない。）

【会計・財務系】



※上記科目以外に関しては、前提科目として特に定めておりませんが、単位修得を前提として講義を進めていく場合があります。シラバスをよく参照してください。

24. カリキュラム表(科目一覧)・カリキュラムマップ

科目群		区　分	1　年				2　年			
			春学期	単位	秋学期	単位	春学期	単位	秋学期	単位
産業社会科目群	教養	必　修	スタディースキル入門	2	スタディースキル入門	2				
			多摩学Ⅰ	2	ビジネススキル入門	2				
			ビジネススキル入門	2						
		特別選択必修					特別講座Ⅰ	2	特別講座Ⅱ	2
		選択必修	ITコミュニケーション入門	2	ITコミュニケーション入門	2	アントレプレナーシップ論	2	グローバルヒストリーⅣ	2
			グローバルヒストリーⅠ	2	グローバルヒストリーⅡ	2	グローバルヒストリーⅢ	2	立志人物伝	2
			ビジネス数学基礎	2	多摩学Ⅱ	2	サブカルチャー論	2		
			ビジネス入門	2	文章伝達入門	2				
					立志論	2				
		選択必修（語学）	English Expression Ⅰ	2	English Expression Ⅱ	2	English Expression Ⅰ（再履修用）	2	English Expression Ⅰ（再履修用）	2
			韓国語Ⅰ	2	韓国語Ⅱ	2	English Expression Ⅱ（再履修用）	2	English Expression Ⅱ（再履修用）	2
			中国語Ⅰ	2	中国語Ⅱ	2	韓国ビジネスコミュニケーションⅠ	2	韓国ビジネスコミュニケーションⅡ	2
			日本語講座(初級)：留学生用	2	日本語講座(中級Ⅱ)：留学生用	2	中国ビジネスコミュニケーションⅠ	2	中国ビジネスコミュニケーションⅡ	2
			日本語講座(中級Ⅰ)：留学生用	2	日本語講座(上級)：留学生用	2	ドイツ語Ⅰ	2	ドイツ語Ⅰ	2
							ドイツ語Ⅱ	2	ドイツ語Ⅱ	2
							TOEIC Ⅰ	2	TOEIC Ⅱ	2
							Basic Office English Ⅰ	2	Basic Office English Ⅱ	2
							Practical English Conversation Ⅰ	2	Practical English Conversation Ⅱ	2
							フランス語Ⅰ	2	フランス語Ⅰ	2
							フランス語Ⅱ	2	フランス語Ⅱ	2
	ビジネス	選　択	AP数学	2	IT活用法Ⅰ	2	インターンシップⅠ	2	インターンシップⅠ	2
			産業社会特講	2	キャリア・デザイン入門	2	キャリア・デザインⅠ	2	キャリア・デザインⅡ	2
			スポーツⅠ	2	コンピュータ概論	2	業界研究Ⅰ	2	業界研究Ⅱ	2
			マーケティング入門	2	産業社会特講	2	スポーツⅡ	2	経営シミュレーションゲーム	2
			ミクロ経済学	2	数字力で語る	2	スポーツと健康	2	社会心理	2
			ライフ・デザイン	2	スポーツⅠ	2	ビジネスコミュニケーションⅠ	2	スポーツⅡ	2
					法学(憲法)	2			日経BP総研　中小企業経営研究所冠講座	2
					マーケティングマネジメント論	2			ビジネスコミュニケーションⅡ	2
					マクロ経済学	2			ビジネス法	2
					余暇マネジメント	2				
			Study Abroad Ⅰ～Ⅴ(2単位)、Study Abroad Ⅵ～Ⅷ(4単位) アクティブ・ラーニング実践 Ⅰ～Ⅴ(2単位)、アクティブ・ラーニング実践 Ⅵ～Ⅷ(4単位) 単位互換科目Ⅰ～Ⅴ(2単位)							
問題解決学科目群	経営情報学科専門科目	必　修					経営情報論Ⅰ	2	経営情報論Ⅱ	2
		選択必修	ITビジネス入門	2	ITビジネス入門	2	IT概論Ⅰ	2	IT概論Ⅱ	2
			グローバルビジネス入門	2	グローバルビジネス入門	2	IT活用法Ⅱ	2	Webデザイン Ⅱ	2
			地域ビジネス入門	2	地域ビジネス入門	2	Webデザイン Ⅰ	2	クリエイティブデザイン Ⅱ	2
							クリエイティブデザイン Ⅰ	2	クリエイティブデザイン Ⅲ	2
							情報倫理	2	財務会計	2
							初級簿記	4	情報法	2
							データサイエンス Ⅰ	2	初級簿記	4
							データベース Ⅰ	2	データサイエンス Ⅱ	2
							プログラミング入門 Ⅰ	2	データベース Ⅱ	2
							プログラミング入門 Ⅱ	2	プログラミング入門 Ⅲ	2
							ビジネス数学 Ⅰ	2	ビジネス数学 Ⅱ	2
							マーケティング・リサーチ	2	マーケティング・データ分析	2
		選　択					ｅビジネス	2	アメリカ経済論	2
							経営学概論	2	NPO・NGO論	2
							国際経営入門 Ⅰ	2	金融論	2
							国際経済学	2	グローバルマーケティング	2
							事業構想論 Ⅰ	2	国際経営入門 Ⅱ	2
							地域ビジネスプランニング	2	事業構想論 Ⅱ	2
							ビジネス戦略 Ⅰ	2	消費心理	2
									地域政策プランニング	2
									ビジネス戦略 Ⅱ	2
									ベンチャー企業論	2
									ヨーロッパ経済論	2
	演習科目	必　修	プレゼミⅠ	2	プレゼミⅡ	2	ホームゼミⅠ	2	ホームゼミⅠ	2
		選択必修							ホームゼミⅡ～Ⅷ	2
					インターゼミⅠ～Ⅶ	2	インターゼミⅠ～Ⅶ	2	インターゼミⅠ～Ⅶ	2
教職専門科目群	教職に関する科目				教職概論	2	教育制度論	2	教育方法	2
					教育原理	2	教育課程総論	1	生徒指導・進路指導論	2
							特別活動・総合的な学習の時間の指導法	2	特別支援教育概論	1

※ホームゼミは、各学期ごとに1科目のみ履修可能とし、Ⅰから順番にⅧまで履修するものとします。

3 年				4 年				区 分	科目群	
春学期	単位	秋学期	単位	春学期	単位	秋学期	単位			
								必 修	教養	産業社会科目群
								特別選択必修		
		立志特講Ⅰ(2月集中)	2					選択必修		
		立志特講Ⅱ(2月集中)	2							
		立志特講Ⅲ(2月集中)	2							
								選択必修(語学)		
インターンシップⅡ	2	インターンシップⅡ	2					選 択	ビジネス	
キャリア・デザインⅢ	2	キャリア・デザインⅣ	2							
教育心理学	2	教育相談	2							
業界研究Ⅲ	2	業界研究Ⅳ	2							
サービス産業論	2	認知心理	2							
ビジネスコミュニケーションⅢ	2	ビジネスコミュニケーションⅣ	2							
Study Abroad Ⅰ～Ⅴ(2単位)、Study Abroad Ⅵ～Ⅷ(4単位) アクティブ・ラーニング実践 Ⅰ～Ⅴ(2単位)、アクティブ・ラーニング実践 Ⅵ～Ⅷ(4単位) 単位互換科目Ⅰ～Ⅴ(2単位)										
								必 修	経営情報学科専門科目	問題解決学科目群
Webプログラミング	2	Webサービス開発	2					選択必修		
経営科学Ⅰ	2	経営科学Ⅱ	2							
経営と意思決定	2	経営とセキュリティ	2							
原価計算	2	情報工学概論	2							
コンピュータネットワーク活用	2	データサイエンスⅣ	2							
情報と職業	2	問題解決学特講Ⅰ(2月集中)	2							
情報ネットワーク	2	問題解決学特講Ⅱ(2月集中)	2							
中級簿記	4	問題解決学特講Ⅲ(2月集中)	2							
データサイエンスⅢ	2									
データ分析実践	2									
アジア経済論Ⅰ	2	アジア経済論Ⅱ	2					選 択		
経営組織Ⅰ	2	韓国経済論	2							
現代メディア論Ⅰ	2	経営組織Ⅱ	2							
国際公共政策	2	経済統計学	2							
事業デザイン論Ⅰ	2	現代メディア論Ⅱ	2							
多国籍企業Ⅰ	2	事業デザイン論Ⅱ	2							
地域観光論	2	多国籍企業Ⅱ	2							
地域産業論Ⅰ	2	地域産業論Ⅱ	2							
中国経済論	2	ビッグデータ活用法	2							
日本経営論	2	ブランドマネジメント	2							
日本経済論	2									
								必 修	演習科目	
ホームゼミⅡ～Ⅷ	2	ホームゼミⅡ～Ⅷ	2	ホームゼミⅡ～Ⅷ	2	ホームゼミⅡ～Ⅷ	2	選択必修		
インターゼミⅠ～Ⅶ	2	インターゼミⅠ～Ⅶ	2	インターゼミⅠ～Ⅶ	2	インターゼミⅠ～Ⅶ	2			
教育心理学	2	教育相談	2	教育実習	3	教職実践演習	2	教職に関する科目		教職専門科目群
情報科教育法Ⅰ	2	情報科教育法Ⅱ	2			教育実習	3			

科目群		区　分	1　年				2　年			
			春学期	単位	秋学期	単位	春学期	単位	秋学期	単位
産業社会科目群	教養	必　修	スタディースキル入門	2	スタディースキル入門	2				
			多摩学Ⅰ	2	ビジネススキル入門	2				
			ビジネススキル入門	2						
		特別選択必修					特別講座Ⅰ	2	特別講座Ⅱ	2
		選択必修	ITコミュニケーション入門	2	ITコミュニケーション入門	2	アントレプレナーシップ論	2	グローバルヒストリーⅣ	2
			グローバルヒストリーⅠ	2	グローバルヒストリーⅡ	2	グローバルヒストリーⅢ	2	立志人物伝	2
			ビジネス数学基礎	2	多摩学Ⅱ	2	サブカルチャー論	2		
			ビジネス入門Ⅰ	2	文章伝達入門	2				
					立志論	2				
		選択必修（語学）	English Expression Ⅰ	2	English Expression Ⅱ	2	English Expression Ⅰ（再履修用）	2	English Expression Ⅰ（再履修用）	2
			韓国語Ⅰ	2	韓国語Ⅱ	2	English Expression Ⅱ（再履修用）	2	English Expression Ⅱ（再履修用）	2
			中国語Ⅰ	2	中国語Ⅱ	2	韓国ビジネスコミュニケーションⅠ	2	韓国ビジネスコミュニケーションⅡ	2
			日本語講座(初級)：留学生用	2	日本語講座(中級Ⅱ)：留学生用	2	中国ビジネスコミュニケーションⅠ	2	中国ビジネスコミュニケーションⅡ	2
			日本語講座(中級Ⅰ)：留学生用	2	日本語講座(上級)：留学生用	2	ドイツ語Ⅰ	2	ドイツ語Ⅰ	2
							ドイツ語Ⅱ	2	ドイツ語Ⅱ	2
							TOEIC Ⅰ	2	TOEIC Ⅱ	2
							Basic Office English Ⅰ	2	Basic Office English Ⅱ	2
							Practical English Conversation Ⅰ	2	Practical English Conversation Ⅱ	2
							フランス語Ⅰ	2	フランス語Ⅰ	2
							フランス語Ⅱ	2	フランス語Ⅱ	2
	ビジネス	選　択	AP数学	2	IT活用法Ⅰ	2	インターンシップⅠ	2	インターンシップⅠ	2
			産業社会特講	2	キャリア・デザイン入門	2	キャリア・デザインⅠ	2	キャリア・デザインⅡ	2
			スポーツⅠ	2	コンピュータ概論	2	業界研究Ⅰ	2	業界研究Ⅱ	2
			マーケティング入門	2	産業社会特講	2	スポーツⅡ	2	経営シミュレーションゲーム	2
			ミクロ経済学	2	数字力で語る	2	スポーツと健康	2	社会心理	2
			ライフデザイン	2	スポーツⅠ	2	ビジネスコミュニケーションⅠ	2	スポーツⅡ	2
					法学(憲法)	2			日経BP総研　中小企業経営研究所冠講座	2
					マーケティングマネジメント論	2			ビジネスコミュニケーションⅡ	2
					マクロ経済学	2			ビジネス法	2
					余暇マネジメント	2				
			Study Abroad Ⅰ～Ⅴ(2単位)、Study Abroad Ⅵ～Ⅷ(4単位) アクティブ・ラーニング実践Ⅰ～Ⅴ(2単位)、アクティブ・ラーニング実践 Ⅵ～Ⅷ(4単位) 単位互換科目Ⅰ～Ⅴ(2単位)							
問題解決学科目群	事業構想学科専門科目	必　修					事業構想論Ⅰ	2	事業構想論Ⅱ	2
		選択必修	ITビジネス入門	2	ITビジネス入門	2	ｅビジネス	2	アメリカ経済論	2
			グローバルビジネス入門	2	グローバルビジネス入門	2	経営学概論	2	NPO・NGO論	2
			地域ビジネス入門	2	地域ビジネス入門	2	国際経営入門Ⅰ	2	金融論	2
							国際経済学	2	グローバルマーケティング	2
							初級簿記	4	国際経営入門Ⅱ	2
							地域ビジネスプランニング	2	財務会計	2
							ビジネス戦略Ⅰ	2	消費心理	2
									初級簿記	4
									地域政策プランニング	2
									ビジネス戦略Ⅱ	2
									ベンチャー企業論	2
									ヨーロッパ経済論	2
		選　択					IT概論Ⅰ	2	IT概論Ⅱ	2
							IT活用法Ⅱ	2	Webデザイン Ⅱ	2
							Webデザイン Ⅰ	2	クリエイティブデザインⅡ	2
							経営情報論Ⅰ	2	クリエイティブデザインⅢ	2
							クリエイティブデザインⅠ	2	経営情報論Ⅱ	2
							情報倫理	2	情報法	2
							データサイエンスⅠ	2	データサイエンスⅡ	2
							データベースⅠ	2	データベースⅡ	2
							プログラミング入門Ⅰ	2	プログラミング入門Ⅲ	2
							プログラミング入門Ⅱ	2	ビジネス数学Ⅱ	2
							ビジネス数学Ⅰ	2	マーケティング・データ分析	2
							マーケティング・リサーチ	2		
	演習科目	必　修	プレゼミⅠ	2	プレゼミⅡ	2	ホームゼミⅠ	2	ホームゼミⅠ	2
		選択必修							ホームゼミⅡ～Ⅷ	2
					インターゼミⅠ～Ⅶ	2	インターゼミⅠ～Ⅶ	2	インターゼミⅠ～Ⅶ	2
教職専門科目群	教職に関する科目				教職概論	2	教育制度論	2	教育方法	2
					教育原理	2	教育課程総論	1	生徒指導・進路指導論	2
							特別活動・総合的な学習の時間の指導法	2	特別支援教育概論	1

※ホームゼミは、各学期ごとに1科目のみ履修可能とし、Ⅰから順番にⅦまで履修するものとします。

3 年				4 年				区 分	科目群	
春学期	単位	秋学期	単位	春学期	単位	秋学期	単位			
								必 修	教養	産業社会科目群
								特別選択必修		
		立志特講Ⅰ(2月集中)	2					選択必修		
		立志特講Ⅱ(2月集中)	2							
		立志特講Ⅲ(2月集中)	2							
								選択必修(語学)		
インターンシップⅡ	2	インターンシップⅡ	2					選 択	ビジネス	
キャリア・デザインⅢ	2	キャリア・デザインⅣ	2							
教育心理学	2	教育相談	2							
業界研究Ⅲ	2	業界研究Ⅳ	2							
サービス産業論	2	認知心理	2							
ビジネスコミュニケーションⅢ	2	ビジネスコミュニケーションⅣ	2							
Study Abroad Ⅰ～Ⅴ(2単位)、Study Abroad Ⅵ～Ⅷ(4単位) アクティブ・ラーニング実践Ⅰ～Ⅴ(2単位)、アクティブ・ラーニング実践 Ⅵ～Ⅷ(4単位) 単位互換科目Ⅰ～Ⅴ(2単位)										
								必 修	事業構想学科専門科目	問題解決学科目群
アジア経済論Ⅰ	2	アジア経済論Ⅱ	2					選択必修		
経営組織Ⅰ	2	韓国経済論	2							
原価計算	2	経営組織Ⅱ	2							
現代メディア論Ⅰ	2	経済統計学	2							
国際公共政策	2	現代メディア論Ⅱ	2							
事業デザイン論Ⅰ	2	事業デザイン論Ⅱ	2							
多国籍企業Ⅰ	2	多国籍企業Ⅱ	2							
地域観光論	2	地域産業論Ⅱ	2							
地域産業論Ⅰ	2	ビッグデータ活用法	2							
中級簿記	4	ブランドマネジメント	2							
中国経済論	2	問題解決学特講Ⅰ(2月集中)	2							
日本経営論	2	問題解決学特講Ⅱ(2月集中)	2							
日本経済論	2	問題解決学特講Ⅲ(2月集中)	2							
Webプログラミング	2	Webサービス開発	2					選 択		
経営科学Ⅰ	2	経営科学Ⅱ	2							
経営と意思決定	2	経営とセキュリティ	2							
コンピュータネットワーク活用	2	情報工学概論	2							
情報と職業	2	データサイエンスⅣ	2							
情報ネットワーク	2									
データサイエンスⅢ	2									
データ分析実践	2									
								必 修	演習科目	
ホームゼミⅡ～Ⅷ	2	ホームゼミⅡ～Ⅷ	2	ホームゼミⅡ～Ⅷ	2	ホームゼミⅡ～Ⅷ	2	選択必修		
インターゼミⅠ～Ⅶ	2	インターゼミⅠ～Ⅶ	2	インターゼミⅠ～Ⅶ	2	インターゼミⅠ～Ⅶ	2			
教育心理学	2	教育相談	2	教育実習	3	教職実践演習	2	教職に関する科目		教職専門科目群
情報科教育法Ⅰ	2	情報科教育法Ⅱ	2			教育実習	3			

経営情報学部ディプロマ・ポリシー　学修成果目標

DP1	知識と理解【グローカル社会に対する理解】 基礎的な学力を養い、グローバルとローカルの関係性を意識しながら産業社会で発生する様々な問題に対処していける専門的能力を体系的に修得する。
DP2	思考と判断【考え抜く力】 現状を分析して課題を明らかにできる課題発見力、課題解決に向けたプロセスを明らかにして準備できる計画力、課題に対して新たな価値や解決方法を生み出せる創造力を
DP3	関心と意欲【社会の発展に貢献する力】 物事に積極的に取り組む主体性や目的に向かって周囲の人を動かしていける巻き込み力、失敗を恐れずに粘り強く行動していける実行力を身につけ、国際的ビジネスの場でなる。

3つの人材像

グローバルビジネス
　アジアダイナミズムに真正面から向き合える、プロジェクトマネジメント人材

地域ビジネス
　地域の抱える課題を創造的に解決できる、地域イノベーション人材

ビジネスICT
　顧客視点とマーケティング感覚を身につけた、ビジネスICT人材

DP4	表現と技能【役割 自分の意思をわ る状況把握力や
DP5	高い志【環境対応 社会における多 する。

専門領域　　**事業構想学科専門**　　**学科共通**　　**経営情報学科専門**

	グローバル	ローカル	経営情報	情報デザイン	データサイエンス
4年次					
3年次	・日本経済論 ・経済統計学 ・アジア経済論Ⅰ・Ⅱ ・中国経済論 ・韓国経済論 ・国際公共政策 ・多国籍企業Ⅰ・Ⅱ ・現代メディア論Ⅰ・Ⅱ	・地域観光論 ・地域産業論Ⅰ・Ⅱ ・事業デザイン論Ⅰ ・事業デザイン論Ⅱ	・経営組織Ⅰ・Ⅱ ・ブランドマネジメント ・経営と意思決定 ・原価計算 ・中級簿記 ・サービス産業論 ・日本経営論	・情報ネットワーク ・情報工学概論 ・経営とセキュリティ ・コンピュータネットワーク活用 ・Webサービス開発 ・Webプログラミング ・情報と職業 ・経営科学Ⅱ	・ビッグデータ活用法 ・データサイエンスⅢ・Ⅳ ・データ分析実践 ・経営科学Ⅰ
2年次	・国際経済学 ・金融論 ・グローバルヒストリーⅢ ・グローバルヒストリーⅣ ・アメリカ経済論 ・ヨーロッパ経済論 ・サブカルチャー論	・地域政策プランニング ・地域ビジネスプランニング ・NPO・NGO論	・ビジネス戦略Ⅰ・Ⅱ ・国際経営入門Ⅰ・Ⅱ ・グローバルマーケティング ・eビジネス ・マーケティングリサーチ ・初級簿記 ・財務会計 ・消費心理	・IT概論Ⅰ・Ⅱ ・WebデザインⅠ・Ⅱ ・クリエイティブデザインⅠ・Ⅱ・Ⅲ ・データベースⅠ・Ⅱ ・プログラミング入門Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ ・情報倫理 ・情報法	・ビジネス数学Ⅰ・Ⅱ ・データサイエンスⅠ・Ⅱ ・マーケティングデータ分析
	専門コア科目	・事業構想論Ⅰ・Ⅱ	・経営情報論Ⅰ・Ⅱ	・特別講座Ⅰ・Ⅱ	・ホームゼミⅠ・Ⅱ・Ⅲ
	専門基礎科目	・ビジネス法 ・ミクロ経済学 ・マクロ経済学	・マーケティング入門 ・経営学概論 ・IT活用法Ⅰ・Ⅱ	・グローバルビジネス入門 ・地域ビジネス入門 ・多摩学Ⅱ	・ITビジネス入門 ・経営シミュレーションゲーム ・日経BP総研 中小企業経営研
1年次	・グローバルヒストリーⅠ ・グローバルヒストリーⅡ		・マーケティングマネジメント論	・コンピュータ概論	・数字力で語る
	特別選択科目		・アクティブ・ラーニング実践Ⅰ～Ⅷ		・Study Abroad Ⅰ～Ⅷ
	教養基礎科目	・多摩学Ⅰ ・ビジネススキル入門	・ビジネス数学基礎(AP数学含) ・スタディースキル入門	・ビジネス入門 ・プレゼミⅠ・Ⅱ	・立志論 ・法学(憲法)

学士力とディプロマ・ポリシーの関連について

DP1：学士力「知識・理解」
専攻する特定の学問分野における基本的な知識を体系的に理解
DP2：学士力「統合的な学習経験と創造的思考力」
自らが立てた新たな課題を解決する能力
DP3：学士力「態度・志向性」
自己管理力，チームワーク・リーダーシップ，倫理観，市民としての社会的責任，生涯学習力
DP4：学士力「汎用的技能」
知的活動でも職業生活や社会生活でも必要な技能
DP5：学士力「態度・志向性」

修得する。

活躍するとともに、わが国の産業社会の健全たる発展に貢献できるように

分担により組織目標の達成に貢献する力】
かりやすく伝えることができる発信力や、聞き上手になって積極的に相手の意見を受け止められるようになる傾聴力、組織の中で自分がどのような役割を果たすべきなのかが理解でき協調性を身につけることで、コミュニケーション能力を高め、所属する組織や社会の活動に貢献できるようになる。

能力と先進性】
様な価値観や文化的な背景に対する理解や配慮ができる多様性や、社会のルールや約束を守ることができる規律性を身につけ、社会の発展に積極的に関与していくという高い志を確立

学科共通

共通領域

教職に関する科目

ゼミ	コミュニケーション(語学・メディア・方法)	キャリア・志	教職	
・ホームゼミⅤ・Ⅵ ・インターゼミⅥ・Ⅶ			・教育実習 ・教職実践演習	4年次
・ホームゼミⅣ ・インターゼミⅣ・Ⅴ	・ビジネスコミュニケーションⅢ ・ビジネスコミュニケーションⅣ	・キャリア・デザインⅢ・Ⅳ ・インターンシップⅡ ・業界研究Ⅲ ・業界研究Ⅳ	・教育心理学 ・情報科教育法Ⅰ・Ⅱ ・教育相談	3年次
・インターゼミⅡ・Ⅲ	・韓国ビジネスコミュニケーションⅠ・Ⅱ ・中国ビジネスコミュニケーションⅠ・Ⅱ ・ドイツ語Ⅰ・Ⅱ ・フランス語Ⅰ・Ⅱ ・TOEICⅠ・Ⅱ ・Practical English Conversation Ⅰ・Ⅱ ・Basic Office EnglishⅠ・Ⅱ ・ビジネスコミュニケーションⅠ ・ビジネスコミュニケーションⅡ	・アントレプレナーシップ論 ・立志人物伝 ・ベンチャー企業論 ・キャリア・デザインⅠ・Ⅱ ・インターンシップⅠ ・スポーツと健康 ・業界研究Ⅰ ・業界研究Ⅱ	・教育制度論 ・特別活動・総合的な学習の時間の指導法 ・教育課程総論 ・教育方法 ・生徒指導・進路指導論 ・特別支援教育概論	2年次
究所冠講座 ・インターゼミⅠ	・文章伝達入門	・キャリア・デザイン入門 ・ライフデザイン ・余暇マネジメント	・教職概論 ・教育原理	1年次
・産業社会特講(13科目)				
・English Expression Ⅰ・Ⅱ ・スポーツ	・韓国語Ⅰ・Ⅱ ・中国語Ⅰ・Ⅱ	・ITコミュニケーション入門		

25. シラバス

2018 年度シラバス 目次

≪一般科目≫

1 年生

English Expression I …… 1
English Expression II …… 2
IT コミュニケーション入門 …… 3
IT 活用法 I …… 4
IT ビジネス入門 …… 5
韓国語 I …… 6
韓国語 II …… 7
キャリア・デザイン入門…… 8
グローバルビジネス入門…… 9
グローバルヒストリー II …… 10
グローバルヒストリー I-X …… 11
グローバルヒストリー I-Y …… 12
コンピュータ概論…… 13
産業社会特講（AWS を通じて学ぶ REST API と SPA 開発） 14
産業社会特講（環境とビジネスプランニング） … 15
産業社会特講（これからの産業社会に必要な考力育成 II）… 16
産業社会特講（社会の分裂をどう修復するか）… 17
産業社会特講（ｽﾎﾟｰﾂで学ぶﾃﾞｰﾀｱﾅﾘﾃｨｸｽ入門）… 18
産業社会特講（地域の歴史から学ぶ人生のヒント）… 19
産業社会特講（ビジョン・マネジメント論 2018 春）… 20
産業社会特講（メディア新時代の情報表現 I）… 21
産業社会特講（メディア新時代の情報表現 II）… 22
産業社会特講（メディアの過去・現在・未来）… 23
数字力で語る…… 24
スタディースキル入門…… 25
スポーツ I- 体づくりとスポーツ …… 26
スポーツ I- シェイプアップフィットネス …… 27
スポーツ I- テニス …… 28
スポーツ I- バドミントン …… 29
スポーツ I- フットサル …… 30
多摩学 I …… 31
多摩学 II ※ 2018 年度入学生用 …… 32
地域ビジネス入門…… 33
中国語 I-X …… 34
中国語 I-Y …… 35
中国語 II-X …… 36
中国語 II-Y …… 37
日本語講座上級…… 38
日本語講座初級…… 39
日本語講座中級 I …… 40
日本語講座中級 II …… 41
ビジネス数学基礎…… 42
ビジネススキル入門…… 43
ビジネス入門…… 44
文章伝達入門…… 45
法学（憲法） …… 46
マーケティング入門…… 47
マーケティングマネジメント論…… 48
マクロ経済学…… 49
ミクロ経済学…… 50
余暇マネジメント…… 51
ライフ・デザイン…… 52

2 年生

Basic Office English I …… 53
Basic Office English II …… 54
English Expression II 再履修用 …… 55
English Expression I 再履修用 …… 56
ｅビジネス…… 57
IT 概論 I …… 58
IT 概論 II…… 59
IT 活用法 II…… 60
NPO・NGO 論 …… 61
Practical English Conversation I …… 62
Practical English Conversation II…… 63
TOEIC I …… 64
TOEIC II…… 65
Web デザイン I…… 66
Web デザイン II …… 67
アメリカ経済論…… 68
アントレプレナーシップ論…… 69
韓国ビジネスコミュニケーション I …… 70
韓国ビジネスコミュニケーション II …… 71
キャリア・デザイン I …… 72
業界研究 I …… 73
業界研究 II …… 74
金融論…… 75
クリエイティブデザイン I …… 76
クリエイティブデザイン II …… 77
クリエイティブデザイン III …… 78
グローバルヒストリー III …… 79

グローバルヒストリー IV …… 80
グローバルマーケティング…… 81
経営学概論…… 82
経営シミュレーションゲーム…… 83
経営情報論 I …… 84
経営情報論 II …… 85
国際経営入門 I …… 86
国際経営入門 II …… 87
国際経済学…… 88
財務会計…… 89
サブカルチャー論…… 90
事業構想論 I …… 91
事業構想論 II …… 92
社会心理…… 93
消費心理…… 94
情報法…… 95
情報倫理…… 96
初級簿記…… 97
スポーツ II- シェイプアップフィットネス …… 98
スポーツ II- 世代間交流健康トレーニング …… 99
スポーツ II- テニス …… 100
スポーツ II- フットサル …… 101
スポーツと健康…… 102
多摩学 II ※ 2017 年度以前入学生用 …… 103
地域政策プランニング…… 104
地域ビジネスプランニング…… 105
中国ビジネスコミュニケーション I …… 106
中国ビジネスコミュニケーション II …… 107
データサイエンス I-A …… 108
データサイエンス I-B …… 109
データサイエンス II …… 110
データベース I …… 111
データベース II …… 112
特別講座 I・II …… 113
日経 BP 総研　中小企業経営研究所　冠講座… 114
ビジネスコミュニケーション I …… 115
ビジネスコミュニケーション II …… 116
ビジネス数学 I …… 117
ビジネス数学 II …… 118
ビジネス戦略 I …… 119
ビジネス戦略 II …… 120
ビジネス法…… 121
プログラミング入門 I …… 122
プログラミング入門 II …… 123
プログラミング入門 III …… 124
ベンチャー企業論…… 125
マーケティング・データ分析…… 126
マーケティングリサーチ…… 127
ヨーロッパ経済論…… 128
立志人物伝…… 129

3 年生

Web サービス開発 …… 130
Web プログラミング …… 131
アジア経済論 I …… 132
アジア経済論 II …… 133
韓国経済論…… 134
業界研究 III …… 135
業界研究 IV …… 136
経営科学 I …… 137
経営科学 II …… 138
経営組織 I …… 139
経営組織 II …… 140
経営と意思決定…… 141
経営とセキュリティ…… 142
経済統計学…… 143
原価計算…… 144
現代メディア論 I …… 145
現代メディア論 II …… 146
国際公共政策…… 147
コンピュータネットワーク活用…… 148
サービス産業論…… 149
事業デザイン論 I …… 150
事業デザイン論 II …… 151
情報工学概論…… 152
情報と職業…… 153
情報ネットワーク…… 154
多国籍企業 I …… 155
多国籍企業 II …… 156
地域観光論…… 157
地域産業論 I …… 158
地域産業論 II …… 159
中級簿記…… 160
中国経済論…… 161

データサイエンスIII …… 162
データサイエンスIV …… 163
データ分析実践…… 164
日本経済論…… 165
日本経営論…… 166
認知心理…… 167
ビジネスコミュニケーションIII …… 168
ビジネスコミュニケーションIV …… 169
ビッグデータ活用法…… 170
ブランドマネジメント…… 171
問題解決学特講I～III …… 172
立志特講I～III …… 173

≪演習科目≫

プレゼミI …… 174
プレゼミII …… 175
ホームゼミ 飯田　健雄 …… 176
ホームゼミ 石川　晴子 …… 177
ホームゼミ 出原　至道 …… 178
ホームゼミ 今泉　忠 …… 179
ホームゼミ 梅澤　佳子 …… 180
ホームゼミ 大森　拓哉 …… 181
ホームゼミ 奥山　雅之 …… 182
ホームゼミ 栢原　伸也 …… 183
ホームゼミ 金　美徳 …… 184
ホームゼミ 清松　敏雄 …… 185
ホームゼミ 久保田　貴文 …… 186
ホームゼミ 小西　英行 …… 187
ホームゼミ 小林　英夫 …… 188
ホームゼミ 齋藤　S.裕美 …… 189
ホームゼミ 彩藤　ひろみ …… 190
ホームゼミ 酒井　麻衣子 …… 191
ホームゼミ 佐藤　洋行 …… 192
ホームゼミ 椎木　哲太郎 …… 193
ホームゼミ 志賀　敏宏 …… 194
ホームゼミ 下井　直毅 …… 195
ホームゼミ 杉田　文章 …… 196
ホームゼミ 丹下　英明 …… 197
ホームゼミ 趙　佑鎭 …… 198
ホームゼミ 中澤　弥 …… 199
ホームゼミ 中庭　光彦 …… 200
ホームゼミ 中村　その子 …… 201
ホームゼミ 中村　有一 …… 202
ホームゼミ 野坂　美穂 …… 203
ホームゼミ バートル …… 204
ホームゼミ 浜田　正幸 …… 205
ホームゼミ 増田　浩通 …… 206
ホームゼミ 松本　祐一 …… 207
ホームゼミ 水盛　涼一 …… 208
ホームゼミ 村山　貞幸 …… 209
ホームゼミ 良峯　徳和 …… 210
ホームゼミ（志）…… 211
インターゼミ …… 212

≪認定科目≫

アクティブ・ラーニング実践I～VIII …… 213
AP 数学 …… 214
スタディーアブロードI～VIII …… 215
インターンシップI・II …… 216
キャリア・デザインII …… 217
キャリア・デザインIII …… 218
キャリア・デザインIV …… 219

≪教職に関する科目≫

教職概論…… 220
教育史…… 221
教育原理…… 222
教育課程総論…… 223
教育制度論…… 224
教育方法…… 225
特別支援教育概論…… 226
特別活動…… 227
生徒指導・進路指導論…… 228
特別活動・総合的な学習の時間の指導法…… 229
教育心理学…… 230
教育相談…… 231
情報科教育法I …… 232
情報科教育法II …… 233
教育原理…… 234
教育実習…… 235
教職実践演習…… 236

科目名	English ExpressionI（English Expression I）
サブタイトル	世界でそして地域で活躍するために必要な英語表現力を身に付ける
担当教員	中村（そ）、石川、垂井、成島、吉田、潮田、奥村
対象学年	1年生（2018年度入学生用）
区分	春学期

■講義目的
世界でそして地域で活躍するために必要な英語表現力を身に付け、志の実現に向かって社会に自分のアイデアや考え、意見を英語で積極的に発信し、いろいろな形のコミュニケーションを取れるようにする。

■講義分類
ビジネス環境理解、社会人力育成、グローバルビジネス

■到達目標
以下講義概要に述べられる学習項目について、英語でのコミュニケーションが取れるようにする。特に、留学や、国内外での研修、見学、社会的活動に最低限必要な英語表現を習得し、自分の考えやアイデアをいろいろな方法で社会に発信し、また同時に発信された他者の考えを正しく理解できるようになること。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項
DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細
地域でも、また国内、海外どこであっても自分の志を実現するためにそして、産業社会で発生する様々な問題を解決し、社会をよりよいものにするために、円滑に英語コミュニケーションを行えるようになること。

■授業形態
グループディスカッション、グループワーク、プレゼンテーション

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容
下記の各週講義内容に関して配布される教材を１．５時間程度予習､復習し､そこに提示されている英語表現を覚えること。

■授業の概要
第１講　挨拶、アイスブレーキング、友人作り、スモールトークなど
第２講　挨拶、アイスブレーキング、友人作り、スモールトークなど
第３講　ファッションや健康、スポーツなど興味があることや趣味などについて
第４講　ファッションや健康、スポーツなど興味があることや趣味などについて
第５講　ここまでの復習と性格や外見についての描写
第６講　性格や外見についての描写
第７講　性格や外見についての描写
第８講　天候、天気に関する表現、意見のやりとり、やってみたいことや訪れてみたい場所
第９講　天候、天気に関する表現、意見のやりとり、やってみたいことや訪れてみたい場所
第 10 講　天候、天気に関する表現、意見のやりとり、やってみたいことや訪れてみたい場所
第 11 講　自分の家や家庭での表現、依頼に関する表現
第 12 講　自分の家や家庭での表現、依頼に関する表現
第 13 講　自分の家や家庭での表現、依頼に関する表現
第 14 講　期末スピーキングテストと最終プレゼンテーション
第 15 講　期末ライティングテスト

■フィードバックの要領
授業内小テスト、課題、レポート類については点数と必要な場合はコメントを付けて返却

■評価基準
評価 A+（90 点以上）：下記の配分で得点を付け、９０点以上の場合
評価 A（89 ～ 80 点）：下記の配分で得点を付け、８０点から８９点の場合
評価 B（79 ～ 70 点）：下記の配分で得点を付け、７０点から７９点の場合
評価 C（69 ～ 60 点）：下記の配分で得点を付け、６０点から６９点の場合
評価 F（59 点以下）　：下記の配分で得点を付け、５９点以下の場合

■評価方法
出席 20%、授業内小テスト 20%、宿題 20%、中間テストおよび期末テスト 40%

■留意点
相談や質問などは sonoko-n@tama.ac.jp にメールを送ってくれればいつでも対応します。必要に応じてオフィスアワーなどに会って直接お話しすることも可能です。
このクラスはプレースメントテストの結果に基づくクラス指定があり、１クラスあたりの人数は２０人以下となります。

科目名	English Expression II（English Expression II）
サブタイトル	世界でそして地域で活躍するために必要な英語表現力を身に付ける
担当教員	中村（そ）、石川、垂井、成島、吉田、潮田、奥村
対象学年	1年生（2018年度入学生用）
区分	秋学期

■講義目的
世界でそして地域で活躍するために必要な英語表現力を身に付け、志の実現に向かって社会に自分のアイデアや考え、意見を英語で積極的に発信し、いろいろな形のコミュニケーションを取れるようにする。

■講義分類
ビジネス環境理解、社会人力育成、グローバルビジネス

■到達目標
以下講義概要に述べられる学習項目について、英語でのコミュニケーションが取れるようにする。特に、留学や、国内外での研修、見学、社会的活動に最低限必要な英語表現を習得し、自分の考えやアイデアをいろいろな方法で社会に発信し、また同時に発信された他者の考えを正しく理解できるようになること。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項
DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細
地域でも、また国内、海外どこであっても自分の志を実現するためにそして、産業社会で発生する様々な問題を解決し、社会をよりよいものにするために、円滑に英語コミュニケーションを行えるようになること。

■授業形態
グループディスカッション、グループワーク、プレゼンテーション

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容
下記の各週講義内容に関して配布される教材を１．５時間程度予習､復習し､そこに提示されている英語表現を覚えること。

■授業の概要
第１講　教員と学生のアイスブレーキング、夏休みのできごとについて語り合う
第２講　テレビ番組と感想、賛成不賛成、将来計画
第３講　テレビ番組と感想、賛成不賛成、将来計画
第４講　テレビ番組と感想、賛成不賛成、将来計画
第５講　買い物に関連する表現
第６講　買い物に関連する表現
第７講　買い物に関連する表現
第８講　自分の住んでいる町の名所、イベント、長所短所などについて
第９講　自分の住んでいる町の名所、イベント、長所短所などについて
第10講　自分の住んでいる町の名所、イベント、長所短所などについて
第11講　著名人、尊敬する人物の生まれや仕事、人生に関係する表現
第12講　著名人、尊敬する人物の生まれや仕事、人生に関係する表現
第13講　著名人、尊敬する人物の生まれや仕事、人生に関係する表現
第14講　期末スピーキングテストと最終プレゼンテーション
第15講　期末ライティングテスト

■フィードバックの要領
授業内小テスト、課題、レポート類については点数とコメントを付けて返却

■評価基準
評価 A+（90 点以上）：下記の配分で得点を付け、９０点以上の場合
評価 A（89 ～ 80 点）：下記の配分で得点を付け、８０点から８９点の場合
評価 B（79 ～ 70 点）：下記の配分で得点を付け、７０点から７９点の場合
評価 C（69 ～ 60 点）：下記の配分で得点を付け、６０点から６９点の場合
評価 F（59 点以下）　：下記の配分で得点を付け、５９点以下の場合

■評価方法
出席 20%、授業内小テスト 20%、宿題 20%、中間テストおよび期末テスト 40%

■留意点
相談や質問などは sonoko-n@tama.ac.jp にメールを送ってくれればいつでも対応します。必要に応じてオフィスアワーなどに会って直接お話しすることも可能です。
このクラスはプレースメントテストの結果に基づくクラス指定があり、１クラスあたりの人数は２０人以下となります。

科目名	IT コミュニケーション入門（Introduction to IT Communication）※ 2018 年度入学生用
サブタイトル	「MOS Excel 2013 Specialist」対策講座
担当教員	増田、良峯
対象学年	1 年生（2018 年度入学生用）
区分	春・秋学期

■講義目的
経営情報学部において、必須かつ基礎的なスキルである「マイクロソフトオフィスー特にエクセル（表計算）」の使い方を修得する。本学が重視するアクティブ・ラーニングにおけるプレゼンテーション力に直結するスキルの向上を目指す。

■講義分類
ビジネス ICT

■到達目標
MOS（マイクロソフトオフィススペシャリスト）資格の Excel のスペシャリストレベル（一般レベル）の合格。特に意欲ある者は、Excel のエキスパートレベル（上級レベル）の合格を目指して欲しい。また、これらのスキルを足がかりに、自らワード（Word）やパワーポイント（PowerPoint）の資格合格を目指すことも可能である。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項
DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細
表計算ソフトの操作に関する基礎的な学力を養い，産業社会で要求されるさまざまな課題にデータサイエンスの観点から対処する能力を習得する。

■授業形態
講義、演習

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容
教科書の問題集を見ながら Excel を操作すること。予習・復習の時間はあわせて 1.5 時間以上。

■授業の概要
第 1 講　イントロダクション。Excel の用語・基本操作。
第 2 講　ワークシートやブックの作成と管理①
第 3 講　ワークシートやブックの作成と管理②
第 4 講　ワークシートやブックの作成と管理③　セルやセル範囲の作成①
第 5 講　セルやセル範囲の作成②
第 6 講　セルやセル範囲の作成③　テーブル①
第 7 講　テーブル②　数式や関数の適用①
第 8 講　数式や関数の適用②
第 9 講　数式や関数の適用③
第 10 講　グラフやオブジェクトの作成①
第 11 講　グラフやオブジェクトの作成②
第 12 講　グラフやオブジェクトの作成③
第 13 講　模擬試験（期末試験①）
第 14 講　模擬試験（期末試験②）
第 15 講　模擬試験（期末試験③）

■フィードバックの要領
提出された課題に対して、コメントを記入することでフィードバックを行う。

■評価基準
評価 A+（90 点以上）：下記、配分により 90 点以上
評価 A（89 ～ 80 点）：下記、配分により 80 点以上 89 点以下
評価 B（79 ～ 70 点）：下記、配分により 70 点以上 79 点以下
評価 C（69 ～ 60 点）：下記、配分により 60 点以上 69 点以下
評価 F（59 点以下）　：下記、配分により 59 点以下

■評価方法
出席 25%、課題 25%、期末等に授業で行う模擬試験の結果 50%。ただし、出席は全体の 2/3 以上、課題も全体の 2/3 以上を最低条件とする。模擬試験は、合格相当 :30 ～ 50 点。合格圏内 :20 ～ 29 点。合格圏外 :0 ～ 19 点。

■留意点
①本科目は、2018 年度入学者専用の科目である。
②クラス指定を実施するので、掲示によるクラス分け表を確認すること。

科目名	IT 活用法 I（Utilizing Method of IT I）
サブタイトル	ゲームと商品開発を通してデータに触れる
担当教員	彩藤、出原
対象学年	1 年生以上
区分	秋学期

■講義目的
本講義の目的は、ゲームや商品開発の実験を通して、実社会で活躍するために必要な情報の捉え方、考え方を身につけることにある。

■講義分類
ビジネス ICT、ビジネス創造、社会人力育成

■到達目標
チームでさまざまな意見を出し合う中で、主体的に意思決定に関与できる。表面的に観察される現象に対して、戦略的な行動をとることができる。データに基づいた議論ができ、そのために表計算ソフトウェアを活用できる。自分の意見を分かりやすく伝えることができる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項
DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細
ゲームや商品開発の実験を通して、実社会で活躍するために必要な情報の捉え方、考え方を身につける。

■授業形態
講義、グループディスカッション、プレゼンテーション

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容
各回に示す内容について、チームごとに９０分の議論を行い、記録する。（一部個人課題）

■授業の概要
第１講　オリエンテーション
第２講　ゲームルールの解説
第３講　ゲームの実験
第４講　ゲームのデータ分析
第５講　チーム戦略のプレゼンテーション
第６講　プロトタイピングによる商品開発
第７講　プロトタイピング（実践）
第８講　プロトタイピング（実践と分析）
第９講　プロトタイピング　プレゼンテーション
第 10 講　データに基づいた商品開発（概説）
第 11 講　プロトタイピング（実験計画）
第 12 講　プロトタイピング（実験・分析）
第 13 講　プロトタイピング（分析）
第 14 講　プロトタイピング（分析）
第 15 講　プロトタイピング　プレゼンテーション

■フィードバックの要領
プレゼンテーションに対して、ウェブ上でコメントする。

■評価基準
評価 A+（90 点以上）：数値評価で９０点以上
評価 A（89 ～ 80 点）：数値評価で８０点以上９０点未満
評価 B（79 ～ 70 点）：数値評価で７０点以上８０点未満
評価 C（69 ～ 60 点）：数値評価で６０点以上７０点未満
評価 F（59 点以下）　：数値評価で６０点未満

■評価方法
欠席理由を問わず３分の２以上の出席を前提として、平常点４０点、レポート（３回）各２０点で評価する。

■留意点
・初回講義で全体解説及び選抜を行うため、履修希望者は必ず初回講義に出席すること。・コンピュータを持参すること。

科目名	IT ビジネス入門（Introduction to IT Business）
サブタイトル	経営情報学科への誘い
担当教員	小西、久保田他
対象学年	1 年生以上
区分	春・秋学期

■講義目的

経営情報学科では、ＩＴを活用したビジネスについて学びます。この講義では、ＩＴを専門に扱うＩＴ企業はもちろん、ＩＴを活用してビジネスを行う一般企業においても、必要不可欠な知識や技術の「きほん」を優しく解説します。そしてこの講義を通じて「経営情報学科」での学びを誘います。

■講義分類

ビジネスＩＣＴ

■到達目標

ＩＴ企業や、ＩＴを活用してビジネスを行う一般企業で必要とされる、ＩＴに関する基本的な用語を理解し、身の回りの具体事例を挙げることができるようになることを目標とします。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

ＩＴ企業やＩＴを活用してビジネスを行う企業について、グローカルに展開する具体事例を挙げて説明出来るようになる。

■授業形態

講義

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

次回授業のテキスト該当部分の予習及び、当回授業のテキスト該当部分の復習（1.5 時間）

■授業の概要

第１講　ＩＴビジネスのきほん
第２講　経営のきほん
第３講　会計のきほん
第４講　マーケティングのきほん
第５講　技術開発のきほん
第６講　プログラミングのきほん
第７講　コンピュータのきほん
第８講　システムのきほん
第９講　ソフトウェアのきほん
第 10 講　ハードウェアのきほん
第 11 講　オペレーションのきほん
第 12 講　マルチメディアのきほん
第 13 講　データベースのきほん
第 14 講　ネットワークのきほん
第 15 講　セキュリティのきほん

■フィードバックの要領

授業内で実施するミニレポート等を返却する。

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：ＩＴビジネスの用語について詳しく理解し、グローカルな具体事例を挙げて説明できる。
評価 A（89 ～ 80 点）：ＩＴビジネスの用語について詳しく理解し、身の回りの具体事例を挙げて説明できる。
評価 B（79 ～ 70 点）：ＩＴビジネスの用語について理解し、身の回りの具体事例を挙げて説明できる。
評価 C（69 ～ 60 点）：ＩＴビジネスの用語について理解しているが、具体事例を挙げることができない。
評価 F（59 点以下）　：ＩＴビジネスの用語について理解ができず、その具体事例を挙げることもできない。

■評価方法

出席（５０%）、授業内ミニレポート（５０%）

■留意点

毎回出席し、授業内ミニレポートを必ず提出してください。
予習復習や授業内の発言によってボーナス点を付与することがあります。
欠席が３分の１を超えた場合、原則として単位を付与しません。

科目名	韓国語Ⅰ（Korean Ⅰ）		
サブタイトル	ハングルのマスター		
担当教員	趙、高		
対象学年	1年生以上	区分	春学期

■講義目的

多摩大学では世界潮流としてのアジアダイナミズムを体得すべく諸々の教育プログラムを提供しているが、アジアの第一関門は隣国の韓国であろう。本講義では韓国語をはじめて学ぶ学生を対象に、ハングル文字と発音、基礎的文法やコミュニケーションを学ぶことを目的とする。韓国語の単語を一つ知るごとに、フレーズを一つ学ぶごとに、学生の目に映る韓国や韓国人は変わってくるものである。韓国語のみならず韓国や韓流を知りたい意欲ある学生の参加を望む。本講義を1年間積極的に参加することで、中級レベルの韓国語も扱う韓国ビジネスコミュニケーションⅠ・Ⅱの学習につながることを期待するものである。

■講義分類

ビジネス環境理解、グローバルビジネス

■到達目標

①ハングル文字や発音を徹底してマスターした後に、基本的文法を理解する、②韓国ビジネスコミュニケーションⅠ・Ⅱ・韓国経済論・アジア経済論Ⅰを学ぶ際の土台づくり、③客観的指標として、ハングル能力検定試験4級又は5級程度の実力をつけることを目標とする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

ハングル文字と発音、韓国語の基礎的文法を習得することで、コミュニケーション能力を涵養する。

■授業形態

講義、グループワーク、双方向、韓国語と韓国を扱ったビデオ・視聴覚教育

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

授業前には、その回の該当課の本文をスムーズに読めるようにすること。また、その回に小テストを行う際には、その回の授業が始まる前に教科書の練習問題を復習すること（各 1.5 時間学習相当）。

■授業の概要

第1講　オリエンテーション、韓国語について
第2講　基本母音
第3講　基本子音
第4講　複合母音
第5講　パッチム
第6講　発音の変化
第7講　第1課（以降、教科書順）　私は浅井ゆかりです
第8講　第2課　出身はソウルですか
第9講　第3課　図書館ではありません
第10講　第4課　時間がありますか
第11講　第5課　何をしますか
第12講　第6課　貿易会社で働いています
第13講　第7課　服を買います
第14講　第8課　スーパーでよく買います
第15講　総括、期末小テスト

■フィードバックの要領

各課ごとの小テスト結果に対して助言・コメント等のフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：ハングルを完全マスターし、文法を高度に理解し、基本ボキャブラリーが豊富である
評価 A（89 ～ 80 点）：ハングルをマスターし、基本的文法を良く理解、基本ボキャブラリーを習得している
評価 B（79 ～ 70 点）：ハングル文字や発音を一定程度マスターしており、基本的文法を一定程度理解している
評価 C（69 ～ 60 点）：ハングルを基本的にスムーズには読めて、基本的文法のいくつかを習得している
評価 F（59 点以下）　：ハングルをスムーズに読めず、あるいは読めるものの欠席が多い

■評価方法

・授業での毎回の小テストの総計点（100%）　・出席を疎かにすると毎回実施する小テストを受けられないことになるので、結果的には成績に著しく不利になることを留意されたい。

■留意点

・語学の学習には地道さ、根気強さが必要であるため、なるべく毎回の出席を望む。これまでの経験だと、出席が良好な学生が成績も上位であり、毎回の出席こそ語学上達の近道である。一定の出席に満たない場合、学期途中においてもFになる可能性を警告する。授業では随時、筆記や発音の小テストがあるが、決して高いハードルではない。

科目名	韓国語 II（Korean II）
サブタイトル	初級会話と文法の学修
担当教員	趙、高
対象学年	1 年生以上
区分	秋学期

■講義目的

多摩大学では世界潮流としてのアジアダイナミズムを体得すべく諸々の教育プログラムを提供しているが、アジアの第一関門は隣国の韓国であろう。本講義では韓国語をはじめて学ぶ学生を対象に、ハングル文字と発音、基礎的文法やコミュニケーションを学ぶことを目的とする。韓国語の単語を一つ知るごとに、フレーズを一つ学ぶごとに、学生の目に映る韓国や韓国人は変わってくるものである。韓国語のみならず韓国や韓流を知りたい意欲ある学生の参加を望む。本講義を 1 年間積極的に参加することで、中級レベルの韓国語も扱う韓国ビジネスコミュニケーション I・II の学習につながることを期待するものである。

■講義分類

ビジネス環境理解、グローバルビジネス

■到達目標

①ハングル文字や発音を徹底してマスターした後に、基本的文法を理解する。②韓国ビジネスコミュニケーション I・II・韓国経済論・アジア経済論 I を学ぶ際の土台づくり。③客観的指標として、ハングル能力検定試験 4 級又は 5 級程度の実力をつけることを目標とする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

ハングル文字と発音、韓国語の基礎的文法を習得することで、コミュニケーション能力を涵養する。

■授業形態

講義、双方向、その他（韓国語と韓国を扱ったビデオ・視聴覚教育）

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

授業前には、その回の該当課の本文をスムーズに読めるようにすること。また、その回に小テストを行う際には、その回の授業が始まる前に教科書の練習問題を復習すること（各 1.5 時間学習相当）。

■授業の概要

第 1 講　第 9 課　1 万ウォンです
第 2 講　第 10 課　今、何時ですか
第 3 講　第 11 課　日本語を話されますか
第 4 講　第 12 課　バスは行きません
第 5 講　第 13 課　いつ韓国に来ましたか
第 6 講　第 14 課　一緒にお昼を食べましょう
第 7 講　第 15 課　パーティーの準備をしています
第 8 講　第 16 課　何も食べられませんでした
第 9 講　第 17 課　陶磁器が見たいです
第 10 講　第 18 課　写真を撮ってもいいですか
第 11 講　第 19 課　帰国しなければいけません
第 12 講　第 20 課　手紙を書きますよ
第 13 講　韓国の映画を見ながらのビデオ学習、韓国語の文法とボキャブラリー（I）
第 14 講　韓国の映画を見ながらのビデオ学習、韓国語の文法とボキャブラリー（II）
第 15 講　総括、小テスト

■フィードバックの要領

各課ごとの小テスト結果に対して助言・コメント等のフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：ハングルを完全マスターし、文法を高度に理解し、基本ボキャブラリーが豊富である
評価 A（89 ～ 80 点）：ハングルをマスターし、基本的文法を良く理解、基本ボキャブラリーを習得している
評価 B（79 ～ 70 点）：ハングル文字や発音を一定程度マスターしており、基本的文法を一定程度理解している
評価 C（69 ～ 60 点）：ハングルを基本的にスムースには読めて、基本的文法のいくつかを習得している
評価 F（59 点以下）　：ハングルをスムーズに読めず、あるいは読めるものの欠席が多い

■評価方法

授業での毎回の小テストの総計点（100%）　・出席を疎かにすると毎回実施する小テストを受けられないことになるので、結果的には成績に著しく不利になることを留意されたい。

■留意点

・語学の学習には地道さ、根気強さが必要であるため、なるべく毎回の出席を望む。これまでの経験だと、出席が良好な学生が成績も上位であり、毎回の出席こそ語学上達の近道である。一定の出席に満たない場合、学期途中においても F になる可能性を警告する。・復習を重視すること・授業では随時、筆記や発音の小テストがあるが、決して高いハードルではない。

科目名　キャリア・デザイン入門（Introduction to Career Design）

サブタイトル　自分の人生を考える

担当教員　浜田　正幸、初見　康行

対象学年　1年生以上　　区分　秋学期

■講義目的

キャリア・デザインとは、まさに人生設計のことである。これまで大学に入学するまでは、ある程度既定路線を進んでくれば良かったが、この先は決まった線路も道路もない。自ら自分の進む方向を決めて、自らそこに道を作って、自分の足で歩いていくしかない。その方向性と道を作り始めないと、大学卒業後の生活（人生）ができなくなってしまう。本講では、自分の将来設計の際に、考えなければならない社会環境や地球社会や生活などの領域について、現状認識する。さらに生活とおカネ、仕事、働くことなどについての現状認識と、自分自身がどう関わっていくのかを考え、大学卒業後は、一社会人として、精神的・経済的に自立して、社会に貢献していく自分自身のキャリアをデザインすることを目的とする。

■講義分類

社会人力育成

■到達目標

本講の受講から終了までの間に、次の内容に到達することが目標となる。自分自身の置かれている社会環境の現状を認識し、その上で自分自身の将来ビジョンをイメージするとともに、そのビジョン実現に向けた方策ならびに課題や大学での学びが明確になっている。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP5 高い志

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

自分自身の将来を2面から考える。自分の人生という側面と、社会の中での位置付けである。

■授業形態

講義、グループディスカッション、グループワーク

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

指定図書の熟読、事前課題（ワークシート等）の実施 1.5 時間。講義内容の整理、ノートの整理 1.5 時間。

■授業の概要

第1講　キャリアデザインの全体像
第2講　キャリアデザインと社会人基礎力
第3講　社会人基礎力の実際
第4講　就業観
第5講　キャリアデザインとおカネ
第6講　キャリアとおカネ　起業した場合
第7講　おカネでは買えないもの
第8講　どう生きるか
第9講　社会と仕事
第10講　地球社会を考える
第11講　仕事（働くこと）の本質
第12講　いのち　生きること
第13講　ポジティブ心理学
第14講　キャリアデザイン総括
第15講　目標到達度確認テスト

■フィードバックの要領

課題や試験等に対してフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：将来ビジョンをイメージし、そのビジョン実現に向けた課題と方策を明確に持っている。
評価 A（89 ～ 80 点）：将来ビジョンとそれを実現するための課題と方策を、ある程度考えている
評価 B（79 ～ 70 点）：将来ビジョンとそれを実現するための課題と方策について、一部考えられた。
評価 C（69 ～ 60 点）：将来ビジョンについて、ぼんやりと考えてみた。
評価 F（59 点以下）　：将来ビジョンについて考えられていない。

■評価方法

出席・課題（40%）　到達度確認テスト（60%）

■留意点

科目名	グローバルビジネス入門（Introduction to Global Business）
サブタイトル	世界と日本を知る
担当教員	金、中村（そ）、趙、バートル、下井、水盛、石川
対象学年	1 年生以上
区分	春・秋学期

■講義目的

担当教員 7 名が、「世界から見た日本」と「日本から見た世界」という視点から、日本と世界、政治と経済、企業とビジネス、文化とマーケティングなどをテーマに最前線事例を踏まえて解説する。また、日本や世界を高度産業社会に再構築するための問題点と解決策を考察する。
主な目的は、事業構想学科への誘導である。また、グローバルビジネス系科目や特別講座Ⅰ・Ⅱ（寺島学長監修リレー講座）の基礎学習や社会科学の基本的な考え方を学ぶこと。さらに、自らの立ち位置や、将来進むべき方向性を思索することである。
主なキーワードは、世界潮流、時代認識、アジア・ユーラシアダイナミズム、日中韓、国際経済、国際経営、国際協力、日本企業のグローバル戦略、グローバルマーケティング、若者の文化と留学である。

■講義分類

グローバルビジネス、ビジネス環境理解、ビジネス創造

■到達目標

①グローバルビジネス系統科目の特性を理解するとともに、他の系統科目との関連性を把握する。 ②２年時の特別必修科目である「特別講座ⅠとⅡ（共通テーマ「世界潮流と日本の進路」）」の基礎知識を習得する。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

「世界から見た日本」と「日本から見た世界」の視点から政治・経済・企業・文化の問題点と解決策を考え、グローバルビジネスの場で活躍するとともにわが国の産業社会の発展に貢献できるようにする。

■授業形態

講義、双方向

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

2 講義終了毎にレポートを提出すること（2 時間）。合計 7 レポート提出することとなる。

■授業の概要

第 1 講　ガイダンス
第 2 講　「アジア・ユーラシアダイナミズムといかに向き合うか（1）」（金美徳）
第 3 講　「アジア・ユーラシアダイナミズムといかに向き合うか（2）」（金美徳）
第 4 講　「海外に羽ばたこうー若者留学事情を中心に」（趙佑鎮）
第 5 講　「東アジア共同体ー日中韓関係を中心に」（趙佑鎮）
第 6 講　「日本経済はどのように推移してきたか」（下井直毅）
第 7 講　「貿易についての考え方は、どう変わってきたか」（下井直毅）
第 8 講　「中国経済と日本企業のビジネス戦略（1）」（バートル）
第 9 講　「中国経済と日本企業のビジネス戦略（2）」（バートル）
第 10 講「中国の公共投資と景気浮揚」（水盛涼一）
第 11 講「新規事業分野の開拓にみる日中ビジネス思想の比較」（水盛涼一）
第 12 講「ユニークなおもしろ海外 CM ー文化は CM にどのように反映されるか」（石川晴子）
第 13 講「効果的な英語コマーシャルの作り方ーキャッチコピー、スローガン」（石川晴子）
第 14 講「海外テレビ CM の特徴とその分析および日本のテレビ CM との比較」（中村そのこ）
第 15 講「海外での屋外 PR 企画および大規模イベントとテレビ CM の関係」（中村そのこ）

■フィードバックの要領

各教員が、レポートに対してフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：出席（60%）と 7 レポート（40%）の合算点が、90% 以上であること。
評価 A（89 ～ 80 点）：出席（60%）と 7 レポート（40%）の合算点が、89 ～ 80% 以上であること。
評価 B（79 ～ 70 点）：出席（60%）と 7 レポート（40%）の合算点が、79 ～ 70% 以上であること。
評価 C（69 ～ 60 点）：出席（60%）と 7 レポート（40%）の合算点が、69 ～ 60% 以上であること。
評価 F（59 点以下）　：出席（60%）と 7 レポート（40%）の合算点が、59% 以下であること。

■評価方法

出席率（60%）と合計 7 つのレポート（40%）に基づいて評価する。担当教員 7 名が、2 講義ずつオムニバス形式で合計 14 講義を行い、それぞれレポート（A4 用紙 1 枚以上）の提出を求める（合計 7 レポート :A4 用紙 7 枚以上）。

■留意点

①第 1 回目のガイダンスに必ず出席すること。理由は 7 名の担当教員によるオムニバス形式の講義が第 2 回目より開始されるため受講要領を承知しておく必要があるため。② PC・携帯電話・音楽イヤホンは使用を禁止する。③私語・帽子着用・飲食は禁止する。④遅刻及び途中退室は厳禁とする。⑤レポートは 1 教員の講義（2 回連続講義）が終了し、1 週間後の金曜日 16 時 30 分までに教育サポート室に提出する。

科目名	グローバルヒストリーII（Global History II）
サブタイトル	国際社会のなかの日本とアジア
担当教員	水盛　涼一
対象学年	1年生以上
区分	秋学期

■講義目的

近くて遠い国、中国。現在の日本にとって中国は生産拠点や市場として無視できない存在でありながら、歴史解釈や領土について大きな問題を抱えています。そこで本講義では日本がどのように中国と接してきたのか注目し、日中関係の展開を解説します。大まかに前半では近代から現代にいたる歴史を説明し、日本と中国の類似する点および相違する点を明確にします。また後半では現在の中国が置かれている諸問題を概略し、現在の中国の人々のインターネットでの言論を紹介、彼らがどのような思考をしているのか確認します。その過程で、現代における異文化理解の難しさ、また交流の重要性を理解していきます。

■講義分類

ビジネス環境理解
社会人力育成
グローバルビジネス

■到達目標

グローバル化の時代において、情報の海に飲み込まれることなく自ら思考して異文化を理解するスタンスを涵養する。その格好の題材として、中国の心性を把握し、日本や諸外国への相対的な視点を獲得する。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP5 高い志

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

世界の歴史は諸文化を知るものですから「知識と理解」となります。突き詰めれば「高い志」における「社会における多様な価値観」への関与という志に結びつくでしょう。

■授業形態

講義、双方向、グループディスカッション

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

毎次にわたってミニッツペーパーの提出が求められます。また講義時間内にはＢＲＤ（Brief Report of the Day）を作成しますが、その予習が必須となります。（1.5 時間）

■授業の概要

第１講　ガイダンス
第２講　略説・前近代　①　地形と民族
第３講　略説・前近代　②　歴史時代の公務員試験
第４講　略説・前近代　③　歴史時代の長い好景気
第５講　アヘン戦争と黒船来航
第６講　アヘン戦争、イギリスの事情と中国の蹉跌
第７講　太平天国――人々はなぜ反乱軍に加わるのか
第８講　太平天国――フロンティアと都市の秘密結社
第９講　日清戦争――外交思想の以前と以後
第 10 講　大アジア主義と脱亜論
第 11 講　大戦下の日本と中国
第 12 講　共産党による「解放」と大躍進
第 13 講　毛沢東の文化大革命
第 14 講　改革開放と先富論
第 15 講　そして現在の日本と中国へ

■フィードバックの要領

毎次にわたってＢＲＤ（Brief Report of the Day）を学生・教員間で往復します。

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：評価点 100 点（下記“配分”参照）のうち 90 点以上。
評価 A（89 ～ 80 点）：評価点 100 点（下記“配分”参照）のうち 89 ～ 80 点。
評価 B（79 ～ 70 点）：評価点 100 点（下記“配分”参照）のうち 79 ～ 70 点。
評価 C（69 ～ 60 点）：評価点 100 点（下記“配分”参照）のうち 69 ～ 60 点。
評価 F（59 点以下）　：評価点 100 点（下記“配分”参照）のうち 59 点以下。

■評価方法

期末試験（50%）、ＢＲＤを通して見た授業に取り組む姿勢・積極性（50%）

■留意点

①講義は毎回、前週に配布した資料を読み込んでいることを前提として進行する。資料の持参を忘れた者、読んでこなかった者は、原則として当日の受講を認めない。②第２回までに重要不可欠な点を説明するとともに、連続性を重視した積み上げ型の講義であるため、第２回の講義までに全く出席しなかった者、さらに途中で欠席３回を超えた者は、本講座の履修を認めない。

科目名	グローバルヒストリー I-X（Global History I-X）		
サブタイトル	前近代の日本における国際認識と文化的特質		
担当教員	大森　映子		
対象学年	1 年生以上	区分	春学期

■講義目的
歴史を学ぶことは、過去の事実を明らかにするだけなく、現代社会を客観化することでもある。ここでは、過去の日本社会の特質を歴史的に振り返りながら、現代社会がかかえている矛盾点を明らかにし、問題解決の方法を探る糸口を考える。今年度は主として次の２点に注目したい。第一は、これまで漠然と「思い込み」で理解されてきた日本文化の実像を明らかにし、文化的特質を再検討すること、また第二は、前近代における日本の政治的な観点から対外政策を軸に、国際認識のあり方を辿ることである。このような観点から日本の政治や文化を歴史的に見直していくことにより、現代社会がかかえる諸問題を浮き彫りにしていきたい。

■講義分類
社会人力育成、グローバルビジネス、地域ビジネス

■到達目標
（1）過去の事実に向き合うことの重要性を理解する。（2）歴史認識は、現代社会の矛盾点を発見する手掛かりになる事を理解する。（3）歴史を踏まえた上で、現状分析を試み、考え抜く力を養う。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項
DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細
歴史的なものの見方や分析の仕方を養い、現代社会における諸問題の発見と対処能力を修得する。

■授業形態
講義、グループディスカッション

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容
復習を重視し、授業内容を振り返って簡単なレポートにまとめる。また次の授業に備えて提示された重要用語について予習しておく。（1.5 時間）

■授業の概要
第１講　15 回の授業の方針と概要
第２講　巨大大仏を作る―東大寺大仏建立の政治的背景をさぐる
第３講　寺院と仏像からみた日本文化の特質　―CG 技術による日本文化の復元
第４講　伝統的建造物と自然災害（１）―台風被害
第５講　伝統的建造物と自然災害（２）―地震被害
第６講　水中考古学の世界　―沈没船の調査からみた中世社会
第７講　１４～６世紀のアジア世界　―海で結ばれたアジア諸地域と琉球の位置づけ
第８講　１６世紀におけるヨーロッパ勢力とアジア世界の出会い
第９講　豊臣秀吉の対外政策　―二度にわたる朝鮮侵略戦争
第 10 講　江戸時代初期の国際関係　―いわゆる「鎖国」をめぐって
第 11 講　江戸時代における国際認識　―「四つの口」と外国人との接点
第 12 講　江戸時代の海外情報と日本の技術
第 13 講　近代日本の問題点　―急速な欧米化と伝統文化
第 14 講　近代日本と周辺地域　―国際社会における日本の立場と周辺諸地域への政策
第 15 講　まとめ　―前近代における国際認識と伝統文化

■フィードバックの要領
レポートや提出物については、コメントし、共有できるものは授業内で紹介する。

■評価基準
評価 A+（90 点以上）：授業の趣旨と内容を十分に理解し、自分の意見を持てるようになった。
評価 A（89 ～ 80 点）：授業の趣旨と内容を、基本的に理解し、自分の意見を持てるようになった。
評価 B（79 ～ 70 点）：授業の趣旨と内容を、一応理解できた。
評価 C（69 ～ 60 点）：不十分なところはあるが、授業の趣旨は一応理解できた。
評価 F（59 点以下）　：授業の趣旨、内容ともに理解できていない。

■評価方法
平常点 60%（授業内で求める簡単なレポートを重視する）、中間レポート 20%、最終レポート（グループディスカッションを含む）20% を原則とする。レポートは word を利用すること。

■留意点
①履修希望者多数の場合は人数制限を行うため、初回は必ず出席すること。②終盤にグループディスカッションを予定している。③受講者数によって一部授業の順序の入れ替えをする場合があるので、注意すること。

科目名	グローバルヒストリー I-Y（Global History I-Y）
サブタイトル	前近代の日本と中国にみる文化的特質
担当教員	水盛　涼一
対象学年	1年生以上
区分	春学期

■講義目的

近くて遠い国、中国。過去の日本にとって中国は学ぶべき対象でしたし、現在の日本にとって中国は生産拠点や市場として無視できない存在です。そこで本講義では日本がどのように中国と接してきたのか注目しつつ、それぞれの時代の代表的な人物から歴史の流れを解説します。その中では日本と中国の類似する点および相違する点を明確にします。その過程で、現代における異文化理解の難しさ、また交流の重要性を理解していきます。

■講義分類

社会人力育成、グローバルビジネス、地域ビジネス

■到達目標

グローバル化の時代において、情報の海に飲み込まれることなく自ら思考して異文化を理解するスタンスを涵養する。その格好の題材として、昔の日本と今の日本とを比較し、また日本と外国との相違を把握し、日本や諸外国への相対的な視点を獲得する。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

世界の歴史は諸文化を知るものですから「知識と理解」となります。突き詰めれば「高い志」における「社会における多様な価値観」への関与という志に結びつくでしょう。

■授業形態

講義、双方向、グループディスカッション

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

毎次にわたってミニッツペーパーの提出が求められます。また講義時間内にはＢＲＤ（Brief Report of the Day）を作成しますが、その予習が必須となります。(1.5 時間)

■授業の概要

第１講　ガイダンス
第２講　卑弥呼――古代の女王
第３講　曹操――治世の能臣、乱世の奸雄
第４講　藤原道長――「大不忠の人」の栄達
第５講　楊貴妃――世界三大美女の悲劇
第６講　平清盛――貴族と武家のあいだで
第７講　宋太宗趙光義――兄殺しによる体制改革
第８講　北条時宗――兄殺しによる蒙古襲来対応
第９講　クビライ・カーン――世界帝国の覇者
第 10 講　明太祖朱元璋――農民から皇帝となった冷血漢
第 11 講　徳川綱吉――犬公方の忠臣蔵
第 12 講　神宗万暦帝・世宗雍正帝――皇帝専制の極致
第 13 講　井伊直弼――日本を開国した保守派の巨魁
第 14 講　林則徐――アヘン戦争を招いた硬骨な官僚
第 15 講　革命家孫文の日中交流

■フィードバックの要領

レポートや提出物については、コメントし、共有できるものは授業内で紹介する。

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：評価点 100 点（下記“配分”参照）のうち 90 点以上。
評価 A（89 ～ 80 点）：評価点 100 点（下記“配分”参照）のうち 89 ～ 80 点。
評価 B（79 ～ 70 点）：評価点 100 点（下記“配分”参照）のうち 79 ～ 70 点。
評価 C（69 ～ 60 点）：評価点 100 点（下記“配分”参照）のうち 69 ～ 60 点。
評価 F（59 点以下）　：評価点 100 点（下記“配分”参照）のうち 59 点以下。

■評価方法

期末レポート（50%）、ＢＲＤを通して見た授業に取り組む姿勢・積極性（50%）

■留意点

①履修希望者多数の場合は人数制限を行うため、初回は必ず出席すること。②終盤にグループディスカッションを予定している。③受講者数によって一部授業の順序の入れ替えをする場合があるので注意すること。

科目名	コンピュータ概論（Introduction to Computers）
サブタイトル	コンピュータの仕組みを理解して有効に利用する
担当教員	中村　有一
対象学年	1 年生以上
区分	秋学期

■講義目的
この講義では「コンピュータはどういう機械か」ということを学ぶ。受講者はコンピュータに関する知識を持たないという前提で講義する。講義の狙いは、コンピュータに親しみを持ってもらうこと。コンピュータに関する広告や新聞記事に、怖れず目を通せるようになることである。
講義内容は、コンピュータとは何か、コンピュータの歴史、コンピュータの構成要素などである。最新の話題より基礎的な知識に重点を置く。この知識がないとコンピュータを使えないということではないが、コンピュータを勉強する上で必須となる知識が中心となる。文系・理系とわけると理系っぽい講義の一つであるが、文系の人にも知っておいてほしい内容がほとんどである。

■講義分類
ビジネス ICT

■到達目標
コンピュータに関する基礎的な用語が理解できていること。コンピュータの仕組みが大まかに把握できていること。2 進数などの演算の仕方が理解できていること。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項
DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細
コンピュータに関して基礎的・教養的な知識を習得し、実社会に出てからも必要な考え方を身に着ける。

■授業形態
講義、演習

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容
予習：講義資料を読んでできるだけ理解し、わからない部分は整理しておく。（1．5時間）　復習：資料をもう一度読みなおし、理解できたか確認する。ミニテストなどの結果を振り返る。（1．5時間）

■授業の概要
第 1 講　「コンピュータとは何か」
第 2 講　「コンピュータの種類と構成要素」
第 3 講　「ビット、バイト、ヘルツ」
第 4 講　「コンピュータの歴史（誕生）」
第 5 講　「コンピュータの歴史（発展）」
第 6 講　「最新ハードウェアの話」：PC 部品のスペックの読み方を概観する。
第 7 講　「コンピュータの歴史（利用者視点）」
第 8 講　「インターネットの話」：仕組みとその意味、発展の歴史
第 9 講　「コンピュータは 0、1 で勝負する（1）」：コンピュータの基礎は 2 進数
第 10 講「コンピュータは 0、1 で勝負する（2）」：「真か偽」を扱う論理演算について学ぶ。
第 11 講「数や文字とその表現」：数値や文字をコンピュータで扱う仕組みについて話す。
第 12 講「マンマシンインタフェースと図形や音」
第 13 講「人間の思想を伝えるために」：OS とプログラミング言語について取り上げる。
第 14 講「データベースの話」：大量のデータを蓄え、整理する
第 15 講「近未来の話」：新しい原理のコンピュータを取り上げる

■フィードバックの要領
ミニテスト、演習などについて、答え合わせ、講評などのフィードバックを行う。

■評価基準
評価 A+（90 点以上）：ほぼ完ぺきな理解度と評価
評価 A（89 ～ 80 点）：上位の評価
評価 B（79 ～ 70 点）：中位の評価
評価 C（69 ～ 60 点）：下位の評価
評価 F（59 点以下）　：不十分な理解度と評価

■評価方法
学期末試験 70%　レポートなど平常点 30%

■留意点
復習してわからない点などがあれば、できるだけ授業中に質問して解決すること。その他、授業と並行して、入門書レベルの本を数冊読むことを勧める。

科目名	産業社会特講（AWSを通じて学ぶREST APIとSPA開発）(Special Lecture on Industry Society REST API&SPA To Learn Through AWS)
サブタイトル	Spring framework & Riot.js
担当教員	梶原　裕
対象学年	1年生以上
区分	春学期

■講義目的
昨今開発されている、WEB アプリケーション開発においては、様々なツールやインターネット上で提供されているサービスや API を用いて構築が行われている。
このプロジェクトゼミでは、実際の開発の現場で使われているツールや技法を学び、実践として、それらを用いて PC やスマートフォンから利用する Web アプリ開発を行う。
また構築を通じて、Web アプリケーションの仕組みを理解し、Web アプリケーション活用・開発のスキル習得を目標とする。

■講義分類
ビジネス ICT

■到達目標
(1)DB を活用したWeb アプリケーションの仕組みを理解する。 (2)Java･Spring Framework を学習し､利用する。 (3) JavaScript（RiotJS）を学習し、利用する。 (4) レスポンシブデザインを学習し、利用する。 (5) WebAPI を活用し、利用する。 (6) Web データベースシステムを設計し、開発する。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項
DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細
AWS を開発環境として WebAPI や SPA（シングルページアプリケーション）の開発を学び、Web アプリケーション開発に必要な知識を習得する。

■授業形態
講義、グループディスカッション、グループワーク、PC を使用した実習

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容
講義時間内でも演習を行うが、それだけでは最終課題を提出に必要な技術習得は難しいと言える。最低 90 分程度の復習を中心に、授業で行った課題や操作を理解をすることを推奨とする。

■授業の概要
第 1 講　オリエンテーション
第 2 講　SpringFramework（1）
第 3 講　SpringFramework（2）
第 4 講　Spring Data（1）
第 5 講　Spring Data（2）
第 6 講　Spring Data（3）
第 7 講　RESTAPI（1）
第 8 講　RESTAPI（2）
第 9 講　RESTAPI（3）
第 10 講　レスポンシブデザイン・フロントエンドプログラミング （1）
第 11 講　レスポンシブデザイン・フロントエンドプログラミング （2）
第 12 講　レスポンシブデザイン・フロントエンドプログラミング （3）
第 13 講　統合（1）
第 14 講　統合（2）
第 15 講　統合（3）

■フィードバックの要領
提出したリポジトリに対して、コメントを記入してフィードバックを行う。

■評価基準
評価 A+（90 点以上）：数値評価９０点以上
評価 A（89 ～ 80 点）：数値評価８０点以上９０点未満
評価 B（79 ～ 70 点）：数値評価７０点以上８０点未満
評価 C（69 ～ 60 点）：数値評価６０点以上７０点未満
評価 F（59 点以下） ：数値評価６０点未満

■評価方法
課題提出（50%）、システム開発（30%）、平常点（20%）

■留意点
① PC 持参必須。②本授業では実際に開発の現場で用いているツールや技法を用いるが、それらの習熟の時間は授業内では設けることはできないため、講義時間外に自ら理解を深める努力が求められる。③受講者数や受講者の技術レベルにより、Web を活用するアプリ開発という範囲内で難易度および題材が変わる可能性がある。

科目名	産業社会特講（環境とビジネスプランニング）(Special Lecture on Industry Society Environment and Business Planning)
サブタイトル	早い時期から就活に役立つよう、興味ある産業分野についてリサーチしていきましょう。
担当教員	荒木　恵理子
対象学年	1 年生以上
区分	春学期

■講義目的

未来に生きるこどもたちへ豊かな自然と安心して生活ができる地球環境を残すための「環境問題」をテーマとして、様々な分野の企業やＮＰＯの環境活動を学習し、人々にどんな環境活動や教育・ビジネスを行えば意識変化及び行動変容をもたらすことができるかを検討し実施することで、社会課題解決基礎力をつける。

■講義分類

ビジネス環境理解、ビジネス創造、社会人力育成

■到達目標

①環境問題を切り口に、世の中について知る。②各分野の企業やＮＰＯの環境活動を学習し環境ビジネスのアイディア及びやってみたいビジネスアイディアを創出のため、環境問題や既存の企業等についてのリサーチを行い、ビジネスプランを作る。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

様々な分野の企業やＮＰＯの環境活動を学習し、人々にどんな環境活動や教育・ビジネスを行えば意識変化及び行動変容をもたらすことができるかを検討し実施することで、社会課題解決基礎力をつける。

■授業形態

講義、グループワーク、プレゼンテーション

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

調査などの事前準備もしくは事後の調査・資料作成（ゼミで発表のため）有
事前・事後あわせて平均して２時間程度を予定

■授業の概要

第１講　環境問題の全体概要１
第２講　環境問題の全体概要２
第３講　環境問題の全体概要３
第４講　環境問題の全体概要４
第５講　環境教育イベントでワークショップ　※振替あり
第６講　環境教育イベントでワークショップ　※振替あり
第７講　環境映像および企業・環境施設で学ぶ１
第８講　環境映像および企業・環境施設で学ぶ２
第９講　環境映像および企業・環境施設で学ぶ３
第 10 講　ビジネス創出基礎スキル１
第 11 講　ビジネス創出基礎スキル２
第 12 講　企業や団体のリサーチ＆ビジネスプラン作成１
第 13 講　企業や団体のリサーチ＆ビジネスプラン作成２
第 14 講　企業や団体のリサーチ＆ビジネスプラン作成３
第 15 講　企業や団体のリサーチ＆ビジネスプラン作成４

■フィードバックの要領

フィードバックは授業内の発表時に行う。

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：講義への参加度とプレゼンの総合評価。プランが新しい発想で非常に優れているもの。
評価 A（89 ～ 80 点）：講義への参加度とプレゼンの総合評価。プランの整合性がとれていて実現可能なもの。
評価 B（79 ～ 70 点）：講義への参加度とプレゼンの総合評価。プランの整合性がとれているもの。
評価 C（69 ～ 60 点）：講義への参加度とプレゼンの総合評価。プランが発表できているもの。
評価 F（59 点以下）　：講義への参加度とプレゼンの総合評価。プランが発表できなかったもの。

■評価方法

講義への参加度５０%、提出物の内容評価やプレゼン５０%

■留意点

① PC 持参（ただし、講義以外での目的での使用はしないこと、講義以外での使用の場合には評価対象外となる）。　② 積極的に考え議論し、問題意識をもってリサーチし、その中からビジネスについて積極的に学ぶ姿勢、ビジネス創出への意欲をもって取り組める学生を対象とする。

科目名	産業社会特講（これからの産業社会に必要な考力育成Ⅱ）(Special Lecture on Industry Society Raising Ability to Think Ⅱ)
サブタイトル	考える力の有無が分野を問わず諸君の人生の価値を決する。 ～“考力塾”～
担当教員	富田　直美
対象学年	1年生以上　　区分　秋学期

■講義目的

混沌とした時代、未来、そこで力強く歩むあなたに最も必要な力、それが“考える力”＝“考力”だ。
今までの世の中、特に日本では、先達の成功方法を記憶し、その通りに実行できる者が勝利者だった。しかし、そんな人生を Copy & Paste（コピペ）しても現在そして、将来の成功はありえない。
たった 15 回の授業で、あなたの鍛えられていない“考力”は著しく向上する。今がその時！！
そこで、まずは、人生の成功のみならず、幸せな人生を日々歩んで行く為に絶対に必要な“考える力”＝“考力”を 15 回の授業の中で、鍛練し、身に着けて行く事がこのプロジェクトゼミの主目的である。
コピペや記憶力中心の生き方から、自らの考えに基づく生き方をできる一人前の“独立し、自由な大人”への“考力塾”である。

■講義分類

社会人力育成、ビジネス環境理解、ビジネス創造

■到達目標

人生で成功する為の自分自身のライフスタンダード（自己人生規範）の必要性を知り、実際の世の中へ出てから遭遇するであろう諸課題をポジティブ & 創造的に　”考える力”　の基礎を習得する。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP2 思考と判断：人として幸せになる為に必要な自分の頭で考える力

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

世界で一番大切な存在は誰か？
富田は自分自身であるべきと考えている。まずはそこの理解を 1st Priority として考え導き、そこを 1 丁目一番地として授業をすすめる。

■授業形態

富田よりの課題提起、Q&A、ディスカッション、ディベート

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

アンジェラ・ダックワース著『GRIT』を事前に予習。次の授業までに感想コメントレポートをメールで復習として提出。
復習・予習には各々 90 分程度の時間を充てる事。

■授業の概要

第 1 講　自らを知る（世界で一番大切な存在は？）
第 2 講　自己スタンダードのチェック
第 3 講　“知”について　その 1
第 4 講　“知”について　その 2
第 5 講　人生での成功とビジネス（プロジェクト）での成功　その 1
第 6 講　人生での成功とビジネス（プロジェクト）での成功　その 2
第 7 講　成功の為の自分力（人間力）と創造性の関係を知る　その 1
第 8 講　成功の為の自分力（人間力）と創造性の関係を知る　その 2
第 9 講　人間力（自分力）と創造力のエンパワメント実践編　その 1
第 10 講　人間力（自分力）と創造力のエンパワメント実践編　その 2
第 11 講　説得力の構成要素の理解　その 1
第 12 講　説得力の構成要素の理解　その 2
第 13 講　説得力エンパワメントの指導 その 1
第 14 講　説得力エンパワメントの指導 その 2
第 15 講　総括

■フィードバックの要領

各自授業時に出席者とのインタラクションにて。　個別対応。

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：出席 13 日以上
評価 A（89 ～ 80 点）：出席 12 日以上
評価 B（79 ～ 70 点）：出席 10 日以上
評価 C（69 ～ 60 点）：出席 9 日以上
評価 F（59 点以下）　：出席 7 日以下

■評価方法

講義への出席のみで判定。理由として、考える事を全出席者に訓練させる事が最大の課題であり、考えさせるのは教師である私の役割であり、それを全うさせる方法論を用いる為。

■留意点

講義への参加のレベルを以下に分類する。Level 1: Just Sitting（そこに居るだけ）、Level 2: Participate（消極的参加）、Level 3: Involve（積極的参加）、Level 4: Engage（主体的参加）、Level 3 以上の参加姿勢を期待する。また“考力”は筋トレの筋力アップと同様に、考力アップは日頃使っていない頭脳を鍛えるので、通常の授業より“疲れる”可能性がある。その覚悟が大切。

科目名	産業社会特講（社会の分裂をどう修復するか）(Special Lecture on Industry Society How to Repair the Division of Society)
サブタイトル	激変するグローバル社会と私たち
担当教員	荻野　博司
対象学年	1 年生以上
区分	春学期

■講義目的

政治経験を持たないトランプ氏を大統領に選んだ米国。難民問題に揺れ、英国が離脱を決めた欧州連合（ＥＵ）。経済力、軍事力を背景に世界秩序のリーダーを目指す中国。核開発を急ピッチで進める北朝鮮との緊張が高まる韓国。そして、「イスラム国（ＩＳ）」こそ壊滅に追い込んだものの、依然として続くテロの恐怖。世界の各地で秩序や常識を覆す事態が進んでいる。それは、日本の企業社会にも深刻な影響を及ぼしている。こうした激動の根底にあるもの、これからの方向について、新聞やウェブなどのメディアも活用しながら探っていく。
企業訪問の直前になって新聞を読みだす「にわか勉強」では得られない内容の濃いものとし、授業にはその時々のトピックを盛り込む。それぞれの問題解決力を高めるため、グローバル化に伴って日本政府や企業が解決を迫られる問題を想定し、どのように取り組んだらいいのかを考えてもらう。

■講義分類

グローバルビジネス、ビジネス環境理解、ビジネスマネジメント

■到達目標

大きく変わるグローバル社会の現状を理解し、自らの判断能力を高める。幅広い情報を取り込み、分析することに取り組む。具体的には次の通り。1. 欧米やアジアの変容について、歴史的な視点で考える。2. メディアの情報を鵜呑みにするのでなく、批判的に吸収するメディアリテラシーを得る。3. 自らの体験を世界の変化と連動させてとらえ直し､産業社会の将来像を考える。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

大きく変動する世界の現状を理解し、その背景にある各地域の経済、政治、社会構造や歴史を深く理解する。

■授業形態

講義に加えて、習熟度をみるドリル新聞記事、テレビ報道なども活用する。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

グローバル経済に関連する事項に関する記事を事前に読んでおくとともに、授業で返された資料を確認する。さらに次回のテーマに関する記事を必ず１本読む（1.5 時間）。

■授業の概要

第１講　情報の取り込み方
第２講　日本経済の現況１＝アベノミクス前夜
第３講　日本経済の現況２＝アベノミクス登場
第４講　日本経済の現況３＝悪魔のシナリオ
第５講　ＴＰＰと日本１
第６講　ＴＰＰと日本２
第７講　米国経済・政治の現況
第８講　米国各論＝格差社会
第９講　米国各論＝財政危機
第 10 講　欧州経済の現況
第 11 講　欧州各論＝曲がり角の通貨統合
第 12 講　アジア経済の現況１＝中国
第 13 講　アジア経済の現況２＝韓国、ＡＳＥＡＮ
第 14 講　日本の将来
第 15 講　補論

■フィードバックの要領

提出されたレポート類はコメントを付して返却する。

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：授業に積極的に関与し、試験においてもトップクラスの成績を上げた者。
評価 A（89 ～ 80 点）：上記に順ずる成績を収めた者。
評価 B（79 ～ 70 点）：授業における関与は物足りないものの、平均レベルの成績を収めた者。
評価 C（69 ～ 60 点）：最低限の知識は得たと認められる者。
評価 F（59 点以下）　：授業への関与度、試験の成績などから判断し、履修したとは認められない者。

■評価方法

以下のような観点から判定する。1. 問題の概要を理解しているか。2. 自らの視点から論じられるか。3. 説得力のある説明ができるか。評価の配分は次の通り＝授業姿勢５０％、小テスト・レポート１０％、期末試験：４０％

■留意点

科目名	産業社会特講（ｽﾎﾟｰﾂで学ぶﾃﾞｰﾀｱﾅﾘﾃｨｸｽ入門）(Special Lecture on Industry Society Data Analytics Manual of Sports)
サブタイトル	スポーツで学ぶデータアナリティクス入門
担当教員	森本　美行
対象学年	1年生以上　　区分　秋学期

■講義目的
ビジネスの現場において、かつて重要視されていた、勘や経験に代わり、今は事実を元にしたデータが重要視され始めています。起きた事象を様々な観点から眺めながらその原因を探り、問題の本質を認識し、課題を発見し、解決することが求められています。データの収集法が以前と比較して劇的に進歩し、アクセスも容易にはなってきました。しかしそれらのデータを解釈し、問題解決に導くというプロセスを実行するというハードルは決して低いものではありません。実際に起きた現象の原因を探るために仮説を立て、仮説を証明するために分析を行い、検証し、問題解決に役立てるという一連のプロセスを、スポーツという誰もが興味を持つ身近なコンテンツを利活用して学び、実践的知識を獲得することを本講義の目的としています。

■講義分類
ビジネス創造、ビジネス ICT、地域ビジネス

■到達目標
（1）スポーツのデータから、勝敗、得失点、ゲームの進め方の優劣を決める要因は何か、データを利活用し説得力のある分析を行う。（2）データを取得し、そのデータの中から課題を発見し、問題解決する能力を高める。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項
DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細
②スポーツと言うコンテンツを通してデータ分析に関する基礎的な考え方養い，起きた事象だけではなく、なぜそれが起きたかという原因、そこに潜む問題と対応に対する理解を深める。

■授業形態
講義、グループディスカッション、プレゼンテーション

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容
予習 1.5 時間以上。自分が興味を持っているスポーツの観戦、終了後に、公式記録等のスタッツに触れること。自分の利用している SNS でどの程度スポーツについて語られているか興味を持って知ること。

■授業の概要
第１講　講師、学生双方の自己紹介 / この講義の狙い / スポーツ及びスポーツビジネス発展の歴史。
第２講　スポーツビジネスの特徴及びスポーツビジネスにおいて分析が必要な場面を理解する。
第３講　スポーツにおけるビジネスマネジメント、その際に必要な分析の考え方を学ぶ。
第４講　セイバーメトリクスという考え方。
第５講　スポーツにおけるフィールドマネジメント。その際に必要な分析の考え方。
第６講　スポーツにおけるデータ分析の必要性についてのまとめ
第７講　フィールドマネージメントデータ分析演習。
第８講　スポーツにおけるデータ分析の考え方。
第９講　スポーツにおけるデータ分析の実例紹介。
第 10 講　データ分析のプレゼンを行うためのチーム分け、内容の絞り込み、方向性の確認。
第 11 講　グループプレゼンテーション準備１
第 12 講　グループプレゼンテーション準備２
第 13 講　データ分析発表テーマ、発表の手順、プレゼン時の注意の最終確認。
第 14 講　グループプレゼンテーション（1）
第 15 講　グループプレゼンテーション（2）

■フィードバックの要領
課題に対してフィードバックを行う。

■評価基準
評価 A+（90 点以上）：授業への貢献度が高く、説得力のあるプレゼンテーション。
評価 A（89 ～ 80 点）：授業への貢献度が高く、講義内容を理解できているプレゼンテーション。
評価 B（79 ～ 70 点）：授業に参加し、講義内容をある程度理解したプレゼンテーション。
評価 C（69 ～ 60 点）：授業に貢献できず、講義内容があまり理解できていないプレゼンテーション。
評価 F（59 点以下）　：プレゼンテーションへの不参加。欠席 3 回以上。また周りに迷惑をかける受講態度。

■評価方法
出席回数（40%）、プレゼンテーション（30%）、受講態度（30%）

■留意点
課題に対してフィードバックを行う。

科 目 名 産業社会特講（地域の歴史から学ぶ人生のヒント）（Special Lecture on Industry Society Life Tips to Learn from the Region）

サブタイトル 地域の歴史と偉人の教訓をいかに人生に生かすか

担当教員 河合　敦

対象学年 1 年生以上　　**区分** 春学期

■講義目的

史跡・遺物、史資料を用いて偉人や地域の歴史を学習することによって、志を養うとともに、問題解決の方法や実践的知識を獲得する。

■講義分類

顧客理解、社会人力育成、地域ビジネス

■到達目標

本講義で学習した偉人の生涯や地域の歴史的事象を、現代社会や自身の問題に置き換えてとらえ、教訓や問題解決のための理論として役立てることができるようにする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

多摩地域の詳しい歴史や偉人を学ぶことを通じて、この地域における先人の業績を知り、その遺産を多摩地域の活性化に活かそうとする意識、さらには日本全体に活用しようとするグローバルな視点を有するようにする。

■授業形態

グループディスカッション、プレゼンテーション、フィールドワーク

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

3 回にわたる学外学習の前に入念な下調べを行い、事後には小レポートを提出してもらいます。また、後半は各自がプレゼンテーションを行います。このため、各回平均 1.8 時間程度の準備学習が必須となります。

■授業の概要

第 1 講　「オリエンテーション」
第 2 講　「歴史学とは何か。なぜ人は歴史に学ばなくてはならないのか」
第 3 講　「幕末の志士の生き方から学ぶ問題解決のための理論」
第 4 講　「第 1 回　校外学習　地域にある資料館・博物館を見学する」
第 5 講　「実際の遺物・史料に触れてみよう」
第 6 講　「第 2 回　校外学習①　新宿博物館見学」
第 7 講　「第 2 回　校外学習②　新宿博物館見学」
第 8 講　「前回の校外学習の事後学習。次回の校外学習の事前学習」
第 9 講　「第 3 回　校外学習①　新撰組の活動拠点・日野を歩く」
第 10 講　「第 3 回　校外学習②　新撰組の活動拠点・日野を歩く」
第 11 講　「第 3 回　校外学習③　新撰組の活動拠点・日野を歩く」
第 12 講　「プレゼンテーションの準備学習」
第 13 講　「学生によるプレゼンテーション①」
第 14 講　「学生によるプレゼンテーション②」
第 15 講　「学生によるプレゼンテーション③」

■フィードバックの要領

学生のレポートやプレゼンに対しコメントを記入したり述べる。

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：出席点 30%、小レポート 25%、プレゼンテーション 20%、レポート 25%の総計が 90%以上
評価 A（89 ～ 80 点）：出席点 30%、小レポート 25%、プレゼンテーション 20%、レポート 25%の総計 80 ～ 89%
評価 B（79 ～ 70 点）：出席点 30%、小レポート 25%、プレゼンテーション 20%、レポート 25%の総計 70 ～ 79%
評価 C（69 ～ 60 点）：出席点 30%、小レポート 25%、プレゼンテーション 20%、レポート 25%の総計 60 ～ 69%
評価 F（59 点以下）　：出席点 30%、小レポート 25%、プレゼンテーション 20%、レポート 25%の総計 59%以下

■評価方法

出席点 30%、小レポート 25%、プレゼンテーション 20%、レポート 25%

■留意点

科目名	産業社会特講（ビジョン・マネジメント論 2018 春）（Special Lecture on Industry Society Vision Management Theory 2018 Spring）
サブタイトル	－ 職業の働き方を「稼ぐ力」へ変える！【荻阪式「7つの成長技法」】 －
担当教員	荻阪　哲雄
対象学年	1年生以上　　区分　春学期

■講義目的

本特講は、１年生～４年生までの全学年が対象です。【職業のビジョン】をテーマに、「社会」と「働き方」と「人生」を、４ヵ月間じっくりと考えられる授業になり、アクティブ・ラーニングで共に進めます。あなたが「主人公」になって、自分の「志」から、「将来の職業ビジョン」を見つける「実験教室」になります。講義の目的は、職業の働き方を、稼ぐ力へ変える「ビジョン・マネジメント」を学び、身につけることです。１５回の講義で学ぶ【７つの成長技法】は、１万人以上の企業リーダーを支援してきた組織変革コンサルタントの荻阪哲雄が、コンサルティング・フィールドの最前線でつかみ、体系化した「学び方を学ぶ＝（教わる）方法」です。将来、あなたが解決したい「社会の課題」を発見するために、必要となる【未来を変える７つの力】を一挙公開！その成長するための力を身につけ、最終回までに「あなたの職業ビジョン・ストーリー」を、一緒にアウトプットすることをめざします。

■講義分類

ビジネス創造、社会人力育成、ビジネスマネジメント

■到達目標

①講義を聴き、自分で考え、内省を行い、【講義の所感】を書き、提出することができる　②講義で学んだ７つの技法を、相手と対話しながら【現実の行動】へ移すことができる　③講義の学びを、自らの【職業ビジョン】へ変えて、相手に【自分の言葉】で伝えることができる

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

社会と自分の関わりを考えて職業ビジョンを描き、自らを「内省する力」を磨きます。自分の言葉で、ビジョンを、発信できる技能を修得。この表現と技能を身につけることで、社会・組織に貢献できる人材を育成する。

■授業形態

講義、ディスカッション、双方向の対話

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

毎週水曜日の授業終了日から、講義の復習に１．５時間以上をかけて「所感レポート」を書き、日曜日夜２３時まで、指定の指示方法にて提出。所感レポートは（Ｗｏｒｄ、Ａ４の１枚、４００字以上）で書くこと。

■授業の概要

第１講　職業の働き方をつくる　「ビジョン・マネジメント論」の全体像を紹介する
第２講　職業の働き方を見つめる　第１の成長技法　「ときめき力」とは、何か？
第３講　なぜ、働き方を見つめる　「ときめき力」が、必要なのか？
第４講　職業の働き方を起こす　第２の成長技法　「実践力」とは、何か？
第５講　なぜ、働き方を起こす　「実践力」が、必要なのか？
第６講　職業の働き方を高める　第３の成長技法　「修業力」とは、何か？
第７講　なぜ、働き方を高める　「修業力」が、必要なのか？
第８講　職業の働き方を変える　第４の成長技法　「結果力」　とは、何か？
第９講　なぜ、働き方を変える　「結果力」　が、必要なのか？
第 10 講　職業の働き方を深める　第５の成長技法　「体験力」　とは、何か？
第 11 講　なぜ、働き方を深める　「体験力」　が、必要なのか？
第 12 講　職業の働き方を強める　第６の成長技法　「盟友力」　とは、何か？
第 13 講　なぜ、働き方を強める　「盟友力」　が、必要なのか？
第 14 講　職業の働き方を省みる　第７の成長技法　「修正力」　とは、何で、なぜ必要なのか？
第 15 講　最終回【ビジョン・プレゼンテーション】　／　私の「職業ビジョン」　とは、何か？

■フィードバックの要領

講義の所感レポートに対し、講師から各履修生へ助言メールでフィードバックを贈る。

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：受講姿勢、対話内容、所感レポート、最終提出物が、到達目標へ達し優れている場合。
評価 A（89 ～ 80 点）：受講姿勢、対話内容、所感レポート、最終提出物が、到達目標へ達している場合。
評価 B（79 ～ 70 点）：受講姿勢、対話内容、所感レポート、提出物のいずれかが　到達目標へもう一歩の場合。
評価 C（69 ～ 60 点）：受講姿勢、対話内容、所感レポート、提出物がもうひと踏ん張りで今後に期待する場合。
評価 F（59 点以下）　：低い出席率で、所感レポートが出せず、最終アウトプットを提出できない。

■評価方法

講義の出席率、対話内容、所感レポート、最終提出物を、総合的に１００％で評価。

■留意点

本講義は、全学年が対象。昨年の受講生の声には『自分に目標があって、達成する方法がわからない人は、履修するべき講義（０さん）』『将来のビジョンと、人生を、真剣に考えたい人には、勧めたい授業（Ｉさん）』との感想レビューがありました。尚、本講義を受けた多摩大生で【職業ビジョンをブラシュＵＰしたい】【就活に向けて再度、学びたい】という方は大歓迎。再履修の方も評価基準を満たせば、新たに２単位が取得できます。

科 目 名 産業社会特講（メディア新時代の情報表現 I）(Special Lecture on Industry Society Information Statement of Media New Era I)

サブタイトル あなたがメディア！情報発信へのファーストステップ

担当教員 木村　知義

対象学年 1 年生以上　　**区分** 春学期

■講義目的

SNS 全盛の時代である。ニュースも SNS、友人との連絡も SNS…、フェイスブックやツイッターといったソーシャルメディアが日常的な情報発信ツールとなった。ＩＣＴ（情報通信技術）のめざましい進歩によって、これまで情報の「受け手」としてしか存在しえなかった誰もが情報発信の主体、「送り手」になる時代を、いま、我々は生きている。ひと言でいえば、「あなたがメディアだ！」という社会である。それだけに、責任を自覚し、何を、どう伝えるのかが深く問われる時代でもある。こうした時代認識と問題意識に立って、社会や地域を見つめ、自らテーマを発見し、企画、取材から情報発信まで、メディアにかかわる全プロセスを実践的に学ぶことで、課題発見能力、企画力、取材力、そして問題解決能力にいたる、実社会で通用する総合的な力の獲得をめざす。同時に、現代社会におけるメディアの使命と責任、ICT の現状と課題、さらに可能性についても学ぶ。

■講義分類

ビジネス ICT、社会人力育成、ビジネスマネジメント

■到達目標

1．SNS をはじめ、現代のメディア環境とメディアの活用について知見を獲得し活用できる。2．地域や社会に目を向けて、テーマを見つけ、企画を立てることができる。3．インタビューなど取材力を鍛え実社会で実践できる。4．映像、音声、活字を複合したメディア表現、コンテンツ制作を実践的に学び社会に向けて発信できる。5．産業社会で通用するマネジメント能力、問題解決能力を獲得し、情報発信能力を力強く駆使できる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

メディアにおける情報表現を実践的に学び、信頼される情報発信能力を身につける。

■授業形態

グループディスカッション、プレゼンテーション、フィールドワーク

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

毎回の予習課題には最低限２時間程度の学習が必要となる。さらに教室で学んだ事柄について知見を広げ、問題意識を深めるための復習として２～３時間程度のワークや学習を課す。

■授業の概要

第１講　メディア新時代とはーメディアはどう進化してきたのか
第２講　デジタル・ストーリーテリングについて学ぶ（１）
第３講　デジタル・ストーリーテリングについて学ぶ（２）
第４講　デジタル・ストーリーテリングについて学ぶ（３）
第５講　作品の視聴ーデジタル・ストーリーテリングの意義と活用について
第６講　「メディアクティブ」という存在について
第７講　メディアクティブのリテラシー
第８講　動画作品の制作へ
第９講　撮る！ビデオ撮影の実際（１）ー「カメラの達人」になるために
第 10 講　撮る！撮影の実際（２）ーカメラを持って街へ、野に出よう
第 11 講　ロケ取材へー企画をもとに「取材計画」を立て実行に移す
第 12 講　編集と再構成～ポスト・プロダクションの実際～（１）
第 13 講　編集と再構成～ポスト・プロダクションの実際～（２）
第 14 講　「完プロ」仕上げ作業、作品完成へ
第 15 講　番組視聴と検証

■フィードバックの要領

毎回ほぼマンツーマンで各自の学修の進捗状況を確認しながらフィードバック。

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：受講姿勢が真摯。独創性に富む「デジタル・ストーリーテリング」「動画作品」を完成。
評価 A（89 ～ 80 点）：日常の学習態度が真摯。「デジタルストーリーテリング」「動画作品」を完成。
評価 B（79 ～ 70 点）：日常の学習態度が真摯で、いずれかの作品を完成させ、努力が顕著。
評価 C（69 ～ 60 点）：「デジタルストーリーテリング」「動画作品」のどちらかを作り上げる。
評価 F（59 点以下）　：「デジタルストーリーテリング」「動画作品」のいずれも完成に至らず。

■評価方法

制作作品６０％（デジタルストーリーテリング＋動画作品）、日常の学習態度、受講姿勢４０％

■留意点

①自ら調べ、考え、企画を立てて議論し、取材に歩き、編集に取り組む等、相当大変なワークが不可欠になる。出席して、座っているだけでは無意味で単位にならない！ことを理解して履修を。②企画を形あるものに作り上げる喜びを味わう、自発性にもとづく創造的な「学びの場」をめざす。どんなことにも興味を持ち、チャレンジ精神に富む学生諸君の参加を呼びかける。

科目名	産業社会特講（メディア新時代の情報表現Ⅱ）(Special Lecture on Industry Society Information Statement of Media New Era Ⅱ)
サブタイトル	あなたがメディア！情報発信へのファーストステップ
担当教員	木村　知義
対象学年	1年生以上　　区分　秋学期

■講義目的

ＩＣＴ（情報通信技術）のめざましい進歩によって、これまで情報の「受け手」としてしか存在しえなかった我々の誰もが情報発信の主体になれる時代がやってきている。フェイスブックやツイッターといったソーシャルメディアがめざましい広がりをみせて、日常的な情報発信ツールとなっている。さらに、「オルタナティブ・メディア」あるいは「コミュニティ・メディア」といわれる、市民によるメディア発信も、世界各地で活発におこなわれている。それだけに、何を、どう伝えるのかが深く問われる時代だというべきである。こうした時代認識と問題意識に立って、社会や地域を見つめ、自らテーマを発見し、企画、取材、編集といった、メディアにかかわる全プロセスを実践的に学び、課題発見能力、企画力、取材力、そして問題解決能力にいたる、実社会で通用する総合的な力の獲得をめざす。同時に、現代社会におけるメディアの使命と責任、ICT の現状と可能性について、春学期の問題意識をさらに深める。

■講義分類

ビジネス ICT、社会人力育成、ビジネスマネジメント

■到達目標

1. SNS をはじめ､現代のメディア環境とメディアの活用について知見を獲得し活用できる｡2. 地域や社会に目を向けて、テーマを見つけ、企画を立てることができる。３．インタビューなど取材力を鍛え実社会で実践できる。４．映像、音声、活字を複合したメディア表現、コンテンツ制作を実践的に学び社会に向けて発信できる。５．産業社会で通用するマネジメント能力、問題解決能力を獲得し、情報発信能力を力強く駆使できる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

メディアにおける情報表現を実践的に学び、信頼される情報発信能力を身につける。

■授業形態

グループディスカッション、プレゼンテーション、フィールドワーク

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

実践的な学びという趣旨からワークが中心になるため、リサーチ、企画書作成、取材計画の立案と文書化、取材、編集作業など、事前および事後の学習・ワークで、それぞれ２～３時間以上の自主学習が不可欠となる。

■授業の概要

第１講　メディアはメッセージだ！
第２講　企画を立てる
第３講　企画会議へ―企画を練る、企画を鍛える
第４講　デジタル・ストーリーテリングについて学ぶ
第５講　デジタル・ストーリーテリングをつくる
第６講　デジタル・ストーリーテリングの意義と地域社会や企業での活用について
第７講　撮る！動画撮影の実際（1）―初めての動画撮影へ
第８講　撮る！動画撮影の実際（2）―カメラを持って街へ、野に出よう
第９講　「問い」がすべて！インタビューの力を鍛える
第 10 講　ロケ取材に向けて
第 11 講　編集と再構成～ポスト・プロダクションの実際
第 12 講　編集した「素材」にナレーション、字幕、音などを合わせて完成へ
第 13 講　番組視聴と検証
第 14 講　地域に軸足、目は世界に！！
第 15 講　メディア新時代の情報表現とメディア実践

■フィードバックの要領

毎回ほぼマンツーマンで各自の学修の進捗状況を確認しながらフィードバック。

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：受講姿勢が真摯。独創性に富む「デジタル・ストーリーテリング」「動画作品」を完成。
評価 A（89 ～ 80 点）：日常の学習態度が真摯。「デジタル・ストーリーテリング」「動画作品」を完成。
評価 B（79 ～ 70 点）：日常の学習態度が真摯で、いずれかの作品を完成させ、努力が顕著。
評価 C（69 ～ 60 点）：「デジタル・ストーリーテリング」「動画作品」のどちらかを作り上げた。
評価 F（59 点以下）　：「デジタル・ストーリーテリング」「動画作品」のいずれも完成に至らず。

■評価方法

制作作品６０％（デジタル・ストーリーテリング＋動画作品）、日常の学習態度、受講姿勢４０％

■留意点

①自ら調べ、考え、企画を立てて議論し、取材に歩き、編集に取り組む等、相当大変なワークが不可欠になる。出席して、座っているだけでは無意味で単位にならない！ことを理解して履修を。②企画を形あるものに作り上げる喜びを味わう、自発性にもとづく創造的な「学びの場」をめざす。どんなことにも興味を持ち、チャレンジ精神に富む学生諸君の参加を呼びかける。

科目名	産業社会特講（メディアの過去・現在・未来）(Special Lecture on Industry Society Past, Present, and Future of the Media)
サブタイトル	あらゆるものがメディアによってつながる時代の生き方を探る。
担当教員	橘川　幸夫
対象学年	1 年生以上
区分	春学期

■講義目的
現代社会において、メディアの役割は大きなものとなっています。本講座においては、私たちをとりまく、さまざまなメディア環境の歴史と構造を示し、最前線事例を紹介しながら、これからの社会のあり方と、実践的知識獲得を目標とします。

■講義分類
ビジネス創造、社会人力育成

■到達目標
社会に出るにあたり、自分の役割や方向性を見出す、手がかりを見つけ出すこと。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項
DP3 関心と意欲（未来社会への意欲）

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細
自分の頭と言葉で語ることの楽しさ

■授業形態
講義、グループディスカッション、グループワーク

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容
日ごろから接しているメディア（テレビ、ネット、新聞、雑誌、書籍など）について、自覚的にその役割を認識すること。
予習、復習に各 1.5 時間をあてる。

■授業の概要
第 1 講　個人的メディア体験論
第 2 講　出版のメディア史
第 3 講　見ること・伝えること
第 4 講　映像のメディア史
第 5 講　人間と社会の変遷
第 6 講　音楽のメディア史
第 7 講　商品の文化史
第 8 講　ゲームのメディア史
第 9 講　戦後日本の文化変遷史
第 10 講　放送のメディア史
第 11 講　メディアとしての教育
第 12 講　インターネットの意味
第 13 講　参加型メディア論
第 14 講　シンギュラリティとメディア
第 15 講　森を見る力

■フィードバックの要領
毎回の授業で、講義の内容と、課題について用紙に記入して提出のこと。

■評価基準
評価 A+（90 点以上）：期末試験と課題の得点が 90 点以上
評価 A（89 ～ 80 点）：期末試験と課題の得点が 80 点以上 90 点未満
評価 B（79 ～ 70 点）：期末試験と課題の得点が 70 点以上 80 点未満
評価 C（69 ～ 60 点）：期末試験と課題の得点が 60 点以上 70 点未満
評価 F（59 点以下）　：期末試験と課題の得点が 60 点未満

■評価方法
出席 50% 、課題 20%、試験 30%

■留意点
社会の中での自分の役割や、自分と社会の関係のとり方に関心のある学生の受講を希望します。

科目名　数字力で語る（How Basic Mathematics Apply to the World）

サブタイトル　グローバル時代に必須のリテラシー

担当教員　深沢 真太郎

対象学年　1年生以上　　区分　秋学期

■講義目的

英語と同じように、「数字」も世界共通の言語である。ゆえに、数字で語れないビジネスマンはこれからのグローバル社会で生きていくことはできません。この科目は、就職活動就に通るための数学的知識だけを学ぶのではなく、社会で生きていくために必要な数的思考とは何かを基礎から学びます。また、学生に問題の解説をさせることで、論理的かつ数的に説明できる能力を鍛えることも目的とする。「数字に強い人」を育成するためのベース作りに位置づけることができる、極めて重要な学習テーマである。

■講義分類

社会人力育成

■到達目標

（1）計算スキルを根本から訓練し、数字に対するリテラシー向上を目指す
（2）数字＝ビジネスでの言語と捉え、コミュニケーションに活用する
（3）良いのか悪いのか、高いのか安いのか、数的根拠をもって評価できる
（4）数字やグラフを用いて、実際に説得力ある説明ができる
（5）就職活動時に受験する基礎能力検査の対策を兼ねる

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

②ビジネスの中で必要となる数学的能力（主に思考力と表現力）を習得する。

■授業形態

講義、グループワーク、プレゼンテーション

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

前回講義の復習。ならびに次回講義の導入となる設定課題の学習。（1.5 時間）

■授業の概要

第1講　本当に必要な計算力（四則演算のそもそも）
第2講　実数と割合の操作とビジネスの活用
第3講　お金の計算各種（損益計算、清算問題、分割払い等）
第4講　論理的に数えあげるトレーニング（場合の数、順列、組み合わせ）
第5講　ビジネスでも使う3種類の確率、期待値計算
第6講　論理思考の基礎トレーニング（集合、推論）
第7講　ペースを数字で把握する技術（単位変換、速さ、仕事算）
第8講　平均値・中央値・標準偏差
第9講　グラフの活用法とエクセルスキル
第10講　データを読み、情報に変換するトレーニング
第11講　演習フェーズ：フェルミ推定・データ分析基礎
第12講　演習フェーズ：数学的問題解決法
第13講　演習フェーズ：就職活動に向けた、能力検査対策
第14講　演習フェーズ：総合演習
第15講　期末試験（講義内で実施）

■フィードバックの要領

レポートに対し、コメントを記入してフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：一般的なビジネスパーソンレベルにあると認められる
評価 A（89 ～ 80 点）：数的思考ならびに数的表現力に優れると認められる
評価 B（79 ～ 70 点）：就職活動に影響が出ないレベルと認められる
評価 C（69 ～ 60 点）：及第点。ただし、今後の自己研鑽が不可欠
評価 F（59 点以下）　：不十分。

■評価方法

期末試験 50%、レポート 20%、出席 30%

■留意点

①私語や携帯電話などマナーに関しては厳しく指導する。
②レポートや試験は講義中の講師の発言やアドバイスから出題されることが多い。毎回出席することが極めて重要である。
③履修希望者は初回講義に必ず出席すること。
④受講希望人数が教室定員を超過する場合は初回講義時のレポート内容により選定する。

科目名	スタディースキル入門（Introduction to Study Skills）
サブタイトル	「大学生・社会人」になるために
担当教員	初見、後藤
対象学年	1 年生以上
区分	春・秋学期

■講義目的

本講義では，アクティブラーニングを用いて，大学での「学びの方法」を学ぶと同時に，大学生および社会人として求められる自ら学問を修めようとする姿勢である自修力の養成を図る．具体的には，講義を整理する力であるノートテイキング能力，文章を読み解くためのリーディング能力，正確文章を書くためのライティング能力，円滑にディスカッションを行うためのコミュニケーション能力，そして自身の意見を他者に正確に伝えるためのプレゼンテーション能力の 5 点をスタディースキルと位置付ける．その上で，これらの技能に留まらず，学修する者としての態度をも養成し，今後の学修に繋げるための自修力を身に付けることを目的とする．基本的にはランダムに割り振ったグループ学習の形式を採用する．さらに，本講義においては，受講生同士の相互フィードバックを促進するためのオンラインシステムを導入する．これにより，自身の学びをより深化させると同時に，コミュニケーション能力の育成を目指す．

■講義分類

ビジネス環境理解，社会人力育成

■到達目標

1.「ノートテイキング能力：箇条書きや図解などを用いて会話や講義を整理できる」．2.「リーディング能力：論理的文章を理解した上で自身の意見を整理できる」．3.「ライティング能力:他者に誤解がないような表現を用いて論理的に書くことができる」．4.「コミュニケーション能力:他者に対して自身の意見を適切に伝えられる」．5.「プレゼンテーション能力:大勢に対して自身の意見を適切に意見を伝えられる」．

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

この授業では大学生としての思考のフレームワークを身につけると同時に，社会人として通用する思考力･判断力の基礎を養成していく．

■授業形態

講義，グループディスカッション，グループワーク

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

各回の講義に際して，教科書の該当箇所を読むことを予習として課す（30 分程度）．さらに，復習として資料の振り返り（15 分程度）・各回の課題（30 分程度）および他の履修生に対するフィードバックを行う（25 分）．

■授業の概要

第 1 講　イントロダクション：講義の導入と「大学言葉」を紹介する．
第 2 講　ノートテイキングとメモ 1：大学でのノートの取り方のヒントを提示する．
第 3 講　ノートテイキングとメモ 2：図で表して整理する．
第 4 講　リーディング 1：長文読解に必要な論理力を磨く．
第 5 講　リーディング 2：論理的文章のための図解方法を学ぶ．
第 6 講　リーディング 3：情報整理のためのノート・カードの使い方とグラフの読み解き方を学ぶ
第 7 講　ライティング 1：レポートの執筆方法を学ぶ．
第 8 講　ライティング 2：レポートのピアレビュー（相互評価）から文章の執筆方法を学ぶ．
第 9 講　ライティング 3：ピアレビューを受けて，さらに文章を精緻に書き上げる．
第 10 講　コミュニケーション 1：ディスカッションの手法と注意すべき点を紹介する
第 11 講　コミュニケーション 3：与えられたテーマに対して，ディスカッションを行う 1.
第 12 講　コミュニケーション 3：与えられたテーマに対して，ディスカッションを行う 2.
第 13 講　プレゼンテーション 1：プレゼンテーションの基本的なスキルの紹介と最終課題の準備
第 14 講　プレゼンテーション 2：グループプレゼンテーションに向けた準備
第 15 講　プレゼンテーション 3：

■フィードバックの要領

オンラインシステムを導入し，学生同士および教員によるフィードバックを実施する．

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：平常点，小課題，最終プレゼンのいずれもが顕著に優れており，合計が 90 点以上である．
評価 A（89 ～ 80 点）：平常点，小課題，最終プレゼンが優れており，合計が 80 点以上である．
評価 B（79 ～ 70 点）：平常点，小課題，最終プレゼンが十分に良く，合計が 70 点以上である．
評価 C（69 ～ 60 点）：平常点，小課題，最終プレゼンの合計が 60 点以上である．
評価 F（59 点以下）　：平常点，小課題，最終プレゼンの合計が 60 点未満か，他の履修者の勉学を妨げている．

■評価方法

平常点:30%:毎回の講義における履修状況を評価します．小課題:40%:講義の内外で小課題を課します．最終プレゼン:30%，教員の評価 20% および学生によるピアレビューを 10% として，その合計によって算出する．

■留意点

1.「履修状況に応じて，内容を変更することがある」．2.「この授業ではパソコンを用いて授業を展開し，授業資料は web での配信を予定している．したがって，授業の際には貸与された端末を十分に充電して持参すること．なお，端末を忘れた場合には欠席扱いにするので気をつけること」．3.「Google Classroom を用いて連絡を行うために随時確認すること」．

科 目 名　スポーツ I- 体づくりとスポーツ（Sports I）

サブタイトル　筋力トレーニング、ストレッチ、レクリエーション、体力測定、登山

担当教員　大澤　拓也

対象学年　1 年生以上　　区分　春・秋学期

■講義目的

目的は筋力トレーニング、ストレッチ、レクリエーションを行い、自身の体を動かすことの面白さを感じること、また、体力測定を行い、自身や他者の体力や健康を理解することです。
また、本講義では、心拍数計などを用いた最新の体づくりを実施し、現代社会における健康やスポーツのトレンドを経験を通じて学ぶことを目的としています。

■講義分類

社会人力育成

■到達目標

体を動かすことにより、自身の体を理解すること、そして運動を通じた他者との関わり方を養うことを目標とする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

運動を通じて、他者と交流することにより、自身が他者に興味を持ち、他者を理解できるようになるだけでなく、他者に自身の興味を持たせ、自身を理解してもらえる能力を養える。

■授業形態

講義、実技、グループワーク

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

予習としては、体に関するテレビや雑誌を見るように心がける。また、復習としては、講義内で実施する筋力トレーニングやストレッチ等、また体力測定の方法を自宅で実施する。（1.5 時間）

■授業の概要

第 1 講　講義概要については、個々のクラスの教員の指示に従ってください（以下同様）.
第 2 講　講義概要については、個々のクラスの教員の指示に従ってください .
第 3 講　講義概要については、個々のクラスの教員の指示に従ってください .
第 4 講　講義概要については、個々のクラスの教員の指示に従ってください .
第 5 講　講義概要については、個々のクラスの教員の指示に従ってください .
第 6 講　講義概要については、個々のクラスの教員の指示に従ってください .
第 7 講　講義概要については、個々のクラスの教員の指示に従ってください .
第 8 講　講義概要については、個々のクラスの教員の指示に従ってください .
第 9 講　講義概要については、個々のクラスの教員の指示に従ってください .
第 10 講　講義概要については、個々のクラスの教員の指示に従ってください .
第 11 講　講義概要については、個々のクラスの教員の指示に従ってください .
第 12 講　講義概要については、個々のクラスの教員の指示に従ってください .
第 13 講　講義概要については、個々のクラスの教員の指示に従ってください .
第 14 講　講義概要については、個々のクラスの教員の指示に従ってください .
第 15 講　講義概要については、個々のクラスの教員の指示に従ってください .

■フィードバックの要領

レポートに対して、コメントを記入してフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：スキル開発と同時にその社会的意義の理解がなされていること。
評価 A（89 ～ 80 点）：技能の開発が十分行われ、将来行かされる準備ができていること。
評価 B（79 ～ 70 点）：技能や知識、態度の形成が行われたと認められること。
評価 C（69 ～ 60 点）：一定の経験とこれに対する自己理解、態度形成が行われたと認められること。
評価 F（59 点以下）　：「スポーツ」の講義目的に沿った活動ができなかったとみられる場合、F 評価とします。

■評価方法

以下（1）（2）による総合評価とする。教員毎に配分は異なる。（1）授業へのコミットの深度、参加態度　（2）講義目的である①スキルの修得②知識の修得③自分や他者に資する①②のマネジメント能力

■留意点

①高校までの「体育」とコンセプトが異なることに留意して履修してもらいたい。 ②各講義において、指示が異なるので、これによく留意して受講したもらいたい。 ③原則として、受講希望者は、学期の第 1 講の日時に、指定された教室に集合しなければならない。（T-NEXT にて指示する）

科目名	スポーツ I- シェイプアップフィットネス（Sports I-Fitness）
サブタイトル	シェイプアップフィットネス
担当教員	梅澤　佳子
対象学年	1 年生以上
区分	秋学期

■講義目的

スポーツ文化の諸側面を学ぶことによって、(1) 自分の体を知り、自ら「育てる」「つくる」「維持する」ことができる知識や能力を身につけること。(2) 生涯にわたってスポーツ文化を楽しむ能力（「する」だけでなく、「みる」「よむ」などの楽しみかたもあります）を身につけること。(3) スポーツ文化を通じて、仕事生活、家庭生活、その他余暇生活など、人生全体を豊かにしていくための資質を、授業内外のさまざまな体験を通じて獲得していくこと。(4) スポーツの価値についての知見を深めることを目的としています。

■講義分類

顧客理解、ビジネスマネジメント、社会人力育成

■到達目標

「講義目的」に記載されている目的に即した、個々人の発展が見られることが目標であり、学生一人ひとりの状況に応じた課題を達成することが個人の到達目標となります。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

現状を分析して課題を明らかにできる課題発見力、課題解決に向けたプロセスを明らかにして準備できる
計画力

■授業形態

講義、実技、グループワーク

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

スキル開発だけでなく、スポーツの意義や社会的な存在価値について理解するべく、スポーツに関する文献、報道、その他の情報を十分に収集し、理解しておくこと。(90 分程度)

■授業の概要

第 1 講　本講義の目的、到達目標、評価の方法、受講にあたっての注意点等についての説明
第 2 講　身体測定①
第 3 講　ストレッチと身体ほぐし
第 4 講　ストレッチ・身体ほぐし・トレーニング
第 5 講　ストレッチとトレーニング
第 6 講　ストレッチとトレーニング
第 7 講　ストレッチとトレーニング
第 8 講　ストレッチとトレーニング
第 9 講　有酸素運動の理論と実践
第 10 講　有酸素運動とトレーニング
第 11 講　有酸素運動を体験する
第 12 講　身体測定②
第 13 講　3 日間の食生活調査表の作成①
第 14 講　3 日間の食生活調査表の作成②
第 15 講　振り返りとディスカッション

■フィードバックの要領

トレーニング日誌の確認とコメント記載によるコミュニケーション等

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：スキル開発と同時にその社会的意義の理解がなされていること。
評価 A（89 ～ 80 点）：技能の開発が十分行われ、将来生かされる準備ができていること。
評価 B（79 ～ 70 点）：技能や知識、態度の形成が行われたと認められること
評価 C（69 ～ 60 点）：一定の経験とこれに対する自己理解、態度形成が行われたと認められること
評価 F（59 点以下）　：「スポーツ」の講義目的に沿った活動ができなかったとみられる場合、F 評価とします。

■評価方法

以下（1）（2）による総合評価とする。教員毎に配分は異なる。（1）授業へのコミットの深度、参加態度　（2）講義目的である①スキルの修得②知識の修得③自分や他者に資する①②のマネジメント能力

■留意点

①高校までの「体育」とコンセプトが異なることに留意して履修してください。 ②受講希望者が多数の場合、学期の第 1 講出席者を優先し抽選となります。

科目名	スポーツ I- テニス（Sports I-Tennis）
サブタイトル	テニスを通じて学ぶスポーツビジネス
担当教員	佐藤　文平
対象学年	1 年生以上
区分	春・秋学期

■講義目的

本演習では，ラケットとボールを操作するために必要な，眼と手のコーディネーショントレーニングを行いながら，テニスの基本を学んでいく．また，ゲームを通じて，マナーや他人とのコミュニケーションスキルも習得する．技術の定量化にはボール挙動測定器 TRACKMAN を用い , ボール速度やボール回転速度の理解を深める．

■講義分類

顧客理解 , グローバル創造 , ビジネス創造

■到達目標

テニスは，生涯スポーツとして社会人となってからも個人の体力に応じて楽しめるスポーツである．本演習の目的は，テニスの打球スキルとルールを学び，ゲーム（シングルス，ダブルス）を楽しめるようになることである

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

生涯スポーツであるテニスの最低限必要な技術を習得するとともに他人とのコミュニケーション能力を養う．

■授業形態

講義 , グループディスカッション , フィールドワーク

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

テニスの基本的な歴史やルールを理解して授業に臨むことを基本とする．

■授業の概要

第 1 講　テニスで起きる傷害について予習し、予防するために必要な準備運動を学ぶ．
第 2 講　ｽﾄﾛｰｸ、ﾎﾞﾚｰ、ｻｰﾌﾞ、ﾚｼｰﾌﾞ、ｽﾏｯｼｭというテニスに必要なスキルを予め理解して行う
第 3 講　ﾌｫｱﾊﾝﾄﾞｽﾄﾛｰｸ、ﾊﾞｯｸﾊﾝﾄﾞｽﾄﾛｰｸの基本的な打球方法を予め理解したうえで行う
第 4 講　ﾎﾞﾚｰやｽﾏｯｼｭの基本的な打球方法やﾎﾞﾚｰを使うﾀｲﾐﾝｸﾞを予め理解したうえで行う
第 5 講　ｻｰﾌﾞの種類（ﾌﾗｯﾄｻｰﾌﾞ , ｽﾗｲｽｻｰﾌﾞ , ｷｯｸｻｰﾌﾞ）の違い , 用途について予め理解した上で行う
第 6 講　TRACKMAN を用いてのサーブ速度測定実習を行ない , 自身の技術の定量化を行う
第 7 講　講義（テニスとジェロントロジー：生涯スポーツとしての役割）
第 8 講　ダブルスのルールを予め理解したうえでポイントゲーム練習を行う
第 9 講　講義（テニスの試合の成り立ちを予め理解したうえでｽﾎﾟｰﾂﾋﾞｼﾞﾈｽ・ﾏｰｹﾃｨﾝｸﾞを学ぶ）
第 10 講　シングルスのルールを予め理解したうえでポイントゲーム練習を行う
第 11 講　ﾀﾞﾌﾞﾙｽのﾌｫｰﾒｰｼｮﾝ（ｵｰｽﾄﾗﾘｱﾝﾌｫｰﾒｰｼｮﾝ , “I” ﾌｫｰﾒｰｼｮﾝ）を予め理解したうえで行う
第 12 講　ﾃﾆｽにおけるﾒﾝﾀﾙﾄﾚｰﾆﾝｸﾞ（ｵﾝｺｰﾄ）を行い , 事後のﾌﾟﾚｰにおけるﾒﾝﾀﾙ的な変化を感じる
第 13 講　テニスのスキルテストを行なう．
第 14 講　第六講目に行なった TRACKMAN で計測した測定値と比較する
第 15 講　まとめ．全ての技術を結集させて , シングルスの試合とダブルスの試合を行う

■フィードバックの要領

ﾚﾎﾟｰﾄに対してｺﾒﾝﾄを記入しﾌｨｰﾄﾞﾊﾞｯｸを行う．ｽｷﾙﾃｽﾄでは , 口頭によるﾌｨｰﾄﾞﾊﾞｯｸを行う

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：出席および授業参加意欲が高く , 練習等のコーディネート能力が高い．
評価 A（89 ～ 80 点）：出席および授業参加意欲があり , テニスの基本技術が備わり , 試合ができる．
評価 B（79 ～ 70 点）：テニスの基本技術は備わっているが , 出席および授業参加意欲が不十分．
評価 C（69 ～ 60 点）：出席 , 授業参加意欲 , テニスの基本技術ともに最低限度．
評価 F（59 点以下）　：出席 , 授業参加意欲が不十分で , テニスの基本技術を習得しようとする意欲がない．

■評価方法

出席 50%, 技術テスト 30%, レポート 20%

■留意点

個人でラケットを所有している学生は , 各々のラケットで授業に参加することが好ましい．運動の際にはテニスシューズであることが好ましい．

科目名	スポーツ I- バドミントン（Sports I-Badminton）		
サブタイトル	はじめてのバドミントン		
担当教員	梅澤　佳子		
対象学年	1 年生以上	区分	春・秋学期

■講義目的
スポーツ文化の諸側面を学ぶことによって、(1) 自分の体を知り、自ら「育てる」「つくる」「維持する」ことができる知識や能力を身につけること。(2) 生涯にわたってスポーツ文化を楽しむ能力（「する」だけでなく、「みる」「よむ」などの楽しみかたもあります）を身につけること。(3) スポーツ文化を通じて、仕事生活、家庭生活、その他余暇生活など、人生全体を豊かにしていくための資質を、授業内外のさまざまな体験を通じて獲得していくこと。(4) スポーツの価値についての知見を深めることを目的としています。

■講義分類
ビジネスマネジメント、社会人力育成

■到達目標
「講義目的」に記載されている目的に即した、個々人の発展が見られることが、講義としての目標であり、学生一人ひとりの状況に応じた課題を達成することが個人の到達目標となります。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項
思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細
表現と技能

■授業形態
講義、実技、グループワーク

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容
スキル開発だけでなく、スポーツの意義や社会的な存在価値について理解するべく、スポーツに関する文献、報道、その他の情報を十分に蒐集し、理解しておいて下さい。(90 分程度)

■授業の概要
第 1 講　講義の内容、目的、講義方法、履修する上での注意点等について
第 2 講　身体運動の基礎知識
第 3 講　体力測定①
第 4 講　バドミントンの特性と動きを学ぶ
第 5 講　基本となる動作の習得
第 6 講　基本となる動作の習得
第 7 講　基本となる動作の習得
第 8 講　基本となる動作の習得
第 9 講　基本となる動作の習得
第 10 講　試合（ダブルス）に向けての準備
第 11 講　ダブルスの基本ルールを学ぶ
第 12 講　試合（ダブルス）
第 13 講　試合（ダブルス）
第 14 講　体力測定②
第 15 講　自己分析とまとめ

■フィードバックの要領
実技中心のため講義内、講義前後に対応します。

■評価基準
評価 A+（90 点以上）：スキル開発と同時にその社会的意義の理解がなされていること。
評価 A（89 ～ 80 点）：技能の開発が十分行われ、将来生かされる準備ができていること。
評価 B（79 ～ 70 点）：技能や知識、態度の形成が行われたと認められること。
評価 C（69 ～ 60 点）：一定の経験とこれに対する自己理解、態度形成が行われたと認められること。
評価 F（59 点以下）　：「スポーツ」の講義目的に沿った活動ができなかったとみられる場合、F 評価とします。

■評価方法
（1）・（2）による総合評価とします。（1）授業へのコミットの深度、参加態度（2）講義目的である①スキルの修得②知識の修得③自分や他者に資する①②のマネジメント能力

■留意点
①高校までの「体育」とコンセプトが異なることに留意して履修してください。 ②受講希望者が多い場合は、学期の第 1 講の出席者を優先し抽選を行います。

科目名	スポーツ I- フットサル（Sports I-Futsal）
サブタイトル	フットサルと出会い、その奥深さをしるための入門スクール
担当教員	福角 有紘
対象学年	1 年生以上
区分	春・秋学期

■講義目的
①人生を豊かにするためのスポーツ教養の一つとして、フットサルの知識と技能を身に着けること②フットサルを実践することを通じて、社会人として求められる基礎能力であるコミュニケーションや判断力、実行力、協同する力などを育成すること。
③フットサルを通じて、競技者へのシンパシーを獲得し、観戦する（応援する）価値について知ること

■講義分類
顧客理解、ビジネスマネジメント、社会人力育成

■到達目標
競技のルールやマナーの概要を知り、その面白さ、楽しさについて十分理解し他人にもそれを伝えることができる。
フットサルゲームに参加し協同者と協力して楽しむことができる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項
DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細
フットサル競技の特性は、そのスピード感であり、判断力、決断力、実行力がきわめて大切であり、社会人力育成につながる

■授業形態
講義、実技、グループワーク

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容
スキル開発だけでなく、スポーツの意義や社会的な存在価値について理解するべく、スポーツに関する文献、報道、その他の情報を十分に蒐集し、理解しておくこと。（1.5 時間）

■授業の概要
第 1 講　クラスメンバーの決定
第 2 講　フットサルに出会う！
第 3 講　フットサル競技に必要な基礎的技能の習得①.
第 4 講　フットサル競技に必要な基礎的技能の習得②
第 5 講　フットサル競技に必要な基礎的技能の習得③
第 6 講　フットサルの応用技術・戦術を学ぶ①
第 7 講　フットサルの応用技術・戦術を学ぶ②
第 8 講　フットサルの応用技術・戦術を学ぶ③
第 9 講　フットサルの応用技術・戦術を学ぶ④
第 10 講　フットサル競技の実践①
第 11 講　フットサル競技の実践②
第 12 講　フットサル競技の実践③.
第 13 講　フットサル競技の実践④
第 14 講　フットサル競技の実践⑤
第 15 講　全体の振り返り

■フィードバックの要領
担当教員から学びの状況と今後の方向性について直接アドバイスします。

■評価基準
評価 A+（90 点以上）：スキル開発と同時にその社会的意義の理解がなされていること。
評価 A（89 ～ 80 点）：技能の開発が十分行われ、将来生かされる準備ができていること。
評価 B（79 ～ 70 点）：技能や知識、態度の形成が行われたと認められること。
評価 C（69 ～ 60 点）：一定の経験とこれに対する自己理解、態度形成が行われたと認められること。
評価 F（59 点以下）　：「スポーツ」の講義目的に沿った活動ができなかったとみられる場合、F 評価とします。

■評価方法
以下（1）（2）による総合評価とする。教員毎に配分は異なる。（1）授業へのコミットの深度、参加態度　（2）講義目的である①スキルの修得②知識の修得③自分や他者に資する①②のマネジメント能力

■留意点
高い競技レベルを前提としてはいない。むしろ、初心者や、スポーツ未経験者にスポーツ体験をしてもらうことを重視している。経験者には、これまでの経験を踏まえて、初心者受講生へのコーチングなどを通じてよりスポーツへの理解を深めてもらうことを期待する。

科目名	多摩学Ⅰ（Tama Study Ⅰ）
サブタイトル	―自身の通う大学について知り、多摩大生としてのアイデンティティを確立する―
担当教員	丹下、野坂、初見、後藤（晶）、加藤
対象学年	1 年生以上
区分	春学期

■講義目的
本講義の目的は、自校を理解することで帰属意識を高め、多摩大生としての自身のアイデンティティを確立することにある。大学 4 年間は長いようで短く、1 年次から計画性を持って行動し、その都度、軌道修正を行いながら大学生活を過ごすことが必要である。本講義を通じて、学生自身が快適な大学生活を過ごせるように本学への理解を深めると同時に、これまで知りえなかった本学の新たな魅力を発見してもらうことが狙いである。

■講義分類
社会人力育成

■到達目標
（1）「グローカル社会に対する理解」：多摩大学について全体的なイメージを持つとともに、ローカルな視点から多摩大学の役割・重要性を理解すること。（2）「社会の発展に貢献する力」：多摩大学の特徴や強みおよび課題を自分なりに見つけ出すこと。（3）「役割分担により組織目標の達成に貢献する力」：多摩大学の強みについて自分の言葉で説明することができ、プレゼンテーション能力を高めること。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項
DP5 高い志

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細
多摩大生としてのアイデンティティを確立しながら、多摩大生として社会の発展に積極的に関与する高い志を持つこと。

■授業形態
講義、グループワーク、プレゼンテーション

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容
毎回の講義では、講義で使用する専用ペーパー 1 枚（事前学習課題、講義ノート、講義に対する感想・疑問点等の記入欄を含む）を配布しますので、記入してください。（1.5 時間）

■授業の概要
第 1 講　イントロダクション : 多摩大学を学ぶことの意義
第 2 講　大学の教育史と現在～学部長より新入生に伝えたいこと～
第 3 講　教育と多摩大学①～多摩大学のカリキュラムの特徴を理解しよう～
第 4 講　教育と多摩大学②～私から見た多摩大学～
第 5 講　多摩大学の魅力を探す、発信する①～大学内を散策しよう～
第 6 講　多摩大学の魅力を探す、発信する②～前回の成果を発表しよう～
第 7 講　多摩大学におけるキャンパスライフの過ごし方
第 8 講　多摩大学におけるアクティブラーニングと国際交流（留学）
第 9 講　ゼミと多摩大学～「ゼミ力の多摩大」～
第 10 講　多摩大学をより魅力的にするために①～多摩大学の課題解決に努めよう～
第 11 講　多摩大学をより魅力的にするために②～前回の成果発表～
第 12 講　キャリアと多摩大学①～就職活動におけるサポート体制～
第 13 講　キャリアと多摩大学②～内定学生による就職活動の道と在校生へのアドバイス～
第 14 講　キャリアと多摩大学③～卒業生の多様な進路と在校生へのアドバイス～
第 15 講　まとめ、振り返り

■フィードバックの要領
レポートに対し、コメントを記入してフィードバックを行う。

■評価基準
評価 A+（90 点以上）：「多摩大学」の全体像を的確に捉え、自分の言葉で十分に説明することができる。
評価 A（89 ～ 80 点）：「多摩大学」の全体像を捉え、自分の言葉で十分に説明することができる。
評価 B（79 ～ 70 点）：「多摩大学」の全体像をある程度捉えられ、自分の言葉で説明することができる。
評価 C（69 ～ 60 点）：「多摩大学」の全体像をある程度捉えられるが、自分の言葉での説明が不十分。
評価 F（59 点以下）　：「多摩大学」の全体像をほとんど捉えられず、自分の言葉での説明も不十分。

■評価方法
出席率 30%、課題 30%、毎回の専用ペーパー 40%、＝ 100%、さらに発言ポイント＋ α として加味する。

■留意点
2018 年度入学生は必修科目ですので、必ず出席をすること

科目名 多摩学 II（Tama Study II）※ 2018 年度入学生用

サブタイトル ―多摩大学が立地する多摩地域の「産業」を学び、その強みと課題を考える―

担当教員 丹下、野坂、初見、後藤（晶）、加藤

対象学年 1 年生以上 (2018 年度入学生用) **区分** 秋学期

■講義目的
私たちの大学が立地している多摩地域にも、地域なりの「力」がある。その「力」と可能性について考えることが、この地域の活性化と発展につながる。「多摩学Ⅱ」では、多摩の来歴を探り、多摩の現代について考え、多摩という視点から未来を構想する学問である。その地歴を探り、この地域の持つ意味と可能性を多角的・学際的に探求していく。本講義では、多摩地域の多様な産業に着目し、多摩地域が持つ強みと課題について考える。

■講義分類
ビジネス環境理解、ビジネス創造、地域ビジネス

■到達目標
（1）「グローカル社会に対する理解」：多摩地域の産業について全体的なイメージを持つとともに、ローカルな視点から多摩地域の産業の重要性を理解すること。（2）「社会の発展に貢献する力」：他の地域と比べた産業の特徴や優位点および課題を自分なりに見つけ出すこと。（3）「役割分担により組織目標の達成に貢献する力」：多摩地域の産業について自分の言葉で説明することができ、プレゼンテーション能力を高めること。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項
DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細
多摩地域の産業における現状と課題を把握・分析することができ、課題解決に向けたアイディアの提案など、自分なりの解決策を論理的に導くことができる。

■授業形態
講義、グループワーク、プレゼンテーション

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容
毎回の講義後に、次回の講義で使用する専用ペーパー 1 枚（事前学習課題欄、講義ノート欄、講義に対する感想および疑問点記入欄を含む）を配布しますので、記入してください。（1.5 時間）

■授業の概要
第 1 講　イントロダクション：東京における多摩地域の位置づけ
第 2 講　多摩地域の人口動態・地勢・交通
第 3 講　前回のグループワークの成果発表
第 4 講　京王電鉄株式会社による講義
第 5 講　多摩地域における産業（1）農林業の果たす役割
第 6 講　前回のプレゼンテーションの発表
第 7 講　多摩地域の農業協同組合（ＪＡ）による講義
第 8 講　多摩地域の生産者による講義
第 9 講　多摩地域における産業（2）中小企業（製造業）の強みとそれを支える金融機関の役割
第 10 講　多摩信用金庫による講義
第 11 講　多摩地域における産業（3）観光業の果たす役割
第 12 講　前回のグループワークにおける成果の発表
第 13 講　多摩地域における観光関連業者による講義
第 14 講　多摩市役所による講義
第 15 講　まとめと振り返り

■フィードバックの要領
レポートに対し、コメントを記入してフィードバックを行う。

■評価基準
評価 A+（90 点以上）：多摩地域の産業の全体像を的確に捉え、自分の言葉で十分に説明することができる。
評価 A（89 ～ 80 点）：多摩地域の産業の全体像を捉え、自分の言葉で説明することができる。
評価 B（79 ～ 70 点）：多摩地域の産業の全体像をほぼ捉えており、自分の言葉で説明することができる。
評価 C（69 ～ 60 点）：多摩地域の産業の全体像を捉えているが、自分の言葉での説明が不十分。
評価 F（59 点以下）　：多摩地域の産業の全体像をほとんど捉えておらず、自分の言葉での説明が不十分。

■評価方法
出席率 40%、成果物（レポート等）30%、毎回の専用ペーパー 30%

■留意点
ゲストスピーカーの都合により、シラバスに記載されている予定の講義の回が変更となることがあります。

科目名	地域ビジネス入門（Introduction to Region Business）
サブタイトル	～地域課題解決の基本を考える～
担当教員	梅澤、中庭、松本、中澤、丹下、野坂
対象学年	1 年生以上
区分	春・秋学期

■講義目的
地域課題を事業の形で解決するのが地域ビジネスの世界で、グローバルビジネスや情報ビジネスとは視点が異なります。本講義は、人間、企業、産業、行政の各主体が連動し活動する地域ビジネスの世界と、それらに影響を与える文化や社会の変化、この両面を学ぶ入門科目です。地域系各教員の専門分野をもとに、地域ビジネスの世界・考え方を実例を交えて紹介します。

■講義分類
ビジネス環境理解、社会人力育成、地域ビジネス

■到達目標
地域ビジネスに関する基礎知識、基本的な考え方を習得すること。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項
DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細
地域ビジネスに関する基本的な学力を養い、その視点から社会を理解する能力を修得する。

■授業形態
講義、プレゼンテーション、グループディスカッション

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容
事前学習で３０分、毎回のレポートを書けるように直近講義のポイント整理で１時間。

■授業の概要
第１講　地域社会にとってビジネスとは何か
第２講　クリエイティブ都市論ー都市と地域を経営する（中庭）
第３講　沿線開発ビジネスモデルの世界ー郊外地域の課題（中庭）
第４講　これからの観光まちづくりー着地マーケティングの世界（中庭）
第５講　地域ビジネスを創造するには（丹下）
第６講　地域ビジネスのグローバル展開（丹下）
第７講　地域ビジネスとしての農業（野坂）
第８講　地域ビジネスとしての漁業（野坂）
第９講　コミュニティビジネス（松本）
第 10 講　主要地域ビジネスの事業開発（松本）
第 11 講　地域ビジネス実践報告（梅澤）
第 12 講　地域ビジネスとサービス・デザイン（梅澤）
第 13 講　映像産業と多摩地域（中澤）
第 14 講　ツーリズムの時代（中澤）
第 15 講　総括セミナー

■フィードバックの要領
レポートへのフィードバックを行う。

■評価基準
評価 A+（90 点以上）：各講義について深く理解し、地域ビジネスに対する考えを明確に示すことが出来る。
評価 A（89 ～ 80 点）：各講義について深く理解し、地域ビジネスに対する考えを示すことが出来る。
評価 B（79 ～ 70 点）：各講義について深く理解し、地域ビジネスの可能性を考えることが出来る。
評価 C（69 ～ 60 点）：各講義について深く理解し、地域ビジネスの重要性を把握している。
評価 F（59 点以下）　：各講義についての理解が不十分であり、地域ビジネスの重要性をつかんでいない。

■評価方法
出席 40%、各講義に関するレポート 60%

■留意点

科目名	中国語 I-X（Chinese I-X）
サブタイトル	中国語へのいざない
担当教員	水盛　涼一
対象学年	1年生以上
区分	春学期

■講義目的

中国、台湾、香港、澳門、シンガポール。いわゆる大中華圏で中国語を母語とする人々は 14 億人を超えます。これは英語（6億人）、インドのヒンディー語（5億人）、スペイン語（4億5千万人）、アラビア語（3億人）、そして日本語（1億3全万人）の母語話者をおさえ、世界で最大の話者人口です。しかも大中華圏は日本に近く、観光に貿易にと交流は益々密接になっています。すでに日本と切っても切り離せない関係の大中華圏について、最新の教科書を使い、社会や文化の話題を中心に、すぐに役立つ実践的な中国語を習得していきます。
※母語が中国語ではない学生のみ履修できます。二年次以上の学生の履修可否は面接のうえ決定します。

■講義分類

ビジネス環境理解、社会人力育成、グローバルビジネス

■到達目標

①中国・大中華圏の社会や文化について理解を深め、異文化との接触時に戸惑わず積極的に自己主張できるようにする。②中国語による自己紹介をはじめ、会話や表現への基礎力を身につける。③客観的指標として、中国語検定試験四級程度の実力をつけることを目標とする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

「表現と技能」が中心です。また語学はその言葉を母国語とする文化を知るものですから「知識と理解」となります。突き詰めれば「高い志」における「社会における多様な価値観」への関与という志に結びつくでしょう。

■授業形態

講義、双方向

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

講義前には必ず該当範囲を読み、ＣＤを聞いておいてください。また毎週にわたり簡単な確認テストを実施します。そのため、講義前にはおよそ二時間弱の予習復習が必要となるでしょう。

■授業の概要

第１講　オリエンテーション
第２講　中国語の発音について
第３講　教科書：第一課
第４講　教科書：第二課
第５講　教科書：第三課
第６講　教科書：第四課
第７講　教科書：第一課から第四課までの復習
第８講　教科書：第五課
第９講　教科書：第六課
第 10 講　教科書：第七課
第 11 講　教科書：第八課
第 12 講　教科書：第九課
第 13 講　教科書：第十課
第 14 講　期末試験に備えて
第 15 講　期末試験

■フィードバックの要領

毎週の小テストなどは当然ながら返却しますのでご意見をお書きください。

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：評価点 100 点（下記“配分”参照）のうち 90 点以上。
評価 A（89 ～ 80 点）：評価点 100 点（下記“配分”参照）のうち 89 ～ 80 点。
評価 B（79 ～ 70 点）：評価点 100 点（下記“配分”参照）のうち 79 ～ 70 点。
評価 C（69 ～ 60 点）：評価点 100 点（下記“配分”参照）のうち 69 ～ 60 点。
評価 F（59 点以下）　：評価点 100 点（下記“配分”参照）のうち 59 点以下。

■評価方法

期末試験（60%）、授業に取り組む姿勢・積極性および講義内小テスト（40%）。なお期末試験は自己紹介（30%）および文法に関する筆記試験（30%）によります。

■留意点

科目名	中国語 I-Y（Chinese I-Y）
サブタイトル	中国語 I
担当教員	田　園
対象学年	1 年生以上
区分	春学期

■講義目的
授業は主にリーディングとスピーキングより構成され、中国語の発音と基礎文法を習得したうえで、「すぐに使える」ことに重きをおく。リーディングは、主に基礎文法を習得する。スピーキングは、発音と簡単な日常会話を学習した後、本文の暗唱やロールプレイング形式で、応用練習を行い、知識やスキルの定着をはかる。全体的には中国語の「聞く」「話す」「読む」「書く」の 4 つの技能を伸ばし、異文化理解を深めるためのコミュニケーション能力向上を目指す。
※母語が中国語ではない学生のみ履修できる。

■講義分類
ビジネス環境理解、社会人力育成、グローバルビジネス

■到達目標
①中国語リーディングとスピーキングの基礎知識とスキルの習得、②異文化理解を深めるためのコミュニケーション能力向上。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項
DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細
中国語に関する基礎的な学力を養い、異文化理解を深めるためのコミュニケーション能力を向上させる。

■授業形態
講義、ロールプレイング

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容
授業前には CD を聞き、単語、文法、本文の予習をしておく。（1.5 時間）毎授業後には CD を繰り返して聞き、本文の読む練習・暗唱をし、練習問題を解く。（1.5 時間）

■授業の概要
第 1 講　ガイダンス及び中国語概説
第 2 講　第 1 課
第 3 講　第 2 課
第 4 講　第 3 課
第 5 講　第 4 課
第 6 講　第 1 課から第 4 課までの復習
第 7 講　実践：自分の名前の発音及び簡単な挨拶語
第 8 講　第 5 課
第 9 講　第 6 課
第 10 講　第 7 課
第 11 講　第 8 課
第 12 講　第 9 課
第 13 講　第 10 課
第 14 講　復習
第 15 講　期末テスト

■フィードバックの要領
宿題に対し、添削を記入してフィードバックを行う。

■評価基準
評価 A+（90 点以上）：特に優れているもの
評価 A（89 ～ 80 点）：優れているもの
評価 B（79 ～ 70 点）：一応の努力が認められるもの
評価 C（69 ～ 60 点）：合格と認められる最低限の水準を満たしているもの
評価 F（59 点以下）　：C の水準に達しないもの

■評価方法
期末テスト（60 点）、平常点（授業態度や小テストなど、20 点）、授業中の会話力（20 点）による総合評価

■留意点
授業の進行具合によって、授業内容や授業の進度が多少変更となる場合がある。

科目名	中国語 II-X（Chinese II-X）
サブタイトル	中国語Ⅱ
担当教員	田　園
対象学年	1 年生以上
区分	秋学期

■講義目的
授業は主にリーディングとスピーキングより構成され、「すぐに使える」ことに重きをおく。リーディングは、主に基礎文法を習得する。スピーキングは、本文を習った後、暗唱やロールプレイング形式で、応用練習を行い、知識やスキルの定着をはかる。全体的には中国語Ⅰに引き続き、中国語の「聞く」「話す」「読む」「書く」の４つの技能を伸ばし、異文化理解を深めるためのコミュニケーション能力を向上させる。
※母語が中国語ではない学生のみ履修できる。

■講義分類
ビジネス環境理解、社会人力育成、グローバルビジネス

■到達目標
①中国語リーディングとスピーキングの基礎知識とスキルの習得、②異文化理解を深めるためのコミュニケーション能力向上。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項
DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細
中国語に関する基礎的な学力を養い、異文化理解を深めるためのコミュニケーション能力を向上させる。

■授業形態
講義、ロールプレイング

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容
授業前には CD を聞き、単語、文法、本文の予習をしておく。（1.5 時間）毎授業後には CD を繰り返して聞き、本文の読む練習・暗唱をし、練習問題を解く。（1.5 時間）

■授業の概要
第１講　テキスト前半の復習
第２講　第１１課
第３講　第１２課
第４講　第１３課
第５講　第１４課
第６講　第１５課
第７講　第１１課から第１５課までの復習
第８講　第１６課
第９講　第１７課
第 10 講　第１８課
第 11 講　第１９課
第 12 講　第２０課
第 13 講　第１６課から第２０課までの復習
第 14 講　総復習
第 15 講　期末テスト

■フィードバックの要領
宿題に対し、添削を記入してフィードバックを行う。

■評価基準
評価 A+（90 点以上）：特に優れているもの
評価 A（89 ～ 80 点）：優れているもの
評価 B（79 ～ 70 点）：一応の努力が認められるもの
評価 C（69 ～ 60 点）：合格と認められる最低限の水準を満たしているもの
評価 F（59 点以下）　：C の水準に達しないもの

■評価方法
期末テスト（60 点）、平常点（授業態度や小テストなど、20 点）、授業中の会話力（20 点）による総合評価

■留意点
授業の進行具合によって、授業内容や授業の進度が多少変更となる場合がある。

科目名	中国語 II-Y（Chinese II-Y）
サブタイトル	中国語さらに一歩
担当教員	水盛　涼一
対象学年	1 年生以上
区分	秋学期

■講義目的

中国、台湾、香港、澳門、シンガポール。いわゆる大中華圏で中国語を母語とする人々は 14 億人を超えます。これは英語（6 億人）、インドのヒンディー語（5 億人）、スペイン語（4 億 5 千万人）、アラビア語（3 億人）、そして日本語（1 億 3 全万人）の母語話者をおさえ、世界で最大の話者人口です。しかも大中華圏は日本に近く、観光に貿易にと交流は益々密接になっています。すでに日本と切っても切り離せない関係の大中華圏について、春学期に引き続き、最新の教科書を使い、社会や文化の話題を中心に、すぐに役立つ実践的な中国語を習得していきます。
※母語が中国語ではない学生のみ履修できます。基本的に「中国語 I」の履修が必要です。二年次以上の学生の履修可否は筆記試験および面接のうえ決定します。

■講義分類

ビジネス環境理解、社会人力育成、グローバルビジネス

■到達目標

①中国・大中華圏の社会や文化について理解を深め、異文化との接触時に戸惑わず積極的に自己主張できるようにする。②中国語による自己紹介をはじめ、会話や表現への基礎力を身につける。③客観的指標として、中国語検定試験四級程度の実力をつけることを目標とする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

「表現と技能」が中心です。また語学はその言葉を母国語とする文化を知るものですから「知識と理解」となります。突き詰めれば「高い志」における「社会における多様な価値観」への関与という志に結びつくでしょう。

■授業形態

講義、双方向

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

講義前には必ず該当範囲を読み、ＣＤを聞いておいてください。また毎週にわたり簡単な確認テストを実施します。そのため、講義前にはおよそ二時間弱の予習復習が必要となるでしょう。

■授業の概要

第 1 講　オリエンテーション
第 2 講　中国語での自己紹介
第 3 講　教科書：第十一課
第 4 講　教科書：第十二課
第 5 講　教科書：第十三課
第 6 講　教科書：第十四課
第 7 講　教科書：第十五課
第 8 講　教科書：第十六課
第 9 講　教科書：第十七課
第 10 講　教科書：第十八課
第 11 講　教科書：第十九課
第 12 講　教科書：第二十課
第 13 講　教科書総復習
第 14 講　期末試験に備えて
第 15 講　期末試験

■フィードバックの要領

試験に対してフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：評価点 100 点（下記“配分”参照）のうち 90 点以上。
評価 A（89 ～ 80 点）：評価点 100 点（下記“配分”参照）のうち 89 ～ 80 点。
評価 B（79 ～ 70 点）：評価点 100 点（下記“配分”参照）のうち 79 ～ 70 点。
評価 C（69 ～ 60 点）：評価点 100 点（下記“配分”参照）のうち 69 ～ 60 点。
評価 F（59 点以下）　：評価点 100 点（下記“配分”参照）のうち 59 点以下。

■評価方法

期末試験（60%）、授業に取り組む姿勢・積極性および講義内小テスト（40%）

■留意点

試験に対してフィードバックを行う。

科目名	日本語講座上級（Japanese Language An Upper Course）
サブタイトル	日本語講座上級発表
担当教員	TIJ 東京日本語研修所
対象学年	1 年生以上
区分	秋学期

■講義目的
留学生が日本で生活するための日常会話だけでなく、大学の授業を聞くため、また授業に積極的に参加するため、及び、社会から情報を得るため、また社会に参加し問題解決するための日本語会話能力、聴解能力をつけると同時に、そのために必要な文法、語彙、表現を学ぶ。

■講義分類
ビジネス環境理解、社会人力育成、地域ビジネス

■到達目標
（1）社会生活や大学生活の中で話されている会話が理解できる。（2）社会生活や大学生活の中で、自分が言いたいことを伝えることができる。（3）社会の問題について、自分が考えたことが発表できる。 （4）調べたこと、研究したことなどをプレゼンテーションできる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項
DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細
世界で発生するさまざまな問題に対して、現状分析から課題を明確にし、解決のための方策を立てる専門的能力を体系的に修得する。

■授業形態
グループディスカッション、ディベート、プレゼンテーション

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容
予習として、新聞記事やニュース等の語彙を調べ、関連記事を読んでくること。復習・宿題として、記事の現状・背景を調べ考察しレポートやＰＰＴを提出すること。必要時間は各 150 分。

■授業の概要
第１講　 プレースメントテスト（作文・発表）・インターアクション授業
第２講　 聴解・要約・慣用句・ディベート用新聞①内容理解
第３講　 聴解・要約・慣用句・グループ討議・ディベート準備
第４講　 聴解・要約・慣用句・ディベート１回目
第５講　 聴解・要約・発表・慣用句・ディベート２回目
第６講　 聴解・要約・慣用句・ディベート用新聞②内容理解
第７講　 聴解・要約・慣用句・グループ討議・ディベート準備
第８講　 聴解・要約・発表・慣用句・ディベート１回目
第９講　 聴解・要約・慣用句・ディベート２回目
第 10 講　聴解・要約・慣用句・プレゼンテーション用新聞　内容理解
第 11 講　聴解・要約・発表・慣用句・グループ討議・プレゼン準備
第 12 講　聴解・要約・慣用句・グループ討議・プレゼン準備
第 13 講　聴解・要約・慣用句・プレゼンテーション１回目
第 14 講　プレゼンテーション２回目、修了プレゼンテーション準備
第 15 講　修了プレゼンテーションリハーサル・修了プレゼンテーション

■フィードバックの要領
課題や発表の際には即座に内容を吟味し合い、クラス全体で共有する。

■評価基準
評価 A+（90 点以上）：自分の考えが論理的に発表でき、調べたことをプレゼンテーションで披露できる。
評価 A（89 ～ 80 点）：自分の考えが問題なく発表でき、調べたことを分かりやすくプレゼンテーションできる。
評価 B（79 ～ 70 点）：考えたことが発表でき、調べたこと、研究したことなどをプレゼンテーションできる。
評価 C（69 ～ 60 点）：考えたことがなんとか発表でき、調べたことなどをプレゼンテーションできる。
評価 F（59 点以下）　：出席・授業中の活動・期末テストが基準を満たさなかった。

■評価方法
出席・授業態度・毎回のテスト・宿題：８０％、修了プレゼンテーション：２０％

■留意点
本講座は外国人留学生のための講座です。日本人学生が履修しても単位は授与されません。週二日の両日あわせて一講座となりますので、両方を履修してください。日本語講座上級を履修するためには、それ以前に日本語講座中級を履修していることが前提条件となります。

科目名	日本語講座初級（Japanese Language Beginners Course）
サブタイトル	日本語会話、文法、語彙
担当教員	TIJ 東京日本語研修所
対象学年	1 年生以上
区分	春学期

■講義目的
留学生が日本で生活するための日常会話、友だちと交流するための会話、また大学の職員、教師とコミュニケーションするための会話、社会から情報を得るための会話能力をつけると同時に、そのために必要な文法、語彙、表現を学ぶ。

■講義分類
ビジネス環境理解、社会人力育成、地域ビジネス

■到達目標
（1）日常生活や大生生活の中で話されている会話がほぼ理解できる。（2）日常生活や大学生活の中で自分が言いたいことを大体伝えることができる。（3）自分の経験や夢、希望などをスピーチ形式で発表できる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項
DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細
社会生活の中で必要な表現や語彙を学び、コミュニケーション力を身に付けて主体的に行動できるようにする。

■授業形態
グループディスカッション、グループワーク、プレゼンテーション

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容
予習として、教科書や新聞記事等の漢字の読みや語彙を調べてくること。復習・宿題として、短文作文やレポートを提出すること。必要時間は各 90 分。

■授業の概要
第 1 講　プレースメントテスト、作文・作文発表・漢字
第 2 講　作文、ニュース漢字、聴解
第 3 講　作文発表、作文、ニュース漢字、聴解
第 4 講　作文発表、作文、漢字、聴解、ニュース漢字
第 5 講　会話 1 課 ニュース漢字、聴解
第 6 講　会話 1 課 スピーチ、ニュース漢字、聴解
第 7 講　会話 1 課 スピーチ原稿書き、ニュース漢字、聴解
第 8 講　会話 2 課 スピーチ発表、ニュース漢字、聴解
第 9 講　会話 2 課 スピーチ、ニュース漢字、聴解
第 10 講　会話 2 課 スピーチ発表、ニュース漢字、聴解
第 11 講　会話 3 課 ニュース漢字、聴解
第 12 講　会話 3 課 スピーチ原稿書き、ニュース漢字、聴解
第 13 講　会話 3 課 スピーチ発表、ニュース漢字、修了スピーチ準備
第 14 講　修了スピーチ準備、ニュース漢字
第 15 講　期末テスト（文法・漢字）、スピーチ準備、修了スピーチ

■フィードバックの要領
期末テスト終了後に即座にフィードバックを行い、今学期の学習の総括をする。

■評価基準
評価 A+（90 点以上）：社会の問題について、自分が考えたことが論理的に発表できる。
評価 A（89 ～ 80 点）：社会の問題について、自分の考えたことが分かりやすく発表できる。
評価 B（79 ～ 70 点）：社会の問題について、自分が考えたことが発表できる。
評価 C（69 ～ 60 点）：社会の問題について、自分が考えたことが短く発表できる。
評価 F（59 点以下）　：出席・授業中の活動・期末テストで基準を満たさなかった。

■評価方法
出席・授業態度・毎回のテスト・宿題：８０%、修了スピーチ：２０%

■留意点
本講座は外国人留学生のための講座です。日本人学生が履修しても単位は授与されません。週二日の両日あわせて一講座となりますので、両方を履修してください。

科目名	日本語講座中級Ⅰ（Japanese Language Intermediate Course Ⅰ）
サブタイトル	日本語講座中級会話
担当教員	TIJ 東京日本語研修所
対象学年	1 年生以上
区分	春学期

■講義目的
留学生が日本で生活するための日常会話だけでなく、大学の授業を聞くため、また授業に積極的に参加するために必要な力を付ける。さらに、社会から情報を得るため、また社会に参加し問題解決するための日本語会話能力、聴解能力をつけると同時に、そのために必要な文法、語彙、表現を学ぶ。

■講義分類
ビジネス環境理解、社会人力育成、地域ビジネス

■到達目標
（1）社会生活や大学生活の中で話されている会話がほぼ理解できる。（2）社会生活や大学生活の中で、自分が言いたいことをほぼ伝えることができる。（3）社会の問題について、自分が考えたことが発表できる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項
DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細
日本語を通じて人間関係を構築し社会を学ぶ過程で遭遇するさまざまな課題に対処できる力を付ける。チームワークを大切にし、リーダーシップを取れるような積極性を修得する。

■授業形態
グループディスカッション、グループワーク、プレゼンテーション

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容
予習として、新聞記事やニュース等の漢字の読みや語彙を調べてくること。復習・宿題として、短文作文やレポートを提出すること。必要時間は各 90 分。

■授業の概要
第 1 講　プレースメントテスト、作文、作文発表、聴解
第 2 講　資料 1　本文・まとめ・聴解・要約・熟語
第 3 講　資料 1 関連の聴解・語彙・発表のための原稿書き・聴解・要約・熟語
第 4 講　資料 1 プレゼンテーション準備・聴解・要約・熟語
第 5 講　資料 2 本文・まとめ・聴解・要約・熟語
第 6 講　資料 2 語彙・聴解・聴解・要約・熟語
第 7 講　資料 2 ディベート準備・聴解・要約・熟語
第 8 講　資料 2 ディベートシナリオ・聴解・要約・熟語
第 9 講　資料 2 ディベート・聴解・要約・熟語
第 10 講　資料 3 本文・まとめ・聴解・要約・熟語
第 11 講　資料 3 聴解・語彙・原稿書き・聴解・要約・熟語
第 12 講　資料 3 ディベート・修了プレゼンテーション準備
第 13 講　修了プレゼンテーション準備
第 14 講　修了プレゼンテーション準備
第 15 講　期末テスト（文法・漢字）・修了プレゼンテーション準備・修了プレゼンテーション

■フィードバックの要領
課題や発表の後には即座にフィードバックを行ない、内容の定着を図る。

■評価基準
評価 A+（90 点以上）：会話がほぼ理解でき、言いたいことが伝えられ、社会問題を分かりやすく発表できる。
評価 A（89 ～ 80 点）：会話がだいたい理解でき、社会問題について、自分が考えたことがしっかり発表できる。
評価 B（79 ～ 70 点）：会話が理解でき、社会の問題について、自分が考えたことが発表できる。
評価 C（69 ～ 60 点）：やさしい会話が理解でき、社会問題について考えたことが短く発表できる。
評価 F（59 点以下）　：出席・授業中の活動・期末テストが基準を満たさなかった。

■評価方法
出席・授業態度・毎回のテスト・宿題：８０%、修了プレゼンテーション：２０%

■留意点
本講座は外国人留学生のための講座です。日本人学生が履修しても単位は授与されません。週二日の両日あわせて一講座となりますので、両方を履修してください。

科目名	日本語講座中級 II（Japanese Language Intermediate Course II）
サブタイトル	日本語講座中級発表
担当教員	TIJ 東京日本語研修所
対象学年	1 年生以上
区分	秋学期

■講義目的
留学生が日本で生活するための日常会話、友だちと交流するための会話、また大学の職員・教師とコミュニケーションするための会話、社会から情報を得るための会話能力をつけると同時に、そのために必要な文法、語彙、表現を学ぶ。

■講義分類
ビジネス環境理解、社会人力育成、地域ビジネス

■到達目標
（1）日常生活や大学生活の中で話されている会話がほぼ理解できる。（2）社会生活や大学生活の中で、自分が言いたいことをだいたい伝えることができる。（3）自分の経験や夢、希望などをスピーチ形式で発表できる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項
DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細
日本語を学ぶことで人間関係を構築し、社会に対する批判的な視点から課題を明確にし、解決する力を養う。

■授業形態
グループディスカッション、ディベート、プレゼンテーション

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容
予習として、新聞記事やニュース等の漢字の読みや語彙を調べてくること。復習・宿題として、記事の背景を調べレポートやＰＰＴを提出すること。必要時間は各 120 分。

■授業の概要
第 1 講　漢字・聴解・読解・ディスカッション
第 2 講　漢字・聴解・読解
第 3 講　漢字・聴解・読解・ディスカッション
第 4 講　漢字・聴解・読解・発表
第 5 講　漢字・聴解・読解・ディベート
第 6 講　漢字・聴解・読解
第 7 講　漢字・聴解・読解・発表
第 8 講　漢字・聴解・読解
第 9 講　漢字・聴解・読解・発表
第 10 講　漢字・聴解・読解
第 11 講　漢字・聴解・読解・ディスカッション
第 12 講　漢字・聴解・読解・発表
第 13 講　漢字・聴解・読解・ディスカッション
第 14 講　漢字・修了スピーチ準備
第 15 講　漢字・修了スピーチリハーサル・修了スピーチ

■フィードバックの要領
課題提出や発表の後は即座にフィードバックし、内容理解を定着させる。

■評価基準
評価 A+（90 点以上）：会話がほぼ理解でき、社会問題について考えたことが分かりやすく発表できる。
評価 A（89 ～ 80 点）：会話がだいたい理解でき、社会問題について考えたことがしっかり発表できる。
評価 B（79 ～ 70 点）：会話が理解でき、社会の問題について、自分が考えたことが発表できる。
評価 C（69 ～ 60 点）：やさしい会話が理解でき、社会問題について、考えたことが短く発表できる。
評価 F（59 点以下）　：出席・授業中の活動・期末テストが基準を満たさなかった。

■評価方法
出席・授業態度・毎回のテスト・宿題：８０%、修了プレゼンテーション：２０%

■留意点
本講座は外国人留学生のための講座です。日本人学生が履修しても単位は授与されません。週二日の両日あわせて一講座となりますので、両方を履修してください。

科目名	ビジネス数学基礎（Practical Mathematics）
サブタイトル	実社会で必要な数学スキル基礎
担当教員	大森（拓）、良峯、久保田、日本数学検定協会
対象学年	1年生以上
区分	春学期

■講義目的
経営情報学部においては、複合領域での知識や技術の修得が必要となる。このような複合領域を対象とする分野で必要になるデータを扱う数学的手法の基礎について、演習と講義により身につけることが本講義の目的である。この講義は選択必修科目である。演習の積み重ねを通して技術が身に付く構成になっているので、欠席しないこと。
本講義では、課題を解決するためにどのようなデータの取り扱いをするとよいか、中学から高校1年程度の数学を基点として、問題解決方法の理解とそれを応用した問題解決演習を行い、産業社会において必要な数理技能の基礎を完全習得する。

■講義分類
ビジネスマネジメント、社会人力育成、ビジネスICT

■到達目標
経営情報学部で学ぶ上での最低限の数学の能力が身についているか。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項
DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細
データを扱う技法の基礎を身につけることにより、その分析技能と結果の表現方法を習得する。

■授業形態
講義、グループワーク、プレゼンテーション

■準備学習の時間（予習・復習等1.5時間以上）及び具体的な内容
中学・高校数学の最も基礎的な知識を必要とするので、各回で取り扱う単元の事前学習（0.5時間）を行うこと。各回で完答できなかった問題を中心に、課題の復習（1時間）を行うこと。

■授業の概要
第1講　知識レベルの再評価
第2講　「把握力」
第3講　「分析力」
第4講　「選択力」
第5講　「予測力」
第6講　「表現力」
第7講　まとめ
第8講　中間テスト
第9講　「把握力」を養うグループワークとプレゼンテーション
第10講　「分析力」を養うグループワークとプレゼンテーション
第11講　「選択力」を養うグループワークとプレゼンテーション
第12講　「予測力」を養うグループワークとプレゼンテーション
第13講　「表現力」を養うグループワークとプレゼンテーション
第14講　総合課題
第15講　まとめ

■フィードバックの要領
毎回の授業内課題演習のチェック、中間・期末テストのフィードバックを行う。

■評価基準
評価A+（90点以上）：ビジネス数学検定Liteにおいて90点以上およびそれに相当する成績を収めたもの
評価A（89～80点）：ビジネス数学検定Liteにおいて80点以上およびそれに相当する成績を収めたもの
評価B（79～70点）：ビジネス数学検定Liteにおいて70点以上およびそれに相当する成績を収めたもの
評価C（69～60点）：ビジネス数学検定Liteにおいて60点以上およびそれに相当する成績を収めたもの
評価F（59点以下）　：上記以外

■評価方法
成績評価は、80%以上の出席を単位取得の条件とし、その上で試験（90%）、平常点（10%）により評価する。

■留意点
①クラスは自分が割り当てられたクラスを確認の上、そのクラスで履修する。②学期途中でクラス替えがあるので注意する。③電車の遅延や病欠などの際には、遅延証明書・診断書を提出する。

科目名	ビジネススキル入門（Introduction to Business Skills）		
サブタイトル	ビジネス能力検定ジョブパス３級		
担当教員	小西、加藤		
対象学年	１年生以上	区分	春・秋学期

■講義目的

この講義では、卒業後に期待される社会人・職業人になるために、学生時代に身につけておくべき基本的な事柄を学びます。

具体的には、①規則正しい生活習慣、②コミュニケーション能力、③日常生活のマナー、④学ぶ楽しさ、⑤情報リテラシー等について、文部科学省後援「ビジネス能力検定ジョブパス３級」の公式テキストを用いて学びます。

■講義分類

ビジネス環境理解・ビジネスマネジメント・社会人力育成

■到達目標

文部科学省後援「ビジネス能力検定ジョブパス３級」合格を到達目標とします。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

ビジネスパーソンとして必要な様々な知識を理解し、社会人基礎力を身につける。

■授業形態

講義・グループワーク・グループディスカッション

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

事前に配布する予習用サブノートを用いて、毎回１時間以上の予習が必要。さらに、授業終了時に配布する復習用ワークシートを用いて、毎回１時間以上の復習が必要。

■授業の概要

第１講　ビジネス能力検定ジョブパス３級について
第２講　第１編：ビジネスとコミュニケーションの基本
　　第１章：キャリアと仕事へのアプローチ
第３講　第２章：仕事の基本となる８つの意識
第４講　第３章：コミュニケーションとビジネスマナーの基本
第５講　第４章：指示の受け方と報告、連絡・相談
　　第５章：話し方と聞き方のポイント
第６講　第６章：来客対応と訪問の基本マナー
　　第７章：会社関係でのつき合い
第７講　中間試験
第８講　第２編：仕事の実践とビジネスツール
　　第１章：仕事への取り組み方
第９講　第２章：ビジネス文書の基本
第 10 講　第３章：電話応対
　　第４章：統計・データの読み方・まとめ方
第 11 講　第５章：情報収集とメディアの活用
　　第６章：会社を取り巻く環境と経済の基本
第 12 講　模擬試験①
第 13 講　模擬試験②
第 14 講　模擬試験③
第 15 講　検定試験

■フィードバックの要領

授業に関するコメント（ミニッツペーパー）にコメントを付して返却

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：ジョブパス３級検定試験に、成績優秀で合格する。
評価 A（89 ～ 80 点）：ジョブパス３級検定試験に合格する。
評価 B（79 ～ 70 点）：ジョブパス３級模擬試験に合格する。
評価 C（69 ～ 60 点）：ジョブパス３級合格に準ずる知識を有する。
評価 F（59 点以下）　：ジョブパス３級合格に準ずるレベルに達していない。

■評価方法

ジョブパス３級検定試験、又はジョブパス３級模擬試験に合格すること。（１００％）
ただし、出席率が３分の２以上であることを必要とする。

■留意点

教科書は毎回使用しますので、受講者は全員購入の上、毎回持参してください。

科目名	ビジネス入門（Business Principle）
サブタイトル	職業観の醸成
担当教員	小林　英夫
対象学年	1年生以上
区分	春学期

■講義目的
本講義は、多摩大学経営情報学部におけるキャリア形成科目の一つに位置付けられ、その目的は「職業観の醸成」である。職業観の醸成され方は多様であり、それは就学期全体を通して、また就業後も継続して形成されていくものである。本講義は、職業観が醸成される過程における主要な要素を、「知識」「能力」「意思＝志」の３点からとらえ、これらの要素の基礎を学生諸君に伝えることを目的とする。

■講義分類
ビジネス環境理解、ビジネスマネジメント、社会人力育成

■到達目標
①ビジネスとは何かを理解すること、②社会人としての基本的なビジネスの知識と能力を、学生生活を通じて身に付けていくための土台を築くこと、③自らが持つ職業観を理解し、学生生活での学習の方向性に対する指針を得ること、の３点を到達目標とする。これにより、グローカル社会に対する理解を深めるとともに、社会の発展に貢献する力と高い志を身につけることを狙いとする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項
DP5 高い志

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細
ビジネスとは何かを理解し、グローカル社会に対する理解を深めるとともに、社会の発展に貢献する力と高い志を身につけることができる。

■授業形態
講義、ディベート

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容
授業前に、事前学習ポイントを調べ、T-NEXT 上の授業資料に目を通し疑問点を明確にする（1.5 時間）。授業後に、事前学習の疑問点解消を確認し、未解消の項目は自己調査や教員質問等で解消する（1.5 時間）。

■授業の概要
第１講　ビジネスの定義とロールモデル
第２講　ソーシャルネットワークとビジネス
第３講　会社の具体的要素と会社と個人の関わり
第４講　働くことの意義と労働
第５講　仕事の種類、仕事をすることの厳しさと喜び
第６講　企業活動とはどのようなものか
第７講　企業経営者の職業意識を学ぶ
第８講　企画職の職業意識を学ぶ
第９講　芸術専門職の職業意識を学ぶ
第 10 講　医療関係者の職業意識を学ぶ
第 11 講　技能職人の職業意識を学ぶ
第 12 講　IT 関連職従事者の職業意識を学ぶ
第 13 講　職業従事において困難に直面する人の意識を学ぶ
第 14 講　ビジネス社会における常識
第 15 講　授業内期末試験

■フィードバックの要領
毎回提出のコメントシートの講評と質問・意見への回答・コメントを翌回講義で行う。

■評価基準
評価 A+（90 点以上）：授業貢献点と期末試験の合計が 90 点以上
評価 A（89 ～ 80 点）：授業貢献点と期末試験の合計が 80 点以上 90 点未満
評価 B（79 ～ 70 点）：授業貢献点と期末試験の合計が 70 点以上 80 点未満
評価 C（69 ～ 60 点）：授業貢献点と期末試験の合計が 60 点以上 70 点未満
評価 F（59 点以下）　：授業貢献点と期末試験の合計が 60 点未満

■評価方法
授業貢献点（59 点）、期末試験（41 点）。授業貢献点は出席点ではなく、授業を聴き自ら考えたかを評価する。期末試験は、ビジネス知識、能力の習得度と、ビジネス社会で活動していくことへの意欲醸成を評価する。

■留意点
授業貢献点は単なる出席点とは異なる。毎回の授業においてコメントシートの提出を求め、その内容を A（授業を聴き良い気づきがあった）、B（授業を聴いていた）、C（授業を聴いていたとは思われない）の３段階評価し授業貢献点とする。A は加点対象（6 点）、B が標準（4 点）、C は減点（-4 点）、欠席は 0 点。授業の受講態度が悪い場合は欠席以下の評価となる。授業貢献点は最大 59 点。

科 目 名 文章伝達入門（Introduction to Communication in Writing）

サブタイトル 文章力を高める

担当教員 樋口　裕一、中澤　弥

対象学年 1 年生以上　　**区分** 秋学期

■講義目的

産業社会で活躍し、問題発見、問題解決に不可欠な文章力を養成する。現代の志塾として、将来のビジネスに直結する文章力養成する。授業はアクティブラーニングの方法を用いて双方で進めるので、自分の考えをプレゼンして他者に理解させる力を養うことにもなる。社会や人間に対する関心も高め、社会人基礎力を高め、自らの志を明確にすることにもなる。

■講義分類

顧客理解、社会人力育成、ビジネス ICT

■到達目標

社会についての関心を高め、社会問題について６００字から８００字程度の論理的な文章を、自在に書ける力を養う。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

日本語の文章によって自身の考えを発信できる能力を高める。

■授業形態

講義、グループディスカッション、双方向

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

前もって次の時間に書く文章のテーマを示すので、書籍やインターネットサイトで下調べをする。授業後、学習したテクニックを用いて自分の文章を書きなおす。約 1.5 時間を要す。

■授業の概要

第１講　オリエンテーション　文章の書き方の基本の説明。第１回課題答案作成（200 字程度）
第２講　課題復習　よい文章、悪い文章について解説、前回の文章を書きなおす
第３講　部分練習　問題提起の作り方、第２段落の書き方
第４講　第２回課題答案作成　実際に６００字程度の論理的な文章（第２回課題）を書く
第５講　第２回課題解説　文章を書くためのトレーニング
第６講　部分練習　各段落の書き方
第７講　論の深め方
第８講　第３回課題作成（６００字程度の文章）
第９講　第３回課題解説　読みとり練習
第 10 講　文章を読んで論じる練習　文章の読み取り方、論の立て方
第 11 講　第４回課題答案作成
第 12 講　第４回課題解説　読み取り練習
第 13 講　トレーニング　グラフ・表の読みとり練習
第 14 講　第５回課題答案作成　グラフ・表を読み取って論じる
第 15 講　第５回課題解説　今後の勉強法

■フィードバックの要領

提出された文章を添削、評価した上で返却する。

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：全回出席で、提出文章の平均が B ランクを超す者。また、特に優れた発言を行った者。
評価 A（89 ～ 80 点）：出席１２回以上で、提出文章の平均が B ランクに近い者。また、優れた発言を行った者。
評価 B（79 ～ 70 点）：出席１０回以上で、提出文章の平均が C ランクを超す者。また、同等の発言をした者。
評価 C（69 ～ 60 点）：出席１０回以上で、提出文章の平均が D ランクを超す者。また、同等の発言をした者。
評価 F（59 点以下）　：出席９回以下の者。あるいは、提出文章の平均が D ランクに満たない者。

■評価方法

提出文章（80 パーセント）、平常点（20 パーセント）。合計５回、小論文を書いてもらい、５点満点で採点する。平均２点を超すものを合格とみなす。再提出した場合、また授業中の発言についても加点する。

■留意点

文章力だけを身につけても説得できる文章を書くことはできない。発信したい内容を持つことによって表現力も増す。それゆえ、多くの時間を、単に表現法ではなく、思考法、社会的知識を身につけることに費やす。

科目名 法学（憲法）（Jurisprudence（including Constitution Law））

サブタイトル 大学生活と法律

担当教員 井川　昭弘

対象学年 1年生以上　区分 秋学期

■講義目的

「社会あるところに法あり」という法諺からも知られるように、近代国家という社会は最高法規としての憲法を持ち、それはまた国の規範的な「形」をなすものである。この講義では「日本国憲法」をその人権論を中心に学ぶことで、日本国が国民に対して何を保障しているのか、つまり国民に対してどういう「形」の顔を示しているかを学ぶ。また同時に国民として他者や社会に対してどう向き合うべきなのかも考えたい。
なお、昨近、政治の内外で改憲をめぐる論議がなされるようになったが、この講義ではこの問題に法哲学の観点から考察を加え、各人が将来の「日本国憲法」のあるべき姿について考える力を持ちうるような手助けも目指したい。

■講義分類

ビジネス環境理解、社会人力育成

■到達目標

①日本国憲法の人権論の基本構造を学ぶ。②基本的人権をめぐる論争点を理解し、自分の考えを持てるようにする。③憲法の望ましい姿について、各人が自分の意見を持てるようにする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

近代国家の大前提である立憲主義および基本的人権について学ぶことで、我が国の近代国家としての「国の形」を知る。

■授業形態

講義

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

事前に指定する教科書の該当範囲を読書してから授業に参加する。

■授業の概要

第１講　法と法学について
第２講　日本国憲法の成立について
第３講　未成年者の人権について
第４講　定住外国人の人権
第５講　法の下の平等について
第６講　プライバシー権について
第７講　表現の自由権について
第８講　信教の自由権について
第９講　経済的自由権について
第 10 講　人身の自由権について
第 11 講　教育権について
第 12 講　生存権について
第 13 講　平和主義について①　憲法９条
第 14 講　平和主義について②　安保法制など
第 15 講　日本国憲法の未来

■フィードバックの要領

授業時に適宜リアクションペーパーを記入してもらう。また発表担当者の講評も行う。

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：講義内容について、完全に近い理解を得ることができた。
評価 A（89 ～ 80 点）：講義内容について、すぐれた水準の理解に達した。
評価 B（79 ～ 70 点）：講義内容について、平均的な水準の理解に達している。
評価 C（69 ～ 60 点）：講義内容について、最低限の望ましい理解の水準に達することができた。
評価 F（59 点以下）　：講義内容について、最低限の望ましい理解の水準に達しえていない。

■評価方法

期末試験で行う（100%）。「持ち込み」は一切不可である。

■留意点

特になし。

科目名　マーケティング入門（Marketing Principle）

サブタイトル　マーケティングの意味と意義を理解する

担当教員　村山　貞幸

対象学年　1年生以上　　区分　春学期

■講義目的

マーケティングの仕事を学び、その面白さを知ることで、志の視野を広げる。
企業のマーケティングに関する問題解決に必要な基本的な概念を、さまざまな企業の最前線事例を通じて学び、マーケティング思考力、問題解決力を鍛えることで、実践的知識・能力を獲得することを目指す。
講義では、インタラクションを重視し、ディスカッションやプレゼンテーションを組み込んで学んでいく。

■講義分類

顧客理解、ビジネス環境理解、ビジネス創造

■到達目標

1、マーケティングの基本的な知識を利用し、マーケティング戦略をチームで立案することで、考え抜く力と役割分担により組織目標の達成に貢献する力を身に着ける。　2、プロのマーケターの志を知り、高い志を持つ基礎をつくる。　3、学習した内容を多様な問題解決につなげる実践的知識・能力を獲得し、社会の発展に貢献する力をつける。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

基礎的な学力を養い、それを利用した問題解決演習により、思考する力と判断力を修得する。

■授業形態

講義、グループワーク、双方向

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

講義の内容を復習し理解した上で特定の企業事例に当てはめ分析する。さらに自分たちのマーケティングプランにも応用し、戦略を立案する。必要時間は、予習 1.5 時間、復習 1.5 時間。

■授業の概要

第１講　講義の概要、受講姿勢、評価方針、その他注意点などを確認する。
第２講　マーケティングの実社会に対する影響の強さを知り、その面白さを確認する。
第３講　マーケターのこだわりをＰＶの中で確認し、マーケティングの面白さを知る。
第４講　マーケティングとは何か、その本質を確認する。
第５講　顧客ニーズには構造があることを理解する。
第６講　潜在ニーズを理解する。
第７講　ニーズが顧客により違う場合と同じ場合があることを確認する
第８講　ポジショニングを理解する。
第９講　セグメンテーション→ターゲッティング→ポジショニングの流れを確認する。
第 10 講　競争力の違いによる戦い方について学ぶ。
第 11 講　マーケティング戦略の立て方を学ぶ
第 12 講　マーケティング戦略立案プロセスの理解を深める。
第 13 講　マーケティング戦略を立案する。
第 14 講　マーケティング戦略において、顧客の不満にも配慮する必要性を理解する。
第 15 講　講義のまとめと質疑応答。

■フィードバックの要領

レポートに対し、個別にフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：マーケティングの主要概念を完全に理解しており、それを利用して戦略立案ができる。
評価 A（89 ～ 80 点）：マーケティングの主要概念を８割理解しており、それを利用して戦略立案ができる。
評価 B（79 ～ 70 点）：マーケティングの主要概念を７割理解しており、それを利用して戦略立案ができる。
評価 C（69 ～ 60 点）：マーケティングの主要概念を６割理解しており、それを利用して戦略立案ができる。
評価 F（59 点以下）　：マーケティングの主要概念の理解が６割を下回っている。

■評価方法

出席　５０%、パワーポイントで作成するレポート　５０%

■留意点

履修人数などにより講義の構成は変わる可能性がある。

科目名 マーケティングマネジメント論（Marketing Management）

サブタイトル マーケティング論とマネジメント論の統合

担当教員 趙　佑鎭

対象学年 1年生以上　区分 秋学期

■講義目的

マーケティングとは「売れる仕組みづくり」である。そして、マーケティングマネジメント論とは、マーケティングをマネジメントの観点から捉える「システム的」、「全体最適」思考からの論である。そして、問題解決における手段と思考の多くが、マーケティングに通じるものである。この講義では、マーケティングマネジメントを行う人にとって必要な知識、概念、理論、手法、発想、技術、思考などの「基礎」を学ぶことで、その実行と問題解決の手がかりを得ることを目的とする。実際のマーケティングにおける企業を中心とした最前線事例をできるだけとりあげて、現実のマネジメントに適用可能になるよう説明する。担当教員としてメリハリがあり、分かり易い講義を常に心がけたい。

■講義分類

顧客理解、ビジネス創造、ビジネスマネジメント

■到達目標

マーケティング・マネジメント・プロセスの基本を理解し、マーケティング企画・マーケティングマネジメントを行う際の重要概念の修得をめざす。中小企業診断士試験レベルの問題解読を目指す。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

ビジネスの中で最低限必要な基礎的なマーケティングの思考力を基に，組織と個人の課題解決に向けたマーケティングとマネジメントの統合のプロセスを明確に理解する。

■授業形態

講義、双方向、マーケティングの事例を扱ったビデオ・視聴覚教育

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

配布資料には翌週講義回の内容が記載しており、講義終了間際に教員が示す事前学習ポイントを中心に、それらを授業前に読んだ上で（各 1.5 時間以上）講義に臨み、授業後にはＷＯＲＤを用いてレポートを提出する。

■授業の概要

第１講　オリエンテーション、マーケティングマネジメントの概要
第２講　戦略とは？　戦略の構想、ビジョン策定
第３講　マーケティング環境分析（1）、マーケティング環境の性格
第４講　マーケティング環境分析（2）、SWOT 分析
第５講　STP（1）- 市場細分化するための基準
第６講　STP（2）- ポジショニング成功の鍵
第７講　コンセプトメイキング
第８講　サービス（プロダクト）
第９講　価格（プライシング）
第 10 講　チャネル（流通経路）
第 11 講　コミュニケーション（プロモーション）
第 12 講　マーケティングマネジメントの実際と日本企業のマーケティング
第 13 講　マーケティングマネジメントに必要な発想法と思考法
第 14 講　実社会のブランドマーケティングの専門家、またはマーティングマネジャーのゲスト講義
第 15 講　総括

■フィードバックの要領

レポートに対し、評価あるいはコメントを記入してフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：マーケティング・プロセスの基本を高度に理解し、中小企業診断士試験を勧めたいレベル
評価 A（89 ～ 80 点）：マーケティング・プロセスの主要概念をかなり理解し、販売士試験を勧めたいレベル
評価 B（79 ～ 70 点）：マーケティングマネジメントを行う際の重要概念の修得がある程度に達している。
評価 C（69 ～ 60 点）：マーケティング・プロセスの基本知識を一部有している
評価 F（59 点以下）　：マーケティング・マネジメント・プロセスの基本を理解していない結果として不合格

■評価方法

・期末試験（筆記試験・50%）＋出席（50%）　・詳細はオリエンテーション時に提示

■留意点

①講義の順序は、学生の理解度と進捗度によって前後変更する場合がある。②外部講師の講義日もスケジュール状況によって変更になる場合もある。③私語、携帯電話、本授業と無関係のパソコン使用、途中退室は絶対不可であり、熾烈に厳しく注意する。学生の社会人としての常識涵養のための注意と授業態度を静粛に保つ教員の姿勢がいやであれば、本講義の履修は勧められない。

科目名	マクロ経済学（Macroeconomics）		
サブタイトル	初級（入門）篇		
担当教員	椎木　哲太郎		
対象学年	1 年生以上	区分	秋学期

■講義目的
「（高度）産業社会」のメカニズムを解明するために不可欠なマクロ経済学の原理を学び、「状況認識の学」として実態経済への適用を志向する。そして、マクロ経済の動向が市民生活と深い結びつきを持っていることを理解し、その健全な運営・制御に努める「問題解決の学」としての活用方法を身に付ける。さらに、双方向性を重視し、マクロ経済ニュースが理解できるよう、平易な解説に努める。

■講義分類
ビジネス環境理解、社会人力育成、グローバルビジネス

■到達目標
初級レベルのマクロ経済学の理論を学び、企業活動の前提となるマクロ経済、諸変数の意味する所、その動向と因果関係、さらに日々生起するグローバルなマクロ経済ニュースに関する理解を深め、考え抜く力を高めることで、生活者・市民として望ましいマクロ経済政策を構想・評価することができる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項
DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細
　マクロ経済学の基礎的な学力を習得し、失業、インフレ・デフレ等の（マクロ）経済問題に対して、生活者・市民として必要な分析能力、政策提言能力の獲得をめざす。

■授業形態
講義、双方向

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容
シラバスの講義概要・「事前学習ポイント」に従って、必ず教科書の該当部分を読んで理解した上で（質問を持って）、講義に臨むこと。そのためには、毎週最低 1.5 時間以上は読み込むことが必要となろう。

■授業の概要
第 1 講　マクロ経済学とはいかなる学問か 「経世済民」の学、問題解決の学として
第 2 講　経済体制　経済体制・経済制度の概念とその変化について
第 3 講　「資本主義」の変貌とマクロ経済学の進化　第二次大戦後の資本主義と経済学
第 4 講　重要マクロ変数とマクロ経済ニュース　経済指標の見方について
第 5 講　SNA・GDP・国際収支　GDP の「支出」面を中心として
第 6 講　消費と投資　消費関数と投資関数
第 7 講　政府支出と財政政策
第 8 講　有効需要の原理、国民所得の決定、45 度線モデル
第 9 講　経済成長理論と労働市場
第 10 講　金融（貨幣）市場　貨幣の需給と金融政策
第 11 講　IS － LM モデル（1）IS － LM 曲線の導出とモデルの位置づけ
第 12 講　IS － LM モデル（2）IS － LM モデルと安定化政策
第 13 講　物価とインフレ・デフレ　AD － AS 分析
第 14 講　国際版 IS － LM モデル　マンデル＝フレミング・モデルと安定化政策
第 15 講　マクロ経済学の有効性　＊授業時間内最終試験の可能性

■フィードバックの要領
小テストを採点して返却し、解説する。

■評価基準
評価 A+（90 点以上）：マクロ経済学の基礎的理解を示す試験の成績、通常の取り組みともに顕著に優れている
評価 A（89 ～ 80 点）：試験の成績、通常の取り組みともに優れている
評価 B（79 ～ 70 点）：試験の成績、通常の取り組みともに良い
評価 C（69 ～ 60 点）：試験の成績、通常の取り組みともに普通
評価 F（59 点以下）　：試験の成績、通常の取り組みともに不十分

■評価方法
期末試験［持込不可］の結果（70%）、小テスト・レポート・出席（30%）

■留意点
①予習・復習の積み重ねが不可欠な科目であり、一度欠席すると講義についていけなくなる危険性が高い。②第 4 講から教科書を使用するので、あらゆる手立てを駆使して入手し、必要箇所を読んでおかねばならない。③講義は教科書を読んでいることを前提として行う。連続して出席せずして、或いは教科書を購入せずして、単位を取得することは不可能であろう。

科目名	ミクロ経済学（Microeconomics）
サブタイトル	ミクロ経済学（Microeconomics）
担当教員	下井　直毅
対象学年	1年生以上
区分	春学期

■講義目的
この講義ではミクロ経済学について学ぶ。ミクロ経済学は、産業社会の中で資源配分がどのように行われているのか、あるいはいないのかといった、メカニズムを明らかにすることを主たる目的にしている。限られた生産資源である労働や資本などをいかに効率的に生産にまわすのか（配分するのか）という問題を扱う。また、企業や産業を取り巻く社会問題についても経済学の発想で分析し、問題把握を行う。

■講義分類
ビジネス環境理解、グローバルビジネス、地域ビジネス

■到達目標
できるだけ現実の産業社会における経済現象に関心を持ち、それを分析するための枠組みとしての経済学を学び、その基本的な知識の修得をめざす。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項
DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細
ビジネスの中で最低限必要な基礎的な数学の思考力を基に，課題解決に向けたプロセスを明確にすることが出来る。

■授業形態
講義

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容
授業前には、前回の講義内容について十分に理解をしておくこと。講義内容の復習と次回講義の準備には、1.5 時間以上の取組が必要です。

■授業の概要
第１講　需要と供給－需要と供給の関係について理解する
第２講　需要曲線の構造と消費者の行動－需要曲線と消費者の行動について理解する
第３講　費用曲線と企業の行動－費用曲線と企業の行動について理解する
第４講　企業の利潤最大化行動と供給曲線－企業の最適行動について理解する
第５講　消費者行動の理論－消費者行動について理解する
第６講　消費者行動理論の展開－様々な財について理解する
第７講　企業の生産関数と費用最小化行動－様々な生産関数を理解する
第８講　一般均衡と資源配分－一般均衡の概念を理解する
第９講　独占の理論－独占とは何かを理解する
第 10 講　独占的競争の理論－独占的競争とは何かを理解する
第 11 講　ゲームの理論－戦略的思考について理解する
第 12 講　市場の失敗Ⅰ－市場の失敗の事例を理解する
第 13 講　市場の失敗Ⅱ－市場の失敗の身近な事例について理解する
第 14 講　不確実性と経済現象－不確実性とは何かを理解する
第 15 講　まとめ－これまでの内容を復習する

■フィードバックの要領
レポートに対してコメントを記入して、フィードバックを行う。

■評価基準
評価 A+（90 点以上）：100 点満点中 90 点以上
評価 A（89 ～ 80 点）：100 点満点中 80 点以上 89 点以下
評価 B（79 ～ 70 点）：100 点満点中 70 点以上 79 点以下
評価 C（69 ～ 60 点）：100 点満点中 60 点以上 69 点以下
評価 F（59 点以下）　：100 点満点中 59 点以下

■評価方法
出席点あるいは授業の平常点（30%）、試験（70%）。合計 100% で 100 点満点。

■留意点
出欠を確認する際に、本人の学生証が無い場合は、欠席扱いとする。

科目名	余暇マネジメント（Management of Leisure Life & Society）
サブタイトル	文化やレジャーから社会を洞察する
担当教員	杉田　文章
対象学年	1 年生以上　　区分　秋学期

■講義目的

(1)　以下三点について知り、自分なりの知見を有することに資する
　　①　「余暇」の概念、歴史、現状、意義
　　②　「余暇市場」の構造、現状、背景
　　③　「余暇製品」産業の使命、マーケティング方法の中核
(2)　「余暇をマネジメントする」概念を理解することによって、問題発見・解決の切り口を与えること。

■講義分類

顧客理解、ビジネス環境理解、ビジネス創造

■到達目標

本講義における「余暇」「レジャー」の概念と意義について十分理解し、たとえばあるレジャー製品（財もしくはサービス）について、そのマーケティングの在り方について論じることができるようになること。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

余暇の在り方と余暇をめぐる産業市場の在り方について知り、課題を洞察したうえで解決策を探る。

■授業形態

講義、グループディスカッション、グループワーク

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

①「余暇」「余暇市場産業」に関する諸情報、②今日の余暇市場動向や観光・レジャー政策の動向に関する情報を、講義内で示される諸資料等より、把握してもらいたい。（2 ～ 3 時間程度）

■授業の概要

第 1 講　「余暇」とは何か
第 2 講　余暇と社会
第 3 講　「あそび」とは何か
第 4 講　スポーツ現象に見る、「遊び」の制度化と商品化
第 5 講　プロスポーツの現状と課題
第 6 講　レジャー産業の市場構造
第 7 講　産業政策から見たレジャー産業の市場構造
第 8 講　産業政策から見たレジャー産業の市場構造
第 9 講　レジャー産業の業域と市場構造
第 10 講　社会変動からみたレジャー産業市場構造
第 11 講　社会変動からみたレジャー産業市場構造
第 12 講　レジャー産業における製品と製品政策
第 13 講　レジャー産業におけるマーケティングミックスについて考察する
第 14 講　まとめ
第 15 講　試験対策、最終振り返りとディスカッション

■フィードバックの要領

毎回の講義毎に受講者からのコメントを集め、これに対して公開返答を実施する。

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：余暇の社会・歴史的背景と余暇の在り方の関係を理解していること。
評価 A（89 ～ 80 点）：講義で学んだ諸理論について深く理解していること。
評価 B（79 ～ 70 点）：余暇の概念について理解できていること。
評価 C（69 ～ 60 点）：余暇をめぐる理論、現状について、最低限理解していること
評価 F（59 点以下）　：上記のいずれも達成されていない場合、F 評価とする。

■評価方法

期末試験 6 割、講義中のレポート等を含めた受講態度などの参加状況によって 4 割を評価することとする。

■留意点

科目名	ライフ・デザイン（Life Design）
サブタイトル	クオリティ・オブ・ライフ（生活の質）について考える
担当教員	梅澤　佳子
対象学年	1年生以上
区分	春学期

■講義目的
生活環境が整備され、日本人の平均寿命は80歳を超えるようになりました。さらに私たちの時代は100歳まで生きることを前提にライフ・デザインを考えなければなりません。これまでと異なるライフ・デザインを描くために、少子化、高齢化、人口減少、グローバル化、産業構造の変化、ICT、科学技術の進歩を生活者の視点から学びます。そして、これからの生き方、社会のあり方に、一人ひとりが真剣に向き合い、考え、行動するための実践的知識の獲得を目指します。

■講義分類
社会人力育成、地域ビジネス、問題解決

■到達目標
1．社会学的なものの見方､考え方を理解すること。2．暮らし､地域に興味と関心を向けることができるようになる。3．暮らし、地域の課題をみつけ解決のためのデザインを考える習慣がつくこと。 4．自分自身のライフデザインを考える。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項
DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細
生活全般に関する基礎的な知識を養い、グローカルな視点から社会現象の実態、現象の起こる原因に関係するメカニズムを解明するための手法を学びます。

■授業形態
講義、調査学習、問題解決型学習

■準備学習の時間（予習・復習等1.5時間以上）及び具体的な内容
事前に予習のための用語やポイントを説明しますので、予習しておいてください。講義後は、T-NEXTにアップされた講義資料、ノートを元に必要な情報を自ら収集し深い学びを行ってください。（各90分程度）

■授業の概要
第1講　ライフ・デザインってなに？
第2講　今、なぜ、ライフデザインが必要なの？
第3講　アルバイトから働くことについて考えてみよう
第4講　「これが当たり前」の働き方って？
第5講　ワーク・ライフ・バランスの国際比較
第6講　日本人のワーク・ライフ・バランスはどうなってる？
第7講　中間試験
第8講　生活文化を楽しむこと、伝えること
第9講　戦後の暮らしとコミュニティ
第10講　共に考える、これからのライフデザイン①
第11講　共に考える、これからのライフデザイン②
第12講　優れたデザインの先行事例調査①
第13講　優れたデザインの先行事例調査②
第14講　講義のまとめ
第15講　講義のまとめ

■フィードバックの要領
講義内で提出されたミニ・レポートに対する回答等でフィードバックします。

■評価基準
評価A+（90点以上）：授業内容を十分に理解し、優れた意見を持っている。
評価A（89～80点）：授業内容を理解し、自分の意見を持てるようになった。
評価B（79～70点）：授業内容について理解している。
評価C（69～60点）：不十分な点もあるが授業内容を理解している。
評価F（59点以下）　：著しく理解が不十分である。

■評価方法
提出物（30%）、中間テスト（30%）、最終課題（40%）。絶対評価：多摩大学の評価基準に基づいて評価します。

■留意点
出席は評価のための前提条件です。

科目名	Basic Office EnglishI（Basic Office English Ⅰ）
サブタイトル	世界でそして地域で活躍するために必要な英語表現力を身に付ける
担当教員	中村（そ）、潮田
対象学年	2 年生以上
区分	春学期

■講義目的
世界でそして地域で活躍するために必要なビジネス英語表現力を身に付け、志の実現に向かって主にビジネスの現場、オフィスで積極的に情報をやり取りし、いろいろな形のコミュニケーションに対応できるようにする。

■講義分類
ビジネス環境理解、社会人力育成、グローバルビジネス

■到達目標
以下講義概要に述べられる学習項目について、英語でのコミュニケーションが取れるようにする。特に、留学や、国内外での研修、見学、社会的活動に最低限必要な英語表現を習得し、自分の考えやアイデアをいろいろな方法で社会に発信し、また同時に発信された他者の考えを正しく理解できるようになること。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項
DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細
地域でも、また国内、海外どこであっても自分の志を実現するためにそして、産業社会で発生する様々な問題を解決し、社会をよりよいものにするために、円滑に英語コミュニケーションを行えるようになること。

■授業形態
グループディスカッション、グループワーク、プレゼンテーション

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容
下記の各週講義内容に関して配布される教材を１．５時間程度予習､復習し､そこに提示されている英語表現を覚えること。

■授業の概要
第１講　挨拶、アイスブレーキング、友人作り、スモールトークなど
第２講　オフィスやビジネス現場での自己紹介
第３講　自己紹介と他人紹介
第４講　会社、業務、商品紹介
第５講　電話のやりとり
第６講　電話での確認や依頼
第７講　その他の電話表現
第８講　これまでの総復習と中間テスト
第９講　英語メールの様式
第 10 講　メールでの確認、依頼
第 11 講　メールでのあいさつとお知らせ
第 12 講　アポイントメントを取る
第 13 講　日時や場所を決める
第 14 講　約束の変更やキャンセル、押さえておきたい経済用語
第 15 講　期末テスト

■フィードバックの要領
授業内小テスト、課題、レポート類については点数と必要な場合はコメントを付けて返却

■評価基準
評価 A+（90 点以上）：下記の配分で得点を付け、９０点以上の場合
評価 A（89 ～ 80 点）：下記の配分で得点を付け、８０点から８９点の場合
評価 B（79 ～ 70 点）：下記の配分で得点を付け、７０点から７９点の場合
評価 C（69 ～ 60 点）：下記の配分で得点を付け、６０点から６９点の場合
評価 F（59 点以下）　：下記の配分で得点を付け、５９点以下の場合

■評価方法
出席 20%、授業内小テスト 20%、宿題 20%、中間テストおよび期末テスト 40%

■留意点

科目名	Basic Office EnglishII（Basic Office English Ⅱ）
サブタイトル	世界でそして地域で活躍するために必要な英語表現力を身に付ける
担当教員	中村（そ）、潮田
対象学年	2年生以上
区分	春・秋学期

■講義目的
世界でそして地域で活躍するために必要なビジネス英語表現力を身に付け、志の実現に向かって主にビジネスの現場、オフィスで積極的に情報をやり取りし、いろいろな形のコミュニケーションに対応できるようにする。

■講義分類
ビジネス環境理解、社会人力育成、グローバルビジネス

■到達目標
以下講義概要に述べられる学習項目について、英語でのコミュニケーションが取れるようにする。特に、留学や、国内外での研修、見学、社会的活動に最低限必要な英語表現を習得し、自分の考えやアイデアをいろいろな方法で社会に発信し、また同時に発信された他者の考えを正しく理解できるようになること。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項
DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細
地域でも、また国内、海外どこであっても自分の志を実現するためにそして、産業社会で発生する様々な問題を解決し、社会をよりよいものにするために、円滑に英語コミュニケーションを行えるようになること。

■授業形態
グループディスカッション、グループワーク、プレゼンテーション

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容
下記の各週講義内容に関して配布される教材を１．５時間程度予習､復習し､そこに提示されている英語表現を覚えること。

■授業の概要
第１講　挨拶、アイスブレーキング、友人作り、スモールトークなどその２
第２講　会議の準備
第３講　会議の進行
第４講　会議の進行およびまとめ
第５講　商品やサービスの説明
第６講　価格や納期の交渉
第７講　商談の成否に関する表現
第８講　これまでの総復習と中間テスト
第９講　クレームを伝える
第 10 講　クレームに対応する
第 11 講　OA 機器のトラブル、その他のトラブル
第 12 講　求人についての問い合わせ
第 13 講　面接での質疑応答
第 14 講　会社の制度や人事情報、外国での採用事情
第 15 講　期末テスト

■フィードバックの要領
授業内小テスト、課題、レポート類については点数とコメントを付けて返却

■評価基準
評価 A+（90 点以上）：下記の配分で得点を付け、９０点以上の場合
評価 A（89 ～ 80 点）：下記の配分で得点を付け、８０点から８９点の場合
評価 B（79 ～ 70 点）：下記の配分で得点を付け、７０点から７９点の場合
評価 C（69 ～ 60 点）：下記の配分で得点を付け、６０点から６９点の場合
評価 F（59 点以下）　：下記の配分で得点を付け、５９点以下の場合

■評価方法
出席 20%、授業内小テスト 20%、宿題 20%、中間テストおよび期末テスト 40%

■留意点
相談や質問などは sonoko-n@tama.ac.jp にメールを送ってくれればいつでも対応します。必要に応じてオフィスアワーなどに会って直接お話しすることも可能です。

科目名　English Expression II 再履修用（English Expression II）

サブタイトル　自習型再履修専用クラス
担当教員　中村　その子
対象学年　２年生以上　区分　秋学期

■講義目的
この授業は教室では開講されず、別途掲示されるテキストを大学コンビニエンスストアで購入、自習して、各学期の期末試験期間内に実施される試験を受け、その点数によって単位が認定される形式です。
最初は自己紹介、自由時間の過ごし方と好きなこと、自分の長所や短所、成功体験、失敗談などを語るところから始め、スモールトークや日常会話を円滑に行えるようにする。徐々に、アルバイトやボランティア活動、自分の住んでいる町の特徴などについて話す練習、ものごとの起源やプロセスを説明する練習に移り、英語力の社会的な幅を広げて行きたい。

■講義分類
ビジネス環境理解、社会人力育成、グローバルビジネス

■到達目標
経営と情報に関係した様々な社会的活動に英語をどう活かしていくかを常に追求し、自分をとりまく情報を的確に処理しながら、自分の考えやアイデアを正しく伝えて、相手との効率的なコミュニケーションを図れるようにする。以下がこの授業のゴールとなる。客観的指標として TOEIC350 点程度の実力をつけることを目標とする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項
DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細
地域でも、また国内、海外どこであっても自分の志を実現するためにそして、産業社会で発生する様々な問題を解決し、社会をよりよいものにするために、円滑に英語コミュニケーションを行えるようになること。

■授業形態
スクーリングと自習

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容
指定されたテキストを学期を通して十分に自習し期末試験に備えること

■授業の概要
第１講　アイスブレーキング、自己紹介、自分を語る
第２講　キャンパスライフ、買い物、娯楽などの日常生活について語る
第３講　自分の住んでいる町やふるさとを語る
第４講　食生活や外食、レストランなどに関係する表現を学ぶ
第５講　職業にまつわる英語表現を学ぶ
第６講　留学に関連した英語表現を学ぶ
第７講　プレゼンテーション技術について学ぶ
第８講　体の調子や病院での会話を学ぶ
第９講　ここまで学習した事項の復習１
第 10 講　ここまで学習した事項の復習２
第 11 講　ここまで学習した事項の復習３
第 12 講　ここまで学修した事項の復習４
第 13 講　これまでの総復習
第 14 講　スクーリングおよび期末試験準備
第 15 講　スクーリングおよび期末試験準備

■フィードバックの要領
学期中のスクーリング時に学修アドバイスをする

■評価基準
評価 A+（90 点以上）：テストの点数が９０点以上
評価 A（89 ～ 80 点）：テストの点数が８０点から８９点
評価 B（79 ～ 70 点）：テストの点数が７０点から７９点
評価 C（69 ～ 60 点）：テストの点数が６０点から６９点
評価 F（59 点以下）　：テストの点数が５９点以下

■評価方法
テストの点数が１００％

■留意点
このクラスは、学生番号が２１７... を含んでそれより若い番号を持っている学生だけしか履修できません。基本は再履修クラスです。教室での授業は行われず、指定のテキストを購入して自習、期末試験期間内に実施される試験を受けて、その点数によって単位が認定されます。１学期に２回程度 T-next に予告掲示をしてスクーリング（教室での学習相談）を行います。

科目名 English ExpressionI 再履修用（English Expression I）

サブタイトル 自習型再履修専用クラス

担当教員 中村　その子

対象学年 2年生以上　区分 春・秋学期

■講義目的

この授業は教室では開講されず、別途掲示されるテキストを大学コンビニエンスストアで購入、自習して、各学期の期末試験期間内に実施される試験を受け、その点数によって単位が認定される形式です。
最初は自己紹介、自由時間の過ごし方と好きなこと、自分の長所や短所、成功体験、失敗談などを語るところから始め、スモールトークや日常会話を円滑に行えるようにする。徐々に、アルバイトやボランティア活動、自分の住んでいる町の特徴などについて話す練習、ものごとの起源やプロセスを説明する練習に移り、英語力の社会的な幅を広げて行きたい。

■講義分類

ビジネス環境理解、社会人力育成、グローバルビジネス

■到達目標

経営と情報に関係した様々な社会的活動に英語をどう活かしていくかを常に追求し、自分をとりまく情報を的確に処理しながら、自分の考えやアイデアを正しく伝えて、相手との効率的なコミュニケーションを図れるようにする。以下がこの授業のゴールとなる。客観的指標として TOEIC350 点程度の実力をつけることを目標とする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

地域でも、また国内、海外どこであっても自分の志を実現するためにそして、産業社会で発生する様々な問題を解決し、社会をよりよいものにするために、円滑に英語コミュニケーションを行えるようになること。

■授業形態

スクーリングと自習

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

指定されたテキストを学期を通して十分に自習し期末試験に備えること

■授業の概要

第１講　アイスブレーキング、自己紹介、自分を語る
第２講　キャンパスライフ、買い物、娯楽などの日常生活について語る
第３講　自分の住んでいる町やふるさとを語る
第４講　食生活や外食、レストランなどに関係する表現を学ぶ
第５講　職業にまつわる英語表現を学ぶ
第６講　留学に関連した英語表現を学ぶ
第７講　プレゼンテーション技術について学ぶ
第８講　体の調子や病院での会話を学ぶ
第９講　ここまで学習した事項の復習１
第 10 講　ここまで学習した事項の復習２
第 11 講　ここまで学習した事項の復習３
第 12 講　ここまで学修した事項の復習４
第 13 講　これまでの総復習
第 14 講　スクーリングおよび期末試験準備
第 15 講　スクーリングおよび期末試験準備

■フィードバックの要領

学期中のスクーリング時に学修アドバイスをする

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：テストの点数が９０点以上
評価 A（89 ～ 80 点）：テストの点数が８０点から８９点
評価 B（79 ～ 70 点）：テストの点数が７０点から７９点
評価 C（69 ～ 60 点）：テストの点数が６０点から６９点
評価 F（59 点以下）　：テストの点数が５９点以下

■評価方法

テストの点数が１００％

■留意点

このクラスは、学生番号が２１７... を含んでそれより若い番号を持っている学生だけしか履修できません。基本は再履修クラスです。教室での授業は行われず、指定のテキストを購入して自習、期末試験期間内に実施される試験を受けて、その点数によって単位が認定されます。１学期に２回程度 T-next に予告掲示をしてスクーリング（教室での学習相談）を行います。

科目名	eビジネス（e Business）
サブタイトル	ＩＴパスポート試験対策を含む
担当教員	小西　英行
対象学年	２年生以上
区分	春学期

■講義目的
国家試験である「ＩＴパスポート試験」は、「ビジネスＩＣＴ」の分野で「問題解決のための理論や方法」についての実践的知識を問うものであり、具体的には「ストラテジー系」分野と「マネジメント系」分野、そして「テクノロジー系」分野があります。本講義ではこのうち「ストラテジー系」分野を中心に学び、「ＩＴパスポート試験」の合格に必要な知識を得ることを目的とします。

■講義分類
ビジネス環境理解、ビジネスマネジメント、ビジネスＩＣＴ

■到達目標
本講義は、グローカル社会に対する理解を深めるために必要な、ビジネスＩＣＴに関する専門知識について、①専門用語についての定義や用例などを理解し、②具体例を挙げて説明出来ることを学修目標とします。そしてこれらの学修成果の定着を図るために、授業に対する「予習」「復習」を習慣化することを目標とします。そしてこれらの学修を通じて最終的には「ＩＴパスポート試験」合格を目指します。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項
DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細
「ビジネスＩＣＴ」の分野で「問題解決のための理論や方法」についての実践的知識を習得する。

■授業形態
講義、双方向、グループワーク

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容
事前に配布する予習用サブノートを用いて、毎回１時間以上の予習が必要。さらに、授業終了時に配布する復習用ワークシートを用いて、毎回１時間以上の復習が必要。

■授業の概要
第１講　国家試験「ＩＴパスポート試験」について
第２講　１－１　企業活動①
第３講　１－１　企業活動②
第４講　１－１　企業活動③
第５講　２－１　経営戦略マネジメント①
第６講　２－１　経営戦略マネジメント②
第７講　２－１　経営戦略マネジメント③
第８講　授業内中間試験
第９講　2-３　ビジネスインダストリ
第 10 講　3-１システム戦略①
第 11 講　3-１システム戦略②
第 12 講　8-１コンピュータ構成要素
第 13 講　8-２システム構成要素①
第 14 講　8-２システム構成要素②
第 15 講　授業内期末試験

■フィードバックの要領
シャトルカードで毎回コメントバック。択一式期末試験で、解答公開による自己採点。

■評価基準
評価 A+（90 点以上）：ＩＴパスポート試験シラバスに記載の用語について、具体例を挙げて詳細に説明できる。
評価 A（89 ～ 80 点）：ＩＴパスポート試験シラバスに記載の用語について、具体例を挙げて説明できる。
評価 B（79 ～ 70 点）：ＩＴパスポート試験シラバスに記載の用語について、詳細に説明できる。
評価 C（69 ～ 60 点）：ＩＴパスポート試験シラバスに記載の用語について、大まかに説明できる。
評価 F（59 点以下）　：ＩＴパスポート試験シラバスに記載の用語について、ほとんど理解していない。

■評価方法
授業内期末試験（１００％）ただし、予習・復習・発言等に応じて、ボーナスポイントを付加する。
また、単位を取得するためには、出席率が３分の２以上であることが必要。

■留意点
①授業時に教科書及び、ノートパソコン又はタブレット等を使用するので、必ず持参してください。 ②授業毎に「予習」と「復習」の履行状況を確認しますので、毎回必ず行ってください。

科目名	IT 概論 I（Introduction to IT I）
サブタイトル	ビジネスにおいて知っておくべき IT 基礎知識
担当教員	佐藤　洋行
対象学年	2 年生以上
区分	春学期

■講義目的

今やすべてのビジネスで必須となっている IT について、ビジネスパーソンが知っておくべき基礎知識を学ぶ。そのために、IT が実際のビジネスの現場でどのように活用されているのかを、販売促進／顧客管理／物流／製造など、バリューチェーン／マーケティングにおける活動単位で解説する。それを通じて、ビジネスに共通して必要な IT 知識を体系的に理解してもらう。
身近で実践的な事例を交えた講義とするので、社会人基礎力を養うために是非受講していただきたい。

■講義分類

ビジネス環境理解、ビジネスマネジメント、ビジネス ICT

■到達目標

産業社会で発生する様々な問題に対処していける専門的能力として、ビジネスで必要とされる IT 知識の基礎を身につけてもらう。具体的には、ビジネスと IT との関わりについて、バリューチェーンにおける活動単位と関連付けて概説することができること、およびビジネスを取り巻く IT 環境と組織／企業関係の変化についてトレンドを理解していることを到達目標とする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

IT について、ビジネスでの応用事例を学ぶことで、産業社会における課題に対処していける専門的知識を習得する

■授業形態

講義、プレゼンテーション、双方向

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

毎回講義のはじめに前回講義内容に関する小テストを行うので、前回講義資料および講義記録ノートによる復習をすること（1.5 時間程度）

■授業の概要

第 1 講　イントロダクション　ビジネスと IT（予告編）
第 2 講　販売促進活動と IT（販売促進活動基礎編）
第 3 講　販売促進活動と IT（デジタルマーケティング編）
第 4 講　販売促進活動と IT（マスメディア編）
第 5 講　販売促進活動と IT（店頭編）
第 6 講　顧客管理と IT（顧客管理基礎編）
第 7 講　顧客管理と IT（ダイレクトビジネス編）
第 8 講　顧客管理と IT（非ダイレクトビジネス編）
第 9 講　物流と IT
第 10 講　製造と IT
第 11 講　ビジネスと IT（環境編）
第 12 講　ビジネスと IT（組織編）
第 13 講　ビジネスと IT（法務編）
第 14 講　IT マネジメント（まとめ 1）
第 15 講　IT マネジメント（まとめ 2）

■フィードバックの要領

レポートへのコメント、定期試験の結果の掲示によりフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：ビジネスと IT との関わりについて、講義の範囲すべてを概説することができる
評価 A（89 ～ 80 点）：ビジネスと IT との関わりについて、事例を基に語ることができる
評価 B（79 ～ 70 点）：ビジネスにおける IT の活用事例をいくつか挙げることができる
評価 C（69 ～ 60 点）：ビジネスにおける IT 活用事例をいくつか挙げることができる
評価 F（59 点以下）　：ビジネスと IT との関わりについて、語るべきところが無い

■評価方法

出席 60%、期末試験 40%

■留意点

必ず PC を持参すること。

科目名	IT 概論 II（Introduction to IT II）
サブタイトル	IT 戦略とデジタルマーケティング
担当教員	佐藤　洋行
対象学年	2 年生以上
区分	秋学期

■講義目的
今やすべてのビジネスで必須となっている IT について、各企業がどのような戦略を持っているのかを学ぶとともに、IT 戦略のトレンドを知る。また､IT 活用の中でも､ビジネスの発展に最も重要なものの一つとなっているデジタルマーケティングについて、最前線事例を学ぶとともに、実際に体験することにより、実践的知識を獲得してもらう。
身近で実践的な事例を交えた講義とするので、社会人基礎力を養うために是非受講していただきたい。

■講義分類
ビジネス環境理解、ビジネスマネジメント、ビジネス ICT

■到達目標
基礎的な学力を養い、グローバルとローカルの関係性を意識しながら産業社会で発生する様々な問題に対処していける専門的能力として、ビジネスにおける IT 戦略とデジタルマーケティングの潮流について実践的知識を獲得する。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項
DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細
IT について、ビジネスでのトレンドを学ぶことで、産業社会における課題に対処していける専門的知識を習得する

■授業形態
講義、プレゼンテーション、双方向

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容
毎回講義のはじめに前回講義内容に関する小テストを行うので、前回講義資料および講義記録ノートによる復習をすること（1.5 時間程度）

■授業の概要
第 1 講　イントロダクション Ⅰ　IT 戦略（予告編）
第 2 講　クラウド環境とオンプレミス環境
第 3 講　オープンソースソフトウェアと商用ソフトウェア
第 4 講　オムニチャネル
第 5 講　IoT
第 6 講　ビッグデータ
第 7 講　IT 戦略（まとめ編）
第 8 講　イントロダクション Ⅱ　デジタルマーケティング（予告編）
第 9 講　AdTech（デジタル広告の種類編）
第 10 講　AdTech（リアルタイムビッディング（RTB）編）
第 11 講　AdTech（広告枠編）
第 12 講　デジタル CRM（web サイト編）
第 13 講　デジタル CRM（非 web サイト編）
第 14 講　デジタルマーケティング（まとめ 1）
第 15 講　デジタルマーケティング（まとめ 2）

■フィードバックの要領
レポートへのコメント、定期試験の結果の掲示によりフィードバックを行う。

■評価基準
評価 A+（90 点以上）：IT 戦略とその潮流について、本講義の範囲全般を概説することができる
評価 A（89 ～ 80 点）：IT 戦略とその潮流について、幅広くトレンドワードを列挙し、説明することができる
評価 B（79 ～ 70 点）：IT 戦略とその潮流について、幾つかのトレンドワードを列挙し、説明することができる
評価 C（69 ～ 60 点）：IT 戦略とその潮流について、幾つかのトレンドワードを列挙できる
評価 F（59 点以下）　：IT 戦略やデジタルマーケティングについて、語るべきところが無い

■評価方法
出席 60%、期末試験 40%

■留意点
必ず PC を持参すること。

科目名	IT 活用法 II（Utilizing Method of IT II）
サブタイトル	リポジトリ管理システムを利用した協業
担当教員	出原、彩藤
対象学年	2 年生以上
区分	春学期

■講義目的

近年、情報技術スキルの証明には、公開リポジトリサービス上での活動が求められるようになってきた。
本講義では、リポジトリ管理システムを利用したクラウド上でのチーム協業の演習を基盤として、情報技術を用いた新しいビジネス（ゲームなどを含むサービス全般）の発想と提案を行うことができるようになることを目的とする。 本講義の到達点である、マーケティング視点に基づくものづくりの発想法と、リポジトリへの蓄積、および、チーム協業は、社会において大きな競争力になる。
受講者の到達レベルに応じて、講義内容を変更することがある。

■講義分類

ビジネス ICT、ビジネス創造、社会人力育成

■到達目標

新しい情報サービスについて、そこで使用されている情報技術が理解できる。また、新しい情報技術を用いて、新たなサービスが提案できる。その過程で、戦略的な発想方法を身につける。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

情報技術を用いた新しいビジネス（ゲームなどを含むサービス全般）の発想と提案を行うことができるようになる。

■授業形態

演習、グループディスカッション、プレゼンテーション

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

各回に示す内容について、チームごとに９０分の議論を行い、記録する。（一部個人課題）

■授業の概要

第１講　ガイダンス・チーム決定
第２講　環境設定
第３講　クラウドを利用した共同作業
第４講　チーム Wiki の設置
第５講　チームウェブページの設置
第６講　サービスと要素技術
第７講　サービスと要素技術
第８講　制限要素発想法
第９講　要素制限法による独自サービスの考案
第 10 講　プレゼンテーション
第 11 講　ウェブ技術を利用したサービス
第 12 講　ウェブ技術を利用したサービス
第 13 講　サービス立案
第 14 講　ミニプレゼンテーション
第 15 講　プレゼンテーション

■フィードバックの要領

プレゼンテーションに対するコメント

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：数値評価で９０点以上
評価 A（89 ～ 80 点）：数値評価で８０点以上９０点未満
評価 B（79 ～ 70 点）：数値評価で７０点以上８０点未満
評価 C（69 ～ 60 点）：数値評価で６０点以上７０点未満
評価 F（59 点以下）　：数値評価で６０点未満

■評価方法

欠席理由を問わず３分の２以上の出席を前提として、平常点６０点、個人レポート４０点で評価する。

■留意点

・第１回目の講義で全体のオリエンテーションを行うので必ず出席すること。特段の事情がある場合を除き、第１回講義に欠席した場合、受講を認めない。・ノート PC が配布された以降は、ノート PC（タブレットを含む）と電源をもってくること。・受講者の到達レベルに応じて、講義内容を変更することがある。

科 目 名　NPO・NGO 論（NPO・NGO Theory）

サブタイトル　社会的事業の組織論

担当教員　松本　祐一

対象学年　２年生以上　　区分　秋学期

■講義目的

社会的な問題の解決の主体である NPO やＮＧＯ（以下、２つの概念を合わせて便宜上ＮＰＯと表記）が登場した歴史的背景、現代における存在意義、経営の特徴を学び、ソーシャルイノベーションを生み出す組織原理について理解する。

■講義分類

ビジネス環境理解、ビジネスマネジメント、社会人力育成

■到達目標

ＮＰＯ特有の組織原理を理解すること

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

企業や行政とは違うＮＰＯ独自の組織のあり方を理解する。

■授業形態

講義、フィールドワーク

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

最低 1.3 時間以上の興味のあるＮＰＯの事例の収集

■授業の概要

第１講　講義の目的と内容を共有する。（オリエンテーション）
第２講　ＮＰＯという組織を学ぶ意味を考える。
第３講　ＮＰＯがなぜ必要かを考える。
第４講　ＮＰＯがなぜ必要かを考える。第２回
第５講　ＮＰＯの組織的特色を理解する。
第６講　ＮＰＯと他の組織の違いを総括する。
第７講　ＮＰＯの成果とは何かを考える。
第８講　ＮＰＯに必要なマーケティング志向を理解する。
第９講　ＮＰＯマーケティングの枠組みとプロセスを理解する。
第 10 講　ＮＰＯの資源動員について考える。
第 11 講　ＮＰＯに関わる「人」について考える。
第 12 講　ＮＰＯの経営の特徴について、総括する。
第 13 講　社会的事業の開発を考える。
第 14 講　社会的事業の開発を考える。第２回目。
第 15 講　授業のふりかえりを行う。

■フィードバックの要領

２回のセクションレポートについて、中間的な評価をフィードバックする。

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：すべて出席し、内容を理解し、オリジナル性がある。セクションレポートが２回ともＡ
評価 A（89 ～ 80 点）：９割以上出席し、内容を理解している。セクションレポートのうち、２回ともＢ以上。
評価 B（79 ～ 70 点）：８割以上出席し、内容を理解。セクションレポートのうち、１回以上Ｂ
評価 C（69 ～ 60 点）：６割以上出席し、内容をある程度理解。
評価 F（59 点以下）　：５割以下の出席率。またはセクションレポートが２回ともＤ

■評価方法

授業中提出のワークシート（ミニテスト・セクションレポート）40%　中間レポート 20%　最終レポート 40%

■留意点

① 10 分以上の遅刻は欠席として扱う。②中間レポートと最終レポートの提出が単位修得の最低限の条件で、授業内で２回行うセクションレポートで２回ともＤを取った場合、単位修得できない。

科 目 名　Practical English ConversationI（Practical English Conversation I）

サブタイトル　世界でそして地域で活躍するために必要な英語表現力を身に付ける

担当教員　中村　その子

対象学年　2年生以上　　区分　春学期

■講義目的

世界でそして地域で活躍するために必要な英語表現力を身に付け、志の実現に向かって社会に自分のアイデアや考え、意見を英語で積極的に発信し、いろいろな形のコミュニケーションを取れるようにする。

■講義分類

ビジネス環境理解、社会人力育成、グローバルビジネス

■到達目標

以下講義概要に述べられる学習項目について、英語でのコミュニケーションが取れるようにする。特に、留学や、国内外での研修、見学、社会的活動に最低限必要な英語表現を習得し、自分の考えやアイデアをいろいろな方法で社会に発信し、また同時に発信された他者の考えを正しく理解できるようになること。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

地域でも、また国内、海外どこであっても自分の志を実現するためにそして、産業社会で発生する様々な問題を解決し、社会をよりよいものにするために、円滑に英語コミュニケーションを行えるようになること。

■授業形態

グループディスカッション、グループワーク、プレゼンテーション

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

下記の各週講義内容に関して配布される教材を１．５時間程度予習､復習し､そこに提示されている英語表現を覚えること。

■授業の概要

第１講　挨拶、アイスブレーキング、友人作り、スモールトークなどその１
第２講　電話での会話や PC（SNS）に関連した表現、アポイントメントに関連した表現その１
第３講　家族や結婚、自分の生活や趣味、ショッピングやデート、スポーツその１
第４講　アニメーション、映画やテレビ番組、メディア関連その１
第５講　人物、製品、サービスなどを魅力的に描写その１
第６講　食品販売、レストラン、料理など、食に関連した英語表現その１
第７講　比較対照、提案、オファー、選択決定、意見やアドバイスのやりとりその１
第８講　自由時間、週末の楽しみ方、趣味、旅行、特技その１
第９講　的確な指示の与え方と説明の仕方その１
第 10 講　アルバイト、インターンシップ、就職活動、ボランティア活動などについてその１
第 11 講　因果関係、同意不同意、将来計画、予想予測、論理思考その１
第 12 講　ファッション、音楽、および音楽関連産業に関する英語表現その１
第 13 講　地球にやさしい英語表現＝環境問題その１
第 14 講　期末スピーキングテストと最終プレゼンテーション 世界に発信すべき日本の伝統と文化
第 15 講　期末ライティングテスト

■フィードバックの要領

授業内小テスト、課題、レポート類については点数と必要な場合はコメントを付けて返却

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：下記の配分で得点を付け、９０点以上の場合
評価 A（89 ～ 80 点）：下記の配分で得点を付け、８０点から８９点の場合
評価 B（79 ～ 70 点）：下記の配分で得点を付け、７０点から７９点の場合
評価 C（69 ～ 60 点）：下記の配分で得点を付け、６０点から６９点の場合
評価 F（59 点以下）　：下記の配分で得点を付け、５９点以下の場合

■評価方法

出席 20%、授業内小テスト 20%、宿題 20%、中間テストおよび期末テスト 40%

■留意点

相談や質問などは sonoko-n@tama.ac.jp にメールを送ってくれればいつでも対応します。必要に応じてオフィスアワーなどに会って直接お話しすることも可能です。

科 目 名 Practical English ConversationII（Practical English Conversation II）

サブタイトル 世界でそして地域で活躍するために必要な英語表現力を身に付ける

担当教員 中村　その子

対象学年 ２年生以上　**区分** 秋学期

■講義目的

世界でそして地域で活躍するために必要な英語表現力を身に付け、志の実現に向かって社会に自分のアイデアや考え、意見を英語で積極的に発信し、いろいろな形のコミュニケーションを取れるようにする。

■講義分類

ビジネス環境理解、社会人力育成、グローバルビジネス

■到達目標

以下講義概要に述べられる学習項目について、英語でのコミュニケーションが取れるようにする。特に、留学や、国内外での研修、見学、社会的活動に最低限必要な英語表現を習得し、自分の考えやアイデアをいろいろな方法で社会に発信し、また同時に発信された他者の考えを正しく理解できるようになること。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

地域でも、また国内、海外どこであっても自分の志を実現するためにそして、産業社会で発生する様々な問題を解決し、社会をよりよいものにするために、円滑に英語コミュニケーションを行えるようになること。

■授業形態

グループディスカッション、グループワーク、プレゼンテーション

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

下記の各週講義内容に関して配布される教材を１．５時間程度予習､復習し､そこに提示されている英語表現を覚えること。

■授業の概要

第１講　挨拶、アイスブレーキング、友人作り、スモールトークなどその２
第２講　電話での会話や PC（SNS）に関連した表現、アポイントメントに関連した表現その２
第３講　家族や結婚、自分の生活や趣味、ショッピングやデート、スポーツその２
第４講　アニメーション、映画やテレビ番組、メディア関連その２
第５講　人物、製品、サービス内容などを魅力的に描写その２
第６講　食品販売、レストラン、料理など、食に関連した英語表現その２
第７講　比較対照、提案、オファー、選択決定、意見やアドバイスのやりとりその２
第８講　自由時間、週末の楽しみ方、趣味、旅行、特技その２
第９講　的確な指示の与え方と説明の仕方その２
第 10 講　アルバイト、インターンシップ、就職活動、ボランティア活動などについてその２
第 11 講　因果関係、同意不同意、将来計画、予想予測、論理思考その２
第 12 講　ファッション、音楽、および音楽関連産業に関する英語表現その２
第 13 講　地球にやさしい英語表現＝環境問題その２
第 14 講　期末スピーキングテストと最終プレゼンテーション 世界に発信すべき日本の伝統と文化
第 15 講　期末ライティングテスト

■フィードバックの要領

授業内小テスト、課題、レポート類については点数とコメントを付けて返却

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：下記の配分で得点を付け、９０点以上の場合
評価 A（89 ～ 80 点）：下記の配分で得点を付け、８０点から８９点の場合
評価 B（79 ～ 70 点）：下記の配分で得点を付け、７０点から７９点の場合
評価 C（69 ～ 60 点）：下記の配分で得点を付け、６０点から６９点の場合
評価 F（59 点以下）　：下記の配分で得点を付け、５９点以下の場合

■評価方法

出席 20%、授業内小テスト 20%、宿題 20%、中間テストおよび期末テスト 40%

■留意点

相談や質問などは sonoko-n@tama.ac.jp にメールを送ってくれればいつでも対応します。必要に応じてオフィスアワーなどに会って直接お話しすることも可能です。

科目名	TOEIC I（TOEIC I）
サブタイトル	特に英語検定試験受験を必要とする海外活動のために
担当教員	石川　晴子
対象学年	2年生以上
区分	春学期

■講義目的

English Expression と並行してまたはその後、英語力を継続的に高め、TOEIC の点数アップをめざす学生のための授業である。英語の総合的な力が上がれば TOEIC の点数も、もちろん上がって行くはずであるが、特徴のある能力資格試験なので、どのような傾向の問題がどんな形で出題されるのか、といった予備知識や技術的な訓練、慣れも大切な要素となる。この講義では TOEIC の得点を少なくとも現在の自分の点数から 100 点は上げることをめざし、リスニングリーディング両セクションで確実に点数を取ることに加えて、語彙、文法、読解力の増強をはかる。ただ、TOEIC の点数を上げるだけが英語を学ぶ目的ではないので、単なるノウハウに終わらせることなく、最後には、TOEIC の勉強をしたことが一人一人の英語コミュニケーション能力を総合的に高める結果につなげる。

■講義分類

英語検定試験準備、自己表現・英語コミュニケーション

■到達目標

授業履修前の TOEIC 得点より 100 点アップした実力をつける。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

英語検定試験に必要な英語力と受験スキルを身に着ける。

■授業形態

講義、グループワーク、プレゼンテーション

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

TOEIC 受験へ向けての準備、各回最低 2 時間程度

■授業の概要

第 1 講　TOEIC の概要と構成について
第 2 講　TOEIC の各パートの概要、出題形式、傾向について
第 3 講　Travel- 旅行中に使う表現、人物（一人）の動作をあらわす表現、WH疑問文、時制など
第 4 講　英語の音声パターンについて（連結、脱落など）
第 5 講　Dining Out　レストランで使われる表現、人物（一人）の位置・場所をあらわす表現など
第 6 講　リスニング問題で心がけること。聞き取りのポイントについて。
第 7 講　Media- 能動態・受動態、ニュースで使われる表現、接続表現など
第 8 講　聞きとると同時に自分の発音もよりよいものに。発音練習。
第 9 講　Entertainment- 人物（複数）の動作をあらわす表現、図表問題、動名詞・不定詞など
第 10 講　リーディング問題の傾向と対策。問題の解き方について。
第 11 講　Purchasing- 人物（複数）の位置・場所をあらわす表現、店内での会話、代名詞など
第 12 講　リーディングパートの点数をあげるために日頃どのようなものを読んだら良いか。
第 13 講　Clients- 顧客との取引に関する英語表現、品詞、代名詞、意図問題など
第 14 講　速読の技法を身に付ける。できばきと問題を片づけるコツを身につける。
第 15 講　期末試験および総括

■フィードバックの要領

課題・試験等に対して行う。

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：評価方法により計算された総合点が 90%以上の場合
評価 A（89 ～ 80 点）：評価方法により計算された総合点が 80 ～ 89% 以上の場合
評価 B（79 ～ 70 点）：評価方法により計算された総合点が 70 ～ 79% の場合
評価 C（69 ～ 60 点）：評価方法により計算された総合点が 60 ～ 69% の場合
評価 F（59 点以下）　：評価方法により計算された総合点が 59% 以下の場合

■評価方法

授業への出席および参加 20%、授業内活動（小テスト、課題、宿題含む）40%、定期試験 40%

■留意点

①事前履修科目について：【2011 ～ 2013 年度入学生適用】同一言語にて 4 単位（English Expression I と II、中国語 I と II、韓国語 I と II、もしくは IT 活用法 I と II）を修得していること。【2014 年度以降入学生適用】同一言語にこだわらず D 区分 4 単位を修得していること。②履修定員について：本科目は原則 30 人の人数制限がある。初回の授業の出席者の履修を優先する

科目名　TOEIC II（TOEIC II）

サブタイトル　特に英語検定試験受験を必要とする海外活動のために
担当教員　石川　晴子
対象学年　2 年生以上　区分　秋学期

■講義目的

English Expression と並行してまたはその後、英語力を継続的に高め、TOEIC の点数アップをめざす学生のための授業である。英語の総合的な力が上がれば TOEIC の点数も、もちろん上がって行くはずであるが、特徴のある能力資格試験なので、どのような傾向の問題がどんな形で出題されるのか、といった予備知識や技術的な訓練、慣れも大切な要素となる。この講義では TOEIC の得点を少なくとも現在の自分の点数から 100 点は上げることをめざし、リスニングリーディング両セクションで確実に点数を取ることに加えて、語彙、文法、読解力の増強をはかる。ただ、TOEIC の点数を上げるだけが英語を学ぶ目的ではないので、単なるノウハウに終わらせることなく、最後には、TOEIC の勉強をしたことが一人一人の英語コミュニケーション能力を総合的に高める結果につなげる。

■講義分類

英語検定試験準備、自己表現・英語コミュニケーション

■到達目標

授業履修前の TOEIC 得点より 100 点アップした実力をつける。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

英語検定試験に必要な英語力と受験スキルを身に着ける。

■授業形態

講義、グループワーク、プレゼンテーション

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

TOEIC 受験へ向けての準備、各回最低 2 時間程度

■授業の概要

第 1 講　TOEIC の概要と構成について
第 2 講　TOEIC の各パートの概要、出題形式、傾向について
第 3 講　Recruiting, Personnel- 人事に関する英語表現、Yes/No 疑問文、問題先読みの方法など
第 4 講　英語の音声パターンについて（連結、脱落など）
第 5 講　Advertising- 物の位置関係をあらわす表現、比較など
第 6 講　リスニング問題で心がけること。問題に解答するための聞き取りのポイントについて。
第 7 講　Meetings- 会議に関連する英語表現、付加疑問文、前置詞など
第 8 講　ききとると同時に自分の発音もよりよいものに。発音練習。
第 9 講　Offices- オフィスでの英語表現、依頼・許可表現、接続詞、前置詞、代名詞など
第 10 講　リーディング問題の傾向と対策。問題の解き方について。
第 11 講　Daily Life- 提案・勧誘の表現、関係代名詞など
第 12 講　reading part の点数をあげるために日頃どのようなものを読んだら良いか紹介する。
第 13 講　Sales and Marketing- 営業、マーケティングの英語表現、選択疑問文など
第 14 講　速読の技法を身に付ける。できばきと問題を片づけるコツを身につける。
第 15 講　期末試験および総括

■フィードバックの要領

課題・試験等に対して行う。

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：評価方法により計算された総合点が 90% 以上の場合
評価 A（89 ～ 80 点）：評価方法により計算された総合点が 80 ～ 89% の場合
評価 B（79 ～ 70 点）：評価方法により計算された総合点が 70 ～ 79% の場合
評価 C（69 ～ 60 点）：評価方法により計算された総合点が 60 ～ 69% の場合
評価 F（59 点以下）　：評価方法により計算された総合点が 59% 以下の場合

■評価方法

授業への出席および参加 20%、授業内活動（小テスト、課題、宿題含む）40%、定期試験 40%

■留意点

①事前履修科目について：【2011 ～ 2013 年度入学生適用】同一言語にて 4 単位（English Expression I と II、中国語 I と II、韓国語 I と II、もしくは IT 活用法 I と II）を修得していること。【2014 年度以降入学生適用】同一言語にこだわらず D 区分 4 単位を修得していること。②履修定員について：本科目は原則 30 人の人数制限がある。初回の授業の出席者の履修を優先する

科目名	Web デザインⅠ（Web Design Ⅰ）
サブタイトル	ソースコード（HTML、CSS）を用いてホームページを作成する
担当教員	良峯　徳和
対象学年	2年生以上
区分	春学期

■講義目的

この授業では、ウェブサイト（ホームページ）の構築、登録、更新を行うために必要な基本的な概念、技術の習得を目指す。インターネットが始まった当初から今日に至るまでのウェブサイトのデザインおよびその技術的変遷について学ぶと同時に、「ハイパーテキスト」という概念がもたらしたインターネット上の情報を構造的かつ動的に表現するための理論的な方法論について学習する。具体的には、HTML、CSS（スタイルシート）といったウェブページ構築に必要な基本的な言語および具体的手法等を、実習を通じて習得する。

■講義分類

ビジネス創造、ビジネス ICT

■到達目標

① HTML および CSS を用いて、ウェブページを作成･編集するための知識、スキルの習得　･ウェブページのソースファイルの意味や機能の理解、把握　②ウェブページを構成するさまざまなファイルを、サーバー側の要求に合わせて、アップロードしたり、アップデートする方法の習得③ウェブデザインに関するさまざまな概念や知識の習得

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

HTML、CSS を用いてウェブページを作成・編集するための基本知識を習得し、社会でウエブページが果たしているさまざまな役割とその重要性について理解する。

■授業形態

講義、双方向

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

授業の開始時に毎回前回の授業の内容理解を確認するための復習テストを行う。その準備として、1 .5 時間以上の復習を行ってくること。

■授業の概要

第 1 講　インターネットの歴史、WWW の概念
第 2 講　Web ページのソースファイル ; フォントとフォーマッティングのための HTML タグ
第 3 講　画像表示 ; ハイパーリンク
第 4 講　表の作成 ; デザインテーブル
第 5 講　フレームを使ったホームページ
第 6 講　リスト、フォーム、ボタン
第 7 講　HTML 全般の復習と練習問題
第 8 講　CSS の基本的文法 ; ホームページの背景を設定、画像表示
第 9 講　CSS によるテキストの設定、各種テキストスペースの設定 ; フォントの設定
第 10 講　アプリケーションを使ってスタイルシートを設定する方法 ; ボーダースタイルの設定
第 11 講　マージン、パディングの設定 ; イメージフロート
第 12 講　CSS 疑似クラス
第 13 講　CSS 全般の復習と練習問題
第 14 講　オリジナルホームページの作成
第 15 講　オリジナルホームページの作成、アップロード

■フィードバックの要領

提出された課題に対して、修正点やコメントを記入してフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：講義内容を十分に理解し、目的に応じて学んだ内容を応用、発展させることができる。
評価 A（89 ～ 80 点）：講義内容を理解し、目的に応じて学んだ内容をある程度柔軟に応用することができる。
評価 B（79 ～ 70 点）：講義内容をほぼ理解し、目的に応じて学んだ内容をある程度応用することができる。
評価 C（69 ～ 60 点）：講義内容の基本的事柄を理解し、簡単なことであれば、応用ができる。
評価 F（59 点以下）　：講義内容について基本的な知識も理解も有していない。

■評価方法

出席 : 10%, 課題提出 : 30%, 小テスト : 40%, 学期末課題 : 20%。ただし、出席は全体の 2/3 以上、課題提出および小テストも全体の 2/3 以上を単位取得のための最低条件とする。

■留意点

①本授業は Web デザインⅡを履修する際の必須要件となっている。Web デザインⅡも継続的に履修したい学生は必ず本授業を履修すること。②毎週の課題提出および小テスト正解率が全体で 2/3 を越えない学生、出席が全体の 2/3 に満たない学生は、単位を取得することができない。③就職活動に伴う欠席については活動していたという証明書がある場合に限り、これを正当な理由として考慮する。

科目名	Web デザイン II（Web Design II）
サブタイトル	javascript を学んで、動的、インタラクティブな Web ページをデザインする
担当教員	良峯　徳和
対象学年	2 年生以上
区分	秋学期

■講義目的

この授業は、HTML や CSS の基本をマスターした学生を対象に、より高度な表現力、よりインタラクティブなコミュニケーションを可能とする Web ページ制作技術の習得を目的とする。具体的には、HTML、CSS の基礎に加えて、javascript と呼ばれるクライアントサイドの Web プログラミングの技法を Web ページに組み込むための基礎知識ならびに制作技術を学ぶ。

■講義分類

ビジネス創造、ビジネス ICT

■到達目標

①プログラミングの基本となるアルゴリズム、構文ルールを理解・習得し、プログラムを構築する基礎能力を身に着ける。
② Web デザインに有効なさまざまなメソッドの使い方を理解・習得し、必要に応じて使いこなす技術力を身に着ける。
③ Web のユーザビリティやアクセシビリティについての理解を深めるとともに、著作権への配慮やセキュリティの問題についても関心を持てるようにする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

自分が意図する Web 上の表現内容を読み手が見やすく、アクセスしやすく、プログラミング技術を使って実現する技能を養う

■授業形態

講義、双方向

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

授業の開始時に毎回前回の授業の内容理解を確認するための小テストを行う。その準備として、1.5 時間以上の復習を行ってくること。

■授業の概要

第 1 講　javascript とは何か ?; javascript は Web の世界でどのように利用されているか。
第 2 講　javascript の基本構文 1
第 3 講　javascript の基本構文 2
第 4 講　javascript の基本構文 3
第 5 講　ポップアップウィンドウを使ったプログラミング技法を習得。
第 6 講　ループ（繰り返し）処理を使って、作業を大量かつ高速に行わせるプログラミングの技法
第 7 講　ループ（繰り返し）処理を具体的な課題に応用
第 8 講　イベント処理を伴うダイナミック Web ページの作成方法
第 9 講　文字列オブジェクトを対象としたさまざまな操作や処理
第 10 講　日時に関するオブジェクトや行列を対象とした操作や処理
第 11 講　行列（array）や数オブジェクトを対象としたさまざまな操作や処理
第 12 講　HTML 要素をオブジェクトとしたさまざまな操作や処理
第 13 講　最終課題作成実習
第 14 講　最終課題作成実習
第 15 講　最終課題作成実習

■フィードバックの要領

提出された課題に対して、修正点やコメントを記入することでフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：講義内容を十分に理解し、目的に応じて学んだ内容を応用、発展させることができる。
評価 A（89 ～ 80 点）：講義内容を理解し、目的に応じて学んだ内容をある程度柔軟に応用することができる。
評価 B（79 ～ 70 点）：講義内容をほぼ理解し、目的に応じて学んだ内容をある程度応用することができる。
評価 C（69 ～ 60 点）：講義内容の基本的事柄を理解し、簡単なことであれば、応用ができる。
評価 F（59 点以下）　：講義内容について基本的な知識も理解も有していない。

■評価方法

出席 : 10%, 課題提出 : 30%, 小テスト : 40%, 学期末課題 : 20%。ただし、出席、課題提出、小テストのいずれにおいても全体の 2/3 以上を単位取得のための最低条件とする。

■留意点

小テストは毎回の授業の開始時に実施するため、遅刻・欠席の場合は受験できない。忌引き、就職の面接試験、インターンシップなどの理由で欠席した場合のみ、該当小テスト後の 1 週間以内に限り、追試を受けることができる。詳細については、最初の授業で説明する。

科目名	アメリカ経済論（America Economy）
サブタイトル	オバマ政権（トランプ政権）の経済政策および政策意図を把握する
担当教員	千原　則和
対象学年	2年生以上
区分	秋学期

■講義目的

本講義の目的は、大統領が毎年議会に提出する『Economic Report of the President（ERP：大統領経済報告）』を通じて、オバマ政権の経済政策とその意図を把握することにある。

『ERP』は、政権の経済情勢および経済政策に関する判断を示す報告書で、アメリカ経済の現状およびオバマ政権の経済政策を把握するには最適な資料である。本講義では、この『ERP』の翻訳書（『米国経済白書 2016』または、『米国経済白書 2017』・『米国経済白書 2018』）を使って、アメリカ経済の現状およびオバマ政権の経済政策を明らかにする。『米国経済白書』に記載されている豊富な図表および統計データをできる限り多く活用し、アメリカ経済のみならず世界経済の潮流に触れる機会を提供する。

必要に応じて、映像資料を使って、最新のアメリカ経済の状況を説明する。

（出版が間に合えば、使用するテキストを最新のものに変更する予定である。）

■講義分類

ビジネス環境理解、社会人力養成、グローバルビジネス

■到達目標

①オバマ政権（およびトランプ政権）の経済政策および政策意図を理解する　②『大統領経済報告』の内容を理解し、実践的知識獲得のための環境を整える　③『白書』を通じて、アメリカ経済に関連する最前線事例に触れ、課題発見のための素地を養う

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

大統領経済諮問委員会の年次報告書の解説を通して、政権の経済政策の課題や目標、具体的施策を把握することができる。

■授業形態

講義（受講者 20 名以上の場合）、双方向（受講者 20 名以下の場合）

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

【予習】『米国経済白書 2016（または 2017・2018）』各章の通読、【復習】 配布資料や講義ノートを使った講義の復習（1.5 時間）

■授業の概要

第１講　イントロダクション
第２講　アメリカ経済の基礎知識（１）
第３講　アメリカ経済の基礎知識（2）
第４講　『ERP』第１章：米国の包括的成長（１）
第５講　『ERP』第１章：米国の包括的成長（２）
第６講　『ERP』第１章：米国の包括的成長（３）
第７講　『ERP』第２章「2015 年の回顧と将来の見通し」（１）
第８講　『ERP』第２章「2015 年の回顧と将来の見通し」（２）
第９講　『ERP』第３章「グローバル経済のマクロ的情勢」
第 10 講　『ERP』第４章「幼児期の不平等と効果的な公共政策による介入」（１）
第 11 講　『ERP』第４章「幼児期の不平等と効果的な公共政策による介入」（２）
第 12 講　『ERP』第５章「テクノロジーとイノベーション」（１）
第 13 講　『ERP』第５章「テクノロジーとイノベーション」（２）
第 14 講　『ERP』第６章「米国インフラストラクチャ投資の経済的利益」（１）
第 15 講　『ERP』第６章「米国インフラストラクチャ投資の経済的利益」（２）　及び　まとめ

■フィードバックの要領

定期試験では知識を問う問題を出題するため、原則フィードバックは行わない。

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：評価方法配分の要素を合算した 100％を 100 点に換算し、90 ～ 100 点
評価 A（89 ～ 80 点）：評価方法配分の要素を合算した 100％を 100 点に換算し、80 ～ 89 点
評価 B（79 ～ 70 点）：評価方法配分の要素を合算した 100％を 100 点に換算し、70 ～ 79 点
評価 C（69 ～ 60 点）：評価方法配分の要素を合算した 100％を 100 点に換算し、60 ～ 69 点
評価 F（59 点以下）　：評価方法配分の要素を合算した 100％を 100 点に換算し、59 点以下

■評価方法

定期試験（70％）、授業内の課題の取り組み・出席など（30％）

■留意点

①出欠確認を兼ねた課題（文章作成、小テスト）に取り組むこと、講義中に携帯端末（スマートフォン、タブレットなど）を使用しないことを、受講の条件とする。②課題に取り組む姿勢、課題の中身を基に、加点評価・減点評価をする。

科 目 名 アントレプレナーシップ論（Entrepreneurship）

サブタイトル 立志起業家論

担当教員 趙　佑鎭

対象学年 2 年生以上　**区分** 春学期

■講義目的

将来、ビジネスを起こしたいと考えている学生がその実践に生かせる手がかりを学ぶことを科目の目的とする。この場合の「手がかり」とは、起業家に必要な最低限の「初歩的知識」すなわち、ビジネス・プラン、戦略、組織、マーケティング等のことであり、さらにはビジネスを立ち上げようという「志」、「やる気、思い」である。本講義においては知識以上に「志」、「やる気、思い」は重要なキーワードである。この授業では、理論を中心とした部分と共に志・実践に役立つ部分を強化している。趙が講義した内容と対応するかたちで、外部講師として本学に招いたベンチャー業界の実務家（産業社会で活躍し名声を得ている起業家、インキュベートマネジャー、メンター）は、起業経営の現実と最前線事例のダイナミックスさを学生諸君に感じさせるであろう。将来何をしたいのか漠然としている学生にとっても実務家の体験談を交えた講義は志・キャリア設計の参考のうえで有意義であると思われる。

■講義分類

ビジネス創造、ビジネスマネジメント、社会人力育成

■到達目標

①ビジネスの立ち上げとビジネスプラン作成に必要な知識習得、②起業経営特有の戦略、組織、ファイナンス、マーケティングを理解する、③自分にとって経営（学）を勉強する意味を含む志・人生設計及び問題解決を考えさせるきっかけづくり。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP5 高い志

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

ベンチャー企業を巡る社会問題に関連する複雑な経営環境と問題解決の手がかりを理論的に理解させ、先進的な問題解決に関わる実務者の講演を通じて、社会変革に関与していこうという学生の高い志の確立につなげる。

■授業形態

講義、ディベート（講師との双方向）、ベンチャー企業の事例を扱った視聴覚教育

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

配布資料には翌週講義回の内容が記載してあり、講義終了間際に教員が示す事前学習ポイントを中心に、それらを授業前に読んだ上で（各 1.5 時間以上）当該回の講義に臨み、授業後には WORD を用いてレポートを提出する

■授業の概要

第 1 講　ベンチャー企業とは何か、アントレプレーナシップとは何か
第 2 講　個人事業と会社設立における手順とルール
第 3 講　起業家としての志と勇気ある生き方（外部講師講演）
第 4 講　世界各地域の地域振興の事例とイノベーションの関係
第 5 講　ベンチャー企業経営論のフレームワーク
第 6 講　インキュベート事業経験からみた成功する起業家、失敗する起業家（外部講師講演）
第 7 講　事業機会の発見・評価とビジネスモデル構築
第 8 講　ベンチャー企業の組織のマネジメント
第 9 講　ベンチャー企業の新価値創出と組織のあり方（外部講師講演）
第 10 講　限りある自社資源の限界を超えるための他社の経営資源活用
第 11 講　ベンチャー企業のグローバル化の意義
第 12 講　ベンチャー・ファイナンス -- 日本の銀行とベンチャーキャピタル
第 13 講　起業家・ベンチャー企業のマーケティング
第 14 講　日本の起業家・志ある経営（外部講師講演）
第 15 講　総括

■フィードバックの要領

レポートに対し、評価あるいはコメントを記入してフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：起業経営特有の戦略、組織、ファイナンス、マーケティングを大変良好に理解している
評価 A（89 ～ 80 点）：起業経営特有の戦略、組織、ファイナンス、マーケティングをかなり理解している
評価 B（79 ～ 70 点）：起業に必要な知識を良好に習得、レポートでは自分の考えが良く述べられている
評価 C（69 ～ 60 点）：起業に必要な知識をある程度習得、レポートでは自分の考えが一定部分述べられている
評価 F（59 点以下）　：ベンチャー経営の基本を理解しておらず、レポートも未提出

■評価方法

・期末定期試験（40%）＋レポート（3 本・30%）＋出席（30%）・期末試験は趙の講義内容、レポート 3 本は外部講師の内容を中心に行う ・レポート 3 本は、MS Office word を用いた課題作成提出

■留意点

①講義の順序は、学生の理解度と進捗度によって前後変更する場合がある。②外部講師の講義日もスケジュール状況によって変更になる場合もある。③私語、携帯電話、本授業と無関係のパソコン使用、途中退室は絶対不可であり、熾烈に厳しく注意する。学生の社会人としての常識涵養のための注意と授業態度を静粛に保つ教員の姿勢がいやであれば、本講義の履修は勧められない。

科 目 名　韓国ビジネスコミュニケーションⅠ（Korean Business Communication I）

サブタイトル　中級韓国語（ハングル能力検定試験４級取得を目指す）

担当教員　高　昌弘

対象学年　２年生以上　　区分　春学期

■講義目的

この講義では、１年間初級韓国語を学習した学生（２年生以上）を対象に、次のステップである中級韓国語（ハングル検定４級レベルの文法や語彙など）を学び、ハングル能力検定試験４級レベルの実力を身につけることを目的としている。

■講義分類

グローバルビジネス、社会人力育成

■到達目標

２０１８年１１月１１日（日）に行われる予定のハングル能力検定試験４級を受けるためには、次の項目を覚える必要がある。語彙（５９０個）、文法〈慣用表現＋語尾〉（８９個）、慣用句（３５個）、挨拶表現（２８個）、助詞（２０個）。秋学期では主に過去問を使って実際に問題を解いてみた上で解説するなどできるだけ試験問題に慣れるようにしていきたいので、上記項目の約８割を春学期で習得することを目標とする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

様々な韓国語表現を学習することでコミュニケーション能力を高め、より明確な意思疎通ができるようになる。

■授業形態

講義　グループディスカッション　グループワーク

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

復習に必要な時間は２時間以上。前回に学んだ内容をちゃんと覚えているかどうか毎回テストを行うのでしっかり復習してくること。

■授業の概要

第１講　オリエンテーション及び自己紹介
第２講　語彙（１・２）、文法（１）、慣用句（１）、挨拶表現（１）
第３講　語彙（３・４）、文法（２）、慣用句（２）、挨拶表現（２）
第４講　語彙（５・６）、文法（３）、慣用句（３）、挨拶表現（３）
第５講　語彙（７・８）、文法（４）、慣用句（４）、挨拶表現（４）
第６講　語彙（９・１０）、文法（５）、慣用句（５）、挨拶表現（５）
第７講　語彙（１１・１２）、文法（６）、慣用句（６）、挨拶表現（６）
第８講　語彙（１３・１４）、文法（７）、慣用句（７）、挨拶表現（７）
第９講　語彙（１５・１６）、文法（８）、慣用句（８）、挨拶表現（８）
第 10 講　語彙（１７・１８）、文法（９）、慣用句（９）、挨拶表現（９）
第 11 講　語彙（１９・２０）、文法（１０）、慣用句（１０）、挨拶表現（１０）
第 12 講　語彙（２１・２２）、文法（１１）、慣用句（１１）、挨拶表現（１１）
第 13 講　語彙（２３・２４）、文法（１２）、慣用句（１２）、挨拶表現（１２）
第 14 講　語彙（２５・２６）、文法（１３）、慣用句（１３）、挨拶表現（１３）
第 15 講　総まとめ

■フィードバックの要領

毎回学習した内容の小テストを行い、できないところをチェックし、もう一度指導する。

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：出席と小テストの合計が９０点以上であること。
評価 A（89 ～ 80 点）：出席と小テストの合計が８９点から８０点の間であること。
評価 B（79 ～ 70 点）：出席と小テストの合計が７９点から７０点の間であること。
評価 C（69 ～ 60 点）：出席と小テストの合計が６９点から６０点の間であること。
評価 F（59 点以下）　：出席と小テストの合計が５９点以下であること。

■評価方法

出席５０％　小テスト５０％

■留意点

韓国語Ⅰ・Ⅱを履修していない場合は受講できない。

科 目 名　韓国ビジネスコミュニケーション II（Korean Business Communication II）

サブタイトル　中級韓国語（ハングル能力検定試験４級取得を目指す）

担当教員　高　昌弘

対象学年　２年生以上　　区分　秋学期

■講義目的
この講義では、１年間初級韓国語を学習した学生（２年生以上）を対象に、次のステップである中級韓国語（ハングル検定４級レベルの文法や語彙など）を学び、ハングル能力検定試験４級レベルの実力を身につけることを目的としている。

■講義分類
グローバルビジネス、社会人力育成

■到達目標
２０１８年１１月１１日に行われる予定のハングル能力検定試験４級を受けるためには、次の項目を覚える必要がある。語彙（５９０個）、文法〈慣用表現＋語尾〉（８９個）、慣用句（３５個）、挨拶表現（２８個）、助詞（２０個）。秋学期では春学期で習得できなかった上記項目の約２割を学習し、過去問を使って実際に模擬試験を行うなどできるだけ試験問題に慣れるようにし、試験に合格できるように準備していくことを目標とする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項
DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細
様々な韓国語表現を学習することでコミュニケーション能力を高め、より明確な意思疎通ができるようになる。

■授業形態
講義　グループディスカッション　グループワーク

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容
復習に必要な時間は２時間以上。前回に学んだ内容をちゃんと覚えているかどうか毎回テストを行うのでしっかり復習してくること。

■授業の概要
第１講　オリエンテーション
第２講　語彙（２７・２８・２９）、文法（１４）、慣用句（１４）、挨拶表現（１４）
第３講　文法（１５）、慣用句（１５）、助詞（１）
第４講　文法（１６）、慣用句（１６）、助詞（２）
第５講　文法（１７）、慣用句（１７）
第６講　模擬試験及び解説
第７講　模擬試験及び解説
第８講　模擬試験及び解説
第９講　模擬試験及び解説
第 10 講　第５１回 ハングル能力検定試験４級の解答及び解説
第 11 講　ビジネス会話（1）、翻訳（1）、聞き取り練習（1）
第 12 講　ビジネス会話（2）、翻訳（2）、聞き取り練習（2）
第 13 講　ビジネス会話（3）、翻訳（3）、聞き取り練習（3）
第 14 講　ビジネス会話（4）、翻訳（4）、聞き取り練習（4）
第 15 講　総まとめ

■フィードバックの要領
毎回学習した内容の小テストを行い、できないところをチェックし、もう一度指導する。

■評価基準
評価 A+（90 点以上）：出席と小テストの合計が９０点以上であること。
評価 A（89 ～ 80 点）：出席と小テストの合計が８９点から８０点の間であること。
評価 B（79 ～ 70 点）：出席と小テストの合計が７９点から７０点の間であること。
評価 C（69 ～ 60 点）：出席と小テストの合計が６９点から６０点の間であること。
評価 F（59 点以下）　：出席と小テストの合計が５９点以下であること。

■評価方法
出席５０％　小テスト５０％

■留意点
韓国語Ⅰ・Ⅱと韓国ビジネスコミュニケーションⅠを履修していない場合は受講できない。

科目名	キャリア・デザインⅠ（Career Design Ⅰ）
サブタイトル	社会人になる準備とトレーニング
担当教員	浜田　正幸
対象学年	2年生以上
区分	春学期

■講義目的
社会人と学生は根本的にちがうので、学生から社会人になるためには、シフトチェンジが必要である。
そのために必要な知識・能力として、社会人基礎力や産業社会の理解などがある。
本講をきっかけに、社会人になるためのスキルを身につけ、シフトチェンジすることが目的である。

■講義分類
社会人力育成

■到達目標
① 自己分析ができていて、自己 PR のスピーチができる ② 履歴書を適正に書くことができる ③ 社会人基礎力を理解し、日々の生活でその能力を獲得する努力ができる

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項
DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細
社会で活躍できるだけの分析力やコミュニケーション力を発揮することができる。

■授業形態
プレゼンテーション、グループディスカッション、グループワーク

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容
事前ワークシートを完成させる（1.5 時間）。毎回小レポートを課す（1.5 時間）。

■授業の概要
第 1 講　本講全体の内容と、取り扱う範囲の説明。
第 2 講　自己分析の準備（マインドマップ作成）
第 3 講　自己分析
第 4 講　履歴書の書き方
第 5 講　自分の適性、やりたいことを特定する
第 6 講　業種・業界・会社探索
第 7 講　志望動機
第 8 講　社会人になる時間軸
第 9 講　会社の仕組み「社員区分」
第 10 講　会社の仕組み「評価制度」
第 11 講　会社の仕組み「賃金制度」
第 12 講　会社の仕組み「キャリアシステム」
第 13 講　グループディスカッションの演習
第 14 講　グループディスカッションの演習
第 15 講　確認テスト

■フィードバックの要領
毎回の成果物に対して、都度フィードバックする。

■評価基準
評価 A+（90 点以上）：出席 13 回以上、レポート、確認テストすべてに大変優れている場合。
評価 A（89 ～ 80 点）：出席 13 回以上、レポート、確認テストすべてに十分到達している場合。
評価 B（79 ～ 70 点）：出席 12 回以上、レポート、確認テストの総合がある程度できている場合。
評価 C（69 ～ 60 点）：出席 11 回以上、レポートや確認テストにおいて十分ではない場合。
評価 F（59 点以下）　：出席 11 回未満、レポートと確認テストにおいて十分でない場合

■評価方法
出席・レポート（ワークシート）30%　課題への取り組み 10%　到達度テスト 60%

■留意点
企業研究や業界研究をやるので、毎回 PC（タブレット）持参のこと。（スマホ不可）

科目名	業界研究 I（Industry Research I）		
サブタイトル	産業界・経済界の構造を知る		
担当教員	浜田　正幸		
対象学年	2 年生以上	区分	春学期

■講義目的
世界にはいろいろな産業・ビジネスがあり、経済や政治が回っている。どれひとつとして不要な業界などなく、その業界がなくなれば、現在の経済社会は停止してしまう。ならばどのような産業や業界があり、それが社会の中でどのような役割を担っているのかを知る必要がある。それを自ら探索し、分析できるようになることが、本講の目的である。

■講義分類
ビジネス創造、ビジネス環境理解

■到達目標
どのような業界であっても、どのような新規のビジネスや企業であっても、それを自ら、グローバルな視点で捉え、分析できることが目標である。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項
DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細
産業社会の構造を自ら調べる能力を習得する。

■授業形態
チームで業界を調べ、発表する。また他チームの発表から業界の構造を相互に理解する。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容
自ら担当する業界について深掘りし、何を聞かれても答えられるよう準備する（1.5h）。
各回で取り上げる業界についてリサーチし、わからないこと（質問）を明確にし、のちにそれらを整理する（1.5h）。

■授業の概要
第 1 講　本講の進め方とルールの説明
第 2 講　調査チームでのグループワーク
第 3 講　1. 小売業界　2. アパレル業界
第 4 講　3. 流通業界　4. 商社業界
第 5 講　5. フードサービス（飲食）業界　6. 食品業界
第 6 講　7. 自動車業界　8. 重工業界
第 7 講　9. 電子・電気機器業界　10. 通信・ソフトウェア業界
第 8 講　11. 不動産業界　12. 建設業界
第 9 講　13. 金融業界　14. 保険業界
第 10 講　15. ホテル・旅行業界　16. 運輸・物流業界
第 11 講　17. エネルギー業界　18. プラント業界
第 12 講　19. 生活・公共サービス業界　20. 人材サービス業界
第 13 講　21. 医療機器業界　22. 製薬業界
第 14 講　23. 化粧品業界　24. 広告業界
第 15 講　達成度確認テスト

■フィードバックの要領
業界について調査・発表したものについて、都度フィードバックする。

■評価基準
評価 A+（90 点以上）：発表の有無と内容、質問の回数、確認テスト、全てにおいて優れた成果を出したもの。
評価 A（89 ～ 80 点）：発表の有無と内容、質問の回数、確認テスト、全てにおいて評価点に到達したもの。
評価 B（79 ～ 70 点）：発表の有無と内容、質問の回数、確認テスト、全てにおいて評価点に到達したもの。
評価 C（69 ～ 60 点）：発表の有無と内容、質問の回数、確認テスト、全てにおいて評価点に到達したもの。
評価 F（59 点以下）　：発表回数、質問回数、確認テストの合計点が 59 点以下のもの。

■評価方法
発表点 20%、質問回数 60%、確認テスト 20%

■留意点
業界研究（調査）をするため、毎回 PC、タブレットを持参のこと。スマホは禁止。

科目名	業界研究 II（Industry Research II）
サブタイトル	業界研究
担当教員	村山　貞幸
対象学年	2 年生以上
区分	秋学期

■講義目的
日本のさまざまなビジネス業界は、業界固有の課題と日々戦いながら、あらゆる問題解決に挑んでいる。講義では、各業界からゲストをお招きし、その生々しい状況をご説明いただく。リアルな最前線事例を聴くことを通じて、さまざまな業界を具体的に理解することを目的とする。

■講義分類
ビジネス環境理解、社会人力育成

■到達目標
(1)業界の現状､将来性をグローカルの視点から理解する。(2) 業界の状況をアップデートし､分析できるようになる。(3) 業界を理解し、関心のある業界を見定める。(4) 特定の業界の状況を明快に、正確に説明できるようになる。(5) 関心のある業界で働き、どのように社会貢献するか志をつくる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項
DP5 高い志

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細
さまざまな業界を理解することで視野と関心を広げ、高い志をたてる。

■授業形態
講義、双方向

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容
次週の業界に関する情報を書籍、新聞等で確認し、まとめる。解説された内容に基づき予習内容を修正する。さらに、業界の中で、関心のある企業を調査、分析する。必要時間は、予習、復習各 1.5 時間。

■授業の概要
第 1 講　オリエンテーション
第 2 講　日本経済新聞を利用した業界研究
第 3 講　金融業界の解説
第 4 講　不動産業界の解説
第 5 講　IT 業界の解説
第 6 講　コンサルティング業界の解説
第 7 講　福祉業界の解説
第 8 講　福祉業界の解説
第 9 講　部品業界の解説
第 10 講　通信業界の解説
第 11 講　税理士業界の解説
第 12 講　小売業界の解説
第 13 講　卸業界の解説
第 14 講　物流業界の解説
第 15 講　講義内試験

■フィードバックの要領
最終回に各界の講師による講義をまとめてフィードバックする。

■評価基準
評価 A+（90 点以上）：業界を完全に理解し、自分の志に適切に結び付けられている。
評価 A（89 ～ 80 点）：業界を 8 割理解し、自分の志に適切に結び付けられている。
評価 B（79 ～ 70 点）：業界を 7 割理解し、自分の志に適切に結び付けられている。
評価 C（69 ～ 60 点）：業界を 6 割理解し、自分の志に適切に結び付けられている。
評価 F（59 点以下）　：業界の理解が 6 割を下回っている。

■評価方法
出席５０%、試験５０%

■留意点
（1）外部講師を意識した行動をとること。マナーに反する学生は退室させることがある。（2）授業中の私語､携帯電話､飲食等授業を妨げる行為は禁止する。（3）遅刻は認めない。（4）講師のご都合等により、日程、業界が変更されることがある。

科目名	金融論（Finance）
サブタイトル	金融論（Finance）
担当教員	下井　直毅
対象学年	2 年生以上
区分	秋学期

■講義目的
この講義では、金融の理論と仕組みの基礎知識について学ぶ。また、産業社会にとっても重要である金融の役割を理解する。

■講義分類
ビジネス環境理解、グローバルビジネス、地域ビジネス

■到達目標
日本の金融の現状と課題についての基本的な知識の修得をめざす。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項
DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細
ビジネスの中で最低限必要な基礎的な数学の思考力を基に，課題解決に向けたプロセスを明確にすることが出来る。

■授業形態
講義

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容
授業前には、前回の講義内容について十分に理解をしておくこと。講義内容の復習と次回講義の準備には、1.5 時間以上の取組が必要です。

■授業の概要
第 1 講　金融の基本的な機能－金融の基本的な機能を理解する
第 2 講　企業と政府のファイナンス－企業と政府のファイナンスを理解する
第 3 講　日本の金融機関と金融市場－日本の金融機関や金融市場について理解する
第 4 講　貨幣とインフレ－貨幣とインフレについて理解する
第 5 講　金融政策の運営－金融政策の運営について理解する
第 6 講　債券市場と金利－債券市場と金利について理解する
第 7 講　株式市場と株価－株式市場と株価について理解する
第 8 講　金融規制の課題と仕組み－金融規制の課題と仕組みについて理解する
第 9 講　金融危機の発生－金融危機の発生について理解する
第 10 講　国際金融－国際金融について理解する
第 11 講　金融派生商品とリスク・ヘッジ－金融派生商品とリスク・ヘッジについて理解する
第 12 講　日本の金融をめぐる諸問題（Ⅰ）－日本の金融をめぐる諸問題を理解する
第 13 講　日本の金融をめぐる諸問題（Ⅱ）－日本の金融をめぐる諸問題を理解する
第 14 講　講義前半の復習－金融の基本的な機能や金融市場について復習する
第 15 講　講義後半の復習－金融規制の課題や金融危機発生のメカニズムを復習する

■フィードバックの要領
レポートに対してコメントを記入して、フィードバックを行う。

■評価基準
評価 A+（90 点以上）：日本の金融の現状と課題についての基本的な知識をほぼすべて修得できている
評価 A（89 ～ 80 点）：日本の金融の現状と課題についての基本的な知識をかなり修得できている
評価 B（79 ～ 70 点）：日本の金融の現状と課題についての基本的な知識を十分に修得できている
評価 C（69 ～ 60 点）：日本の金融の現状と課題についての基本的な知識をある程度修得できている
評価 F（59 点以下）　：日本の金融の現状と課題についての基本的な知識を修得できていない

■評価方法
出席点あるいは授業の平常点（30%）、試験（70%）。合計 100% で 100 点満点。

■留意点
出欠を確認する際に、本人の学生証が無い場合は、欠席扱いとする。

科 目 名　クリエイティブデザインⅠ（Creative Design Ⅰ）

サブタイトル　マルチメディア実践／デジタル図形の描き方、動画制作ほか

担当教員　彩藤　ひろみ

対象学年　2年生以上　　区分　春学期

■講義目的

動画を作成する機会が増えてきた。
動画編集について基本的な知識を習得する。
その周辺で、デジタル図形の描き方、使い方、色の仕組み、著作権への配慮、著作権フリーの映像や音楽の探し方、使い方を理解する。
また、魅力的なシナリオ構築の方法を身につける。特に、２つのものを比較してどちらを選択するか、という問題解決をコンピュータを使って考える。具体的には、家具の配置図などをデジタル作画して比較する。

■講義分類

ビジネス ICT

■到達目標

動画編集について基本的な知識を習得する。その周辺で、デジタル図形の描き方、使い方、色の仕組み、著作権への配慮、著作権フリーの映像や音楽の探し方、使い方を理解する。シナリオの作り方、それを実現する方法についても演習を通じて理解する。目的・情報の受信者の状況に応じた情報の表現方法や情報機器の選択について理解する。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

課題に対して新たな価値や解決方法を生み出せる創造力を修得する。

■授業形態

グループワーク、プレゼンテーション

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

好きな映画やアニメ、CM などをよく見て、どこが面白いポイントなのか、自分なりに分析してみる。準備に 1.5 時間以上、復習作業に 1.5 時間以上かかる。

■授業の概要

第１講　６秒ムービーの鑑賞
第２講　gif アニメーションの作成
第３講　ムービー編集はじめの一歩
第４講　ムービーの特殊効果について
第５講　音楽やサウンド効果について
第６講　第１作品　６秒ムービーの完成と鑑賞
第７講　イラスト作成方法の習得
第８講　ベクトルデータの活用
第９講　３DCG の活用
第 10 講　第２作品の構想
第 11 講　第２作品　イラストと実写の組み合わせ、または、３DCG と実写の組み合わせ
第 12 講　動画編集基礎知識確認
第 13 講　グループ作品シナリオ作り
第 14 講　作品中間チェックと仕上げのための作業
第 15 講　作品発表会

■フィードバックの要領

全３回の課題を順番にクリアしないといけない。各回で、結果をフィードバックする。

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：動画編集の基本的知識習得および各課題での技術点と芸術点が特に優れているもの。
評価 A（89 ～ 80 点）：動画編集の習得および各課題での技術点と芸術点が優れているもの。
評価 B（79 ～ 70 点）：普通程度の動画編集知識があり、作品づくりが出来たもの。
評価 C（69 ～ 60 点）：頑張ったことがわかる作品を作れたもの。
評価 F（59 点以下）　：課題の放棄、修正を行わなかったもの。

■評価方法

授業内基礎知識テスト（20%）作品の技術点（40%）と芸術点（40%）３課題とも提出は必須。

■留意点

最初から PC は必須になる。マウスを準備するほうがよい。外部を撮影する場合は、肖像権などに充分配慮すること。

科目名	クリエイティブデザインII（Creative Design II）
サブタイトル	クリエイティブデザインII　～3DCG制作とその社会的浸透
担当教員	彩藤　ひろみ
対象学年	2年生以上　　区分　秋学期

■講義目的
3DCG を利用した CM, アニメ、映画、ポスターなどが増えてきた。立体をそのまま3D プリンターで印刷することも簡単になってきた。3DCG を制作体験しながら、これからの社会のどのような方面に応用できるか考察し、具体的に提案できるようにする。情報伝達・発信のひとつの表現方法として、3DCG を身につける。
個々人の技術習得も狙うが、問題発見、解決の糸口として、グループワーク、プレゼンテーションを実施する。

■講義分類
ビジネス ICT

■到達目標
3DCG ソフトの種類の理解、3DCG ソフトの利用、グループワーク、プレゼンテーションを通じてのプロジェクトの推進、3DCG の社会的価値の考察と成果発信

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項
DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細
課題に対して新たな価値や解決方法を生み出せる創造力を修得する。

■授業形態
プレゼンテーション

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容
オープンソースソフトウェア {http://blender.org}Blender の練習に、予習、復習とも 1.5 時間以上かかる。

■授業の概要
第１講　イントロダクション：3DCG が当たり前になってきた世界
第２講　Blender の使い方・基本オブジェクトの操作
第３講　Blender の使い方・オブジェクトの編集
第４講　ロケットの3DCG モデル作成練習その１
第５講　ロケットの3DCG モデル作成練習その２
第６講　3DCG 基礎知識の確認
第７講　キャラクター3DCG の仕上がりまでの流れ
第８講　ゲームと3DCG
第９講　AR・VR と3DCG
第 10 講　キャラクタモデリングその１　顔
第 11 講　キャラクタモデリングその２　ボディ
第 12 講　キャラクタモデリングその３　手指、髪の毛
第 13 講　キャラクタモデリングその４　仕上げ
第 14 講　キャラクタアニメーションの流れ
第 15 講　作品鑑賞会

■フィードバックの要領
全３回の課題に対する努力と成果に対して、フィードバックをする。

■評価基準
評価 A+（90 点以上）：技術の著しい伸びと3DCG に対する深い理解
評価 A（89 ～ 80 点）：技術の伸びと3DCG に対する理解
評価 B（79 ～ 70 点）：技術が一定レベルを超えたもの、およびレポート普通評価。
評価 C（69 ～ 60 点）：基本をおさえたと評価できるもの。
評価 F（59 点以下）　：基準に達しないもの。

■評価方法
授業内でのミニ知識テストなどの平常点（20%）と作品課題（30%）、レポート（20%）、出席（30%）

■留意点
PC は最初から必要。マウスを用意してほしい。

科目名	クリエイティブデザイン III（Creative Design III）
サブタイトル	バーチャルリアリティ技術の習得とインタラクティブアプリケーション制作
担当教員	出原　至道
対象学年	2年生以上
区分	秋学期

■講義目的

学生にとって、新しいアイディアを出し、協業によってそれを実現していく能力を鍛えることは、極めて重要である。

本講義は、コンピュータを用いたバーチャルリアリティアプリケーションのチーム開発の演習を通して、各種のアルゴリズムの実装とユーザ視点のものづくりを行うことを目的とする。

具体的には、Unity {http://madewith.unity.com/} を利用したアプリケーション開発を行う。Unity は、ゲーム開発に限らず、PC からスマートフォンまで、ひろくさまざまなプラットホーム上で、物理・景観シミュレーションの能力を活かした実務アプリケーション開発でも実績が増えている。Unity の便利な機能を活かしつつも、コーディングスキルを高めるために、あえて車輪の再発明を行うことも含まれている。

■講義分類

ビジネス ICT、社会人力育成、ビジネスマネジメント

■到達目標

①スクラムによるアジャイル開発手法を実践する、② github を利用した共同開発手法に熟練する、③ Unity を利用したアプリケーション開発を理解する、④実用的なアルゴリズムの実装が C# でできるようになる、⑤コンピュータを利用したシミュレーションを理解し、実装できるようになる

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP2　思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

コンピュータを利用したシミュレーション技法について、独自の実装を考案・実施できる。

■授業形態

講義、演習、グループワーク

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

講義後、各チームで独自に実装研究を９０分程度行い、記録すること。プロジェクト管理システム上で、作業時間の報告を行うこと。作業成果は、github 上に随時反映させること。

■授業の概要

第１講　ガイダンス
第２講　環境整備
第３講　github の利用（復習）
第４講　Unity 入門
第５講　Interactive Unity
第６講　プロジェクトゴールの設定
第７講　実現しようとするコンセプトの確定
第８講　ユーザインタフェースの設計
第９講　実装演習
第 10 講　実装演習
第 11 講　実装演習
第 12 講　実装演習
第 13 講　実装演習
第 14 講　プレゼンテーション準備
第 15 講　プレゼンテーション

■フィードバックの要領

プレゼンテーションに対してコメントをフィードバックする。

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：数値評価９０点以上
評価 A（89 ～ 80 点）：数値評価８０点以上９０点未満
評価 B（79 ～ 70 点）：数値評価７０点以上７９点未満
評価 C（69 ～ 60 点）：数値評価６０点以上７０点未満
評価 F（59 点以下）　：数値評価６０点未満

■評価方法

平常点（github 上での寄与）50%、最終プレゼンテーション 40%、最終プレゼンテーション相互評価 10%

■留意点

①全体の講義では、モデリングはほとんど行わない。意欲のある学生は、自主的にモデリング技術を探求すること、②毎回、コンピュータを持参すること、③特段の事情がある場合を除き、第１回の講義に出席していないものの受講は認めない、④ github 上に個人リポジトリを用意しておくことが望ましい、⑤外付けのマウスを持参することが望ましい、

科目名	グローバルヒストリー III（Global History III）
サブタイトル	冷戦後日本の対中央アジア外交政策
担当教員	マフムドフ ウミド
対象学年	2 年生以上
区分	春学期

■講義目的
ソ連崩壊後、中央アジア地域における地政学的変遷、内政構造、メカニズム、経済、域外アクターとの関係などを中心に考える。特に、日本の対中央アジア外交の分析を行い、その目的・課題について学習してもらいたい。中央アジアは、石油・ガス、エネルギー資源が豊かで、中露や欧米諸国による厳しい競争戦が起きている。更に、アフガン問題やイスラム国（IS）の影響力拡大もあり、中央アジアの動向は世界的に大きな関心を集めている。授業ではこうした、地域の歴史や実情、日露関係の文脈の中で中央アジア外交の位置づけ、中国や欧米の戦略などを多角的に取り上げる。

■講義分類
社会人力育成

■到達目標
中央アジアの歴史や現状、課題、問題点について基礎的な知識を総合的に学習することを目指す。また日本の対中央アジア外交について理解を深めることで、日露・日中関係に対する新たなアプローチ、今後日本外交はどこに向かうのかなどを考える力を身につける。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項
DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細
中央アジア諸国と日本の対外政策について基礎的な学力を養い、グローバル外交を展開する上で、ローカルな取組の重要性を理解する。

■授業形態
講義

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容
外交青書や新聞、ニュースなどに接し、中央アジアやロシアの動きに関心を払うこと。

■授業の概要
第 1 講　講義の狙い、中央アジアとは
第 2 講　ゴルバチョフとペレストロイカ
第 3 講　ソ連崩壊と CIS の形成
第 4 講　冷戦の終わりと日本の対中央アジア外交
第 5 講　「ユーラシア外交」と中央アジア
第 6 講　対露外交と対中央外交の戦略的関連性
第 7 講　「中央アジア + 日本」仕組みの発足
第 8 講　上海協力機構と日本
第 9 講　小泉純一郎の中央アジア歴訪
第 10 講　「自由と繁栄の孤」構想
第 11 講　「一帯一路」構想と中央アジア
第 12 講　安倍内閣と中央アジア政策
第 13 講　ユーラシア地域の現状
第 14 講　ウズベキスタンにおける政権交代
第 15 講　まとめ

■フィードバックの要領
課題やレポートに対し、講義中フィードバックを行う。

■評価基準
評価 A+（90 点以上）：日本の対中央アジア外交の目的と意義を理解し、文章によって論理的に説明できる。
評価 A（89 ～ 80 点）：日本の対中央アジア外交を理解し、今後の在り方を自ら考え、文章で論理的に説明できる
評価 B（79 ～ 70 点）：日本の対中央アジア外交を理解し、今後の在り方について文章にて論理的に説明できる。
評価 C（69 ～ 60 点）：日本の対中央アジア外交を理解し、今後の在り方について文章にて示すことができる
評価 F（59 点以下）　：日本の対中央アジア外交を正しく理解出来ていない、出席不良、レポート未提出。

■評価方法
3 分の 2 以上出席を必要とし、プレゼンテーション 3 割と課題レポート 7 割により行う。

■留意点
なし

科目名	グローバルヒストリーIV（Global History IV）
サブタイトル	グローバル近現代史：世界と日本（西洋的世界を中心に）
担当教員	椎木　哲太郎
対象学年	2年生以上
区分	秋学期

■講義目的

本講座は、史学科的な歴史研究ではなく、諸君が確固たる歴史（時代）認識を持つとともに、現代の世界が直面する諸課題とその歴史的背景を探り、複雑な相互連関の中にある国際関係や経済問題を考察するための共通認識を深め、未来への選択につなげていけるような歴史的教訓を得ることをねらいとしている。グローバル化の中を生き抜くためには、他者を知らねばならない。歴史を扱う際の時代的制約（現代の価値基準で評価することの危険性、等）を十分意識しつつ、地域統合や持続可能性、ポピュリズムといった現代的問題意識に沿って、通史よりもテーマ中心の大胆なアプローチを試みたい。前半で歴史を動かす諸要因について検討し、後半では欧州、米国、アジア、イスラーム世界等々、そして日本の近現代史について概観する。配布資料の事前の読解を前提に、ディスカッションを交えた密度の濃い講座となるよう心がけたい。

■講義分類

ビジネス環境理解、社会人力育成、グローバルビジネス

■到達目標

世界と日本の相互作用、光と影に満ちた近現代史を学ぶことを通じて、現代社会の直面する諸課題の解決につながる豊富な示唆を獲得し、学問としての社会研究の基盤と、グローバル社会に生き、グローバルビジネスを円滑に進めるために有効な視座（歴史観）を構築し、多様な価値観や文化的背景を理解して、社会の発展に貢献することができる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

世界と日本の近現代史を広く学ぶことを通じて、世界潮流を認識するための視座を構築し、現代社会の諸課題の解決に貢献することができる。

■授業形態

講義、双方向、グループディスカッション

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

毎回翌週分の講義資料を配布する。必ず 1.5 時間読了した上で受講すること。全く読んでこなかった者の参加は認めない。予め決められた各回の報告担当者は、必ず当該資料に関連した質問と問題提起を行う義務がある。

■授業の概要

第１講　近現代史と現代社会　現代とのつながりを意識し、近現代史を学ぶ意義を考える。
第２講　近現代通史を紐解く　近代の始まりから時系列的に近現代史の流れを跡づける。
第３講　歴史からの教訓　第一次世界大戦後のドイツ、「ヴァイマル共和政」を例に考える。
第４講　リーダーシップの役割　歴史の動向を決定づけたリーダーたちの決断について考える。
第５講　近代経済成長と社会経済思想の役割　経済成長の軌跡と社会経済思想の影響力。
第６講　欧州の近現代　EU 統合に至る二度の世界大戦を経たヨーロッパの近現代史について。
第７講　アメリカの近現代　自由と民主主義、孤立主義は、200 年でどう変貌を遂げたか。
第８講　ロシアの近現代　世界初の共産主義革命、大国ロシアの集権制の背景を探る。
第９講　中国の近現代　帝国主義の侵略、辛亥革命、人民共和国の建国以後の歴史を考察する。
第 10 講　日本の近現代（1） 後発近代化の歩みと日本人の世界認識の変遷を辿る。
第 11 講　日本の近現代（2） アジア・太平洋戦争の惨禍と復興・高度経済成長から学ぶ。
第 12 講　アジア・アフリカの近現代　独立運動とその後の国家経営の軌跡を辿る。
第 13 講　イスラーム世界の近現代「復興・改革運動史」と中東紛争を軸に展望する。
第 14 講　20 世紀から 21 世紀へ　20 世紀とは？ 21 世紀は何を解決すべきかを考える。
第 15 講　再び、近現代史と現代産業社会　我々は近現代史から何を学んだのか。

■フィードバックの要領

小テストを採点して返却する。

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：試験の成績、質疑の内容、ともに顕著に優れている
評価 A（89 ～ 80 点）：試験の成績、質疑の内容、ともに優れている
評価 B（79 ～ 70 点）：試験の成績、質疑の内容、ともに良い
評価 C（69 ～ 60 点）：試験の成績、質疑の内容、ともに普通
評価 F（59 点以下）　：試験の成績、質疑の内容、ともに不十分

■評価方法

期末試験（70%）、レポート・小テスト・出席（30%）

■留意点

①講義は毎回、前週に配布した資料を読み込んでいることを前提として進行する。資料の持参を忘れた者、読んでこなかった者は、原則として当日の受講を認めない。②第２回の講義までに全く出席しなかった者、さらに途中で連続欠席３回となった者は、本講座の履修を認めない。③グローバルヒストリーⅡの単位取得者は履修登録できない。

科目名　グローバルマーケティング（Global Marketing）

サブタイトル　グローバル化に対する企業のマーケティング活動の概要

担当教員　須山　憲之

対象学年　2 年生以上　　区分　秋学期

■講義目的

グローバル市場にてマーケティング活動を推進するマーケッターにとって，必要な知識およびスキルを体系的に修得することを講義目的とする．具体的には，自社の経営資源を活用し，外部環境を戦略的に踏まえ，消費者に対する価値を創造する活動を効果的に実行するための手法を学ぶ．理解促進のため，講義形式の授業のほか，ケーススタディ（事例研究）を通じて現実のグローバルビジネスに関する課題を発見し，問題解決のための方法をマスターする．確定ではないが，大手百貨店や商業デベロッパーとのプロジェクトに絡めての学習の機会も模索する．

■講義分類

顧客理解，ビジネス環境理解，グローバルビジネス

■到達目標

ﾏｰｹﾃｨﾝｸﾞの本質を理解するとともに，ｸﾞﾛｰﾊﾞﾙﾏｰｹﾃｨﾝｸﾞの基本的ﾌﾚｰﾑﾜｰｸおよび理論について理解する．またﾋﾞｼﾞﾈｽﾏﾈｼﾞﾒﾝﾄへの応用事例について消費者の視点からﾋﾞｼﾞﾈｽを捉える目を培うことを到達目標とする．

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

基礎的な学力を養い，グローバルとローカルの関係性を意識しながら産業社会で発生する様々な問題に対処していける専門的能力を体系的に修得する．

■授業形態

講義，グループディスカッション，グループワーク

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

授業の復習，事前配布物の精読，提出課題の作業など．

■授業の概要

第 1 講　オリエンテーション
第 2 講　マーケティング活動の流れと基本的フレームワーク（1）
第 3 講　マーケティング活動の流れと基本的フレームワーク（2）
第 4 講　マーケティング活動の流れと基本的フレームワーク（3）
第 5 講　マーケティング活動の流れと基本的フレームワーク（4）
第 6 講　マーケティング活動の流れと基本的フレームワーク（5）
第 7 講　グローバル市場の分析（政治，経済）
第 8 講　グローバル市場の分析（社会，文化，宗教）
第 9 講　グローバル市場の分析（データランキング）
第 10 講　データ分析手法（1）
第 11 講　データ分析手法（2）
第 12 講　データ分析手法（3）
第 13 講　グループディスカッション，グループワーク（ケーススタディ）
第 14 講　グループワーク（発表）
第 15 講　まとめと理解度の確認

■フィードバックの要領

提出課題についてはコメントを記入してフィードバックを行う．

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：理論，概念，フレームワークを完全に理解し，現実のビジネス課題に応用できる．
評価 A（89 ～ 80 点）：理論，概念，フレームワークを十分に理解している．
評価 B（79 ～ 70 点）：授業で習った理論，概念，フレームワークを平均的に理解している．
評価 C（69 ～ 60 点）：授業で習った理論，概念，フレームワークの理解は不十分．
評価 F（59 点以下）　：授業で習った理論，概念，フレームワークを理解できていない．

■評価方法

期末試験または課題レポート 50%, グループ発表 30%, 平常点（授業への出席, 授業への貢献ほか）20%．絶対評価とする．

■留意点

場合により，履修制限を行います．方法は別途連絡します．

科目名	経営学概論（Introduction to Management）
サブタイトル	経営とは何か、企業とは何か、戦略と組織を理解する（経営学の初級レベル）
担当教員	野坂　美穂
対象学年	2年生以上
区分	春学期

■講義目的

日頃の私達の生活と企業は、密接な関わりがある。本講義では、経営学とは何か、企業とは何かを理解し、「経営学」という学問を身近に感じ、関心を高めてもらうことを目的とする。経営学という学問の二本柱である戦略論と組織論の導入科目と位置づけ、企業とは何であるのか、その全体像を理解する。より理解を深めるために、実際の事例の紹介や学生自らがケース分析を行う。

■講義分類

顧客理解、ビジネス環境理解、ビジネスマネジメント

■到達目標

（1）「グローカル社会に対する理解」：企業の全体的なイメージを持つとともに、国内外で活動を行う企業の実態を理解する。
（2）「社会の発展に貢献する力」：様々な企業の特徴や強みおよび課題を自分なりに見つけ出すこと。
（3）「役割分担により組織目標の達成に貢献する力」：企業のケースについて、自分の言葉で説明することができ、プレゼンテーション能力を高めること。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

企業内での様々な問題がなぜ生じるのかについて、因果関係（原因と結果）を明らかにし、理論を用いて説明することができる。

■授業形態

講義、グループワーク、プレゼンテーション

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

毎回の講義ではワークシートを配布します。そのワークシートを埋める形で、予習・復習を行ってください。（1.5 時間）
予習復習は全て成績評価に反映します。
新聞の企業欄を読むこと。

■授業の概要

第 1 講　イントロダクション：経営学とは何か、日常生活と企業との関わり
第 2 講　企業を取り巻く環境①企業を取り巻く様々な市場
第 3 講　企業を取り巻く環境②プレゼンテーション
第 4 講　経営資源の流れを学ぶ①
第 5 講　経営資源の流れを学ぶ②
第 6 講　企業の戦略について学ぶ①経営戦略
第 7 講　企業の戦略について学ぶ①競争戦略
第 8 講　企業の戦略について学ぶ②事業戦略
第 9 講　企業の境界①企業の水平境界
第 10 講　企業の境界②企業の垂直境界
第 11 講　企業の成長　事業構造と事業の多角化
第 12 講　組織とは何か①組織デザインと組織構造
第 13 講　組織とは何か②組織のインセンティブシステム
第 14 講　前回の成果のプレゼンテーション
第 15 講　まとめと振り返り

■フィードバックの要領

レポートに対し、コメントを記入してフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：戦略と組織の全体像を的確に捉え、自分の言葉で十分に説明することができる。
評価 A（89 ～ 80 点）：戦略と組織の全体像を捉え、自分の言葉で十分に説明することができる。
評価 B（79 ～ 70 点）：戦略と組織の全体像をある程度捉えることができ、自分の言葉で説明することができる .
評価 C（69 ～ 60 点）：戦略と組織の全体像をある程度捉えているが、自分の言葉での説明が不十分。
評価 F（59 点以下）　：戦略と組織の全体像をほとんど捉えておらず、自分の言葉で説明もできていない。

■評価方法

出席 30%、レポート 30%、プレゼンテーション 20%、テスト 20%

■留意点

科目名	経営シミュレーションゲーム（Management Simulation Game）
サブタイトル	経営シミュレーションゲームを通じたアクティブラーニング経営体験プログラム
担当教員	出原　至道
対象学年	2 年生以上
区分	秋学期

■講義目的
多摩大学式経済経営シミュレーションゲームを通して企業経営の基本を理解する。
ゲームでは、ゲーム上の仮想の市場で、企業経営を経験する。講義では、ゲームをベースに、経営の基本および企業経営の計数的理解を深めることを目指す。

■講義分類
ビジネス ICT、ビジネスマネジメント

■到達目標
企業経営の基本を理解すること。企業経営の計数的理解を深めること。コンピュータを使用しての学習経験を深めること。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項
DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細
本講義では、シミュレーションゲームと通した会計の実践的な知識の獲得と戦略決定とを通じて、企業経営の基本を理解し、実践できるようになる。

■授業形態
講義＋演習

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容
講義外の時間で、シミュレータは継続的に動作する。常に市場動向に気を配り、競合製品の価格や消費者の動きに対して対応し、それを記録すること（１５分×６日）。最終レポートに、この記録が重要である。

■授業の概要
第１講　（講義）「オリエンテーション」（ゲーム）「経営シミュレーションゲームの説明」
第２講　（講義）「企業経営の基礎」（ゲーム）「お試し１・２期」
第３講　（講義）「企業経営の基礎」（ゲーム）「お試し３・４期」
第４講　（講義）「企業経営の基礎」（ゲーム）「お試し５・６期」
第５講　（講義）「企業経営の基礎」（ゲーム）「お試し７・８期」
第６講　（講義）「企業経営の基礎」（ゲーム）「ゲーム第１期」
第７講　（講義）「企業経営の基礎」（ゲーム）「ゲーム第２期」
第８講　（講義）「企業経営の基礎」（ゲーム）「ゲーム第３期」
第９講　（講義）「企業経営の基礎」（ゲーム）「ゲーム第４期」
第 10 講　（講義）「企業経営の基礎」（ゲーム）「ゲーム第５期」
第 11 講　（講義）「企業経営の基礎」（ゲーム）「ゲーム第６期」
第 12 講　（講義）「企業経営の基礎」（ゲーム）「ゲーム第６期」
第 13 講　（講義）「企業経営の基礎」（ゲーム）「ゲーム第８期」
第 14 講　（講義）「企業経営の基礎」（ゲーム）「ゲーム第９期」
第 15 講　講義内でのテスト、理解のみきわめを行う。

■フィードバックの要領
課題や試験等に対するフィードバックを行う。

■評価基準
評価 A+（90 点以上）：ゲームへの参与・レポート・試験で最低条件を満たした上で、数値評価で９０点以上
評価 A（89 ～ 80 点）：ゲームへの参与・レポート・試験で最低条件を満たした上で、数値評価で８０点以上
評価 B（79 ～ 70 点）：ゲームへの参与・レポート・試験で最低条件を満たした上で、数値評価で７０点以上
評価 C（69 ～ 60 点）：ゲームへの参与・レポート・試験で最低条件を満たした上で、数値評価で６０点以上
評価 F（59 点以下）　：ゲームへの参与・レポート・試験で最低条件に達しない。または、数値評価で 60 点未満。

■評価方法
（1）講義中の課題への取り組み、ゲームへの参加度および出席 35%（2）レポート 15%（3）最終試験 50%

■留意点
初回講義出席者から履修者許可者（上限 90 名）を選抜する。・講義開始後、受講生の理解や興味・関心に応じて、講義内容を変更する場合がある。変更も含む講義内容や進行予定の詳細は、講義開始後指示する。

科目名 経営情報論Ⅰ（Management Information Systems Ⅰ）

サブタイトル 経営情報の基本を具体的な事業から学ぶ

担当教員 小林、小西他

対象学年 2年生以上　区分 春学期

■講義目的

経営情報学部、特に経営情報学科の共通リテラシー（読み書き・ソロバン力）の内容として、企業・社会が何を目的として情報システムを活用するのか、どんな情報システムを活用しているのかを具体的な事業の事例を通じて理解する。
なお、上記理解の前提として、企業・社会の活動の目的と活動の概要の理解も進める。

■講義分類

顧客理解、ビジネスマネジメント、ビジネス ICT

■到達目標

①企業や社会が、何を目的として情報システムを利用しているのかを、具体的に理解する。②企業や社会が目的達成のために利用している情報システムのポイント･核心を知る。その結果､ICT に関する基礎的な学力､課題発見力等を修得する。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

経営情報を事例を知り理解することにより、経営情報の学びの関心を高め、より深く知る意欲を喚起する。

■授業形態

講義（外部講師含む）、フィールドワーク

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

キーワードを辞書、書籍、ネットで予習しておく。受講時のノートに基づいて、授業の流れの確認、書籍等の利用による疑問点の解消などの復習。期末レポート作成。各授業に 1.5 時間程度。

■授業の概要

第 1 講　ガイダンス : 経営情報論とは何か、本授業で何を学ぶかを理解する。
第 2 講　ネットオークション
第 3 講　不動産業界
第 4 講　保険業界
第 5 講　ネット通販
第 6 講　旅行業界
第 7 講　ポータル運営
第 8 講　物流業界
第 9 講　クラウド
第 10 講　IoT
第 11 講　業務管理系
第 12 講　投稿系サイト
第 13 講　工場見学または期末レポート作成
第 14 講　前回と同じ（工場見学の班が交代）
第 15 講　前回と同じ（工場見学の班が交代）

■フィードバックの要領

フィードバックは、口頭（授業中）、文書添削等（レポート、ノート）で行います。

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：下記評価方法、配分の通り
評価 A（89 ～ 80 点）：下記評価方法、配分の通り
評価 B（79 ～ 70 点）：下記評価方法、配分の通り
評価 C（69 ～ 60 点）：下記評価方法、配分の通り
評価 F（59 点以下）　：下記評価方法、配分の通り

■評価方法

出席 50%。期末レポート（到達目標への達成度で評価）50%。

■留意点

外部講師のご都合等により、テーマ（内容）、順番を変更することがある。T-NEXT、大学アドレスへのメール、google classroom の連絡を見落とさないこと。

科目名　経営情報論 II（Management Information Systems II）

サブタイトル　最新の情報技術サービスの理解
担当教員　小林、小西他
対象学年　2 年生以上　区分　秋学期

■講義目的
企業活動を効果的に行うには顧客嗜好や社会動向をタイムリーかつ的確につかむ必要がある。IoT、Web システム、ビッグデータ、人工知能、シミュレーションなどの技術の発達によって、人間の行動や感情、意見を企業活動に活かすことが可能となってきた。実例を通じて、これらの技術と応用について学ぶ。また、思考を整理し伝達するための手法として、さまざまな図化技術をまなび、局面によって適切に使い分けられるようになる。

■講義分類
顧客理解、ビジネス環境理解、ビジネス ICT

■到達目標
最先端の情報処理技術について学び、次の 4 点を理解する。（1）最新技術の動向を理解する。（2）活用方法をしているかを理解する。（3）社会全体の変化を理解する。（4）企業と顧客の関係について理解する。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項
DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細
経営情報学科の学生として必要な知識を広く身につけ、専門教育の基礎とする。

■授業形態
講義、演習

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容
講義外の時間で、最先端の情報技術の動向を継続的に捉えることが求められる。情報技術サイトの巡回（１５分＊４回）、講義で説明した技術や手法の復習（３０分）程度の講義外の学習を求める。

■授業の概要
第 1 講　ガイダンス
第 2 講　シミュレーション
第 3 講　センサ技術
第 4 講　創発性
第 5 講　創発性（2）
第 6 講　位置情報システムとデータベース
第 7 講　人工知能
第 8 講　フローチャート（1）
第 9 講　フローチャート（2）
第 10 講　状態遷移図（1）
第 11 講　状態遷移図（2）
第 12 講　IoT とビッグデータ
第 13 講　ビッグデータと人工知能
第 14 講　発想法
第 15 講　まとめ

■フィードバックの要領
提出されたレポートに対して、コメントの形でフィードバックを行う。

■評価基準
評価 A+（90 点以上）：総合評価で９０点以上
評価 A（89 ～ 80 点）：総合評価で８０点以上
評価 B（79 ～ 70 点）：総合評価で７０点以上
評価 C（69 ～ 60 点）：総合評価で６０点以上
評価 F（59 点以下）　：総合評価５９点以下

■評価方法
講義中の理解度確認テストおよびレポート課題（60%）、期末レポート（40%）

■留意点
・先端事例を紹介するため、各回の講義内容は、適宜変更する場合がある。

科目名	国際経営入門Ⅰ（Introduction to International Management Ⅰ）
サブタイトル	21 世紀の国際経営の基礎理解
担当教員	飯田　健雄
対象学年	2 年生以上
区分	春学期

■講義目的
国際経営は世界政治・経済に利益を求めてダイナミックに動くトランスナショナルな超国家的組織体です。この組織を外部・内部から探究していきましょう。

■講義分類
グローバルビジネス , ビジネスマネジメント、ビジネス ICT

■到達目標
国際経営の基礎を包括的に学んでいく。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項
DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細
国際経営の知識と理解を得ることで産業の未来を描くことができる。

■授業形態
講義

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容
NHK の経済ニュースを見よう。また、日本経済新聞を毎日、読む習慣をつけよう。隔週ごとの項目に関して、1 時間半程度、指定教科書を事前に読み、講義後、板書された項目を理解していこう。

■授業の概要
第 1 講　国際経営とは何か
第 2 講　国際経営組織 Ⅰ
第 3 講　国際経営組織 Ⅱ
第 4 講　国際人事管理 Ⅰ
第 5 講　国際人事管理 Ⅱ
第 6 講　国際マーケティング Ⅰ
第 7 講　国際マーケティング　Ⅱ
第 8 講　国際生産管理　Ⅰ
第 9 講　国際生産管理 Ⅱ
第 10 講　異文化経営論 Ⅰ
第 11 講　異文化経営論　Ⅱ
第 12 講　国際提携戦略　Ⅰ
第 13 講　国際提携戦略　Ⅱ
第 14 講　国際研究開発
第 15 講　まとめ

■フィードバックの要領
レポートの全体的感想と今後の推薦図書とキーワードを指摘する。

■評価基準
評価 A+（90 点以上）：すべての講義にでること。試験は 5 問中、すべてに解答し、90 点以上を取得すること。
評価 A（89 ～ 80 点）：ほとんど講義に出ること。試験は 5 問中、すべてに解答し、80 点以上を取得すること。
評価 B（79 ～ 70 点）：10 回以上講義に出ること。試験は 5 問中、4 問すべてに解答し、70 点以上を取得すること。
評価 C（69 ～ 60 点）：7 回以上講義に出ること。試験は 5 問中、3 問すべてに解答し、50 点以上を取得すること。
評価 F（59 点以下）　：出席が 5 回以下、および、試験は 5 問中、3 問以下で 50 点以下の水準にあること。

■評価方法
試験（70%）出席（30%）　試験では書いた分量だけではなく、問題を満たしたその正確さと質を問う。

■留意点

科目名　国際経営入門 II（Introduction to International Management II）

サブタイトル　21 世紀の国際経営の基礎
担当教員　飯田　健雄
対象学年　2 年生以上　区分　秋学期

■講義目的
国際経営の基礎を包括的に学んでいく。国際経営とは国内で履行される経営の海外適用･応用という考えをもってもよい。しかし、その海外事業展開には国内競争では想像もできなかった複雑性・困難な問題が待ち受けている。その理由を解き明かしていくのがこの講義の最大の目的である。学生は、経営の基礎をきちんと学んでから履修することを希望する。

■講義分類
グローバルビジネス、ビジネスマネジメント、ビジネス ICT

■到達目標
国際経営の各領域や業務部門を理解していく。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項
DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細
多国籍企業の知識と理解を得ることで産業の未来の構図を描いてみる。

■授業形態
講義

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容
事前学習として、約 1 時間半程度、前期に学習した教科書の 1 章から 7 章までをよく読んでおく。NHK の NHK スペシャル、「これでわかった！世界の今」、日本経済新聞を読んでおくこと。

■授業の概要
第 1 講　国際 SCM I
第 2 講　国際 SCM II
第 3 講　国際 M&A I
第 4 講　国際 M&A II
第 5 講　国際ブランディング管理 I
第 6 講　国際ブランディング管理　II
第 7 講　国際法務
第 8 講　国際財務管理 I
第 9 講　国際財務管理 II
第 10 講　国際会計
第 11 講　国際経営戦略 I
第 12 講　国際経営戦略　II
第 13 講　国際経営戦略　III
第 14 講　国際経営戦略　IV
第 15 講　まとめ

■フィードバックの要領
提出されたレポートの全体的感想と関連する図書の指摘・推薦をする。

■評価基準
評価 A+（90 点以上）：すべての講義にでている学生。試験はすべてに解答し、90 点以上を取得すること。
評価 A（89 ～ 80 点）：ほとんど講義に出ること。試験は 5 問中、すべてに解答し、80 点以上を取得すること。
評価 B（79 ～ 70 点）：10 回以上講義に出ること。試験は 5 問中、4 問すべてに解答し、70 点以上を取得すること。
評価 C（69 ～ 60 点）：7 回以上講義に出ること。試験は 5 問中、3 問すべてに解答し、50 点以上を取得すること。
評価 F（59 点以下）　：出席が 5 回以下、および、試験は 5 問中、3 問以下で 50 点以下の水準にあること。

■評価方法
試験（70%）出席（30%）　試験では書いた分量だけではなく、問題を満たしたその正確さと質を問う。

■留意点

科目名	国際経済学（Global Economy）
サブタイトル	国際経済（International Economics）
担当教員	下井　直毅
対象学年	2年生以上
区分	春学期

■講義目的
この講義では、最前線事例を紹介しつつ、国際経済をめぐる問題をとりあげる。国際経済は日本経済に大きな影響を及ぼしている。グローバル化という言葉をよく耳にするが、世界の経済状況がめまぐるしく変わる中で、その動きを理解することはとても大切である。日頃、目や耳にしている出来事や現象を通して、日本や世界を取り巻く産業社会における経済動向の仕組みやメカニズムについて学んでほしい。

■講義分類
ビジネス環境理解、グローバルビジネス

■到達目標
世界経済の現状と課題についての基本的な知識の修得をめざす。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項
DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細
ビジネスの中で最低限必要な基礎的な数学の思考力を基に，課題解決に向けたプロセスを明確にすることが出来る。

■授業形態
講義

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容
授業前には、前回の講義内容について十分に理解をしておくこと。講義内容の復習と次回講義の準備には、1.5 時間以上の取組が必要です。

■授業の概要
第１講　国際化の中の日本－日本経済の状況を概観する
第２講　戦後の国際経済体制の流れについて－戦後の国際経済体制の流れをおさえる
第３講　貿易の基本的メカニズムについて（1）－貿易の基本的メカニズムについて理解する
第４講　貿易の基本的メカニズムについて（2）－貿易の基本的メカニズムについて理解する
第５講　保護貿易や自由貿易の功罪－保護貿易や自由貿易について理解する
第６講　外国為替について－外国為替について理解する
第７講　為替レートの決定理論（１）－短期の為替レートの決定理論について理解する
第８講　為替レートの決定理論（２）－長期の為替レートの決定理論について理解する
第９講　為替相場制度について－様々な為替相場制度について理解する
第 10 講　国際収支表の見方（１）－国際収支表の見方を理解する
第 11 講　国際収支表の見方（２）－国際収支表の見方を理解する
第 12 講　貿易摩擦について－貿易摩擦の歴史を振り返る
第 13 講　GATT ／ WTO の原則と例外について－ GATT ／ WTO の原則と例外について理解する
第 14 講　開放経済における経済政策について－開放経済における経済政策について理解する
第 15 講　まとめ－これまでの復習

■フィードバックの要領
レポートに対してコメントを記入して、フィードバックを行う。

■評価基準
評価 A+（90 点以上）：世界経済の現状と課題についての基本的な知識をほぼすべて修得できている
評価 A（89 ～ 80 点）：世界経済の現状と課題についての基本的な知識をかなり修得できている
評価 B（79 ～ 70 点）：世界経済の現状と課題についての基本的な知識を十分に修得できている
評価 C（69 ～ 60 点）：世界経済の現状と課題についての基本的な知識をある程度修得できている
評価 F（59 点以下）　：世界経済の現状と課題についての基本的な知識を修得できていない

■評価方法
出席点あるいは授業の平常点（30%）、試験（70%）。合計 100% で 100 点満点。

■留意点
出欠を確認する際に、本人の学生証が無い場合は、欠席扱いとする。

科目名　財務会計（Principle of Accounting）

サブタイトル　財務諸表の基礎理論を学ぶ

担当教員　清松　敏雄

対象学年　2 年生以上　　区分　秋学期

■講義目的

本講義は、「ビジネス入門Ⅱ」の講義内容（会計部分）に関する理解を深化させることが目的である。具体的には、財務諸表のうち、損益計算書と貸借対照表（特に資産）に焦点を当て、会計処理の背後にある理論をマスターすることが目的である。なお、本講義は、初級簿記・中級簿記の授業と相俟って、課題発見、問題解決、ビジネス環境理解、ビジネスマネジメント、実践的知識獲得に有効なものであり、これらの知識・能力の獲得も目的としている。

■講義分類

ビジネス環境理解、ビジネスマネジメント

■到達目標

損益計算書および貸借対照表（特に資産）に関する論点を理解することが目標である。本学の学位授与方針には、特に、知識と理解、思考と判断の２つの点で関連している。損益計算書や貸借対照表に関する知識を得て、財務諸表項目が何を示しているのかを理解できるようになることが目標である。なお、本授業の受講により、概ね、ビジネス会計検定３級の取得が可能である。また、日商簿記検定２級および３級の学習にも役立つ。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

財務会計に関する基礎的な知識を得るとともに、会計数値に企業行動がどのように影響を与えるかについて理解する。これらを通じ、会計的知識のみならず企業行動における課題発見能力を習得する。

■授業形態

講義が中心

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

ほぼすべての授業後には課題を提出すること（各回概ね１時間半程度のもの）。ただし、指定図書の通読で代替することもある。なお、課題は Microsoft Office で作成すること。最終回を除き、次回授業にて講評を行う。

■授業の概要

第１講　イントロダクション。会計の種類と役割。
第２講　損益会計の基礎
第３講　損益計算書の区分と表示
第４講　損益計算書を用いた財務諸表分析の基礎
第５講　貸借対照表の区分の表示
第６講　資産評価の基本原則
第７講　金銭債権の評価
第８講　費用性資産の会計処理とその背景にある考え方
第９講　棚卸資産
第 10 講　有形固定資産
第 11 講　低価基準（低価法）
第 12 講　減損会計
第 13 講　無形固定資産
第 14 講　繰延資産と研究開発費等
第 15 講　全体のまとめを行う。

■フィードバックの要領

授業内テストについての解説および多かった誤りに関する補足説明を行う。

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：授業内中間テスト、授業内期末テストの合計点が 90 点以上
評価 A（89 ～ 80 点）：授業内中間テスト、授業内期末テストの合計点が 80 点以上 90 点未満
評価 B（79 ～ 70 点）：授業内中間テスト、授業内期末テストの合計点が 70 点以上 80 点未満
評価 C（69 ～ 60 点）：授業内中間テスト、授業内期末テストの合計点が 60 点以上 70 点未満
評価 F（59 点以下）　：授業内中間テスト、授業内期末テストの合計点が 60 点未満

■評価方法

授業内中間テスト　50%、授業内期末テスト　50%

■留意点

科 目 名　サブカルチャー論（Subculture Theory）

サブタイトル　日本のサブカルチャーについて

担当教員　中澤　弥

対象学年　2年生以上　　区分　春学期

■講義目的

海外からも注目される日本のサブカルチャー。マンガやアニメを通して日本に興味を持つ外国人も多く、日本へのツーリズムの目玉ともなっている。本講義では、日本のサブカルチャーの歴史をひもとくとともに、その問題点をすくい取り、今後の可能性を探っていく。

■講義分類

社会人力育成　ビジネス環境理解

■到達目標

日本のサブカルチャーの流れを理解するとともに、メディアに対する思考力・判断力を得て、課題を解決する能力を身に付ける。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

日本のサブカルチャーの歴史を理解し、現代のメディアにおけるサブカルチャーの位置を修得する。

■授業形態

講義　フィールドワーク

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

サブカルチャーの歴史について調べておく。約 1.5 時間を要す。

■授業の概要

第１講　サブカルチャーとは何か？
第２講　サブカルチャーを通して見る世界の中の日本
第３講　日本のアニメーションの原点
第４講　日本のアニメーションの展開
第５講　１９６０年代のサブカルチャー
第６講　寺山修司とアングラ
第７講　ポピュラーミュージックの世界とサブカルチャー
第８講　怪獣映画と戦後日本
第９講　SF 映画とアニメ
第 10 講　ホラー・ジャパネスク
第 11 講　少女マンガの時代
第 12 講　１９８０年代と渋谷カルチャー
第 13 講　デジタルとサブカル
第 14 講　サブカルチャーの現状
第 15 講　サブカルチャーの可能性

■フィードバックの要領

各回のミニ・レポートにフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：日本のサブカルチャーについて理解し、課題を自ら発見し、解明することができる。
評価 A（89 ～ 80 点）：日本のサブカルチャーについて理解し、課題を自ら発見することができる。
評価 B（79 ～ 70 点）：日本のサブカルチャーについて理解し、その課題を説明することができる。
評価 C（69 ～ 60 点）：日本のサブカルチャーについて、その流れを理解している。
評価 F（59 点以下）　：日本のサブカルチャーの流れと課題について理解することができていない。

■評価方法

各回の講義内容に基づく小レポート、小テスト 50%、OFFICE（Word）を使用した課題レポート 50%

■留意点

科目名	事業構想論Ⅰ（Business Concept Theory Ⅰ）
サブタイトル	創造型問題解決の事例紹介
担当教員	趙、松本他
対象学年	2 年生以上
区分	春学期

■講義目的

事業構想（Project Dsign）とは、社会の不条理に立ち向かい問題解決するためのビジネスにあって、様々な障壁、ルールによる制約、環境変化などの困難を克服するために行われる取り組みを含む事業活動全般のことをいう。本学ではこれを「創造的問題解決」と呼び、問題解決力、事業構想力を身に付けるために本講義を開講することとしている。
学生の「事業を構想する力」が育まれることにつながるよう、本講義においては、①「事業構想（創造的問題解決）とはどのようなことなのか」「どのようにしてそれは起こるのか」について、問題意識を持つきっかけとなること。②実際の「事業構想事例」を、その実践者から直接聞くことによって幅広く知り、自分の将来を構想する糧としてもらうことを念頭に置き、広く産業社会において事業構想に立ち向かう人材を迎え、その活動の全容を紹介する。

■講義分類

ビジネス創造、グローバルビジネス、地域ビジネス

■到達目標

毎回異なるゲストの話を聞き、事業構想にとって重要なポイントを自分なりに考えることができるようになる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

事業構想事例から事業構想とは何かという基礎的な認識と知識について理解する。

■授業形態

講義、グループディスカッション

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

前回に話された内容を、自分のメモを元にまとめ、①講演者にとっての事業構想とは何か　②成功のためのポイントは何か　③質問して理解を深める点は何か　について整理しておく　（90 分程度）

■授業の概要

第 1 講　オリテンテーション
第 2 講　オリエンテーション②
第 3 講　外部講師による講演
第 4 講　外部講師による講演
第 5 講　外部講師による講演
第 6 講　外部講師による講演
第 7 講　外部講師による講演
第 8 講　前半ふりかえり
第 9 講　外部講師による講演
第 10 講　外部講師による講演
第 11 講　外部講師による講演
第 12 講　外部講師による講演
第 13 講　外部講師による講演
第 14 講　後半ふりかえり
第 15 講　最終レポート提出

■フィードバックの要領

ふりかえりの回を 2 回設けて、フィードバックする。

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：事業構想について特筆すべき説明をすることができる。
評価 A（89 ～ 80 点）：事業構想についてよく説明することができる。
評価 B（79 ～ 70 点）：事業構想について一定の説明をすることができる。
評価 C（69 ～ 60 点）：事業構想について拙いが断片的な説明はできる。
評価 F（59 点以下）　：事業構想についてほとんど説明することができない。

■評価方法

出席 40%、ミニレポート 30%、最終レポート 30%

■留意点

科目名	事業構想論 II（Business Concept Theory II）
サブタイトル	創造型問題解決の理論と事例
担当教員	趙、松本他
対象学年	2 年生以上
区分	秋学期

■講義目的

事業構想（Project Dsign）とは、社会の不条理に立ち向かい問題解決するためのビジネスにあって、様々な障壁、ルールによる制約、環境変化などの困難を克服するために行われる取り組みを含む事業活動全般のことをいう。本学ではこれを「創造的問題解決」と呼び、問題解決力、事業構想力を身に付けるために本講義を開講することとしている。

学生の「事業を構想する力」が育まれることにつながるよう、本講義においては、「事業構想（創造的問題解決）とはどのようなことなのか」「どのようにしてそれは起こるのか」についての理論的な背景を学習し、その理論につながる実際の「事業構想事例」を、その実践者から直接聞くことによって、理解を深める。

■講義分類

ビジネス創造、グローバルビジネス、地域ビジネス

■到達目標

教員とゲストの話を聞き、事業構想にとって重要なポイントを自分なりに考えることができるようになる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

事業構想に関する理論と事例を関連づけて理解することができる。

■授業形態

講義、グループディスカッション

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

前回に話された内容を、自分のメモを元にまとめ、①教員またはゲストにとっての事業構想とは何か　②成功のためのポイントは何か　③質問して理解を深める点は何か　について整理しておく　（90 分程度）

■授業の概要

第 1 講　オリテンテーション
第 2 講　オリエンテーション②
第 3 講　教員による事業構想に関する講義
第 4 講　外部講師による講演
第 5 講　教員による事業構想に関する講義
第 6 講　外部講師による講演
第 7 講　教員による事業構想に関する講義
第 8 講　外部講師による講演
第 9 講　ここまでのふりかえり
第 10 講　教員による事業構想に関する講義
第 11 講　外部講師による講演
第 12 講　教員による事業構想に関する講義
第 13 講　外部講師による講演
第 14 講　ここまでのふりかえり
第 15 講　最終レポート提出

■フィードバックの要領

ふりかえりの回を、2 回設定し、フィードバックする。

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：事業構想について特筆すべき説明をすることができる。
評価 A（89 ～ 80 点）：事業構想についてよく説明することができる。
評価 B（79 ～ 70 点）：事業構想について一定の説明をすることができる。
評価 C（69 ～ 60 点）：事業構想について拙いが断片的な説明はできる。
評価 F（59 点以下）　：事業構想についてほとんど説明することができない。

■評価方法

出席 40%、ミニレポート 30%、最終レポート 30%

■留意点

科 目 名　社会心理（Social Psychology）

サブタイトル　歴史に残るさまざまな心理学実験を通じ、人間の本質について考える

担当教員　良峯　徳和

対象学年　2 年生以上　　区分　秋学期

■講義目的

人間は「社会的動物である」と言われるように、私たちの意識や行動は、家族、学校、職場、地域、国など、さまざまな集団・社会を抜きにしては考えられない。この授業では、個人と社会の関わり合いについて実証的に研究する社会心理学の成果を、具体的な事例や有名な実験などを紹介しつつ、社会的な存在としての人間の行動や認知、他者と共に生活することの意味やその影響について、理解を深める。

■講義分類

社会人力育成、顧客理解

■到達目標

①社会心理学の方法論や実証研究の成果について理解し、基本的な知識を身に付けること。 ②自分の考え方や周りの人達の生き方や行動が、さまざまな社会的要因の影響を受けていることを理解できるようになる。 ③この授業で学んだことを、よりよい自分の生き方、他者への理解、対人関係や集団、社会のなかでの活動のあり方に活かせるようにする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

心理学に関する基礎的な学力を養い、社会生活で発生するさまざまな問題に心理学の観点から対処する能力を習得する。

■授業形態

講義、グループワーク

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

授業の開始時に毎回内容理解を確認する復習テストを行う。その準備として、1.5 時間以上の復習を行ってくること。

■授業の概要

第 1 講　社会心理学とは何か。この授業での学習内容の全体像、授業方針を示す。
第 2 講　ミルグラムのアイヒマン実験
第 3 講　傍観者効果とは何か。キティ・ジェノビーズ事件から学ぶ。
第 4 講　集団的手抜きとは何か。リンゲルマンが行った実験をもとに、原因と対策を考える。
第 5 講　認知的不協和によって生じる「不合理」な行動はどのように説明されるか
第 6 講　スタンフォード監獄実験：権力がいかにひとを変えてしまうのか
第 7 講　協力と裏切りの心理：「囚人のジレンマ」ゲーム実際にやってみる
第 8 講　ひとを説得する技術とその心理
第 9 講　同調行動とそれを成立させる心理的メカニズム
第 10 講　集団意思決定とリスキーシフト
第 11 講　ひとは感情を隠すことができるか。「微表情」と感情の関係
第 12 講　人間の心の能力をどのように測るか。
第 13 講　悲観的な性格の人と楽観的な性格の人の違いは何か
第 14 講　悲観脳のメカニズムと改善方法
第 15 講　心と脳：「自由意志」という幻想？

■フィードバックの要領

復習テスト、レポートに対し、コメントを記入してフィードバックを行う

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：社会心理学に関する理論をよく理解し、具体的な状況でそれを応用することができる。
評価 A（89 ～ 80 点）：社会心理学に関する理論をよく理解し、授業への取り組みが熱心で、積極的である。
評価 B（79 ～ 70 点）：社会心理学に関する理論をおおまかに理解しており、授業への取り組みもまじめである。
評価 C（69 ～ 60 点）：社会心理学に関する基本的な知識を有しているが、授業への取り組みがやや不足。
評価 F（59 点以下）　：社会心理学に関する基本的な知識も理解十分でなく、授業への取り組みが不真面目。

■評価方法

出席　20%, 小テストおよび期末試験　50%,　レポート　30%。ただし、出席は全体の 2/3 以上、小テストも全体の 2/3 以上を単位取得のための最低条件とする。

■留意点

小テストは毎回の授業の開始時に実施するため、遅刻・欠席の場合は受験できない。忌引き、就職の面接試験、インターンシップなどの理由で欠席した場合のみ、復習テスト実施後の 1 週間以内に限り、追試を受けることができる。詳細については、授業内で説明する。

科目名	消費心理（Consumer Psychology）
サブタイトル	消費者理解とそれを仕掛ける企業側の心理学
担当教員	浜田　正幸
対象学年	2年生以上
区分	秋学期

■講義目的
① 消費者行動の理解の一助として心理学が有効であることを学ぶ
② 企業は消費者に対して、心理学を駆使して、購買をプロモートしていることを学ぶ
③ 心理学が、ビジネスの世界で多様に織り込まれていることを理解する

■講義分類
顧客理解

■到達目標
① 消費心理に関する一般的テーマや理論を把握する ② 消費心理を把握する方法を身につける ③ 消費心理や消費行動の分析方法を知る

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項
DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細
消費者行動の特徴を知り、また消費者行動を測定する調査方法を知る。

■授業形態
講義、グループワーク、双方向

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容
事前にキーワードについて調べて整理する。フィールド（店舗など）調査を行う（1.5 時間）。事後にワークシートの完成、あるいはレポートを提出する（1.5 時間）

■授業の概要
第 1 講　「消費心理」とは何か説明する
第 2 講　流行の心理学
第 3 講　化粧の心理
第 4 講　ブランドの心理
第 5 講　価格の心理
第 6 講　アンケート調査
第 7 講　広告の心理
第 8 講　広告の心理を使ってみる
第 9 講　ディズニーランドの心理学
第 10 講　コンビニエンスストアの心理学
第 11 講　食品スーパーの心理学
第 12 講　小売店の心理学
第 13 講　インターネットと消費行動
第 14 講　脳科学と心理学
第 15 講　到達度確認テスト

■フィードバックの要領
毎回のレポートに対し、代表的なものについてフィードバックを行う。

■評価基準
評価 A+（90 点以上）：ラーニング・ゴールに十分に達していること
評価 A（89 ～ 80 点）：ラーニング・ゴールが概ね理解できている
評価 B（79 ～ 70 点）：ラーニング・ゴール直前の理解
評価 C（69 ～ 60 点）：ラーニング・ゴール未達
評価 F（59 点以下）　：消費心理を全く理解できていない

■評価方法
出席 7%、小レポート 8%、達成度確認テスト 85%。

■留意点
私語やスマホは禁止。指定席になる予定である。

科 目 名 情報法（Information Law）

サブタイトル 知的財産法

担当教員 佐藤　恵太

対象学年 2 年生以上　　**区分** 秋学期

■講義目的
情報社会で生き抜くために必須の法律知識を説明する。

■講義分類
ﾋﾞｼﾞﾈｽＩＣＴ、ﾋﾞｼﾞﾈｽ環境理解、ﾋﾞｼﾞﾈｽ創造、ｸﾞﾛｰﾊﾞﾙﾋﾞｼﾞﾈｽ

■到達目標
情報・インターネット技術にかかわる法律問題に直面した時に、どの法律にかかわる問題かを見極める力を養うこと。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項
DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細
産業社会で発生する問題に対処する専門的能力を養う

■授業形態
講義

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容
授業内容（特に適宜行われる小テスト）を復習して理解すること

■授業の概要
第 1 講　【導入】SNS・ウエッブサイトの利用時の注意事項を眺めてみよう
第 2 講　プライバシーを入口に、法律と裁判の世界を、のぞいてみよう
第 3 講　個人情報の漏洩は、なぜ問題になるの？
第 4 講　プロバイダを訴えてやる！は、うまくいくか
第 5 講　文化祭で他人の楽曲をコピーバンドで演奏していいの？
第 6 講　自分の SNS にアップロードしていた自撮り写真が他人のサイトに勝手に掲載された
第 7 講　大学に提出するﾚﾎﾟｰﾄを作成する時、他人のｻｲﾄに掲載された写真を使ってもいいの？
第 8 講　自分のブログにタレントの写真を貼ったら、事務所から警告状が来た！
第 9 講　自分のブログに、人気映画を無料公開している YouTube サイトのリンクを貼ってよいのか
第 10 講　Facebook　の「いいね」数を増やすため、投稿者にだけ値引き販売をする店舗
第 11 講　ブログのタイトルに、「広瀬すずの部屋」「サマンサタバサ・ファンの部屋」
第 12 講　ネット・オークションに出品するとき、自分で撮影した商品の写真を貼ってお大丈夫？
第 13 講　ドメイン名、メタタグ、ハッシュタグと商標権
第 14 講　いけないパクリと許される模倣を、どのように区別するか
第 15 講　【授業のまとめと情報法の将来】ロボット検索、AI 技術の革新的発展に伴う問題

■フィードバックの要領
小ﾃｽﾄについては解説する。期末試験については模範解答等を提供する予定。

■評価基準
評価 A+（90 点以上）：講義内容を正確に理解し、積極的に掘り下げた調査を行って、成果をあげている。
評価 A（89 ～ 80 点）：講義内容を正確に理解している。
評価 B（79 ～ 70 点）：講義内容をほぼ理解できているが、一部に理解できていない点がある。
評価 C（69 ～ 60 点）：講義された事項について、基礎的な最低限の事項を理解している。
評価 F（59 点以下）　：講義内容の理解が不十分である。

■評価方法
期末試験（80%）、小テスト（20%、実施回数は、開講後に説明します）

■留意点
授業の進行によってシラバスを修正することがあり、適宜修正版を授業中に配布します。

科目名	情報倫理（Information Ethics）
サブタイトル	情報社会における諸問題と倫理
担当教員	齋藤　S. 裕美
対象学年	2 年生以上
区分	春学期

■講義目的

本講義は，情報通信技術と人々の倫理観についての関わり，社会生活における情報の価値，情報通信技術の役割や影響力などを理解し，情報社会における望ましい態度やあり方，情報倫理の必要性を理解することを目的とする。
現代の社会において，情報通信技術は必要不可欠な存在である。情報通信技術の進展によって生じた諸問題について把握するとともに，それらの問題を解決するひとつの緒として情報倫理という考え方やその必要性について考える。また，情報関連の法律や規制，最前線事例についても学習する。

■講義分類

ビジネス環境理解、社会人力育成、ビジネス ICT

■到達目標

情報通信技術が社会や人々の生活に対して及ぼした影響を理解し、情報社会における様々な問題について思考する力と倫理的態度を身につけることをめざす。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

情報倫理に関わる問題に対し，その原因を分析し，問題解決に向けた自己の考えを他者に対して説明し，説得する能力，他者の考えを汲み取り，互いの意見を擦り合わせて新たな考えや解決方法を生み出せる能力を養う。

■授業形態

講義、グループディカッション、プレゼンテーション、ディベート

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

前講までの資料をよく読んでおくこと。また、講義資料に記載されているデータの出所を確認し、当該データや関連のデータにもあたっておくこと。必要な予習・復習時間は各 1 .5 時間程度（合計 3 時間程度）である。

■授業の概要

第 1 講　情報通信技術の進展と情報社会
第 2 講　個人情報と個人情報保護法
第 3 講　マイナンバー制度と個人情報の価値
第 4 講　表現の自由とプライバシー
第 5 講　インターネットとコミュニケーション
第 6 講　SNS とその功罪
第 7 講　SNS とプライバシー
第 8 講　知的財産と知的財産制度
第 9 講　著作権制度
第 10 講　著作権と TPP
第 11 講　情報社会のサービス
第 12 講　情報社会におけるデータの活用
第 13 講　情報セキュリティとその考え方
第 14 講　情報セキュリティ技術
第 15 講　情報社会における倫理観

■フィードバックの要領

各講義において Google クラスルームを用いてフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：下記 1 ～ 4 を関連づけ，自分の考察を含めて的確に説明できる。5 の資質が十分である。
評価 A（89 ～ 80 点）：下記 1 ～ 4 を個別に，自分の考察を含めて的確に説明できる。5 の資質が十分である。
評価 B（79 ～ 70 点）：下記 1 ～ 4 のうち 2 つ以上を、自分の考察を含めて説明できる。5 の資質が十分である。
評価 C（69 ～ 60 点）：下記 1 ～ 4 のうち 2 つ以上を説明できる。5 の資質が十分である。
評価 F（59 点以下）　：講義内容について著しく理解が不足している。

■評価方法

期末試験 50%、レポートや課題 50% に、授業への参加態度を加味。次の 5 点を中心に評価する。1: 個人情報やプライバシー、2: 知的財産や著作権、3:ICT を活用したコミュニケーション、4: データ活用、5: 倫理観

■留意点

①著作権検定，個人情報保護法検定の内容に一部対応。②状況によって，講義内容や扱う回の入れ替えを行う場合がある。

科目名　初級簿記（Introductory Level Bookkeeping）

サブタイトル　簿記入門
担当教員　清松　敏雄、渡辺　智信
対象学年　2 年生以上　区分　秋学期

■講義目的
本講義は、産業社会において企業が行うさまざまな取引を会計情報として記録するための技法である「簿記」の基本原理を習得し、日本商工会議所が主催する簿記検定試験の３級（日商簿記３級）に合格できる知識と能力を習得することを目的とする。なお、本講義は、財務会計に関する授業と相俟って、課題発見、問題解決、ビジネス環境理解、ビジネスマネジメント、実践的知識獲得に有効なものであり、これらの知識・能力の獲得も目的としている。

■講義分類
ビジネスマネジメント

■到達目標
企業の経済活動を会計情報として記録するための技法である「複式簿記」の仕組みについての基礎的な知識を習得し、日商簿記３級の試験問題がおおむね解答できる知識を習得すること。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項
DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細
商業簿記に関する基礎的な知識を得るとともに、企業で行われる典型的な取引に関する理解を得ることや簿記の構造に関する理解を得ることを通じ、企業行動における課題発見能力を習得する。

■授業形態
講義　グループワーク

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容
毎回の講義内容の理解度を確認するため、指定した練習問題を解いておくことが必要である。また、講義前にテキストの該当部分を一読しておくこと。講義内容の復習と次回講義の準備には概ね１時間半程度必要になる。

■授業の概要
第１講　テキスト chapter01　簿記の基礎について解説する。
第２講　テキスト chapter02　商品売買について解説する。
第３講　テキスト chapter03　現金預金について解説する。
第４講　テキスト chapter04　手形について解説する。
第５講　テキスト chapter05　有価証券と固定資産について解説する。
第６講　テキスト chapter06　その他の取引について解説する。
第７講　テキスト chapter07　帳簿（前半）について解説する。
第８講　テキスト chapter07　帳簿（後半）について解説する。
第９講　テキスト chapter08　試算表について解説する。
第 10 講　テキスト chapter09　伝票と仕訳日計表について解説する。
第 11 講　テキスト chapter10　決算手続Ⅰについて解説する。
第 12 講　テキスト chapter11 決算手続Ⅱ（前半）について解説する。
第 13 講　テキスト chapter11　決算手続Ⅱ（後半）について解説する。
第 14 講　テキスト chapter12　決算手続Ⅲについて解説する。
第 15 講　（総まとめ）日商簿記検定の過去の出題問題を使い総合問題の演習を行う。

■フィードバックの要領
授業内テストについての解説および多かった誤りに関する補足説明を行う。

■評価基準
評価 A+（90 点以上）：授業内中間テスト、授業内期末テストの得点合計が 90 点以上
評価 A（89 ～ 80 点）：授業内中間テスト、授業内期末テストの得点合計が 80 点以上 90 点未満
評価 B（79 ～ 70 点）：授業内中間テスト、授業内期末テストの得点合計が 70 点以上 80 点未満
評価 C（69 ～ 60 点）：授業内中間テスト、授業内期末テストの得点合計が 60 点以上 70 点未満
評価 F（59 点以下）　：授業内中間テスト、授業内期末テストの得点合計が 60 点未満

■評価方法
授業内中間テスト 50%､授業内期末テスト 50%。ただし､講義に際して教員の指示に従わない等の受講態度に問題があった者に対しては、成績が良好であっても単位は付与しない。

■留意点
1. この科目の単位取得のためには、宿題及び講義内容の復習を通じて知識の定着を図り、問題演習の積み重ねにより会計処理能力の向上をさせるなどの自主的な学習が必要である。 2. 講義の際には、教科書のほかに、必ず「電卓」を持参すること。

科目名 スポーツ II- シェイプアップフィットネス（Sports II-Fitness）

サブタイトル シェイプアップフィットネス

担当教員 梅澤　佳子

対象学年 2 年生以上　区分 春学期

■講義目的

スポーツ文化の諸側面を学ぶことによって、(1) 自分の体を知り、自ら「育てる」「つくる」「維持する」ことができる知識や能力を身につけること。(2) 生涯にわたってスポーツ文化を楽しむ能力（「する」だけでなく、「みる」「よむ」などの楽しみかたもあります）を身につけること。(3) スポーツ文化を通じて、仕事生活、家庭生活、その他余暇生活など、人生全体を豊かにしていくための資質を、授業内外のさまざまな体験を通じて獲得していくこと。(4) スポーツの価値についての知見を深めることを目的としています。

■講義分類

顧客理解、ビジネスマネジメント、社会人力育成

■到達目標

「講義目的」に記載されている目的に即した、個々人の発展が見られることが目標であり、学生一人ひとりの状況に応じた課題を達成することが個人の到達目標となります。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

現状を分析して課題を明らかにできる課題発見力、課題解決に向けたプロセスを明らかにして準備できる
計画力

■授業形態

講義、実技、グループワーク

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

スキル開発だけでなく、スポーツの意義や社会的な存在価値について理解するべく、スポーツに関する文献、報道、その他の情報を十分に蒐集し、理解しておくこと。(90 分程度)

■授業の概要

第 1 講　本講義の目的、到達目標、評価の方法、受講にあたっての注意点等についての説明 .
第 2 講　身体測定
第 3 講　ストレッチと身体ほぐし
第 4 講　ストレッチ・身体ほぐし・トレーニング
第 5 講　ストレッチとトレーニング
第 6 講　ストレッチとトレーニング
第 7 講　ストレッチとトレーニング
第 8 講　ストレッチとトレーニング
第 9 講　有酸素運動の理論と実践
第 10 講　有酸素運動とトレーニング
第 11 講　有酸素運動を体験する
第 12 講　身体測定②
第 13 講　3 日間の食生活調査表の作成①
第 14 講　3 日間の食生活調査表の作成②
第 15 講　振り返りとディスカッション

■フィードバックの要領

トレーニング日誌の確認とコメント記載によるコミュニケーション等

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：スキル開発と同時にその社会的意義の理解がなされていること。
評価 A（89 ～ 80 点）：技能の開発が十分行われ、将来生かされる準備ができていること。
評価 B（79 ～ 70 点）：技能や知識、態度の形成が行われたと認められること
評価 C（69 ～ 60 点）：一定の経験とこれに対する自己理解、態度形成が行われたと認められること
評価 F（59 点以下）　：「スポーツ」の講義目的に沿った活動ができなかったとみられる場合、F 評価とします。

■評価方法

以下（1）（2）による総合評価とする。教員毎に配分は異なる。（1）授業へのコミットの深度、参加態度　（2）講義目的である①スキルの修得②知識の修得③自分や他者に資する①②のマネジメント能力

■留意点

①高校までの「体育」とコンセプトが異なることに留意して履修してください。 ②受講希望者が多数の場合、学期の第 1 講出席者を優先し抽選となります。

科目名	スポーツ II- 世代間交流健康トレーニング（Sports II）
サブタイトル	筋力トレーニング、ストレッチ、有酸素運動、レクリエーション、体力測定
担当教員	大澤　拓也
対象学年	2 年生以上
区分	春・秋学期

■講義目的
周辺地域在住の方とともに、筋力トレーニング、ストレッチ、有酸素運動、レクリエーションを行い、自身の体を動かすことも面白さを感じるとともに、他の世代の方々との交流をはかります。また、体力測定を行い、自身や他者の体力や健康を理解します。
運動に自信のある学生は体力向上を目的として、運動に自信のない学生はまず体を動かすことから始めます。

■講義分類
社会人力育成

■到達目標
体を動かすことにより、自身の体を理解すること、そして同世代や他世代の方との交流により、他者との関わり方を向上させることを目標とする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項
DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細
運動を通じて、他の世代と交流することにより、自身が他者に興味を持ち、他者を理解できるようになるだけでなく、他者に自身の興味を持たせ、自身を理解してもらえる能力を養える。

■授業形態
講義、実技、グループワーク

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容
予習としては、体に関するテレビや雑誌を見るように心がける。また、復習としては、講義内で実施する筋力トレーニングやストレッチ等、また体力測定の方法を自宅で実施する。（1.5 時間）

■授業の概要
第 1 講　講義概要については、個々のクラスの教員の指示に従ってください（以下同様）.
第 2 講　講義概要については、個々のクラスの教員の指示に従ってください.
第 3 講　講義概要については、個々のクラスの教員の指示に従ってください.
第 4 講　講義概要については、個々のクラスの教員の指示に従ってください.
第 5 講　講義概要については、個々のクラスの教員の指示に従ってください.
第 6 講　講義概要については、個々のクラスの教員の指示に従ってください.
第 7 講　講義概要については、個々のクラスの教員の指示に従ってください.
第 8 講　講義概要については、個々のクラスの教員の指示に従ってください.
第 9 講　講義概要については、個々のクラスの教員の指示に従ってください.
第 10 講　講義概要については、個々のクラスの教員の指示に従ってください.
第 11 講　講義概要については、個々のクラスの教員の指示に従ってください.
第 12 講　講義概要については、個々のクラスの教員の指示に従ってください.
第 13 講　講義概要については、個々のクラスの教員の指示に従ってください.
第 14 講　講義概要については、個々のクラスの教員の指示に従ってください.
第 15 講　講義概要については、個々のクラスの教員の指示に従ってください.

■フィードバックの要領
レポートに対して、コメントを記入してフィードバックを行う。

■評価基準
評価 A+（90 点以上）：スキル開発と同時にその社会的意義の理解がなされていること。
評価 A（89 ～ 80 点）：技能の開発が十分行われ、将来生かされる準備ができていること。
評価 B（79 ～ 70 点）：技能や知識、態度の形成が行われたと認められること
評価 C（69 ～ 60 点）：一定の経験とこれに対する自己理解、態度形成が行われたと認められること
評価 F（59 点以下）　：「スポーツ」の講義目的に沿った活動ができなかったとみられる場合、F 評価とします。

■評価方法
以下（1）（2）による総合評価とする。教員毎に配分は異なる。（1）授業へのコミットの深度、参加態度　（2）講義目的である①スキルの修得②知識の修得③自分や他者に資する①②のマネジメント能力

■留意点
①高校までの「体育」とコンセプトが異なることに留意して履修してもらいたい。 ②各講義において、指示が異なるので、これによく留意して受講したもらいたい。 ③原則として、受講希望者は、学期の第 1 講の日時に、指定された教室に集合しなければならない。（T-NEXT にて指示する）

科目名	スポーツ II- テニス（Sports II-Tennis）
サブタイトル	テニスを通じて学ぶスポーツビジネス
担当教員	佐藤　文平
対象学年	2 年生以上
区分	春・秋学期

■講義目的

本演習では，ラケットとボールを操作するために必要な，眼と手のコーディネーショントレーニングを行いながら，テニスの基本を学んでいく．また，ゲームを通じて，マナーや他人とのコミュニケーションスキルも習得する．技術の定量化にはボール挙動測定器 TRACKMAN を用い , ボール速度やボール回転速度の理解を深める.

■講義分類

顧客理解 , グローバル創造 , ビジネス創造

■到達目標

テニスは，生涯スポーツとして社会人となってからも個人の体力に応じて楽しめるスポーツである．本演習の目的は，テニスの打球スキルとルールを学び，ゲーム（シングルス，ダブルス）を楽しめるようになることである

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

生涯スポーツであるテニスの最低限必要な技術を習得するとともに他人とのコミュニケーション能力を養う.

■授業形態

講義 , グループディスカッション , フィールドワーク

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

テニスの基本的な歴史やルールを理解して授業に臨むことを基本とする.

■授業の概要

第 1 講　テニスで起きる傷害について予習し、予防するために必要な準備運動を学ぶ.
第 2 講　ｽﾄﾛｰｸ、ﾎﾞﾚｰ、ｻｰﾌﾞ、ﾚｼｰﾌﾞ、ｽﾏｯｼｭというテニスに必要なスキルを予め理解して行う
第 3 講　ﾌｫｱﾊﾝﾄﾞｽﾄﾛｰｸ、ﾊﾞｯｸﾊﾝﾄﾞｽﾄﾛｰｸの基本的な打球方法を予め理解したうえで行う
第 4 講　ﾎﾞﾚｰやｽﾏｯｼｭの基本的な打球方法やﾎﾞﾚｰを使うﾀｲﾐﾝｸﾞを予め理解したうえで行う
第 5 講　ｻｰﾌﾞの種類（ﾌﾗｯﾄｻｰﾌﾞ , ｽﾗｲｽｻｰﾌﾞ , ｷｯｸｻｰﾌﾞ）の違い , 用途について予め理解した上で行う
第 6 講　TRACKMAN を用いてのサーブ速度測定実習を行ない , 自身の技術の定量化を行う
第 7 講　講義（テニスとジェロントロジー：生涯スポーツとしての役割）
第 8 講　ダブルスのルールを予め理解したうえでポイントゲーム練習を行う
第 9 講　講義（テニスの試合の成り立ちを予め理解したうえでｽﾎﾟｰﾂﾋﾞｼﾞﾈｽ・ﾏｰｹﾃｨﾝｸﾞを学ぶ）
第 10 講　シングルスのルールを予め理解したうえでポイントゲーム練習を行う
第 11 講　ﾀﾞﾌﾞﾙｽのﾌｫｰﾒｰｼｮﾝ（ｵｰｽﾄﾗﾘｱﾝﾌｫｰﾒｰｼｮﾝ , “I” ﾌｫｰﾒｰｼｮﾝ）を予め理解したうえで行う
第 12 講　ﾃﾆｽにおけるﾒﾝﾀﾙﾄﾚｰﾆﾝｸﾞ（ｵﾝｺｰﾄ）を行い , 事後のﾌﾟﾚｰにおけるﾒﾝﾀﾙ的な変化を感じる
第 13 講　テニスのスキルテストを行なう.
第 14 講　第六講目に行なった TRACKMAN で計測した測定値と比較する
第 15 講　まとめ．全ての技術を結集させて , シングルスの試合とダブルスの試合を行う

■フィードバックの要領

ﾚﾎﾟｰﾄに対してｺﾒﾝﾄを記入しﾌｨｰﾄﾞﾊﾞｯｸを行う．ｽｷﾙﾃｽﾄでは , 口頭によるﾌｨｰﾄﾞﾊﾞｯｸを行う

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：出席および授業参加意欲が高く , 練習等のコーディネート能力が高い.
評価 A（89 ～ 80 点）：出席および授業参加意欲があり , テニスの基本技術が備わり , 試合ができる.
評価 B（79 ～ 70 点）：テニスの基本技術は備わっているが , 出席および授業参加意欲が不十分.
評価 C（69 ～ 60 点）：出席 , 授業参加意欲 , テニスの基本技術ともに最低限度.
評価 F（59 点以下）　：出席 , 授業参加意欲が不十分で , テニスの基本技術を習得しようとする意欲がない.

■評価方法

出席 50%, 技術テスト 30%, レポート 20%

■留意点

個人でラケットを所有している学生は , 各々のラケットで授業に参加することが好ましい．運動の際にはテニスシューズであることが好ましい.

科目名	スポーツ II- フットサル（Sports I-Futsal）
サブタイトル	フットサルと出会い、その奥深さをしるための入門スクール
担当教員	福角 有紘
対象学年	2 年生以上
区分	春・秋学期

■講義目的

①人生を豊かにするためのスポーツ教養の一つとして、フットサルの知識と技能を身に着けること②フットサルを実践することを通じて、社会人として求められる基礎能力であるコミュニケーションや判断力、実行力、協同する力などを育成すること。
③フットサルを通じて、競技者へのシンパシーを獲得し、観戦する（応援する）価値について知ること

■講義分類

顧客理解、ビジネスマネジメント、社会人力育成

■到達目標

競技のルールやマナーの概要を知り、その面白さ、楽しさについて十分理解し他人にもそれを伝えることができる。
フットサルゲームに参加し協同者と協力して楽しむことができる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

フットサル競技の特性は、そのスピード感であり、判断力、決断力、実行力がきわめて大切であり、社会人力育成につながる

■授業形態

講義、実技、グループワーク

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

スキル開発だけでなく、スポーツの意義や社会的な存在価値について理解するべく、スポーツに関する文献、報道、その他の情報を十分に蒐集し、理解しておくこと。（1.5 時間）

■授業の概要

第 1 講　クラスメンバーの決定
第 2 講　フットサルに出会う！
第 3 講　フットサル競技に必要な基礎的技能の習得①.
第 4 講　フットサル競技に必要な基礎的技能の習得②
第 5 講　フットサル競技に必要な基礎的技能の習得③
第 6 講　フットサルの応用技術・戦術を学ぶ①
第 7 講　フットサルの応用技術・戦術を学ぶ②
第 8 講　フットサルの応用技術・戦術を学ぶ③
第 9 講　フットサルの応用技術・戦術を学ぶ④
第 10 講　フットサル競技の実践①
第 11 講　フットサル競技の実践②
第 12 講　フットサル競技の実践③.
第 13 講　フットサル競技の実践④
第 14 講　フットサル競技の実践⑤
第 15 講　全体の振り返り

■フィードバックの要領

担当教員から学びの状況と今後の方向性について直接アドバイスします。

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：スキル開発と同時にその社会的意義の理解がなされていること。
評価 A（89 ～ 80 点）：技能の開発が十分行われ、将来生かされる準備ができていること。
評価 B（79 ～ 70 点）：技能や知識、態度の形成が行われたと認められること
評価 C（69 ～ 60 点）：一定の経験とこれに対する自己理解、態度形成が行われたと認められること
評価 F（59 点以下）：「スポーツ」の講義目的に沿った活動ができなかったとみられる場合、F 評価とします。

■評価方法

以下（1）（2）による総合評価とする。教員毎に配分は異なる。（1）授業へのコミットの深度、参加態度 （2）講義目的である①スキルの修得②知識の修得③自分や他者に資する①②のマネジメント能力

■留意点

高い競技レベルを前提としてはいない。むしろ、初心者や、スポーツ未経験者にスポーツ体験をしてもらうことを重視している。経験者には、これまでの経験を踏まえて、初心者受講生へのコーチングなどを通じてよりスポーツへの理解を深めてもらうことを期待する。

科目名	スポーツと健康（Sports and Health）
サブタイトル	スポーツ文化と健康に関する基礎知識を学ぶ
担当教員	梅澤　佳子
対象学年	2年生以上
区分	春学期

■講義目的

健康の保持増進のために身体運動は不可欠です。身体との関わり方を間違えると逆効果となり、健康を損ねてしまいます。人生100年時代を迎える学生の皆さんが、健康に関する知識やスポーツ文化を学び、実践することで充実した生活を送ってくれるよう願っています。
講義では、①健康の保持増進のための3大条件（身体運動・栄養・休養）に関する基本的な知識、②身体運動やスポーツを安全に効果的に行うための基本的知識、③産業社会における健康やスポーツの意味や価値等々、幅広い知識を学ぶことを目的としています。

■講義分類

社会人力、社会人基礎力、地域ビジネス、産業社会、問題解決

■到達目標

1．現代社会における健康課題を理解し自ら対策に取り組める能力を身につける。 2．健康管理方法、身体運動、スポーツとの関わり方を正しく理解する。 4．運動、スポーツ、レジャー、レクリエーションの享受能力を高める。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

社会の発展に積極的に関与し問題解決に向かう姿勢。

■授業形態

講義

■準備学習の時間（予習・復習等1.5時間以上）及び具体的な内容

事前に予習のための用語やポイントを説明します。指定図書等で予習しておいてください。講義後は、講義資料とノートを参考に復習を行ってください。
（1.5時間）

■授業の概要

第1講　講義の目的、内容、予習・復習の仕方、評価基準、評価の方法等についての説明。
第2講　世界保健機構（WHO）の健康定義、健康問題、問題解決の現状
第3講　日本における健康課題とその取組み、健康産業、健康ビジネスについて
第4講　こどもの時の身体運動が一生のからだをつくる
第5講　思春期・青年期の健康、スポーツの課題と解決策1
第6講　思春期・青年期の健康、スポーツの課題と解決策2
第7講　中年期・壮年期・老年期における健康の注意点と運動の方法
第8講　食の重要性について
第9講　身体運動・トレーニングの基礎理論
第10講　スポーツの起源、本来の意味、文化としてのスポーツ
第11講　スポーツとは何か - 近代・現代社会とスポーツ
第12講　社会的からだについて
第13講　まとめ
第14講　授業内テスト
第15講　全体のまとめ、試験の解答と解説

■フィードバックの要領

次の講義での回答、メールでの対応。

■評価基準

評価A+（90点以上）：講義内容について十分に理解し、オリジナリティが発揮されている。
評価A（89～80点）：授業の内容について十分に理解し、自分の考えもまとめて表現できている。
評価B（79～70点）：授業の内容について理解しているが、その内容の表現が不十分である。
評価C（69～60点）：学んだ内容について理解していない。
評価F（59点以下）　：著しく理解が不十分である。

■評価方法

講義内の課題提出による評価が40%、中間試験・学期末試験の割合が60%を基本とします。絶対評価方法にて評価します。

■留意点

出席は評価のための前提条件です。 講義内ミニレポートの内容により講義内容を理解できているか、講義にしっかりと取り組んでいるか判断し評価に含めます。

科目名 多摩学 II（Tama Study II）※ 2017 年度以前入学生用

サブタイトル 「多摩」地域の歴史的変遷と特性を学ぶ

担当教員 大森　映子

対象学年 2 年生以上（2017 年度以前入学生用）　**区分** 春学期

■講義目的

地域の特性を把握するには、その歴史的な経緯を知ることが不可欠である。また、歴史を探ることは将来を見通すための鍵になるだろう。国際化が重視されている昨今であるが、自らのよりどころを明確にしなければ、国際的な対応はむしろ困難であり、問題発見やその解決のための手がかりを得ることはできない。この「多摩学」の授業では、まず地域を学ぶことの意味を明らかにした上で、多摩地域の歴史を辿り、地域に根ざした特性を明らかにし、地域ビジネスの可能性を考えてみたい。

■講義分類

地域ビジネス、グローバルビジネス、社会人力育成

■到達目標

（1）多摩地域に対する理解を深め、地域的特性と密着した産業社会の実情を探る。（2）現代を考える上で、歴史的考察が重要であることを認識する。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

多摩地域に関する基礎的な知識と状況を考察する学力を養い、地域社会における諸問題に対処する能力を修得する。

■授業形態

講義、フィールドワーク、グループディスカッション

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

復習を重視し、授業内容を振り返って簡単なレポートにまとめる。また次の授業に備えて提示された重要用語について予習しておく。（1.5 時間）

■授業の概要

第 1 講　15 回の講義のガイドライン
第 2 講　地域の特性を知る　―文化の違いとその歴史的背景―
第 3 講　地形から見た「多摩」／発掘された「多摩」
第 4 講　古代～中世における武蔵・多摩
第 5 講　戦国時代における多摩地域
第 6 講　多摩地域の見学施設に行こう！
第 7 講　政治都市「江戸」の建設
第 8 講　江戸の城下町構想と現代の「東京」
第 9 講　多摩地域の産業と文化活動
第 10 講　自由民権運動と多摩地域
第 11 講　施設見学の記録作成
第 12 講　戦前における多摩地域の産業
第 13 講　戦後復興と多摩の位置づけ
第 14 講　多摩地域の特色と施設見学について　（グループディスカッション）
第 15 講　多摩地域の特色　―まとめ

■フィードバックの要領

レポートや提出物については、コメントし、共有できるものは授業内で紹介する。

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：授業の趣旨と内容を十分に理解し、自分の意見を持てるようになった。
評価 A（89 ～ 80 点）：授業の趣旨と内容を、基本的に理解し、自分の意見を持てるようになった。
評価 B（79 ～ 70 点）：授業の趣旨と内容を、一応理解できた。
評価 C（69 ～ 60 点）：不十分なところはあるが、授業のポイントは一応理解できた。
評価 F（59 点以下）　：授業の趣旨、内容ともに理解できていない。

■評価方法

平常点 60%（授業内で求める簡単なミニレポートを重視する）、見学記録 20%、最終レポート（グループディスカッションを含む）20% を原則とする。レポートについては word を利用すること。

■留意点

①初回は授業の方針を確認する上で重要であるので、必ず出席すること。 ②終盤にグループディスカッションを予定している。③施設見学の関係で講義の順序を入れ替える可能性がある。

科目名	地域政策プランニング（Regional Policy Planning）
サブタイトル	政策による問題解決企画の技法
担当教員	中庭　光彦
対象学年	２年生以上
区分	秋学期

■講義目的
現代社会において問題解決とは、企業－行政－ＮＰＯ等、更には個人とグループ、先輩といった「多元的な人々の連携」の下で進められる。問題特定－政策企画－政策実施－政策評価という一連の過程を、多元的な組織・個人で合意をしながら、問題解決を進める。それが政策プランニングである。これからは人口減少局面を前提にした政策を企画しなければならない。いくつかのケースを題材に、解決方法立案のトレーニングを行うのが本講義の狙いである。

■講義分類
地域ビジネス

■到達目標
因果関係図をつくり、それをもとに政策企画を行い、それを説明できるようにすること。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項
DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細
地域分析の基本的学力を身につけ、地域政策の考え方から現実の課題発生の因果関係把握法と解決手法を習得する。

■授業形態
講義、グループディスカッション

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容
日経新聞過去記事検索データベースで、テーマ内容を調べてくる（予習）。講義・作業の内容をノートに整理してまとめ直す（復習）。両方で１．５時間。

■授業の概要
第１講　オリエンテーション
第２講　政策と因果関係図
第３講　ケース学習１木造建築密集地域問題
第４講　東京都の防災政策
第５講　ケース学習２高尾山観光客増加問題
第６講　ケース学習３食品メニュー偽装問題
第７講　ケース学習４地域福祉問題
第８講　ケース学習５空き家問題
第９講　人口減少社会を考えるための基礎知識
第 10 講　ケース学習６中心市街地問題
第 11 講　ケース学習７中心市街地活性化政策
第 12 講　ケース学習８多摩市まちひとしごと創生総合戦略
第 13 講　ケース学習９多摩市の政策評価と合意形成
第 14 講　人口減少問題に対する地域政策についてレポート制作
第 15 講　これからの地域政策

■フィードバックの要領
レポートを提出してもらい、翌週に添削したものを全員に配布する。

■評価基準
評価 A+（90 点以上）：講義内容を十分に理解し、新たな情報を加えて伝えることができる。
評価 A（89 ～ 80 点）：講義内容を十分に理解して、伝えることができる。
評価 B（79 ～ 70 点）：おおよその内容は把握しているが、論理的に伝えるまで至っていない。
評価 C（69 ～ 60 点）：内容をあまり理解できておらず、伝えることも十分ではない。
評価 F（59 点以下）　：著しく理解に欠けており、伝えることはできない。

■評価方法
レポート６０％、出席４０％

■留意点

科目名　地域ビジネスプランニング（Regional Business Planning）

サブタイトル　地域における事業構想とビジネスモデル
担当教員　中庭　光彦
対象学年　２年生以上　区分　春学期

■講義目的
いま都市と地域が、大きく変わろうとしています。出生率が低い都市、まじめに農業をしても収益を得られない地域、大学を卒業しても働き口が無い地域、災害に弱い地域。日本では、人口減少に伴い、事業による地域の問題解決、すなわち地域の事業構想が必要です。本講義では、地域について考えてみたいという２年生を対象に、地域の問題の基本的知識とビジネスモデルや事業構想の考え方を紹介します。

■講義分類
ビジネス環境理解、ビジネスマネジメント、地域ビジネス

■到達目標
地域問題に関するニュース記事を理解したレポートを書けるようになること。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項
DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細
地域分析の基本的学力を身につけ、地域ビジネスの考え方、ビジネスモデルの考え方から現実の企業・産業を解釈できる能力を習得する。

■授業形態
講義、プレゼンテーション

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容
日経新聞過去記事検索データベースで、テーマ内容を調べてくる（予習）。講義・作業の内容をノートに整理してまとめ直す（復習）。両方で１．５時間。

■授業の概要
第１講　オリエンテーション
第２講　地域ビジネスの主体
第３講　地域の特徴を理解する
第４講　人口を増やす
第５講　仕事を増やす
第６講　中心市街地問題とコモンズ論
第７講　企業・産業立地と集客
第８講　ビジネス事例①食品加工ー小豆島醤油製造
第９講　ビジネス事例②多摩地域のものづくり企業
第 10 講　ビジネス事例③流通（1）商店街からショッピングセンターへ
第 11 講　ビジネス事例④流通（2）ネットビジネス・プラットフォーム
第 12 講　ビジネス事例⑤流通（3）買い物難民問題とビジネスチャンス
第 13 講　プラットフォームビジネスとシェアリングエコノミー
第 14 講　地域ビジネスについてのレポート作成
第 15 講　レポート講評とまとめ

■フィードバックの要領
レポートを３回課し、翌週に全員分を添削して全員に返却する。

■評価基準
評価 A+（90 点以上）：地域問題に関するキーワードを充分に使いこなし、レポートも特筆すべきものである。
評価 A（89 ～ 80 点）：地域問題に関するキーワードを使いこなし、レポートもしっかりと書けている。
評価 B（79 ～ 70 点）：地域問題に関するキーワードはあまり使われていないが、レポートは書けている。
評価 C（69 ～ 60 点）：地域問題に関するキーワードは使われていないが、レポートは書けている。
評価 F（59 点以下）　：キーワードを使わず、レポートもほとんど書けていない。

■評価方法
レポート６０%、出席４０%。

■留意点

科目名	中国ビジネスコミュニケーションⅠ（Chinese Business Communication Ⅰ）
サブタイトル	商談から契約成立までの流れ①
担当教員	田　園
対象学年	2年生以上
区分	春学期

■講義目的
中国ビジネスの現場に使う基礎的な知識と実践的スキルの習得を目標とする。
各ビジネスシーンにおける基本的な意思表現、簡単なビジネス文書作成にあたって、必要とされる知識を学び、トレーニングを通して基本的な意思表示を確実に習得する。さらに、変化しつつある新しい中国ビジネス事情を知ったうえで、異文化理解を深めるためのコミュニケーション能力向上を目指す。
※母語が中国語ではない学生のみ履修できる。中国語の発音を習得した学生を対象とする。
初回に実施するテストの解答状況により授業内容や授業の進度が多少変更となる場合がある。

■講義分類
グローバルビジネス

■到達目標
①ビジネスに特化したスキルと知識の習得、②中国語検定4級合格を目指す。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項
DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細
ビジネスに特化した中国語と日本語の総合的なスキルと知識を習得し、異文化理解を深めるためのコミュニケーション能力を向上させる。

■授業形態
講義、ロールプレイング、プレゼンテーション

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容
授業前に、キーワードとなっている専門用語を事前に調べて、理解しておく。授業後、中国経済に関連する記事を日本経済新聞などで目を通す。（各 1.5 時間）

■授業の概要
第１講　ガイダンス
第２講　第１課　空港
第３講　第２課　飛行機内
第４講　第３課　出迎え
第５講　第４課　ホテル①
第６講　第５課　打ち合わせ
第７講　実践：ビジネス連絡文書の書き方
第８講　第６課　工場視察①
第９講　第７課　工場視察②
第 10 講　第８課　移動
第 11 講　第９課　食事
第 12 講　第 10 課　電話
第 13 講　第 11 課　会社訪問
第 14 講　復習及び総括
第 15 講　筆記テスト

■フィードバックの要領
課題に対し、添削を記入してフィードバックを行う。

■評価基準
評価 A+（90 点以上）：特に優れているもの
評価 A（89 ～ 80 点）：優れているもの
評価 B（79 ～ 70 点）：一応の努力が認められるもの
評価 C（69 ～ 60 点）：合格と認められる最低限の水準を満たしているもの
評価 F（59 点以下）　：C の水準に達しないもの

■評価方法
授業態度 20%、会話力 20%、課題達成状況 20%、期末テスト 40% による総合評価

■留意点
初回に実施する小テストの解答状況により、授業内容や授業の進度が多少変更となる場合がある。

科 目 名 中国ビジネスコミュニケーション II（Chinese Business Communication II）

サブタイトル 商談から契約成立までの流れ②

担当教員 田 園

対象学年 2 年生以上　**区分** 秋学期

■講義目的

中国ビジネスコミュニケーション I に続き、中国ビジネスの現場に使う難易度の高い中国語と実践的スキルの習得を目標とする。
各ビジネスシーンにおける会話、ビジネス文書の作成などを通して、高度な意思表示を習得する。さらに変化しつつある新しい中国ビジネス事情を知ったうえで、異文化理解を深めるためのコミュニケーション能力向上を目指す。
※母語が中国語ではない学生のみ履修できる。中国語の発音を習得した学生を対象とする。

■講義分類

グローバルビジネス

■到達目標

①ビジネスに特化したスキルと知識の習得、②中国語検定 4 級合格を目指す。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

ビジネスに特化した中国語と日本語の総合的なスキルと知識を習得し、異文化理解を深めるためのコミュニケーション能力を向上させる。

■授業形態

講義、ロールプレイング、プレゼンテーション

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

授業前に、キーワードとなっている専門用語を事前に調べて、理解しておく。授業後、中国経済に関連する記事を日本経済新聞などで目を通す。（各 1.5 時間）

■授業の概要

第 1 講　ガイダンス及びテキスト前半の復習
第 2 講　第 12 課　現地オフィス
第 3 講　第 13 課　商談①
第 4 講　第 14 課　商談②
第 5 講　第 15 課　観光
第 6 講　第 16 課　トラブル
第 7 講　実践：中国に関する新しいビジネス事情①
第 8 講　第 17 課　買い物
第 9 講　第 18 課　ホテル②
第 10 講　第 19 課　病気
第 11 講　第 20 課　宴会
第 12 講　第 21 課　見送り・出国
第 13 講　実践：中国に関する新しいビジネス事情②
第 14 講　復習及び総括
第 15 講　筆記テスト

■フィードバックの要領

課題に対し、添削を記入してフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：特に優れているもの
評価 A（89 ～ 80 点）：優れているもの
評価 B（79 ～ 70 点）：一応の努力が認められるもの
評価 C（69 ～ 60 点）：合格と認められる最低限の水準を満たしているもの
評価 F（59 点以下）　：C の水準に達しないもの

■評価方法

授業態度 20%、会話力 20%、課題達成状況 20%、期末テスト 40% による総合評価

■留意点

授業の進行具合によって、授業内容や授業の進度が多少変更となる場合がある。

科 目 名　データサイエンス I-A（Data Science I-A）

サブタイトル　SPSS によるデータサイエンスの超入門

担当教員　久保田　貴文

対象学年　2 年生以上　　区分　春学期

■講義目的

データサイエンスの根本となる知識・スキルを修得します。また、ビッグデータを扱うための基礎力を身につけ、統計的思考力を養成します。分析には SPSS を使用します。

■講義分類

ビジネス ICT、顧客理解、社会人力育成

■到達目標

データを活用して、データの加工・変換，特徴の解明、関係性の把握、グループ間の差異の検出、複数の変数感の傾向を説明など、基礎的な考え方とスキルの修得を目標とします。学修の内容としては統計検定 3 級程度を目標とします。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

データ分析に関する基礎的な学力を養い，産業社会で発生する問題にデータサイエンスの観点から対処する能力を習得する。

■授業形態

講義、グループワーク

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

統計的な考え方について該当する項目をあらかじめ調べる（1.5 時間）。また，当日解析した結果について考察する（1.5 時間）。

■授業の概要

第 1 講　オリエンテーション・データ分析概論
第 2 講　統計学超入門・統計を武器とするために
第 3 講　データの読み込み・入力・保存
第 4 講　データの整理
第 5 講　データの加工・変換 1
第 6 講　データの加工・変換 2
第 7 講　データの特徴を明らかにする 1
第 8 講　データの特徴を明らかにする 2，レポート 1
第 9 講　2 つの変数から関係性を把握する 1
第 10 講　2 つの変数から関係性を把握する 2，レポート 2
第 11 講　グループ間に差異があるのかを確かめる 1
第 12 講　グループ間に差異があるのかを確かめる 2，レポート 3
第 13 講　複数の変数感の傾向を説明する 1
第 14 講　複数の変数感の傾向を説明する 2，レポート 4
第 15 講　総合演習・最終レポート（レポート 5）

■フィードバックの要領

課題に対してフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：5 回のレポート点の合計点で 90 点以上
評価 A（89 ～ 80 点）：5 回のレポート点の合計点で 80 点以上 89 点以下
評価 B（79 ～ 70 点）：5 回のレポート点の合計点で 70 点以上 79 点以下
評価 C（69 ～ 60 点）：5 回のレポート点の合計点で 60 点以上 69 点以下
評価 F（59 点以下）　：5 回のレポート点の合計点で 59 点以下

■評価方法

レポート点：20 点× 5 回 = 100 点。10 回以上出席した者（もしくは欠席回数が 5 回未満の者）に対して評価を行う。

■留意点

統計検定 3 級合格者には加点する（本科目を合格（C 以上）として取り扱う）。社会調査士科目のため、第 1 ～ 8 講には、「基本的な資料とデータの分析」の内容を含む（Web シラバスの詳細を参照）。

科目名	データサイエンス I-B（Data Science I-B）
サブタイトル	データ利活用の基礎的スキル
担当教員	佐藤　洋行
対象学年	2 年生以上
区分	春学期

■講義目的

ビジネスのインターネット化、ハードウェアの低廉化、デバイスやセンサーの多様化（IoT 含む）により、データの利活用は現在のビジネスに欠くべからざるものとなっている。本講義では、データ利活用の基礎力の習得を目指し、データ分析の入門を取り扱う。具体的には、データ分析プロセスについていくつかのフレームワークを学び、データの要約と可視化、データの比較と関係性の分析、因果関係の検証の実際的手法についての知識習得と実践を行ってもらう。このようなスキルは現在のビジネスでは会社のどの部署でも必要とされるものであるので、受講をお勧めする。
なお、講義では分析を実体験することで理解を深めることを重視するため、コンピュータソフトを用いてデータ分析をするスキルも演習により習得してもらう。適宜、グループワークによるレポート作成やプレゼンテーションも行ってもらう。

■講義分類

ビジネス環境理解、社会人力養成、ビジネス ICT

■到達目標

現状を分析して課題を明らかにできる課題発見力、課題解決に向けたプロセスを明らかにして準備できる計画力、課題に対して新たな価値や解決方法を生み出せる創造力を養うため、データ分析の基礎を学んでもらう。最終的には、データ分析のフレームワークに基づいたデータ利活用ができることを目標とする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

データ分析の基礎技術の学習により、産業社会における課題に数理的にアプローチする技能を習得する

■授業形態

講義、グループディスカッション、プレゼンテーション

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

毎回、EXCEL を利用した表計算を行うので、事前に必要な機能を理解しておくこと。また、毎回の授業のはじめに前回講義内容に関する小テストを行うので、前回講義資料をしっかりと復習すること（1.5 時間程度）。

■授業の概要

第 1 講　イントロダクション　データ分析入門
第 2 講　データ分析の基礎（1）データの要約－データを代表する値
第 3 講　データ分析の基礎（2）データの要約－データのバラつきを表す値
第 4 講　データ分析の基礎（3）データの要約と可視化
第 5 講　演習（1）データの理解①
第 6 講　演習（2）データの理解②
第 7 講　データ分析の基礎（4）データの比較－ 2 つのデータの比較
第 8 講　データ分析の基礎（5）データの比較－ 3 つ以上のデータの比較
第 9 講　演習（3）データの分析－比較編①
第 10 講　演習（4）データの分析－比較編②
第 11 講　データ分析の基礎（6）データの関係性の把握①
第 12 講　データ分析の基礎（7）データの関係性の把握②
第 13 講　データ分析の基礎（8）データの関係性の数式化
第 14 講　演習（5）データの分析－相関編②
第 15 講　演習（6）データの分析－相関編②

■フィードバックの要領

レポートにコメントを付けて返却する。

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：課題解決のためのデータ分析を行い、結果を正しく表現して価値ある考察ができる
評価 A（89 ～ 80 点）：データ分析プロセスのフレームワークに従って分析を実践することができる
評価 B（79 ～ 70 点）：I データ分析プロセスのフレームワークと、統計の基礎を理解している
評価 C（69 ～ 60 点）：データ分析プロセスのフレームワークと、統計の基礎をある程度身に付けている
評価 F（59 点以下）　：データ分析プロセスのフレームワークの要点について説明できない

■評価方法

出席 30%、レポート 70%　（統計検定試験に合格した場合は、成績の一部として評価する）

■留意点

①必ず PC を持参すること。②本講義は毎回、前回講義の内容を理解していることを前提として行う。また、グループワークとしてデータ分析やレポート作成などのアクティブラーニングを行うので、1 回目の講義から欠席せずに受講すること。③社会調査士科目のため、第 1 ～ 8 講には、「基本的な資料とデータの分析」の内容を含む（Web シラバスの詳細を参照）。

科目名	データサイエンス II（Data Science II）
サブタイトル	実践統計学入門
担当教員	今泉　忠
対象学年	2年生以上
区分	秋学期

■講義目的

高度情報化により、情報が数量として扱われるデータを扱う必要性はますます高まっている。本講義では、データに基づく課題解決や問題解決に必須の統計学に関して、その基礎概念の理論的な理解を深め、社会現象を確率モデル・統計モデルとして扱うために必要な統計的方法を利活用できることを目標としている。

■講義分類

顧客理解、社会人力育成、ビジネス ICT

■到達目標

（1）基礎的な確率分布について理解し、適用できる　（2）標本抽出について理解できる　（3）平均の推定問題が理解でき、適用できる　（4）検定問題が理解でき、適用できる

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

DP2 思考と判断：ビジネス環境で必須の統計的思考力と課題解決のための統計分析プロセスを計画実行するができる.

■授業形態

講義、グループワーク

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

統計学に関する知識の理解だけではなく、実際の問題解決を求める。実際のデータから解を求めるので１．５時間程度の復習時間を必要となるので余裕を持ってあたること。

■授業の概要

第１講　統計学の基礎
第２講　データの整理：平均と標準偏差
第３講　平均のバラツキ
第４講　確率分布の期待値
第５講　離散確率分布について
第６講　正規分布
第７講　２つの確率変数の和と差
第８講　母集団の平均値と分散の推定
第９講　平均値の区間推定と仮説検定
第 10 講　平均値の差の検定
第 11 講　因果分析のための単回帰モデル
第 12 講　単回帰分析での決定係数
第 13 講　単回帰での係数の検定予備
第 14 講　残差分析
第 15 講　まとめ

■フィードバックの要領

リフレクションシートにより行う

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：到達目標（４）検定問題が理解でき、適用できる
評価 A（89 ～ 80 点）：到達目標（３）平均の推定問題が理解でき、適用できる
評価 B（79 ～ 70 点）：到達目標（２）標本抽出と平均の性質について理解している
評価 C（69 ～ 60 点）：到達目標（1）基礎的な分布の性質を理解している
評価 F（59 点以下）　：上記のいずれも理解しておらず、適用もできない

■評価方法

講義中の小テスト（50%）、期末試験（50%）により行う。統計的なものの考え方・データをもとにした統計処理の仕方ができているかどうかを評価する。統計検定試験の結果を成績評価の一部として評価する。

■留意点

本講義は、毎回の講義の内容を前提として講義を行う。また、講義ではチーム毎のデータ収集、レポート提出のアクティブラーニングを行うので、1 回目の講義から欠席せずに受講すること。「データサイエンス III」、「データサイエンス IV」、「経営科学 I」、「経営と意思決定」の履修には本講義を履修しておくことが望ましい。

科 目 名　データベースⅠ（DataBase System Ⅰ）

サブタイトル　データベースの作成と管理

担当教員　後藤　涼子

対象学年　2 年生以上　　区分　春学期

■講義目的

実社会の様々な場所において構築・利用されているデータベースについて基礎から学習する。特に、リレーショナルデータベース管理システム（RDBMS：Relational DataBase Management System）について、Microsoft Access を使用した演習により経験を重ねることで、リレーショナルデータベースの構築やデータ管理の基本的なスキルを習得する。

■講義分類

ビジネス ICT、ビジネス環境理解

■到達目標

データベースに関する基礎知識、リレーショナルデータベース設計の基本概念、Microsoft Access を使用してデータベースを作成する基本的なスキルを習得する。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

データベースの作成に関する基礎知識や技術的手法を養い、産業社会におけるデータベースの活用または作成で発生する問題に対処する専門的能力を体系的に習得する。

■授業形態

講義、グループディスカッション

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

授業前に前講までの学習内容を理解しておくこと。授業後には演習課題を行い Access の操作について復習すること。必要な予習・復習時間は 1.5 時間程度である。

■授業の概要

第 1 講　データベースの概要
第 2 講　リレーショナルデータベース管理システムと Access の基本操作
第 3 講　データベースとテーブルの作成
第 4 講　テーブルのデータ入力と保存
第 5 講　データのインポート、エクスポート
第 6 講　テーブルの正規化とリレーションシップの作成
第 7 講　クエリの作成、データの並べ替え
第 8 講　データの抽出（1）_単一条件、複合条件、部分一致条件
第 9 講　データの抽出（2）_Between ～ And 演算子、パラメータークエリ
第 10 講　フォームの作成と編集
第 11 講　フォームによるデータの入力、コントロールの編集
第 12 講　レポートの作成と編集
第 13 講　各種帳票と宛名ラベルの作成と編集
第 14 講　総合演習（1）_「得意先管理」データベースの設計
第 15 講　総合演習（2）_「得意先管理」データベースの構築

■フィードバックの要領

課題や試験に対し処理条件に対して正しく設定されているか採点しフィードバックを行う

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：数値評価で 90 点以上
評価 A（89 ～ 80 点）：数値評価で８０点以上９０点未満
評価 B（79 ～ 70 点）：数値評価で７０点以上８０点未満
評価 C（69 ～ 60 点）：数値評価で６０点以上７０点未満
評価 F（59 点以下）　：数値評価で６０点未満

■評価方法

3 分の 2 以上の出席を前提として、期末試験 50%、授業内課題 50%で評価する。

■留意点

授業には毎回各自のノート PC を必ず持ってくること。
課題に対して積極的に取り組み、Access の操作に慣れること。

科目名	データベースII（DataBase System II）
サブタイトル	SQLを用いたデータベースの作成と管理
担当教員	齋藤　S. 裕美
対象学年	2年生以上
区分	秋学期

■講義目的
データベースは，大量データを管理し，容易にデータの検索や更新などを行うための技術である。
本講義は，データベース管理の概念やしくみについて，データベース管理システム（DBMS：DataBase Management System）の操作を通じて学習することを目的とする。

■講義分類
ビジネスICT、問題解決

■到達目標
リレーショナルデータベース管理システム（RDBMS：Relational DataBase Management System）を使って，SQL（Structured Query Language）によるデータベース作成やテーブルの追加・設定変更・削除，テーブル間の関係の定義・削除，テーブルへのデータの追加・更新・削除などデータ操作技法を習得すること，またデータベースが社会でどのように役立っているのか，その活用場面などについて理解することを目指す。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項
DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細
RDBの操作や管理に関する技能をもとに，RDBを活用して問題解決する力を身につける。

■授業形態
講義、演習

■準備学習の時間（予習・復習等1.5時間以上）及び具体的な内容
前講までの学習内容を理解しておくこと。また，ほぼ毎時課題を出すので，その課題作成を通じてSQLの記述方法について必ず復習すること。　必要な予習・復習時間は各1.5時間程度（合計3時間程度）である。

■授業の概要
第1講　データベースの概念
第2講　リレーショナルデータベースとSQLの概要
第3講　SELECT文を利用したデータ検索（1） 検索，並び替え
第4講　SELECT文を利用したデータ検索（2） 集合関数
第5講　副問合せ（1） 副問合せの基本
第6講　副問合せ（2） 副問合せにおける集合関数の利用
第7講　データ検索の総合演習（1）
第8講　データ検索の総合演習（2）
第9講　データ操作文（1） 行の追加，更新
第10講　データ操作文（2） 行の追加，更新
第11講　データ定義文（1） 表の作成
第12講　データ定義文（2） 制約，ビューの作成
第13講　データベースを用いた問題解決演習（1）
第14講　データベースを用いた問題解決演習（2）
第15講　データベースを用いた問題解決演習（3）

■フィードバックの要領
第3講以降，各講義回で全体に対してフィードバックを行う。

■評価基準
評価A+（90点以上）：下記1～3が全てできる。4の考え方を理解し，合目的的に実践できる。
評価A（89～80点）：下記1～3が全てできる。4の考え方を理解し，実践できる。
評価B（79～70点）：下記1ができる。2，3のどちらかができる。4の考え方を理解し，実践できる。
評価C（69～60点）：下記1ができる。4の考え方を理解し，実践できる。
評価F（59点以下）　：講義内容について著しく理解が不足している。

■評価方法
期末試験50%，課題50%に授業への参加態度などを加味。次の4点を中心に評価。1:SELECT文を利用したデータ検索、2: 行の追加，削除，更新、3: 表の定義，制約の設定、4: データベースを問題解決の手段として利用できる

■留意点
「データベースⅠ」で習得した知識と技能をもとに行われる講義であるため,「データベースⅠ」は必ず履修しておくこと。

科目名	特別講座Ⅰ・Ⅱ（Consideration Revolution Ⅰ・Ⅱ）
サブタイトル	寺島実郎学長監修リレー講座
担当教員	寺島、久恒、金、小林、バートル、中庭、志賀、中澤、良峯、佐藤（洋）、小西、丹下、水盛、野坂、初見、後藤（晶）、加藤
対象学年	2 年生以上
区分	春学期

■講義目的

寺島実郎学長が提唱してきた「世界潮流と日本の進路」を軸に、国際情勢、経済、国内行政、IT、歴史など各分野における精鋭の専門家を講師として招き、通年の体系的なプログラムを開催する。

現代世界は、単なる同時不況、経済危機を超え、本質的な意味での構造転換に直面している。「外は広く、内は深い」、このことを知るだけで人間の重心は下がる。鈴木大拙の言葉のごとく、より広い視野で世界を見渡し、より深く自らの立脚点を見つめる視座が求められている。

この連続講義では、我々が生きている時代を的確に把握し認識するために、世界から見た日本、また日本国内の諸問題について複数回にわたり多面的に取り上げることで、問題意識の提起と深化を目指す。時代に発信する識者の生の声を聞いて現代世界を生きるヒントを得てもらいたい。

■講義分類

グローバルビジネス、ビジネス ICT、地域ビジネス

■到達目標

自分自身が生きている時代を把握し認識するために、連続講座を通じて提起される数々の問題や課題について自身なりの解決策を考える。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

国際情勢、経済、歴史、日本社会、企業、AI、IOT、多摩地域などグローバルとローカルの関係性を意識しながら産業社会で発生する様々な問題に対処していける専門的能力を体系的に修得する。

■授業形態

講義、専用ノート作成

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

①寺島実郎学長監修リレー講座パンフレットのテーマにしたがってキーワードを調べる（1 時間）。 ②中間レポートや最終レポートの作成にあたり、「レポートの書き方」について解説する（1 時間）。

■授業の概要

第 1 講　ガイダンス
第 2 講　別途、パンフレットを配布する。
第 3 講　別途、パンフレットを配布する。
第 4 講　別途、パンフレットを配布する。
第 5 講　別途、パンフレットを配布する。
第 6 講　別途、パンフレットを配布する。
第 7 講　別途、パンフレットを配布する。
第 8 講　前半 6 講演の内容を基に中間レポートを作成する。
第 9 講　別途、パンフレットを配布する。
第 10 講　別途、パンフレットを配布する。
第 11 講　別途、パンフレットを配布する。
第 12 講　別途、パンフレットを配布する。
第 13 講　別途、パンフレットを配布する。
第 14 講　別途、パンフレットを配布する。
第 15 講　後半 6 講演の内容を基に最終レポートを作成する。

■フィードバックの要領

講義専用ノートに対してコメントを記入してフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：出席、講義メモ、中間および最終レポートの合算点が、90% 以上であること。
評価 A（89 ～ 80 点）：出席、講義メモ、中間および最終レポートの合算点が、89 ～ 80% であること。
評価 B（79 ～ 70 点）：出席、講義メモ、中間および最終レポートの合算点が、79 ～ 70% であること。
評価 C（69 ～ 60 点）：出席、講義メモ、中間および最終レポートの合算点が、69 ～ 60% であること。
評価 F（59 点以下）　：出席、講義メモ、中間および最終レポートの合算点が 59% 以下の場合は、不合格とする。

■評価方法

出席（40%）、講義専用ノート（30%）、中間および最終レポート（30%）の割合で評価する。

■留意点

①第 1 回目のガイダンスに出席しない場合履修できない。尚、履修希望者が多い場合（座席数が限られている為）履修者を選抜する。②地域住民をはじめとする一般参加者 430 名(有料)と一緒に外部講師の講演を聴講するため､受講ルールを厳守すること。③ 001 教室の座席は、事前に指定された席に着席すること。④講義内容及び講義内容に関する自分の意見は、特別講座専用ノートに整理して記入すること。

科目名	日経 BP 総研　中小企業経営研究所　冠講座（SME Management and Leadership（NIKKEI BP））
サブタイトル	隠れた優良企業の経営者から学ぶ〜「会社」とは何か、そこで自分を輝かせる方法
担当教員	日経 BP
対象学年	2 年生以上　　区分　秋学期

■講義目的
中小優良企業の経営者などから「働く」ことの意味と、企業で自分を生かす方法を理解する

■講義分類
ビジネスマネジメント、社会人力育成、ビジネス創造

■到達目標
学期中に 10 〜 13 人の経営者・専門家を招き、それぞれの会社や専門分野について毎回約 60 分の講義を受ける。講師の企業や講師の企業が目指す方向を理解し、その中で自分が果たすことができる役割などを具体的に考察してみる。実際に、アイデアを具体化して発表することにより、さらに深い理解に到達する。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項
DP5 高い志

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細
学生にとって見えにくい企業と経営について学び、働くことに対する志を高めて就職に備える

■授業形態
講義、グループワーク、プレゼンテーション

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容
講師からの推薦図書や資料を事前に読み、授業の準備をする

■授業の概要
第 1 講　オリエンテーション、「会社で働くこと」について日経 BP 総研中小企業経営研究所の講義
第 2 講　経営者の講演その 1
第 3 講　経営者の講演その 2
第 4 講　経営者の講演その 3
第 5 講　経営者の講演その 4
第 6 講　経営者の講演その 5
第 7 講　中間発表。これまで学んだ経営者についてまとめ、その中での自分の生かし方を考える。
第 8 講　経営者の講演その 6
第 9 講　経営者の講演その 7
第 10 講　経営者の講演その 8
第 11 講　経営者の講演その 9
第 12 講　経営者の講演その 10
第 13 講　後半分の中間発表。後半で学んだ経営者の考えをまとめ、自分の働き方を考える。
第 14 講　産業別、企業タイプ別の特徴分析。財務情報、報道などからの企業評価を学ぶ。
第 15 講　最終発表。10 人の経営者の考えをまとめ、その中で自分の生かし方を発表する。

■フィードバックの要領
2 回の中間発表と 1 回の最終発表にたいして、その場でフィードバックを行う。

■評価基準
評価 A+（90 点以上）：企業の経営スタイルの違いを十分に理解し、その中で自分の働き方を分かりやすく発表
評価 A（89 〜 80 点）：企業の違いは十分に理解。その中で自分の働き方には納得感があるものの、発表が不十分
評価 B（79 〜 70 点）：企業の違いは十分に理解したものの、自分の働き方の提案やプレゼンテーションが不十分
評価 C（69 〜 60 点）：企業経営への理解が今一歩で、自分の働き方の提案やプレゼンテーションが不十分
評価 F（59 点以下）　：企業経営への理解ができておらず、自分の働き方の提案やプレゼンテーションができない

■評価方法
出席 50、授業内中間テスト（発表）１５× 2、授業内最終テスト（発表）20

■留意点
実際に企業の経営者を講師として迎えます。本当は会社の事業が忙しい中を縫って講義に来ていただきますので、授業を受ける側もそれにきちんと向き合ってください。この授業を十分に理解することができれば、就職活動ではそれが役立つはずです。

科目名　ビジネスコミュニケーションⅠ（Business Communication Ⅰ）

サブタイトル　図解表現
担当教員　久恒　啓一
対象学年　2 年生以上　区分　春学期

■講義目的
どのような経営体にも経営資源がある、その経営資源をコミュニケーション活動によって活性化し、新しい商品やサービスを創り出すのが経営である。
この講義では、上述の観点からビジネスにおけるコミュニケーションと情報に焦点をあて、今までの文章と箇条書きを中心とした情報処理の欠陥を克服するため、産業社会、世界潮流、顧客理解、ビジネス創造などをテーマに、図を用いたコミュニケーションの理論と技術を学ぶ。毎回、産業社会の現場の最前線のテーマを題材に実習を行い「図解コミュニケーション」という新しい問題解決の武器を身につけてもらう。

■講義分類
ビジネスマネジメント、グローバルビジネス

■到達目標
①新聞社説等による個人ワーク、グループでのプレゼンテーションやディスカッションをふまえ、「日本の論点」（文春）の中の一流論者の時事論文をパワーポイントを用いて一枚の図に要約する技術を身につける。又、二枚以上の感想をワードで書く技術を身につける。　②自身で作成した図解を用いて大人数を対象に自信を持ってプレゼンテーションができるようになる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項
DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細
グローカル社会に対する理解、考え抜く力、組織目標の達成に貢献する力を養う。

■授業形態
講義、グループワーク、プレゼンテーション

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容
目についた新聞･雑誌の記事､他の先生の講義内容を努めて図解する。（60 分）､毎回の授業で作った図解をブラッシュアップする。（60 分）

■授業の概要
第 1 講　講義「マネジメントと図解コミュニケーション」
第 2 講　講義「ビジネスと経営」・実習
第 3 講　講義「コミュニケーションと情報」・実習
第 4 講　講義と実習「ビジネスに関するトピックス」
第 5 講　講義と実習「ビジネスに関するトピックス」
第 6 講　講義と実習「ビジネスに関するトピックス」
第 7 講　講義と実習「コミュニケーションに関するトピックス」
第 8 講　講義と実習「コミュニケーションに関するトピックス」
第 9 講　講義と実習「コミュニケーションに関するトピックス」
第 10 講　講義と実習「経営情報に関するトピックス」
第 11 講　講義と実習「経営情報に関するトピックス」
第 12 講　講義と実習「商品に関するトピックス」
第 13 講　講義と実習「時事に関するトピックス」
第 14 講　講義と実習「時事に関するトピックス」
第 15 講　講義「経営情報とビジネスコミュニケーション」

■フィードバックの要領
毎回提出させるアンケートのまとめを、次回授業で提示し、疑問などに答えていく。

■評価基準
評価 A+（90 点以上）：全回出席。レポートが特に優れている。
評価 A（89 ～ 80 点）：ほぼ全回出席。レポートが優れている。
評価 B（79 ～ 70 点）：高い出席率。レポートが良い。
評価 C（69 ～ 60 点）：高い出席率。レポートの提出あり。
評価 F（59 点以下）　：低い出席率。レポート提出なし。

■評価方法
1. 出席　50 点、2. 提出する図　25 点、3. 毎回の授業に関するレポートの内容　25 点

■留意点
毎回実習（作図・プレゼン・ディスカッション）を行うことで力をつけていくので、毎回出席することが望ましい。

科目名	ビジネスコミュニケーション II（Business Communication II）
サブタイトル	多摩地域の魅力を発信しながら「自分らしさ」を表現するスマホ実践活用術
担当教員	久米 信行
対象学年	2年生以上
区分	秋学期

■講義目的

現代はチャンスに満ちています。SNS 活用で、無名の個人が一夜にして有名になり、世界中から観光客が押し寄せることさえあるのです。私は中小国産Ｔシャツメーカーの経営者ですが、ＳＮＳで人生が好転して、各界で活躍する数千人のネット友達ができました。おかげさまで本業以外にも、全国の観光地域づくりやブランディング、企業経営者・NPO リーダー向けの研修講師、ビジネス書や記事の執筆、美術館・オーケストラ・バレエ団の支援などで、学生時代には想像しなかった楽しい毎日を送っています。多摩大生にも同じように予想を超えるような明るくて楽しい未来を切り開いて欲しいのです。この講義ではＳＮＳを友人との連絡だけではなく、有用な情報を広く発信して縁を広げる技術を学びます。多摩のお薦め情報を発信＝勝手に観光協会しながら自分と地域をプロデュースします。

■講義分類

社会人力育成、ビジネス ICT、地域ビジネス

■到達目標

日々のインスタグラムで次の３大スキルを磨き「友達」と「いいね」を増やしてネット上の評価を高めます。１）毎日ひとつは SNS でシェアしたくなるモノ・店・風景などを発見する「脳のパラボラ力×心のズーム力」２）記事を見た人が思わず「いいね」を押したくなる「写真撮影・加工センス×キャッチコピー作成センス」３）シェアしたお店の店主など地元キーパーソンと楽しいご縁を結ぶ「メッセージ×友達申請×コメント術」

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

ビジネスコミュニケーションを円滑にする SNS 活用法として、プロフィール作成、記事投稿時の写真撮影・文章作成、友達申請・フォロー、コメント・メッセージの技術や作法を学ぶ。

■授業形態

講義、プレゼンテーション、フィールドワーク

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

毎週の課題（例：通学路の美味しいパン屋）に合わせ、講義前にインスタグラムで魅力的な写真と短い文章で投稿します。講義や優秀投稿記事からの学び（数行程度）を講義ブログや Facebook にコメントします。（1.5 時間）

■授業の概要

第１講　講師紹介とガイダンス：インスタグラムの開設＆活用、講義ブログ＆ Facebook への投稿
第２講　教科書「すぐやる人だけがチャンスを手にいれる」感想発表と SNS 開設＆投稿講座
第３講　スマホでお気に入りのお店やスポットを見つけるコツ
第４講　インスタグラム映えする写真の撮り方と加工法
第５講　記事で紹介した店主などへのメッセージの出し方つながり方
第６講　多くの人の興味を惹くタイトルやキャッチコピーの付け方
第７講　多くの人に検索され見てもらえるハッシュタグの付け方
第８講　Facebook で目立って信用される自己紹介文の作り方
第９講　Facebook 向きのプロフィール写真とカバー写真の撮り方選び方
第 10 講　自分らしさをアピールする独自のこだわりテーマの見つけ方
第 11 講　リアルなおつきあいから SNS へと導く個人名刺の作り方と活用法
第 12 講　就活にも生きる SNS 記事の蓄積法とアピール法
第 13 講　最終レポートと全員１分プレゼンテーションの準備
第 14 講　最終レポート提出と全員１分プレゼンテーション１
第 15 講　最終レポート提出と全員１分プレゼンテーション２

■フィードバックの要領

講義レポートに寄せられた質問については講義とブログで回答する

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：レポート提出とコメント。10 課題期限内投稿（各ベスト３つき）優秀作３本以上
評価 A（89 ～ 80 点）：レポート提出とコメント。10 課題期限内投稿（計 20 以上）優秀作１本以上
評価 B（79 ～ 70 点）：レポート提出とコメント８割以上。10 課題投稿。課題完成とプレゼン
評価 C（69 ～ 60 点）：レポート提出とコメント７割以上。７本以上の課題投稿。課題完成とプレゼン
評価 F（59 点以下）　：上記評価 C の最低条件を満たさない場合

■評価方法

毎回講義中の５分間レポート（20%）　毎回の事前課題：インスタグラム投稿（20%）　毎回の事後課題：講義ブログへのコメント（20%）　期末レポートと課題ページ作成（20%）　最終プレゼンテーション（20%）

■留意点

受講の条件＞1）インスタグラムや Facebook を活用できるスマートフォンを所有していること　2）SNS に自分の顔写真やプロフィールを公開して、記事を実名で発信して自分をブランド化する覚悟があること　3）多摩地域のおいしいお店やおもしろスポットを探して発信する覚悟があること

科目名	ビジネス数学Ⅰ（Business mathematics Ⅰ）
サブタイトル	行列の演算とそのビジネス利用
担当教員	久保田　貴文
対象学年	2 年生以上
区分	春学期

■講義目的
ビジネスの現場で使える数学の基礎的な実力，特に，数学で物事を考える力を養います。

■講義分類
ビジネスマネジメント、社会人力育成、ビジネス ICT

■到達目標
ビジネスに利活用できる数的処理力、またグループワークを通して協業力や情報収集力を養う。また、関数等を活用したエクセルのスキルやそれをレポートとしてまとめるためのワードのスキルを養う。データ分析を用いてマーケティング戦略の立案と提案するための数学の基礎力をつけ、自ら問題を設定し数的処理により解決できるように学修する。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項
DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細
ビジネスの中で最低限必要な基礎的な数学の思考力を基に，課題解決に向けたプロセスを明確にすることが出来る。

■授業形態
講義、グループディスカッション、グループワーク

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容
初回までに，四則演算，割合の計算等、特に、ビジネス数学基礎の内容を復習のこと。また各授業においては，内容についての復習（1.5 時間），次回内容について予習（1.5 時間）を実行すること。

■授業の概要
第 1 講　オリエンテーション
第 2 講　線形独立と線形従属
第 3 講　行列の定義と基本の計算
第 4 講　行列の積
第 5 講　行列の積・演習
第 6 講　逆行列
第 7 講　連立 1 次方程式
第 8 講　行列の階数（ｒａｎｋ）
第 9 講　中間試験
第 10 講　中間試験の解答・前半のまとめ、後半のオリエンテーション
第 11 講　連立 1 次方程式・逆行列，第 1 回レポート
第 12 講　行列式，第 2 回レポート
第 13 講　行列式の性質，第 3 回レポート
第 14 講　余因子展開，第 4 回レポート
第 15 講　クラメールの公式と行列式，第 5 回レポート

■フィードバックの要領
課題や試験等に対してフィードバックを行う。

■評価基準
評価 A+（90 点以上）：中間試験の点数とレポート点の合計点で 90 点以上
評価 A（89 ～ 80 点）：中間試験の点数とレポート点の合計点で 80 点以上 89 点以下
評価 B（79 ～ 70 点）：中間試験の点数とレポート点の合計点で 70 点以上 79 点以下
評価 C（69 ～ 60 点）：中間試験の点数とレポート点の合計点で 60 点以上 69 点以下
評価 F（59 点以下）　：中間試験の点数とレポート点の合計点で 59 点以下

■評価方法
中間試験 50 点、レポート 50 点。10 回以上出席した者（もしくは欠席回数が 5 回未満の者）に対して評価を行う。

■留意点

科 目 名　ビジネス数学 II（Business mathematics II）

サブタイトル　ビジネスのための微分・積分入門

担当教員　今泉　忠

対象学年　2 年生以上　　区分　秋学期

■講義目的

経営上では，情報を活用して，未来の状態を予測し，そこで発生するで問題を事前に対応できるようにすることは重要である。
本講義では、ビジネス課題の解決のために数学的知識を用いたモデル構築のための基礎としての、数学的な考察およびモデルの構築を目指し、関数の概念とその応用、微分積分の概念と応用について、基礎的な概念についての理解と実際の計算方法についての習得を目指す。
できるだけ，実際での問題解決のための数学と位置づけて講義を行う。

■講義分類

社会人力育成、ビジネス ICT

■到達目標

（1）初等関数について微分積分を理解して行える　（2）多変数関数の微分を理解して行える　（3）関数近似について理解して行える

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

DP1 知識と理解：ビジネスの中で必要な基礎的な学力を養い，産業社会での問題を数学モデルを用いて理解する

■授業形態

講義、グループワーク

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

各講義回において出される経営に関する実際の問題を次回までに解いて整理しておくことが求められる。問題の理解と解を求め整理する時間としては１．５時間以上必要となるので余裕も持って準備すること。

■授業の概要

第１講　グラフから学ぶ
第２講　グラフから学ぶ II
第３講　微分の基本となる差分について講義する
第４講　基本的な関数の微分法
第５講　合成関数の微分法
第６講　合成関数の微分法　演習
第７講　テラー展開
第８講　テラーの公式
第９講　最適化問題
第 10 講　最適化問題 II
第 11 講　不定積分の基本
第 12 講　不定積分の基本　II
第 13 講　置換積分と部分積分
第 14 講　多変数関数と偏微分
第 15 講　まとめ

■フィードバックの要領

リフレクションシートにより行う

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：学習した内容について理解して実際の問題に適用し、解を求めることができる。
評価 A（89 ～ 80 点）：学習した内容について理解して解を求めることができる。
評価 B（79 ～ 70 点）：学習した内容について理解して少なくとも２つの内容に関する解を求めることができる。
評価 C（69 ～ 60 点）：学習した内容について理解して少なくとも１つの内容に関する解を求めることができる。
評価 F（59 点以下）　：学習した内容について理解が不十分で解を求めることができない。

■評価方法

通常の課題等による平常点（60%）と学期末の試験結果（40%）により総合評価

■留意点

科 目 名 ビジネス戦略Ⅰ（Business Strategy Ⅰ）

サブタイトル 「徹底したグループワーク」で、超実践的に、ビジネス戦略の基本を身につける

担当教員 志賀　敏宏

対象学年 ２年生以上　　**区分** 春学期

■講義目的

①ビジネス戦略の基本（ひとつひとつの事業の成功のために必要なこと）を学ぶ
②事例研究、グループワーク、プレゼンテーションというアクティブラーニング手法を通じて学ぶ
③結果として、受講生はビジネスに関する思考力、知識の応用力、プレゼン力を身につける

■講義分類

顧客理解、ビジネス環境理解、ビジネス創造

■到達目標

皆さんが「グループワーク」での資料作成、プレゼン、質疑応答を通じて、基礎的な学力を養うこと。合せて課題発見力、自ら論理的に考える力、発言力、討論する力をつけること。必ず「就活の強力な武器」となります。この目標に共感する人、高い志をもって、【努力することを強く約束できる人】が履修登録、受講して下さい。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

成功要因に関する思考力を高め、自ら調べた情報を基に成功要因に関する判断力（優先順位付け）を養う。

■授業形態

グループワーク（PowerPoint による資料作成）、プレゼンテーション

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

グループワークでの資料収集と発表資料作成、授業中のノートでの復習が必須です。全員が、どこかのグループメンバーとなり、最少二回の発表を担当します。各回平均１．５時間程度の予習・復習が必須です。

■授業の概要

第１講　オリエンテーション。本授業の進め方を説明、グループ決定、発表テーマを選びます。
第２講　事例研究の進め方説明。グループ、担当テーマの確定。
第３講　「テーマ：地域ビジネス」のグループワークの「プレゼンテーション」
第４講　「テーマ：宅配便ビジネス」のグループワークの「プレゼンテーション」
第５講　「テーマ：テーマパークビジネス」のグループワークの「プレゼンテーション」
第６講　「テーマ：スマフォビジネス」のグループワークの「プレゼンテーション」
第７講　「テーマ：ファッションビジネス」のグループワークの「プレゼンテーション」
第８講　「テーマ：観光ビジネスまたはウェディングビジネス」の「プレゼンテーション」
第９講　「テーマ：インテリア・雑貨ビジネス」のグループワークの「プレゼンテーション」
第 10 講「テーマ：乗用車ビジネス」のグループワークの「プレゼンテーション」
第 11 講「テーマ：コンビニビジネス」のグループワークの「プレゼンテーション」
第 12 講「テーマ：ネット通販ビジネス」のグループワークの「プレゼンテーション」
第 13 講「テーマ：カフェビジネス」のグループワークの「プレゼンテーション」
第 14 講「テーマ：アイドルグループビジネス」のグループワークの「プレゼンテーション」
第 15 講　全授業のまとめ（場合により授業内期末テスト）

■フィードバックの要領

フィードバックは、口頭（授業中）、文書添削等（レポート、ノート）で行います。

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：下記の評価方法と配分に従って 90 点以上
評価 A（89 ～ 80 点）：下記の評価方法と配分に従って 80 点以上、89 点以下
評価 B（79 ～ 70 点）：下記の評価方法と配分に従って 70 点以上、79 点以下
評価 C（69 ～ 60 点）：下記の評価方法と配分に従って 60 点以上、69 点以下
評価 F（59 点以下）　：下記の評価方法と配分に従って 59 点以下

■評価方法

出席25点。プレゼンテーション35点。授業中の発言等15点。期末レポートまたはテスト結果を上記に加点し100点満点。本科目の到達目標に照らして評価。私語等によっては減点、受講停止を求めます。

■留意点

1. 次の３点の約束を守れる人が履修して下さい。①グループワークで努力する人②私語・遅刻等で迷惑をかけない人③他グループの発表を真剣に聞きノートをとる人。守れない場合は受講停止を求めることがあります。2.T-NEXT の連絡を見落とした場合は成績に関する異議を受け付けません。3. 受講を停止する際は必ず履修削除して下さい。皆さんが就活時に成績で不利にならないためです。

科目名	ビジネス戦略 II（Business Strategy II）
サブタイトル	「徹底したグループワーク」で超実践的にビジネス戦略の「企業の存続法」を身につける
担当教員	志賀　敏宏
対象学年	2 年生以上
区分	秋学期

■講義目的
①ビジネス戦略の内、企業の生き残り戦略として「多角化・新事業、イノベーション、海外展開」を学ぶ
②事例研究、グループワーク、プレゼンテーションというアクティブラーニング手法を通じて学ぶ
③結果として、受講生はビジネスに関する思考力、知識の応用力、プレゼン力を高める

■講義分類
顧客理解、ビジネス環境理解、ビジネス創造

■到達目標
皆さんが「グループワーク」での資料作成、プレゼン、質疑応答を通じて、基礎的な学力を高めること。合せて課題発見力、自ら論理的に考える力、発言力、討論する力を高めること。必ず「就活の強力な武器」となります。この目標に共感する人、高い志をもって、【努力することを強く約束できる人】が履修登録、受講して下さい。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項
DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細
成功要因に関する思考力を高め、自ら調べた情報を基に成功要因に関する判断力（優先順位付け）を養う。

■授業形態
グループワーク（PowerPoint による資料作成）、プレゼンテーション

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容
グループワークでの資料収集と発表資料作成、授業中のノートでの復習が必要です。全員が、どこかのグループメンバーとなり、最少二回の発表を担当します。各回平均 1.5 時間程度の予習・復習が必須です。

■授業の概要
第 1 講　オリエンテーション。本授業の進め方を説明、グループ決定、発表テーマを選びます。
第 2 講　事例研究の進め方説明。グループ、担当テーマの確定。
第 3 講　「テーマ：多角化ー得意な技術の活用」のグループワークのプレゼンテーション
第 4 講　「テーマ：多角化ー大手飲料業界の事業領域拡大」のプレゼンテーション
第 5 講　「テーマ：多角化ー余った資源の活用」のプレゼンテーション
第 6 講　「テーマ：多角化ー大手衛生用品業界の事業領域拡大」のプレゼンテーション
第 7 講　「テーマ：大型の機械系イノベーション」のプレゼンテーション
第 8 講　「テーマ：一芸家電のプチイノベーション」のプレゼンテーション
第 9 講　「テーマ：大型サービスのイノベーション」のプレゼンテーション
第 10 講「テーマ：ニーズ対応のプチイノベーション」のプレゼンテーション
第 11 講「テーマ：大型ハイテクイノベーション」のプレゼンテーション
第 12 講「テーマ：サービス産業の海外展開」のプレゼンテーション
第 13 講「テーマ：製造業の海外展開」のプレゼンテーション
第 14 講「テーマ：食品・飲料業界の海外展開」のグループワークのプレゼンテーション
第 15 講　全授業のまとめ（場合により授業内期末テスト）

■フィードバックの要領
フィードバックは、口頭（授業中）、文書添削等（レポート、ノート）で行います。

■評価基準
評価 A+（90 点以上）：下記の評価方法と配分に従って 90 点以上
評価 A（89 ～ 80 点）：下記の評価方法と配分に従って 80 点以上 89 点以下
評価 B（79 ～ 70 点）：下記の評価方法と配分に従って 70 点以上 79 点以下
評価 C（69 ～ 60 点）：下記の評価方法と配分に従って 60 点以上 69 点以下
評価 F（59 点以下）　：下記の評価方法と配分に従って 59 点以下

■評価方法
出席 25 点。プレゼンテーション 35 点。授業中の発言等 15 点。期末レポートまたはテスト結果を上記に加点し 100 点満点。本科目の到達目標に照らして評価。私語等によっては減点、受講停止を求めます。

■留意点
1. 次の 3 点の約束を守れる人が履修して下さい。①グループワークで努力する人②私語・遅刻等で迷惑をかけない人③他グループの発表を真剣に聞きノートをとる人。守れない場合は受講停止を求めることがあります。2.T-NEXT の連絡を見落とした場合は成績に関する異議を受け付けません。3. 受講を停止する際は必ず履修削除して下さい。皆さんが就活時に成績で不利にならないためです。

科目名	ビジネス法（Business Law）		
サブタイトル	なし		
担当教員	王　佳子		
対象学年	2 年生以上	区分	秋学期

■講義目的
本講義は、企業が行うさまざまな活動に関わる法律の中で、会社法、労働法、サイバー法に親しむことによって、法的観点から企業の行うさまざまな活動を認識できるようにすることを目的とする。会社法は、企業の根幹にかかわる法律である。会社法を通して、企業がどのように設立され、運営され、資金調達をしていき、規模を拡大していくかを勉強していく。労働法は、労働者と使用者の関係を調整する法体系である。労働法を通して、労働者と使用者が遵守すべき労働基準にはどのようなものがあるか、そのような労働基準をどのように労働契約に反映させるか取り入れるべきか、労使関係の調整において労働組合がどのような機能を果たしていくかを勉強していく。サイバー法は、サイバーセキュリティに関する公的部門や民間部門の責務を明確にするための法体系である。サイバー法を通して、国、地方公共団体、重要社会基盤事業者、サイバー関連事業者、教育研究機関等に要求される情報保護の枠組みを勉強していく

■講義分類
ビジネス環境理解、ビジネスマネジメント、ビジネス ICT

■到達目標
条文や重要な判例の習得や、具体的な事例の検討に伴う応用を通して、会社法、労働法、サイバー法の法体系を理解する。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項
DP1　知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細
ビジネス法に関する基礎的な学力を養い、企業の行うさまざまな活動を法的に見る能力を習得する。

■授業形態
講義、グループディスカッション

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容
授業の最後に出す課題について、講義内容や授業中に配布した資料等を参照してリアクションペーパーを作成し提出すること。

■授業の概要
第 1 講　ビジネス法総論
第 2 講　会社の設立（発起設立、募集設立、発起人の責任）
第 3 講　コーポレートガバナンス（機関設計）
第 4 講　コーポレートガバナンス（株主総会）
第 5 講　コーポレートガバナンス（取締役・取締役会）
第 6 講　コーポレートファイナンス（株式・新株予約権、社債）
第 7 講　コーポレートファイナンス（計算）
第 8 講　M&A（友好的買収）
第 9 講　M&A（敵対的買収）
第 10 講　労働法（内定、非正規雇用）
第 11 講　労働法（賃金、労働時間）
第 12 講　労働法（安全と衛生）
第 13 講　労働法（労働組合）
第 14 講　労働法（労働者の配置と異動）
第 15 講　サイバー法（サイバーセキュリティ基本法や個人情報保護法制）

■フィードバックの要領
リアクションペーパーに対して、コメントを記入してフィードバックを行う。

■評価基準
評価 A+（90 点以上）：会社法、労働法、サイバー法の法体系をほぼ完璧に理解している。
評価 A（89 ～ 80 点）：会社法、労働法、サイバー法に関する基礎理解力も応用力も一応できている。
評価 B（79 ～ 70 点）：会社法、労働法、サイバー法に関する基礎理解力ができているが、応用力に欠ける。
評価 C（69 ～ 60 点）：会社法、労働法、サイバー法の法体系に関する基礎理解力がかろうじてできている。
評価 F（59 点以下）　：会社法、労働法、サイバー法の法体系をほぼ理解できていない。

■評価方法
リアクションペーパー（20%）、期末定期試験（80%）

■留意点
なし

科目名	プログラミング入門Ⅰ（Introduction to Programming Language Ⅰ）
サブタイトル	Programming for Beginners Ⅰ
担当教員	彩藤　ひろみ
対象学年	2年生以上
区分	春学期

■講義目的
本講義は、いずれ何らかのプログラミング言語で、自ら構想したアルゴリズムをコンピュータに実装可能になるまでの第一歩を学ぶ。問題解決するための解法を考えて、一つ一つ実行させることが重要である。すべての人がコーディングを理解することが必要だ、という考え方が、アメリカでは広がっている。そのための支援団体も多い。ここでは、コンピュータにどうやってこちらの考えを伝えるのか、そのアルゴリズムを学び、実践してみる。

■講義分類
ビジネス ICT

■到達目標
アルゴリズムの理解、プログラミングの組み立て、ステップ単位の実行とフィードバックの理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項
DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細
課題解決に向けたプロセスを明らかにして準備できる計画力、課題に対して新たな価値や解決方法を生み出せる創造力を修得する。

■授業形態
講義、演習

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容
Code.orgのチュートリアルを順番にやる。予習に1.5時間以上、復習に1.5時間以上かかる。わからないところは飛ばして、後でもう一度挑戦すること。

■授業の概要
第１講　Code.org でコーディングの楽しさを知る
第２講　Code で学ぶ、ステップ実行
第３講　アルゴリズムの理解その１
第４講　アルゴリズムの理解その２
第５講　プログラミングの最初の一歩
第６講　中間確認日
第７講　センサーの導入　アイディアソン
第８講　センサーの導入アイディア発表
第９講　ペッパー君のプログラミング
第 10 講　センサーとペッパー君あるいはロボットの未来
第 11 講　グラフィック表示をさせる
第 12 講　グラフィック表示を使って画像を作る
第 13 講　自由課題への取り組みその１
第 14 講　自由課題への取り組みその２
第 15 講　期末テスト：全体を通して期末テストを行う。

■フィードバックの要領
毎回の演習の進捗を確認し、正しい解法や考え方をフィードバックする。

■評価基準
評価 A+（90 点以上）：ほぼ完ぺきな理解度と評価
評価 A（89 ～ 80 点）：上位の評価
評価 B（79 ～ 70 点）：中位の評価
評価 C（69 ～ 60 点）：下位の評価
評価 F（59 点以下）　：不十分な理解度と評価

■評価方法
学期末試験 50%　レポートなど平常点 50%

■留意点
①プログラミング言語の学習においては、面倒がらずに自分でプログラムを打ち、実行して確認していくことが重要である。いろいろなエラーを経験すること、つ まり失敗することが、成功すること以上に意味を持っている。わからないことは、できるだけ授業中に質問して解決するように心がけよう。②授業には毎回各自のノート PC を必ず持ってくること。③課題や試験等に対してはフィードバックを行うので、確認すること。

科目名	プログラミング入門 II（Introduction to Programming Language II）
サブタイトル	Java 言語によるプログラミング入門
担当教員	中村　有一
対象学年	2 年生以上
区分	春学期

■講義目的

本講義は、Java 言語によるプログラミングの入門コースである。将来 SE などを目指し、職業的なプログラミング技術を身につけたい学生には、この科目を 受講することを強く勧める。Java 言語は、最近広く普及しているプログラミング言語であり、この言語を一通り習得していると、さまざまな場面で役に立つ。また「情報処理技術者試験」などの資格試験を受ける場合にも有効である。
授業は、基礎的なプログラミングの構造の説明と、その演習の繰り返しで行っていく。単元ごとにレポートの提出を求めるため、各自、空き時間にはしっかりと復習をすることが必要である。

■講義分類

ビジネス ICT

■到達目標

Java 言語を一通り使いこなせるようになることが最終目標である。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

Java 言語を基礎から学ぶことにより、プログラミング言語に特有の知識を身に着け、将来 SE などの職種で活躍できるようにする。

■授業形態

講義、演習

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

予習：講義資料を読んでできるだけ理解し、わからない部分は整理しておく。（1．5時間）　復習：資料をもう一度読みなおし、理解できたか確認する。ミニテストなどの結果を振り返る。（1．5時間）

■授業の概要

第 1 講　Java 言語入門：プログラム・プログラミング・プログラミング言語
第 2 講　開発環境の整備：Java の開発環境を整備し、使い方を学ぶ。
第 3 講　入出力と変数：変数名のつけ方、変数の型
第 4 講　四則演算と代入：計算式の書き方
第 5 講　枝分かれ：if 文と switch 文の違い
第 6 講　for 文による繰り返し：回数が決まっている繰り返し、漸化式
第 7 講　while 文、do while 文による繰り返し：条件が成り立っているあいだ繰り返しを行う構文
第 8 講　配列：規則的に並んだデータを扱う場合に使われるデータ構造
第 9 講　関数：ひとまとまりの処理に名前を付け部品として呼び出す
第 10 講　GUI の利用：GUI 機能を使ったプログラミング手法
第 11 講　乱数とグラフィクス：Java における乱数生成とグラフィクス機能
第 12 講　タイマーとサウンド：Java におけるタイマーとサウンド出力の機能
第 13 講　イベント処理：Java におけるイベント処理の機能を取り上げる。
第 14 講　レポート作成：ある程度の大きさの実用的なプログラムを作成する。
第 15 講　レポート作成：ある程度の大きさの実用的なプログラムを作成する。

■フィードバックの要領

ミニテスト、演習などについて、答え合わせ、講評などのフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：ほぼ完ぺきな理解度と評価
評価 A（89 ～ 80 点）：上位の評価
評価 B（79 ～ 70 点）：中位の評価
評価 C（69 ～ 60 点）：下位の評価
評価 F（59 点以下）　：不十分な理解度と評価

■評価方法

学期末試験 50%　レポートなど平常点 50%

■留意点

①プログラミング言語の学習においては、面倒がらずに自分でプログラムを打ち、実行して確認していくことが重要である。いろいろなエラーを経験すること、つまり失敗することが、成功すること以上に意味を持っている。わからないことは、できるだけ授業中に質問して解決するように心がけよう。②授業には、毎回各自のノート PC を必ず持ってくること。

科 目 名　プログラミング入門 III（Introduction to Programming Language III）

サブタイトル　Python プログラム入門

担当教員　今泉　忠

対象学年　2 年生以上　　区分　秋学期

■講義目的

この講義ではプログラム言語【Python】について学ぶ。Python は、オブジェクト指向、命令型、手続き型、関数型などのスタイルでプログラムを書くことができる。開発効率が高く、フリーの優秀なフレームワークや開発環境が揃っている。何らかのプログラミング言語で、自ら構想したアルゴリズムの実装が可能になりたいなどの将来 SE などを目指し、職業的なプログラミング技術を身につけたい学生やには、この科目を受講することを強く勧める。
本講義の前半では順次処理、分岐処理、繰り返し処理について学び、Python のコーディングスキルを確かなものにする。後半では、データの作成や集計、並び替えのプログラミングを実践して、データを処理するアルゴリズムの基礎について理解を深める。
自分の頭で考えて、アイディアを表現する力を身につける。

■講義分類

ビジネス ICT

■到達目標

Python のプログラミングと、アルゴリズムの基礎を身につけることを目指す。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

DP 2: ビジネス環境で必須の課題解決のためのプログラミング力を修得する

■授業形態

講義

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

講義で課されたプログラム課題について次回までに実行し確認しておくこと。
プログラムの説明なども記入するので復習時間として 1.5 時間以上必要となるので余裕を持って行うこと。

■授業の概要

第 1 講　開発環境の確認と入出力
第 2 講　Google Drive のセットアップと復習
第 3 講　四則演算と余りの復習
第 4 講　if 文について
第 5 講　if 文の復習と計算機の開発
第 6 講　関数入門
第 7 講　関数応用
第 8 講　乱数の生成と繰り返しと配列を復習して、検索アルゴリズムを学ぶ
第 9 講　乱数の生成と繰り返しと配列を復習して、検索アルゴリズムを学ぶ
第 10 講　ファイルの入出力と合計、平均を学ぶ
第 11 講　ファイルの入出力と合計、平均を学ぶ
第 12 講　最小値、最大値を探すプログラムの開発
第 13 講　並び替えプログラムの開発
第 14 講　並び替えプログラムの開発
第 15 講　学期末レポート

■フィードバックの要領

リフレクションシートにより行う

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：出席、課題、テストを総合して、90% 以上の高得点を獲得している。
評価 A（89 ～ 80 点）：Python の応用的なプログラムを書くことができる。
評価 B（79 ～ 70 点）：Python の簡単なプログラムを書くことができる。
評価 C（69 ～ 60 点）：Python のプログラムを読んで理解することができる。
評価 F（59 点以下）　：出席数が足りない。あるいは、基本的な Python の文法が理解できていない。

■評価方法

日常課題 50%、期末テスト 50%。出席が 80% を満たさない場合は減点する。

■留意点

・デザインワークショップ I の内容を理解していることを前提とする。・講義と日常の課題を通して、Python を身につける努力をしたかを学期末レポートで問う。出席や日常課題だけでは単位はとれません。

科目名　ベンチャー企業論（Venture Company Theory）

サブタイトル　企業家精神の習得
担当教員　小林　英夫
対象学年　2 年生以上　区分　秋学期

■講義目的
付加価値や雇用の創出においてベンチャー企業の果たす役割は非常に大きい。また、ベンチャー企業を興し発展させていくことを司る精神ー企業家精神ーは、創業に携わるかどうかにかかわらず、創造的なビジネス活動を行っていく上で重要なものである。本講義では、組織のマネジメントとそれを支える行動規範としての企業家精神について包括的に学ぶとともに、現在活躍中の企業家や事業家の生き方を知ることを通じて、ベンチャー企業の経営やベンチャー企業への参画について学び、自らのライフマネジメントについて考える。

■講義分類
ビジネス創造、ビジネスマネジメント、グローバルビジネス

■到達目標
①ベンチャーと企業家精神とは何かを理解することを通して、自らのキャリアデザインを考えられるようになる、②事業立ち上げや発展に必要な知識を習得し、事業創業や急成長時に特有の課題や戦略を理解する、③ベンチャー企業創造につながるアイディアを発見し、それを具体化させられるようになる、の３点を到達目標とする。これを通じ、社会発展に貢献する力や高い志を身につける。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項
DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細
ベンチャー参画を通じキャリアを築いていくことを自らの選択肢とすることができる。

■授業形態
講義　グループディスカッション　ディベート

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容
授業前に、事前学習ポイントを調べ、T-NEXT 上の授業資料に目を通し疑問点を明確にする（1.5 時間）。授業後に、事前学習の疑問点解消を確認し、未解消の項目は自己調査や教員質問等で解消する（1.5 時間）。

■授業の概要
第 1 講　起業活動の意義
第 2 講　ベンチャーと企業家精神
第 3 講　ベンチャーを通じたキャリア形成
第 4 講　起業プロセス
第 5 講　事業計画の立案
第 6 講　学生起業
第 7 講　就業後起業
第 8 講　リーンスタートアップとピボット
第 9 講　女性起業家
第 10 講　米国の起業家
第 11 講　資金調達とインキュベーション
第 12 講　カリスマ的起業家
第 13 講　中小企業からベンチャーへの転換
第 14 講　企業家精神の展望
第 15 講　学習成果の確認ー授業内期末試験

■フィードバックの要領
毎回提出のコメントシートの講評と質問・意見への回答・コメントを翌回講義で行う。

■評価基準
評価 A+（90 点以上）：授業貢献点と期末試験の合計が 90 点以上
評価 A（89 ～ 80 点）：授業貢献点と期末試験の合計が 80 点以上 90 点未満
評価 B（79 ～ 70 点）：授業貢献点と期末試験の合計が 70 点以上 80 点未満
評価 C（69 ～ 60 点）：授業貢献点と期末試験の合計が 60 点以上 70 点未満
評価 F（59 点以下）　：授業貢献点と期末試験の合計が 60 点未満

■評価方法
授業貢献点（59 点）、期末試験（41 点）。授業貢献点は単なる出席点ではなく、授業を聴き自ら考えたかを評価する。期末試験は、ベンチャー企業に関する知識と、企業家精神を通じた事業構想活動の理解度を評価する。

■留意点
授業貢献点は単なる出席点とは異なる。毎回の授業においてコメントシートの提出を求め、その内容を A（授業を聴き良い気づきがあった）、B（授業を聴いていた）、C（授業を聴いていたとは思われない）の 3 段階評価し授業貢献点とする。A は加点対象（6 点）、B が標準（4 点）、C は減点（-4 点）、欠席は 0 点。授業の受講態度が悪い場合は欠席以下の評価となる。授業貢献点は最大 59 点。

科 目 名　マーケティング・データ分析（Marketing Data Analysis）

サブタイトル　R を用いた統計分析の基礎

担当教員　後藤　晶

対象学年　2 年生以上　　区分　秋学期

■講義目的

よりよいサービスを提供するためには，顧客のニーズを把握することが必要である．そのための手段として，定量的なデータに基づいたサービスのあり方の検討は，今の時代では必要不可欠である．この授業では，マーケティングリサーチで得た知識を元に，社会統計データおよび調査・実験データを多角的な観点から表現・分析する能力を学ぶ．幅広い社会統計データに関する分析を目的とするが，あわせて，意思決定やゲーム理論の観点から，人間行動や社会行動に対する理解をも目的とする．そのために人間行動や社会行動に関する調査や実験をパソコンで行いながら、フリーの統計ソフトである R を用いてデータを分析するという実践的な知識獲得を目指す．特に，この講義では記述統計量・データの可視化・シミュレーションおよび推測統計学の基礎を学ぶことを目標とする．なお，本科目は社会調査士認定科目 C に指定されている．

■講義分類

顧客理解，社会人力育成，ビジネス ICT

■到達目標

1. フリーの統計ソフトである R を用いて記述統計量をまとめることができる． 2. フリーの統計ソフトである R を用いてデータの可視化およびシミュレーションを実施することができる．3. 公的統計や調査報告書を読み解くことができる．4. 一般線形モデルの基本的な考え方を理解することができる．5. 仮説を立てたうえで，記述統計料の算出からデータの可視化，そして基本的な統計的仮説検定までを実施し，報告書としてまとめることができる．

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

データ分析に関わる基礎的な知識を理解した上で，正しくデータを分析し，他者に説明する能力を身につける．

■授業形態

講義・グループワーク

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

毎回の授業に際して 30 分程度の予習を課す．さらに，復習及び演習課題について 1 時間程度の復習を課す．

■授業の概要

第 1 講　イントロダクション
第 2 講　R・RStudio のインストールとデータの読み込みと記述統計量の基礎
第 3 講　R による基礎計算 1：1 変数による記述統計量 1
第 4 講　R による基礎計算 2：1 変数による記述統計量 2
第 5 講　R による基礎計算 3：2 変数による記述統計量 1
第 6 講　R による基礎計算 4：2 変数による記述統計量 2
第 7 講　統計資料の読み取りと拡張パッケージのインストール
第 8 講　中間問題演習
第 9 講　R による可視化 1：可視化技術の応用
第 10 講　母集団と標本：
第 11 講　標本抽出と R による確率分布のシミュレーション：
第 12 講　一般線形モデルと仮説検定 1：一般線形モデルの考え方と回帰分析
第 13 講　一般線形モデルと仮説検定 2：t 検定
第 14 講　統計分析結果のまとめ方：
第 15 講　最終問題演習

■フィードバックの要領

中間問題演習ならびに最終問題演習に対して，オンライン上でフィードバックを行う．

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：平常点，中間問題演習，最終問題演習のいずれもが顕著に優れており合計点が 90 点である
評価 A（89 ～ 80 点）：平常点，中間問題演習，最終問題演習が優れており，合計点が 80 点以上である．
評価 B（79 ～ 70 点）：平常点，中間問題演習，最終問題演習が十分に良く，合計点が 70 点以上である．
評価 C（69 ～ 60 点）：平常点，中間問題演習，最終問題演習において，合計点が 60 点以上である．
評価 F（59 点以下）　：平常点および 2 回の問題演習の合計が 60 点未満か，他の履修者の勉学を妨げている．

■評価方法

平常点：30%：毎回の講義における履修状況および授業内演習の提出状況等を評価する．中間問題演習：20%：第 8 講に実施する問題演習での得点を評価する．最終問題演習：50%：学期末に実施する最終問題演習を評価する．

■留意点

1. 履修状況に応じて，内容を変更することがある．2. この授業ではパソコンを用いた実験･調査を行い，授業資料は web での配信を予定している．したがって，授業の際には配布された端末を十分に充電して持参すること．なお，端末を忘れた場合には欠席扱いにするので気をつけること．3. Google Classroom を用いて連絡を行うために随時確認すること．4. 社会調査士科目のため、第 1 ～ 7、10、11、14、15 講には「基本的な資料とデータの分析」の内容を含む．

科目名	マーケティングリサーチ（Marketing Research）
サブタイトル	基礎からはじめるマーケティングリサーチ
担当教員	加藤　みずき
対象学年	2 年生以上
区分	春学期

■講義目的

初めてマーケティングリサーチに関して学ぶ人を主な対象とし，消費(者)行動に焦点を当てながら，マーケティングリサーチの必要性，活用の仕方を理解する。また，統計の基礎的な知識および分析法（具体的には，データの数値要約，サンプリング法，相関，t 検定，回帰分析など）や質問紙の作成法を修得した上で，それらの統計的手法を用いたマーケティングリサーチの調査計画の立て方を学ぶ。

■講義分類

顧客理解　ビジネス環境理解

■到達目標

基礎的な統計の知識を活用し，身近な消費行動を数値で表すための適切なデータ収集計画を立てることができる。収集したデータについて適切な手法を用いて分析し，結果を正しく解釈した上で，報告書の形でわかりやすくまとめることができる。授業で学んだ統計手法を組み合わせて応用的な調査計画を立てることができる。授業で扱う知識や技能の修得において，班のメンバーと協同し，メンバー全員の理解度を高めることに貢献できる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

提示されたデータについて，目的に沿った分析方法を考え，解釈することができるようになる。

■授業形態

グループディスカッション
グループワーク
プレゼンテーション
双方向

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

シラバス記載の事前，事後学習ポイントの詳細については前の授業で指示するので事前に調べてくること。その他，各班が作成した調査に回答し，得られたデータを集計することも行う。

■授業の概要

第 1 講　＜第 1 講＞ガイダンス・代表値の使い分け方
第 2 講　＜第 2 講＞協同学習の基本原理・平均値と標準偏差，正規分布の理解
第 3 講　＜第 3 講＞二つの平均値には差があると言えるか①：統計的検定の基本的な考え方
第 4 講　＜第 4 講＞二つの平均値には差があると言えるか②：t 検定の実施と解釈
第 5 講　＜第 5 講＞二つの平均値には差があると言えるか③：班で調査計画案を考える
第 6 講　＜第 6 講＞二つの変数間の関連を見る①：相関の基本的な考え方
第 7 講　＜第 7 講＞二つの変数間の関連を見る②：相関分析の実施と結果の解釈
第 8 講　＜第 8 講＞二つの変数間の関連を見る③：班で調査計画案を考える
第 9 講　＜第 9 講＞二つの変数間の関連を見る④：データを分析し，報告書をまとめる
第 10 講　＜第 10 講＞その他のさらなる分析：回帰分析，分散分析
第 11 講　＜第 11 講＞これまでの分析を使って模擬データを分析しよう①：分析方針の決定と分析
第 12 講　＜第 12 講＞これまでの分析を使って模擬データを分析しよう②：結果の解釈とまとめ
第 13 講　＜第 13 講＞調査計画案を作ろう①：与えられたテーマから班で調査計画を立てる
第 14 講　＜第 14 講＞調査計画案を作ろう②：個人で問いから調査計画を立て，最終計画書を作成
第 15 講　＜第 15 講＞統括とまとめ

■フィードバックの要領

翌週の授業で配付する授業通信の中で回答することでフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：各評価対象において，顕著にすぐれた水準に達している
評価 A（89 ～ 80 点）：各評価対象において，到達すべき水準を十分に超えている
評価 B（79 ～ 70 点）：各評価対象において，到達すべき水準に達している
評価 C（69 ～ 60 点）：各評価対象において，十分とは言えないが最低限の水準を満たしている
評価 F（59 点以下）　：本講義で到達すべき水準に達していない

■評価方法

平常点（30%）：授業内課題への記入・提出などを含めた参加点
小テスト（20%）：統計の運用に関する正しい理解の確認のために実施
調査計画書作成課題（50%）：班で練った調査計画案をシートにまとめる。

■留意点

・到達目標にも示したように，グループワークを通して理解を深めることを目指しているため，授業中・授業外ともに積極的な参加を行うことが望ましい。
・本講義は社会調査士取得のための認定科目（B 分野）に該当する。

科 目 名　ヨーロッパ経済論（European Economic）

サブタイトル　ヨーロッパの今を読む

担当教員　田中　理

対象学年　2年生以上　　区分　秋学期

■講義目的

ヨーロッパでは各国・各地域が民族、言語、文化、宗教などの垣根を越え、政治、経済、司法、外交・安全保障など様々な分野で政策の統一や調整を進めている。1950年代に6ヶ国で始まったヨーロッパ統合のプロセスは28ヶ国体制に拡大。単一通貨ユーロの崩壊や解体の危機が叫ばれた債務危機の最中、ヨーロッパ諸国は統合を次のステージに進めることで危機克服を目指した。だが、長引く景気停滞、失業や貧困の増加から、ヨーロッパ市民の間では現状への不満が高まっている。こうした不満の矛先は統合への批判や難民・移民の排斥という形でヨーロッパの各地で噴出している。ヨーロッパは今、統合の求心力を保てるかの岐路に立たされている。本講義では、こうした現在進行形のヨーロッパ情勢と一般的なヨーロッパ経済の教科書に書かれている内容の”橋渡し”を意識し、時事的なトピックを随時取り上げる。

■講義分類

ビジネス環境理解、社会人力育成、グローバルビジネス

■到達目標

ヨーロッパの政治・経済・金融情勢を題材に、国際問題に関する情報収集の力を磨き、それを整理し、分かりやすく伝える能力を身に付けることを目指す。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

ヨーロッパの現代的な課題を通じて、国際問題をみる目を養う。

■授業形態

講義。但し、履修者数次第でグループワークやプレゼンテーション。

■準備学習の時間（予習・復習等1.5時間以上）及び具体的な内容

予習：過去1週間に新聞、雑誌、テレビなどで取り上げられたヨーロッパに関連するニュースに目を通しておく（15分/日×7日＝約100分）。復習：授業資料で意味の分からない言葉について調べる（約100分）。

■授業の概要

第1講　欧州経済・欧州通貨統合の基礎
第2講　英国のＥＵ離脱危機
第3講　欧州債務危機
第4講　欧州の難民危機
第5講　欧州の金融政策
第6講　欧州の政治潮流
第7講　欧州の産業構造・通商政策
第8講　欧州の雇用問題・高齢化
第9講　ドイツの政治・経済
第10講　フランスの政治・経済
第11講　英国の政治・経済
第12講　南欧の政治・経済
第13講　中東欧の政治・経済
第14講　ウクライナ危機
第15講　ロシアの政治・経済

■フィードバックの要領

レポート・試験・課題に対して、コメントを記入してフィードバックを行なう。

■評価基準

評価A+（90点以上）：講義内容を非常によく理解している。
評価A（89～80点）：講義内容をよく理解している。
評価B（79～70点）：講義内容を概ね理解している。
評価C（69～60点）：講義内容の理解で不十分な点がある。
評価F（59点以下）　：講義内容を理解していない。

■評価方法

出席（30%）、中間レポート（30%）、期末レポート（40%）。履修者が少ない場合にはレポートの代わりにグループワークやプレゼンテーションで代替する。

■留意点

レポート執筆にあたって、統計データの入手方法や分析･加工方法を知りたい履修者は、別途指導する機会を設けるので、担当教員に相談すること。

科目名	立志人物伝（Ambitious Person Theory）
サブタイトル	ライフマネジメントを考える
担当教員	久恒　啓一
対象学年	２年生以上
区分	秋学期

■講義目的

ビジネスはコミュニケーション活動によって成り立っており、その活動を担うのは人である。経営資源を束ねる人的資源の重要性はますます高まっている。今後はキャリア形成を含むライフマネジメントの視点から人的資源の活性化を考えながら、組織や経営やビジネスについて考察することが求められる。
この講義においては、近代日本を作った明治期を中心とするわが国の志を実現した偉人の生涯（経営者・政治家・芸術家・作家・ジャーナリスト）の資料や YouTube の映像を題材に、いくつかの切り口―仰ぎ見る師匠の存在、敵との切磋・友との拓磨、持続する志、怒涛の仕事量、修養・鍛錬・研鑽、飛翔する構想力、日本への回帰―を用いて今日の産業社会で生きるための問題解決の知恵について学び、自らの志とキャリアマネジメント、ライフマネジメントについて深く考える力を養う。

■講義分類

ビジネスマネジメント、グローバルビジネス

■到達目標

自身のロールモデルを発見し、最終レポートとしてパワーポイントを用いて「私のロールモデル○○○○の人生鳥瞰図」を作成し、ワードを用いて「私のロールモデル○○○○から学んだこと」をレポートできる力を身につける。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP5 高い志

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

社会の発展に寄与してきた過去の偉人たちの業績と志、そして生き方を知り、自身のキャリア意識の向上を図る。

■授業形態

講義、グループワーク、プレゼンテーション

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

次回に取り上げる予定の偉人について自分なりに調べておくこと。(60 分)、毎回の授業で紹介した YouTube 映像を視る。(60 分)

■授業の概要

第１講　講義「近代日本のわが国の偉人たちのライフマネジメント」
第２講　講義「仰ぎ見る師匠の存在Ⅰ」
第３講　講義「仰ぎ見る師匠の存在Ⅱ」
第４講　講義「敵との切磋、友との拓磨　Ⅰ」
第５講　講義「敵との切磋、友との拓磨　Ⅱ」
第６講　講義「持続する志」
第７講　講義「怒涛の仕事量　Ⅰ」
第８講　講義「怒涛の仕事量　Ⅱ」
第９講　講義「修養・鍛錬・研鑽」
第 10 講　講義「飛翔する構想力」
第 11 講　講義「日本への回帰」
第 12 講　講義「人物モデルの人生鳥瞰図作成Ⅰ」
第 13 講　講義「人物モデルの人生鳥瞰図作成Ⅱ」
第 14 講　講義「人物モデルの人生鳥瞰図作成Ⅲ」
第 15 講　講義「人物モデルの人生鳥瞰図作成Ⅳ」

■フィードバックの要領

毎回提出させるアンケートのまとめを、次回授業で提示し、疑問などに答えていく。

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：全回出席。レポートが特に優れている。
評価 A（89 ～ 80 点）：ほぼ全回出席。レポートが優れている。
評価 B（79 ～ 70 点）：高い出席率。レポートが良い。
評価 C（69 ～ 60 点）：高い出席率。レポートの提出あり。
評価 F（59 点以下）　：低い出席率。レポートの提出なし。

■評価方法

出席　５０点、毎回の提出アンケート　２５点、最終レポート　２５点

■留意点

次回に取り上げる予定の偉人について、自分なりに調べておくことを心がけてもらいたい。講義で興味を持った人物の自伝や伝記を読んでほしい。

科目名　Web サービス開発（Web Service Building）

サブタイトル　JavaScript + Web API
担当教員　出原　至道
対象学年　3 年生以上　区分　秋学期

■講義目的
本講義は、「Web プログラミング」と並んで、開発系科目の最上位に位置づけられる。開発の分野を志す学生にとって、大きな武器となる科目である。「Web プログラミング」がサーバサイドのアプリケーション開発を行うのに対し、本講義では、Web ページに埋め込まれる形で実行されるクライアントサイドアプリケーション開発を実践する。具体的には、ウェブ上で提供されている様々なデータを API（Application Programming Interface）を通してリアルタイムで自動的に収集し、それに基づいたサービスを利用者に提供するアプリケーションを開発する。
講義では、最先端の API を実装実験するため、実際に取り上げる API は変更される場合がある。

■講義分類
ビジネス環境理解
社会人力育成
ビジネス ICT

■到達目標
・クライアントサイドアプリケーションが実装できるようになる。
・XML 形式のデータ構造が理解できる。
・Web API の概念を理解し、自力で自由に使える。
・新しい Web サービス提案ができる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項
DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細
Web API の概念を理解し、自力で自由に使えるようになることで、新しい Web サービス提案ができるようになる。

■授業形態
講義　プレゼンテーション

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容
講義内では、API の概要を説明し、簡単な実験を行う。実装は、各自が次回講義までに行い、課題として提出すること。（1.5 時間）この課題提出がない場合、単位の取得を認めない。

■授業の概要
第 1 講　イントロダクション（基本技術の確認・開発環境の整備）
第 2 講　JavaScript 入門
第 3 講　API に関する基礎知識
第 4 講　Google API を使ってみる
第 5 講　Google Maps API を使う
第 6 講　Graph を使う
第 7 講　ストリートビューの利用
第 8 講　画像 SNS が提供している API を利用する
第 9 講　中間課題作業日
第 10 講　中間作品発表日
第 11 講　その他の API の利用
第 12 講　その他の API の利用
第 13 講　作品準備作業日
第 14 講　最終作品発表会
第 15 講　全講義の復習とまとめ

■フィードバックの要領
試験の模範解答を受講生に公開する。

■評価基準
評価 A+（90 点以上）：数値評価で９０点以上
評価 A（89 ～ 80 点）：数値評価で８０点以上９０点未満
評価 B（79 ～ 70 点）：数値評価で７０点以上８０点未満
評価 C（69 ～ 60 点）：数値評価で６０点以上７０点未満
評価 F（59 点以下）　：数値評価で６０未満

■評価方法
１０回以上の出席、かつ、中間発表・最終発表を前提として、以下の配分で評価する。
授業内レポート（３０%）、作品（２０%）、試験（５０%）

■留意点
原則として、3 年次からの履修を想定している。2 年次生で履修希望する者は、レポート提出による理解度試験（Web デザインⅠ・Ⅱ、Web プログラミング）に合格する必要があるので、あらかじめ相談すること。

科目名	Web プログラミング（Web Programming）		
サブタイトル	サーバサイドプログラミング		
担当教員	出原　至道		
対象学年	3 年生以上	区分	春学期

■講義目的
この講義は、ビジネス ICT の開発系スキルの集大成として、実践を通じて、Web プログラミング環境構築、HTML、CSS、PHP プログラミング、データベースシステムとの連携を習得し、Web プログラミングの全体像を理解することを目的とする。これにより、受講生は、さまざまなシーンで高度に Web を活用して問題解決に資する能力を得ることができ、実社会で高く評価される。
講義には PC を持参すること。受講生の技術レベル・進度に応じて、講義内容を調整することがある。

■講義分類
ビジネス ICT

■到達目標
（1）Web プログラミング環境を構築できる （2）HTML を使った Web ページを作成できる （3）HTML に CSS を組み込んで Web ページを作成できる （4）PHP プログラムを作成できる （5）PHP プログラムにより HTML のフォームを作成し処理できる （6）PHP プログラムによりウェブデータベースシステムが構築できる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項
DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細
さまざまなシーンで高度に Web を活用して問題解決に資する能力を得る。

■授業形態
講義、実習

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容
各回の講義では、実習時間が不十分であるので、各回９０分程度の実習を通して、説明した要素技術について習熟を深めること。

■授業の概要
第 1 講　Web の基礎と環境構築
第 2 講　HTML の基礎（タグの概念）
第 3 講　HTML の基礎（アンカー）
第 4 講　CSS
第 5 講　CSS の応用
第 6 講　PHP の基礎の習得
第 7 講　PHP を使ったプログラムの作成
第 8 講　PHP を使ったプログラムの作成
第 9 講　PHP
第 10 講　PHP と HTML の連携
第 11 講　PHP とデータベース
第 12 講　PHP とデータベース
第 13 講　PHP とデータベース
第 14 講　統合：これまでの知識を統合し実装する
第 15 講　試験

■フィードバックの要領
試験結果の講評をウェブ上で行う。

■評価基準
評価 A+（90 点以上）：数値評価で９０点以上
評価 A（89 ～ 80 点）：数値評価で８０点以上９０点未満
評価 B（79 ～ 70 点）：数値評価で７０点以上８０点未満
評価 C（69 ～ 60 点）：数値評価で６０点以上７０点未満
評価 F（59 点以下）　：数値評価で６０点未満

■評価方法
講義内で複数回出題される課題提出（60%）、試験（40%）。試験は講義の最終回に実施する予定。

■留意点
・コンピュータを持参すること。前提知識として、① Web の使い方、②基礎的なプログラミングの知識・能力を持っていること。扱う内容が多岐にわたり（HTML、CSS、PHP など）、それらの知識を積み上げていく必要があるため、理解が難しいと感じた場合は自ら Web や参考書籍などで調べてフォローする必要がある。

科目名	アジア経済論Ⅰ（Asia EconomyI）
サブタイトル	アジアビジネスと企業戦略、そして起業家精神
担当教員	金　美徳
対象学年	3年生以上
区分	春学期

■講義目的

今や日本企業は、アジア市場に進出するか、アジアのヒト・モノ・カネ・情報を取り込まずにして、生き残れない。換言すれば「ビジネス＝アジア」、「人生＝アジア」の時代と言っても過言でない。
したがって本授業では、アジア経済の体系的な知識・理論やアジアの企業・産業・市場・情勢に関する情報の収集・分析方法を学ぶ。また、「アジア」をキーワードにして、日本企業の戦略・営業・経営企画・ビジネスモデルや日本経済の課題を考える。さらに、アジア経済論Ⅰで学んだことを「いかに就活や起業に活かせるか」をシミュレーションする。
本授業のキーワードは、アジアビジネス、グローバルビジネス、アジア・ユーラシアダイナミズム、アジアマーケティング、外国人観光客（インバウンド）の日本誘致策と新たなサービス、新興国ビジネスモデル、アジアの知恵と日本の知恵の融合、地政学的知と地政学的戦略、アジアマインド、アジアセンス。

■講義分類

グローバルビジネス、ビジネス環境理解、社会人力育成

■到達目標

①アジアの政治外交・経済ビジネス・文化社会に関する基礎的な知識・理論を習得する。②アジア発のビジネス情報の収集力・分析力・発信力を身に付ける。③アジアの潮流・論理・視点に基づく経営戦略力、ビジネスモデル構築力、起業力を身に付ける。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

アジア・ユーラシアダイナミズムに向き合う姿勢や勇気を育み、グローバルビジネスの場で活躍するとともにわが国の産業社会の健全たる発展に貢献できるようになる。

■授業形態

講義、双方向、プレゼンテーション

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

アジア情勢やアジアビジネスに関するニュースやネット情報を調べること（1.5 時間）。授業開始時に 3 ～ 5 名の学生に報告してもらう（30 分）。

■授業の概要

第 1 講　アジア経済論Ⅰガイダンス
第 2 講　アジア・ユーラシアダイナミズムといかに向き合うか（1）
第 3 講　アジア・ユーラシアダイナミズムといかに向き合うか（2）
第 4 講　アジア・ユーラシアダイナミズムといかに向き合うか（3）
第 5 講　ビジネスに重要な平和に対する敏感さ（1）
第 6 講　ビジネスに重要な平和に対する敏感さ（2）
第 7 講　ビジネスに重要な平和に対する敏感さ（3）
第 8 講　日本企業の現状と課題（1）
第 9 講　日本企業の現状と課題（2）
第 10 講　アジア市場とアジア戦略（1）
第 11 講　アジア市場とアジア戦略（2）
第 12 講　アジア市場とアジア戦略（3）
第 13 講　アジア市場とアジア戦略（4）
第 14 講　アジア戦略レポートのテーマ発表①
第 15 講　アジア戦略レポートのテーマ発表②

■フィードバックの要領

レポートのテーマや設定理由について、フィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：出席、毎回提出の講義メモ、最終レポートの合算点が、90% 以上であること。
評価 A（89 ～ 80 点）：出席、毎回提出の講義メモ、最終レポートの合算点が、89 ～ 80% であること。
評価 B（79 ～ 70 点）：出席、毎回提出の講義メモ、最終レポーの合算点が、79 ～ 70% であること。
評価 C（69 ～ 60 点）：出席、毎回提出の講義メモ、最終レポートの合算点が、69 ～ 60% であること。
評価 F（59 点以下）　：出席、毎回提出の講義メモ、最終レポートの合算点が 59% 以下の場合は、不合格とする。

■評価方法

評価は、出席（35%）、毎回提出の講義メモ（35%）、最終レポート（30%）の割合で行う。 ①講義メモは、採点後、講義の最終段階で返却する。 ②最終レポートは、A4 用紙 3 枚以上とする。

■留意点

①携帯電話・パソコンは、使用を禁止する。 ②私語、帽子着用、飲食は、禁止する。 ③遅刻および途中退室は、厳禁とする。途中退室は、必ず入退室を記録（日付・時間・学籍番号・氏名）すること。④就職活動による欠席は、公平性を保つため欠席扱いとする。 ⑤講義メモの不正提出は、即刻、不合格とする。 ⑥最終レポートの不正提出は、不合格とする。

科目名	アジア経済論 II（Asia EconomyII）
サブタイトル	アジアで活躍できる人財を目指そう
担当教員	バートル
対象学年	3 年生以上
区分	秋学期

■講義目的

時代は今、「知」が重要視される知識情報社会となっており、膨大な情報の中から必要な情報を摘出して分析し、未来を洞察していくことが求められている。
本講義では、世界経済の牽引役として、また政治や外交面でも国際的プレゼンスの高まりを見せている中国を中心としながら、大中華圏（中国・台湾・香港・シンガポール）や中国の「一帯一路」構想の最新動向を踏まえ中国の辺境経済圏を立体的かつ複眼的な視点で理解するための基礎知識の習得と知見の広がり、そして日本をめぐる世界潮流、日本企業のビジネス環境を「読む」力の養成を目指す。
具体的には最前線事例を取りあげながら産業社会が求める問題発見能力と問題解決能力及び高度なコミュニケーション能力を備えた人材育成を念頭に置いた講義を行う。受講生は、本講義を通じて習得した知識を自分の将来に向けて活用できるようにすることが求められる。

■講義分類

ビジネス環境理解、ビジネス創造、グローバルビジネス

■到達目標

①中国・大中華圏・中国辺境経済圏のビジネスに関する基礎的な知識の習得。②中国・大中華圏・中国辺境経済圏の特徴と関連企業の経営戦略を分析し、日本企業の新たな経営戦略・ビジネスモデルの立案、企業間の協力の可能性について考える。③講義で習得した知見を就職活動に利活用できるようにする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

中華圏・中国辺境経済圏に関する基礎的な学力を養い、グローバル（中華圏・中国辺境経済圏）とローカル（日本）の関係を意識しながら産業社会に発生する様々な問題に対処していける専門的能力を体系的に修得する。

■授業形態

講義

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

大中華圏や中国の辺境地域に関する時事問題をはじめ、講義内容の中で自分自身が関心をもつ分野についての情報の収集、分析、調査を行う習慣をつけること。上記準備学習に要する時間は最低２時間以上とする。

■授業の概要

第 1 講　大中華圏（1）～台湾編：台湾の歴史、文化、経済状況
第 2 講　大中華圏（2）～香港編：香港の歴史、文化、華人財閥
第 3 講　大中華圏（3）～シンガポール編：シンガポールの歴史、文化、経済状況
第 4 講　中国の「辺境経済圏」(1)：「新シルクロード経済圏」
第 5 講　中国の「辺境経済圏」(2)：「グレーターメコン経済圏」
第 6 講　中国の「辺境経済圏」(3)：「東北アジア経済圏」
第 7 講　中国の「辺境経済圏」(4)：「ヒマラヤ経済圏」
第 8 講　中国企業の経営戦略：国営企業と民営企業
第 9 講　中国企業の対外投資の現状と課題：中国企業の海外進出の目的と成果
第 10 講　中国の対外関係（1）～米中関係：米中戦略・経済対話
第 11 講　中国の対外関係（2）～ 中露関係：中国とロシア両国の経済・外交関係、ＳＣＯ
第 12 講　中国の対外関係（3）中国と中東・アフリカ関係：中国と中東アフリカ関係の現状
第 13 講　中国の対外関係（4）～中国と欧州関関係：中国と欧州関係の現状
第 14 講　日中経済関係の現状と課題：日中経済関係の最新状況
第 15 講　秋学期の講義内容の総まとめ：大中華圏・中国の辺境経済圏の最新動向・秋学期の総括

■フィードバックの要領

専用ノートやレポートに対しコメントを記入しフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：100 点満点中 90 点以上。
評価 A（89 ～ 80 点）：100 点満点中 89 ～ 80 点。
評価 B（79 ～ 70 点）：100 点満点中 79 ～ 70 点。
評価 C（69 ～ 60 点）：100 点満点中 69 ～ 60 点。
評価 F（59 点以下）　：100 点満点中 59 点以下。

■評価方法

出席 30 点、ミニレポート 30 点、最終レポート 30 点、質問 10 点の 100 点満点で絶対評価。

■留意点

＜成績評価について＞出席と毎回提出する講義メモを重視(30 点＋ 30 点＝ 60 点)する。最終レポート(30 点)は、A4 用紙 3 枚以内。講義内の質問・意見（10 点）は、講義への積極的な参加・貢献として評価し、発言回数に基づいて 1 点～ 10 点の評価を加える。講義メモは、講義内容を理解し、かつ独自の問題意識を持ち、問題解決へ向けての取り組み姿勢が顕著に表れているのかを重視する。採点後、最後に返却してフィードバックを行う。

科目名	韓国経済論（Korean Economy）
サブタイトル	日韓ビジネス
担当教員	金　美徳
対象学年	3年生以上
区分	秋学期

■講義目的

一つは、韓国企業について学ぶ。日本企業（中小・ベンチャー企業含む）が韓国進出するか否か、韓国企業をライバルにするかパートナーにするか、韓国人観光客や韓国企業の日本への誘致策を考える。また、韓国企業と日本企業の経営スタイルやグローバル戦略を比較研究することにより、新たな経営戦略やビジネスモデルを考察する。さらに、韓国企業を通じて、アジア企業やアジアビジネスについて学ぶことである。

もう一つは、朝鮮半島情勢を知る。朝鮮半島は、韓国と北朝鮮、南北に分断されており、緊迫かつ不安定な情勢である。そのため、日本の平和や企業のリスクマネジメントを考える上で、朝鮮半島の情勢分析は必要不可欠である。

本講義のキーワードは、日韓ビジネスと日韓企業連携、韓国企業とアジア企業、韓流マーケティングとアジアマーケティング、アジアビジネスと新興国ビジネス、激動する朝鮮半島とアジアダイナミズムである。

■講義分類

グローバルビジネス、ビジネス環境理解、ビジネス創造

■到達目標

①韓国と北朝鮮の政治外交・経済ビジネス・文化社会に関する基礎知識を習得する。 ②韓国企業の経営スタイルやグローバル戦略などの特徴を分析し、日本企業の新たな経営戦略やビジネスモデルを立案する。または日韓ビジネスのアイデアを考える。 ③朝鮮半島問題に対する問題意識の向上を図り、国際情勢や平和に敏感になる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

平和に敏感なビジネスパーソンや経済人として、日韓ビジネスの場で活躍するとともにわが国の産業社会の健全たる発展に貢献できるようになる。

■授業形態

講義、デイスカッション、プレゼンテーション

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

朝鮮半島情勢や日韓ビジネスに関するニュースやネット情報を調べること（1.5時間）。授業開始時に3～5名の学生に報告してもらう（30分）。

■授業の概要

第１講　韓国経済論ガイダンス
第２講　韓国政治の基礎（1）
第３講　韓国政治の基礎（2）
第４講　韓国政治の基礎（3）
第５講　韓国政治の基礎（4）
第６講　韓国政治の基礎（5）
第７講　韓国経済の基礎（1）
第８講　韓国経済の基礎（2）
第９講　韓国経済の基礎（3）
第 10 講　韓国経済の基礎（4）
第 11 講　韓国経済の基礎（5）
第 12 講　日韓関係の改善策
第 13 講　北朝鮮の最新動向と展望
第 14 講　最終レポートのテーマ、設定理由、目次の発表①
第 15 講　最終レポートのテーマ、設定理由、目次の発表②

■フィードバックの要領

レポートのテーマと設定理由は、フィードバックする。

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：出席、毎回提出の講義メモ、最終レポートの合算点が、90% 以上であること。
評価 A（89 ～ 80 点）：出席、毎回提出の講義メモ、最終レポートの合算点が、89 ～ 80% であること。
評価 B（79 ～ 70 点）：出席、毎回提出の講義メモ、最終レポートの合算点が、79 ～ 70% であること。
評価 C（69 ～ 60 点）：出席、毎回提出の講義メモ、最終レポート）の合算点が、69 ～ 60% であること。
評価 F（59 点以下）　：出席、毎回提出の講義メモ、最終レポートの合算点が 59% 以下の場合は、不合格とする。

■評価方法

①出席（35%）、毎回提出の講義メモ（35%）、最終レポート（30%）の割合で評価する。 ②講義メモは、最低限の記述内容が記載されていない場合は、減点する。 ③最終レポート（30%）は、A4 用紙 3 枚以上とする。

■留意点

①携帯電話・パソコンは、使用を禁止する。②私語、帽子着用、飲食は、禁止する。③遅刻および途中退室は、厳禁とする。④就職活動による欠席は、公平性を保つため欠席扱いとする。⑤講義メモの不正提出は、即刻、不合格とする。⑥最終レポートの不正提出は、不合格とする。

科 目 名　業界研究 III（Industry Research III）

サブタイトル　経営学・中小企業論 I

担当教員　秋庭　淳志

対象学年　3 年生以上　　区分　春学期

■講義目的

現代は情報が溢れており、業界や企業に関する情報は容易に入手できるようになった。しかし、氾濫する情報を適切に処理するための知識や視点を有していなければ、業界研究に多くの時間を費やし、思うような成果を上げることは難しい。よって、本講義では業界・企業研究に必要な知識や視点を身につけるとともに、基本的な進め方を理解することが目的となる。

なお、企業の中には消費者向けの商品を取り扱っていないため、知名度は高くないものの、独自性の高い商品・サービスを企業向けに提供し、安定した経営基盤を築いている中小企業が数多く存在する。本講義ではこの種の隠れた優良企業の事例を研究することにより、経営学に係る知見を得るとともに、中小企業の特徴を理解することも目的の一つとする。

■講義分類

ビジネス環境理解、社会人力育成

■到達目標

(1) 業界・企業研究を行う上での基本的な進め方を理解している (2) 業界・企業を研究する際に必要な知識や着眼点を身につけており、業界の将来性などがある程度見通せるようになっている (3) 就職を希望する業界・職種がある程度絞り込めている

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

業界・企業研究を行う上で不可欠な知識や視点などを身につけることができ、就職を希望する業界・職種をある程度説明できるようになる。

■授業形態

講義、グループディスカッション、
グループワーク、プレゼンテーション

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

次週で取り上げる業界に関する情報を収集し業界の将来性やリスク要因についてまとめる。また、業界内で特徴的なビジネスモデルを有する企業（法人向けのビジネスを行っている企業）の情報を収集する。(1.5 時間)

■授業の概要

第 1 講　業界・企業研究の意義と進め方
第 2 講　中小企業と BtoB 企業（法人向けのビジネスを行っている企業）の特徴について
第 3 講　業界・企業研究①
第 4 講　業界・企業研究②
第 5 講　業界・企業研究③
第 6 講　業界・企業研究④
第 7 講　業界・企業研究⑤
第 8 講　業界・企業研究⑥
第 9 講　業界・企業研究⑦
第 10 講　業界・企業研究⑧
第 11 講　業界・企業研究⑨
第 12 講　業界・企業研究⑩
第 13 講　業界・企業研究⑪
第 14 講　期末レポートの発表
第 15 講　まとめ

■フィードバックの要領

レポートに対し、コメントを記入してフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：講義内容を十分に理解しており、期末レポートが論理的な構成で表現力に長けている。
評価 A（89 ～ 80 点）：講義内容を十分に理解しており、期末レポートが論理的に構成されている。
評価 B（79 ～ 70 点）：期末レポートの構成に多少の論理矛盾はあるが、講義内容は概ね理解している。
評価 C（69 ～ 60 点）：期末レポートの構成・表現に工夫が必要だが、講義内容は一定程度理解している。
評価 F（59 点以下）　：講義内容の理解が十分ではない。

■評価方法

出席（60%）、期末レポート（40%）

■留意点

第一講目にアンケートを行い、受講者の希望が多い業界を取り上げる予定

科目名	業界研究 IV（Industry Research IV）		
サブタイトル	経営学・中小企業論 II		
担当教員	秋庭　淳志		
対象学年	3 年生以上	区分	秋学期

■講義目的
近年は人手不足が深刻化しており、売り手市場との見方が強い状況にある。しかし、外部環境の不確実性が増しているのも事実であるため、業界だけでなく企業を分析するためのスキルと思考力も身につけなければ、今後の方向性を見出すのは難しい。よって、本講義では業界・企業研究に必要な分析力や思考力を身につけることが目的となる。
なお、企業の中には消費者向けの商品を取り扱っていないため、知名度は高くないものの、独自性の高い商品・サービスを企業向けに提供し、安定した経営基盤を築いている中小企業が数多く存在する。本講義ではこの種の隠れた優良企業の事例を研究することにより、経営学に係る知見を得るとともに、中小企業の特徴を理解することも目的の一つとする。

■講義分類
ビジネス環境理解、社会人力育成

■到達目標
(1) 業界・企業に必要な分析力と思考力を身につけており、業界の将来性等を見通せるようになっている (2) 就職を希望する業界・職種が明確になっており、希望する理由を明快に説明できる

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項
DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細
業界・企業研究を行う上で不可欠な分析力と思考力を身につけることができ、就職を希望する業界・職種を説明できるようになる。

■授業形態
講義、グループディスカッション、
グループワーク、プレゼンテーション

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容
次週で取り上げる業界に関する情報を収集し、業界の将来性やリスク要因について分析する。また、業界内で特徴的なビジネスモデルを有する企業（法人向けのビジネスを行っている企業）を調査する。(1.5 時間)

■授業の概要
第 1 講　業界・企業研究の意義と進め方
第 2 講　中小企業と BtoB 企業（法人向けのビジネスを行っている企業）の特徴について
第 3 講　業界・企業研究①
第 4 講　業界・企業研究②
第 5 講　業界・企業研究③
第 6 講　業界・企業研究④
第 7 講　業界・企業研究⑤
第 8 講　業界・企業研究⑥
第 9 講　業界・企業研究⑦
第 10 講　業界・企業研究⑧
第 11 講　業界・企業研究⑨
第 12 講　業界・企業研究⑩
第 13 講　業界・企業研究⑪
第 14 講　期末レポートの発表
第 15 講　まとめ

■フィードバックの要領
レポートに対し、コメントを記入してフィードバックを行う。

■評価基準
評価 A+（90 点以上）：講義内容を十分に理解しており、期末レポートが論理的な構成で表現力に長けている。
評価 A（89 ～ 80 点）：講義内容を十分に理解しており、期末レポートが論理的に構成されている。
評価 B（79 ～ 70 点）：期末レポートの構成に多少の論理矛盾はあるが、講義内容は概ね理解している。
評価 C（69 ～ 60 点）：期末レポートの構成・表現に工夫が必要だが、講義内容は一定程度理解している。
評価 F（59 点以下）　：講義内容の理解が十分ではない。

■評価方法
出席（60%）、期末レポート（40%）

■留意点
第一講目にアンケートを行い、受講者の希望が多い業界を取り上げる予定

科目名	経営科学Ⅰ（Management Science Ⅰ）
サブタイトル	management science Ⅰ
担当教員	増田　浩通
対象学年	3 年生以上
区分	春学期

■講義目的
Excel を用いて経営科学の問題を扱います。主にローンの基礎となる複利計算が身につくよう、数学の基本的な考え方から理解することを目的とします。

■講義分類
ビジネス ICT

■到達目標
数学的考えを身につけ、Excel の基本が身につくことを到達目標とします。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項
DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細
ビジネスの中で最低限必要な基礎的な数学の思考力を基に，課題解決に向けたプロセスを明確にすることが出来る。

■授業形態
講義

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容
この授業には EXCEL の基本的な使い方を知る必要があります。もし基本的な使い方を知らない人は、各自 EXCEL の入門書を読んでください。そのために予習 1.3 時間以上、授業後の復習に 1.5 時間以上を当ててください。

■授業の概要
第１講　ガイダンス：半年間の講義の目的と授業の予定を述べる。
第２講　EXCEL を用いて授業を行います。パソコンは毎週持ってくること。
第３講　EXCEL の復習２
第４講　EXCEL の復習３
第５講　EXCEL の復習４
第６講　EXCEL の関数
第７講　経営科学に使われる数学の復習：等比数列①
第８講　中間課題の作成と提出
第９講　経営科学に使われる数学の復習：等比数列②
第 10 講　経営科学に使われる数学の復習：等比数列③
第 11 講　EXCEL 関数　ＳＵＭ関数
第 12 講　単利計算
第 13 講　複利計算
第 14 講　EXCEL 関数　ＩＦ関数
第 15 講　期末課題の作成と提出：第９講以降の学習内容を元に最終レポートを課します。

■フィードバックの要領
課題に対してフィードバックを行う。

■評価基準
評価 A+（90 点以上）：T-NEXT に提出された課題と中間課題、期末課題を評価方法に基づいて判定する。
評価 A（89 ～ 80 点）：T-NEXT に提出された課題と中間課題、期末課題を評価方法に基づいて判定する。
評価 B（79 ～ 70 点）：T-NEXT に提出された課題と中間課題、期末課題を評価方法に基づいて判定する。
評価 C（69 ～ 60 点）：T-NEXT に提出された課題と中間課題、期末課題を評価方法に基づいて判定する。
評価 F（59 点以下）　：課題の未提出など

■評価方法
授業内での T-NEXT への課題　７０％、中間課題　１５％、期末課題　１５％

■留意点

科目名	経営科学 II（Management Science II）
サブタイトル	management science II
担当教員	増田　浩通
対象学年	3 年生以上
区分	秋学期

■講義目的
Excel を用いて経営科学の問題を扱います。主に Excel のグラフ作成機能を用いて、データの視覚化を学ぶ。

■講義分類
ビジネス ICT

■到達目標
Excel の基本を身につけ、データの視覚化ができることを到達目標とします。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項
DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細
ビジネスの中で用いられるデータの視覚化をもとに、問題解決の思考力を養う。

■授業形態
講義

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容
この授業の資料はパワーポイント形式でＴ－ＮＥＸＴ上にアップロードします。各自予習 1.5 時間以上、授業後パワーポイント資料を見ながら、復習に 1.3 時間以上費やしてください。

■授業の概要
第 1 講　ガイダンス
第 2 講　横棒グラフ
第 3 講　円グラフ
第 4 講　ドーナッツグラフ
第 5 講　補助円グラフ付き円グラフ
第 6 講　散布図
第 7 講　バブルチャート／面グラフ
第 8 講　等高線／レーダーチャート
第 9 講　組み合わせグラフ
第 10 講　パレート図
第 11 講　エクセル：置換　検索　フィルター
第 12 講　ヒストグラム
第 13 講　VLOOKUP 関数
第 14 講　期末課題の作成
第 15 講　期末課題の提出

■フィードバックの要領
課題や試験等に対してフィードバックを行う。

■評価基準
評価 A+（90 点以上）：テストとレポートの合計で評価方法に基づいて判断する。
評価 A（89 ～ 80 点）：テストとレポートの合計で評価方法に基づいて判断する。
評価 B（79 ～ 70 点）：テストとレポートの合計で評価方法に基づいて判断する。
評価 C（69 ～ 60 点）：テストとレポートの合計で評価方法に基づいて判断する。
評価 F（59 点以下）　：中間レポートの提出がない、もしくは期末テストを受けないと評価は F になる。

■評価方法
講義内課題　８０%、期末課題　２０%

■留意点

科目名	経営組織Ⅰ（Management Organization Ⅰ）
サブタイトル	組織の実践的理解
担当教員	小林　英夫
対象学年	3 年生以上
区分	春学期

■講義目的
企業は最も重要な経営資源である人（々）を一つの組織としてまとめあげ、直面する内外の課題を解決し、成果をあげ続けることを目指す存在である。時代とともに変貌する組織のあり方、組織を構成する人的資源を最大に発揮する方法などを考える科目である。
経営組織Ⅰでは、この問題に関する基礎的項目について最前線事例を踏まえて学び、実践的行動ができる能力を獲得する。

■講義分類
ビジネス環境理解、ビジネスマネジメント、グローバルビジネス

■到達目標
①組織とは何で企業組織はどのように運営されているのかを理解し説明できる、②組織の主要構成要素である人的資源が組織の中でどのように活かされているのかを理解し説明できる、③自らが組織を通じてキャリアを築き産業社会へ貢献するイメージを描くことができる、の3点を到達目標とする。これを通じて、組織の中で役割分担により組織目標の達成に貢献し、社会に貢献していくための思考力や判断力を身につける。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項
DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細
組織的課題への対処を最前線事例から学び、思考力や判断力、状況対応力を習得する。

■授業形態
講義、グループディスカッション、ディベート

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容
授業前に、事前学習ポイントを調べ、T-NEXT 上の授業資料に目を通し疑問点を明確にする（1.5 時間）。授業後に、事前学習の疑問点解消を確認し、未解消の項目は自己調査や教員質問等で解消する（1.5 時間）。

■授業の概要
第 1 講　様々な組織観
第 2 講　経営、個人と組織
第 3 講　企業統治～会社は誰が動かしているのか
第 4 講　組織構造～会社はどのような仕組みで動いているのか
第 5 講　職務設計～社員は仕事をどのように分担しているのか
第 6 講　企業集団～会社は他の会社とどのように協力しているのか
第 7 講　企業理念～理念の存在は組織の中での人の動き方にどのように影響を与えるのか
第 8 講　組織文化～会社はどのような要素に影響を受けて動いているのか
第 9 講　組織社会化～人はどのように会社に染まってくのか
第 10 講　キャリア・マネジメント～人はどのようにキャリアを選択していくのか
第 11 講　リーダーシップ～人をどのように動かすか
第 12 講　動機づけ～組織は人をどのように捉えるのか
第 13 講　影響力～人はどのように動かされるのか
第 14 講　人の管理とはどのようなことか
第 15 講　学習成果の確認ー授業内期末試験

■フィードバックの要領
毎回提出のコメントシートの講評と質問・意見への回答・コメントを翌回講義で行う。

■評価基準
評価 A+（90 点以上）：授業貢献点と期末試験の合計が 90 点以上
評価 A（89 ～ 80 点）：授業貢献点と期末試験の合計が 80 点以上 90 点未満
評価 B（79 ～ 70 点）：授業貢献点と期末試験の合計が 70 点以上 80 点未満
評価 C（69 ～ 60 点）：授業貢献点と期末試験の合計が 60 点以上 70 点未満
評価 F（59 点以下）　：授業貢献点と期末試験の合計が 60 点未満

■評価方法
授業貢献点（59 点）、期末試験（41 点）。授業貢献点は出席点ではなく、授業を聴き自ら考えたかを評価する。期末試験は、経営組織の知識、人的資源を活かす組織と組織を通じた自らのキャリア形成への理解を評価する。

■留意点
授業貢献点は単なる出席点とは異なる。毎回の授業においてコメントシートの提出を求め、その内容を A（授業を聴き良い気づきがあった）、B（授業を聴いていた）、C（授業を聴いていたとは思われない）の 3 段階評価し授業貢献点とする。A は加点対象（6 点）、B が標準（4 点）、C は減点（-4 点）、欠席は 0 点。授業の受講態度が悪い場合は欠席以下の評価となる。授業貢献点は最大 59 点。

科目名 経営組織 II（Management Organization II）

サブタイトル 組織の理論的理解

担当教員 小林　英夫

対象学年 3 年生以上　　区分 秋学期

■講義目的

企業は最も重要な経営資源である人（々）を一つの組織としてまとめあげ、直面する内外の課題を解決し、成果をあげ続けることを目指す存在である。時代とともに変貌する組織のあり方、組織を構成する人的資源を最大に発揮する方法などを考える科目である。
経営組織Ⅱでは、この問題に対してこれまでの学術的成果を踏まえ理論的側面からの検討を行うとともに、理論を実務に適用する際の考慮点を学ぶ。

■講義分類

ビジネス環境理解、ビジネスマネジメント、グローバルビジネス

■到達目標

① 1900 年代より現在に至る組織理論進展を体系的に説明することができる、②理論と実際の組織運営の課題を結び付けて考え、理論を用いて実務的な問題解決方法を考えることができる、③自らが組織を通じキャリアを築き産業社会へ貢献するイメージを描くことができる、の 3 点を到達目標とする。これを通じ、社会に貢献していくための知識や意欲、および組織の中で役割分担により組織目標の達成に貢献する力を身につける。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

組織理論を体系的に学び、理論を用いて実務的な問題解決方法を考えることができる。

■授業形態

講義　グループディスカッション　ディベート

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

授業前に、事前学習ポイントを調べ、T-NEXT 上の授業資料に目を通し疑問点を明確にする（1.5 時間）。授業後に、事前学習の疑問点解消を確認し、未解消の項目は自己調査や教員質問等で解消する（1.5 時間）。

■授業の概要

第 1 講　経営組織論の体系
第 2 講　様々な組織と官僚制
第 3 講　古典的組織論：科学的管理法と管理過程論
第 4 講　新古典派組織論：人間関係論
第 5 講　近代組織論：バーナード革命と意思決定論
第 6 講　コンティンジェンシー理論：組織の環境適応と組織構造設計
第 7 講　制度派組織論：組織と制度
第 8 講　事例からの組織理論体系の確認 1
第 9 講　事例からの組織理論体系の確認 2
第 10 講　行動科学的管理論 1：モチベーションの強度
第 11 講　行動科学的管理論 2：モチベーションの方向性と持続性
第 12 講　行動科学的管理論 3：リーダーシップ
第 13 講　行動科学的管理論 4：キャリア・マネジメント
第 14 講　ラップアップ：経営組織の展望
第 15 講　学習成果の確認ー授業内期末試験

■フィードバックの要領

毎回提出のコメントシートの講評と質問・意見への回答・コメントを翌回講義で行う。

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：授業貢献点と期末試験の合計が 90 点以上
評価 A（89 ～ 80 点）：授業貢献点と期末試験の合計が 80 点以上 90 点未満
評価 B（79 ～ 70 点）：授業貢献点と期末試験の合計が 70 点以上 80 点未満
評価 C（69 ～ 60 点）：授業貢献点と期末試験の合計が 60 点以上 70 点未満
評価 F（59 点以下）　：授業貢献点と期末試験の合計が 60 点未満

■評価方法

授業貢献点（59 点）、期末試験（41 点）。授業貢献点は出席点ではなく、授業を聴き自ら考えたかを評価する。期末試験は、経営組織に関する理論の理解と組織を通じた自らのキャリア形成への理解を評価する。

■留意点

授業貢献点は単なる出席点とは異なる。毎回の授業においてコメントシートの提出を求め、その内容を A（授業を聴き良い気づきがあった）、B（授業を聴いていた）、C（授業を聴いていたとは思われない）の 3 段階評価し授業貢献点とする。A は加点対象（6 点）、B が標準（4 点）、C は減点（-4 点）、欠席は 0 点。授業の受講態度が悪い場合は欠席以下の評価となる。授業貢献点は最大 59 点。

科 目 名 経営と意思決定（Decision Making for Management Sciences）

サブタイトル 量的意思決定支援の方法

担当教員 今泉　忠

対象学年 3 年生以上　　**区分** 春学期

■講義目的

経営では、競争があり、そこではさまざまな問題解決のためには戦略的なアプローチが必要である．それは、これらがリスク下での意思決定問題として表現できることからもわかる。本講義では、さまざまな状況下で適切に判断できる能力や技法などの意思決定の基礎について合理的な解決に活用しうる数理的方法及び統計的方法について実例を交えながら学ぶ。いくつかの課題については、グループ課題として行う。1. 意思決定とは、2. 確実性のもとでの意思決定、3. 不確実性のもとでの意思決定、4. ベイズ意思決定。

■講義分類

ビジネス環境理解、社会人力育成、ビジネス ICT

■到達目標

意思決定に関して次の項目について講義する。1. 意思決定とは、2. 確実性のもとでの意思決定、3. 不確実性のもとでの意思決定、4. ベイズ意思決定。　特に次の習得を目標とする。（1）AHP 法について理解している、（2）Decision Tree について理解している、（3）ベイズ意思決定について理解している。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

DP2: 思考と判断　意思決定に関して，その問題や課題での状況と目的に応じてモデル化できる能力を修得する

■授業形態

講義、グループワーク、プレゼンテーション

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

講義での課題を次回の演習時間に提出することを想定している。課題を解くには，１時間程度，レポートとしてまとまるのに０．５時間ほど必要と考えられるので十分余裕をもっておくこと

■授業の概要

第１講　意思決定を考える：何故定量的な意思決定が必要かについて講義する
第２講　確実性のもとでの意思決定
第３講　確実性のもとでの意思決定　機会費用とサンクコスト
第４講　確実性のもとでの意思決定　代替案の選択 I　選択基準
第５講　確実性のもとでの意思決定　演習
第６講　選択基準（効用を評価する）
第７講　選択基準　期待値
第８講　多属性意思決定　AHP
第９講　多属性意思決定　AHP 演習
第 10 講　多属性意思決定　AHP 演習　II
第 11 講　不確実性のもとでの意思決定　ディジションツリー I
第 12 講　不確実性のもとでの意思決定　ディジションツリー II
第 13 講　ディジションツリーとベイズ意思決定 I
第 14 講　ディジションツリーとベイズ意思決定 II
第 15 講　まとめ

■フィードバックの要領

講義をもとに提出されたリフレクションシートをもとに行う

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：学習した方法を理解して、問題解決に適用し提案できるか。
評価 A（89 ～ 80 点）：学習した方法を理解して、問題解決に適用できるか
評価 B（79 ～ 70 点）：学習した手法のうち、すくなくとも２つの手法について問題解決に適用できるか
評価 C（69 ～ 60 点）：学習した手法のうち、１つの手法について問題解決に適用できるか
評価 F（59 点以下）　：学習した手法について、理解不十分で問題解決に適用できない

■評価方法

出席２０％、講義内レポート４０％、最終課題４０％

■留意点

科 目 名　経営とセキュリティ（Management and Security）

サブタイトル　情報化社会に対応する企業活動の変化と必要とされる情報セキュリティ

担当教員　諸橋　正幸

対象学年　3年生以上　　区分　秋学期

■講義目的

インターネット技術の急速な発展に伴い、企業や組織においてもインターネットを前提とした情報収集・利用やそれに基づくサービス提供が当たり前となっている。また、サービスを受ける側の情報リテラシーも十分な態勢にあることを前提とした情報化社会への変化が急速に進みつつある。
そうした変化に対応するために必要な考え方やそれに対応する技術として、情報セキュリティが注目され、情報セキュリティ技術者の重要性が高まっている。
本講義では、情報化社会の現在と今後の方向性を理解した上で、情報セキュリティ技術の重要性を認識し、それに対応できる情報セキュリティプロフェッショナルとしての知識を習得する。これにより、情報セキュリティに関連する問題を解決する能力を身に付けることを目標とする。

■講義分類

ビジネスICT、社会人力育成

■到達目標

（1）情報化社会の現在と未来を理解している　（2）情報セキュリティの重要性を説明できる　（3）情報セキュリティへの脅威を認識し、対策をとることができる
関連する資格：情報セキュリティスペシャリスト、情報セキュリティ管理士

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

新しい技術や人工知能技術を如何に企業活動に取り入れ、我々の生活を豊かにできるかを考える

■授業形態

グループワーク

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

各講義の事前、事後学習ポイントに記載されたキーワードをあらかじめ調べてまとめる。また、講義中に話した内容に基づいて、まとめを加筆・修正し、授業終了後に提出する。設定課題の準備には 1.5 時間を想定。

■授業の概要

第1講　インターネットを中心とした情報の流れ―1
第2講　インターネットを中心とした情報の流れ―2
第3講　情報システム概論
第4講　従来型情報システム
第5講　インターネット独自の情報システム
第6講　データマイニングとビッグデータ
第7講　政府の取組
第8講　情報化社会で変わる生活―1
第9講　情報化社会で変わる生活―2（勤務形態）
第10講　情報化社会で変わる生活―2（グループワーク）
第11講　情報化社会で変わる生活―2〈発表資料の作成と提出）
第12講　情報社会における安全の確保―1
第13講　情報社会における安全の確保―2
第14講　安全を確保するための情報技術
第15講　セキュリティ管理

■フィードバックの要領

成績評価がフィードバックになる。

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：講義内容を十分に理解し、身につけている
評価 A（89 ～ 80 点）：講義内容を理解し、身につけている
評価 B（79 ～ 70 点）：講義内容をある程度理解している
評価 C（69 ～ 60 点）：講義内容をなんとか理解できている段階にある
評価 F（59 点以下）　：十分な知識がない。出席していない。試験を受けていない。

■評価方法

試験 60%　グループワークおよび平常点 40%

■留意点

就活等の理由により出席できなかった学生については申請があれば、その回の配布資料に基づいた質疑を行い、講義内容が確実に理解できていると認めたときは、出席扱いをする（病欠等についても同様）

科目名	経済統計学（Economic Statistics）
サブタイトル	経済統計学（Economic Statistics）
担当教員	下井　直毅
対象学年	3 年生以上　　区分　秋学期

■講義目的
産業社会を分析する上では多種多様な問題が提起される。経済成長の見通しはどうなのか、中高年層の雇用の予想はどうなるのか、為替相場の動向はどう予想されるのか、等々である。こうした問題について経済理論はもちろん必要だが、経済統計データもあわせてみる必要がある。この講義では、日本経済の現状および日本経済が抱える課題について学び、最前線事例を紹介しつつ、その際に必要なデータについての基礎知識を身につけることを目的としている。

■講義分類
ビジネス環境理解、グローバルビジネス

■到達目標
日本経済の現状と課題についての基本的な知識や経済データに関する必要な知識の修得をめざす。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項
DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細
ビジネスの中で最低限必要な基礎的な数学の思考力を基に，課題解決に向けたプロセスを明確にすることが出来る。

■授業形態
講義

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容
授業前には、前回の講義内容について十分に理解をしておくこと。講義内容の復習と次回講義の準備には、1.3 時間以上の取組が必要です。

■授業の概要
第 1 講　日本経済の全体像－日本経済の全体像を把握する
第 2 講　戦後日本の経済成長－戦後日本の経済成長の推移を理解する
第 3 講　景気循環の姿とそのとらえ方－景気循環について理解する
第 4 講　ストックから見た日本経済－ストック面から日本経済を概観する
第 5 講　雇用の変動と日本型雇用慣行の行方－雇用環境について理解する
第 6 講　企業行動と日本型企業経営の行方－日本の企業行動について理解する
第 7 講　産業構造の変化と将来のリーディング産業－産業構造の変化や将来のリーディング産業について考える
第 8 講　物価の変動とデフレ問題－物価の変動とデフレの問題について理解する
第 9 講　円レートの変動と日本経済－為替相場の変動や日本経済に及ぼす影響について理解する
第 10 講　貿易と国際収支の姿－貿易と国際収支の姿を概観する
第 11 講　直接投資と空洞化をめぐる議論－直接投資と空洞化をめぐる議論を概観する
第 12 講　財政をめぐる諸問題－財政をめぐる諸問題について考える
第 13 講　経済再生の鍵を握る金融－経済再生の鍵を握る金融について考える
第 14 講　講義前半の復習
第 15 講　講義後半の復習

■フィードバックの要領
レポートに対してコメントを記入して、フィードバックを行う。

■評価基準
評価 A+（90 点以上）：100 点満点中 90 点以上
評価 A（89 ～ 80 点）：100 点満点中 80 点以上 89 点以下
評価 B（79 ～ 70 点）：100 点満点中 70 点以上 79 点以下
評価 C（69 ～ 60 点）：100 点満点中 60 点以上 69 点以下
評価 F（59 点以下）　：100 点満点中 59 点以下

■評価方法
出席点あるいは授業の平常点（30%）、試験（70%）。合計 100% で 100 点満点。

■留意点
①出欠を確認する際に、本人の学生証が無い場合は、欠席扱いとする。②試験に対してフィードバックを行う。

科目名	原価計算（Cost Accounting）
サブタイトル	意思決定と業績管理に関する会計的手法を学ぶ。
担当教員	清松　敏雄
対象学年	3年生以上
区分	春学期

■講義目的
本講義は、製造業における会計手続きである「工業簿記」および単位あたりの製品の製造原価を計算する手法である「原価計算」の基本原理を習得し、日本商工会議所が主催する簿記検定試験の２級（日商簿記２級）の工業簿記に関する部分で合格点が取れる知識と能力を習得することを目的とする。

■講義分類
ビジネスマネジメント

■到達目標
工業簿記及び原価計算に関して、日商簿記2級の工業簿記の試験問題がおおむね解答できる基礎的な知識を習得すること。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項
DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細
原価計算に関する初級から中級レベルの知識を得るとともに、製造業の企業で行われる典型的な取引・部分的に応用的な取引に関する理解を得ることを通じ、企業行動における課題発見能力を習得する。

■授業形態
講義

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容
毎回の講義内容の理解度を確認するため、指定した練習問題を解いておくことが必要である。また、講義前にテキストの該当部分を一読しておくこと。講義内容の復習と次回講義の準備には概ね１時間半程度必要になる。

■授業の概要
第１講　1　工業簿記の基礎　工業簿記および原価計算とは。
第２講　2　材料費　材料費に関する会計処理を学ぶ。
第３講　3　労務費　労務費に関する会計処理を学ぶ。
第４講　4　経費　経費の会計処理を学ぶ。
第５講　5　個別原価計算（1）　個別原価計算の仕組みを理解する。
第６講　5　個別原価計算（2）　製造間接費の会計処理を理解する。
第７講　6　部門別個別原価計算　製造部門と補助部門との関係を理解する。
第８講　7　総合原価計算（1）　大量生産の場合の原価計算を学ぶ。
第９講　7　総合原価計算（2）　複雑な製造過程をどう原価に反映するのか学ぶ。
第 10 講　7　総合原価計算（3）　財務諸表　仕損・減損と製造原価報告書を理解する。
第 11 講　8　本社工場会計 本社と工場の間での会計情報のつながりを理解する。
第 12 講　9　標準原価計算（1）　標準原価計算の目的を理解する。
第 13 講　9　標準原価計算（2）　原価差異の把握方法とその分析を学ぶ。
第 14 講　10　直接原価計算　直接原価計算の必要性を理解する。
第 15 講　（総まとめ）これまでに学んだことを整理し、理解を深める。

■フィードバックの要領
授業内テストについての解説および多かった誤りに関する補足説明を行う。

■評価基準
評価 A+（90 点以上）：授業内中間テスト、授業内期末テストの得点が 90 点以上
評価 A（89 ～ 80 点）：授業内中間テスト、授業内期末テストの得点が 80 点以上 90 点未満
評価 B（79 ～ 70 点）：授業内中間テスト、授業内期末テストの得点が 70 点以上 80 点未満
評価 C（69 ～ 60 点）：授業内中間テスト、授業内期末テストの得点が 60 点以上 70 点未満
評価 F（59 点以下）　：授業内中間テスト、授業内期末テストの得点が 60 点未満

■評価方法
授業内中間テスト 50%、授業内期末テスト 50%

■留意点

科目名　現代メディア論Ⅰ（Contemporary Media Studies Ⅰ）

サブタイトル　メディアを読む、世界を読む

担当教員　木村　知義

対象学年　3 年生以上　　区分　春学期

■講義目的

いま、メディアは歴史的な変化の時代を迎えている。新聞、テレビなど既存のマスメディア離れが止まらない。人びとはネットへ流れ、SNS が暮らしの中で存在感を増し、既存メディアは生存をかけた変革を迫られている。こうしたメディア環境の「変容」は、単に情報の「送り手」の問題にとどまらない。「受け手」としての我々のメディアとの向き合い方＝メディアリテラシー（メディアを的確かつ批判的に読み解き、活用していく力）もまた、鋭く試される時代を迎えている。何が正しい情報で、その背後にある「構造」は何かを見抜き、的確かつ鋭く読み解くことがますます重要になっている。メディアの現在と未来を見通して、情報感度と情報の解読能力を高め、現代社会を生きるうえで不可欠な、人間としての基礎力の涵養にチャレンジする。現代の新たなリベラルアーツというべき、創造性豊かな総合知の獲得をめざす。合言葉は、感じる空間、考える教室！世界と時代に向き合う知のシャワーを！である。

■講義分類

社会人力育成、ビジネス環境理解、グローバルビジネス

■到達目標

1．現在のメディア状況について知見を広げ、深い問題意識を持つことができる。2．世界と日本で起きる出来事、ニュースについて、自分の頭で考え、分析し、自分の視点で語ることができる。3．情報を読み解く力を鍛え、問題発見能力、問題解決のための実践的知識を獲得して、社会で活用、貢献できる。4．現代社会を生きる上で不可欠なコミュニケーション能力を獲得し、独自の発想と言葉で語ることができる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

氾濫する情報のなかから正しい情報を選び取り、読み解く思考力を鍛え、自らの判断と決断でビジネスや暮らしに活かしていく力、メディアとのかかわりが不可欠な現代社会における生きる力を修得する。

■授業形態

講義　ディベート　グループディスカッション（注）履修者の規模をふまえて判断。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

毎回の予習課題には最低限 1.5 時間程度の学習が不可欠となる。さらに教室で学んだ事柄について知見を広げ、問題意識を深めるための復習として 1.5 ～ 2 時間程度の学習を課す。

■授業の概要

第 1 講　現在の「メディアの風景」とメディアが直面する課題
第 2 講　「フェイクニュース」を考えるー「情報の洪水」に飲み込まれないためにー
第 3 講　デジタルジャーナリズムの現在ーメディアに起きている「新しい波」（1）
第 4 講　AI、IoT はメディアをどう変えるーメディアに起きている「新しい波」（2）
第 5 講　新聞は「オワコン」なのか！？（1）新聞の歴史と歴史における新聞の役割を考える
第 6 講　新聞は「オワコン」なのか！？（2）新聞を読む意味の再認識へ
第 7 講　メディアの「スクープ」がはらむ「落とし穴」ースクープの罠（1）
第 8 講　国際情報、企業・経済ニュースの「スクープ」をどう読むースクープの罠（2）
第 9 講　特別講義：メディアの現場から　メディア最前線で活動する優れたジャーナリストに聞く
第 10 講　メディアにおける「情報源」とメディアの信頼性
第 11 講　戦争、テロ、メディア（1）　頻発するテロ、いまだ絶えない戦禍。メディアの責任は
第 12 講　戦争、テロ、メディア（2）「シャルリエブド」事件と表現の自由、そしてメディア
第 13 講　メディアを読み解く遠近法（1）　いま、エドワード・サイードに学ぶ
第 14 講　メディアを読み解く遠近法（2）　歴史意識と想像力、そしてメディアリテラシー
第 15 講　今日のニュースは明日の歴史―春学期のまとめにむけてー

■フィードバックの要領

毎回の「クエスチョンシート」について教室でコメント、評価が確認できるようにする。

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：講義による知見をもとに、メディアについてオリジナリティーに富む考えを提示できる。
評価 A（89 ～ 80 点）：クエスチョンシート、レポートから自分の視点、発想で考えようとする努力がうかがえる。
評価 B（79 ～ 70 点）：講義を真摯に聴講し、知見の獲得に努力したことがうかがえる水準に達してる。
評価 C（69 ～ 60 点）：最低限の知見の獲得努力はうかがえるが、それを表現する水準に到達できていない。
評価 F（59 点以下）　：毎回の課題不提出をはじめ、講義による知見獲得への真摯さと努力がうかがえない。

■評価方法

学期末の課題レポート：４０％、毎回のクエスチョンシート：４０％、特別講義についてのミニ・レポート：２０％（学期末の課題レポート、特別講義にかかわるミニ・レポートは Microsoft Office の Word で作成）

■留意点

①予習課題について事前学習が必須。②予習と当日の講義をもとに教室で「クエスチョンシート」に記入、提出。③提出された「クエスチョンシート」にもとづいて、教室で具体事例を挙げてフィードバック。評価について、各自、自己確認できるようにする。
注）メディアは「生きもの」。世界と日本の日々のニュース、メディアにかかわるトピックを具体事例として活用するため、臨機応変に講義内容を組み変えることもある。

科 目 名　現代メディア論 II（Contemporary Media Studies II）

サブタイトル　メディアを読む、世界を読む

担当教員　木村　知義

対象学年　3 年生以上　　区分　秋学期

■講義目的

春学期の「現代メディア論 I」をふまえて、さらに深めていく。通底する問題意識は、日々洪水のように押し寄せる情報の波に翻弄されていてはならない ということである。メディアは「饒舌」なまでに語るが、伝えられるべきことが語られているのだろうかという問題意識でもある。「メディアの現在地」に対する知見を一層広げ、「客観報道」「調査報道」「メディアの新潮流」などメディアにおける重要なテーマを柱に据えて、報道記事や国内外のドキュメンタリー番組なども活用しながら学びを深める。いまメディアに問われるものは何か、そこで我々が備えるべき力とはどのようなものかを学び、大学という場から社会に巣立つ際に不可欠な情報への感度を高め、情報の解析能力、問題発見・解決能力を鍛えながらコミュニケーション能力を練磨して、現代社会を生きるための新たなリベラルアーツというべき創造的な学びをめざす。合言葉は、感じる空間、考える教室！世界と時代に向き合う知のシャワーを！である。

■講義分類

社会人力育成、ビジネス環境理解、グローバルビジネス

■到達目標

1．現在のメディア状況について知見を広げ、深い問題意識を持つことができる。2．世界と日本で起きる出来事、ニュースについて、自分の頭で考え、分析し、自分の視点で語ることができる。3．情報を読み解く力を鍛え、問題発見能力、問題解決のための実践的知識を獲得して、社会で活用、貢献できる。4．現代社会を生きる上で不可欠なコミュニケーション能力を獲得し、独自の発想と言葉で語ることができる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

氾濫する情報のなかから正しい情報を選び取り、読み解く思考力を鍛え、自らの判断と決断でビジネスや暮らしに活かしていく力、メディアとのかかわりが不可欠な現代社会における生きる力を修得する。

■授業形態

講義　ディベート　グループディスカッション（注）履修者の規模をふまえて判断。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

毎回の予習課題には最低限 1.5 時間程度の学習が必要となる。さらに教室で学んだ事柄について知見を広げ、問題意識を深めるための復習として 1.5 ～ 2 時間程度の学習を課す。

■授業の概要

第 1 講　現在の「メディアの風景」とメディアリテラシー
第 2 講　メディアの「危機」、ポスト・トゥルースの深層
第 3 講　事実の時代へ、事実とは何か？！
第 4 講　「客観報道」とは何か（1）客観報道の要件と内在する問題は？！
第 5 講　「客観報道」とは何か（2）事実と意見、そして「客観報道主義」とメディアリテラシー
第 6 講　「客観報道」のむこうへ、「調査報道」とは
第 7 講　「調査報道」を読むー「調査報道は生き方である」をめぐって
第 8 講　「調査報道」はメディアを変えるか、その可能性と課題を考える
第 9 講　特別講義：メディアの現場から　メディア最前線で活動する優れたジャーナリストに聞く
第 10 講　メディアの明日（1）大転換期を迎えているメディアの現在、過去、未来
第 11 講　メディアの明日（2）データジャーナリズムと新たな調査報道の可能性
第 12 講　いま、ラジオが面白いーマイナーだがディープな「ラジオ」が若者に
第 13 講　情報の「受け手」から、情報の「主役」へ！新たな公共空間の創出へ
第 14 講　「遠音」を聴く感性をーいま、時代が求めるメディアリテラシーとは
第 15 講　終講に際して、ふたたび「きょうのニュースは明日の歴史」をめぐって

■フィードバックの要領

毎回の「クエスチョンシート」について教室でコメント、評価を確認できるようにする。

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：講義による知見をもとに、メディアについてオリジナリティーに富む考えを提示できる。
評価 A（89 ～ 80 点）：クエスチョンシート、レポートから自分の視点、発想で考えようとする努力がうかがえる。
評価 B（79 ～ 70 点）：講義を真摯に聴講し、知見の獲得に努力したことがうかがえる水準に達している。
評価 C（69 ～ 60 点）：最低限の知見の獲得努力はうかがえるが、それを表現する水準に到達できていない。
評価 F（59 点以下）　：予習課題不提出をはじめ、講義による知見獲得への真摯さと努力がうかがえない。

■評価方法

学期末の課題レポート：４０％、毎回のクエスチョンシート課題：４０％、特別講義についてのミニ・レポート：２０％
（学期末の課題レポート、特別講義にかかわるミニ・レポートは Microsoft Office の Word で作成）

■留意点

①予習課題について事前学習が必須。②予習と当日の講義をもとに教室で「クエスチョンシート」に記入、提出。③提出された「クエスチョンシート」にもとづいて、教室で具体事例を挙げてフィードバック。評価について、各自、自己確認できるようにする。
注）メディアは「生きもの」。世界と日本の日々のニュース、メディアにかかわるトピックを具体事例として活用するため、臨機応変に講義内容を組み変えることもある。

科目名	国際公共政策（International public policy）
サブタイトル	地球規模の諸課題と、新しいグローバルな公共政策
担当教員	椎木　哲太郎
対象学年	3 年生以上
区分	春学期

■講義目的

「世界全体が幸福にならないうちは､個人の幸福はあり得ない」（宮沢賢治『農民芸術概論綱要』）というのは少し極端としても、我々の生活が地球社会全体の在りようと密接に関連していることは、紛れもない。国際公共政策とは、平和、安全保障、開発、人権､基本的自由といった国際的共通価値､「国際公益」を実現するための政策の総称 [高阪章編 (2008)『国際公共政策学入門』大阪大学出版会 p.1] である。本講座は 2014 年度まで開講されてきた「社会経済政策」を引き継ぎ、幅広く先端研究を援用してグローバルな視点からの「総合政策論」的発展を企図している。「ポスト産業社会」を生きる市民の生活の質を高めていくためにも、成熟した「持続可能な社会」につながる体系的な公共政策が不可欠である。国際機関、政府、NGO、企業等が協力し合い新たな制度、政策を創出して社会問題の解決に取り組んでいく試みに、多少なりとも参加していきたいものである。

■講義分類

ビジネス環境理解、社会人力育成、グローバルビジネス

■到達目標

先進国、途上国双方を視野に入れた幅広い国際公共政策、社会経済政策を学ぶことによって、成熟した「持続可能な社会」を実現するための総合的な視座、政策論的問題解決技法を身に付け、高い志を持って地球市民、主権者たる日本国民として連帯し、積極的にグローカルな行動ができるようになる。企業で働く際にも、国際ルールを遵守し、よき企業市民、グローカル人材として、問題解決、社会の発展に貢献することが容易となる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

成熟した「持続可能な社会」を実現するための（価値を含めた）総合的な視座、（プロセスを明確にした）政策論的問題解決技法、（よりよいビジネスのための）新たな国際公共財創出につながる創造力を修得する。

■授業形態

講義、双方向、グループディスカッション

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

初回講義時に配布する講義計画に従って、毎週 1.3 時間を目標に必ず予習してくること。課題の小テスト（復習）は、それぞれ約 30 分を使って次の講義までに必ず仕上げてくること。

■授業の概要

第 1 講　国際公共政策と社会経済政策
第 2 講　経済と社会
第 3 講　経済成長と生活の質、幸福度
第 4 講　経済成長政策
第 5 講　貿易・通商政策
第 6 講　労働政策
第 7 講　社会保障政策
第 8 講　国際協力、人間の安全保障
第 9 講　NGO と CSO
第 10 講　国際公共財・国際課税・責任投資原則
第 11 講　国際通貨制度とプルーデンス政策
第 12 講　開発援助政策
第 13 講　少子化対策と教育文化政策
第 14 講　地球環境政策
第 15 講　国際公共政策：総括

■フィードバックの要領

小テストを採点して返却する。最終レポート完成に向けた指導を随時行う。

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：試験の成績、通常の取り組みともに顕著に優れている
評価 A（89 ～ 80 点）：試験の成績、通常の取り組みともに優れている
評価 B（79 ～ 70 点）：試験の成績、通常の取り組みともに良い
評価 C（69 ～ 60 点）：試験の成績、通常の取り組みともに普通
評価 F（59 点以下）　：試験の成績、通常の取り組みともに不十分

■評価方法

期末試験［または最終レポート］の結果（70%）、小テスト・レポート・出席（30%）

■留意点

①本講座は連続性を重視した積み重ね型の講義であり、最初に重要な点を概説する。これらの理解なくしてその後の学習は困難である。②長期的に取り組んで頂くための課題を提示する可能性がある。したがって、第3回目までに全く出席しなかった者は原則として履修を許可しない。

科 目 名　コンピュータネットワーク活用（Utilization of Computer Network）

サブタイトル　インターネットの仕組みを理解し活用する

担当教員　中村　有一

対象学年　3年生以上　　区分　春学期

■講義目的

ネットワーク技術は、いま世の中でもっとも必要とされる技術の１つである。単に概念を理解するだけでなく、具体的にネットワークにコンピュータを接続 し、システムとして機能するようにしなければならない。さらに安定してネットワークを利用するには、セキュリティや信頼性の面にも配慮しておく必要があ る。これらのことを、１つ１つ意味を理解しながらできるようにしていくのがこの講義の目的である。
受講にあたっては、基本的な用語とその概念を理解し、実習を通して、具体的なネットワーク構築に必要な知識を習得する。

■講義分類

ビジネス ICT

■到達目標

現在主流として使われているネットワーク技術 TCP/IP の基礎的な仕組みを理解し、実際にネットワークを利用したり、トラブルに対処したりできるように、知識とスキルを身につける。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

コンピュータネットワークの基礎的な用語を理解し、実際に活用するために演習を通して経験を深める。

■授業形態

講義、演習

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

予習：講義資料を読んでできるだけ理解し、わからない部分は整理しておく。（１．５時間）　復習：資料をもう一度読みなおし、理解できたか確認する。ミニテストなどの結果を振り返る。（１．５時間）

■授業の概要

第１講　ネットワークとプロトコルの話
第２講　物理層の話
第３講　無線ネットワークとデータリンク層の話
第４講　インターネット層の話（1）：IP アドレス、２進数や１６進数
第５講　インターネット層の話（2）：CIDR とネットワークの分割
第６講　インターネット層の話（3）：インターネット層における補完的なプロトコル
第７講　トランスポート層の話：ＴＣＰとＵＤＰの違い、ポート番号
第８講　ドメイン名とＤＮＳの話：アプリケーション層、ホスト名・ドメイン名、ＤＮＳ
第９講　DHCP と文字端末の話：DHCP、TELNET、SSH
第 10 講　ウェブとファイル転送の話：FTP、HTTP
第 11 講　電子メールとネットワーク管理の話：SMTP、POP、IMAP、SNMP、NTP
第 12 講　ルーティングとアドレス変換の話：ルーティングプロトコル、アドレス変換
第 13 講　インターネットセキュリティの話：プロキシサーバ、ファイアウォール
第 14 講　パケットキャプチャの話：パケットキャプチャーツール
第 15 講　暗号と認証の話：公開鍵暗号の基本的な仕組み

■フィードバックの要領

ミニテスト、演習などについて、答え合わせ、講評などのフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：ほぼ完ぺきな理解度と評価
評価 A（89 ～ 80 点）：上位の評価
評価 B（79 ～ 70 点）：中位の評価
評価 C（69 ～ 60 点）：下位の評価
評価 F（59 点以下）　：不十分な理解度と評価

■評価方法

学期末試験 70%　レポートなど平常点 30%

■留意点

コンピュータを使った演習については、自分で必ず実際に動かしてみること。単に本を読むだけでは得られない知識が得られるはずである。

科目名	サービス産業論（Service Industry）
サブタイトル	サービスの市場創造とマネジメント
担当教員	杉田　文章
対象学年	3 年生以上
区分	春学期

■講義目的
「サービス」のプロダクトとしての本質を理解するとともに、狭義の「サービス」製品のみならず、サービス化したといわれるあらゆる産業分野におけるサービスの側面にも着目し、「サービス」産業経済の成長に資する知見を身につける。

■講義分類
顧客理解、ビジネス環境理解、ビジネス創造

■到達目標
① 産業経済におけるサービス産業の必要性と有効性について理解していること。
② プロダクトとしてのサービスの概念について深く理解すること。
③ ①②をふまえて、サービス産業のマネジメントの課題を知り、これを解決する方法論を論じることができること。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項
DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細
サービス産業分野が、国際競争力の確保の上からも、国内市場の成長の観点からも重要な課題であることを深く理解した上で、今後のサービス市場分野の発展に対する知見を説明できる

■授業形態
講義、グループワーク、プレゼンテーション

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容
提示されたテキスト、参考書を中心に、講義内容に即した予習と、講義後に示された課題を講義ごとに行うこと。（1 回につき合計 1.5 時間程度以上）

■授業の概要
第 1 講　本講義の概要、目的、意味を理解する（ガイダンス）
第 2 講　製品（product）としての「サービス」について学ぶ①
第 3 講　社会の「サービス化」と産業の「サービス化」
第 4 講　製品（product）としての「サービス」について学ぶ②
第 5 講　サービスと「おもてなし」 ～グローバル市場における日本文化と産業のマッチング～
第 6 講　分野別サービスマーケティングマネジメント①　レジャー産業におけるサービス
第 7 講　分野別サービスマーケティングマネジメント②　フードサービス
第 8 講　分野別サービスマーケティングマネジメント③　医療福祉
第 9 講　分野別サービスマーケティングマネジメント④　（広義の）教育
第 10 講　サービス製品市場のマーケティング
第 11 講　サービス産業のイノベーション
第 12 講　サービスの品質管理と品質向上マネジメント
第 13 講　サービス価値向上のための SPC を学ぶ
第 14 講　サービス産業・企業の躍進のために。サービス産業拡大の方程式
第 15 講　まとめと振り返り

■フィードバックの要領
講義時に提出するミニレポート等に対して、フィードバックを行う。

■評価基準
評価 A+（90 点以上）：サービス市場を深く理解し、問題解決を提案できる
評価 A（89 ～ 80 点）：サービス産業や市場、製品について深く理解している
評価 B（79 ～ 70 点）：サービス産業や市場、製品について一定の理解をしている
評価 C（69 ～ 60 点）：サービス業と製造業の違いやそれぞれの特徴について説明できる
評価 F（59 点以下）　：「サービス産業」「サービス製品」について説明できない

■評価方法
出席および講義内で課されるミニレポート 3 割、最終レポート 3 割、講義内試験 4 割　の割合で評価する。

■留意点
サービス業に従事しようと考えている学生を想定し、そのキャリア形成に資することを意図して講義を行う予定です。

科目名　事業デザイン論Ⅰ（Business Design Theory Ⅰ）

サブタイトル　事業開発（business creation）の方法論

担当教員　松本　祐一

対象学年　3年生以上　　区分　春学期

■講義目的

企業、行政、ＮＰＯ等、様々な組織が行う営みを、「事業」という同じ枠組みでとらえ、その歴史や特徴を理解し、自分で事業をデザインするための方法論を学ぶ。

■講義分類

顧客理解、ビジネス環境理解、ビジネス創造

■到達目標

事業開発に関する理論と方法を理解し、自分で事業をデザインできるようになること

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

具体的な事業開発の方法を習得し、自分でプランを構想することができる。

■授業形態

講義、グループワーク、フィールドワーク

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

最低 1.5 時間以上のビジネスプランを立案するための情報収集等

■授業の概要

第１講　オリエンテーション
第２講　「事業」とは何か？
第３講　「事業」とは何か？②
第４講　「事業開発」のメカニズム
第５講　「事業開発」の枠組み
第６講　「事業開発」の枠組み②
第７講　環境：どうなるべきか？
第８講　環境：どうなるべきか？②
第９講　使命：どうなりたいか？
第 10 講　能力：どうなれるか？
第 11 講　価値：コンセプト
第 12 講　仕組み：どうやるか？
第 13 講　プロトタイピング
第 14 講　プロトタイピング②
第 15 講　まとめ

■フィードバックの要領

各授業において、各グループのアウトプットに対する評価・アドバイスを実施する。

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：すべての授業に出席。自分でビジネスプランを組み立てられて、独自性がある。
評価 A（89 ～ 80 点）：９割以上出席し、自分でビジネスプランを組み立てることができる。
評価 B（79 ～ 70 点）：８割以上出席し、ビジネスプランももれなく作成できる。
評価 C（69 ～ 60 点）：６割以上出席し、要求されていることにある程度答えられている。
評価 F（59 点以下）　：５割以下の出席率で、要求されていることに答えられていない。

■評価方法

授業中提出のワークシート４０％、中間レポート２０％、最終レポート４０％

■留意点

2018 年度より、履修生をホームゼミごとのグループに分けて、ビジネスプランを企画するアクティブラーニング形式の講義に変えます。履修希望者はかならず第１回、第２回を受講してください。

科 目 名 事業デザイン論 II（Business Design Theory II）

サブタイトル 「ビジネスモデルキャンバス」手法を活用した、事例によるビジネスモデル論

担当教員 手塚　貞治

対象学年 3 年生以上　　**区分** 秋学期

■講義目的
ビジネスモデルを考えるフレームワークを解説したうえで、ビジネスモデルの各種パターンを事例とともに解説する。最後は、演習に準じた形で実際にグループワークを通じて自分たちのビジネスモデル案を構築してもらう。

■講義分類
ビジネス創造、ビジネスマネジメント

■到達目標
自分で事業アイデアを考え、それをビジネスモデルキャンバス等のフォーマットを活用してレポートにとりまとめられるようになる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項
DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細
各種ビジネスモデルのパターンを習得し、成功事例を知ることができる。

■授業形態
講義、プレゼンテーション、レポート作成

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容
①前回講義で提示した「ビジネスモデル変革の方向性」について、ノートに整理する。②取り上げた事例は、ネットや書籍等を通じてその事業内容やビジネスモデル変革についてまとめる（以上、必要時間 1.5 時間）。

■授業の概要
第 1 講　事業デザインとビジネスモデル
第 2 講　ビジネスモデルキャンバス
第 3 講　顧客セグメント
第 4 講　価値提案
第 5 講　チャネル
第 6 講　顧客との関係
第 7 講　主要資源
第 8 講　主要活動
第 9 講　パートナー
第 10 講　収益構造①
第 11 講　収益構造②
第 12 講　ビジネスモデルの作り方
第 13 講　ビジネスモデル案の検討
第 14 講　発表・まとめ
第 15 講　授業内期末テスト

■フィードバックの要領
発表したビジネスモデル案について講評する。

■評価基準
評価 A+（90 点以上）：授業内容を十分理解し、秀逸な独自のビジネスモデル案を考えることができる。
評価 A（89 ～ 80 点）：授業内容を十分理解し、自分なりのビジネスモデル案を作成できる。
評価 B（79 ～ 70 点）：授業内容は理解し、ビジネスモデル案の作り方を理解している。
評価 C（69 ～ 60 点）：一部不十分な点もあるものの、授業内容を理解している。
評価 F（59 点以下）　：授業内容を理解できていない。

■評価方法
授業点（毎回のレポート評価・ビジネスモデル演習）50%　＋　試験点（授業内期末テスト）50%

■留意点
①相当の負荷がかかるため、やる気のある者のみを歓迎する。②授業中の私語や携帯、飲食等他人に迷惑をかける行為は厳禁。即刻退出してもらう。③授業点は、授業内のレポート・演習で評価を行い、２／３以上の出席がないと評価対象としない。なお、参加人数や参加者の理解度に応じて、演習の進め方は変更の可能性がある。

科目名	情報工学概論（Information Engineering）
サブタイトル	情報概論
担当教員	中村　有一
対象学年	3年生以上
区分	秋学期

■講義目的

20 世紀後半からコンピュータや通信の技術が急速に発達し、情報技術が社会や産業に大きなインパクトを与えるようになってきた。さらに 21 世紀になって、それまで予測されていたことがほぼ現実のものとなり、本格的な情報社会が到来した。これに伴って、これまでの工業社会とは異なる考えかたやモラルが必要とされる時代となった。また個人の生活の中にもパソコンなどの情報機器が普及し、それらの原理や役割を正しく把握し、うまく利用することが求められるようになってきた。この講義の目的は、現代の情報社会で必要とされる知識やモラルを身につけ、情報産業などの分野で活躍できる基礎をつくることである。
また、本講義によって情報通信の分野に、より興味をもってもらい、将来のゼミ選択や就職にも参考になるようにしたい。

■講義分類

ビジネス ICT

■到達目標

情報技術の概略を理解すること。情報化にともなう社会変化、産業構造の変化など、大きな流れを把握した上で、さまざまな課題を自分の頭で考えられるような能力を身につける。また情報社会で生きていくうえで必要なモラルについても習得する。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

情報技術と情報社会の分野で、広く重要な用語を理解し、新たな知識を身につけるための基礎とする。

■授業形態

講義、演習

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

予習：講義資料を読んでできるだけ理解し、わからない部分は整理しておく。（1．5時間）　復習：資料をもう一度読みなおし、理解できたか確認する。ミニテストなどの結果を振り返る。（1．5時間）

■授業の概要

第１講　情報とは？：情報とは何か、さまざまな視点から考察する。
第２講　ハードウェア：ミクロな仕組みとマクロな設計思想について学ぶ。
第３講　ソフトウェアの基礎：OS の仕組みと代表的なアプリケーションソフト
第４講　ワードプロセッサ：仕組みと役割、関連する用語について取り上げる。
第５講　表計算ソフト：仕組み、使い方、ＭＯＳ試験対策
第６講　データベース：データベースの仕組み、役割などについて話す。
第７講　ネットワーク技術の基礎：インターネット、携帯電話
第８講　インターネット：インターネットとは何か？さまざまな視点から考察する。
第９講　情報化と社会生活の変化：通信手段の発達史、社会変化と問題点
第 10 講　情報産業の発展：産業構造の変化、新しい情報産業の発展
第 11 講　情報産業と政策：通信放送分野の自由化・規制緩和について考える。
第 12 講　情報社会におけるモラル：情報化によって新しいモラルの考え方が必要になった。
第 13 講　暗号と認証の話：情報社会の基盤として公開鍵暗号の仕組みを理解する。
第 14 講　人工知能の話：トピック的に人工知能の技術を展望する。
第 15 講　ロボットの話：その現状と問題点を考察する。

■フィードバックの要領

ミニテスト、演習などについて、答え合わせ、講評などのフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：ほぼ完ぺきな理解度と評価
評価 A（89 ～ 80 点）：上位の評価
評価 B（79 ～ 70 点）：中位の評価
評価 C（69 ～ 60 点）：下位の評価
評価 F（59 点以下）　：不十分な理解度と評価

■評価方法

学期末試験 70%　レポートなど平常点 30%

■留意点

①スライドの資料は、概略を示したものなので、これだけを読んでも理解できないだろう。復習するときに、内容を整理するた めに使う。②授業中に適宜紹介する参考文献を読むことにより、授業内容をより深く理解できるようにすることが望ましい。

科目名　情報と職業（Information and Profession）

サブタイトル　情報社会における職業人に求められる勤労観と職業倫理

担当教員　齋藤　S. 裕美

対象学年　3 年生以上　　区分　春学期

■講義目的

本講義は，情報と職業についての関わり，情報に関係する職業人（情報処理技術者，ネットワーク技術者など）の役割と責任について理解することを目的とする。
現代の社会において，IT（情報技術）は必要不可欠な存在である。情報技術の進展によって生まれた産業の特徴や情報システムが一般社会生活のなかでどのように使われているかなど，情報技術の現状を把握するとともに，私たちの生活や既存の産業が受けた情報化の影響などについても学習する。
また，情報システムを構築し運用する上で，情報処理技術者やネットワーク技術者が果たすべき役割や責任について理解し，情報技術の専門家に求められる勤労観や職業観を身につけることも目的のひとつである。
さらに本講義によって，将来，情報に関係する職業人を目指す高校生に対して，適切な教育指導が出来るようになることを目指す。

■講義分類

ビジネス環境理解、社会人力育成

■到達目標

情報技術が産業社会や人々の生活に対して及ぼした影響を理解し，情報技術の専門家に求められる倫理観や職業観を身につけることをめざす。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP1　知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

情報と職業の関わり，情報化の影響，情報に関わる職業人の役割と責任について理解する。

■授業形態

講義　グループディスカッション

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

前講までの資料をよく読んでおくこと。また、講義資料に記載されているデータの出所を確認し、当該データや関連のデータにもあたっておくこと。必要な予習・復習時間は各 1.5 時間程度（合計 3 時間程度）である。

■授業の概要

第 1 講　情報社会までの歴史的変遷
第 2 講　戦後の産業構造の変化
第 3 講　情報社会における職業観
第 4 講　情報社会と職業教育
第 5 講　情報産業における職業教育と資格
第 6 講　情報産業の誕生と発展
第 7 講　情報産業の実像
第 8 講　企業における情報化
第 9 講　情報技術と犯罪（暗号化技術など）
第 10 講　情報技術とリスクマネジメント
第 11 講　リスクマネジメントの背景
第 12 講　リスクマネジメントと CSR
第 13 講　CSR と企業の取り組み
第 14 講　職業人として必要な倫理観
第 15 講　職業人として必要な倫理観

■フィードバックの要領

最終講義で全体に対するフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：下記 4 観点を関連づけ，自分の考察を含めてそれらの内容を的確に説明できる。
評価 A（89 ～ 80 点）：下記 4 観点を個別に，自分の考察を含めてそれらの内容を説明できる。
評価 B（79 ～ 70 点）：下記 4 観点について，いずれか 2 つ以上の内容を説明できる。
評価 C（69 ～ 60 点）：下記 4 観点について，いずれか 1 つ以上の内容を説明できる。
評価 F（59 点以下）　：講義内容について著しく理解が不足している。

■評価方法

期末試験 45%、レポートや課題 40%、出席状況 15% に参加態度を加味。次の 4 点を中心に評価する。1: 産業社会の変遷、2: 人々の勤労観や職業観、3: 情報産業の特徴や技術動向、4: 職業人としての役割や責任、倫理観

■留意点

状況によって，講義内容や扱う回の入れ替えを行う場合がある。

科目名	情報ネットワーク（Networking System）
サブタイトル	information network
担当教員	増田　浩通
対象学年	3年生以上
区分	春学期

■講義目的
情報ネットワークの概念と役割，基礎技術，インターネットの概要について学ぶ。

■講義分類
ビジネスICT

■到達目標
ビジネスパスポート試験の問題を解くことができるレベルに到達することを目標とする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項
DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細
ビジネスの中で最低限必要な基礎的なネットワークの知識を身に着けることが出来る。

■授業形態
講義

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容
この授業の資料はパワーポイント形式でＴ－ＮＥＸＴ上にアップロードします。各自予習 1.5 時間以上、授業後パワーポイント資料を見ながら、復習に 1.3 時間以上費やしてください。

■授業の概要
第１講　ガイダンス
第２講　情報化時代のルールとマナー
第３講　通信ネットワークとは
第４講　情報通信ネットワークの基礎知識
第５講　情報格差について
第６講　コンピュータの原理
第７講　個人情報保護
第８講　中間レポートの作成
第９講　画像圧縮
第10講　通信技術の概要
第11講　ネットワークの接続形態とＯＳＩ参照モデル
第12講　情報ネットワークの使われ方
第13講　インターネットの仕組み
第14講　ネットワークセキュリティ
第15講　期末テスト

■フィードバックの要領
課題や試験等に対してフィードバックを行う。

■評価基準
評価 A+（90 点以上）：中間レポートと期末テストで評価方法に基づいて評価する。
評価 A（89 ～ 80 点）：中間レポートと期末テストで評価方法に基づいて評価する。
評価 B（79 ～ 70 点）：中間レポートと期末テストで評価方法に基づいて評価する。
評価 C（69 ～ 60 点）：中間レポートと期末テストで評価方法に基づいて評価する。
評価 F（59 点以下）　：中間レポートの提出がないか、または期末テストを受けないと評価はＦとする。

■評価方法
中間レポート５０％、期末テスト５０％

■留意点

科目名　多国籍企業Ⅰ（Multinational Corporations Ⅰ）

サブタイトル　21 世紀のマルチナショナル・コーポレーションズ
担当教員　飯田　健雄
対象学年　3 年生以上　区分　春学期

■講義目的
21 世紀の多国籍企業の動態を分析していく。とくに、発展途上国もインフラ投資に力を入れる一方で、アメリカ、ヨーロッパ、中国では、ICT のクラウド化や AI の積極的投資を進めている。20 世紀の欧米中心の多国籍企業の動態分析ではなく、21 世紀の直積投資の大きな領域を占める、この二つの大きな潮流を講義していく。

■講義分類
グローバルビジネス、ビジネスマネジメント、ビジネス ICT

■到達目標
春学期は世界の代表的多国籍企業を学んでいく。特に、アメリカの ICT 企業に的を絞り、理解する。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項
DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細
多国籍企業の知識と理解を得ることで、未来の産業の構図を描くことができる。

■授業形態
講義

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容
講義をよりよく理解するために、約 1 時半程度、NHK をはじめとする民放各社の経済ニュースで日本企業や外国企業の動向を知っていこう。日本経済新聞を読んで、世界の企業の動向を知ろう。（1.5 時間）

■授業の概要
第 1 講　IT 産業―ゲーム業界（SCE）
第 2 講　ICT 業界―シスコ・システムズ
第 3 講　ICT 業界―インテル
第 4 講　ICT 業界―グーグル
第 5 講　ICT 業界―マイクロソフト
第 6 講　ICT 業界―アップル
第 7 講　IT 業界―オラクル
第 8 講　ICT 業界―デルコンピュータ
第 9 講　世界のビール業界
第 10 講　日本の商社活動
第 11 講　世界のアパレル業界
第 12 講　世界の小売業界
第 13 講　世界の鉄鋼業界
第 14 講　ウォルト・ディズニー
第 15 講　まとめ

■フィードバックの要領
レポートから得られた全体的感想とまとめを講義の中でフィードバックする。

■評価基準
評価 A+（90 点以上）：すべての講義にでること。試験では、すべてに解答し、90 点以上を取得すること。
評価 A（89 ～ 80 点）：ほとんど講義に出ている学生。試験はすべてに解答し、80 点以上を取得すること。
評価 B（79 ～ 70 点）：10 回以上講義に出席。試験は 5 問中、4 問すべてに解答し、70 点以上を取得すること。
評価 C（69 ～ 60 点）：7 回以上講義に出ること。試験は 5 問中、3 問すべてに解答し、50 点以上を取得すること。
評価 F（59 点以下）　：15 回中、5 回以下、および、試験は 5 問中、3 問以下で 50 点以下の水準にあること。

■評価方法
試験（70%）出席（30%）　試験では書いた分量だけではなく、問題を満たしたその正確さと質を問う。

■留意点

科目名	多国籍企業 II（Multinational Corporations II）
サブタイトル	21 世紀の多国籍企業論
担当教員	飯田　健雄
対象学年	3 年生以上
区分	秋学期

■講義目的
秋学期は多国籍企業の中でインフラ産業に特化している企業を学んでいきます。

■講義分類
グローバルビジネス、ビジネスマネジメント、ビジネス ICT

■到達目標
21 世紀の先進諸国は、B to C から B to B のインフラビジネスに重きをおいた、戦略展開を積極的に進めています。その事業形態の理解を深めましょう。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項
DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細
国際経営の知識と理解を得ることで産業の未来の構図を描けるようにする。

■授業形態
講義

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容
NHK の経済ニュースを見よう。また、日本経済新聞を毎日、読む習慣をつけよう。隔週ごとの項目に関して、約 1 時間半程度、指定教科書を事前に読み、講義後、板書された項目を理解していこう。

■授業の概要
第 1 講　ODA 型のインフラ輸出について
第 2 講　プロジェクト・ファイナンスについて
第 3 講　重厚長大型産業の復活
第 4 講　第三セクターと民営化の違い
第 5 講　先進国のインフラ・プロジェクト
第 6 講　インフラ政策とインフラ管理
第 7 講　随意契約と一般競争入札
第 8 講　レントシーキングの問題
第 9 講　世界のウォータービジネス
第 10 講　バーチャル・ウォーター
第 11 講　商社の変容
第 12 講　PPP について
第 13 講　イギリスの教訓
第 14 講　ケーススタディ
第 15 講　まとめ

■フィードバックの要領
提出されたレポートの全体的感想を述べ、関連する本を指摘・推薦する。

■評価基準
評価 A+（90 点以上）：すべての講義にでること。試験は 5 問中、すべてに解答し、90 点以上を取得すること。
評価 A（89 ～ 80 点）：ほとんど講義に出ること。試験は 5 問中、すべてに解答し、80 点以上を取得すること。
評価 B（79 ～ 70 点）：10 回以上講義に出ること。試験は 5 問中、4 問すべてに解答し、70 点以上を取得すること。
評価 C（69 ～ 60 点）：7 回以上講義に出ること。試験は 5 問中、3 問すべてに解答し、50 点以上を取得すること。
評価 F（59 点以下）　：出席が 5 回以下、および、試験は 5 問中、3 問以下で 50 点以下の水準にあること。

■評価方法
試験（70%）出席（30%）　試験では書いた分量だけではなく、問題を満たしたその正確さと質を問う。

■留意点

科目名　地域観光論（Regional Tourism Theory）

サブタイトル　観光まちづくりの最前線事例と地域ビジネス
担当教員　中庭　光彦
対象学年　3年生以上　区分　春学期

■講義目的
日本の社会経済を支える有力な産業として「観光産業」が注目されています。昔は、大都市の旅行代理店と観光地の宿泊施設が協力して観光客を集めていましたが、今は、各観光地が魅力づくりを競い、インバウンド客も増えてきていますが、「着地マーケティング」の力不足が日本の弱点となっています。本講義前半では、観光に関心のある主に３年生を対象に、観光産業の基本・現状を伝え、「移動する人間」が社会経済を変える影響力や地域観光政策の考え方について学びます。後半では観光まちづくりに焦点を絞り、観光地をつくるマーケティングや政策の戦略について学びます。

■講義分類
ビジネス環境理解、ビジネスマネジメント、地域ビジネス

■到達目標
観光による地域ビジネスの考え方を理解し、基本用語を使って、現代の観光についてレポートを書けるようにする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項
DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細
観光マーケティング、政策の基本的学力を身につけ、現実の観光地域の経営、観光ビジネス・産業を解釈できる能力を習得する。

■授業形態
講義、グループディスカッション

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容
日経新聞過去記事検索データベースで、テーマ内容を調べてくる（予習）。講義・作業の内容をノートに整理してまとめ直す（復習）。両方で１．５時間。

■授業の概要
第１講　オリエンテーション
第２講　観光論が対象とする様々なビジネス
第３講　観光地と観光産業の関係
第４講　観光立国について考える
第５講　コンベンション・ビジネスについて考える
第６講　ケースで考えるホスピタリティビジネス
第７講　テーマパークと観光地の関係について考える
第８講　マスツーリズムからニューツーリズムへ
第９講　ケースで考える観光まちづくり①観光地プロモーションとブランド化を考える
第 10 講　ケースで考える観光まちづくり②観光地ブランド化と文化の関係を考える
第 11 講　ケースで考える観光まちづくり③エコツーリズム
第 12 講　ケースで考える観光まちづくり④歴史の魅力と観光地
第 13 講　ケースで考える観光まちづくり⑤ＤＭＯによる観光地域経営
第 14 講　観光地域づくりの体系
第 15 講　これまでのまとめとレポート作成

■フィードバックの要領
途中レポートを課し、添削を行い全員に返却する。

■評価基準
評価 A+（90 点以上）：講義内容を十分に理解し、新たな情報を加えて伝えることができる。
評価 A（89 ～ 80 点）：講義内容を十分に理解して、伝えることができる。
評価 B（79 ～ 70 点）：おおよその内容は把握しているが、論理的に伝えるまで至っていない。
評価 C（69 ～ 60 点）：内容をあまり理解できておらず、伝えることも十分ではない。
評価 F（59 点以下）　：著しく理解に欠けており、伝えることはできない。

■評価方法
レポート６０%、出席４０%

■留意点

科目名	地域産業論Ⅰ（Local industry Theory Ⅰ）
サブタイトル	地域と共に生きる中小企業の役割と地域産業の発展に向けた方策
担当教員	野坂　美穂
対象学年	3年生以上
区分	春学期

■講義目的
本講義では、地域経済を支える地域産業の意義、地域産業の主な担い手である中小企業の役割について理解することを目的とする。本授業を通じて、地域と産業が持続的に共生し、発展していくためにはどうすれば良いか、自分なりの考えや具体的な方策を示すことができ、将来的な地域産業の一担い手として、自身のあるべき姿（どのような形で地域産業に貢献する人材になりたいかというビジョン）を描けるようになることを目指す。

■講義分類
顧客理解、ビジネス環境理解、地域ビジネス

■到達目標
（1）二次資料（官公庁の報告書や統計データ等、新聞記事・雑誌等）の活用によるレポート作成やプレゼンテーションを行い、情報リテラシーと数量スキルを身につける。（2）グループディスカッションやグループワークを通じて、チーム・ビルディングスキルやファシリテーションスキルを養う。（3）グループディスカッションやケース・スタディを通じて、論理的思考力および問題解決力を身につける。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項
DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細
地域の課題を発見し、その課題に対して自分なりの解決策を提案できるという、「課題解決力」を身につけることができる。

■授業形態
講義、グループワーク、プレゼンテーション

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容
予習・復習時間は、各 90 分～ 120 分程度を要する。指定した動画教材の視聴または配布した新聞（or 雑誌）記事やケース等を読んで要約を行い、さらに内容に関する質問を 3 つ考えること（毎回提出を求めます）。

■授業の概要
第 1 講　イントロダクション：地域経済における地域産業の意義と役割
第 2 講　地域産業の担い手としての中小企業の役割
第 3 講　中小企業が直面する様々な問題
第 4 講　中小企業におけるイノベーションの意義
第 5 講　中小企業におけるＩＴの活用、我が国中小企業におけるＩｏＴの導入可能性
第 6 講　中小企業の海外展開
第 7 講　産業集積と地域イノベーション（1）
第 8 講　産業集積と地域イノベーション（2）
第 9 講　伝統的地場産業の衰退と再生（1）
第 10 講　伝統的地場産業の衰退と再生（2）
第 11 講　一次産業に着目した地域産業の在り方（1）
第 12 講　一次産業に着目した地域産業の在り方（2）被災地の産業復興
第 13 講　地域産業の活性化とＣＳＶ（共通価値の創造）
第 14 講　観光戦略を通じた地域産業の活性化
第 15 講　プレゼンテーション成果発表会

■フィードバックの要領
提出したレポートに対して、コメントを添えて返却する。

■評価基準
評価 A+（90 点以上）：理論や知識の応用、二次資料に基づく分析が十分にでき、グループへの貢献度が高い。
評価 A（89 ～ 80 点）：理論や知識の応用、二次資料に基づく分析ができ、グループへの貢献度が高い。
評価 B（79 ～ 70 点）：理論や知識の応用、二次資料に基づく分析ができ、グループへの貢献度が中程度。
評価 C（69 ～ 60 点）：理論や知識の応用、二次資料に基づく分析が不十分、グループへの貢献度が低い。
評価 F（59 点以下）　：理論や知識の応用、二次資料に基づく分析ができない、グループへの貢献度が低い。

■評価方法
出席 15%、事前・事後学習課題 15%、レポート 20%、グループワークでの貢献度（振り返りシート）20%、最終プレゼンテーション 10%、期末定期試験 20%

■留意点
日常生活において出来る限り、新聞記事（できれば日本経済新聞）や雑誌記事（できれば東洋経済、日経ビジネス等）を読み、中小企業の動向を把握するようにしてください。

科目名	地域産業論 II（Local industry Theory II）
サブタイトル	～中小・ベンチャー企業の役割、問題点、発展形態および経営～
担当教員	丹下　英明
対象学年	3 年生以上
区分	秋学期

■講義目的

本講義は、地域産業において重要な役割を果たす中小･ベンチャー企業について、どのような経営活動を行っているのか、また、特徴や課題は何かなどについて、体系的に学ぶことを目的としています。特に、グローバル化への対応や資金調達など、現在多くの中小企業が抱える課題について、その現状を理解していただきます。
本講義では、一方的な聴講型だけではなく、アクティブ・ラーニング型の授業を目指します。そのため、①講義内でのBRD（小レポート）執筆､②個人またはグループによる研究報告（希望者のみ。研究は講義時間外に行っていただきます）、③ケーススタディによるディスカッションなどを行います。
なお、本講義では、講義内での発表や発言、ディスカッションを重視します。

■講義分類

顧客理解、ビジネスマネジメント、地域ビジネス

■到達目標

本講義では、カリキュラムポリシーに掲げた「問題の分析・解決策提案・実践に必要な考え方の習得」を目指すため、次の2つを到達目標とします。（1）中小企業論で用いられる用語に慣れ､学問的体系と内容が説明できる。（2）中小企業の事例を自ら選び、本講義で得た知識を活用して､当該事例の特徴を説明できる。また､当該事例が抱えている問題点を指摘し､その解決策を提案できる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

中小・ベンチャー企業の現状を分析して課題を明らかにできる課題発見力、課題に対して解決方法を生み出せる創造力を修得する。

■授業形態

講義　グループディスカッション、プレゼンテーション

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

予習：教科書を読み、不明な点は調べる。不明点をはっきりさせて講義に臨む（1.5 時間）。復習：毎授業後にはレポートを提出すること（1.5 時間）。

■授業の概要

第 1 講　ガイダンス：この講義で学ぶこと
第 2 講　中小企業とは何か：中小企業の定義、特徴について
第 3 講　日本経済、地域経済と中小企業
第 4 講　大企業と中小企業
第 5 講　下請システムとものづくり中小企業
第 6 講　グローバル化と中小企業
第 7 講　事業承継と中小企業
第 8 講　集積・ネットワークを活かす中小企業
第 9 講　中小企業金融
第 10 講　起業と経済活性化
第 11 講　ベンチャー企業の創造・経営と支援
第 12 講　イノベーションを展開する中小企業
第 13 講　中小・ベンチャー企業に関する研究報告（1）
第 14 講　中小・ベンチャー企業に関する研究報告（2）
第 15 講　グローバル、地域と中小・ベンチャー企業

■フィードバックの要領

レポートに対し、講義内でコメントし、フィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：中小企業の特徴や問題を理解し、すぐれた解決策を提示できる。
評価 A（89 ～ 80 点）：中小企業の特徴や問題を理解し、解決策を提示できる。
評価 B（79 ～ 70 点）：中小企業の特徴や問題を一応説明できる。
評価 C（69 ～ 60 点）：中小企業の特徴や問題の理解が最低限の水準を満たす。
評価 F（59 点以下）　：中小企業の特徴や問題の理解が水準を満たしていない。

■評価方法

出席（講義内の研究報告や発言）:50%、レポート（BRD）:50%。ただし、教員の指示に従わないなど問題があった者は、減点あるいは単位を付与しない。

■留意点

日頃から、新聞の産業、企業関連の記事（特に、中小企業、ベンチャー企業関連の記事）について、興味をもってチェックしてください。

科 目 名　中級簿記（Intermediate Level Bookkeeping）

サブタイトル　株式会社で行われる商業簿記を学ぶ

担当教員　清松　敏雄

対象学年　3 年生以上　　区分　春学期

■講義目的

本講義は、産業社会を支える最も基本的な情報システムである「簿記」の基本原理についての基礎的な理解を前提に、商業を営む株式会社における簿記についてその仕組みを習得し、商業簿記に関して日本商工会議所が主催する簿記検定試験の２級（日商簿記２級）に合格できる知識と能力を習得することを目的とする。なお、本講義は、財務会計に関する授業と相俟って課題発見、問題解決、ビジネス環境理解、ビジネスマネジメント、実践的知識獲得に有効なものであり、これらの知識・能力の獲得も目的としている。

■講義分類

ビジネスマネジメント

■到達目標

企業の経済活動を会計情報として記録するための技法である「複式簿記」の仕組みについて、株式会社での日常の取引を会計処理できる知識を習得した上で、日本商工会議所主催の簿記検定試験２級（商業簿記）で合格点をとれるレベルの知識を習得すること。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

商業簿記に関する中級レベルの知識を得るとともに、企業で行われる典型的な取引・部分的に応用的な取引に関する理解を得ることや簿記の構造に関する理解を得ることを通じ、企業行動における課題発見能力を習得する。

■授業形態

講義

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

毎回の講義内容の理解度を確認するため、指定した練習問題を解いておくことが必要である。また、講義前にテキストの該当部分を一読しておくこと。講義内容の復習と次回講義の準備には概ね１時間半程度必要になる。

■授業の概要

第１講　テキスト chapter01 と chapter02　株式の発行、剰余金の配当と処分について解説する。
第２講　テキスト chapter03 と chapter04　株主資本の係数変動、税金について解説する。
第３講　テキスト chapter05　商品売買について解説する。
第４講　テキスト chapter06 と chapter07　手形等と銀行勘定調整表について解説する。
第５講　テキスト chapter08　固定資産について解説する。
第６講　テキスト chapter09 と chapter10　リース取引と研究開発費等について解説する。
第７講　テキスト chapter11 有価証券について解説する。
第８講　テキスト chapter12 引当金、chapter13 収益・費用について解説する。
第９講　テキスト chapter14 外貨建取引、chapter15 伝票等について解説する。
第 10 講　テキスト chapter16 精算表、chapter17 帳簿の締め切りについて解説する。
第 11 講　テキスト chapter18 本支店会計について解説する。
第 12 講　テキスト chapter19 連結財務諸表について解説する。
第 13 講　テキスト chapter20 連結財務諸表について解説する。
第 14 講　テキスト chapter21 連結財務諸表について解説する。
第 15 講　いままでの内容の総まとめを行う。

■フィードバックの要領

授業内テストについての解説および多かった誤りに関する補足説明を行う。

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：授業内中間テスト、授業内期末テストの得点合計が 90 点以上
評価 A（89 ～ 80 点）：授業内中間テスト、授業内期末テストの得点合計が 80 点以上 90 点未満
評価 B（79 ～ 70 点）：授業内中間テスト、授業内期末テストの得点合計が 70 点以上 80 点未満
評価 C（69 ～ 60 点）：授業内中間テスト、授業内期末テストの得点合計が 60 点以上 70 点未満
評価 F（59 点以下）　：授業内中間テスト、授業内期末テストの得点合計が 60 点未満

■評価方法

授業内中間テスト　50%、授業内期末テスト　50%

■留意点

1. 本科目の単位取得のためには検定試験に合格できる水準の知識と会計処理能力を身に付けることが求められる。講義を聴くのみの漠然とした理解だけではその水準に達することは困難であり、単位取得のためには宿題及び講義内容の復習を通じて知識の定着を図り、問題演習の積み重ねにより会計処理能力の向上をさせる等の自主学習が必要である。 2. 講義時は教科書と必ず「電卓」を持参すること。

科目名　中国経済論（Chinese Economy）

サブタイトル　中国・大中華圏で活躍できる人財を目指そう
担当教員　バートル
対象学年　3 年生以上　区分　春学期

■講義目的

時代は今､[知] が重要視される知識情報社会となっており､膨大な情報の中から必要な情報を摘出して分析し､未来を洞察していくことが求められている。本講義では、世界経済の牽引役として、また政治や外交面でも国際的プレゼンスの高まりを見せている中国を立体的かつ複眼的な視点で理解を深めるための基本的な知識の習得と知見の広がり、そして日本をめぐる世界潮流、日本企業のビジネス環境を正しく「読む」力の養成を目指す。具体的には、中国や日中間のビジネスの最前線事例を取りあげながら産業社会が求める問題発見能力と問題解決能力及び高度なコミュニケーション能力を備えた人材育成を念頭に置いた講義を行う。受講生は、本講義を通じて習得した知識や得た知見を自分の就職や将来に向けて活用できるようにすることが求められる。

■講義分類

ビジネス環境理解、ビジネスマネジメント、グローバルビジネス

■到達目標

①中国経済に関する基本的な知識を習得し知見を広げ、中国の実像を把握できるようにする。 ②中国経済の現状と課題を分析し、日本企業の新たな経営戦略・ビジネスモデルの立案のほか、日中間の協力の可能性について、履修者が独自の問題意識を持てるようにする。 ③講義で習得した知見を就職活動に利活用できるようにする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

中国経済に関する基礎的な学力や養い、グローバル（中国）とローカル（日本）の関係を意識しながら産業社会で発生する様々な問題に対処していける専門的能力を体系的に修得する。

■授業形態

講義

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

中国や日中経済関係に関する時事問題を始め、講義内容の中で自分自身が関心を持つ分野に関する情報を収集、分析、調査する習慣をつけることが必須。上記準備学習に要する時間は最低２時間以上とする。

■授業の概要

第１講　「中国」とは～ガイダンス 講義の目的・内容の説明、中国の一般事情
第２講　「世界の工場」と「世界市場」の両方の視点から「中国像」を提示する。
第３講　毛沢東時代の中国の政治、経済、社会体制と鄧小平時代の改革開放政策の成果と課題
第４講　高度成長の「光」と「影」(1) - エネルギー需給状況、環境問題を中心に
第５講　高度成長の「光」と「影」(2) - 食料問題を中心に～中国の食料需給状況と今後の見通し～
第６講　高度成長の「光」と「影」(3) - 格差問題を中心に～中国の格差問題の現状と対策～
第７講　高度成長の「光」と「影」(4) - 人口問題を中心に～中国の人口構造の現状と今後の見通し～
第８講　高度成長の「光」と「影」(5) - 戸籍制度と「農民工」問題を中心に
第９講　高度成長の「光」と「影」(6) - 民族問題の歴史的背景と現状、今後の展望を中心に
第 10 講　高度成長の「光」と「影」(7) - 中国の政治体制と中国共産党を中心に
第 11 講　中国の地域開発戦略（1)「東北振興」戦略
第 12 講　中国の地域開発戦略（2)「西部大開発」戦略
第 13 講　中国の地域開発戦略（3）～「中部掘起」戦略～
第 14 講　日中経済関係の現状と課題～日中経済関係の最新状況～
第 15 講　中国経済の最新動向と春学期の講義内容についての総まとめ

■フィードバックの要領

専用ノートやレポートに対しコメントを記入しフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：100 点満点中 90 点以上。
評価 A（89 ～ 80 点）：100 点満点中 89 ～ 80 点。
評価 B（79 ～ 70 点）：100 点満点中 79 ～ 70 点。
評価 C（69 ～ 60 点）：100 点満点中 69 ～ 60 点。
評価 F（59 点以下）　：100 点満点中 59 点以下。

■評価方法

出席 30 点、ミニレポート 30 点、最終レポート 30 点、質問 10 点の 100 点満点で絶対評価。

■留意点

～成績評価について～ 出席と毎回提出する講義メモを重視（30 点＋ 30 点＝ 60 点）する。最終レポート（30 点）は、A4 用紙 3 枚以内。講義内の質問・意見（10 点）は、講義への積極的な参加・貢献として評価し、発言回数に基づいて 1 点～ 10 点の評価を加える。講義メモは、講義内容を理解し、かつ独自の問題意識を持ち、問題解決へ向けての取り組み姿勢が顕著に表れているのかを重視する。採点後、最後に返却してフィードバックを行う。

科 目 名　データサイエンス III（Data Science III）

サブタイトル　経営情報のための統計学 /Applied Statistics for Management & Information Scieces

担当教員　今泉　忠

対象学年　3 年生以上　　区分　春学期

■講義目的

高度情報化社会となり、問題解決のためにはデータを収集して、それをもとに考えることが当然となった。データに関してどのような目的のために収集して、活用するかが重要となってきている。この講義では経営情報におけるデータを活用するための基本力の習得を目指し、統計的データ分析を取り扱う。具体的には、データの要約と因果関係の検証のためのデータ分析を内容とする。このようなスキルは、共通のスキルであるので、受講しておくことをすすめる。なお、講義では実際に検討し、理解を深める事が重要であるので、コンピュータソフトを用いてデータ分析の基礎をも習得する。適宜，グループレポートなどを作成する。

■講義分類

顧客理解、社会人力育成、ビジネス ICT

■到達目標

（1）基礎的な離散分布と連続分布について理解し，統計的思考をもとに実際の場面で活用できる。（2）平均の区間推定や仮説が行える。実際の問題解決問題を，統計的な枠組みで表現し分析できる。（3）分散分析や重回帰モデルを適切に活用できる。因果関係について推測できる。（4）意思決定に役立つ表現ができる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

ビジネス環境で必須の課題解決のためのプロセスと統計的分析力とを学修し，他者に提案する力を修得する

■授業形態

講義、演習

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

各回の最後に課される課題について，データを用いて分析すること．データを整備や分析やレポート作成などに 1.5 時間を費やされるので十分余裕を持ち完了して，指定した期限までに提出すること．

■授業の概要

第 1 講　二項分布再入門
第 2 講　幾何分布とポアソン分布
第 3 講　正規分布再入門
第 4 講　χ 2 分布と F 分布
第 5 講　一元配置分散分析　I
第 6 講　一元配置分散分析　II
第 7 講　分散分析モデル　演習
第 8 講　重回帰モデル
第 9 講　重回帰モデルでのパラメータの推定
第 10 講　回帰分析　モデルの選択
第 11 講　重回帰分析　残差の評価
第 12 講　重回帰モデル　演習
第 13 講　二元配置分散分析
第 14 講　二元配置分散分析 演習　二元配置分散分析に関する演習を行う
第 15 講　まとめ

■フィードバックの要領

提出されたリフレクションシートにもとづき，クラスで対応する

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：目的に応じた統計モデルを選択して、分析を実施、その結果を評価できる。
評価 A（89 ～ 80 点）：因果関係に関するモデルを適切に適用できる
評価 B（79 ～ 70 点）：確率分布をもとにしたモデルを適用できる
評価 C（69 ～ 60 点）：統計モデルを適用できる。
評価 F（59 点以下）　：評価 A+ ～ C までのいずれもできない。

■評価方法

課題提出　60%　　期末試験　40%

■留意点

本講義は、毎回の講義の内容を前提として講義を行う。また、講義ではチーム毎のデータ収集、レポート提出のアクティブラーニングを行うので、1 回目の講義から欠席せずに受講すること。 PC などを利用するので、その準備をすること。

科 目 名　データサイエンス IV（Data Science IV）

サブタイトル　ビジネスで活かすための多変量解析・分類

担当教員　久保田　貴文

対象学年　3 年生以上　　区分　秋学期

■講義目的

さまざまな問題解決のために必要なデータ解析の基礎的な内容を習得し、さらに自ら問題を考えそれを解決できる能力を養います。講義のなかでは、実際のデータを用い、エクセルと R により解析を行いレポートを作成します。

■講義分類

顧客理解，ビジネスマネジメント，ビジネス ICT

■到達目標

データ解析の考え方と手法を十分に理解し様々な問題に対して実際に解析を行い解決につなげることが出来る。手法については，具体的に次の 4 つの項目について習得していること。1．エクセルでのピボットテーブル　2．エクセルを使ったデータ分析（集計･抽出･分類･並べ替え）　3．回帰分析　4．判別分析･クラスター分析。さらに，自ら問題を設定し，本講義で学んだ手法によってそれを解決できることがさらに望ましい。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

データ分析に関する基礎的な学力を養い，産業社会で発生する問題にデータサイエンスの観点から対処する能力を習得する。

■授業形態

講義，グループワーク

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

事前：内容についてあらかじめデータを思い浮かべてイメージする。事後：授業でやった内容を復習する。事前 1.5 時間，事後 1.5 時間程度。

■授業の概要

第 1 講　オリエンテーション
第 2 講　エクセルでクロス集計
第 3 講　エクセルでデータプレゼンテーション
第 4 講　データ分析
第 5 講　レポート（1）
第 6 講　R 入門、多変量解析とは
第 7 講　平均値の差の検定・分散分析
第 8 講　単回帰分析
第 9 講　重回帰分析
第 10 講　レポート（2）
第 11 講　判別分析
第 12 講　レポート（3）
第 13 講　クラスター分析（1）
第 14 講　クラスター分析（2）
第 15 講　まとめとレポート（4）

■フィードバックの要領

課題に対してフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：レポート点で 90 点以上
評価 A（89 ～ 80 点）：レポート点で 80 点以上 89 点以下
評価 B（79 ～ 70 点）：レポート点で 70 点以上 79 点以下
評価 C（69 ～ 60 点）：レポート点で 60 点以上 69 点以下
評価 F（59 点以下）　：レポート点で 59 点以下

■評価方法

レポート 4 回（各 25%）

■留意点

科目名	データ分析実践（Data Analysis Practice）
サブタイトル	ビジネス分野でのデータ利活用
担当教員	佐藤　洋行
対象学年	3年生以上
区分	春学期

■講義目的

ビジネスのインターネット化、ハードウェアの低廉化、デバイスやセンサーの多様化（IoT 含む）により、データの利活用は現在のビジネスに欠くべからざるものとなっている。本講義では、データ利活用の技術的知識をある程度もっている前提で、実際にそれをビジネス分野で応用する上で必要な実学的知識を修得するとともに、データ利活用の発想力を身につけることを目的とする。
具体的には、ビジネス分野でデータ利活用を行う上で必要なオープンソースソフトウェア利用、最新のクラウドサービス、オープンデータなどの技術的な知識を講義する。演習では、オープンソースソフトウェアを利用したデータ分析を体験することで、新たなデータ利活用方法を発想する訓練を行う。なお、講義ではグループワークによるレポート作成やプレゼンテーションを行ってもらう。

■講義分類

ビジネス創造、グローバルビジネス、ビジネス ICT

■到達目標

現状を分析して課題を明らかにできる課題発見力、課題解決に向けたプロセスを明らかにして準備できる計画力、課題に対して新たな価値や解決方法を生み出せる創造力を修得するため、ビジネスでのデータ利活用に必要な知識と技術を身につけることを目標とする。また、本講義は「社会調査士G科目」として申請することも可能である。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

データ分析の基礎技術の学習により、産業社会における課題に数理的にアプローチする技能を習得する。

■授業形態

講義、グループディスカッション、プレゼンテーション

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

postgreSQL および R を利用したデータ分析を行ってもらうので、それらソフトウェアについての必要な知識を毎回の授業の前までに学習しておくこと（1.5 時間程度）。

■授業の概要

第 1 講　イントロダクション　データ利活用入門
第 2 講　データ利活用の基礎（1）理解しておくべき分析手法
第 3 講　データ利活用の基礎（2）オープンデータ
第 4 講　データ利活用の基礎（3）データ利活用に関連したクラウドサービス
第 5 講　データ利活用に関連したオープンソースソフトウェア
第 6 講　ビジネスデータ分析実践①　RDBMS 入門
第 7 講　ビジネスデータ分析実践②　RDBMS によるデータマート作成　1/2
第 8 講　ビジネスデータ分析実践②　RDBMS によるデータマート作成　2/2
第 9 講　ビジネスデータ分析実践③　R による予測　1/2
第 10 講　ビジネスデータ分析実践③　R による予測　2/2
第 11 講　ビジネスデータ分析実践④　R による判別
第 12 講　ビジネスデータ分析実践④　R によるマッチング
第 13 講　データ利活用ビジネスの企画①　ブレインストーミング
第 14 講　データ利活用ビジネスの企画②　プレゼンテーション準備
第 15 講　データ利活用ビジネスの企画②　プレゼンテーションとレポート

■フィードバックの要領

レポートにコメントをつけて返却する。

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：データ利活用の方法について、自分なりの意見を表現することができる
評価 A（89 ～ 80 点）：データ利活用に必要な分野の知識を広範に把握している
評価 B（79 ～ 70 点）：データ利活用に必要な知識の分野にどのようなものがあるか理解している
評価 C（69 ～ 60 点）：データ利活用に必要な知識をある程度理解している
評価 F（59 点以下）　：データ利活用に必要な知識を説明できない

■評価方法

出席 30%、レポート 70%

■留意点

①必ず PC を持参すること。②本講義は毎回、前回講義の内容を理解していることを前提として行う。また、グループワークとしてデータ利活用企画やレポート作成などのアクティブラーニングを行うので、1 回目の講義から欠席せずに受講すること。

科目名	日本経済論（Japanese Economy）
サブタイトル	グローバル視点を踏まえた日本経済論：プレゼンと討論による学び
担当教員	椎木　哲太郎
対象学年	3 年生以上
区分	春学期

■講義目的

日本経済を分析対象とし、経済学的視点、歴史的視点、社会経済システム論的視点からアプローチする。さらに産業、貿易、労働、金融、財政、社会保障といった各分野毎の切り口からも接近を試みる。それによって、日本経済の現状と課題をトータルに把握したい。その上で、経済政策の果たした役割についても具体的事例に即して検討し、日本経済を取り巻く大きな環境変化に対応して、国民生活の質を高めていくための「問題解決策」として、制度改革も含めた経済政策のあり方を考える。グループワークによる調査・報告（プレゼンテーション）と討論（ディスカッション）を中心に、双方向のアクティブラーニング実践として進めていく予定である。

■講義分類

ビジネス環境理解、社会人力育成、グローバルビジネス

■到達目標

経済学の理論を援用し、グローバルな視点に立って日本経済の現状・因果連関を分析し、環境変化に伴って生起する解決すべき諸課題を明確にする中で、日本経済に対するトータルな認識を深め、一市民として、主権者たる日本国民として、経済成長の意味を問いつつ国民生活の質を高めていくための「問題解決策」として、制度改革も含めた望ましい経済政策を構想（評価）することができるようになる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

日本経済の現状、全体像と課題をグローバルな視点から分析・考察し、各分野の課題を明確にした上で、全体知を活用し、プレゼンを通じて解決に向けたプロセス、政策提言を広く発信できるような創造力を修得する。

■授業形態

講義、プレゼンテーション、グループディスカッション

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

最低 20 分の報告のために、シラバス･参考図書を参照し、2 冊以上の専門書を読み、PPT 作成と報告準備に 10 時間以上、最終レポートに 5 時間以上費やすこと。コメンテーターは、必ず 2 点の論点提起を用意すること。

■授業の概要

第 1 講　日本経済論の課題
第 2 講　日本経済へのアプローチ
第 3 講　世界経済の中の日本経済
第 4 講　高度成長とその終焉
第 5 講　バブル経済とその崩壊
第 6 講　長期デフレ不況といわゆる「構造改革」
第 7 講　日本の貿易と直接投資
第 8 講　日本の産業構造
第 9 講　日本の労働市場
第 10 講　日本の金融
第 11 講　日本の財政
第 12 講　日本の税制　　日本の税制の現状と、制度改革の方向性を考える。
第 13 講　日本の社会保障と経済　　社会保障制度の概要と政策の特質を明らかにする。
第 14 講　日本経済の近未来　　2030 年の日本経済を考える。
第 15 講　日本経済の全体像　　歴史的分析と各論から、日本経済の全体像、将来像を考える。

■フィードバックの要領

報告翌週にフィードバック用紙を全員に返却し、最終レポートに向け改善点を告知する。

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：文献が参照され、最終レポート、発表・討論ともに極めて優秀である
評価 A（89 ～ 80 点）：文献が参照され、最終レポート、発表・討論ともに優秀である
評価 B（79 ～ 70 点）：文献が参照され、最終レポート、発表・討論ともに良い
評価 C（69 ～ 60 点）：文献が参照され、最終レポート、発表・討論ともに普通
評価 F（59 点以下）　：最終レポート、発表・討論ともに不十分。文献参照、データの分析ともに不十分

■評価方法

最終レポート（60%）、報告・討論［メモ］・出席（40%）

■留意点

①報告（プレゼン）に際しては、何冊かの参考文献・図書を読んで頂く。②第 1 ～第 3 回の講義で分担（各回の報告者とコメンテーター）を決定するので､(予め希望回を明確にして）必ず出席すること。この間の講義に出席しなかった（分担決定に参加しなかった）諸君には、履修を許可しない。③プレゼン、最終レポート作成にあたっては、MS Office、Excel を使いこなすことを目標とする。

科目名	日本経営論（Japanese Management）
サブタイトル	高度成長とその後を中心に日本の企業経営を学ぶ
担当教員	志賀　敏宏
対象学年	3年生以上
区分	春学期

■講義目的
第二次大戦後の日本の「良い経営・経営者とその経営環境」を事例から学びます。受講生の皆さんが環境を活かした「良い仕事」ができるようになるための歴史的理解と思考力を身につけることを目指します。この目的のために【努力することを強く約束できる人】が履修登録、受講して下さい。

■講義分類
ビジネスマネジメント、ビジネス環境理解、社会人力育成

■到達目標
人の特長と経営環境を活かした良い経営に関して、知識と思考力を身につけること

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項
DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細
良い経営・経営者と経営環境に関する知識を身につけ、「経営と環境、経営と人との関係」を理解する。

■授業形態
講義、ディベート

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容
講義前に、講義対象の経営者について情報収集して 50 文字程度の「人物紹介」を作成する。講義後に、気づきをまとめ、疑問点を調べる。100 文字程度の「人物紹介」を仕上げる（各講義について 1.5 時間）。

■授業の概要
第 1 講　オリエンテーション。本講義の趣旨、全体構成、受講生の目標と課題の説明。
第 2 講　復興期の代表的な経営：復興から世界へ―ソニーのトランジスタラジオ開発と輸出
第 3 講　復興期の代表的な経営：志と伝統を世界へ：キッコーマン醤油米国進出
第 4 講　高度成長前期の代表的な経営：志と技術蓄積で先進国への輝きを－東海道新幹線（1）
第 5 講　高度成長前期の代表的な経営：志と技術蓄積で先進国への輝きを－東海道新幹線（2）
第 6 講　高度成長前期の代表的な経営：志と技術蓄積で先進国への輝きを－自動車産業
第 7 講　高度成長前期の代表的な経営：志と技術で世界をリードービクター VHS ビデオ（1）
第 8 講　高度成長前期の代表的な経営：志と技術で世界をリードービクター VHS ビデオ（2）
第 9 講　高度成後期、経済のサービス化、日本的サービスの開花①－コンビニ。
第 10 講　高度成後期、経済のサービス化、日本的サービスの開花②－宅配便（1）
第 11 講　高度成後期、経済のサービス化、日本的サービスの開花②－宅配便（2）
第 12 講　バブル期：覇者の交代―アサヒスーパードライビール
第 13 講　長期低迷期：ポスト産業資本主義時代の志①－ソニー ペットロボット アイボ
第 14 講　長期低迷期：ポスト産業資本主義時代の志②－ iPS 細胞
第 15 講　最終試験

■フィードバックの要領
フィードバックは、口頭（授業中コメント）、文書添削等（レポート）で行います。

■評価基準
評価 A+（90 点以上）：下記の評価方法と配分に従って 90 点以上
評価 A（89 ～ 80 点）：下記の評価方法と配分に従って 80 点以上、89 点以下
評価 B（79 ～ 70 点）：下記の評価方法と配分に従って 70 点以上、79 点以下
評価 C（69 ～ 60 点）：下記の評価方法と配分に従って 60 点以上、69 点以下
評価 F（59 点以下）　：下記の評価方法と配分に従って 59 点以下

■評価方法
出席 30 点。授業に関するレポート、授業中の発言等 29 点。期末テスト結果を上記に加点し 100 点満点。私語等によっては減点、受講停止を求めます。

■留意点
1. 次の 3 点の約束を守れる人が履修して下さい。①私語･遅刻等で迷惑をかけない人。②映像教材､講義内容に集中しノートをとる人。③事前・事後課題を実行する人。以上を守れない場合は受講停止を求めることがあります。　2.T-NEXT の連絡を見落とした場合は成績に関する異議を受け付けません。　3. 受講を停止する際は必ず履修削除して下さい。皆さんが就活時に成績で不利にならないためです。

科目名	認知心理（Cognitive Psychology）
サブタイトル	個人の認識と問題解決・意思決定
担当教員	大森　拓哉
対象学年	3 年生以上
区分	秋学期

■講義目的
認知心理学は、人間の心のしくみを学ぶ心理学の一分野である。人間が外部の環境や刺激をどう感じ、どう理解しているのかといったしくみを様々な角度から考察する。講義中に自分自身についても当てはめ、実験演習も行う。

■講義分類
顧客理解、ビジネスマネジメント、ビジネス ICT

■到達目標
この授業で学んだことを日常世界の中においても理解・応用できるか、経済・経営活動においてこの知識を応用・適用できるか。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項
DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細
人間の思考を個人の視点から学び、問題解決や意思決定に生かす。

■授業形態
講義、グループワーク

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容
毎回のトピックス関して、参考図書等の当該部分を事前に読了しておくこと（1.0 時間）。また、授業内で取り扱った内容について、自分自身の経験を踏まえた考察をまとめておくこと（0.5 時間）。

■授業の概要
第 1 講　概論
第 2 講　記憶と忘却
第 3 講　知覚と認識
第 4 講　顔表情の認識と感情表出
第 5 講　概念と言語
第 6 講　知識と表象
第 7 講　イメージと空間の情報処理
第 8 講　認知の制御過程
第 9 講　文章理解
第 10 講　推論
第 11 講　問題解決
第 12 講　意思決定
第 13 講　日常世界と認知心理学（1）
第 14 講　日常世界と認知心理学（2）
第 15 講　まとめ

■フィードバックの要領
授業中に調査や心理実験を実施し、即座に結果を示し、個人の思考の評価を行う。

■評価基準
評価 A+（90 点以上）：講義内容を完全に理解できている
評価 A（89 ～ 80 点）：講義内容を理解できている
評価 B（79 ～ 70 点）：講義内容をおおよそ理解できている
評価 C（69 ～ 60 点）：最低限の理解ができている
評価 F（59 点以下）　：講義科目の履修目標に達していない

■評価方法
出席を前提とし、期末定期試験（100%）により評価する。

■留意点
①本講義は、幅広い心理学のうちの一分野である。「消費心理」、「社会心理」等の他の心理学の講義も聴講するとより理解が深まる。②「経営と意思決定」の講義にも関連がある。③講義途中で心理実験やそのレポート提出を求めることがあるので、毎回の出席及び PC の持参は必須。④私語、飲食、授業と関係のない PC 操作、携帯電話操作、帽子・サングラス着用等禁止する。

科目名	ビジネスコミュニケーション III（Business Communication III）
サブタイトル	意思決定と行動経済学
担当教員	後藤　晶
対象学年	3 年生以上　　区分　春学期

■講義目的

我々人間には，わからないことがたくさんある．投資や購買といった経済行動から，進学や結婚といった人生に関わる重大な意思決定も，これからどうなるかわからない状況で行わなければならない．このような時に我々はどのように意思決定を行っているのであろうか．本講義では，経済行動・人間行動の記述的理論である行動経済学・行動意思決定論の基礎について導入し，幅広い観点から不確実性のある状況における人間の意思決定の特徴を学ぶ．さらに，ゲーム理論の観点からコミュニケーションのあり方についても検討する．これらの学習を通じて，社会問題の解決方法と解決が困難な社会問題の構造を把握するために必要な人間行動に関する知識と考え方の獲得を目標とする．また，毎回の講義前に簡単な実験・調査を実施するが，本講義の理解には実際に体感し，共に議論することによって実践的な知識獲得が可能になると考えられるためである．

■講義分類

顧客理解，ビジネス環境理解，社会人力育成

■到達目標

到達目標は以下の通りである．1.「学生は，合理的な意思決定と現実の人間の意思決定の特徴の差異を区別することができる」．2.「学生は，1 に対する理解に基づいて，適切な意思決定ができるようになる」．3.「学生は，ゲーム理論的の観点からの社会や人間行動の分析・理解ができるようになる」．4.「学生は，現実の人間の意思決定やゲーム理論の観点から，相手に意図の伝わるコミュニケーションを行うことができるようになる」．

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

人間の意思決定の特徴に関する知識を獲得した上で，他者に対して自分の意図した表現ができるように，そのコミュニケーション構造にも着目して議論を展開する．

■授業形態

講義，グループディスカッション，グループワーク，

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

授業に際して予習は基本的には要求しないが，復習には各回について 1.5 時間程度を見込み，さらに，小課題には合計 6 時間程度かかることが見込まれる．最終試験に向けて 8 時間以上の準備が必要になることが見込まれる．

■授業の概要

第 1 講　イントロダクション
第 2 講　二重過程理論
第 3 講　フレーミング効果
第 4 講　ヒューリスティック①
第 5 講　ヒューリスティック②
第 6 講　プロスペクト理論の基礎
第 7 講　プロスペクト理論の応用
第 8 講　相関と因果
第 9 講　時間割引
第 10 講　リスク，不確実性と意思決定
第 11 講　幸福と経済学
第 12 講　ゲーム理論の考え方
第 13 講　独裁者ゲーム，最終提案ゲーム，信頼ゲーム
第 14 講　公共財ゲームと社会の構造
第 15 講　倫理・進化・感情と人間行動

■フィードバックの要領

小課題および最終テストに対して全体的な講評を授業時，オンライン上で行う．

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：平常点，小課題，最終テストのいずれもが顕著に優れており，合計点が 90 点である．
評価 A（89 ～ 80 点）：平常点，小課題，最終テストが優れており，合計点が 80 点以上である．
評価 B（79 ～ 70 点）：平常点，小課題，最終テストが十分に良く，合計点が 70 点以上である．
評価 C（69 ～ 60 点）：平常点，小課題，最終テストにおいて，合計点が 60 点以上である．
評価 F（59 点以下）　：平常点，小課題，最終試験の合計が 60 点未満か，他の履修者の勉学を妨げている．

■評価方法

平常点：30%：毎回の講義における履修状況を評価します．小課題：20%：講義の内外で小課題を課します．最終試験：50%：学期末に最終試験を実施し，これらの得点を合計して評価を行います．

■留意点

1. 履修状況に応じて，内容を変更することがある．2. この授業ではパソコンを用いた実験・調査を行い，授業資料は web での配信を予定している．したがって，授業の際には貸与された端末を十分に充電して持参すること．3. Google Classroom を用いて連絡を行うために随時確認すること．4. 本講義は履修者の個人としての生活に密接したものであるために，「いかにして自身の生活に活かすか」という観点からの積極的な履修を期待する．

科目名　ビジネスコミュニケーション IV（Business Communication IV）

サブタイトル　認知心理学を活かして効果的なプレゼンスキルを磨く

担当教員　加藤　みずき

対象学年　3 年生以上　　区分　秋学期

■講義目的

・認知心理学の知覚・注意・感情・記憶といった，消費行動やマーケティングに関連する基本的な知識を修得し，それらの知識に基づいた，より見やすく，わかりやすいプレゼンテーションの仕方について学ぶ。
・自校 PR や広告，商品の宣伝などをテーマとしたプレゼンテーションを通じて，他者にわかりやすく説明する，質疑応答を行うなどの発表に関わるスキルの修得・向上を目指す。

■講義分類

顧客理解　ビジネス環境理解

■到達目標

・認知心理学のうち，知覚・注意・感情・記憶の分野の基礎知識を活用し，身近な広告・ポスターなどの視覚的な効果に気づき，またそれらの良い点・改善点についてあげることができるようになる。
・二回の発表それぞれで，異なるメディア（配布資料，スライド）を用いた場合でも，目的や対象に合わせて見やすく，わかりやすい発表ができるようになる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

発表課題を通じ，自分が持つ情報を相手に分かりやすく，かつ効果的に伝達することができるようになることができる。

■授業形態

グループディスカッション
グループワーク
プレゼンテーション
双方向

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

シラバス記載の事前，事後学習ポイントの詳細については前の授業で指示するので事前に調べてくること。後半はグループでの発表課題が主となるため，授業時間外も発表準備を行うこと。

■授業の概要

第 1 講　＜第 1 講＞ガイダンス・認知心理学とは
第 2 講　＜第 2 講＞協同学習の基本原理・知覚のしくみ
第 3 講　＜第 3 講＞注意と記憶：印象に残りやすい情報とは何か
第 4 講　＜第 4 講＞感情と印象形成：良い印象を与えるための様々な要因
第 5 講　＜第 5 講＞より良い発表のための工夫①：見やすいプレゼン資料とは
第 6 講　＜第 6 講＞より良い発表のための工夫②：話し方・ミラーリング
第 7 講　＜第 7 講＞発表テーマ決定とどんな工夫を行うかの話し合い
第 8 講　＜第 8 講＞構想発表準備と工夫するポイントの確認
第 9 講　＜第 9 講＞構想発表①：プレゼン資料による発表
第 10 講　＜第 10 講＞構想発表②：プレゼン資料による発表
第 11 講　＜第 11 講＞構想発表の振り返り・より良い発表のための工夫②：見やすいスライドとは
第 12 講　＜第 12 講＞本発表準備と工夫するポイントの確認
第 13 講　＜第 13 講＞本発表①：スライドによる発表
第 14 講　＜第 14 講＞本発表②：スライドによる発表
第 15 講　＜第 15 講＞統括とまとめ

■フィードバックの要領

翌週の授業で配付する授業通信の中で回答することでフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：各評価対象において，顕著にすぐれた水準に達している
評価 A（89 ～ 80 点）：各評価対象において，到達すべき水準を十分に超えている
評価 B（79 ～ 70 点）：各評価対象において，到達すべき水準に達している
評価 C（69 ～ 60 点）：各評価対象において，十分とは言えないが最低限の水準を満たしている
評価 F（59 点以下）　：本講義で到達すべき水準に達していない

■評価方法

平常点（50%）：授業内課題への記入・提出などを含めた参加点
発表（50%）：構想発表・本発表の 2 回の発表についてそれぞれ評価する（構想発表：20 点，本発表：30 点）。発表の評価にはルーブリックを用いる。

■留意点

・第 7 講までの出席状況に基づき，均一の者同士での構成でグループ分けを行うため，すべての授業において積極的に参加すること。

科目名 ビッグデータ活用法（Utilizing Method of Big Data）

サブタイトル ビッグデータの理解と具体的な活用法を企業に提案する

担当教員 西村　公児

対象学年 3年生以上　区分 秋学期

■講義目的
自分で問題解決の仮説・検証できる実践力

■講義分類
ビジネス創造、顧客理解、ビジネスICT

■到達目標
ビッグデータの理論とビッグデータを活かしたビジネスへの実践学習

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項
DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細
ビジネスの中で最低限必要な基礎的な数学の思考力を基に，問題解決に向けたプロセスを明確にすることが出来る。

■授業形態
講座・グループワーク・グループディスカッション

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容
毎授業後にはレポートを提出すること（各授業毎 1.5 時間以上の予習・復習）

■授業の概要
第1講　概要・イントロダクション
第2講　AI（人工知能）とは
第3講　AI（人工知能）を実際に活用するには
第4講　ビッグデータとは
第5講　ビッグデータがあるからAIは学習できるとは？
第6講　顕在化した需要に応えるためのプロセスの概要とは
第7講　分析・プランニングを支える基盤とは
第8講　「知ってもらう」ためのビッグデータの活用法
第9講　「興味を持ってもらう」ためのビッグデータの活用法
第10講　「調べてもらう」ためのビッグデータの活用法とは
第11講　「買ってもらう」ためのビッグデータの活用法とは
第12講　「ファンになってもらう」ためのビッグデータ活用法とは
第13講　ビッグデータ活用を支える知識（ツール＆分析手法）
第14講　企業に提案するプレゼンテーション（グループでの立案）
第15講　企業に提案するプレゼンテーション（グループでの立案）

■フィードバックの要領
レポートに対し、コメントを記入してフィードバックを行う。

■評価基準
評価A+（90点以上）：知識・応用力（置換能力）・洞察力（展開力）を身に着けている（実践への応用が可能）
評価A（89～80点）：知識・応用力（置換能力）を身に着けている。（実践に向けた取り組みが可能）
評価B（79～70点）：最低限の知識を身に着けている。（勉強レベル）
評価C（69～60点）：最低限の知識をつけるには取り組み姿勢の改善が必要である
評価F（59点以下）　：Cに達しない程度の大幅な改善を要する

■評価方法
課題レポート（50%）+ プレゼンテーション（グループでの立案）（50%）

■留意点
特になし

科目名　ブランドマネジメント（Brand Management）

サブタイトル　戦略的にブランドを管理、創造

担当教員　村山　貞幸

対象学年　3 年生以上　　区分　秋学期

■講義目的

本講義では、ブランドをエクイティとしてとらえ、それを戦略的に創造、管理するプロセスを学ぶことで実務的知識を修得する。その上で、産業社会の実例に触れ、その課題を分析、解決する策を検討することを通じて、ブランドに関する問題発見、問題解決力を獲得することを目的とする。

■講義分類

顧客理解、ビジネスマネジメント、ビジネス環境理解

■到達目標

本講義は、産業社会で求められるブランドに関する諸概念と戦略的に管理・創造するプロセスを理解し、ビジネスなどにおいて実践的に応用、問題解決できるような力をつけることを目標とする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

戦略的にブランドを管理､創造するための基本的な知識をベースに､ビジネス課題を分析､解決策を立案できるようになる。

■授業形態

講義、双方向、グループワーク

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

学んだ諸概念について実際の組織に当てはめて復習することに 1.5 時間、また、次回の講義に向けてその組織の問題を発見、分析、解決策立案することに 1.5 時間かける。

■授業の概要

第 1 講　オリエンテーション
第 2 講　ブランドの諸概念とその歴史的展開
第 3 講　戦略的ブランドマネジメント 1
第 4 講　戦略的ブランド・マネジメント 2
第 5 講　ブランドパフォーマンスの測定 1
第 6 講　ブランドパフォーマンスの測定 2
第 7 講　ブランド・プラニング 1
第 8 講　ブランド・プラニング 2
第 9 講　ブランド・マーケティング・プログラム 1
第 10 講　ブランド・マーケティング・プログラム 2
第 11 講　ブランドの維持・強化 1
第 12 講　ブランドの維持・強化 2
第 13 講　研究発表 1
第 14 講　研究発表 2
第 15 講　まとめ

■フィードバックの要領

個々の研究について講義で学んだことをベースにコメントを行う。

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：戦略的なブランドマネジメントの企画立案力がきわめて高い。
評価 A（89 ～ 80 点）：戦略的なブランドマネジメントの企画立案力が高い。
評価 B（79 ～ 70 点）：戦略的なブランドマネジメントの企画立案力が平均的。
評価 C（69 ～ 60 点）：戦略的なブランドマネジメントの企画立案力が低い。
評価 F（59 点以下）　：戦略的なブランドマネジメントの企画立案力が著しく低い。

■評価方法

出席（５０%）、レポート（５０%）

■留意点

ケースは受講生の関心により変更する場合がある。

科 目 名　問題解決学特講Ⅰ～Ⅲ（Complex Problem Solving Lecture on a SpecialI Topic Ⅰ～Ⅲ）

サブタイトル　「問題解決能力」を鍛える

担当教員　久保田他

対象学年　3年生以上　　区分　秋学期

■講義目的

皆さんは、これまでの多摩大学での様々な学びの中で、問題解決の様々な手法を学んできました。卒業を目の前に、皆さんは、これまでの学びで得た問題解決能力を実社会で発揮していくための準備をして、社会人としての活躍につなげていかなければなりません。そこでこれまでの学びを振り返り、皆さんが得てきた「問題解決能力」を教員による個別指導の下でブラッシュアップして、実社会での問題解決能力の発揮につなげていきます。この講義では、正解のない問題によりよい答えを導き出せるスキルを確実なものとするため、教員が設定した「問題」に対して、課題の分析、解決策の探索、評価、解決策の選択という問題解決の実践演習を行っていきます。そのなかで、直面する問題から安易に逃げる「人生あきらめ症候群」から脱却して、社会人として当然に要求される「社会人基礎力」を高めていきます。

■講義分類

顧客理解、ビジネス創造、社会人力育成

■到達目標

実社会で使える「問題解決能力」を身につける。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP5 高い志

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

社会人として活躍するための問題解決について学ぶことで，社会における多様な価値観や文化的な背景に対する理解や配慮ができるようになる。また，ルールや約束を守ることができる規律性を身につける事ができる。

■授業形態

双方向、講義

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

講義を受講するにあたっては、教員から個別指導された内容を調べ、次回の講義の際にその内容を報告することが必要で、毎回、概ね1時間 30 分程度の事後学習が必要です。

■授業の概要

第１講　1　大学生活の振り返り（１）
第２講　1　大学生活の振り返り（２）
第３講　2　問題解決の実践演習（１）
第４講　2　問題解決の実践演習（２）
第５講　2　問題解決の実践演習（３）
第６講　2　問題解決の実践演習（４）
第７講　2　問題解決の実践演習（５）
第８講　2　問題解決の実践演習（６）
第９講　2　問題解決の実践演習（７）
第 10 講　2　問題解決の実践演習（８）
第 11 講　2　問題解決の実践演習（９）
第 12 講　2　問題解決の実践演習（１０）
第 13 講　2　問題解決の実践演習（１１）
第 14 講　2　問題解決の実践演習（１２）
第 15 講　3　今後も問題解決能力を高めていくための方策を考える

■フィードバックの要領

課題やレポートに対しフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：革新性を持った確実性のある解決策を提案出来るようになった。
評価 A（89 ～ 80 点）：革新性はないものの確実性のある解決策を提案出来るようになった。
評価 B（79 ～ 70 点）：実現可能性に疑義があるが、一応、問題解決策をとりまとめできた。
評価 C（69 ～ 60 点）：解決策はまとめられたものの、問題の解決に結びつく蓋然性が低い。
評価 F（59 点以下）　：考察能力の不足から、有効な問題解決策を提案できていない。

■評価方法

講義への出席（評価割合 50%）と問題解決の実習でとりまとめた問題解決策の評価（評価割合 50%）の成績により評価する。

■留意点

この講義は、卒業判定で卒業に必要な単位が６単位以内の不足であったことから卒業判定が保留になった者を対象に行う特別講義のため、秋学期の成績がとりまとまった後に発表されるこの科目の履修許可者として指名された者しか履修することができない。シラバスの内容に加えて，担当教員からあらたな内容を教授することがある。

科 目 名 立志特講 I ～ III（Aspiration Lecture on a SpecIal Topic I ～ III）

サブタイトル 「志」の実現のためのロードマップづくり

担当教員 久保田他

対象学年 3 年生以上　**区分** 秋学期

■講義目的

実社会で活躍する大人たちは、様々な経験を積み重ねて、自らを成長させ、社会において必要な存在になることで、安定した生活を確保している。大学での４年間は、大人となって実社会に飛び立つための滑走路であり、この４年間に、まず卒業後の進路を見いだし、それにむかって加速をして、社会人として飛び立っていかなければならないのである。
この講義では、多摩大学で学びのなかで醸成してきた「志」について、卒業を前に整理をして、教員による個別指導の下、その実現のための経路を「ロードマップ」としてとりまとめていく。このとりまとめを通じて、社会人として飛躍していくために、自らの可能性と向き合い、「成長する自分」を創り上げるために、大学の卒業を前に、自分の「人格」を子どもモードから大人モードに切り替えを行うこと目指していく。

■講義分類

顧客理解、ビジネスマネジメント、社会人力育成

■到達目標

「志」を実現するためのロードマップをとりまとめる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP5 高い志

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

多摩大学で醸成した志の実現のためのロードマップをまとめ成長する自分を創り上げるために人格形成させる

■授業形態

双方向、講義

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

講義を受講するにあたっては、教員から個別指導された内容を調べ、次回の講義の際にその内容を報告することが必要で、毎回、概ね 1 時間 30 分程度の事後学習が必要です。

■授業の概要

第 1 講　1　大学生活の振り返り（1）
第 2 講　1　大学生活の振り返り（2）
第 3 講　2　自分の可能性と向き合う（1）
第 4 講　2　自分の可能性と向き合う（2）
第 5 講　2　自分の可能性と向き合う（3）
第 6 講　2　自分の可能性と向き合う（4）
第 7 講　2　自分の可能性と向き合う（5）
第 8 講　2　自分の可能性と向き合う（6）
第 9 講　2　自分の可能性と向き合う（7）
第 10 講　2　自分の可能性と向き合う（8）
第 11 講　2　自分の可能性と向き合う（9）
第 12 講　2　自分の可能性と向き合う（１０）
第 13 講　2　自分の可能性と向き合う（１１）
第 14 講　2　自分の可能性と向き合う（１２）
第 15 講　3　ロードマップをとりまとめる

■フィードバックの要領

課題やレポートに対しフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：実現可能性の高いロードマップが完成出来た。
評価 A（89 ～ 80 点）：成長の道筋が概ねまとまったロードマップが作成出来た。
評価 B（79 ～ 70 点）：さらなる考察が必要だが、一応、今後の目標が発見できた。
評価 C（69 ～ 60 点）：今後、具体性を伴うように見直しが必要だが、一応、目標は発見できた。
評価 F（59 点以下）　：明確な目標の記載があるロードマップが完成できていない。

■評価方法

完成したロードマップ（評価割合 100%）の成績により評価する。

■留意点

この講義は、卒業判定で卒業に必要な単位が６単位以内の不足であったことから卒業判定が保留になった者を対象に行う特別講義のため、秋学期の成績がとりまとまった後に発表されるこの科目の履修許可者として指名された者しか履修することができない。

科目名　プレゼミⅠ（Pre-seminar Ⅰ）

サブタイトル　「社会人マイナス四年生」のゼミ入門

担当教員　専任教員、高瀬

対象学年　1年生以上　　区分　春・秋学期

■講義目的

多摩大学では、大学に入学した時点での学生諸君は、「大学一年生」ではなく、「社会人マイナス四年生」である。それは、諸君が４年後に、社会人になることを前提としているからである。したがって、社会から要求されるものを身につけることが、大学４年間の、諸君のミッション（使命）である。では、「社会から求められるもの」とは何か。多摩大学は、これを総称して「問題解決力」と定義する。つまり、社会とは「問題」の塊そのものであって、社会で役割を担うこと（つまり就職ということ）は、「問題を解決する」ことだ、と考えている。この授業で諸君に求められることは、1）緊張感のある主体的意識、当事者意識を持って参加すること、 2）教員や仲間に対し、可能な限り積極的に「情報発信」をすること 3）考えることと物事を進めることを、同時に行うのを厭わないこと。これらを通じて、4）経営情報学を学び、問題解決能力を身につける４年間の学びの道筋の全体像を把握することである。

■講義分類

社会人力育成、初年次教育

■到達目標

①就業意識に基づいた４年間の学修イメージが確立すること。②学びの対象を主体的に見出せるようになること。③学びの成果に対する現実的期待を抱くことができるようになること。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

「問題」の「発見・分析・解決」に必要なコミュニケーションスキルを習得する。

■授業形態

グループディスカッション、グループワーク、プレゼンテーション

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

この講義では、自らの成長を促すため、講義や演習で学んだことをしっかり身につけるために復習に多くの時間を割く必要がある。この講義での学びを活かすためには、復習に概ね２時間程度の取り組みが必要です。

■授業の概要

第１講　ガイダンス
第２講　コミュニケーション
第３講　多摩大学での学びを考える
第４講　問題解決の演習（1）
第５講　問題解決の演習（2）
第６講　問題解決の演習（3）
第７講　問題解決の演習（4）
第８講　問題解決の演習（5）
第９講　問題解決の演習（6）
第 10 講　問題解決の演習（7）
第 11 講　問題解決の演習（8）
第 12 講　志を考える（1）
第 13 講　志を考える（2）
第 14 講　学科選択説明会
第 15 講　ホームゼミ説明会

■フィードバックの要領

オフィスアワーによる面談やメール等によって、フィードバックを行う。

■評価基準

評価 P（合格）　:総合評価が 60 点以上であり、この講義の到達目標に達したと認められる場合。
評価 F（不合格）:総合評価が 60 点未満で、この講義の到達目標に達していない場合。

■評価方法

①すべてに出席すること。②積極的な受講態度。③クラス毎に指定された最終課題の提出。上記①②③の総合評価（100点満点で、配分は出席 50%、受講態度 30%、最終課題 20%）によって、成績評価を決定する。

■留意点

（1）講義の中で課題を課す場合が多くあり、その課題提出が成績評価に結びつくため、講義を欠席すると単位取得に大きな影響を与えることとなるため、すべての回に必ず出席すること。 （2）かならず配布されたパソコンを持参すること。それ以外の持参物や、予習等については、各担当教員の指示に従うこと。

科 目 名 プレゼミ II（Pre-seminar II）

サブタイトル 「社会人マイナス四年生」のゼミ入門

担当教員 専任教員、高瀬

対象学年 1 年生以上　**区分** 春・秋学期

■講義目的

秋学期に開講する「プレゼミⅡ」では、自らの成長の方向性を見いだすことを中心テーマに、今問題になっている実践的な課題を題材にした「ゼミ形式による学び」を行うことで、問題解決力に磨きをかけていく。そして、見いだした方向性を２年次から所属する「ホームゼミ」の選択につなげていく。

■講義分類

社会人力育成

■到達目標

①就業意識に基づいた４年間の学修イメージが確立すること。②学びの対象を主体的に見出せるようになること。③学びの成果に対する現実的期待を抱くことができるようになること。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

「問題」の「発見・分析・解決」に必要なコミュニケーションスキルを習得する。

■授業形態

グループディスカッション、グループワーク、プレゼンテーション

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

この講義では、自らの成長を促すため、講義や演習で学んだことをしっかり身につけるために復習に多くの時間を割く必要があります。この講義での学びを活かすためには、復習に概ね２時間程度の取り組みが必要です。

■授業の概要

第 1 講　問題解決の演習（1）
第 2 講　問題解決の演習（2）
第 3 講　問題解決の演習（3）
第 4 講　問題解決の演習（4）
第 5 講　問題解決の演習（5）
第 6 講　問題解決の演習（6）
第 7 講　問題解決の演習（7）
第 8 講　学園祭に参加する（1）
第 9 講　学園祭に参加する（2）
第 10 講　学園祭の報告
第 11 講　学科選択説明会
第 12 講　問題解決の演習（8）
第 13 講　問題解決の演習（9）
第 14 講　アクティブ・ラーニング祭に参加する
第 15 講　問題解決の演習（10）

■フィードバックの要領

オフィスアワーによる面談やメール等によって、フィードバックを行う。

■評価基準

評価 P（合格）　:総合評価が 60 点以上であり、この講義の到達目標に達したと認められる場合。
評価 F（不合格）:総合評価が 60 点未満で、この講義の到達目標に達していない場合。

■評価方法

①すべてに出席すること。②積極的な受講態度。③クラス毎に指定された最終課題の提出。上記①②③の総合評価（100 点満点で、配分は出席 50%、受講態度 30%、最終課題 20%）によって、成績評価を決定する。

■留意点

1）講義の中で課題を課す場合が多くあり、その課題提出が成績評価に結びつくため、講義を欠席すると単位取得に大きな影響を与えることとなるため、すべての回に必ず出席すること。2）かならず配布されたパソコンを持参すること。それ以外の持参物や、予習等については、各担当教員の指示に従うこと。3）課題に対してフィードバックを行う。

科 目 名　ホームゼミ（Seminars）飯田　健雄

サブタイトル　ホームゼミナールⅠ（Seminars Ⅰ）

担当教員　飯田　健雄

対象学年　２年生以上　　区分　春・秋学期

■講義目的
ビジネス英語表現の向上を実践的に習得する。

■講義分類
仕事状況に応じた英語表現のワークショップ

■到達目標
異文化コミュニケーションの向上

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項
DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細
論理的表現を理解し、相手に対して首肯させるコミュニケーションを身につける。

■授業形態
グループディスカッション

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容
配布した資料を事前によく読んでおくこと。（1.5 時間）

■授業の概要
第１講　電話の英語Ⅰ
第２講　電話の英語　Ⅱ
第３講　会議の英語Ⅰ
第４講　会議の英語Ⅱ
第５講　交渉の英語　Ⅰ
第６講　交渉の英語Ⅱ
第７講　セールスの英語Ⅰ
第８講　セールスの英語　Ⅱ
第９講　苦情処理の英語Ⅰ
第10講　苦情処理の英語Ⅱ
第11講　プレゼンテーションの英語　Ⅰ
第12講　プレゼンテーションの英語Ⅱ
第13講　英文Ｅメール　Ⅰ
第14講　英文Ｅメール Ⅱ
第15講　総復習

■フィードバックの要領
論理的文章を書く訓練をさせて、文章の明晰化をはからせる。

■評価基準
評価Ｐ（合格）　：ゼミ出席と積極的なビジネス英語表現の獲得
評価Ｆ（不合格）：ゼミにほとんど出席せず、課外活動にも参加しない場合

■評価方法
ゼミ出席・課外活動参加　７割：レポート　３割

■留意点

科 目 名 ホームゼミ（Seminars）石川　晴子

サブタイトル 英語・コミュニケーション・地域活動

担当教員 石川　晴子

対象学年 ２年生以上　**区分** 春・秋学期

■講義目的

石川ゼミは、英語、異文化コミュニケーション、地域社会活動をテーマに、自分の個性や持ち味を生かしながら地域社会、国際社会で社会貢献ができる人材を育てることを目標に活動しています。主な活動内容は、地域小学校の放課後子ども教室での英語授業、国際交流イベント、学内スポーツイベントの企画・運営、英語スピーチ、プレゼンテーション、グループディスカッション、輪読、ムービー制作など多岐にわたります。学生はこれらの活動を通して体験的にチームワーク、コミュニケーション力、自主性を磨き、そこで生じる様々な問題の解決に取り組んでいます。また、そこで出会う子どもから社会人まで様々な背景を持つ人々との交流を通して、社会と自らの在り方について学んでいます。

■講義分類

社会人力育成、グローバルビジネス

■到達目標

ゼミで行う学内、学外の様々な活動を通して、社会人に必要なスキルおよびマナーを身に着けます。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

学外、学内活動、グループワークを通して、対人間力、状況を的確にとらえ、適切な行動をとれる力を身に着ける。

■授業形態

講義、グループワーク、プレゼンテーション

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

レポートの提出、発表準備、資料の作成、小学校訪問の準備等、その都度指示する。（各授業毎 1.5 時間以上の予習･復習）

■授業の概要

第１講　オリエンテーション（ゼミの目標の確認と共有、活動内容・ルール説明等）
第２講　小学校放課後子ども教室におけるゼミ活動についてのオリエンテーション
第３講　効果的なプレゼンテーションの作り方
第４講　プレゼンテーション実践
第５講　発表用パワーポイント資料作成時に気を付けること
第６講　英語（自己紹介、初対面の人へのアプローチ法について学ぶ）
第７講　英語（速読の練習を通して、英語を読む力を身に着ける）
第８講　英語（一分間スピーチの作り方、例、実践）
第９講　英語（ＴＯＥＩＣの概要と演習）
第 10 講　英語（スモールトーク）
第 11 講　国際交流イベント準備（グループでイベント企画のアイディアを出す）
第 12 講　国際交流イベント準備（グループで出したアイディアをより具体的にする、資料等の作成）
第 13 講　英語によるプレゼンテーション準備
第 14 講　英語によるプレゼンテーション
第 15 講　まとめと振り返り

■フィードバックの要領

課題等に対して行う。

■評価基準

評価Ｐ（合格）　:課題への取り組みの総合点が 60%以上である。
評価Ｆ（不合格）:課題への取り組みの総合点が 59%以下である。

■評価方法

毎回の出席を前提とし、課題への取り組み（100%）で評価します。

■留意点

科目名 ホームゼミ（Seminars）出原　至道

サブタイトル 実装技術の習得

担当教員 出原　至道

対象学年 2年生以上　区分 春・秋学期

■講義目的

このゼミナールは、社会に出て通用するシステム構築能力を身につけることを目的とする。ゼミナール開始時のスキルは特に必要としないが、未知の領域に対する旺盛な好奇心、自発的学習能力、平均的な社会性・コミュニケーション能力については既に身につけていることを求める。
2年次では、まず、手法を指定して機能を実現する練習を行い、その後、オリジナルなアイディアを自力で組み上げる段階に進む。
講義時間は週1回であるが、この時間は基本的に、それまでに行った研究の発表の場である。作業時間は各自が別に確保すること。発表の場では、成果を全体で共有し、次回までの目標を明確にすることが求められている。作業はそれ以外の時間に各自行うことになる。
積極的に外部に成果を応募・発表することを奨励する。目標とする代表的な場として、IVRC（日本）、Laval Virtual（フランス）、SIGGRAPH（アメリカ）、SIGGRAPH ASIA（日中韓など）がある。

■講義分類

ビジネス ICT

■到達目標

プロジェクトベースでシステム開発能力を持つ社会人として、社会性・人間性を含めて評価される。「大学で何を勉強したか」ではなく「大学で何を生み出したか」を語ることができる。共通の目的を持つ他国の学生との交流を通じて、単なる言語や文化的興味にとどまらない、高いレベルの国際意識を身につける。
このうち、ホームゼミ1では、大学において実現する目標の計画を立て、必要なスキルを明確化する。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

大学において実現する目標の計画を立て、必要なスキルを明確化する。

■授業形態

講義、グループディスカッション、プレゼンテーション

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

講義時間（原則週1回）は基本的に、それまでに行った研究の発表の場である。作業時間（毎回1.5時間以上）は各自が別に確保すること。発表の場では、成果を全体で共有し、次回までの目標を明確にすること。

■授業の概要

第1講　研究計画の発表と議論を行う。
第2講　研究発表と議論
第3講　研究発表と議論
第4講　研究発表と議論
第5講　研究発表と議論
第6講　研究発表と議論
第7講　研究発表と議論
第8講　研究発表と議論
第9講　研究発表と議論
第10講　研究発表と議論
第11講　研究発表と議論
第12講　研究発表と議論
第13講　研究発表と議論
第14講　研究発表と議論
第15講　研究発表と議論

■フィードバックの要領

毎週、次週への課題を支持する。期末には、休暇期間中の目標を指示する。

■評価基準

評価P（合格）　:F以外
評価F（不合格）:無断欠席。自主的な取り組みが見られない場合。その他信義に反する場合。
平常点については、以下の点を中心に評価する。
・明確な課題意識を持っているか。
・定期的な発表で基礎を固めているか。
期末レポートについては、以下の点を中心に評価する。
・明確な課題意識を持っているか。
・既存研究の中での位置づけがはっきりしているか。
・独創的な視点を持っているか。
・課題に対して成果をあげているか。

■評価方法

平常点（60%）・期末レポート（40%）（絶対基準）。
ただし、期末レポートへの取り組みに応じて、期末レポートの評価の一部を平常点によって評価することがある。

■留意点

科目名 ホームゼミ（Seminars）今泉　忠

サブタイトル データ分析入門ゼミナール

担当教員 今泉　忠

対象学年 2 年生以上　**区分** 春・秋学期

■講義目的

近年、ビジネスにおける問題解決において、データにもとづく解決案提案は必須になってきている。また, 当然、コンピュータを利用する場面が多くなってきている。本演習では、これを、「データ（もの）」という観点から見た場合のデータ分析法やモデル構成法について学ぶ。定量的データ処理能力および統計的分析手法を習得することを目標とする。 統計的データ解析やデータマイニングや意思決定問題についても学ぶ。最終的には卒論の提出を行う。基礎知識の習得については履修者全員に必須とする。

■講義分類

ビジネス ICT

■到達目標

エクセル（関数活用まで）が自在に使えることがホームゼミナール I の目標である。
・統計的データ解析
主として、多変量解析の分野での手法を学ぶ。回帰分析、主成分分析、判別分析について習得する。
・データプレゼンテーション
解決案提案のためのプロセスにおいて、グラフ、チャート、センテンスを利用して提案できるようになる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

産業社会での出来事に関心を持ち，そこで発生するであろう問題や課題を発見したり，解決案をデータにもとづいて提案できる能力を修得する

■授業形態

演習（グループ演習）

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

表計算ソフトを使用するので，EXCEL のピボット計算を利用できるように、予習復習すること。（各 1.5 時間以上）
また，統計ソフト R をインストールし、授業で使用できるようにすること。

■授業の概要

第 1 講　1）基礎知識の習得・学習するのに必要と考えられる基礎を学習する。
第 2 講　1）基礎知識の習得・学習するのに必要と考えられる基礎を学習する。
第 3 講　1）基礎知識の習得・学習するのに必要と考えられる基礎を学習する。
第 4 講　統計分析の基礎
第 5 講　統計分析の基礎
第 6 講　統計分析の基礎
第 7 講　EXCEL を用いて統計分析
第 8 講　EXCEL を用いて統計分析
第 9 講　EXCEL を用いて統計分析
第 10 講　データの分析
第 11 講　データの分析
第 12 講　データの分析
第 13 講　データの分析
第 14 講　データの分析
第 15 講　データの分析

■フィードバックの要領

ゼミ中でのリフレクションシートをもとにフィードバックを行う.

■評価基準

評価 P（合格）　:統計的データ分析の基礎を理解して，実際のデータを分析できるかどうか
評価 F（不合格）:出席も含めたゼミナール活動への参加が低い場合,
出席については全回出席が原則である.

■評価方法

出席 50%，演習レポート 50%

■留意点

データコンペティションなど外部とのコンペティションに参加する

科 目 名　ホームゼミ（Seminars）梅澤　佳子

サブタイトル　よい余暇のあり方は人を幸せにする

担当教員　梅澤　佳子

対象学年　2年生以上　　区分　春・秋学期

■講義目的

本ゼミは文献研究とフィールドワーク、地域活動を3つの柱としています。3年間のゼミ活動を通じて、人生100年を豊かに生きるためのライフ・デザインの考え方を身につけ生活者としての視点、グローカルな視点を養い、問題解決能力を身につけることを目的としています。

■講義分類

社会人力育成、ビジネス創造、顧客理解、地域ビジネス

■到達目標

①文章の読解力、理解力、表現力、②コミュニケーション能力、③コミュニティデザインの手法、④ビジネス創造力、プロジェクトマネジメントの手法を習得すること。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

高い志

■授業形態

グループワーク、調査学習、PBL 学習

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

地域･企業･行政･教育機関等と連携して活動を行っている為、PJ ﾁｰﾑ毎にﾐｰﾃｨﾝｸﾞ、外部団体との打合せ、事前準備、事前・事後の活動（企画書・報告書・議事録等の作成）の時間（各回 1.5 時間以上）を必要とします。

■授業の概要

第1講　ホームゼミナールの目的、目標、仕組みの理解
第2講　ゼミ生による地域プロジェクト紹介
第3講　プロジェクトマネジメントの手法について学ぶ
第4講　今年度の各地域プロジェクト活動計画の立案
第5講　プロジェクトの進捗状況報告
第6講　多摩ニュータウンについて学ぶ①
第7講　多摩ニュータウンについて学ぶ②
第8講　地域活動の発表に向けて
第9講　地域活動の発表に向けて
第10講　地域活動の発表に向けて
第11講　地域活動の発表に向けて
第12講　地域活動の発表に向けて
第13講　地域活動の発表に向けて
第14講　地域発表練習（最終）。
第15講　地域活動の振り返り

■フィードバックの要領

地域 PBL 型 AL を通じて、常時、フィードバックを行います。

■評価基準

評価Ｐ（合格）　:地域連携型ＰＬＢへ積極的に参加し、積極的に役割を果たしていること。
評価Ｆ（不合格）:ゼミや地域活動の参加状況が著しく悪い。

■評価方法

・時間割におけるゼミの出席は前提条件です。
・学内外におけるゼミ活動への参加　50%
・課題提出　50%

■留意点

科 目 名 ホームゼミ（Seminars）大森　拓哉

サブタイトル 心理情報学

担当教員 大森　拓哉

対象学年 ２年生以上　　**区分** 春・秋学期

■講義目的

生活する社会の中で､情報を的確に収集･分析することは必要不可欠である｡本講義では人間行動の調査の方法の習得･データの収集・分析といった一連の流れを経験し、体得することを目的とする。同時に、人間行動のシミュレーションを各自がプログラムを作成することによって行う。最終的には、心理学、統計学、プログラミングの知識と技法を体得し、人間行動の理解とモデリング全般が行えることを目標とする。

■講義分類

ビジネスマネジメント、社会人力育成、ビジネス ICT

■到達目標

人間行動全般の理解と、情報の処理方法、および物事の客観的な判断・意思決定ができること。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

人間の情報処理の過程と仕組みを学び、高度な思考と判断能力を備える。

■授業形態

講義、グループワーク、プレゼンテーション

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

心理学・統計学の学習（各授業毎 1.5 時間以上の予習・復習）

■授業の概要

第１講　実験により、認知心理学・統計学を学ぶ。
第２講　実験により、認知心理学・統計学を学ぶ。
第３講　実験により、認知心理学・統計学を学ぶ。
第４講　実験により、認知心理学・統計学を学ぶ。
第５講　実験により、認知心理学・統計学を学ぶ。
第６講　実験により、認知心理学・統計学を学ぶ。
第７講　実験により、認知心理学・統計学を学ぶ。
第８講　実験により、認知心理学・統計学を学ぶ。
第９講　実験により、認知心理学・統計学を学ぶ。
第 10 講　実験により、認知心理学・統計学を学ぶ。
第 11 講　実験により、認知心理学・統計学を学ぶ。
第 12 講　実験により、認知心理学・統計学を学ぶ。
第 13 講　実験により、認知心理学・統計学を学ぶ。
第 14 講　実験により、認知心理学・統計学を学ぶ。
第 15 講　実験により、認知心理学・統計学を学ぶ。

■フィードバックの要領

毎回の授業内において、すべての課題等に対し個別にフィードバックを行う。

■評価基準

評価 P（合格）　:全てのゼミ活動に出席し、全ての課題を提出すること。
評価 F（不合格）:上記以外

■評価方法

出席点 90%、課題 10%

■留意点

心理学・データ分析関連の話題を題材とし、実験演習を通して人間行動の理解を深める。　各学期ごとに大きなテーマを決め、そのテーマに関連する事柄について、グループワークを中心に、実験・調査演習を行う。扱うテーマは心理学関連である。データを収集し、分析を行うことにより、客観的な論理の展開を行う能力を身につける。各学期末には SRC にて成果を発表する。4 年時には一人一テーマの卒業論文を執筆する。
講義は各回が連続しており、欠席すると次回講義ではフォローできないため、毎回の出席が必須である。無断欠席は即退ゼミとなる。また、正規の時間外にもゼミの活動を行うので、留意すること。春季休業中・夏季休業中のゼミ合宿は参加必須である。

科目名 ホームゼミ（Seminars）奥山　雅之

サブタイトル 地域産業・中小企業研究～地域産業・中小企業を「実学」する～

担当教員 奥山　雅之

対象学年 2年生以上　区分 春・秋学期

■講義目的

地域産業、中小企業について研究するゼミナールです。どんな人でも、生活の場である「地域」とは無縁ではいられません。奥山ゼミは、「地域」の産業・中小企業の現場を大切にします。
3年次までは、各地域で実践的なプロジェクトに参画します。そして4年次は、その成果を踏まえて卒業論文の作成に取り組みます。自分で活躍フィールドを選択し、実学を通じて社会人基礎力と生きた経営学、そして地域経済の感覚を身につけてください。

■講義分類

ビジネス環境理解、ビジネス創造、社会人力育成、地域ビジネス

■到達目標

（1）関心・意欲と「発見力」：何気ない日常生活から「あるべき姿」を発見することができるようにします。
（2）関心・意欲と「創造性」：なかなか解決できそうにない課題に直面しても、物事を様々な角度から見ていくことで、課題解決の糸口がつかめるようにします。
（3）関心・意欲と「チームワーク」：ゼミの運営の中で、「チームワーク」を高めていきます。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

各地域の産業と具体的なかかわりを持つことによって、地域経済・地域産業に関心を持ち、そこにある諸問題を解決するという強い意欲のもとに、解決策を考え、それを実践する。

■授業形態

講義、グループディスカッション、グループワーク、プレゼンテーション、双方向

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

毎週の校内での学習のほか、頻繁に中小企業見学、地域へのフィールドワーク、地域活動の実践を行います。（授業前後併せて 1.5 時間以上学習）

■授業の概要

第1講　オリエンテーション（1）
第2講　オリエンテーション（2）
第3講　中小企業の事例発表と卒業論文準備
第4講　中小企業の事例発表と卒業論文準備
第5講　中小企業の事例発表と卒業論文準備
第6講　中小企業の事例発表と卒業論文準備
第7講　中小企業の事例発表と卒業論文準備
第8講　中小企業の事例発表と卒業論文準備
第9講　中小企業の事例発表と卒業論文準備
第10講　中小企業の事例発表と卒業論文準備
第11講　中小企業の事例発表と卒業論文準備
第12講　中小企業の事例発表と卒業論文準備
第13講　中小企業の事例発表と卒業論文準備
第14講　中小企業の事例発表と卒業論文準備
第15講　まとめ、振り返り

■フィードバックの要領

卒業論文作成のプロセスを通じて、双方向のやり取りを何回も行う。

■評価基準

評価 P（合格）　:校外活動を含めてゼミにしっかりと出席し、課題に対応した解決策を導き出せた。
評価 F（不合格）:ゼミ活動に意欲・適性がみられなかった。無断欠席、連続欠席は不合格。

■評価方法

学外活動を含めたゼミ活動への出席（50%）、積極的な発言を含めたゼミ活動への貢献度（50%）

■留意点

・ホームゼミは教員と学生が力を合わせて運営します。「他人ごと」ではなく、主体性を持ってゼミに参加することを望みます。
・ゼミの仲間は「一生モノ」です。仲間を自分の力としてください。自分も仲間の力となってください。
・皆さんは「多摩大学地域産業・中小企業研究室」の一員あり、社会人と同等に扱われます。社会人との付き合いも多くなりますので、それなりのマナー、作法を身につけて実践してください。

科 目 名 ホームゼミ（Seminars）栢原　伸也

サブタイトル 企業の成長と衰退

担当教員 栢原　伸也

対象学年 ２年生以上　　**区分** 春・秋学期

■講義目的
企業の誕生・成長・衰退・消滅。企業にも人間同様、様々な運命をたどる。企業はどのように成長するだろうか？また衰退するのはどのような理由からであろうか？様々な会社や事業の研究やマーケティングの知識を通じて、企業の成長や衰退のポイントを探る。

■講義分類
ビジネス創造、ビジネスマネジメント、顧客理解

■到達目標
企業や事業を多面的に観察するスキルを身に着ける。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項
DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細
ゼミのテーマとして「企業の成長と衰退」を掲げている。企業の成長や衰退は、社会の変化とどのように関係があるだろうか。また、成長や衰退の陰にある様々な要因とは何か、これらに関心をもち解明する意欲を育てる。

■授業形態
講義、グループワーク、グループディスカッション、プレゼンテーション、フィールドワーク

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容
取り上げる企業や事業の調べ学習等

■授業の概要
第１講　①企業の成長
・マーケティングの知識を概観する。
・上記知識をもとに実際のビジネスの観察をする。
・自分たちでビジネス業績アップの提案を考える。
等。
②企業の衰退
・衰退した企業の概要を調べる。
・経営者の行動や発言を研究する。
・どうすれば衰退を回避できたかを検討する。
等
実例をベースに企業や事業を観察・研究し、成長計画や再建計画等に取り組む。
第２講　１講に同じ。
第３講　１講に同じ
第４講　１講に同じ
第５講　１講に同じ
第６講　１講に同じ
第７講　１講に同じ
第８講　１講に同じ
第９講　１講に同じ
第 10 講　１講に同じ
第 11 講　１講に同じ
第 12 講　１講に同じ
第 13 講　１講に同じ
第 14 講　１講に同じ
第 15 講　１講に同じ

■フィードバックの要領
フィールドワークのレポートのまとめとプレゼン等においてフィードバックを行う。

■評価基準
評価Ｐ（合格）　：マーケティングの基礎知識を身につける。
基礎知識に基づいたフィールドワークが行える。
企業の成長についての戦略が立案できる。
評価Ｆ（不合格）：マーケティングの知識の習得が不十分である。
フィールドワーク等の活動が不十分である。

■評価方法
出席 50%
ゼミ活動の成果 50%

■留意点

科目名　ホームゼミ（Seminars）金　美徳

サブタイトル　「経営・起業」と「情報・戦略」

担当教員　金　美徳

対象学年　2年生以上　　区分　春・秋学期

■講義目的

①経営の知識や企業・業界・情勢の情報の収集・分析を通じて、就活力・働く力・経営戦略力・起業力を身に付ける。
②学生が興味のあるテーマについて調べたり、関心がもてそうなテーマを探し出し、それを自らの専門･得意･強みとする。
③プレゼン力、ディスカッション力、コミュニケーション力などのスキルを習得する。
④ゼミ合宿、企業訪問、社会人との交流などの学外学習や国内外のフィールドワーク（現地調査）を通じて、多くの社会体験やネットワーク作りを行う。

■講義分類

社会人力育成、ビジネス環境理解、ビジネス創造

■到達目標

2年時は、各自の関心のあるテーマ・キーワード・業界・企業を探し出す過程を通じて、情報収集力や現地調査力を身に付ける。
3年時は、各自のテーマについて分析力やグループディスカッション力を身に付ける。
4年時は、各自のテーマについて伝える・表現する・プレゼンする力を身に付ける。また、得意や強みを明確にし、専門分野を確立する。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

学生が設定したテーマにしたがって課題を発見し、その課題を体系的かつ実践的に解決できる課題解決力を修得する。

■授業形態

双方向、プレゼンテーション、グループディスカッション

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

各自のテーマにしたがって書籍･資料･ニュース･時事情報の収集や現地調査を行う。（各授業毎 1.5 時間以上の予習･復習）

■授業の概要

第1講　ガイダンス
第2講　各学生が興味・関心のあるテーマに関する情報を収集し、報告する。
第3講　各学生が興味・関心のあるテーマに関する情報を収集し、報告する。
第4講　各学生が興味・関心のあるテーマに関する情報を収集し、報告する。
第5講　各学生が興味・関心のあるテーマに関する情報を収集し、報告する。
第6講　各学生が興味・関心のあるテーマに関する情報を収集し、報告する。
第7講　各学生が興味・関心のあるテーマに関する情報を収集し、報告する。
第8講　各学生が興味・関心のあるテーマに関する情報を収集し、報告する。
第9講　各学生が興味・関心のあるテーマに関する情報を収集し、報告する。
第10講　各学生が興味・関心のあるテーマに関する情報を収集し、報告する。
第11講　各学生が興味・関心のあるテーマに関する情報を収集し、報告する。
第12講　各学生が興味・関心のあるテーマに関する情報を収集し、報告する。
第13講　各学生が興味・関心のあるテーマに関する情報を収集し、報告する。
第14講　各学生が興味・関心のあるテーマに関する情報を収集し、報告する。
第15講　各学生が興味・関心のあるテーマに関する情報を収集し、報告する。

■フィードバックの要領

レポートの報告や論文作成の進捗状況にしたがってフィードバックを行う。

■評価基準

評価P（合格）　:出席 40%、報告 30%、ディスカッション 30% の合算点が 60% 以上の場合、合格とする。
評価F（不合格）:出席 40%、報告 30%、ディスカッション 30% が 59% 以下の場合、不合格とする。

■評価方法

出席 40%、報告 30%、ディスカッション 30% の割合で評価する。また、学外学習に参加した場合に加点する。

■留意点

ホームゼミでは、3年間、大学生活、学修、専門教育、留学、進路・就職・人生などの指導を行う。

科 目 名 ホームゼミ（Seminars）清松　敏雄

サブタイトル 企業の会計情報の作成と利用

担当教員 清松　敏雄

対象学年 ２年生以上　　**区分** 春・秋学期

■講義目的

ホームゼミナールでは、①就職までの間の自己の成長計画、その修正を繰り返し行う習慣付け、②会計情報の作成方法の理解と実践（日商簿記検定の受検）、③会計情報の利用方法の習得、④海外ゼミ合宿などを通じた視野の拡大、の４点を目的としている。

■講義分類

ビジネス環境理解　社会人力育成　ビジネスマネジメント

■到達目標

①自己の成長計画、その実践、その修正を繰り返し行う習慣を付けること、②会計情報の作成方法を理解し、日商簿記検定などに積極的にチャレンジすること、③会計情報の利用方法を習得すること、④海外ゼミ合宿などを通じて視野を拡大すること

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

簿記学習や会計情報の分析を通じて、現実の企業行動における課題の発見能力や、その対処に必要な思考能力を習得する。

■授業形態

講義、グループディスカッション、グループワーク、プレゼンテーション、双方向

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

授業には前回授業時に示した課題をおこなった上で参加すること。（1.5 時間以上）

■授業の概要

第１講　会計情報の作成と利用
第２講　会計情報の作成と利用
第３講　会計情報の作成と利用
第４講　会計情報の作成と利用
第５講　会計情報の作成と利用
第６講　会計情報の作成と利用
第７講　会計情報の作成と利用
第８講　会計情報の作成と利用
第９講　会計情報の作成と利用
第 10 講　会計情報の作成と利用
第 11 講　会計情報の作成と利用
第 12 講　会計情報の作成と利用
第 13 講　会計情報の作成と利用
第 14 講　会計情報の作成と利用
第 15 講　会計情報の作成と利用

■フィードバックの要領

毎回のゼミの中でディスカッションにおける発言等についてフィードバックを行う。

■評価基準

評価Ｐ（合格）　:到達目標に示した①～④について実践してること
評価Ｆ（不合格）:授業に参加していない場合及び到達目標に示した①～④を実践していない場合

■評価方法

出席（積極的に議論に参加していること）100%。その他（ゼミ継続の条件）はゼミの時間内に説明する。

■留意点

科 目 名　ホームゼミ（Seminars）久保田　貴文

サブタイトル　データサイエンスティストの養成

担当教員　久保田　貴文

対象学年　2年生以上　　区分　春・秋学期

■講義目的

世の中にある様々な課題をビッグデータの解析により，さらに統計的に思考することにより解決することを目的とするデータサイエンスのゼミである。手法としては，以下を想定する。
・データの視覚化　・空間データと地図との連携による可視化
・SNS データを用いたネットワーク分析　・スマホアプリや Web アプリの作成

■講義分類

ビジネス ICT

■到達目標

自らデータ解析を行うことにより，世の中のさまざまな問題について解決を行うことが出来る。
さらに，その方法について説明し，データやデータ解析の結果もしくは作成したアプリケーションによってその正当性を説明し説得することが出来る。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

データサイエンスに関する基礎的な学力を養い，グローバルとローカルの関連性を意識しながら産業社会で発生する様々な問題にデータ分析の結果をエビデンスとして対処していける専門的能力を体系的に修得する。

■授業形態

講義，グループワーク，プレゼンテーション

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

毎授業後には学修した内容をまとめ，また次回の学修内容についてデータ解析の準備を進めること。（1.5 時間＋ 1.5 時間）

■授業の概要

第 1 講　オリエンテーション
第 2 講　データ分析のスキル
第 3 講　データ分析のスキル
第 4 講　データ分析のスキル
第 5 講　データ分析のスキル
第 6 講　データ分析のスキル
第 7 講　データ分析のスキル
第 8 講　中間の報告会
第 9 講　データ分析の結果をプレゼン
第 10 講　データ分析の結果をプレゼン
第 11 講　データ分析の結果をプレゼン
第 12 講　データ分析の結果をプレゼン
第 13 講　データ分析の結果をプレゼン
第 14 講　データ分析の結果をプレゼン
第 15 講　最終報告

■フィードバックの要領

ゼミの内容について，プレゼンや報告書のフィードバックを行う。

■評価基準

評価 P（合格）　:以下の項目について，必要な項目により，問題解決が出来ること。
・データを収集するスキル　・データを解析するスキル　・データ解析の結果を理解し，正しい判断をする能力
・データ解析の結果を文書でまとめる能力
・データ解析の結果をまとめてプレゼンテーションする能力
評価 F（不合格）:以下の項目のいずれについても習得できていなく，データ解析によって問題解決をすることができない，もしくはその可能性を見いだせない。
・データを収集するスキル　・データを解析するスキル　・データ解析の結果を理解し，正しい判断をする能力
・データ解析の結果を文書でまとめる能力
・データ解析の結果をまとめてプレゼンテーションする能力

■評価方法

ゼミ活動により作成した文書もしくはプレゼン資料（100%）。
なお 15 回の出席（もしくはそれと同等の活動）および次のいずれか 1 つを必須とする。
・統計グラフコンクールに出展
・SRC で報告

■留意点

科 目 名 ホームゼミ（Seminars）小西　英行

サブタイトル マーケティング基礎

担当教員 小西　英行

対象学年 ２年生以上　　**区分** 春・秋学期

■講義目的

本ゼミでは、マーケティングの基本をしっかりと学び、各種プロジェクトを通じて学んだマーケティングの実践を通じて、応用力を養います。
小西ゼミの３つの柱　＝①ビジネス系資格取得、②社会人基礎力、③ゼミ生の親睦
⇒就職活動に役立つスキルを磨きます！！
①ビジネス系資格取得：日商流通マーケティング（販売士）検定・日商簿記検定・秘書検定・ＩＴパスポート、宅地建物取引士、、、⇒　合格に向けサポートします！！
②社会人基礎力
（ア）商工会議所等主催の、まちづくりコンペティションへの参加
→　企業とのタイアップによる、製品企画、販売実習など
（イ）大学祭模擬店参加
③ゼミ生の親睦
（ア）春・夏のゼミ合宿
（イ）各種親睦会：新ゼミ生歓迎会、忘年会、新年会、カラオケ、ボーリング　ｅｔｃ

■講義分類

顧客理解、ビジネス環境理解・社会人力育成

■到達目標

マーケティングに関する文献を毎年１冊以上読破して「マーケティング基礎知識」を理解するとともに、まちづくりコンペや大学祭模擬店等を通じて「マーケティング実践力」を身につけることを目標とします。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

マーケティングの基礎知識に基づいて、ビジネス環境を理解し、判断することができる。

■授業形態

講義、グループワーク、フィールドワーク

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

テキスト学習及びフィールドワークそれぞれにおいて、予習１時間以上、復習１時間以上が必要

■授業の概要

第１講　マーケティングとは何か
第２講　顧客価値と顧客満足
第３講　マーケティング戦略の構図
第４講　マーケティング環境の分析
第５講　消費者情報処理
第６講　購買行動
第７講　マーケティング・リサーチ
第８講　製品戦略
第９講　ブランド戦略
第 10 講　価格戦略
第 11 講　流通戦略
第 12 講　マーケティング・コミュニケーション
第 13 講　サービスマーケティング
第 14 講　リレーションシップ・マーケティング
第 15 講　ソーシャル・マーケティング

■フィードバックの要領

メールや個人面談にてフィードバックを行います。

■評価基準

評価Ｐ（合格）　:講義・合宿・模擬店等の全員活動への１００％参加（欠席分はレポート等の課題）
評価Ｆ（不合格）:講義・合宿・模擬店等の全員活動への参加が１００％未満（欠席はレポート等の課題）

■評価方法

出席（１００％）

■留意点

・私のゼミでは、これまでの成績は不問です。
・よく遊びよく学ぶ、個性的な学生の参加を期待します。
・３年間の大学生活を、とことん充実させましょう！！

科目名 ホームゼミ（Seminars）小林　英夫

サブタイトル 組織マネジメントと企業家精神

担当教員 小林　英夫

対象学年 ２年生以上　　**区分** 春・秋学期

■講義目的

本ゼミの目的は、ゼミ活動を通じゼミ生のキャリアの礎を築いていくことである。
本ゼミは「組織マネジメント」を対象領域とする。その中で、「組織行動」と「企業家精神」の２つの分野を基本の研究対象としているが、人が社会で生きていく限り様々な組織との繋がりは欠かせないものであり、何らかの創造的活動を行っている。従って研究テーマはゼミ生の関心に応じて幅広く設定することを可能とするが、設定したテーマに対しては真剣に取り組むことを要求する。
また、大学時代は人格形成においても人間関係形成においても非常に重要な時期である。ゼミはコミュニティとしての役割を果たすものであり、社会活動を学ぶ場としても位置付けられる。
大学生活、ゼミ活動、設定したテーマに対する取り組みを通じて、良き人生を送るための土台を築くことを本ゼミの狙いとする。

■講義分類

ビジネス創造　　ビジネスマネジメント　社会人力育成

■到達目標

・社会人としての仕事をしていく際に大切な常識と物事に対する真摯な取り組み姿勢を身に付ける。
・社会人として、課題を発見し問題解決を行っていくための方法、理論、科学を身に付ける。
・キャリア選択の判断基準ともなり、その選択肢を広げることにも役立つ知識を身に付ける。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

知識獲得や問題解決の前提となる取り組み姿勢としての真摯さを重視して習得する。

■授業形態

グループディスカッション　グループワーク　プレゼンテーション

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

事前ｱｻｲﾝされた課題項目に対し学習してくるとともに、発表資料を準備してくること。ｾﾞﾐ後には、発表内容への教員および他ｾﾞﾐ教員からのｺﾒﾝﾄを取りまとめ、次回発表資料改善に活かすこと。（1.5 時間以上の予習・復習）

■授業の概要

第１講　ゼミ活動の計画策定とメンバーの相互理解
第２講　研究計画書の立案と更新
第３講　前講に同じ
第４講　前講に同じ
第５講　前講に同じ
第６講　前講に同じ
第７講　前講に同じ
第８講　前講に同じ
第９講　前講に同じ
第 10 講　前講に同じ
第 11 講　前講に同じ
第 12 講　前講に同じ
第 13 講　前講に同じ
第 14 講　前講に同じ
第 15 講　前講に同じ

■フィードバックの要領

ゼミナール活動全般に対し毎回のクラス内でコメントを行う。

■評価基準

評価 P（合格）　:下記配点で 60 点以上を合格とする。
評価 F（不合格）:下記配点で 60 点未満を不合格とする。

■評価方法

ゼミへの出席、ゼミ活動への積極的な取組姿勢と建設的意見や質問によるゼミの品質向上への貢献、ゼミにおける発表内容や提出物の質を評価する。
出席（30%）、ゼミ活動への貢献（30%）、ゼミ発表、提出物（40%）

■留意点

科 目 名 ホームゼミ（Seminars）齋藤　S. 裕美

サブタイトル 情報倫理について考える

担当教員 齋藤　S. 裕美

対象学年 2 年生以上　　**区分** 春・秋学期

■講義目的

現代社会において、情報倫理にかかわる問題の解決は急務の課題となっている。
このゼミでは、情報モラルやセキュリティ、メディアについて、知識の修得、問題意識の醸成と問題の発見・分析、問題解決方法の考察を行うことを通じて、各個人の知的な判断に基づいて内的規制・自己統制が行なえるようにすること、すなわち知的論理に基づく判断能力を習得できること、情報社会で必要な倫理的態度とは何かを理解することを目標とする。
また、ゼミを進めていく際に用いるグループディスカッションやブレーンストーミング、KJ 法、アンケート調査、資料調査、データ分析、レポート作成などを通じて、社会に出て必要となる基礎的理論や考える手法、文章力を身につけることも目標のひとつである。
また、2 月にはゼミ内研究発表会において、2、3 年生はグループ研究の成果を、4 年生は卒業研究の成果を発表する。

■講義分類

ビジネス環境理解、社会人力育成、ビジネス ICT

■到達目標

① 情報倫理の分野に関する知識の習得
② 情報倫理の分野に関する問題意識の醸成、問題発見・分析、問題解決方法の考察
③ グループディスカッション、ディベート、ブレーンストーミング、KJ 法、アンケート調査、資料調査、データ分析、論理的文章の論述ができる

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

情報倫理に関わる問題に対し，問題を発見し，その原因を分析し，問題解決に向けた自己の考えを他者に対して説明する能力を養う。
また他社との意見交換を通じて新たな考えや解決方法を生み出せる能力を養う。

■授業形態

グループディスカッション、グループワーク、ディベート、プレゼンテーション

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

報告準備、レジュメ作成、発表資料作成等適宜指示する課題について取り組むこと。（授業前後併せて 1.5 時間以上学習）

■授業の概要

第 1 講　ゼミの概要説明：ゼミで扱う分野や到達目標などゼミで学ぶことは何かを確認する。またゼミ生相互のコミュニケーションを図る。
第 2 講　情報倫理に関するテーマについて、テキストの輪読やグループでのデータ分析、ディベート、個人研究など適宜ゼミ活動を行う。
第 3 講　情報倫理に関するテーマについて、テキストの輪読やグループでのデータ分析、ディベート、個人研究など適宜ゼミ活動を行う。
第 4 講　情報倫理に関するテーマについて、テキストの輪読やグループでのデータ分析、ディベート、個人研究など適宜ゼミ活動を行う。
第 5 講　情報倫理に関するテーマについて、テキストの輪読やグループでのデータ分析、ディベート、個人研究など適宜ゼミ活動を行う。
第 6 講　情報倫理に関するテーマについて、テキストの輪読やグループでのデータ分析、ディベート、個人研究など適宜ゼミ活動を行う。
第 7 講　情報倫理に関するテーマについて、テキストの輪読やグループでのデータ分析、ディベート、個人研究など適宜ゼミ活動を行う。
第 8 講　情報倫理に関するテーマについて、テキストの輪読やグループでのデータ分析、ディベート、個人研究など適宜ゼミ活動を行う。
第 9 講　情報倫理に関するテーマについて、テキストの輪読やグループでのデータ分析、ディベート、個人研究など適宜ゼミ活動を行う。
第 10 講　情報倫理に関するテーマについて、テキストの輪読やグループでのデータ分析、ディベート、個人研究など適宜ゼミ活動を行う。
第 11 講　情報倫理に関するテーマについて、テキストの輪読やグループでのデータ分析、ディベート、個人研究など適宜ゼミ活動を行う。
第 12 講　情報倫理に関するテーマについて、テキストの輪読やグループでのデータ分析、ディベート、個人研究など適宜ゼミ活動を行う。
第 13 講　情報倫理に関するテーマについて、テキストの輪読やグループでのデータ分析、ディベート、個人研究など適宜ゼミ活動を行う。
第 14 講　情報倫理に関するテーマについて、テキストの輪読やグループでのデータ分析、ディベート、個人研究など適宜ゼミ活動を行う。
第 15 講　情報倫理に関するテーマについて、テキストの輪読やグループでのデータ分析、ディベート、個人研究など適宜ゼミ活動を行う。

■フィードバックの要領

活動の単元ごとに個別または全体に対するフィードバックを行う。

■評価基準

評価 P（合格）　：・積極的参加，意欲的取組み
・課題、レポートの内容，記述方法
上記で 60 点以上
評価 F（不合格）：上記評価で評価点 60 点未満

■評価方法

期末レポート 40%、期中のゼミ活動の状況、レポートや課題、発表など 60% に出席状況などを加味して総合的に評価する。

■留意点

科 目 名　ホームゼミ（Seminars）彩藤　ひろみ

サブタイトル　3DCG ゼミ

担当教員　彩藤　ひろみ

対象学年　2 年生以上　　区分　春・秋学期

■講義目的

3DCG をメインに、マルチメディアのスキルを高め、自己表現の手段として使えるようにする。また、プロジェクトを企画実践することにチャレンジする。個人発表もグループ発表も恐れなく、こなせるようになってもらいたい。　キーワードは次のとおり。
問題解決のための科学
ビジネス ICT
クリエティブデザイン
ユーザエクスペリエンス
アプリ開発
IoT（INTERNET OF THINGS）

■講義分類

ビジネス ICT

■到達目標

3DCG 技術以外の何らかの「スペシャリスト」になること。
資格試験はいろいろあるので、各自目標をもって精進すること。
3DCG 検定、色彩検定、マルチメディア検定

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

課題に対して新たな価値や解決方法を生み出せる創造力を修得する。

■授業形態

グループディスカッション、グループワーク、プレゼンテーション、双方向

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

授業前には、Blender ソフトウェアを起動し、使い方に習熟してくること
授業後は、プロジェクトの完成のために自ら努力すること（授業前後併せて 1.5 時間以上学習）

■授業の概要

第 1 講　アイスブレーク
第 2 講　プロジェクト発表
第 3 講　クラウド利用方法、SNS 利用方法ゼミバージョン
第 4 講　ミニ課題①相互評価会
第 5 講　モーションコントロール
第 6 講　ポーズづくりと物理演算シミュレーション
第 7 講　キネクトと３ＤＣＧの関係を理解する
第 8 講　プロジェクト中間成果会の準備
第 9 講　プロジェクト中間発表
第 10 講　3D プリンタを使う
第 11 講　ミニ課題②成果発表
第 12 講　Unity ゲームアプリの作成
第 13 講　プロジェクト成果報告会
第 14 講　最終発表会準備
第 15 講　成果発表会

■フィードバックの要領

ゼミ活動については、すべての努力と成果に対してフィードバックを行う。

■評価基準

評価 P（合格）　:目標に沿って、よく努力したかどうか
評価 F（不合格）:無断欠席の積み重ね。
目標に到達できない。

■評価方法

出席および取り組み態度 50%、課題や発表など定められたアウトプット 50%程度の割合で、総合的に評価する。
学期ごとに 2 回の発表会があり、そこでの作品発表を重視する。
普段からのゼミ参加は必須で、無断欠席は許可しない。
ホームゼミナール VI については卒業論文または卒業設計を提出しないものは不可とする。

■留意点

・普段から積極的にパソコンに親しみ、表現することが好きな人。使う楽しみを知っている人を求める。

科 目 名 ホームゼミ（Seminars）酒井　麻衣子

サブタイトル ビジネスの最前線で活きるマーケティング・データ分析

担当教員 酒井　麻衣子

対象学年 ２年生以上　　**区分** 春・秋学期

■講義目的

本ゼミナールは、マーケティング･データ分析（リサーチ、データマイニング、統計、多変量解析）および　知的プロフェッショナルスキル（ロジカルシンキング、コミュニケーション、ドキュメンテーション、プレゼンテーションを身につけ、ビジネスの現場でデータに基づいた判断・企画・実践ができる人材を育てることを目的とする。
IT（情報技術）の発展により、大量のデータを蓄積し分析できるようになったため、企業活動の現場には多くのデータが溢れている。これからの企業人には、そのデータから価値ある情報を読み取り、活用する能力が必須となる。
特に企業のマーケティング活動においてはさまざまなデータが取得され、活用されるようになっている。みずから正しくデータを取り扱い、膨大なデータの背後に秘められた関係性を明らかにし、データに基づいた意思決定ができるようになることは、企業人として大きな武器となるだろう。

■講義分類

顧客理解、ビジネス環境理解、社会人力育成、ビジネス ICT

■到達目標

２年次：基礎的なデータ分析を確実に行えるようになる。 リサーチの一連の流れを身につける。
３年次：より実践的なリサーチ・データ分析を行えるようになる。
４年次：ビジネスでの活用を視野に入れた創造的なマーケティング・データ分析を実践できるようになる。また卒業論文の執筆を通じて、一つのテーマを深く考え抜く力、論理的にものごとを文章で表現する力を身に着ける。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP2 思考と判断【考え抜く力】

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

マーケティング・データ分析の基礎を身に着け、ビジネス現場での実践（課題の明確化、解決方法の見極め、解決施策の具体化、意思決定）ができるようになる。

■授業形態

講義、グループディスカッション、グループワーク、プレゼンテーション

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

共同研究プロジェクトや卒業研究での取り組みに随時必要となる情報収集、研究テーマに関連する基礎的知識の修得等（1.5 時間以上）

■授業の概要

第１講　２～３年生は企業との共同研究プロジェクト、４年生は卒業論文執筆
第２講　同上
第３講　同上
第４講　同上
第５講　同上
第６講　同上
第７講　同上
第８講　同上
第９講　同上
第 10 講　同上
第 11 講　同上
第 12 講　同上
第 13 講　同上
第 14 講　同上
第 15 講　同上

■フィードバックの要領

企画、資料、プレゼンテーションなどに対し、随時フィードバックを行う。

■評価基準

評価 P（合格）　：・ゼミ活動に自主的・積極的に取り組んだ
・各年次に定めた到達目標水準に達した
評価 F（不合格）：上記基準に到達しない場合

■評価方法

出席および取り組み態度 50%、課題や発表など定められたアウトプット 50%程度の割合で、総合的に評価する。

■留意点

科目名　ホームゼミ（Seminars）佐藤　洋行

サブタイトル　クラウドサービスとデジタルマーケティング

担当教員　佐藤　洋行

対象学年　2年生以上　　区分　春・秋学期

■講義目的

この先､企業のマーケティング活動で必ず重要なテーマとなってくる「クラウドサービス」と「デジタルマーケティング」。本ゼミでは、これら2つに関する知識と経験を得るべく、座学と実践を行う。
グーグル・アマゾン・マイクロソフト、これら3社のクラウドサービスには、名前は違えども同じような機能が揃っているので、まずはそれらの機能を理解するところから始める。その後、実際にECサイトを運営する企業からデータを受託し、クラウド環境で分析を行い、施策を提言する機会をもらう。
最終的には、これらの学習を通して、クラウドサービスとデジタルマーケティングに関するレポートをまとめてもらう。

■講義分類

顧客理解、ビジネス環境理解、社会人力育成、ビジネスICT

■到達目標

物事に積極的に取り組む主体性や目的に向かって周囲の人を動かしていける巻き込み力、失敗を恐れずに粘り強く行動していける実行力を身につけ、国際的ビジネスの場で活躍するとともに、わが国の産業社会の健全たる発展に貢献できるようになるため、クラウドサービスとデジタルマーケティングについて実践的知識を獲得する。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

データ分析とその結果のプレゼンテーションにより、データによる周囲の人々の説得に関する能力を習得する

■授業形態

講義、グループディスカッション、プレゼンテーション

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

2年生：　課題図書を輪読し、ﾚﾎﾟｰﾄの作成（各授業毎1.5時間以上の予習・復習）
3年生：　ｸﾗｳﾄﾞｻｰﾋﾞｽを利用した作業を宿題として課す（週3～4時間）
4年生：　卒業論文の作成（各授業毎1.5時間以上の予習・復習）

■授業の概要

第1講　デジタルマーケティングの基礎①　概要編　1/2
第2講　デジタルマーケティングの基礎①　概要編　2/2
第3講　デジタルマーケティングの基礎②　広告編　1/2
第4講　デジタルマーケティングの基礎②　広告編　2/2
第5講　デジタルマーケティングの基礎③　CRM編　1/2
第6講　デジタルマーケティングの基礎③　CRM編　2/2
第7講　クラウドサービスの基礎①　概要編　1/2
第8講　クラウドサービスの基礎①　概要編　2/2
第9講　クラウドサービスの基礎②　実践編　1/2
第10講　クラウドサービスの基礎②　実践編　2/2
第11講　データ分析の基礎①　SQL基礎知識編
第12講　データ分析の基礎②　SQL実践編　1/2
第13講　データ分析の基礎②　SQL実践編　2/2
第14講　まとめと復習　1/2
第15講　まとめと復習　2/2

■フィードバックの要領

授業中に適宜フィードバックを行う。

■評価基準

評価P（合格）　:クラウドサービスとデジタルマーケティングについて、自身の考えを加えて人に説明することができる。
評価F（不合格）:クラウドサービスとデジタルマーケティングについて、理解できていない

■評価方法

出席50%、授業内で作成するレポート30%、授業外で課す輪読20%

■留意点

必ずPCを持参すること。

科 目 名 ホームゼミ（Seminars）椎木　哲太郎

サブタイトル 社会経済政策　公共政策　歴史

担当教員 椎木　哲太郎

対象学年 2 年生以上　**区分** 春・秋学期

■講義目的

社会経済政策、グローバル近現代史の視点から現代の社会・経済を分析し、直面する諸課題の解決に向けての方途を考究する。毎週のゼミでは、経済、産業・企業分析、時事・政治問題を中心として、プレゼンテーションと討論を通じたコミュニケーション能力の向上に主眼を置き、小レポートの添削による文章表現力強化を図る。そして、歴史を研究する。
＊詳細は 2016 年度春学期、「ホームゼミⅢ」を参照

■講義分類

ビジネス環境理解　社会人力育成　グローカル

■到達目標

ソシオ・エコノミストの眼と、企画・構想力を身に付ける。グローバルな視点とローカルな視座を合わせ持ち、（地球）社会の動向に対する理解を深め、考え抜く力を涵養し、諸課題に対して新たな価値や解決方法を生み出せる創造力、組織目標の達成に貢献する力を培い、高い志を抱いて社会の発展に積極的に関与していくことができるようにしたい。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

幅広い社会的関心を持ち、課題解決に向けた政策論的能力を修得することができる。

■授業形態

グループディスカッション　グループワーク　プレゼンテーション

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

毎週 1.5 時間以上の課題に副った十分な予習・復習を必要とする

■授業の概要

第 1 講　年間計画を立てる
第 2 講　研究計画書の検討
第 3 講　事業環境としての社会・経済（1）
第 4 講　事業環境としての社会・経済（2）
第 5 講　事業環境としての社会・経済（3）
第 6 講　歴史研究
第 7 講　問題解決のための社会経済政策（1）
第 8 講　問題解決のための社会経済政策（2）
第 9 講　問題解決のための社会経済政策（3）
第 10 講　中間発表
第 11 講　文献研究（1）
第 12 講　文献研究（2）
第 13 講　事例研究（1）
第 14 講　事例研究（2）
第 15 講　最終報告

■フィードバックの要領

レポート等を添削し、返却する。

■評価基準

評価 P（合格）　：ゼミへの取り組みが優れている、良い
評価 F（不合格）：ゼミへの取り組みが不十分

■評価方法

平常点 80%、最終報告 20%

■留意点

欠席する場合は、当日昼休みまでに必ずメールで連絡すること

科目名	ホームゼミ（Seminars）志賀　敏宏
サブタイトル	ホームゼミ
担当教員	志賀　敏宏
対象学年	2年生以上
区分	春・秋学期

■講義目的

イノベーションで志を実現し、自分とまわりの人々を幸せにする人間となる。キャリアを考える。
そのために、「イノベーション＝創新」を良く理解し、実現するための知識、意欲を身につける。
結果として、自然に就職力、社会人力の高い人材となる。

■講義分類

顧客理解、ビジネス創造、社会人力育成

■到達目標

①面白いと思えるものをみつける。②それについて、調べ、課題をみつけて、解決のアイデアを出す。③調べたこと、アイデアを、「社会人レベル」でプレゼンテーションする。以上により基礎学力、課題発見力、問題解決力、コミュニケーション力を高める。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

イノベーションに関する関心を高め、イノベーションに関する情報理解を深め、イノベーションに取り組む意欲を高める。

■授業形態

グループワーク、プレゼンテーション、フィールドワーク

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

毎回の活動記録、次回に向けての「調べもの」、プレゼン資料等の準備。時間の目安は 1.5 時間。課題に対してはフィードバックを行う。

■授業の概要

第 1 講　ガイダンス：当学期活動の基本方針や留意点について講義と意見交換
第 2 講　班・人ごとの活動計画立案と、ゼミ全体での「情報収集・処理・発表方法」等の学習 1
第 3 講　班・人ごとの活動計画立案と、ゼミ全体での「情報収集・処理・発表方法」等の学習 2
第 4 講　活動計画立案と全体学習
第 5 講　活動計画立案と全体学習
第 6 講　学外学習（そのための手配含む）と学習結果のまとめ
第 7 講　学外学習（そのための手配含む）と学習結果のまとめ
第 8 講　学外学習（そのための手配含む）と学習結果のまとめ
第 9 講　学外学習（そのための手配含む）と学習結果のまとめ
第 10 講　学外学習（そのための手配含む）と学習結果のまとめ
第 11 講　活動のまとめとプレゼン準備
第 12 講　活動のまとめとプレゼン準備
第 13 講　活動のまとめとプレゼン準備
第 14 講　活動のまとめとプレゼン準備
第 15 講　期末プレゼン

■フィードバックの要領

フィードバックは、口頭（授業中）、文書添削等（レポート、ノート）で行います。

■評価基準

評価 P（合格）　:下記評価方法・配分で 60 点以上
評価 F（不合格）:下記評価方法・配分で 59 点以下

■評価方法

出席点 50 点。日常活動の努力と期末プレゼンへの貢献・成果（到達目標への達成度で評価）50 点。

■留意点

意欲、好奇心、行動力を最優先し、その上で工夫を大切にするゼミです。面白いことのためなら「努力を惜しまない人」を求めます。そういう人が立派な社会人として羽ばたけるようになることを約束します。

科目名	ホームゼミ（Seminars）下井　直毅
サブタイトル	経済学を学ぶ
担当教員	下井　直毅
対象学年	2 年生以上
区分	春・秋学期

■講義目的
この講義では、産業社会における基礎的な政治経済について学ぶ。その際、時事的な経済問題を取りあげ、経済学的に捉えて理解することをめざす。この演習を通じて、経済の表面的な動きに惑わされることなく、変化の本質を見る目が育ち、物事を考える力がついて問題解決ができるようになることをめざす。

■講義分類
ビジネス環境理解、グローバルビジネス、社会人力育成

■到達目標
経済学的なものの考え方の修得をめざす。Word、Excel（マクロ関数を含めて）等のソフトを活用できるようになることをめざす。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項
DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細
ビジネスの中で最低限必要な基礎的な数学の思考力を基に，課題解決に向けたプロセスを明確にすることが出来る。

■授業形態
グループディスカッション、グループワーク、プレゼンテーション、双方向

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容
指定する書籍や論文を事前に読んでくること。その内容の復習と次回の準備には、1.5 時間以上の取組が必要です。

■授業の概要
第 1 講　日本経済の歩み（I）
第 2 講　日本経済の歩み（II）
第 3 講　日本経済の成長（I）
第 4 講　日本経済の成長（II）
第 5 講　日本の経済政策（I）
第 6 講　日本の経済政策（II）
第 7 講　世界経済の歩み（I）
第 8 講　世界経済の歩み（II）
第 9 講　世界経済の成長（I）
第 10 講　世界経済の成長（II）
第 11 講　演習（発表）（I）
第 12 講　演習（発表）（II）
第 13 講　演習（発表）（III）
第 14 講　演習（発表）（IV）
第 15 講　演習（発表）（V）

■フィードバックの要領
レポートに対してコメントを記入して、フィードバックを行う。

■評価基準
評価 P（合格）　：ゼミナールに積極的に参加し、経済学的なものの考え方を修得できている
評価 F（不合格）：ゼミナールへの参加意欲が乏しく、経済学的なものの考え方が修得できていない

■評価方法
ゼミナールへの参加（100%）

■留意点

科 目 名　ホームゼミ（Seminars）杉田　文章

サブタイトル　スポーツやレジャーのマネジメントを通じて、社会に貢献する方法を模索する

担当教員　杉田　文章

対象学年　2年生以上　　区分　春・秋学期

■講義目的

この演習の目的として、2つのことをかかげたい。　第1は、レジャーやスポーツ分野の職業を志望する学生を前提に、これらの分野で提供される製品（財やサービス）のうちの何を大切にするべきか、またそのためには、レジャー産業に関わるためにはどのような能力や知識が必要かについての全体的認識を育ててもらうことである。　第2は、レジャー産業分野における経営を一つの社会現象と捉え、経済現象の一つのケーススタディとして、学習していくことである。　これらの目的を達成するために、以下のような方法、内容によって演習を行う。

■講義分類

顧客理解、ビジネス環境理解、ビジネス創造、社会人力育成

■到達目標

ビジネスに従事する人として社会に対する行為的な態度と理解を持ち、社会に貢献する意欲や能力を持って社会に出ることが、最終的な到達目標である。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP4 表現と技能 社会人力育成

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

社会への理解、洞察と、これに基づく意見表明、他者との調整などの力をはぐくむことを強く意図します。

■授業形態

講義、グループディスカッション、グループワーク、プレゼンテーション

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

自分のメインテーマとなるものを発見し、課題を構造化し、他者にこれを説明できるようになるために、論理的整理と、これをプレゼンテーションする諸技法について学んでいく。（予習・復習 1.5 時間以上）

■授業の概要

第1講　ICE　BREAK
第2講　研究・プロジェクト方法論①
第3講　研究・プロジェクト方法論②
第4講　研究・プロジェクト方法論③
第5講　研究・プロジェクト方法論④
第6講　研究・プロジェクト方法論⑤
第7講　研究・プロジェクトの実行①
第8講　研究・プロジェクトの実行②
第9講　研究・プロジェクトの実行③
第10講　キャリア学習①
第11講　キャリア学習②
第12講　キャリア学習③
第13講　プロジェクト例（フットサルのプロモーション）
第14講　プロジェクト例（フットサルのプロモーション）
第15講　外部への発表とその振り返り、総括

■フィードバックの要領

課題に対しフィードバックを行う。

■評価基準

評価 P（合格）　：以下の条件を満たした場合、P 評価とする。
① ゼミの目的を理解しそれに沿った活動を実践すること
② ①により、社会人基礎力を持った人材と認められる資質を持つ方向に「成長」していること
③ 毎回のゼミへの参加
④ 年2回（9月後半、1月後半または2月前半）の、ゼミ内合同研究発表会での発表
⑤ SRC への発表
⑥ （4年秋学期）卒業論文の執筆、提出、発表
評価 F（不合格）：上のいずれかの条件を満たさなかったと認められた時、F 評価とする

■評価方法

評価項目①～⑥をすべて満たした場合に P とする。総合評価となる。

■留意点

ゼミによる学習は、講義よりもより主体的、積極的な取り組みが重要となる。当事者意識を持って、同志となった他のゼミ生と互いに影響し合って成長するという強い意思を持った（またはそうなりたいと強く望んでいる）学生の参加を希望します。

科 目 名 ホームゼミ（Seminars）丹下　英明

サブタイトル 「グローバル化と地域産業・企業」研究室

担当教員 丹下　英明

対象学年 ２年生以上　　**区分** 春・秋学期

■講義目的

本ゼミでは、地域産業や中小・ベンチャーについて、研究していきます。具体的には、「グローバル化と地域産業・企業」を主なテーマとして、皆さんと学んでいきます。
グローバル化が進む中で、地域産業や企業は、大きな変革を求められています。海外直接投資によって海外に進出する企業もあれば、国内からの輸出で海外市場開拓を目指す企業もいます。インバウンドによって需要が増加している地域産業もあれば、海外製品との競争激化によって、厳しい状況にある地域産業もあります。
本ゼミでは、こうしたグローバル化によって、地域産業や中小・ベンチャー企業が直面する現状や課題を分析し、地域ビジネスやグローバビジネスの今後の方向性を考えていきます。そのため、文献調査だけでなく、実際の現場に出て調査することを重視します。

■講義分類

顧客理解、社会人力育成、地域ビジネス

■到達目標

地域産業や中小・ベンチャー企業が直面する問題を自らの足で調べて発見し、その課題に対する解決策を提示する問題解決力を獲得することを目指します。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

ビジネスの中で最低限必要な基礎的な思考力を基に，課題解決に向けたプロセスを明確にすることが出来る。

■授業形態

講義、グループディスカッション、グループワーク、プレゼンテーション

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

予習：ゼミで議論する企業や地域について、インターネットなどで概要を調べる（1.5 時間）。復習：ゼミでの議論を踏まえて、報告書を作成する（1.5 時間）

■授業の概要

第１講　オリエンテーション（1）
第２講　オリエンテーション（2）
第３講　事例研究によると地域産業、中小・ベンチャー企業の理解と PJ 準備に向けた GW
第４講　事例研究によると地域産業、中小・ベンチャー企業の理解と PJ 準備に向けた GW
第５講　事例研究によると地域産業、中小・ベンチャー企業の理解と PJ 準備に向けた GW
第６講　事例研究によると地域産業、中小・ベンチャー企業の理解と PJ 準備に向けた GW
第７講　事例研究によると地域産業、中小・ベンチャー企業の理解と PJ 準備に向けた GW
第８講　フィールドワーク～地域産業・中小ベンチャー企業研究～
第９講　事例研究によると地域産業、中小・ベンチャー企業の理解と PJ 準備に向けた GW
第 10 講　事例研究によると地域産業、中小・ベンチャー企業の理解と PJ 準備に向けた GW
第 11 講　事例研究によると地域産業、中小・ベンチャー企業の理解と PJ 準備に向けた GW
第 12 講　事例研究によると地域産業、中小・ベンチャー企業の理解と PJ 準備に向けた GW
第 13 講　事例研究によると地域産業、中小・ベンチャー企業の理解と PJ 準備に向けた GW
第 14 講　フィールドワーク～地域産業・中小ベンチャー企業研究～
第 15 講　まとめ

■フィードバックの要領

報告書など成果物に対して、講義内でコメントを行う。

■評価基準

評価 P（合格）　:学外活動を含めたゼミ活動に主体的に参加し、問題解決力を獲得できた。
評価 F（不合格）:学外活動を含めたゼミ活動を 5 回以上欠席するなど、ゼミ活動に貢献できなかった。

■評価方法

学外活動を含めたゼミ活動への出席（50%）、積極的な発言を含めたゼミ活動への貢献度（50%）

■留意点

・積極的に現場に出て、課題を自ら発見し、解決に向けて行動してください。ゼミのメンバーと一生仲良くし、人脈を築いてください。知識だけでなく、実際の問題解決力や思考力を身に着けてください。

科目名　ホームゼミ（Seminars）趙　佑鎭

サブタイトル　「環境と経営」の総合的理解 / マーケティング知識と大局観の涵養

担当教員　趙　佑鎭

対象学年　２年生以上　　区分　春・秋学期

■講義目的

本演習では「マーケティング」、「経営組織論」、「ベンチャー企業経営」、「流通」、「教養と歴史観」をテーマとして「環境と戦略」の具体的なケースを扱いながら企業経営の現実を理解することを目的とする。最前線事例としての具体的なケースをもとにグループディスカッション及び問題解決に関連するプレゼンテーションを通じて、経営における「智者は未萌にみる」とは何かを互いに意識できること（学生も教員に気づきを与える）を期待するものである。

■講義分類

顧客理解、ビジネス環境理解、グローバルビジネス

■到達目標

「環境と経営」の総合的理解・「マーケティング」・「ベンチャー企業経営」・「経営組織論」の３つのテーマにおける基礎知識の理解・学生と教員、ゲスト講演者（経営者等）との活発な発言、ディスカッションを通じてのコミュニケーション力の向上・教養知識と歴史観の涵養

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP5 高い志

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

マーケティング知識と大局をみる教養・歴史観の涵養を通じて、社会の問題発見と解決に関与していく高い志を確立する

■授業形態

講義、グループディスカッション、双方向授業

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

ケーススタディー資料を授業前に読んでくる。授業前に同じグループの学生がゼミ時間外でミーティングし、協力してWORD,POWERPOINT を用いてレポート、プレゼン・発表資料をつくってくること（1.5 時間以上学習）。

■授業の概要

第１講　オリエンテーション、ケーススタディー・ディベートとは
第２講　キャリアとは
第３講　やる気が出ることとは・動機付け・官僚制
第４講　個人の自己実現とプロジェクトドライブ制度
第５講　松下幸之助と松下イズム
第６講　マーケティングコンセプトの実践
第７講　新製品開発のマーケティング
第８講　マーケティング組織論
第９講　流通とは何か
第 10 講　チャネルの組織化とパワー関係
第 11 講　大規模小売業のケーススタディー
第 12 講　中小小売商業の問題
第 13 講　流通と公共政策
第 14 講　論文の書き方
第 15 講　総括

■フィードバックの要領

レポートに対し、コメントを記入してフィードバックを行う。

■評価基準

評価Ｐ（合格）　:良好な出席とレポート・プレゼン資料提出、「環境と経営」の総合的理解
評価Ｆ（不合格）:低調な出席率、レポートの未提出、不誠実な受講態度の結果による不合格

■評価方法

出席（６０%）＋授業態度（２０%）（グループディスカッションとプレゼンテーション）＋小テスト（１０%）＋レポート（１０%）

■留意点

無断欠席は絶対不可

科 目 名 ホームゼミ（Seminars）中澤　弥

サブタイトル メディア研究

担当教員 中澤　弥

対象学年 ２年生以上　**区分** 春・秋学期

■講義目的

今日の我々は多様なメディアに囲まれて生きている。本ゼミでは、特にマスメディアについて、その歴史的背景を探り、そのコンテンツ（内容）がどのような影響・効果を受容者に与えるのかを考えていく。マスメディアにおいては、我々は多くの場合受容者であるわけだが、単にコンテンツを消費するだけではなく、発信者（作者）からいかなる媒介（＝これがまさにメディアである）を通して伝えられるのか、まずはそれを意識することが重要である。そしてそれぞれのメディアの特性を知り、その環境に着目することで、メディアを介したコミュニケーションの可能性を探る。

■講義分類

ビジネス環境理解、ビジネス創造、地域ビジネス

■到達目標

メディア研究の基礎をふまえ、対象となるコンテンツについて資料を読み込んだうえで課題を発見し、問題を提起できる。同時に、プレゼンテーションの方法を身に付け、自分の考えを論理的に文章化できる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

メディアの特性を理解し、課題を分析した上で新たな価値や創造性を生み出す。

■授業形態

グループディスカッション、グループワーク、双方向

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

作品（コンテンツ）の解読。プレゼンテーション資料の作成。レポートの作成。（各授業毎 1.5 時間以上の予習・復習）

■授業の概要

第１講　メディアについて
第２講　メディア研究の方法１
第３講　メディア研究の方法２
第４講　メディア研究の対象を選ぶ
第５講　作品（コンテンツ）研究
第６講　個別のメディア研究
第７講　資料調査
第８講　資料調査の結果
第９講　フィールドワーク
第 10 講　フィールドワーク報告
第 11 講　プレゼンテーション資料の作成
第 12 講　プレゼンテーション
第 13 講　レポートのアウトラインの決定
第 14 講　レポートの作成
第 15 講　レポートの完成

■フィードバックの要領

レポートについて、フィードバックを行う。

■評価基準

評価Ｐ（合格）　:資料調査、フィールドワークを適正に行い、課題レポートが充分な内容となっている。
評価Ｆ（不合格）:資料調査やフィールドワークの成果が不十分であり、課題レポートが充分な内容と成っていない。

■評価方法

資料調査・フィールドワーク　４０％
期末課題　６０％

■留意点

科 目 名　ホームゼミ（Seminars）中庭　光彦

サブタイトル　地域政策・観光まちづくり研究室

担当教員　中庭　光彦

対象学年　２年生以上　　区分　春・秋学期

■講義目的

本ゼミナールは観光地域経営を中心に、地域政策の分析・企画を専門とするゼミです。人口減少社会で、地域の魅力を生み出す企画方法を身につけるために、現場を調査し、多くの人にインタビューを行い、討議を通して問題解決の報告書をつくり、提案力を身につけます。

■講義分類

地域ビジネス

■到達目標

①１年間でインタビュー５件（グループで）
②１年間で報告書１本執筆（グループで）
③１年間でプレゼン 10 回（人・グループで）

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

地域分析の基本的学力を身につけ、地域課題の把握と、課題解決の提案の方法、さらにはプレゼンテーション、討議、文章化能力を習得する。

■授業形態

グループディスカッション、グループワーク、プレゼンテーション、フィールドワーク

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

前回に配布した資料とノートを理解してくること。（1.5 時間以上）

■授業の概要

第１講　ゼミの進め方
第２講　各研究会毎に調査計画書作成①
第３講　予備調査①
第４講　予備調査②
第５講　各研究会毎に調査計画書作成②
第６講　各研究会毎に調査計画書作成③
第７講　調査計画発表会
第８講　進捗状況報告①
第９講　進捗状況報告②
第 10 講　進捗状況報告③
第 11 講　進捗状況報告④
第 12 講　進捗状況報告⑤
第 13 講　進捗状況報告⑥
第 14 講　進捗状況報告⑦
第 15 講　進捗状況報告⑧

■フィードバックの要領

各学生に対し適時フィードバックを行う。

■評価基準

評価Ｐ（合格）　:到達目標達成に向けて活動している。
評価Ｆ（不合格）:到達目標達成に向けて活動していない。

■評価方法

出席１００％

■留意点

科 目 名 ホームゼミ（Seminars）中村　その子

サブタイトル 地域企業と連携した　広告・宣伝・PR・情報発信ゼミナール

担当教員 中村　その子

対象学年 ２年生以上　　**区分** 春・秋学期

■講義目的

＜活動内容＞
ラジオ番組企画と出演
ラジオコマーシャル研究・制作
映像・静止画コマーシャル研究・制作
ポスター、ビラやポップなどの広告印刷物研究・制作
ネーミングとキャッチコピーの手法を学ぶ
世界、そして地域を PR する＝シティプロモーション、地方公共団体や非営利組織、福祉関連団体、ボランティア活動などの広報
マスコットキャラクターやアニメキャラクターによるセールスプロモーション活動 イベント活動と企業ＰＲの関係を探る
上記に関連する懸賞やコンテストへの応募
コミュニティラジオ局やケーブルテレビ局など、広告に関連の深い企業の見学やインターンシップ その他企業や製品、サービスに関するＰＲ活動全般に目を向ける
自分のアイデアを製品開発に結び付けるための研究とその PR

■講義分類

ビジネス創造、顧客理解、地域ビジネス、社会人力育成

■到達目標

講義目的に書かれている項目において、関連する社会の現場で、自分の志を実現すべく、革新的で創造的な役割を果たして仕事をしていくことができるようになること。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

自ら動くことのできる主体性や周囲の人を動かす巻き込み力、企画やアイデアを現実のものとする実行力をゼミ活動を通して身に付ける。

■授業形態

ゼミナール形式の少人数 AL クラス

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

毎週教員から告知される学習ﾃｰﾏについて基礎的な知識を検索しておくこと、また授業後は授業内容に関して自分の意見や提案、アイデアなどをまとめておくこと（ﾌﾟﾚｾﾞﾝﾃｰｼｮﾝできるようにしておくこと）（1.5 時間以上）

■授業の概要

第１講　ゼミってなに？
第２講　コマーシャルとはそもそもなに？
第３講　営利活動とは関係のないコマーシャルもある
第４講　コマーシャルとことば力
第５講　世の中のすべてのものが PR になる可能性がある
第６講　ことば力で社会を動かせ～～キャッチコピーとネーミング
第７講　商品名と消費者への訴求効果
第８講　コマーシャルテクニックと人間力
第９講　人間がコマーシャルから受ける影響とその結果取る行動
第 10 講　ゼミナール活動とコンテスト、懸賞応募
第 11 講　自分のアイデアや企画、プロジェクトを効果的に情報発信する、プレゼンテーションする
第 12 講　人を引き付ける力とイベント企画運営
第 13 講　日本と海外の CM 比較
第 14 講　行動経済学から見るコマーシャル
第 15 講　アイデアと商品企画

■フィードバックの要領

ゼミ活動の後には、その成果について学生と十分に話し合い、評価を伝える。

■評価基準

評価Ｐ（合格）　:上記活動項目について、十分な成果を出すこと
評価Ｆ（不合格）:上記活動項目について、成果が出せなかった場合

■評価方法

ゼミは毎回出席することがあたりまえである
テストや授業内課題２０パーセント
ゼミの教室内外での活動の成果６０パーセント
レポート提出２０パーセント

■留意点

科 目 名　ホームゼミ（Seminars）中村　有一

サブタイトル　情報技術による価値の創造

担当教員　中村　有一

対象学年　２年生以上　　区分　春・秋学期

■講義目的

情報系のゼミで、主に、コンピュータ、ネットワーク、情報社会、数理モデルなどの分野で研究を進めている。内容的には理科系・工学系であるが、それほど前提となる知識は必要としない。情報系の分野において各自テーマを決め、研究を通して実際的な知識を身に付けることを目的とする。また最終的には卒業論文または卒業製作の形に成果をまとめる。

■講義分類

ビジネスＩＣＴ

■到達目標

自分で研究テーマを決め、研究していく能力を身につける。プログラミングや電子工作などにより、自分のアイデアを実現していくこと。成果を論文や研究発表の形で表現する能力を習得する。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

情報技術に関して意欲的で実際に役立つ研究に取り組む。

■授業形態

講義、グループディスカッション、グループワーク、プレゼンテーション

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

各自研究を進め、レポート・卒業論文などを書く。（各授業毎 1.5 時間以上の予習・復習）

■授業の概要

第１講　各自選んだ研究テーマについて、研究計画を作成し、発表を行う。
第２講　情報系の図書を読みこなす
第３講　研究テーマの選び方
第４講　文献の選び方
第５講　研究を進める
第６講　進捗状況の報告
第７講　発表資料の作成
第８講　中間発表会を開催
第９講　プログラミング演習（１）
第 10 講　プログラミング演習（２）
第 11 講　プログラミング演習（３）
第 12 講　プログラミング演習（４）
第 13 講　ＭＯＳ試験対策（１）
第 14 講　ＭＯＳ試験対策（２）
第 15 講　最終発表会を開催

■フィードバックの要領

研究の中間発表、最終発表において、成果を講評し、フィードバックを行う。

■評価基準

評価Ｐ（合格）　:研究発表を行い、レポート・卒業論文を提出すること
評価Ｆ（不合格）:研究発表を行わない場合、レポート・卒業論文などを提出しない場合

■評価方法

出席点・平常点 70%、レポート・発表 30%

■留意点

やる気をもって積極的に参加することが重要である。自分でテーマを探し、自分で研究を進めていくという自己解決能力を養うことが目標である。

科目名 ホームゼミ（Seminars）野坂　美穂

サブタイトル 地域を元気にするための仕組みについて考え、活動する～地方創生に向けて～

担当教員 野坂　美穂

対象学年 ２年生以上　**区分** 春・秋学期

■講義目的

本ゼミでは、フィールドでの活動と知識・理論の習得の双方を重視します。
①フィールド（学外）での活動：主に地方創生をテーマとした活動、特に第一次産業（農業・林業・漁業）の振興を目指した活動を行います。活動後は、必ず「振り返り」を行います。
②知識や理論の習得：基本的な経営学の文献を読み、問題を分析するための知識や枠組みを学びます。地方創生や地域活性化に関連する文献を輪読します。事例分析やディスカッションも行います。
③研究手法の習得：フィールドでの調査方法の文献を読み、研究方法や現場での作法を学びます。
実践として、フィールドでのインタビュー等を行います。
④就職に向けた準備：働くことの意味（なぜ人は働くのか）や、基本的な社会人としてのマナー、新聞の読み方などを学びます。就職のための業界分析や企業研究も行います。

■講義分類

顧客理解、ビジネスマネジメント、地域ビジネス

■到達目標

①自ら進んで行動する「主体性」と、自分の頭で考えていることを形にする「表現力」を身につける。②ゼミの仲間や様々な地域の人々と共に活動することで、「協調性」や「対話力」を養う。③教室内で学んだ知識と教室外（地域等）で学んだ体験を結び付け、理解を深める。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

地域で活動を行いながら、主体性や目的を持ち、地域の人々と共に課題解決に努める力、そしてリーダーシップや協調性を身につける。

■授業形態

講義、グループディスカッション、グループワーク

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

適宜、指示します。（各授業毎 1.5 時間以上の予習・復習）

■授業の概要

第１講　イントロダクション
第２講　フィールドで活動を行う上での心構えや注意点。振り返りについて
第３講　文献研究①
第４講　フィールドワークの方法と事前準備
第５講　文献研究②
第６講　フィールドワーク①　（予定）
第７講　振り返り、新聞の読み方
第８講　地方創生に関するドキュメンタリーの視聴
第９講　フィールドワーク②　（予定）
第 10 講　フィールドワーク③　（予定）
第 11 講　振り返りと文献研究③
第 12 講　文献研究④
第 13 講　文献研究⑤
第 14 講　フィールドワーク④　（予定）
第 15 講　前期の振り返り

■フィードバックの要領

提出したものについては、必ずコメント、アドバイスを添えて返却します。

■評価基準

評価Ｐ（合格）　：グループワークやフィールドでの活動に意欲的に取り組む。地域の人々と積極的にコミュニケーションがとれる。自分のアイディアや意見を、口頭や文章で表現する努力をしている。
評価Ｆ（不合格）：グループワークやフィールドでの活動に消極的である。地域の人々とコミュニケーションをとらない。自分のアイディアや意見を、口頭や文章で表現する努力をしていない。

■評価方法

出席 20%、振り返りノート 20%、成果物 20%、グループワークやフィールドでの活動の貢献度 40%

■留意点

ゼミは出席が全てです。欠席をするとチームのメンバーに迷惑がかかります。

科目名 ホームゼミ（Seminars）バートル

サブタイトル 中国・大中華圏で活躍できる人財を目指そう

担当教員 バートル

対象学年 2年生以上　区分 春・秋学期

■講義目的

時代は今、「知」が重要視される知識情報社会となっており、膨大な情報の中から必要な情報を摘出して分析し、未来を洞察していくことが求められている。
本ゼミでは、世界経済のけん引役として、また政治や外交面でも国際的プレゼンスの高まりを見せている中国を中心としながら、中国を含めた大中華圏を立体的かつ複眼的な視点で理解するための基礎的な知識の習得と産業社会が求める問題発見・解決能力に優れ、かつ高度なコミュニケーション能力を備えた「グローバル人材の育成」を念頭に置いた各種調査活動に基づいたプレゼンテーションおよびディスカッションを積極的に行う。

■講義分類

ビジネス環境理解、社会人力育成、グローバルビジネス

■到達目標

2年次は、「Asian Weekly News（毎週・全員）」や「アジア政治経済概況（4半期・通年ベース）、全員」の作成と発信・報告を行い、日本を含めた中国・大中華圏・アジア地域に関する知見を深める。
2年次後半には、各自の研究テーマを設定し、関連文献や情報の収集、調査を行い、AL発表祭で研究成果を報告する。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

ビジネスの中で最低限必要な基礎的なグローバルな知識と思考力を基に、現状を分析して課題発見力、課題解決に向けた計画力、課題に対して新たな価値や解決方法を生み出せる創造力を修得する。

■授業形態

グループディスカッション、グループワーク、プレゼンテーション

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

日頃から時事問題や自分自身が関心をもつ特定の分野や業界ないし企業に関する情報を収集、分析、調査する習慣（各授業毎 1.5 時間以上）をつけ、問題の発見・解決力・ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ能力を身につける努力をすること。

■授業の概要

第1講　個人面談、SNSによる連絡体制の構築を含むガイダンス
第2講　①「Asian Weekly News」の発表②ディカッションと総括③次回の実施事項の伝達
第3講　①「Asian Weekly News」の発表②ディカッションと総括③次回の実施事項の伝達
第4講　①「Asian Weekly News」の発表②ディカッションと総括③次回の実施事項の伝達
第5講　①「Asian Weekly News」の発表②ディカッションと総括③次回の実施事項の伝達
第6講　①「Asian Weekly News」の報告②外部セミナー参加③次回の実施事項の伝達
第7講　①「Asian Weekly News」の発表②ディカッションと総括③次回の実施事項の伝達
第8講　①「Asian Weekly News」の発表②ディカッションと総括③次回の実施事項の伝達
第9講　①「Asian Weekly News」の発表②ディカッションと総括③次回の実施事項の伝達
第10講　①「Asian Weekly News」の発表②ディカッションと総括③次回の実施事項の伝達
第11講　①「Asian Weekly News」の発表②ディカッションと総括③次回の実施事項の伝達
第12講　①「Asian Weekly News」の発表②ディカッションと総括③次回の実施事項の伝達
第13講　①「Asian Weekly News」の発表②ディカッションと総括③次回の実施事項の伝達
第14講　①「Asian Weekly News」の発表②ディカッションと総括③次回の実施事項の伝達
第15講　①今学期の総括②来学期の実施方針について意見交換③個人面談の実施

■フィードバックの要領

研究の進捗状況や成果の発表に対しアドバスを行い、次回の研究に役立てる。

■評価基準

評価P（合格）　:出席45%と報告・ディスカッション25%およびレポート30%の総合点が60点以上で合格。
評価F（不合格）:出席45%、報告・ディスカッション25%、レポート30%の総合点が59点以下は不合格。

■評価方法

評価は、出席（45%）、報告・ディスカッション（25%）、学年毎のレポート（30%）により行う。

■留意点

①ゼミのルール（出欠管理・課題提出期限など）を厳格に順守すること。
②ゼミ内での報告等はペーパーレスで行うため、FacebookとLineの登録は必須。

科目名 ホームゼミ（Seminars）浜田　正幸

サブタイトル 組織マネジメント、組織心理学

担当教員 浜田　正幸

対象学年 ２年生以上　　**区分** 春・秋学期

■講義目的
産業社会で活躍する社会人を育成する。

■講義分類
ビジネスマネジメント、社会人力育成

■到達目標
卒業時には、「社会人３年目」を目標とする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項
DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細
社会人として必須の、高度な思考力と判断力を身につける。

■授業形態
グループワーク、グループディスカッション、プレゼンテーション

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容
毎回課題が出され、次回までに完遂しなければならない。（各授業毎 1.5 時間以上）QCD は MUST である。

■授業の概要
第１講　ゼミナールの進め方説明
浜田ゼミナールの理念、行動規範の説明
第２講　組織マネジメントに関する知識、実践力、コンピテンシーを習得する
第３講　組織マネジメントに関する知識、実践力、コンピテンシーを習得する
第４講　組織マネジメントに関する知識、実践力、コンピテンシーを習得する
第５講　組織マネジメントに関する知識、実践力、コンピテンシーを習得する
第６講　組織マネジメントに関する知識、実践力、コンピテンシーを習得する
第７講　組織マネジメントに関する知識、実践力、コンピテンシーを習得する
第８講　組織マネジメントに関する知識、実践力、コンピテンシーを習得する
第９講　組織マネジメントに関する知識、実践力、コンピテンシーを習得する
第 10 講　組織マネジメントに関する知識、実践力、コンピテンシーを習得する
第 11 講　組織マネジメントに関する知識、実践力、コンピテンシーを習得する
第 12 講　組織マネジメントに関する知識、実践力、コンピテンシーを習得する
第 13 講　組織マネジメントに関する知識、実践力、コンピテンシーを習得する
第 14 講　組織マネジメントに関する知識、実践力、コンピテンシーを習得する
第 15 講　組織マネジメントに関する知識、実践力、コンピテンシーを習得する

■フィードバックの要領
授業、課題の提出、ゼミ活動、ゼミイベント等、都度フィードバックする。

■評価基準
評価 P（合格）　:授業全出席 MUST
浜田ゼミ公式イベントに全出席
課題の QCD を満たしている
評価 F（不合格）:上記要件を満たしていない場合

■評価方法
出席（授業、イベント）60%、課題の QCD を 40% として評価する。

■留意点
ゼミの授業は無遅刻無欠席であること。その他のゼミ活動（ゼミ合宿、イベント等）も出席することが必須である。

科 目 名　ホームゼミ（Seminars）増田　浩通

サブタイトル　ホームゼミ

担当教員　増田　浩通

対象学年　２年生以上　　区分　春・秋学期

■講義目的

経営情報の基礎となる書籍を輪講し、その内容を人前でわかりやすく伝えるためのプレゼンテーションの仕方を学ぶ。また MOS 試験や IT パスポート試験を受け、合格できるよう基礎的な勉強をゼミ全体で行う。またプログラミングの基礎を学ぶ。

■講義分類

ビジネス ICT

■到達目標

プレゼンテーション：人前で、自分が調べたことをパワーポイントを用いて発表できるようにする。
MOS 試験や IT パスポート試験を受験する。またプログラミングの基礎を理解し、フローチャートを書けるようになる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

ビジネスの中で必要となるシステム思考を基に，課題解決に向けたプロセスを明確にすることが出来る。

■授業形態

ゼミ形式

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

ワード、エクセル、パワーポイントを使うので、このゼミで基本的な使い方をマスターすること。（各授業毎 1.5 時間以上の予習・復習）あわせて、MOS 試験や IT パスポート試験の勉強を参考書を使いながら行う。

■授業の概要

第１講　ガイダンス。このゼミの半年の目的を説明する。
ゼミ生自己紹介。
第２講　輪講用の書籍紹介。発表順番の決定。
第３講　輪講とプレゼンテーション１
第４講　輪講とプレゼンテーション２
第５講　輪講とプレゼンテーション３
第６講　輪講とプレゼンテーション４
第７講　プログラミング学習１
第８講　プログラミング学習２
第９講　MOS 試験対策の勉強１
第 10 講　MOS 試験対策の勉強２
第 11 講　IT パスポートの勉強１
第 12 講　IT パスポートの勉強２
第 13 講　防災ゲーミング１
第 14 講　防災ゲーミング２
第 15 講　半期のゼミの振り返り

■フィードバックの要領

レポートに対し、コメントを記入してフィードバックを行う。

■評価基準

評価 P（合格）　：・規定回数以上の出席をすること。
・指定されたところの発表をパワーポイントで行うこと。
・出された課題を期日までに提出すること。
評価 F（不合格）：・規定回数以上の出席をしない場合。
・指定されたところの発表を行わない場合。
・出された課題を期日までに提出しない場合。

■評価方法

・出席：５０％
・発表：２５％
・課題：２５％

■留意点

科 目 名　ホームゼミ（Seminars）松本　祐一

サブタイトル　ソーシャルビジネス・コミュニティビジネスの事業開発

担当教員　松本　祐一

対象学年　２年生以上　　区分　春・秋学期

■講義目的

将来、創業･起業したい、お店をやりたい、地域や社会の問題を解決するビジネスをやりたい、ＮＰＯの事業をやりたい、企業で商品開発や新規事業開発に携わりたいという学生を対象に、事業開発に関する理論と方法を学ぶとともに、実際に様々なプロジェクトを企画運営しながら事業開発力を養う。

■講義分類

顧客理解、ビジネス創造、地域ビジネス

■到達目標

事業開発に関する理論と方法を理解し、自分で事業をデザインできるようになること。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

地域や社会の課題をとらえ、その解決のための仕組みを構想することができる。

■授業形態

講義、グループワーク、プレゼンテーション

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

ビジネスプランのケース分析や自身のビジネスプラン作成（各授業毎 1.5 時間以上）

■授業の概要

第１講　２年生時：事業開発の基本とプロジェクトマネジメントの経験
第２講　３年生時：チームによるビジネスプランの作成
第３講　４年生時：卒業作品の制作
第４講　上記参照
第５講　上記参照
第６講　上記参照
第７講　上記参照
第８講　上記参照
第９講　上記参照
第 10 講　上記参照
第 11 講　上記参照
第 12 講　上記参照
第 13 講　上記参照
第 14 講　上記参照
第 15 講　上記参照

■フィードバックの要領

その時々のアウトプットに対してコメント・評価する。

■評価基準

評価Ｐ（合格）　:8 割以上の出席、企画立案を独自の視点で行え、プロジェクトに積極的に貢献した。

評価Ｆ（不合格）:上記を達成できていない場合

■評価方法

出席４０％
課題等のアウトプットの質３０％
授業中やプロジェクト中の姿勢３０％

■留意点

科目名 ホームゼミ（Seminars）水盛　涼一

サブタイトル 大中華圏

担当教員 水盛　涼一

対象学年 2年生以上　**区分** 春・秋学期

■講義目的

中国、台湾、香港、澳門、シンガポール。いわゆる大中華圏で中国語を母語とする人々は14億人を超えます。これは英語（6億人）、インドのヒンディー語（5億人）、スペイン語（4億5千万人）、アラビア語（3億人）、そして日本語（1億3全万人）の母語話者をおさえ、世界で最大の話者人口です。しかも大中華圏は日本に近く、観光に貿易にと交流は益々密接になっています。高齢化の進む日本、必ずや大中華圏を中心とした諸外国との交流が必要になります。そのためにも異文化を視野に各種調査活動を行い、またプレゼンテーション・ディスカッションを行っていきます。

■講義分類

ビジネス環境理解、社会人力育成、グローバルビジネス

■到達目標

ゼミ生はそれぞれ「アジア班」「ヨーロッパ・アフリカ班」「南北アメリカ班」「日本・オセアニア班」に分かれます。月の前半は指定された課題に関するディベート・プレゼンテーションを行います。また月の後半は班活動の成果を班員一人ずつが発表し、またその地域の異文化に直接接触するフィールドワークを行います。また秋学期のアクティブラーニング発表祭を意識し活動していきます。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP5 高い志

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

異文化を知れば「知識と理解」に繋がります。そして異文化を聴衆に平易に伝える「表現と技能」も習得できます。そして「社会における多様な価値観」への関与を目指すわけですから「高い志」という志に結びつきます。

■授業形態

グループディスカッション、グループワーク、プレゼンテーション

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

担当する地域の時事問題にｱﾝﾃﾅを張る必要があります。その情報を分析する処理能力、そしてその分析結果を周囲に伝えられるｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ能力の習得にも努力せねばならないでしょう。（各授業毎 1.5 時間以上の予習・復習）

■授業の概要

第1講　ゼミ再開ガイダンス
第2講　プレゼンテーション
第3講　グループ発表
第4講　フィールドワーク
第5講　プレゼンテーション
第6講　プレゼンテーション
第7講　グループ発表
第8講　フィールドワーク
第9講　プレゼンテーション
第10講　プレゼンテーション
第11講　グループ発表
第12講　フィールドワーク
第13講　ディベート
第14講　グループ発表
第15講　フィールドワーク

■フィードバックの要領

各班の重要な学修となるフィールドワークには、書面でのフィードバックを行います。

■評価基準

評価P（合格）　：出席時の学修への参加程度（60%）、グループ発表の内容（40%）の総合が60点以上
評価F（不合格）：出席時の学修への参加程度（60%）、グループ発表の内容（40%）の総合が59点以下

■評価方法

出席時の発表・質疑内容、グループ発表での班行動貢献・内容の良否、事後のA3レポートの内容の良否によります。

■留意点

科 目 名 ホームゼミ（Seminars）村山　貞幸

サブタイトル イベントの企画・運営を通じてプロフェッショナルスキルと社会性を学ぶ

担当教員 村山　貞幸

対象学年 ２年生以上　**区分** 春・秋学期

■講義目的

プロフェッショナル・ビジネスパーソンに必要な社会性とスキルを獲得することで、ビジネスの高度な問題解決を行う能力を養う。それは、就職力向上にもつながり、厳しい就職活動に打ち勝つ能力を獲得することになる。本ゼミでは、プロフェッショナル ビジネスパーソンを、「社会性を重視し、組織目標を圧倒的に優れた能力により達成する人」とする。そのために必要な能力は、社会性と社会人基礎力（前に踏み出す力、考え抜く力、チームで働く力）である。

■講義分類

顧客理解　ビジネス創造　ビジネスマネジメント

■到達目標

衰退の危機に直面している日本伝統文化に関する地域イベント、社会的大型イベント等を企画・運営することで社会性と社会人基礎力を獲得し、グローカル社会を理解し、考え抜く力、社会の発展に貢献する力、コミュニケーション力をベースとした組織貢献力を獲得し、高い志を確立する。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

実際の社会課題を発見し、その解決策を創造、さまざまな困難に直面しながら実行することを通じ、産業社会に求められる主体性、関係者を巻き込む力、そして絶対に諦めない実行力を修得する。

■授業形態

グループワーク　プレゼンテーション　双方向

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

ゼミで学習した内容を完全に理解するまで復習する。

■授業の概要

第１講　オリエンテーション
第２講　日本伝統文化１
第３講　日本伝統文化２
第４講　マナー
第５講　プロジェクトマネジメント
第６講　自己管理
第７講　プロフェッショナルの意味と意義
第８講　プロフェッショナル化の方法と実例
第９講　大型イベント企画、電話演習、子供イベントサポート
第 10 講　大型イベント企画、イベント先開拓電話、子供イベントサポート
第 11 講　大型イベント企画、子供イベントサポート
第 12 講　大型イベント企画、広報、子供イベントサポート
第 13 講　大型イベント実施、広報、子供イベントサポート
第 14 講　大型イベント企画、子供イベントサポート
第 15 講　前期総括

■フィードバックの要領

活動に関するフィードバックを面談により行う。

■評価基準

評価Ｐ（合格）　：出席９割以上。
社会性レベルと社会人基礎力が成長した。
評価Ｆ（不合格）：出席が９割未満。
社会性レベルと社会人基礎力が成長していない。

■評価方法

出席 50%、クラス貢献度 50%

■留意点

科目名 ホームゼミ（Seminars）良峯　徳和

サブタイトル エンターテイメントを脳科学する

担当教員 良峯　徳和

対象学年 2年生以上　区分 春・秋学期

■講義目的

脳波計などの測定装置を用ることで、心の状態をある程度「見える化」できるようになった。心の状態を「見える化」することで、これまでの生活のあり方やビジネスの方法、コミュニケーションの方法などが変わる可能性がある。こうした可能性について、さまざまな実験を通じて、実践的に学ぶ。また BMI（Brain Machine Interface）を体験して、その実用化の可能性を実験を通して探求する。

■講義分類

ビジネス ICT、ビジネス創造、ビジネス環境理解、社会人力育成

■到達目標

①脳に関する基本的な知識の習得
②脳に関する最新研究の事例調査
③脳波計や皮膚電位計、心拍計などを使い、脳と心の状態を実験・計測する手順・方法を学ぶ。
⑤実験計画策定→実験実施→実験結果の集計→考察→発表という一連の科学的研究方法を学ぶ。
⑥グループワークでの協調性、積極的な発言力、実行力を身につける。
⑦効果的なプレゼンテーション資料を制作する力をつける。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

脳波などの生体情報の測定方法を実践的に学ぶとともにデータ分析に関する基礎的な学力を養い，心に関わるさまざまな問題に脳科学、データサイエンスの観点から対処する能力を習得する。

■授業形態

グループワーク、プレゼンテーション、双方向、グループディスカッション

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

実験においては、事前準備がきわめて重要である。メンバーは分担して、実験に必要な試料や実験計画の立案、実験装置の準備などを行う。こうした準備学習（予習・復習）のため、1.5 時間以上かけること。

■授業の概要

第 1 講　ゼミの概要説明
第 2 講　脳の構造
第 3 講　大脳の構造と機能
第 4 講　大脳辺縁系と大脳基底核、脳幹、小脳の構造と機能
第 5 講　脳と視覚情報処理
第 6 講　脳と感情
第 7 講　脳と記憶
第 8 講　脳と体性感覚、皮膚感覚、触覚
第 9 講　脳波とは何か
第 10 講　脳波測定装置を実際に使ってみる
第 11 講　脳波測定による実験計画の策定
第 12 講　脳波測定実験 1
第 13 講　脳波測定実験 2
第 14 講　脳波測定実験 3
第 15 講　実験報告レポート

■フィードバックの要領

レポートや発表内容に対し、コメントを記入してフィードバックを行う。

■評価基準

評価 P（合格）　:ゼミ活動に自主的､積極的に参加し､意欲的な態度で臨んでいる｡創意工夫を試み､創造的な発想を行う。各自担当のプレゼンテーションや課題、実験準備、役割をきちんとこなしている。
評価 F（不合格）:上記基準を満たしていない場合。

■評価方法

出席および課題や役割分担への取り組み態度 60%、最終レポート 40%

■留意点

野外実習、ゼミ合宿、研究発表会には必ず参加すること。

科目名	ホームゼミ（志）（Seminars（Aspiration））
サブタイトル	実践力養成のため「専門ゼミ」
担当教員	趙、大森（拓）、小林、中庭、浜田、石川、関
対象学年	2 年生以上
区分	春・秋学期

■講義目的
学生一人ひとりが興味、関心のあるテーマを選択し、専門分野のエキスパートである教員の指導・サポートを受けながら自主的に研究活動を行う。少人数グループでの討論、発表を通じてコミュニケーションとプレゼンテーションの能力を養うとともに、将来の生き方にもつながる「志」を培っていく。

■講義分類
ビジネス創造、ビジネスマネジメント、社会人力育成

■到達目標
志をもとに、社会における問題を専門分野の方法論にて解決できることを目標とする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項
DP5 高い志

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細
複雑な経営環境と問題解決の手がかりを理論的に理解させ、各分野の専門の専任教員の講義とグループ討議を通じて、学生の高い志の確立につなげる。

■授業形態
グループディスカッション、フィールドワーク、講義

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容
ホームゼミ所属にあたっては、各ゼミに関連する書籍を最低でも 3 冊程度読み、その概要を確認しておくことが望ましい。各授業の準備として，問題解決のための調べ物やそれを報告するための準備が必要（90 分程度）。

■授業の概要
第 1 講　ガイダンス
第 2 講　コミュニケーション
第 3 講　問題解決の前提
第 4 講　問題発見
第 5 講　問題設定
第 6 講　問題分析 1
第 7 講　問題分析 2
第 8 講　問題分析 3
第 9 講　問題分析 4
第 10 講　問題解決 1
第 11 講　問題解決 2
第 12 講　問題解決 3
第 13 講　まとめとディスカッション
第 14 講　まとめとプレゼンテーション
第 15 講　最終課題

■フィードバックの要領
複数の教員がレポートに対し、評価あるいはコメントを記入してフィードバックを行う。

■評価基準
評価 P（合格）　:総合評価が 60 点以上であり、この講義の到達目標に達したと認められる場合
評価 F（不合格）:総合評価が 60 点未満で、この講義の到達目標に達していない場合

■評価方法
絶対評価にて評価を行う

■留意点
このシラバス（達成目標・評価基準・各や時間割）は例示であり、各教員によって内容は異なる。ホームゼミの内容・場所・時間については、教員に確認のうえ講義に望むこと。

科目名 インターゼミ（Inter Seminars）

サブタイトル 寺島学長ゼミ（社会工学研究会）

担当教員 寺島、久恒、杉田、金、バートル、久保田、丹下、野坂、水盛、初見、後藤（晶）、加藤、木村、荻野、（SGS：安田、大場、韓）

対象学年 1年生（秋学期）以上　**区分** 春・秋学期

■講義目的

インターゼミ（寺島学長ゼミ）の目的は、学部生・大学院生・ゼミOB/OGなど40名と寺島学長をはじめとする本学2学部と大学院の教員15名が、現代社会の抱える課題について、塾形式で切磋琢磨しながら多様な要素や手法を組み合わせた柔らかい発想で、体系的・総合的な答を志向する総合設計力を身に付けることである。
学生自身による課題の発掘･発見から仮説の提示、そして多様な要素の組み合わせによる問題解決へ至るプロセスの中で、寺島学長以下、学内の教員や社会で活躍する学外の専門家による付加価値を高め、創造的問題解決策を志向する。
10年目を迎えるインターゼミは、9年間で41論文を完成させた。テーマは、以下希望する分野･グループから選ぶこと。
①多摩学、②アジアダイナミズム、③サービス・エンターテインメント、④AI、⑤環境・エネルギー。

■講義分類

グローバルビジネス、ビジネスICT、地域ビジネス

■到達目標

①産業社会の持つ課題を発見し、解決へのアプローチを目指す論文を作成する。 ②選択したテーマについて、文献調査とフィールドワーク、考察と執筆を行い、1年後に論文を完成させる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP2 思考と判断（考え抜く力）

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

文献研究とフィールドワークを通じて課題発見力、課題解決に向けたプロセスを明らかにして準備できる計画力、課題に対して新たな価値や解決方法を生み出せる創造力を修得する。

■授業形態

講義、グループディスカッション、グループワーク

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

①各テーマに従って文献一覧を作成する（1時間）。 ②フィールドワークをアレンジする（1時間）。 ③年間スケジュールを作成する（1時間）。

■授業の概要

第1講　希望する分野・グループを選ぶ。
第2講　学長講話と自己紹介
第3講　グループ分け作業
第4講　グループの決定と詳細テーマの検討
第5講　学長講話と各グループの担当教員と学生からの進捗報告
第6講　学長講話とグループワーク
第7講　教員講話とグループワーク
第8講　グループワークおよびフィールドワーク
第9講　グループワークおよびフィールドワーク
第10講　学長講話と各グループの進捗状況報告
第11講　研究計画の発表と学長のアドバイス
第12講　学長講話と学長のグループ別指導
第13講　学長講話と学長のグループ別指導
第14講　学長講話グループワーク
第15講　春学期は箱根合宿（8月中旬）での中間発表。秋学期は最終発表と完成論文の提出。

■フィードバックの要領

論文作成の進捗状況に応じてフィードバックする。

■評価基準

評価P（合格）　:出席、グループワーク貢献度、中間・最終発表の合算点が、60%以上であること。
評価F（不合格）:出席、グループワーク貢献度、発表の合算点が、59%以下の場合は不合格とする。

■評価方法

出席（25%）、グループワーク貢献度（25%）、中間および最終発表（50%）の割合で評価する。

■留意点

①毎回出席すること。欠席時は、必ず連絡すること。②授業開始時間は、16時20分であるが、原則16時に集合すること。
③寺島学長の講演会やセミナーなどに積極的に参加すること。

科目名 アクティブ・ラーニング実践Ⅰ～Ⅷ（Active Learning Practice Ⅰ～Ⅷ）

サブタイトル ALプログラム

担当教員 金　美徳

対象学年 1年生以上　　**区分** 春・秋学期

■講義目的

グローバル化や少子高齢化など社会の急激な変化や予測困難な時代において、生涯学び続け、主体的に考える力を持った人材は、受動的な学修経験でははぐくむことはできない。
教員と学生とが意思疎通を図りつつ、学生自らが主体性を発揮し、周りの環境に働きかけを行い、そのなかでコミュニケーション能力を鍛えて、チームワークを発揮し組織による問題解決に貢献出来る社会人基礎力を備えた人材に成長するためには、課題解決型の能動的学修（アクティブ・ラーニング）が必要である。
このアクティブ・ラーニング実践は、上記の趣旨で、教員が用意する学外や課外での体験活動などの事前学習・実践・事後学習を通した主体的な学びのプログラムに参加し、単位取得に必要な時間の学修をし、社会人基礎力の向上があったと担当教員が認めたときに単位を付与する講義である。

■講義分類

社会人力養成

■到達目標

①主体的に「事前学習」に取り組む。②「実践」の場面においては、主体性を発揮し、周りの環境に働きかけを行い、そのなかでコミュニケーション能力を鍛えて、チームワークを発揮し組織による問題解決に貢献するように努力する。
③主体的な活動の中で得られたものを「事後学習」の中で、自らの志の実現のためにどう活かしていくのかを整理する。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP2 思考と判断（考え抜く力）

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

各種プログラムへの参加を通じて、課題発見力と課題解決力を修得する。

■授業形態

学外や課外での体験活動などの課題解決型の能動的学修を行う。

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

受講者の能動的な学修が基本となる。事前学習・調査と事後学習は、総学修時間の３割程度を想定する必要がある（9時間）。

■授業の概要

アクティブラーニング・プログラムは、40 プログラム（2016 年実績）を展開している。
分野は、海外研修・留学導入、企業研究、地域研究、キャリア、知識・教養、資格であり、それぞれのプログラム内容や実施時期などは、各担当教員が案内や説明会を行う。

■フィードバックの要領

事後学習を通じて、フィードバックを行う。

■評価基準

評価 N（認定）　　：アクティブラーニング・プログラムの「計画書」と「報告書」を提出すること。
評価 F（認定せず）：「計画書」「報告書」の未提出や学修時間を確保できなかった場合は、認められない。

■評価方法

「アクティブ・ラーニング実践報告書」等に基づき能動的学修の達成時間で評価する。

■留意点

①アクティブラーニング・プログラムの説明会に参加し、どのような活動を行うのか、学修時間はどの程度になるのか、活動に要する負担は時間的な面、金銭的な面でどれくらいになるのかを確認してプログラムへ参加すること。②課外や学外でのプログラム参加に伴う費用は、大学から補助が出る場合を除き、受講者の負担となる。③事前学習、フィールドワーク、事後学習に必ず参加すること。

科目名　AP 数学（Advanced Practical Mathematics）

サブタイトル　ビジネス数学応用

担当教員　大森　拓哉

対象学年　1 年生以上　　区分　春学期

■講義目的

経営情報学部においては、複合領域での知識や技術の修得が必要となる。このような複合領域を対象とする分野で必要になるデータを扱う数学的手法の基礎について、演習と講義により身につけることが本講義の目的である。本講義では、課題を解決するためにどのようなデータの取り扱いをするとよいか、中学から高校 1 年程度の数学を基点として、問題解決方法の理解とそれを応用した問題解決演習を行い、産業社会において必要な数的・論理的処理力の基礎を完全習得する。

■講義分類

ビジネスマネジメント、社会人力育成、ビジネス ICT

■到達目標

経営情報学部で学ぶ上での必要な数学の十分な能力が身についているか。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

データを扱う技法の基礎を身につけることにより、高度な分析技能と結果の表現方法を習得する。

■授業形態

講義、演習

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

高校数学の知識を必要とするので、各回で取り扱う単元の事前学習（0.5 時間）を行うこと。各回で完答できなかった問題を中心に、課題の復習（1 時間）を行うこと。

■授業の概要

本講義は、1 年次ビジネス数学検定受講者のうち、中間テスト時点で合格した者のみが受講可能な講義であり、受講可能者は別途許可される。講義内容は、高校までの数学をベースに、経営情報学における基礎数学の学習と、その応用問題への適用を行い、数字（データ、エビデンス）に基づいた考察ができるようになるためのより実践的な問題解決方法を習得する。

■フィードバックの要領

毎回の授業内課題演習のチェック、中間・期末テストのフィードバックを行う。

■評価基準

評価 N（認定）　　:1 年次ビジネス数学基礎受講者のうち中間試験で検定合格しかつ期末試験で合格した者
評価 F（認定せず）:期末試験で合格しなかった場合

■評価方法

出席点 50%、期末試験 50%

■留意点

①履修は許可制となる。②試験に対してフィードバックを行う。

科 目 名　スタディーアブロードⅠ～Ⅷ（Study Abroad Ⅰ～Ⅷ）

サブタイトル　志を持って海外で活動する学生のための単位認定

担当教員　バートル

対象学年　1 年生以上　　区分　春・秋学期

■講義目的

原則として、大学が認定した海外活動に参加した学生が、留学先で取得した単位を多摩大学の正規の単位として読み替えるための科目である。ただし大学が認定した海外での活動で顕著な成果をあげた学生に授与される場合もある。いずれの場合も担当教員との事前面談、審査と学習、事後学習、審査、成果報告が必須である。事前面談、審査、学習、事後学習、審査、報告、については学期開始後に T-NEXT などを通して学生に周知される予定である。
また、原則として海外活動、地域関連活動に関連して大学で実施される諸プログラムに参加して教員の認定を受けた学生の単位認定にも用いられる場合がある。

■講義分類

グローバルビジネス、語学・コミュニケーション

■到達目標

①自分たちの意見、考え方、アイデアをしっかりとした形で伝え、提案できる（発信）、②相手からの発信を正確に理解し、状況に応じて的確な処理が行える（受信）、③自分が必要な情報（WEB/ 論文をはじめとする資料や文献など）を検索し、内容を読み取って利用できる（情報理解）、④グローバリズムに対する正しい知識と、地球人として自分の志を実現するための社会における人間力、コミュニケーション力を留学を通して身につける。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

海外の活動先に対する理解を深めると共に、物事に積極的に取り組む主体性や目的に向かって、失敗を恐れずに粘り強く行動していける実行力を身につけ、国際的ビジネスの場で活躍できるようになる。

■授業形態

海外留学、海外研修、インターンシップ、海外活動

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

海外での単位認定を伴う活動のため、担当教員との面接、研修見学への参加、活動報告会への参加、多摩大学ホームページ（海外 NOW など）への投稿が必須。上記の準備学習に要する時間は最低２時間以上とする。

■授業の概要

経営情報学部認定留学プログラム、またはグローバルスタディーズ学部認定留学プログラムに参加し、この科目の単位を取得することができる。また、大学が認定した海外での社会的活動（インターンシップなど）で、顕著な成果をあげた学生、国際交流活動、地域関連活動に関連して大学で実施される諸プログラムに参加して、教員の認定を受けた学生の単位授与にも用いられる場合がある。
この科目の単位取得に関係するプログラムに参加希望の学生は、T-NEXT 上に掲載される関連情報やお知らせを注意深くチェックし、指示が出たら、学生課国際交流担当者に必ずコンタクトを取ること。出発前教員と充分に相談をし、入念な準備をする必要がある。このコンタクトがない場合はプログラムに参加することはできない。
留学先教育機関での単位認定を多摩大学の単位として読み替える。または海外での活動の内容を審査することにより、それにふさわしい単位数を原則として認定する。
留学先教育機関の単位認定制度に原則として準じる。または、海外での活動内容を担当教員が審査、評価する。多摩大学の学生にふさわしい志をもって産業社会の問題解決が行えたかどうかが重視される。

■フィードバックの要領

海外活動に関する事前学習と事後報告の際に、適宜アドバイスと指導及び総括を行う。

■評価基準

評価 N（認定）　　:留学での活動先の成績認定に準じ、充分な成果を出したかどうかで単位を認定する。
評価 F（認定せず）:海外での活動を積極的に行わず、充分な成果を出さなかった場合。

■評価方法

出席（活動実績）70%、活動前後のレポート 30%

■留意点

①海外での単位認定を伴う活動のための事前事後審査シートの記入、担当教員との複数回の面接、担当教員が必要と判断する研修見学への参加､活動報告プレゼンテーション大会への参加､必要に応じて多摩大学ホームページ（海外 NOW など）への投稿。参加する社会的活動に関連したすべての書類と資料の提出。②提出された課題に対してフィードバックを行う。

科 目 名　インターンシップⅠ・Ⅱ（Internship Ⅰ・Ⅱ）

サブタイトル　就職前に必ず受けておかなければならない「就業体験」

担当教員　浜田　正幸

対象学年　２年生以上　　区分　春・秋学期

■講義目的

実際に社会で働く会社の人たちとの職業体験を通じて、「働く」ということを理解する。
アルバイトとは全く異なる、「会社で働く」ということを実体験する。

■講義分類

社会人力育成

■到達目標

① 社会人としての基本的な行動ができるようになる（マナー、報連相）② 朝から夜まで、一つの仕事に集中して取り組むことができ、毎日それが続けられる ③ 社会人として認められる、最低限の仕事のレベルに到達する

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP5 高い志

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

社会人として世の中に貢献する志を持つ。

■授業形態

その他（インターン先の会社において、与えられた課題の遂行）

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

事前学習ならびにインターンシップ実習の終了時に、ノートやメモを復習し、追記する。またそれを次の実習前に読み返して行動の修正を考える。（それぞれ 1.5 時間ずつ）

■授業の概要

【要注意】秋学期の履修登録であるが、春学期に事前学習を実施する。
4/10（火）1 限 001 教室 説明会
事前学習　① 5/8（火）② 5/15（火）③ 5/22（火）④ 5/29（火）⑤ 6/5（火）⑥ 6/12（火）⑦ 6/19（火）⑧ 6/26（火）全て 1 限。教室は別途連絡する。
夏季休暇中に 5 日間以上の実習。
9/26（水）1 限 インターンシップ報告会。
以上の授業・実習・報告会に全て出席することが求められる。
（日程は変更する可能性がある。メール等チェックすること）

■フィードバックの要領

インターンシップ先からの実習評価を、希望者に個別にフィードバックする。

■評価基準

評価 N（認定）　　：事前授業、実習、報告会すべてに無遅刻無欠席であること。
評価 F（認定せず）：要件を満たしていない場合。

■評価方法

事前学習ならびに報告会への出席 50%、実習 50%

■留意点

【要注意】秋学期の履修登録であるが、春学期に事前学習を実施する。①インターンシップ科目が初めての学生はこの「Ⅰ」を、「Ⅰ」を履修済みの学生は「Ⅱ」を履修する。「Ⅰ」と「Ⅱ」を同時に履修することはできない。②大学から、またインターンシップ先からの連絡等は大学 gmail を使うので、必ずチェックすること。③２年次から積極的に参加することを勧める。

科 目 名　キャリア・デザイン II（Career Design II）

サブタイトル　就職筆記試験対策を中心とした能力開発

担当教員　就職委員会

対象学年　2 年生以上　　区分　秋学期

■講義目的

これは、直接的には企業による新入社員選考の際の筆記試験を確実にパスするための能力開発を行うが、決して言語、非言語のリメディアルエデュケーションではなく、より前向きに、産業社会で有用な人材となるために必要なスキルを磨くことを目的としている。　これまで学んできたことを再チェックし、課題を見つけた場合しっかりと対応した上でまずは就職活動に立ち向かい、さらには、職業の最前線の現場で活躍できるようになれることが大切である。

■講義分類

ビジネス環境理解、ビジネス創造、社会人力育成

■到達目標

学生がより望ましい就業観を持ち、また就職就業に必要十分な知識とスキルを身に着けることが、本講座の目標である。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

社会人として重要な数理的な基礎学力を養い、就職試験においてもその成果を発揮する。

■授業形態

講義

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

予習：教科書にしたがって例題を見ておく。とける場合は解く。（1．5時間）復習：問題をもう一度解きなおし、要点を整理しておく。（1．5時間）

■授業の概要

秋学期に開講される「筆記試験対策講座」への参加により、単位を認定することとする。

■フィードバックの要領

最後の模擬試験において、学習成果を確認することにより、フィードバックを行う。

■評価基準

評価 N（認定）　　:所定の回数の出席と、受講態度および模擬試験の結果によって単位を認定する。
評価 F（認定せず）:出席回数が不足の場合と、受講態度がよくない場合などは、単位を認定しない。

■評価方法

少なくとも 10 回の参加を必要とする。ただし、受講態度に問題があるとみなされた場合、また著しく模擬試験の成績が悪い場合も、単位を認定されないことがある。

■留意点

特になし

科目名　キャリア・デザイン III（Career Design III）

サブタイトル　業界を知る・企業を知る

担当教員　初見　康行

対象学年　3年生以上　　区分　春学期

■講義目的

本講義の目的は，「業界とは何か」，「会社とは何か」ということを理解し，将来のキャリア・デザインに役立てていくことです。本講義では，はじめに，株式会社の成り立ちや，社会における会社の役割などを復習していきます。次に，会社が所属する「業界」について理解を深めていきます。本講義では，特に，製造業，流通業，サービス業，金融・保険業，IT・情報産業などを例にし，各業界のビジネスモデルや，主だった企業の戦略について学んでいきます。本講義を通して，業界・企業を分析するためのフレームワークを学び，将来のキャリア・デザインに活かしていくことが，最終的な目的です。

■講義分類

社会人力育成，ビジネス環境理解

■到達目標

（1）会社の成り立ち，社会における役割を理解すること，（2）主だった業界のビジネスモデルを理解すること，（3）業界・企業分析のフレームワークを習得し，自分自身で分析できること，（4）分析結果を通して，志望動機の作成や，将来のキャリア・デザインに活かしていくこと

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP4　表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

業界・企業分析のフレームワークを学び，志望業界・企業の分析を行うことができる。

■授業形態

講義，グループディスカッション，グループワーク

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

予習：指定図書の熟読，事前課題の実施（１．５時間）復習：講義内容の振り返り，ホームワーク（分析レポート）の提出

■授業の概要

２０１８年度春学期（月曜日１限目）に行われる講義に出席し，所定の基準を満たすことで，単位認定とする。

■フィードバックの要領

提出された分析レポートや志望動機に対し評価とコメントによるフィードバックを行う。

■評価基準

評価Ｎ（認定）　　：①全講義への出席②志望業界・企業を分析でき③分析結果をｷｬﾘｱ・ﾃﾞｻﾞｲﾝに活用できる。
評価Ｆ（認定せず）：上記３つの条件を満たさなかった場合は，Ｆ評価とする。

■評価方法

①講義への出席（５０％）
②フレームワークを活用した分析レポートの提出（３０％）
③志望動機の作成，キャリア・デザインへの活用（２０％）
※それぞれの詳細については，講義内で説明を行う

■留意点

本講義は，主に３年生を対象とした講義です。就職活動を控えた学生に対し，業界・企業分析の方法や，その結果を志望動機につなげていくための技法を学んでいきます。将来のキャリア・デザインに向けて，学生みなさんの真摯な学修態度と意欲が望まれます。

科目名	キャリア・デザイン IV（Career Design IV）		
サブタイトル	就職活動準備の実践		
担当教員	就職委員会		
対象学年	3 年生以上	区分	秋学期

■講義目的
本学の理念の一つは、「すべての道はキャリアに通ず」である。就職し、就業し、職業を通して成長し、職業を通じて社会の問題解決に貢献する人材を育成する事であり、就職活動は、その中核にある。多摩大学の教育をこの理念に近づけるために本講義を設置する。すなわち、就職、就業に向けて、「①自己を知る」、「②産業社会を知る」、「③企業を知る」、「④何をすべきかを知り、実践する」ことがよりよく実践されるために必要な講義を行う。

■講義分類
社会人力育成、ビジネス環境理解

■到達目標
（1）就職活動に関する基本的な知識、方法を習得する。 （2）自己分析を行い、自分を理解する。 （3）自分と関心のある仕事、企業を結びつけ、社会に貢献する方法を身につける。 （4）効果的な自己アピールができるようになる。 （5）関心のある企業と結びつけて志をつくる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項
DP5 高い志

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細
自己分析、業界分析、自己 PR、模擬面談などの演習を通じ、高い志をたてる。

■授業形態
講義、グループディスカッション、双方向

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容
履歴書等に収れんされていくべき「自己理解」「開発が必要なスキルへの認識」や、企業や産業に対する認識や見方を育成するための予習、復習を必要とする。必要な時間は、予習 1.5 時間、復習 1.5 時間。

■授業の概要
就職活動に関するプロフェッショナルのファシリテーションにより、「就勝つ」に必要な全ての要素を学ぶ。

■フィードバックの要領
ワークに対するコメントを講義中に個別に行う。

■評価基準
評価 N（認定） :15 回の所定の講座に出席することにより単位を認定する。（詳細は第 1 講で伝える）
評価 F（認定せず）:上の条件を満たさなかったとみなした場合は、F 評価とする。

■評価方法
出席 100%

■留意点
授業全体のマイナスになると担当者が判断する場合には、他の学生の利益を確保するために、退出を命じることもあるので、くれぐれも留意されたい。 全講義に出席し、自己 PR、履歴書作成、修正など、予習・復習を徹底することが強く望まれる。

科目名 教職概論（Teaching Profession）

サブタイトル 自らの教職観を構築する

担当教員 杉森　知也

対象学年 1年生以上　区分 秋学期

■教育職員免許法施行規則における科目区分
教育の基礎的理解に関する科目

■教育職員免許法施行規則における各科目に含まれることが必要な事項
教職の意義及び教員の役割・職務内容（チーム学校運営への対応を含む。）

■講義目的
教職の意義と教員の役割について国内外の動向を含めて広く理解し、将来、教職に就くための基礎的資質を養う。

■講義分類
社会人力育成

■到達目標
1. 教職の意義、教員の役割と職務内容、教職の専門性などについて総合的に理解することができる。 2. 近年の学校・教員を巡る状況の変化について、世界的な動向を含めて説明することができる。 3. レポート課題を含めて将来の進路選択の機会にする。4.1. ～ 3. を踏まえて自己の教職観を構築して、それを説明することができる。（※取得可能な資格：高等学校情報科教諭免許）

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項
DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細
グローバルな動向を背景に、教員を巡る状況の変化について基礎的な理解を養う。

■授業形態
講義、グループディスカッション、双方向

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容
ディスカッションを円滑に進めるために、授業前に指定教科書の該当箇所と参考書、インターネット等でその内容を調べて、自分なりの解釈をしておくこと。事前学修に 180 分、事後学修に 90 分程度を要する。

■授業の概要
第 1 講　ガイダンス：教員との出会いを振り返る
第 2 講　教員の職務内容とその意義
第 3 講　教員の地位と身分①：教員の「地位」
第 4 講　教員の地位と身分②：教員の義務と身分保障の意味
第 5 講　教員の地位と身分③：教員の待遇
第 6 講　教員研修：その種類と意義
第 7 講　教員の免許制度と教員の存在意義①：日本の教員免許制度
第 8 講　教員の免許制度と教員の存在意義②：世界の教員免許制度と日本の改革動向
第 9 講　教師のやりがいとバーンアウト
第 10 講　価値多様化社会の中の専門職①：価値多様化社会とは何か
第 11 講　価値多様化社会の中の専門職②：反省的実践家と反省的思考
第 12 講　新しい教師の力量①：日本における政策動向とその対応
第 13 講　新しい教師の力量②：OECD の政策動向から考える
第 14 講　チーム学校
第 15 講　教員への聞き取りから見えるもの

■フィードバックの要領
次回の授業またはメールにて授業内容・コメントシート等へのフィードバックをおこなう。

■評価基準
評価 A+（90 点以上）：教員たるにふさわしい態度、参加意欲等を十分に発揮している。
評価 A（89 ～ 80 点）：教員たるにふさわしい態度、参加意欲等を発揮している。
評価 B（79 ～ 70 点）：講義に参加しているが、積極的な姿勢が十分ではない。
評価 C（69 ～ 60 点）：講義に参加しているが、理解度が十分ではなく、また提出物の提出についても遅滞が多い。
評価 F（59 点以下）　：欠席が多い、講義が理解できない、他者と協力できないなど、いずれか一つ以上に該当。

■評価方法
最終レポート 50 点、コメントシート・小レポート 20 点、授業の参加姿勢 30 点の総合評価とする。

■留意点
記載した事前・事後学習以外にも自主的に学習し、質問を用意して授業に参加すること。活発な授業の展開には、学生の事前学習が重要であることを自覚して欲しい。教員への聞き取りとそれに基づく調査レポート（最終レポート）の作成に関する質問は随時受け付ける。調査レポートについては、提出の遅滞および必要事項を満たしていないものは採点しない。なお、状況によっては扱う回の入れ替え等を行うことがある。

科 目 名　教育史（Education History）

サブタイトル　西洋の教育史と日本の近代教育史

担当教員　齋藤　S. 裕美

対象学年　1年生以上（2017年度以前入学生用）　区分　春学期

■教育職員免許法施行規則における科目区分
教育の基礎的理論に関する科目

■教育職員免許法施行規則における各科目に含まれることが必要な事項
教育の理念並びに教育に関する歴史及び思想

■講義目的
本講義は、諸外国と日本の教育の歴史的展開と代表的な思想家の教育思想や教育実践についての基礎的な知識を習得し、理解を深めることを目的とする。この講義を通じて、歴史を全体的にどう見るかという根本的なものの見方を考え、歴史的事象と教育の間に関連を見出すことによって、教職を目指す者が身に付けなければならない必須の教養を深める。
教育史上に重要な役割を果たした人物を中心に、その背景となっている歴史の流れをたどり、教育の本質について考察を進める。

■講義分類
ビジネス環境理解、社会人力育成

■到達目標
諸外国および日本の教育史を時系列的にたどり、教職に就く者として求められる教育の歴史について、基本的な知識の習得をめざす。具体的には、次の３点をめざす。①諸外国の教育史および代表的な思想家の教育思想や教育実践についての知識の習得、②日本の教育史、とりわけ近代以降の公教育制度の整備の歴史についての知識の習得、③教育観や子ども観の変遷についての知識の習得

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項
DP1　知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細
諸外国と日本の教育の歴史的展開を学び，歴史的事象と教育の間の関連を見出し，教育の本質を理解できる能力を養う。

■授業形態
講義、グループディスカッション、プレゼンテーション

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容
前講までの資料をよく読んでおくこと。各講で取り扱う時代について、世界史の教科書等で時代背景を確認しておくこと。必要な予習・復習時間は各1.5時間程度（合計３時間程度）である。

■授業の概要
第１講　古代ギリシアの教育
第２講　中世ヨーロッパの教育
第３講　17 世紀の教育
第４講　18 世紀の教育改革
第５講　市民革命と教育
第６講　産業革命と教育
第７講　近代公教育制度の発達
第８講　19 世紀の教育思想
第９講　世界新教育運動の展開
第 10 講　民主主義の発展と教育
第 11 講　近世までの教育
第 12 講　近代教育制度の創始
第 13 講　公教育制度の整頓と近代日本の教育方法の発達
第 14 講　第二次世界大戦前後の教育
第 15 講　現代の教育

■フィードバックの要領
最終講義等で全体に対するフィードバックを行う。

■評価基準
評価 A+（90 点以上）：下記３点を関連づけ、自分の考察を含めて的確に説明できる。
評価 A（89 ～ 80 点）：下記３点を個別に、自分の考察を含めて説明できる。
評価 B（79 ～ 70 点）：下記３点のいずれか２つ以上の内容を説明できる。
評価 C（69 ～ 60 点）：下記３点のいずれか１つ以上の内容を説明できる。
評価 F（59 点以下）　：講義内容について著しく理解が不足している。

■評価方法
レポート 70%、発表 30%。次の３点を中心に評価する。①ヨーロッパ諸国の歴史と教育との関連についての理解、②日本の歴史と教育との関連についての理解、③様々な教育思想家の思想や教育実践の内容の理解。

■留意点
・講義は毎回出席し、積極的な態度が望まれる（原則として、欠席・遅刻はしないこと）。・教員としての資質を啓発するために、資料を収集・整理して発表する機会を設ける。

科目名　教育原理（Educational Principle）

サブタイトル　教育の原理と歴史的展開

担当教員　齋藤　S. 裕美

対象学年　1年生以上（2018年度入学生用）　区分　秋学期

■教育職員免許法施行規則における科目区分

教育の基礎的理解に関する科目

■教育職員免許法施行規則における各科目に含まれることが必要な事項

教育の理念並びに教育に関する歴史及び思想

■講義目的

本講義は，教職に就く者として必要とされる公教育の理念と制度，教育課程の意義，教育に関する歴史及び思想についての基礎的な知識を習得し，教育の基本的原則や理論的基礎を理解することを目標とする。諸外国と日本の教育の歴史的展開と代表的な思想家の教育思想や教育実践についての基礎的な知識を習得し，歴史的事象と教育の間に関連を見出すことによって，現在の教育課題にも関連していることに気づき，教育を科学的に捉える視点を養う。

■講義分類

社会人力育成

■到達目標

教職に就く者として求められる教育観を養い，基本的な知識の習得をめざす。具体的には、次の４点をめざす。①公教育の理念について，歴史的経緯等を踏まえて理解する，②教育の原理や教育観，子ども観の変遷について理解する，③諸外国の教育史および代表的な思想家の教育思想や教育実践について理解する，④学校教育の目的や理念，方法など近代以降の日本の公教育制度の整備の歴史と戦後の学校教育の原理を理解する。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP1　知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

教育の原理，教育観や子ども観の変遷，公教育の理念や制度を学び，歴史的事象と教育の間の関連を見出し，教育の本質を理解できる能力を養う。

■授業形態

講義、グループディスカッション、プレゼンテーション

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

前講までの資料をよく読んでおくこと。各講で取り扱う時代について、世界史の教科書や教育学事典等で時代背景を確認しておくこと。必要な予習・復習時間は各１.5 時間程度（合計３時間程度）である。

■授業の概要

第１講　教育の原理
第２講　古代ギリシア～中世ヨーロッパの教育
第３講　17 ～ 18 世紀ヨーロッパの教育
第４講　近代社会の成立と教育
第５講　近代公教育制度の発達
第６講　19 世紀の教育思想
第７講　新教育運動
第８講　日本の近世までの教育
第９講　近代教育制度の創始
第 10 講　公教育制度の整頓と近代日本の教育方法の発達
第 11 講　第二次世界大戦前後の教育
第 12 講　系統主義と経験主義
第 13 講　教育の現代的課題①
第 14 講　教育の現代的課題②
第 15 講　教育の現代的課題③

■フィードバックの要領

最終講義等で全体に対してフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：下記４点を関連づけ，自分の考察を含めて的確に説明できる。
評価 A（89 ～ 80 点）：下記４点を個別に，自分の考察を含めて説明できる。
評価 B（79 ～ 70 点）：下記４点のいずれか２つ以上の内容を説明できる。
評価 C（69 ～ 60 点）：下記４点のいずれか１つ以上の内容を説明できる。
評価 F（59 点以下）　：講義内容について著しく理解が不足している。

■評価方法

レポート 70%，発表 30%。次の４点を中心に評価する。①公教育の理念と制度，歴史的変遷，②教育の原理，教育観，子ども観の変遷，③諸外国の教育思想や教育実践の歴史，④日本の学校教育の目的や理念，原理

■留意点

状況によって，講義内容や扱う回の入れ替えを行う場合がある。

科目名	教育課程総論（Curriculum）
サブタイトル	教育課程改革の動向を把握し、情報科の単元指導計画を作成する
担当教員	杉森　知也
対象学年	2 年生以上　　区分　春学期

■教育職員免許法施行規則における科目区分
教育の基礎的理解に関する科目

■教育職員免許法施行規則における各科目に含まれることが必要な事項
教職課程の意義及び編成の方法（カリキュラム・マネジメントを含む。）

■講義目的
教育課程（カリキュラム）の意義と、その編成方法・カリキュラム・マネジメントの重要性を理解し、また現代の日本の教育課程改革の動向とその課題について歴史的･国際的に把握した上で、その改善のために学校としてどのような対応ができるのかについて理解することができる。

■講義分類
社会人力育成

■到達目標
1. 教育課程編成の意義や編成の方法を理解することができる。
2. 学習指導要領の変遷から、学力観の変遷を見出すことができる。
3. カリキュラム・マネジメントの意義を、実践事例を通して理解することができる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項
DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細
授業を構築するための基礎的な理解を獲得するとともに、学校現場で生起する課題に実例を踏まえて学校のマネジメントの重要性を把握する。

■授業形態
講義、プレゼンテーション、双方向

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容
事前学習の作業をおこない、メモ等を作成して持参する。また、事後学修を課す場合は、次回の授業にレポートを提出する。事前学修に 180 分、事後学修に 90 分程度を要する。

■授業の概要
第 1 講　教育課程と学習指導要領の関係
第 2 講　学力低下問題と教育課程改革：キー・コンピテンシー、PISA 型学力とは何か
第 3 講　学習指導要領の歴史的変遷と学力観①－戦後初期の教育実践とその批判
第 4 講　学習指導要領の歴史的変遷と学力観②－系統主義からの転換
第 5 講　教育課程編成の基本原理
第 6 講　クロスカリキュラムと総合的な学習
第 7 講　「主体的・対話的で深い学習」の視点とカリキュラム・マネジメント
第 8 講　学校評価とカリキュラムマネジメント
第 9 講　第 8 講科目のため空欄
第 10 講　第 8 講科目のため空欄
第 11 講　第 8 講科目のため空欄
第 12 講　第 8 講科目のため空欄
第 13 講　第 8 講科目のため空欄
第 14 講　第 8 講科目のため空欄
第 15 講　第 8 講科目のため空欄

■フィードバックの要領
次回の授業またはメールにて授業内容・コメントシート等へのフィードバックをおこなう。

■評価基準
評価 A+（90 点以上）：教員たるにふさわしい態度、参加意欲等を十分に発揮している
評価 A（89 ～ 80 点）：教員たるにふさわしい態度、参加意欲等を発揮している
評価 B（79 ～ 70 点）：講義に参加しているが、積極的な参加姿勢が十分ではない
評価 C（69 ～ 60 点）：講義に参加しているが、理解度が十分ではなく、また提出物の提出についても遅滞が多い
評価 F（59 点以下）　：欠席が多い、講義が理解できない、他者と協力できないなど、いずれか一つ以上に該当

■評価方法
事前・事後学修の課題メモ、レポートで 50%、授業での積極的な姿勢 50% で総合的に評価する。

■留意点
講義部分はできる限り少なくし、学生の質問や意見交換を主な活動とするため、事前学習が必須である。また、自主的・積極的に発言することを望む。各個人はもちろん、互いに進捗状況等を報告しあう等の調整が必要である。なお履修人数等の状況によって、扱う回の入れ替えを行う場合がある。

科目名 教育制度論（Educational System）

サブタイトル 教育の法と制度について、比較教育学・教育社会学的な視点を含めてとらえる

担当教員 杉森　知也

対象学年 2年生以上　**区分** 春学期

■教育職員免許法施行規則における科目区分
教育の基礎的理解に関する科目

■教育職員免許法施行規則における各科目に含まれることが必要な事項
教育に関する社会的、制度的又は経営的事項（学校と地域との連携及び学校安全への対応を含む。）

■講義目的
1. 主に、公教育をとりまく社会・行政の制度改革の動向を含めて考察する。
2. 現在の日本の教育制度・行政等について、歴史的視点と国際比較の視点の両面から読み解く。

■講義分類
社会人力育成

■到達目標
日本の教育行政・制度設計および政策の動向についての基礎的な理解の上に、これを多角的・客観的に評価することができる。また、学校と地域との連携、学校安全への対応についての基礎的な知識を身につける。（※取得可能な資格：高等学校情報科教諭免許）

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項
DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細
教育の制度に関する基礎的な知識をグローバルとローカルの関係性を意識して獲得する。

■授業形態
講義、グループディスカッション、双方向

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容
指定教科書の該当箇所を読み、疑問点と自分なりの考察（意見）をもって授業に参加すること。不明な用語についてはweb、図書館の教育学辞典等で調べてくること。事前学修に 180 分、事後学修に 90 分程度を要する。

■授業の概要
第 1 講　教育の「制度」とは何か、「公教育」とは何か
第 2 講　国の教育行政組織と教育政策過程
第 3 講　国の教育法令の構成と原理
第 4 講　分権改革による国と自治体の教育行政改革
第 5 講　地方自治体の教育行政組織としくみ
第 6 講　教育課程の行政としくみ
第 7 講　教科書の行政としくみ
第 8 講　学校と保護者・子どもの法的地位
第 9 講　教育の機会均等保障と教育費負担問題
第 10 講　学校の組織・運営と人事管理
第 11 講　教員の勤務問題と業務改善の課題
第 12 講　教員給与の政策と法制度改革
第 13 講　子どもの学力保障と学校改革
第 14 講　学校改革をめぐる論議と新たな学校づくりの取り組み
第 15 講　学校における安全教育と安全管理

■フィードバックの要領
次回の授業またはメールにて授業内容・コメントシート等へのフィードバックをおこなう。

■評価基準
評価 A+（90 点以上）：教員たるにふさわしい態度、参加意欲等を十分に発揮している
評価 A（89 ～ 80 点）：教員たるにふさわしい態度、参加意欲等を発揮している
評価 B（79 ～ 70 点）：講義に参加しているが、積極的な姿勢が十分ではない
評価 C（69 ～ 60 点）：講義に参加しているが、理解度が十分ではなく、また提出物の提出についても遅滞が多い
評価 F（59 点以下）　：講義が理解できない、他者と協力できないなど、いずれか一つ以上に該当

■評価方法
事前学習の取り組み 50%（提出したメモの内容）、授業での積極的な参加姿勢 50% を総合的に評価する。

■留意点
本講義は、受講生の主体的な働きかけで進めていくので、自主的・積極的に発言することなしには進まない。 講義部分はできる限り少なくし、学生の質問や意見交換を主な活動としたいので、事前学習が必須であることを自覚してほしい。なお、状況によって、扱う回の入れ替えをおこなう場合がある。

科目名　教育方法（Teaching Method）

サブタイトル　情報機器を活用した効果的な授業設計の検討と実践力の養成

担当教員　水上　晃実

対象学年　2 年生以上　　区分　秋学期

■教育職員免許法施行規則における科目区分

道徳、総合的な学習の時間等の指導法及び生徒指導、教育相談等に関する科目

■教育職員免許法施行規則における各科目に含まれることが必要な事項

教育の方法及び技術（情報機器及び教材の活用を含む。）

■講義目的

本講義では、高等学校情報科の授業において、情報に関して倫理的態度をもって安全に配慮する規範意識のもと、実践的に情報を活用できる力を指導できる教員を養成することを目的とする。具体的には、生徒に対して情報機器等を効果的に活用したコミュニケーション能力・情報の創造力・発信力・科学的思考力・判断力等を育成し、生徒自身が情報化社会に積極的かつ主体的に参画できる能力・態度を身につけられるよう、その方法をインストラクショナルデザインの原理を用いて学ぶ。また、教育におけるアクティブ・ラーニングの重要性を考慮して、受講者全員が模擬授業を行うこととし、学習指導案の作成から授業の実施までを受講者自身が全て行うことで、個人の課題を発見するとともに、受講者同士がアドバイスを送り、互いに学び合いながら実践的な教師力・授業力を養うことを目的とする。

■講義分類

社会人力育成

■到達目標

1）教育方法の基礎的理論と実践を理解している。2）生徒の資質・能力を育成するための教育方法を理解している。3）学級、生徒、教員、教室、教材など授業を構成する基礎的な要件を理解している。4）学習評価の考え方を理解している。5）話法、板書等、授業を行う上での技術を身につけている。6）学習指導理論を踏まえた学習指導案を作成することができる。7）情報機器を活用し、生徒の興味・関心を高めることができる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

自分の意思を効果的かつ分かりやすく伝える力とコミュニケーション能力を養い、将来学校教育の現場に立って生徒の学習効果を上げる授業を展開できる技能を習得する。

■授業形態

講義　グループワーク　プレゼンテーション

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容

教科書の該当部分を講義前に読んでくること。また、模擬授業の際には、学習指導案と板書計画を作成し、事前に提出すること。その他、レポートや振返り等の課題も含め、予習･復習には毎週2時間を要するものを課す。

■授業の概要

第 1 講　ガイダンスおよびイントロダクション（教育方法の基礎的理論について）
第 2 講　効果的な教育システムの設計について学ぶ。
第 3 講　生徒の資質・能力を育成するための教育方法を学ぶ。
第 4 講　学級、生徒、教員、教室、教材など授業を構成する基礎的な要件とは。
第 5 講　学習評価の考え方について学ぶ。
第 6 講　話法、板書等、授業を行う上での技術（教師のスキル）とは。
第 7 講　情報通信ネットワークやメディアの特性・役割・情報モラルについて。
第 8 講　情報機器の活用とその操作方法を学ぶ。
第 9 講　学習指導理論を踏まえた上で、高等学校情報科の学習指導案作成方法を学ぶ。
第 10 講　模擬授業（1）および教材の選び方の検討。
第 11 講　模擬授業（2）および教師のスキルとしての話法・板書についての確認。
第 12 講　模擬授業（3）および学習指導案の作成についての確認。
第 13 講　模擬授業（4）および情報機器の活用についての確認。
第 14 講　模擬授業（5）および主体的かつ対話的な深い学びの実現について。
第 15 講　講義全体の振返りと到達目標の確認および最終指導案の発表。

■フィードバックの要領

学習指導案やレポート等の提出課題についてはコメントを記入してフィードバックを行う。

■評価基準

評価 A+（90 点以上）：意欲的に取組み、講義内容を十分に理解した上、学習指導案・模擬授業の完成度が高い。
評価 A（89 ～ 80 点）：講義内容を十分に理解し、学習指導案・模擬授業に関しても概ね良好である。
評価 B（79 ～ 70 点）：講義内容を概ね理解はしているが、講義の到達目標までにはあと一歩の努力を要する。
評価 C（69 ～ 60 点）：講義内容の理解が不十分で、提出期限に遅れた課題がある。
評価 F（59 点以下）　：講義内容が理解できていない。未提出課題がある。

■評価方法

学習指導案および板書案 30%、模擬授業 40%、学期末レポート 30%。なお、欠席･遅刻に関しては正当な理由がない限り認められない。

■留意点

本講義はアクティブ･ラーニングをもとに､受講生の能動的かつ主体的な取組みを期待するものである。情報教育の理解とともに､実践的な能力の育成を目指し､模擬授業にも重きを置く。受講生の人数により模擬授業を実施する回数に変動が生じる場合があるが、教壇実習の重要性を理解し、積極的に臨んでほしい。

科 目 名　特別支援教育概論（Special Supprort）

サブタイトル　個別の教育的ニーズに対応する支援支援スキル養成

担当教員　中川　宏子

対象学年　２年生以上　　区分　秋学期

■教育職員免許法施行規則における科目区分
教育の基礎的理解に関する科目

■教育職員免許法施行規則における各科目に含まれることが必要な事項
特別の支援を必要とする幼児、児童及び生徒に対する理解

■講義目的
通常の学級にも在籍している発達障害や軽度知的障害をはじめとする様々な障害等により特別な支援を必要とする幼児、児童及び生徒が授業において学習活動に参加している実感・達成感をもちながら学び、生きる力を身に付けていくことができるよう、幼児、児童及び生徒の学習上又は生活上の困難を理解し、個別の教育的ニーズに対して、他の教員や関係機関と連携しながら組織的に対応していくために必要な知識や支援方法を理解する。

■講義分類

■到達目標
１．特別の支援を必要とする幼児、児童及び生徒の障害の特性及び心身の発達を理解する。２．特別の支援を必要とする幼児、児童及び生徒に対する教育課程や支援の方法を理解する。３．障害はないが特別の教育的ニーズのある幼児、児童及び生徒の学習上又は生活上の困難とその対応を理解する。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項
DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細
特別の支援を必要とする子どもの特性及び心身の発達を理解し、対応している能力を習得する。

■授業形態
講義、グループディスカッション

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容
「新学習指導要領（平成 29 年３月公示）」を読んでおく。
各回に新出した用語について調べておく。
講義後に感想レポートを書き、提出する。

■授業の概要
第１講　「特別支援教育」とは何か
第２講　視覚障害・聴覚障害・知的障害・肢体不自由・病弱の子どもの教育
第３講　ＬＤ、ＡＤＨＤ、ＡＳＤなどの子どもの教育
第４講　特別支援学校や特別支援学級での教育課程や支援の方法
第５講　通常学級での支援の方法と二次障害の防止
第６講　「通級による指導」及び「自立活動」
第７講　支援が必要な子どものための支援体制
第８講　様々な教育的ニーズ
第９講　第８講科目のため空欄
第 10 講　第８講科目のため空欄
第 11 講　第８講科目のため空欄
第 12 講　第８講科目のため空欄
第 13 講　第８講科目のため空欄
第 14 講　第８講科目のため空欄
第 15 講　第８講科目のため空欄

■フィードバックの要領
課題へのコメントにてフィードバックを行う。

■評価基準
評価 A+（90 点以上）：内容を十分理解しており、ディスカッションに積極的に参加している。
評価 A（89 ～ 80 点）：内容を理解しており、ディスカッションで発言している。
評価 B（79 ～ 70 点）：講義内容について理解しているが、ディスカッションでの発言が少ない。
評価 C（69 ～ 60 点）：講義内容について理解が不十分で、ディスカッションでの発言がほとんど無い。
評価 F（59 点以下）　：講義内容が理解できていない。ディスカッションでの発言が無い。

■評価方法
授業参加態度 60%、レポート 20%、発言 20%とする。

■留意点
①教職科目の中の一科目でもあるので、教職課程履修のものは必修の授業である。②教師を目指している人だけでなく、社会は様々な特徴を持った人によって構成されていることに気付く機会にしてほしい。③状況によって、講義内容や扱う回の入れ替えなどが生じることもある。

科目名 特別活動（Extracurricular activity）

サブタイトル 学校・学級づくりと人格形成と教師の指導性

担当教員 峯岸　久枝

対象学年 2年生以上（2017年度以前入学生用）　**区分** 秋学期

■教育職員免許法施行規則における科目区分
道徳、総合的な学習の時間等の指導法及び生徒指導、教育相談等に関する科目

■教育職員免許法施行規則における各科目に含まれることが必要な事項
特別活動の指導法

■講義目的
高等学校の「特別活動」においては、人間関係形成・社会参画・自己実現の視点を持ち、学校における集団活動を通して課題解決の力をつけるための指導の方法を模索する。

■講義分類
社会人力育成

■到達目標
高等学校の「特別活動」においては、人間関係形成・社会参画・自己実現の視点を持ち、学校における集団活動を通して課題解決の力をつけるための指導の方法を模索する。（※取得可能な資格：高等学校情報科教諭免許）

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項
DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細
生徒の置かれている環境や状況を分析して課題を明らかにすることができる。また、その課題に対して、特別活動を通して解決する方法を考え、発信する力を養う。

■授業形態
講義、プレゼンテーション、ディスカッション

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容
事前学習として、指定教科書の該当部分を読み、自身が受けてきた教育や経験したことをもとに、具体的な場面・指導がおこなわれていたかを思い出しておく。事前学習に 180 分、事後学習に 90 分を要する。

■授業の概要
第 1 講　ガイダンス：学習指導要領における特別活動
第 2 講　教育課程における特別活動の位置づけ
第 3 講　特別活動と各教科との関連
第 4 講　学級・ホームルーム活動①：学級や学校の生活づくり・適応と成長及び健康安全
第 5 講　学級・ホームルーム活動②：今日の学級活動の課題
第 6 講　学校行事①：学習指導要領に示された儀式的、文化的、健康安全・体育的活動について
第 7 講　学校行事②：生徒会活動や部活動について
第 8 講　ボランティア活動・奉仕活動①：地域との連携を軸として
第 9 講　ボランティア活動・奉仕活動②：探究的な学習を軸として
第 10 講　特別活動の評価方法
第 11 講　特別活動における話合い活動の指導方法
第 12 講　特別活動における主体的な学びを促す方法
第 13 講　特別活動の具体的な授業計画①
第 14 講　特別活動の具体的な授業計画②
第 15 講　特別活動の授業を実施する

■フィードバックの要領
レポートに対し、一人ひとりコメントを記入し、個人に対してフィードバックを行う。

■評価基準
評価 A+（90 点以上）：積極的・意欲的に参加し、内容を十分理解している。考察を深め、的確に説明できる。
評価 A（89 ～ 80 点）：内容を理解しており、自分の考察を聞き手にわかりやすい表現で説明できる。
評価 B（79 ～ 70 点）：講義内容について理解しているが、講義の到達目標に十分に達していない。
評価 C（69 ～ 60 点）：講義に参加しているが、理解度が十分ではなく、また提出物の提出の遅滞が多い。
評価 F（59 点以下）　：講義内容が理解できていない、他者と協力することができていない。

■評価方法
平常点（授業参加態度・ディスカッションにおける発言）50%、レポート 50% とする。 出席状況については、教職を志す者に向けた講義であるため、正当な理由がない場合の遅刻・欠席は認められない。

■留意点
①本講義は受講生の主体的な働きかけで進めていくので、自主的に積極的に発言・参加することを望む。
②教師を目指している人だけでなく、教師を目指すか迷っている人もぜひ受講し、進路選択の一助としてほしい。
③状況によって、講義内容や扱う回の入れ替えなどが生じることもある。

科目名　生徒指導・進路指導論（Student Direction and Career Guidance）

サブタイトル　道徳、総合的な学習の時間等の指導法及び生徒指導、教育相談等に関する科目

担当教員　峯岸　久枝

対象学年　2年生以上（2018年度入学生用）　**区分**　秋学期

■教育職員免許法施行規則における科目区分
道徳、総合的な学習の時間等の指導法及び生徒指導、教育相談等に関する科目

■教育職員免許法施行規則における各科目に含まれることが必要な事項
生徒指導の理論及び方法
進路指導及びキャリア教育の理論及び方法

■講義目的
学校教育において学習指導と並んで重要な意義を持つ生徒指導は、教育相談、進路指導・キャリア教育への対応など多岐にわたり、意義と役割について学習することが必要である。また、生徒指導に関わる様々な局面において、具体的な事例や指導例をもとに教師が求められる役割は何かについて、当事者意識で考えて議論し、理解を深める。

■講義分類
社会人力育成

■到達目標
1. 生徒指導・進路指導・キャリア教育の意義と役割について、基本的な概念を理解し、説明することができる。
2. 生徒指導・進路指導・キャリア教育・教育相談等の教育活動について、教師の果たすべき役割を理解し、そのあり方を具体的に考え、説明することができる。
3. 生徒指導の実際の場面を観察・視聴し、学校現場での教職員との協力や外部機関との連携など、具体的な指導方法について意見や改善点を述べることができる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項
DP2 思考と判断

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細
生徒の置かれている環境や状況を分析し、課題を明らかにすることができる。また、その課題に対して、生徒指導や進路指導の場面において、「当事者意識」で教師としてどのように課題解決を図るかを考える力をつける。

■授業形態
講義、グループディスカッション、グループワーク

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容
テキストの該当部分を事前に読んでおく（事前学習 1.5 時間）。また、配布された資料をよく読み、教師の立場で考え、自分の言葉で説明できるような指導観を講義後に整理する（事後学習（1.5 時間）。

■授業の概要
第 1 講　オリエンテーション：教育課程における生徒指導・進路指導・キャリア教育の位置づけ
第 2 講　生徒指導・進路指導・キャリア教育と各教育活動との関連や意義
第 3 講　生徒指導・教育相談・進路指導・キャリア教育における組織的な指導体制について
第 4 講　生徒指導・進路指導・キャリア教育の組織的な計画と取組について
第 5 講　学校における指導体制①：集団指導と個別指導
第 6 講　学校における指導体制②：ガイダンス機能と個別指導
第 7 講　生活習慣の確立や規範意識とキャリアデザイン
第 8 講　個別の課題を抱える生徒への指導と支援①
第 9 講　個別の課題を抱える生徒への指導と支援②
第 10 講　個別の課題を抱える生徒への指導と支援③
第 11 講　個別の課題を抱える生徒への指導と支援の実際①：体験活動の計画
第 12 講　個別の課題を抱える生徒への指導と支援の実際②：問題行動の生徒指導
第 13 講　生徒指導・進路指導・キャリア教育の今後の課題①
第 14 講　生徒指導・進路指導・キャリア教育の今後の課題②
第 15 講　講義全体のまとめ：場面指導に基づいた模擬授業の実施

■フィードバックの要領
レポートに対し、一人ひとりコメントを記入し、個人に対してフィードバックを行う。

■評価基準
評価 A+（90 点以上）：積極的・意欲的に参加し、内容を十分理解している。考察を深め、的確に説明できる。
評価 A（89 ～ 80 点）：内容を理解しており、自分の考察を聞き手にわかりやすい表現で説明できる。
評価 B（79 ～ 70 点）：講義内容について理解しているが、講義の到達目標に十分に達していない。
評価 C（69 ～ 60 点）：講義に参加しているが、理解度が十分ではなく、また提出物の提出の遅滞が多い。
評価 F（59 点以下）　：講義内容が理解できていない、他者と協力することができていない。

■評価方法
・平常点（授業参加態度・ディスカッションにおける発言）60%、レポート 40% とする。
・出席状況については、教職を志す者に向けた講義であるため、正当な理由がない場合の遅刻・欠席は認められない。

■留意点
①本講義は受講生の主体的な働きかけで進めていくので、自主的に積極的に発言・参加することを望む。
②教師を目指している人だけでなく、教師を目指すか迷っている人もぜひ受講し、進路選択の一助としてほしい。
③状況によって、講義内容や扱う回の入れ替えなどが生じることもある。

科目名 特別活動・総合的な学習の時間の指導法（Extra-Curricular Activities and Integrated studies）

サブタイトル 学校・学級づくりと人格形成と教師の指導性

担当教員 峯岸　久枝

対象学年 2年生以上（2018年度入学生用）　**区分** 春学期

■教育職員免許法施行規則における科目区分
道徳、総合的な学習の時間等の指導法及び生徒指導、教育相談等に関する科目

■教育職員免許法施行規則における各科目に含まれることが必要な事項
特別活動の指導法
総合的な学習の時間の指導法

■講義目的
高等学校の「特別活動」においては、人間関係形成･社会参画･自己実現の視点を持ち、学校における集団活動を通して課題解決の力をつけるための指導の方法を模索する。また「総合的な学習の時間」においては、探究的な見方･考え方を通して、自己の生き方を考えていくための資質･能力の育成ができるような力をつけることを目的とする。

■講義分類
社会人力育成

■到達目標
高等学校の「特別活動」においては、人間関係形成・社会参画・自己実現の視点を持ち、学校における集団活動を通して課題解決の力をつけるための指導の方法を模索する。また「総合的な学習の時間」においては、探究的な見方・考え方を通して、自己の生き方を考えていくための資質・能力の育成ができるような力をつけることを目標とする。（※取得可能な資格：高等学校情報科教諭免許）

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項
DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細
生徒の置かれている環境や状況を分析して課題を明らかにすることができる。また、その課題に対して、学級や特別活動（学校行事など）を通してどのようにアプローチをすれば解決できるかを考え、発信する力を養う。

■授業形態
講義、プレゼンテーション、ディスカッション

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容
事前学習として、指定教科書の該当部分を読み、自身が受けてきた教育や経験したことをもとに、具体的な場面･指導がおこなわれていたかを思い出しておく。事前学習に 180 分、事後学習に 90 分を要する。

■授業の概要
第 1 講　ガイダンス：学習指導要領における特別活動、総合的な学習の時間
第 2 講　教育課程における特別活動・総合的な学習の時間の位置づけ
第 3 講　特別活動・総合的な学習の時間と各教科との関連
第 4 講　学級・ホームルーム活動①：学級や学校の生活づくり・適応と成長及び健康安全
第 5 講　学級・ホームルーム活動②：今日の学級活動の課題
第 6 講　学校行事①：学習指導要領に示された儀式的、文化的、健康安全・体育的活動について
第 7 講　学校行事②：生徒会活動や部活動について
第 8 講　ボランティア活動・奉仕活動①：地域との連携を軸として
第 9 講　ボランティア活動・奉仕活動②：探究的な学習を軸として
第 10 講　特別活動・総合的な学習の時間の評価の方法
第 11 講　特別活動・総合的な学習の時間における話合い活動の指導方法
第 12 講　特別活動・総合的な学習の時間における主体的な学びを促す方法
第 13 講　特別活動・総合的な学習の時間の具体的な授業計画①
第 14 講　特別活動・総合的な学習の時間の具体的な授業計画②
第 15 講　特別活動・総合的な学習の時間の授業を実施する

■フィードバックの要領
レポートに対し、一人ひとりコメントを記入し、個人に対してフィードバックを行う。

■評価基準
評価 A+（90 点以上）：積極的・意欲的に参加し、内容を十分理解している。考察を深め、的確に説明できる。
評価 A（89 ～ 80 点）：内容を理解しており、自分の考察を聞き手にわかりやすい表現で説明できる。
評価 B（79 ～ 70 点）：講義内容について理解しているが、講義の到達目標に十分に達していない。
評価 C（69 ～ 60 点）：講義に参加しているが、理解度が十分ではなく、また提出物の提出の遅滞が多い。
評価 F（59 点以下）　：講義内容が理解できていない、他者と協力することができていない。

■評価方法
平常点（授業参加態度・ディスカッションにおける発言）50%、レポート 50% とする。 出席状況については、教職を志す者に向けた講義であるため、正当な理由がない場合の遅刻・欠席は認められない。

■留意点
①本講義は受講生の主体的な働きかけで進めていくので、自主的に積極的に発言・参加することを望む。 ②教師を目指している人だけでなく、教師を目指すか迷っている人もぜひ受講し、進路選択の一助としてほしい。 ③状況によって、講義内容や扱う回の入れ替えなどが生じることもある。

科 目 名　教育心理学（Educational Psychology）

サブタイトル　学校教育・社会人教育における心身の発達および学習の心理学

担当教員　大森　拓哉

対象学年　3 年生以上　　区分　春学期

■教育職員免許法施行規則における科目区分
教育の基礎的理解に関する科目

■教育職員免許法施行規則における各科目に含まれることが必要な事項
幼児、児童及び生徒の心身の発達及び学習の過程

■講義目的
教育心理学とは、人間の「教える」「学ぶ」という営為について、心理学の観点から科学的に理解・考察する学問である。この講義の目的は、心理学の研究から得られた知見や技術を教育活動の場に応用することによって、教育という活動を社会において効率的・効果的に行えるようにすることである。

■講義分類
顧客理解、ビジネスマネジメント、社会人力育成

■到達目標
教育・発達について、心理学的な観点から科学的に理解し、一般社会における学校教育・社会教育においても本講義で学んだ知見を応用できるようにすることを目標とする。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項
DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細
教育効果、モチベーションの増幅、心理発達支援等を理解することにより心の理解をした上での教育を行うことが可能となる。

■授業形態
講義、グループワーク、ディベート

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容
毎回のトピックスに関して、参考図書等の当該部分を事前に読了しておくこと（1.0 時間）。また、授業内で取り扱った内容について、自分自身の経験を踏まえた考察をまとめておくこと（0.5 時間）。

■授業の概要
第 1 講　教育心理学とは何か
第 2 講　教育と発達
第 3 講　認知発達
第 4 講　学習理論
第 5 講　教授・学習過程
第 6 講　意欲と動機づけ
第 7 講　パーソナリティ・個人差
第 8 講　個に応じた学習指導
第 9 講　集団における人間関係
第 10 講　言語の発達
第 11 講　数概念の発達と算数・数学の学習
第 12 講　知能と学力
第 13 講　教育評価
第 14 講　ライフスキルを高める教育
第 15 講　心身発達と多様な学びとの関連性の展望とまとめ

■フィードバックの要領
講義内課題提出、前回授業内課題の振り返りと教師からの個別コメント等を行う。

■評価基準
評価 A+（90 点以上）：講義内容を十分理解し、他者教育、自己成長に十分生かすことができるか。
評価 A（89 ～ 80 点）：講義内容を理解し、他者教育に十分生かすことができるか。
評価 B（79 ～ 70 点）：講義内容を理解し、他者教育に生かすことができるか。
評価 C（69 ～ 60 点）：講義内容を理解し、他者教育に生かせるだけの基礎知識を獲得できているか。
評価 F（59 点以下）　：上記を満たさない場合

■評価方法
全出席を前提とする。授業内課題 50%、テスト（定期試験期間内に実施）50%

■留意点
①本講義は教職科目の中の一科目でもあるので、教職課程履修のものは必修の授業である。②講義中の飲食、携帯電話操作、帽子・サングラスの着用等は厳禁である。

科目名　教育相談（Educational Counseling）

サブタイトル　心理・教育的支援およびカウンセリング・コミュニケーションスキル養成
担当教員　大森　拓哉
対象学年　3 年生以上　区分　秋学期

■教育職員免許法施行規則における科目区分
道徳、総合的な学習の時間等の指導法及び生徒指導、教育相談等に関する科目

■教育職員免許法施行規則における各科目に含まれることが必要な事項
教育相談（カウンセリングに関する基礎的な知識を含む。）の理論及び方法

■講義目的
本講義は、教育場面において相談を受ける立場となった時のその方法や技術・知識の習得と、理論的学問的な背景、実践場面での応用などについて学ぶ。実際にカウンセラーとなって 業務を行うには数多くの経験と豊富な知識が必要であり、本講義だけでそれを満たすことは 不可能であるが、相談を受ける立場の者として最低限必要な素養を身につけることを目的とする。 教育場面とは、学校教育のみならず、社会人教育、人材教育などの場面も想定し、実社会で必要な、意味のある知識を習得する。

■講義分類
顧客理解、ビジネスマネジメント、社会人力育成

■到達目標
教育相談の理論と実践について、適切に理解し、実際の場面でも適用できる。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項
DP1 知識と理解

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細
傾聴の態度を学び、コミュニケーションの基礎を体得することにより、相談を受ける知識・姿勢を学ぶ。

■授業形態
講義、グループディスカッション、グループワーク

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容
毎回のトピックスに関して、参考図書等の当該部分を事前に読了しておくこと（1.0 時間）。また、授業内で取り扱った内容について、自分自身の経験を踏まえた考察をまとめておくこと（0.5 時間）。

■授業の概要
第 1 講　教育相談とは何か
第 2 講　幼児・児童期の発達
第 3 講　思春期・青年期の発達
第 4 講　不適応・不登校
第 5 講　いじめ・虐待
第 6 講　学習障害・発達障害
第 7 講　学校カウンセリング
第 8 講　教育相談の意義
第 9 講　カウンセリングの基本的枠組み
第 10 講　カウンセリング・心理療法の種類と技法
第 11 講　心理テストの理論とその評価
第 12 講　心理テストの技法
第 13 講　ソーシャルスキル・ライフスキル教育
第 14 講　進路・キャリア相談
第 15 講　精神障害とその理解

■フィードバックの要領
各回の講義で課題・演習・自己分析を行い、その評価とコメントを与える。

■評価基準
評価 A+（90 点以上）：講義内容を完全に理解できている
評価 A（89 ～ 80 点）：講義内容を理解できている
評価 B（79 ～ 70 点）：講義内容をおおよそ理解できている
評価 C（69 ～ 60 点）：最低限の理解ができている
評価 F（59 点以下）　：講義科目の履修目標に達していない

■評価方法
全出席を前提とする。授業内課題 60%、期末テスト（定期試験期間内に実施）40%

■留意点
①本講義は教職科目の中の一科目でもあるので、教職課程履修のものは必修の授業である。②課題に対してフィードバックを行う。

科目名　情報科教育法Ⅰ（Teaching Method on Information Education Ⅰ）

サブタイトル　「社会と情報」「情報の科学」の指導方法研究
担当教員　齋藤　S. 裕美
対象学年　3年生以上　区分　春学期

■教育職員免許法施行規則における科目区分
教科及び教科の指導法に関する科目

■教育職員免許法施行規則における各科目に含まれることが必要な事項
各教科の指導法（情報機器及び教材の活用を含む。）

■講義目的
本講義は、高等学校情報科の教員として多様な高校生に「情報」の本質を指導する基本的な能力を身に付けることを目的とする。情報にかかわる理念、制度、知識・技能、指導法等の情報教育の基本的な事項の理解を深めながら、実践的な指導力や教師としての資質の習得を図ることを目的とする。
本講義では、新学習指導要領（平成25年度入学生から学年進行で実施）の改訂ポイントや主な改善事項について触れ、模擬授業などの実習を通じて情報科教育の研究を進め、教材研究の方法、学習指導の工夫などの授業創りの実際を体験する。
なお、15週を通じての講義概要は次の通りである。①講義と研究授業の形式による模擬授業（教壇実習）を行う。②高等学校（情報科）の教員として、基本的な理念、制度、知識・技能、指導法等の情報教育の基本的な事項の理解を深めながら、実践的な資質や指導力の習得を図る。

■講義分類
社会人力育成

■到達目標
教職に就く者として求められる教科教育（情報）について、基本的な知識と授業実践の手法の習得をめざす。①情報教育の沿革と現状、在り方を理解する②共通教科「情報」と専門教科「情報」の基本的な理念、目標、内容、構成を理解する③指導計画を作成し、それを基に模擬授業を通じた実践ができる④他の学生の模擬授業を見て、改善点や修正点などを相互に指摘できる⑤指摘を受け入れて、自らの指導計画や授業などを改善・工夫ができる

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項
DP4　表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細
「情報科」教員として，学習指導要領に基づいて授業を設計し，授業内容をわかりやすく教える能力を習得する。

■授業形態
講義、プレゼンテーション、グループディスカッション

■準備学習の時間（予習・復習等1.5時間以上）及び具体的な内容
学習指導要領を精読すること。授業内の指示に従って学習指導案を作成すること。　必要な予習･復習時間は各1.5時間程度（合計3時間程度）である。

■授業の概要
第1講　情報教育の沿革と現状
第2講　高等学校学習指導要領における情報教育の全体像
第3講　「社会と情報」の目標・内容・内容の取扱いの要点解説①
第4講　「社会と情報」の目標・内容・内容の取扱いの要点解説②
第5講　「情報の科学」の目標・内容・内容の取扱いの要点解説①
第6講　「情報の科学」の目標・内容・内容の取扱いの要点解説②
第7講　指導計画の作成①
第8講　指導計画の作成②
第9講　指導計画の作成③
第10講　模擬授業①
第11講　模擬授業②
第12講　模擬授業③
第13講　模擬授業④
第14講　模擬授業⑤
第15講　教育課程の編成

■フィードバックの要領
模擬授業実施回においてフィードバックを行う。

■評価基準
評価A+（90点以上）：下記①を自分の考察を含めて説明でき，②から④の全てを満たす授業の設計ができる。
評価A（89～80点）：下記①を説明できる。②から④の2つ以上を満たす授業の設計ができる。
評価B（79～70点）：下記①を説明できる。②から④の1つ以上を満たす授業の設計ができる。
評価C（69～60点）：下記①を十分ではないが説明でき，50分間の授業の設計ができる。
評価F（59点以下）　：講義内容について著しく理解が不足している。または50分間の授業の設計ができない。

■評価方法
期末試験30%、学習指導案30%、模擬授業40%。次の4点により評価。①:教職の専門用語理解、②:学習指導要領に基づいた学習指導案作成、③:十分な教材研究、正確で整理された授業構成、④学習指導案と模擬授業の整合

■留意点
①高等学校で使用している「情報」の教科書を講義の中心に位置付け、レジュメおよび参考資料を配布する。②各自で学習指導案・単元指導案および参考資料（手許資料）を作成して、他の実習予定者にも配布する。③基本的な知識・態度と授業実践の手法の十分な習得が欠かせない。④指定した課題についての発表・模擬授業の機会を設け、教員としての適性の有無を観察・評価する。

科目名　情報科教育法 II（Teaching Method on Information Education II）

サブタイトル　「社会と情報」「情報の科学」の指導方法研究

担当教員　齋藤　S. 裕美

対象学年　3 年生以上　　区分　秋学期

■教育職員免許法施行規則における科目区分
教科及び教科の指導法に関する科目

■教育職員免許法施行規則における各科目に含まれることが必要な事項
各教科の指導法（情報機器及び教材の活用を含む。）

■講義目的
本講義は、高等学校情報科の教員として多様な高校生に「情報」の本質を指導する基本的な能力を身に付けることを目的とする。情報にかかわる理念、制度、知識・技能、指導法等の情報教育の基本的な事項の理解を深めながら、実践的な指導力や教師としての資質の習得を図ることを目的とする。
本講義では、新学習指導要領（平成 25 年度入学生から学年進行で実施）の改訂ポイントや主な改善事項について触れ、模擬授業などの実習を通じて情報科教育の研究を進め、教材研究の方法、学習指導の工夫などの授業創りの実際を体験する。
なお、15 週を通じての講義概要は次の通りである。①講義と研究授業の形式による模擬授業（教壇実習）を行う。②高等学校（情報科）の教員として、基本的な理念、制度、知識・技能、指導法等の情報教育の基本的な事項の理解を深めながら、実践的な資質や指導力の習得を図る。

■講義分類
社会人力育成

■到達目標
教職に就く者として求められる教科教育（情報）について、基本的な知識と授業実践の手法の習得をめざす。①情報教育の沿革と現状、在り方、②共通教科「情報」と専門教科「情報」の基本的な理念、目標、内容、構成、③指導計画を作成し、それを基に模擬授業を通じた実践、④他の学生の模擬授業を見て、改善点や修正点などを相互に指摘、⑤指摘を受け入れて、自らの指導計画や授業などを改善・工夫

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項
DP4　表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細
「情報科」教員として，学習指導要領に基づいて授業を設計し，授業内容をわかりやすく教える能力を習得する。

■授業形態
講義、グループディスカッション、プレゼンテーション

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容
学習指導要領を精読すること。授業内の指示に従って学習指導案を作成すること。　必要な予習･復習時間は各 1.5 時間程度（合計 3 時間程度）である。

■授業の概要
第 1 講　単元の設定と展開
第 2 講　教材教具①
第 3 講　教材教具②
第 4 講　指導計画の作成①
第 5 講　指導計画の作成②
第 6 講　学習評価①
第 7 講　学習評価②
第 8 講　専門教科「情報」各科目の目標・内容・内容の取扱いの概説①
第 9 講　専門教科「情報」各科目の目標・内容・内容の取扱いの概説②
第 10 講　模擬授業①
第 11 講　模擬授業②
第 12 講　模擬授業③
第 13 講　模擬授業④
第 14 講　模擬授業の再検討①
第 15 講　模擬授業の再検討②

■フィードバックの要領
模擬授業実施回においてフィードバックを行う。

■評価基準
評価 A+（90 点以上）：下記①を自分の考察を含めて説明でき，②から④全てを満たす授業の設計ができる。
評価 A（89 ～ 80 点）：下記①を自分の考察を含めて説明でき，②から④の 2 つ以上を満たす授業の設計ができる。
評価 B（79 ～ 70 点）：下記①を説明できる。②から④の 1 つ以上を満たす授業の設計ができる。
評価 C（69 ～ 60 点）：下記①を十分ではないが説明でき，50 分間の授業の設計ができる。
評価 F（59 点以下）　：講義内容について著しく理解が不足している。または 50 分間の授業の設計ができない。

■評価方法
期末試験 30%、学習指導案 30%、模擬授業 40%。次の 4 点を中心に評価。①：専門用語理解、②：学習指導要領に基づいた学習指導案作成、③：十分な教材研究、正確で整理された授業構成、④：学習指導案と模擬授業の整合

■留意点
①高等学校で使用している「情報」の教科書を講義の中心に位置付け、レジュメおよび参考資料を配布する。②各自で学習指導案・単元指導案および参考資料（手許資料）を作成して、他の実習予定者にも配布する。③基本的な知識・態度と授業実践の手法の十分な習得が欠かせない。④指定した課題についての発表・模擬授業の機会を設け、教員としての適性の有無を観察・評価する。

科目名　教育原理（Educational Principle）

サブタイトル　幅広い「教育」という事象を科学する

担当教員　杉森　知也

対象学年　3年生以上（2017年度以前入学生用）　区分

■教育職員免許法施行規則における科目区分
教育の基礎的理解に関する科目

■教育職員免許法施行規則における各科目に含まれることが必要な事項
教育の理念並びに教育に関する歴史及び思想

■講義目的
人間の成長をより望ましい形に方向づけようとする「教育」は、幅広い諸科学と連携しながら理論化･体系化されている。こうして形成されてきた教育学の理論を概観し、教育を科学的にとらえる「眼」を養う。

■講義分類
社会人力育成

■到達目標
教育という現象を科学的にとらえるための知識と技術を身につける。　（※取得可能な資格：高等学校情報科教諭免許）

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細

■授業形態
講義、グループディスカッション、プレゼンテーション

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容
指定教科書の該当箇所を事前に読み、疑問点と自分なりの考察（意見）をもって授業に参加すること。不明な用語については web、図書館の教育学辞典等で調べてくること。事前学修に 180 分、事後学修に 90 分を要する。

■授業の概要
第 1 講　教育を科学する －教育とは何か－
第 2 講　教育にとって家族の果たす役割
第 3 講　教育環境としての地域社会
第 4 講　近代社会の成立と学校
第 5 講　公教育制度の展開とゆらぎ
第 6 講　学校の組織と文化
第 7 講　教育内容と教育方法
第 8 講　生徒指導と道徳教育
第 9 講　転換期における教育
第 10 講　子どもの育ちと生成としての教育
第 11 講　教育の構造と機能
第 12 講　教育の文化的基礎
第 13 講　教育学の系譜（1）－社会現象としての教育－
第 14 講　教育学の系譜（2）－現代教育学の流れ－
第 15 講　学習社会の成立と生涯学習

■フィードバックの要領
次回の授業またはメールにて授業内容・コメントシート等へのフィードバックを行う。

■評価基準
評価 A+（90 点以上）：教員たるにふさわしい態度、参加意欲等を十分に発揮している
評価 A（89 ～ 80 点）：教員たるにふさわしい態度、参加意欲等を発揮している
評価 B（79 ～ 70 点）：講義に参加しているが、積極的な姿勢が十分ではない
評価 C（69 ～ 60 点）：講義に参加しているが、理解度が十分ではなく、また提出物の提出についても遅滞が多い
評価 F（59 点以下）　：欠席が多い、講義が理解できない、他者と協力できないなど、いずれか一つ以上に該当

■評価方法
事前学習の取り組み 50%（提出したメモの内容）、授業での積極的な参加姿勢 50%を総合的に評価する。

■留意点
本講義は、受講生の主体的な働きかけで進めていくので、自主的・積極的に発言することなしには進まない。 講義部分はできる限り少なくし、学生の質問や意見交換を主な活動としたいので、事前学習が必須であることを自覚してほしい。なお、状況によって、講義内容や扱う回の入れ替えをおこなう場合がある。

科目名　教育実習（Practice Teaching）

サブタイトル　学校教育現場実習
担当教員　大森　拓哉
対象学年　4 年生以上　区分　春・秋学期

■教育職員免許法施行規則における科目区分
教育実践に関する科目

■教育職員免許法施行規則における各科目に含まれることが必要な事項
教育実習（学校インターンシップ（学校体験活動）を含む。）

■講義目的
本講義は、教育実習の前後に行う指導である。事前に、教育実習の意義、実習上の留意事項、授業の見方、授業の実施方法、実習校とのかかわり方などについて講義するとともに、模擬実習を組み込んで２週間～３週間の教育実習の指導・助言を図る。
実習後には、実習体験の整理の方法などについてふれる。その際に、教育実習が単に教える技術を学ぶ場だけではなく、主体的に行動し人間関係を創ってゆく総合的な体験の機会であったことを思い起こし、この体験を通じて得た自信を今後の社会人としての生活に生かせるように総括する。

■講義分類
顧客理解、ビジネスマネジメント、社会人力育成

■到達目標
教職に就く者として求められる教育実習について、講義技法と教育者としての態度を身に付け、基本的な知識の修得をめざす。

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項
DP3 関心と意欲

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細
教育実習を通して、指導の方法、クラスマネジメント、およびこれまでの教職授業で得た知識を実践の場で生かすことを試みる。

■授業形態
講義、プレゼンテーション、フィールドワーク

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容
実習にあたっての事前準備として、学習指導案作成、教材研究等を行うので、関連書籍の熟読を必要とする（10 時間）。
授業時に提示するプレゼンテーション課題（模擬授業）についても万全な準備をする（10 時間）。

■授業の概要
第 1 講　事前学習 1
第 2 講　事前学習 2
第 3 講　事前学習 3
第 4 講　事前学習 4
第 5 講　事前学習 5
第 6 講　事前学習 6
第 7 講　教育現場実習
第 8 講　教育現場実習
第 9 講　教育現場実習
第 10 講　教育現場実習
第 11 講　教育現場実習
第 12 講　教育現場実習
第 13 講　教育現場実習
第 14 講　事後学習 1
第 15 講　事後学習 2

■フィードバックの要領
事後指導および事後報告会を行い、詳細な検討・分析を行う。

■評価基準
評価 A+（90 点以上）：講義内容を完全に理解できている
評価 A（89 ～ 80 点）：実習に行く準備・実習後のまとめがきちんとできている
評価 B（79 ～ 70 点）：講義内容が理解できている
評価 C（69 ～ 60 点）：最低限の理解ができている
評価 F（59 点以下）　：講義科目の履修目標に達していない

■評価方法
全講義・全実習・全提出物を完了すること。

■留意点
①本講義は教育実習及び教員免許法で定められているその前後の 1 単位分の事前・事後指導を行う。②事前授業は教育実習前（事前）の指導に必要な準備をする。また教育実習後（事後）に、主体的に行動し人間関係を創ってゆく総合的な体験を思い起こし、この体験を通じて得た自信を今後の社会人としての生活に生かせるように総括する。③本講義は集中授業であるため実施日は別途連絡する。

科目名　教職実践演習（Teacher Training Practice）

サブタイトル　学生生活と教育実習を振り返り、自己の教職観を再確認する

担当教員　峯岸　久枝

対象学年　4年生以上　　区分　秋学期

■教育職員免許法施行規則における科目区分
教育実践に関する科目

■教育職員免許法施行規則における各科目に含まれることが必要な事項
教職実践演習

■講義目的
学生生活（特に、教職に関すること）と教育実習の体験を丹念に省察し、その過程で自己の強み･弱みを自覚する。また、この振り返りを通して、自己の教職観を見直し、修正する。

■講義分類
社会人力育成

■到達目標
1. 学生時代の振り返りを通して、今後の自己成長に必要なことを見出す。 2. 個人ワークやグループディスカッションを通して、教育実習等の経験の振り返りをおこない、それぞれの経験を共有化する。 3. これらの活動を通して、自己の教職観を再確認・修正する。（※取得可能な資格 : 高等学校情報科教諭免許）

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】① 最も身につけられる事項
DP4 表現と技能

■【ディプロマ・ポリシーとの対応】② その詳細
教育実習で学んだことや考えたことについて、自分の意思をわかりやすく伝えることができる。また、自分の意見を発信する力や他者の発言を聴き入れる傾聴力を身につける。

■授業形態
グループディスカッション、ディベート、プレゼンテーション

■準備学習の時間（予習・復習等 1.5 時間以上）及び具体的な内容
教育実習の記録を詳細にとっておくことに加え、主に教職課程で得られたことを、教職履修カルテや実習日誌等をもとに整理しておく。事前学習にはおよそ 180 分、事後学習には 90 分を要する。

■授業の概要
第 1 講　ガイダンス : 本講の目的と概要
第 2 講　学生時代を振り返る① : 授業の振り返り
第 3 講　学生時代を振り返る② : 正課外の経験を振り返る
第 4 講　教育実習を振り返る① : 特別活動
第 5 講　教育実習を振り返る② : 総合的な学習の時間
第 6 講　教育実習を振り返る③ : 情報科の授業内容の省察
第 7 講　教育実習を振り返る④ : 情報科の授業での生徒の反応を振り返る
第 8 講　教育実習を振り返る⑤ : 研究授業の指導案を書き直す
第 9 講　教育実習を振り返る⑥ : 研究授業をおこなう（1）
第 10 講　教育実習を振り返る⑦ : 研究授業をおこなう（2）
第 11 講　教育実習を振り返る⑧ : 研究授業をおこなう（3）
第 12 講　教育実習を振り返る⑨ : 教員との関係・校務
第 13 講　教育実習を振り返る⑩ : 生徒との関係づくり
第 14 講　教育実習を振り返る⑪ : プレゼンテーションの準備
第 15 講　教育実習を振り返る⑫ : プレゼンテーション

■フィードバックの要領
レポートに対し、一人ひとりコメントを記入し、個人に対してフィードバックを行う。

■評価基準
評価 A+（90 点以上）：教員たるにふさわしい態度、参加意欲等を十分に発揮している
評価 A（89 ～ 80 点）：教員たるにふさわしい態度、参加意欲等を発揮している
評価 B（79 ～ 70 点）：講義に参加しているが、積極的な姿勢が十分ではない
評価 C（69 ～ 60 点）：講義に参加しているが、理解度が十分ではなく、また提出物の提出についても遅滞が多い
評価 F（59 点以下）　：講義が理解できない、他者と協力できないなど、いずれか一つ以上に該当

■評価方法
授業時の積極的な姿勢（特に、ワークやディスカッション）50%、事前学習で課した内容についての提出物の完成度 50% で総合的に評価する。

■留意点
本講義は、原則として宿泊合宿の形で実施する。 必要な資料を作成・持参して授業の臨むこと。この授業でさまざまな資料を駆使して振り返る作業をおこなうことを想定して、実習中に出来事を記載したメモなどを紛失しないようデータの保持につとめること。なお、履修人数等によっては、シラバスの内容を変更することもある。

平成30年度　多摩大学 経営情報学部2018シラバス
2018年4月1日発行

［発　行］　多摩大学多摩キャンパス事務局教務課
〒206–0022　東京都多摩市聖ヶ丘4–1–1
Tel 042–337–7113　Fax 042–337–7100
http://www.tama.ac.jp/

［印　刷］　株式会社インフォテック
〒206–0033　東京都多摩市落合2–6–1

TAMA UNIVERSITY
多摩大学
経営情報学部
〒206-0022 東京都多摩市聖ヶ丘 4-1-1
Tel 042-337-1111 Fax 042-337-7100
http://www.tama.ac.jp/

TAMA UNIVERSITY http://www.tama.ac.jp/
2018 年 4 月 1 日発行 多摩大学多摩キャンパス事務局教務課

学籍番号 氏 名